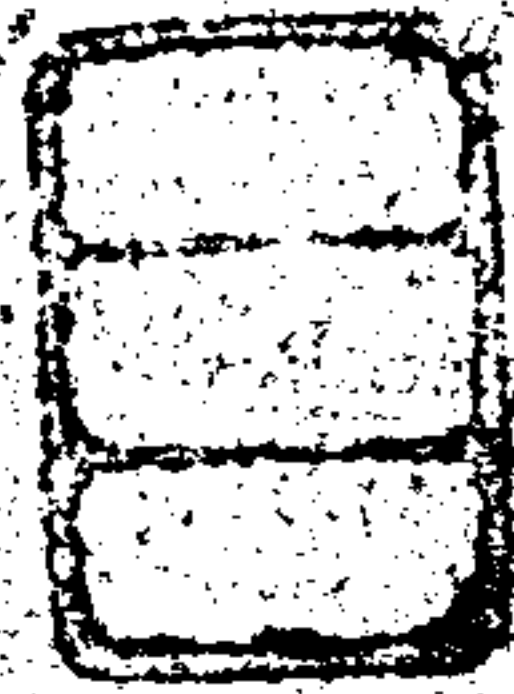


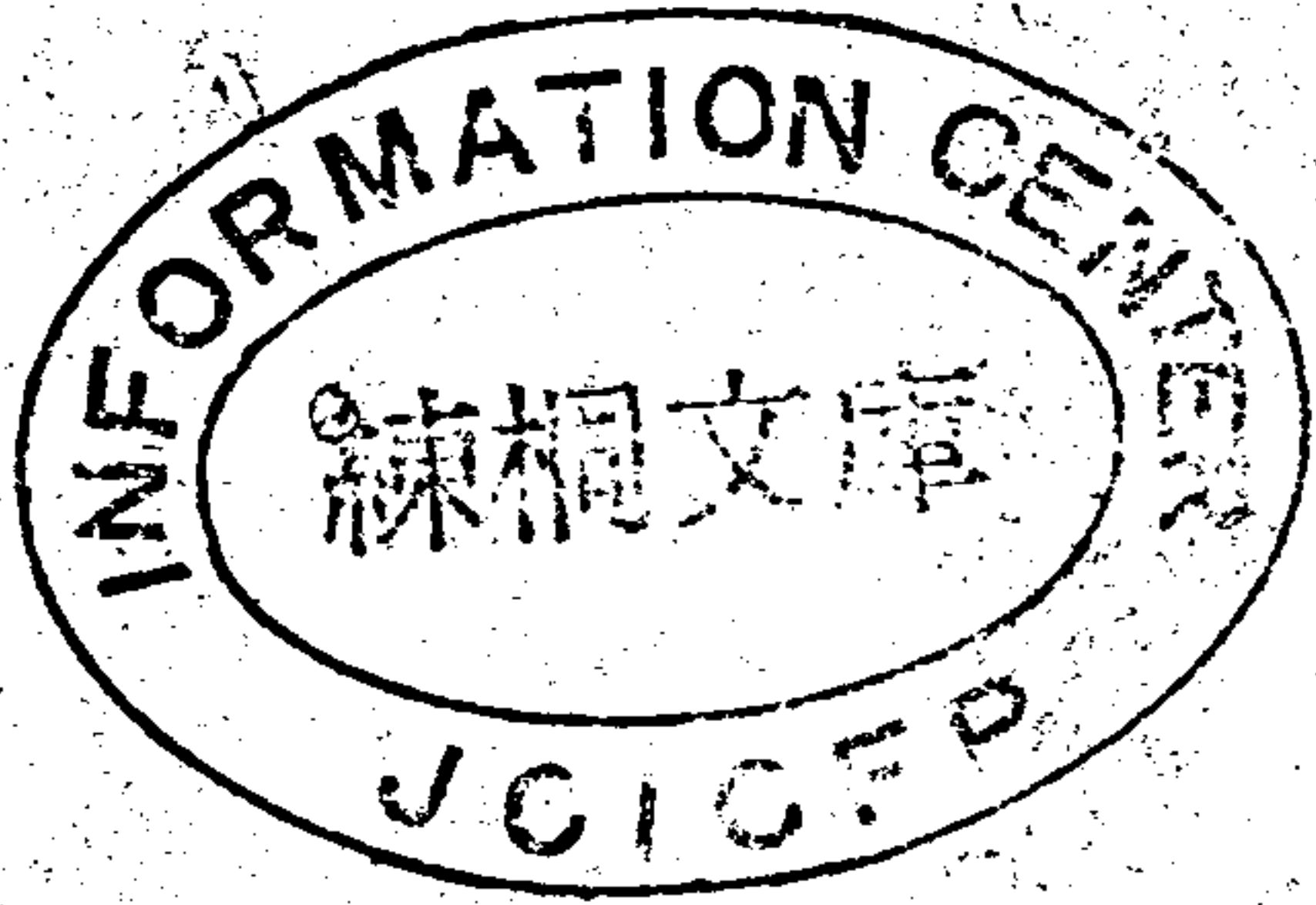
昭和十八年七月一日



大和民族を中核とする世界政策の検討

— 特に民族人口政策を中心として —

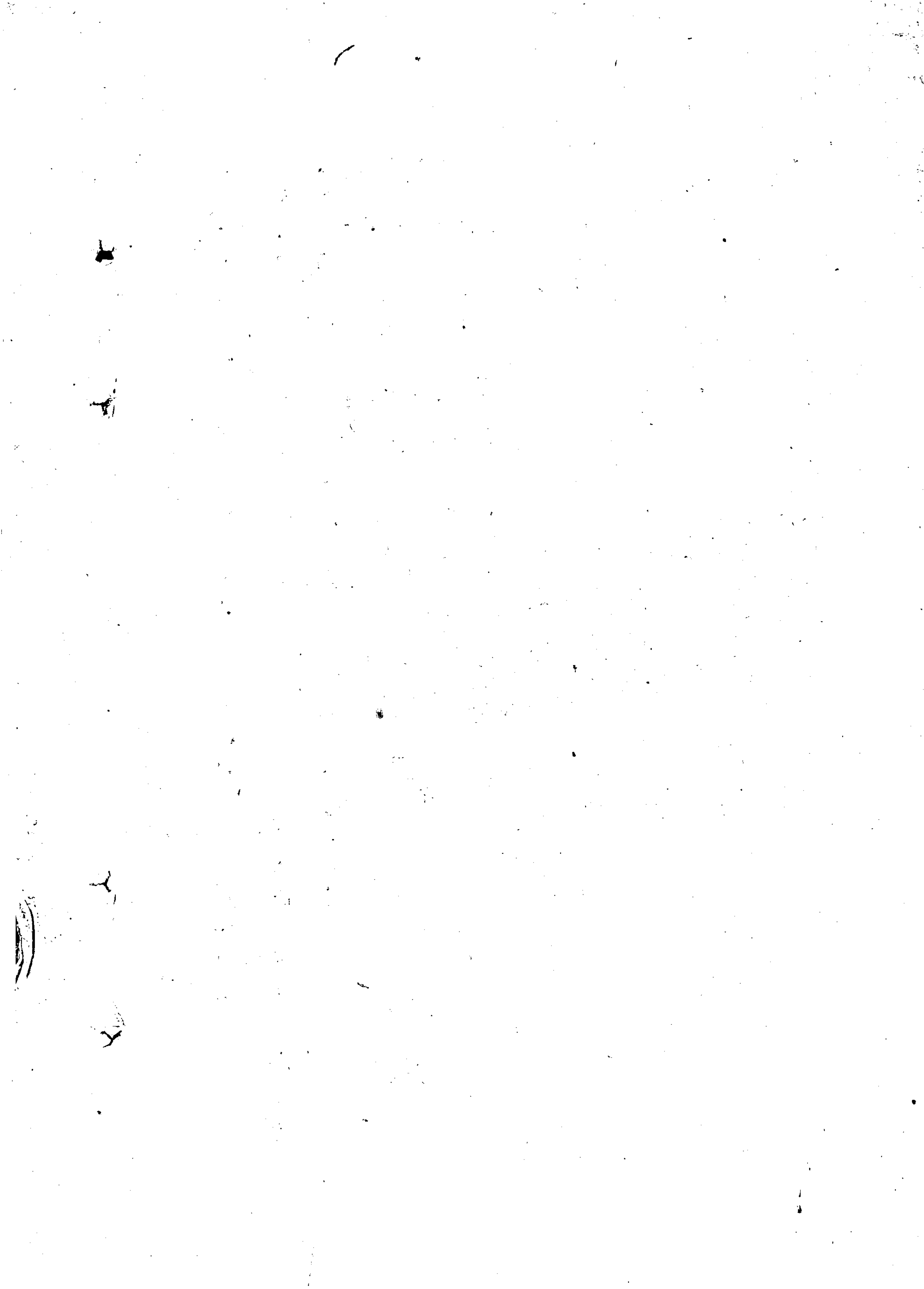
(第二分冊)



厚生大臣官房總務課

入	昭和十八年七月一日
出	" " " "
書	2978
庫	





序

本輯「大和民族を中核とする世界政策の検討」は曩に假印刷に附せし「戦争の人口に及ぼす影響」の續篇として「厚生省研究所人口民族部」において特に民族人口政策の見地より編纂せるものなり。第一篇より第七篇に亘る本輯は製本の都合上之を左の如く三分冊とす。

第一分冊

第一篇 總 説

第二篇 大東亞民族事情

第三篇 世界各國の民族事情

第二分冊

第四篇 自然環境と民族の關係

第五篇 民族的 세계觀と國家觀

第六篇 大和民族を中核とする世界政策

第三分冊

第七篇 大東亞建設計畫

資料入手其の他の困難を超越て特に忽々の間に取纏めたるものにして行

間統一を缺きたるの恐れ無きにしもあらざれども右の廣汎なる夫々の問



題に對し一應の集成に達し此處に取敢へず假印刷に附し以て部内の參考に資するものなり。

昭和十八年七月一日

厚生大臣官房總務課

厚生省研究所人口民族部調

「大和民族を中核とする世界政策の検討」

(特に民族人口政策を中心として)

第二分冊

目次

第三篇 世界各國の民族事情

一三〇九

頁

南山氏

第一章 蘇聯民族事情

一三〇九

第一節 概説

一三〇九

第二節 民族自治体制

一三二九

第三節 歐露の民族事情

一三三八

第一款 概説

一三三八

第二款 ロシマ民族

一三四一

第三款 ウクライナ民族

一三四六

第四款 白ロシマ民族

一三五〇

南山氏

第五款	沿バルト諸民族	一三五三
第六款	ボルガ流域ドイツ民族	一三五七
第四節	南コーカサス及中央アジアの民族事情	一三六〇
第五節	シベリヤの民族事情	一三六七
第一款	概説	一三六七
第二款	原住民族	一三七三
第三款	スラブ民族	一三七六
第四款	其他の外來民族	
	ユーダヤ人・朝鮮人・支那人	一三八六
第六節	人口事情	一三八九
第一款	總人口の趨勢	一三八九
第二款	都鄙別人口	一三九四
第三款	年齢別構成	一四一五
第四款	職業別構成	一四二〇

第七節 民族政策の基調……………一四二四

第二章 北米合衆國民族事情……………一四三三

第一節 人口の人種的構成……………一四三三

第二節 人種政策……………一四四二

第三章 英吉利民族事情……………一四六六

第四章 英植民地民族事情……………一四八二

第一節 カナダ……………一四八二

第二節 ニュージールランド……………一五一二

第三節 オーストラリア……………一五二七

第四節 インド……………一五六二

第五章 獨逸及伊太利の民族事情……………一六〇八

第一節 ドイツの民族問題……………一六〇八

第一款 序 説……………一六〇八

第一項 ナチス獨逸民族の人種的構成……………一六〇八

第二項	獨逸民族形成史の概観	一六一〇
第三項	ドイツに於ける民族問題	一六二〇
第二款	反ユダヤ人立法	一六二七
第一項	一九三三年當時の所謂ユダヤ禍の概観	一六二七
第二項	反ユダヤ人立法	一六二九
第三項	一九三九年國勢調査によるユダヤ人の現況	一六四〇
第三款	大獨逸支配下の諸民族	一六四七
第一項	大獨逸國境内の異種民族	一六四七
第二項	獨逸の政治軍事的支配下の諸民族	一六五四
第二節	ファシズム伊太利の民族政策	一六六八
第一款	序	一六六八
第二款	植民地土着人口に對する諸方策	一六七一
第三款	反混血立法	一六七七
第四款	一九三八年の「人種宣言」	一六七九

第五款 反ユダヤ人立法 一六八二

第六章 阿弗利加大陸民族事情 一六八六

第一節 アフリカ民族事情 一六八六

第二節 アフリカの諸問題 一七〇五

附節 資料「アフリカの輸送ルート」 一七一八

第七章 猶太人問題 一七四六

序 一七四六

第一節 ユダヤ民族概観 一七四七

第一款 史的生成過程 一七四七

第二款 人口分布状態 一七五〇

第二節 ユダヤ民族の特性 一七五二

第一款 不同化性とユダヤ教 一七五二

第二款 功利主義 一七五五

第三款 万民主義 一七五四

第四款	陰性の性格……………	一七五五
第五款	迫害と生存力……………	一七五五
第三節	ユダヤ民族の解放と進出……………	一七五六
第一款	ユダヤ人の解放と社會急進思想……………	一七五六
第二款	フリー・メイソン……………	一七六〇
第三款	資本家と革命家……………	一七六二
第四款	經濟的進出……………	一七六三
第五款	政治的進出……………	一七六九
第六款	新聞通信藝術學術界への進出……………	一七七四
第四節	ユダヤ民族と他民族との對立抗爭……………	一七七八
第一款	近代反猶思想及び運動……………	一七七八
第二款	現代反猶主義及び運動……………	一七八〇
第三款	シオンの議定書……………	一七八四
第五節	ユダヤ人問題對策……………	一七八六

第一款 過去に於けるユダヤ人問題対策……………一七八八

第二款 ユダヤ人問題対策……………一七九〇

第六節 日本とユダヤ人問題……………一七九五

第一款 日本に於けるユダヤ人……………一七九六

第二款 滿洲に於けるユダヤ人……………一七九七

第三款 支那に於けるユダヤ人……………一七九九

第四款 日本に於けるユダヤ問題（初期）……………一八〇二

第五款 現代に於けるユダヤ人問題……………一八〇六

第六款 日本に於けるユダヤ人問題対策……………一八一九

附 録……………一八二四

「タルムード」の沿革……………一八三四

「シオン」議定書の沿革……………一八三七

フリー・メイソンに就て……………一八五九

第八章 回教勢力圏……………一八七〇

甲田氏

第一節 序 説

一八七。

第二節 回教總説

一八七二

第三節 回教徒の分布と列強の回教政策

一九一八

第四節 回教圈概説

一九三二

第一款 近 東

一九三二

第二款 印 度

一九三六

第三款 インドネシア

一九四二

第四款 支 那

一九四九

第五款 滿 洲

一九五六

第五節 結 言

一九五八

回教

第四篇 自然環境と民族の關係

一九六〇

第一章 地勢と民族との關係

一九六〇

力持建良の

第五篇

民族の世界観と國家観

二一四八

第六節 山岳と山道

二一三三

第五節 平野・草原と沙漠

二〇八六

第四節 島 嶼

二〇四四

第三節 大陸と半島

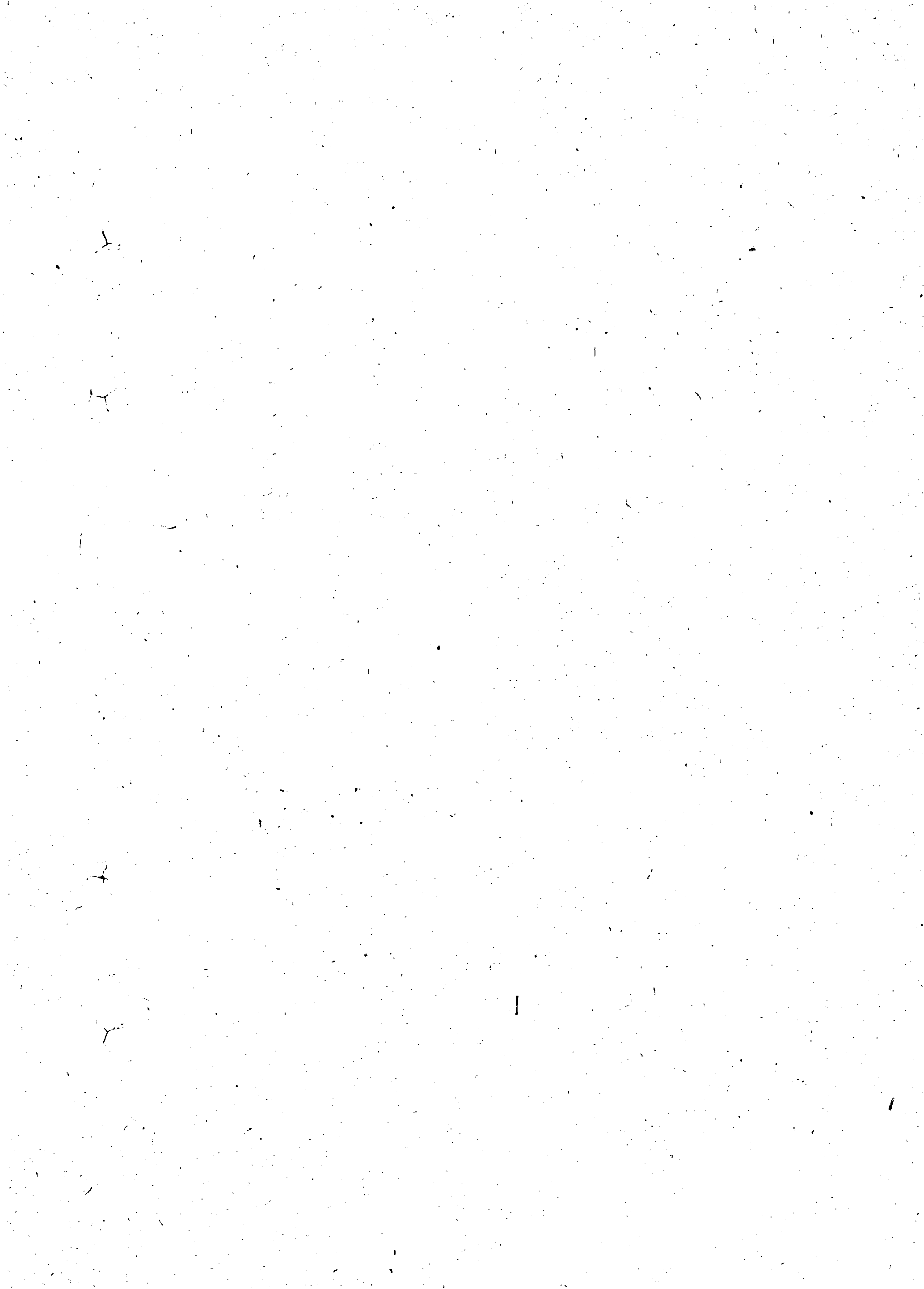
二〇一七

第二節 海 洋

一九九六

第一節 海岸地帯

一九六〇



第三編

第一章 蘇聯民族事情

第一節 概説

ソヴェート社会主義共和国聯邦を構成する主要民族は、周知の如く印度ゲルマン人種（アリアン人種）に族するスラヴ民族であり、其外の所謂「東スラヴ」族と称せらるゝものである。それは聯邦総人口の約七八割を占むるものであるが、其外にアリアン系古代アジア系及蒙古系の人種民族を無数に内包し、其の種別は大小二百種に達してゐる。

正に民族博物館の名に耻ぢず、其の民族的構成の複雑なることは世界無比である。而して斯くの如く他に比類のない多数の異民族を内包してゐるロシアは、帝政時代永らく此等を無知と沈滞、相互の怒恨と反噬と

に抑へつけて来たのであるが、而かも時には大小の民族的叛乱が屢々繰返されるのを如何ともなし得なかつたのである。然るに之が大革命以來二十有餘年、表面上とにのく何等の波瀾も起すことなく、又傳へられる所の如くくぼ、僻陬の弱少民族に至る迄、日に月に文化は向上し、生活は豊富となる状態であるといふことは、今日地球上至る処に困難なる民族問題が繰出しておる折柄、大いに注目せられぬべきならぬ。

ソ聯邦内諸民族をその人種的血統及言語系統に分類することは甚だ困難であるが、大体次の如くであると考えられておる。

(一) インド、ヨーロッパ種族

(1) 東スラヴ族

ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人

(2) 其他スラヴ系諸族

ポーランド人、ブルガリヤ人、チエツク人、及スロバキヤ人

(3) バルト諸族

レット人、リツアニア人

(4) インド、イラン族

タゲツク人、ペルシヤ人、イラン人、オセツテン人、タルイシ人

クルド人、ジプシイ人等

(5) その他、インド、ヨーロッパ族

ドイツ人、モルダヴィア人、ギリシヤ人

(二) ヤペテ族（カウカサス族）

1. アルメニア人

2. 南カウカサス、ヤペテ族、グルジア人、アツジャル人、メグレリ

人等

3. 北カウカサス、ヤペテ族

アブハズ人、キエルケス人、カバルジシ人、キエキエン人、イン

グーシ人、アワール人、レズグ人、ダルギン人等

(三) セム族

ユダヤ人 アラビア人

(四) トルク族

1. 北西トルク族

カザーク人、キルギス人、カラカルパク人、タタール人、バシニ

キール人等

2. 南西トルク族

アゼルバイジャン人、トルクメン人等

3. 南東トルク族

ウズベク人、ウイグル人等

4. 北東トルク族

ヤクート人、ハカツス人等

(五) 4. ヌウシ族

4. ヌウシ人

(六) 蒙古族

ブリヤート人、カルムイク人、サルト、カルムイク人

(七) ツングース、滿洲族

1. ツングース族

ツングース人、ラムート人等

2. 滿洲族

ゴリド人、オロケ人等

(八) ファイン、ウグリヤ、サモエード族

ムバルト、ファイン族

カレリア人、エストニア人、フィン人、レニングラード、フィン人

等

2. ヴォルガ、ファイン族

モルドワ人、マリ人

3. ペルミ、ファイン族

ウドムルト人、コミ人等

4 北部フィン族

ロパーリ人

トウグリヤ族

オス4ヤク人、サモエード人（ネネツ人）等

(九) 古代アジア諸族

ネエクナ人、コリヤーク人、カム4ヤダール人、エスギモ人

(十) 極東文化民族

朝鮮人、支那人等

而してこの細別に至つては驚くべき程多く、一九二六年の國勢調査に於ては、その民族別分類は「一五種及び「其他外國人」となされておる程である。一九三九年の國勢調査の結果は、人口二万以上を基準として、四七民族、二種族及無数の少数民族を含む「其他」に分類されておるのである。今一九三九年の調査結果を左に掲げ、一九二六年との増減割合を見よう。

民族別	1939年		1926年		1926年に対する 1939年の増減(△印減)	
	4人	%	4人	%	4人	%
ロシヤ人	99,019.9	58.09	99,491.1	52.91	2,222.8	2.3
ウクライナ人	28,090.4	16.49	31,195.0	21.22	3,124.6	10.0
白ロシア人	5,269.4	3.09	4,938.9	3.22	528.5	11.1
ウズベク人	4,844.0	2.84	3,904.6	2.66	939.4	24.0
タタール人	4,300.3	2.52	2,946.5	1.98	1,383.8	41.4
カザフ人	3,098.8	1.82	3,968.3	2.90	869.5	21.9
トルコ人	3,020.1	1.99	2,692.5	1.82	347.6	13.0
フセイン人	2,294.8	1.33	0	0	0	0
グルジア人	2,248.6	1.32	1,821.2	1.24	427.4	23.5
アゼルバイジャン人	2,151.9	1.26	1,567.6	1.09	584.3	31.2
チェコ人	1,451.4	0.85	1,340.4	0.91	111.0	8.3
ドイツ人	1,423.5	0.84	1,238.5	0.84	185.0	14.9

民族別	1939年		1926年		1926年比対照 1939年の増減(Δ/F)	
	人数	%	人数	%	人数	%
アイヌ人	1,369.9	0.80	1,119.4	0.96	250.5	22.5
シベリア人	1,229.0	0.92	998.9	0.87	250.3	25.5
キリシタン人	884.3	0.52	962.9	0.52	121.6	15.9
オランダ系種族	859.4	0.50	0	0	0	0
バミル系人	842.9	0.48	913.9	0.49	129.2	18.1
トルコ系人	811.8	0.48	963.9	0.52	49.9	6.3
ポーランド系人	626.9	0.39	982.3	0.53	155.4	19.9
ウラル系人 (ウラル系)	605.9	0.36	504.2	0.34	101.5	20.1
その他人	481.3	0.28	428.2	0.29	53.1	12.2
コシヤ人 (シベリア系)	408.9	0.24	0	0	0	0
オーストリア系人	407.9	0.24	318.5	0.22	89.2	28.0
オセチヤ人	354.5	0.21	292.3	0.19	82.2	30.2

ギンシフ人	2859	0.19	2138	0.15	92.1	33.7
モルダビヤ人	260.0	0.15	278.9	0.19	18.9	6.8
カシリフ人	2526	0.15	248.1	0.19	44	1.8
カラカルパク人	1858	0.11	146.3	0.10	39.5	29.0
朝鮮人	1804	0.11	87.0	0.06	93.4	109.4
カバルガニ人	1641	0.10	139.9	0.10	24.2	19.3
クイニラシド人	1431	0.08	134.7	0.09	8.4	6.2
エヌトニフ人	1425	0.08	154.7	0.11	12.2	9.9
カルクイフ人	1343	0.08	129.3	0.09	5.0	3.9
シット人及シットガル人	1269	0.07	151.4	0.10	24.5	16.2
ブルガリフ人	1135	0.08	111.3	0.08	2.2	2.0
クニグウシ人	921	0.05	94.1	0.05	18.0	24.3
カダグエル人	880	0.04	0	0	0	0
カラヤエフ人	757	0.04	55.1	0.04	20.6	39.4

民族別	1939年		1926年		1926年に対する 1939年の増減(△印減)	
	人数	%	人数	%	人数	%
ポグハジャ人	590	0.03	510	0.04	20	3.5
ハカツス人	526	0.03	456	0.03	70	15.4
オイラート人	411	0.038	0	0	0	0
クルギスタン人	459	0.03	547	0.04	88	18.1
バルカール人	427	0.03	333	0.02	94	28.2
イラン人(ペルシア人)	390	0.02	440	0.03	50	11.4
リトワニヤ人	323	0.02	415	0.03	92	22.2
支那	296	0.02	102	0.01	194	190.2
ウイグル人及コジギキヤ人	269	0.02	291	0.02	22	0.9
アラビヤ人	218	0.01	290	0.02	72	24.8
カシミア人	202	0.019	0	0	0	0
その他	8093	0.47	0	0	0	0

種別	人口	1926年	1939年	増減	増減率	備考
総人口	1,704,672	1,000,000	1,470,279	200,000	23.43%	1.5.9
米穀	107	948.1	0.56	0	0	0
その他		994.4	0	0	0	0

一般的に見て一九二六年に比して一九三九年が著しく人口を増加して
 るるのは云ふまでもないが、其著しいのはタタール人（四七・四％）、ア
 ルメニア人（三七・二％）、ロシア人（二七・三％）、ウズベツク人（二四
 ・二％）及白ロシア人（一一・一％）である。（支那人及朝鮮人の増加率は
 更に著大であるが、絶対数が少ないため之を除外する）。之に反して人口
 数が減少してゐる民族数は十一であつて、何れも西部及南東部の辺境民
 族であることは先目せらる。その最も顯著なのは、華から言へばアラビヤ
 ヤ人（二四・八％）、リツアニア人（二二・〇％）、カカツク人（二一・九％）、ホ
 ーランド人（一九・九％）等であるが、絶対数の最も著しい減少はウクラ

十人、其数三百十二万に及び、之に次ぐはカハツタ人の八十七万人
 減少、及ボートランド人の十六万人減少が目立つ。このことは本系異民族に
 屈したから、一九三九年の調査に於ては故らに「ロシア人」と記入した
 。若が相當に存したであらうといふことを推測せしむるのである。

それはともかくソヴェート聯邦に於て圧倒的多数を占めるものは、云ふ
 までもなくロシア人即ち帝政時代の大ロシア人であつて、總数九千九百餘
 万人で、全人口の五八・四一%を占め、政治、經濟、文化各方面に最も指
 導的役割を演じてゐる。之に次ぐものはウクライナ人—小ロシア人—の
 二千八百餘万人—一六・五六%—、白ロシア人の五百二十餘万人—三・一%—
 一等で、此等三スラブ族の合計は一億三千二百三十五万人に達し、全人
 口の七七・六五%即ち四分の三以上を占めてゐるのである。其他百万以上
 を占める民族は、ウズベツク、タタール、カザク、ユタヤ、アゼルバイ
 ジャン等以下十一種。更に十万以上はキルギズ以下十一種を数へて
 ある。而してこの民族構成は周知の如く一九三九年九月以降の新地域獲

得(帝政時代の旧領土回復)によつて著しき変化を蒙り、各民族の人口順位
 全人口に対する比率は著しく変化し、人口百万以上の民族数も一九三
 九年の十四より十九に増加するに至つた。今新地域編入前後の民族別人
 口及其の割合を掲ぐれば次の如くである。

民 族 別	1940		1939	
	100万	%	100万	%
ロシヤ人	99.8	51.7	99.0	58.1
ウクライナ人	35.6	18.4	28.1	16.5
白ロシヤ人	8.3	4.3	5.3	3.1
ウズベク人	4.8	2.5	4.8	2.8
タタール人	4.6	2.4	3.0	1.8
鞏 固 人	4.3	2.2	4.3	2.5

民族別	1940		1939	
	100万	%	100万	%
カサツク人	3.1	1.6	3.1	1.8
フゼルバトシヤン人	2.3	1.2	2.3	1.3
ク"ルツク人	2.2	1.1	2.2	1.3
カルク=ヤ人	2.2	1.1	2.2	1.3
ル=ヤ人(モルガヤ)	2.1	1.1	0.3 ³⁾	0.1
リツク=カ人	2.0	1.0 ³⁾	-	-
ホーラニ"人	1.9	0.9	0.6	0.4
レツク及レツクガル人	1.6	0.8	0.1	0.1
モルガヤ人	1.5	0.8	1.5	0.9
ク"人	1.4	0.7	1.4	0.8
ク"ツクシユ人	1.4	0.7	1.4	0.8
ク"ツクシユ人	1.2	0.6	1.2	0.7
エヌト=カ人	1.1	0.6	0.1	0.1

人

人

人

キルギス人	0.9	0.5	0.9	0.5
バシキール人	0.8	0.4	0.8	0.5
トルコ人	0.8	0.4	0.8	0.5
ウズベク(ウイグル)人	0.6	0.5	0.6	0.4
タジク人	0.5	0.3	0.5	0.3
コサコサ人	0.4	0.2	0.4	0.2
ウズベク人	0.4	0.2	0.4	0.2
カレリク人	0.2	0.2	0.4	0.2
オセツト人	0.4	0.2	0.4	0.2
アムダリア人	0.3	0.2	0.1	0.1
ギルギス人	0.3	0.2	0.3 ⁴⁾	0.2
カラカルパク人	0.2	0.1	0.2	0.1
朝鮮人	0.2	0.1	0.2	0.1
カザフスタン人	0.2	0.1	0.2	0.1

民族別	1940		1939	
	100万	%	100万	%
カレシヤ人	0.1	0.1	0.1	0.1
其他	6.5	2.8	3.3	1.9
合	193.2	100.0	190.5	100.0

即ち人口増加の最も著しかつたのはポーランドよりのウクライナ人で七百五十万人、同じく白ロシア人が三百万人で、ソ連邦内のウクライナ人、白ロシア人は、夫々三千五百六十万、八百三十万人の多数を擁することになった。聯邦内のエストニア、ラトヴィア、リツアニアの三民族は、従来極めて少数であつたため、事実上悉くが新民族と稱して差支えない。ベツサラビアのモルダヴィア人も多数に上り、之はウクライナ人と共和国内のそれと合せて、モルダヴィア新構成共和国となった。ユダヤ人は新地域編入によつて殆んど倍加し、四百六十万人を数ふるに至つたのである。

ロシア人は大なる変化を呈してゐないが、全人口に対する比率は五八・一%から五一・七%に低下し、ウクライナ人は一六・五%から四・三%に、ユダヤ人は一・八%から二・四%に何れも増加したのである。

次に之等諸民族中主要なる若干の民族につき、その居住地域を略述すれば次の如くである。

全人口の半ば以上を占めるロシア人の最も多く集中してゐる地域は、云ふまでもなくロシア共和国内のヨーロッパの部である。こゝでは「少数民族民族地方」を除けば、全人口に対するロシア人の平均割合は九割に達する。殊にヨーロッパ、ロシア中央部の諸地方に於ては九九%以上に及ぶところがあり、黒土地帯の南部に下るにつれてこの率は次第に減少し、カオルが中流及び下流では大割乃至七割前後になつてゐる。

北カウカサス地方に於ても到るところでロシア人は絶対多数を占めてをり、シベリヤ及び極東地方においても優に過半数を占めてゐる。その外少数民族の共和国、自治共和国、自治州においてもロシア人の割合はかなり高く、例へばブリヤート蒙古自治共和国、タタール自治共和国に於ては四割前後を占めてゐる。

ウクライナ人はその人口の約四分一三がウクライナ共和国に集中してゐるが、其の他ウクライナ人の分布地域は北カウカサス、中央黒土地帯、カオルが下流地方、シベリヤ、極東地方にも及んでゐる。

白ロシア人は白ロシア共和國の農業地帯に住んでゐるほか、主としてシベリヤ、ロシアの共和國の西部、ウクライナ等に住んでゐる。トルコ系諸民族はそれぞれ同名の共和國又は自給共和國に住んでゐる。か、タール人、如きはソ連邦の到る処に群住して居り、殊にアジアの諸都市に於ては相當の比率を占めてゐるものもある。尚ほ周知の通り、帝政ロシアの崩壊後、ソヴェト政権の支配下にあり、またらぬ者は、現在故國を離れて、世界各地に不安定な且つ窮迫せる生活を以て其の日其の日を送つてゐる。所謂白系ロシア人であつて、其の数は今詳しく計ることを得ないが、全世界のそれを数へると相當の數に上るであらう。アジアでは、中國、殊に滿洲國（大方と稱せられる）に居住する者が多い。之等白系ロシア人の消息については、今之を審にすることを得ぬので、本章は之が記述を省略する。又一九四一年夏の独ソ開戦後、許もなく西國境バルト諸民族を始め、ウクライナ、白ロシア民族も概ねドイツ占領軍の支配下に移つて現在に至つてゐることは周知の通

り
て
あ
る。

第二節 民族自治体制

革命の成功により旧帝政の機構が無残にも破壊さるゝや、永年壓政に呻吟した大口シヤ人以外の大小の被抑圧民族は、茲に解放の絶好の機会を掴むに至つたのである。殊に革命政權自体が早くも一九一七年三月、「民主主義的シヤは、各民族の民族的自決の立場に立つ。従つてポーランドは國家的にも又國際的にも完全に独立する權利を有する。」と宣言したことは、國內少数民族の解放を公約したものに外ならなかつた。而も大戦後に於ては人種平等、民族自決主義が澎湃として世界を凡靡し、歐洲の少数民族は踵を接して独立を宜したのであるが、この氣運に乗つて旧口シヤ領内からも、ポーランド、フィンランドを始めバルト三國が新に独立國家となるに至つたのである。然るに此等辺境の一部民族を除いた餘の大小諸民族は如何と云へば、その總てが依然として「口シヤ」の一員と

して残り、当時帝政ロシア時代の領土は四分五裂するであらうと予想し
た外界の觀測は、早くも衰切られてしまった。

勿論此等諸民族に對して何もかも與へられたものでは無い。「
× 社会主義共和国」、「××自治共和国」、「××自治州」、「××民
族管区」等々が、此等諸民族に與へられた表面上の名稱であつた。云ふ
迄もなく、茲に「國家」の名を與へられたものも、地球上の他の独立國
家に當敵まるものではなく、國家内の國家に止まつたのである。何とな
れば、此等「自由ナル諸共和国」は、「自由ナル結合」を以て、更に高
次の大ソビエト聯邦を形成せしめらるゝに至つたからである。

大ソビエト聯邦が出来上つたのは一九二二年末内亂が全く鎮定され
てからであつて、翌二三年迄に四個の構成社会主義共和国、後カウカサ
ス聯邦共和国内の三共和国、十個の自治共和国、十六個の自治州が結成
せられ、境域内の諸民族は夫々憲法規定の代表者を選出し、民族會議を
構成することゝなつた。其後一九三六年新憲法の実施に及び加盟共和国

自治共和国、自治州、民族管区にも増減があり、殊に戦前旧帝政時代の領土の回復に依り、其の数は増加した。予之を表示してその変遷を見れば左の如くである。

	一九三三年	一九三五年	一九三九年	一九三六年	新憲法 実施後	一九四一年
加盟共和国	四	六	六	七	一一	一六
後カラカサス聯邦 共和国の諸共和国	三	三	三	三	一	一
自治共和国	一〇	一三	一六	一九	二二	三〇
自治州	一六	一七	一六	一四	一九	一九
民族管区	一	一	一	九	九	一〇
合計	三三	三九	四二	五二	五一	五五

即ち新憲法実施後の加盟共和國は、ロシア、白ロシア、ウクライナ、アゼルバイジャン、ゲルシヤ、アルメニア、カガツク、トルクメニスタン、キルギス、ウズベツク、タダクの十一國であり、之と共に二十二國の自治共和國、九個の自治州、及び九個の民族管区が存するに至ったのである。然るに一九三九年以後帝政時代の失地を概ね回復するに至るや、その構成共和國には更にカレロ、フィン、モハダビヤ及び旧バルト三國を加へて、十六を数える様になつた。

(註) 聯邦構成共和國たり得る資格を有する共和國は、一九三六年十月廿五日の第八回全聯邦ソヴェイト臨時大会に於けるスターリン書記長の演舌に依れば、次の條件を具備する必要がある。

一、該共和國はソヴェイト聯邦の他の領域により四辺を包圍されざる
 辺境共和國であること。蓋しかかる共和國のみが論理的にも實際
 的にもソ聯邦から脱退すると云ふ問題を提起し得るからである。

二、該共和國に名王與へるべき人種(民族)が、其の共和國に於て程

度の差を問はずとも 過半数を占めるものでなければならぬ。
 三、該共和国は少くなくとも百万人以上の人口を有するものでなければ
 ならぬ。蓋し人口少く、兵力稀少の小ソヴィエト共和国が獨立
 國として存続し得るとは考へられず、列國の干渉を喚び起すこと
 は疑を容れぬいかりである。

次に現在（一九四〇年）各構成共和国内の自治共和国及自治州及民族
 管区を一覽表に依れば次の如くである。

民族自治共和国

- 「マミ」「ラドムルト」「チユワートシ
- エ」「マリ」「タタール」「パシユキ
- 「トル」「モルドワ」「ボルガドイツ
- 民族「カルク」「カバルヂノバ
- ルカル」「北オセチヤ」「チユエチエ
- ノイングロシユ」「ダケスタン」
- クリミヤ（以上改竄）

民族自治州

「ヤクト」 「ブリヤートモンゴ
ル」 (以上シベリヤ)

「カチヤエフ」 「チユルケス」 「ア

ゲゲイ」 (以上改露)

「ピロビジャンユダヤス」 「ハツカ

ス」 「オイロト」 (以上シベリヤ)

「ネネツ」 「ペルメルコミ」 (以上改露)

「オスチヤユジオーグル」 「ジヤマ

ロネンツ」 「アギンスコトエ、ガリ

ヤート」 「タイミール」 「エウエン

ク」 「ウスチオルダブリヤート」 「

コリヤク」 「チユク」 (以上シベリヤ)

民族管区

民族自治共和国 「アブバス」 「アジャリヤ」

民族自治州 「南オセチヤ」

アゼルバイジャン社会主義共和国

民族共和国 || 「ナヒケエワン」

民族自治州 || 「ナゴルノカルバフ」

タタク社会主義共和国 || 「ブル、バタフシヤン」自治州

シズベック社会主義共和国 || 「カラカルパク」自治共和国

各民族自治共和国、民族管区別の人口は詳細不明であるから之を除き、各構成共和国の人口、面積及人口密度を次に掲げるとしめる。年度は一九三九年一月十七日の国勢調査を基礎とし、之に其後編入された諸共和国の人口及面積を参酌したものである。

ソ連邦各構成各共和国面積及人口(1940年現在)

構成共和国別	面積 (単位1000平方料)	人口 (100万人)	密度 (一平方料=人)
ロシア	16,374.1	108.8	6.6
ウクライナ	556.0	40.3	72.4
白ロシア	228.6	10.6	46.3
アゼルバイジャン	86.0	3.2	37.3
グルジア	67.6	3.5	50.9
アルメニア	30.0	1.3	42.7
トルクメニ	447.6	1.2	2.8
ウズベク	318.3	6.3	16.6
タジク	143.9	1.5	10.3
カザック	2,744.5	6.1	2.2
キルギズ	196.7	1.5	7.4
カロフイン	180.8	0.5	2.8
モルダヴィア	32.7	2.4	73.4
リプランド	59.8	2.9	48.5
ラトヴィア	65.8	2.0	30.4
エストニア	47.5	1.1	23.2
合計	21,637.9	193.2	8.9

加盟十六共和國即ち加盟十六共和國は、今日政廳のみならず、シバ
リヤ地方もその本国の一部として所屬せしめてゐるため、面積に於ては
全聯邦の約八割、人口に於ては約六割を占めて、断然他の諸共和國を正
例してゐるのである。勿論その構成民族はロシア人（所謂大ロシア人）
のみならず、数多の民族を内包するのである。一六個の自治共和國と
六個の自治州及十個の民族管区を持つてゐることでも之が証せらるる。
即ち見方によればロシア共和國はソヴエツト聯邦の主幹であると言ふよ
りも寧ろその全部であるとも云へるのである。特に今日ロシア共和國に
亵々有力共和國たるウクライナ共和國及白ロシア共和國は新輸入の西
境諸共和國と共にドイツ軍の占領下にあるのであるから、文字通りそれ
は全部と行つたのである。

第一款 概説

ヨーロッパロシアは「ロシア」ウクライナ「白ロシア」の三大共和国があり、その主要構成民族は云ふまでもなく夫々ロシア人（帝政時代の大口シヤ人）ウクライナ人（同じく小ロシア人）及白ロシア人である。而してこの三民族が何れもスラブ民族。その中の東スラブ族（或はロシア族）に属することは前述の如くである。尤もロシア共和国の中には、此外に多数のアジヤ系の民族や先住の原始民族を内包し、此等の内の大半はものは自治共和国を、小なるものは自治州を形成し、更に原始的少数民族は民族管区に所屬せしめられてゐること、は、之亦既述の通りである。

ロシア族はもとカルパチヤ前地の住民であつたが、紀元後一五〇年乃至七〇〇年、ウイッスラ河及ドニエツプル河地方に現はれ、漸次欧露の中央部に進出し、後分離定着して現在の如き分布状態を示し、夫々ロシア人、白ロシア人、ウクライナ人と稱せらるゝに至つたのである。

欧露の北西部にはロシア族と前後してアジヤ系の民族、例へばフィン族の一派たるカレクヤ族（カレリヤ地方）やラツプ族（コラ半島）等が居住した。前者は主として狩獵漁撈等を営み、最近まてカレリヤ自治共和国を形成し、後者は今尚遊牧生活を主としてゐる。又東北部には一般に「ジルヤン族」と呼ばれるサモエード族及びコミ族が居住してゐる。此兩者も狩獵遊牧の民であるが、北部諸民族中では最も優秀であつて、教員或は技術員等をも出して居り、殊にコミ族はサマエードよりも一層文化的であつて、現在自治共和国を許されてゐるのである。東部のウラル前地からボルガ中流にかけては、アジヤ遊牧民の子孫たるチユワシユ、ウドムルト、マリ、タタール、バシキール、モルドワ等が居住し、

亦夫々自治共和国を認められておる。此等のアジア系の諸民族は、曾ては勇敢な戦闘的民族であつて、屢々モスクワ公国を劫掠蹂躪し、或は又ロシア人の東侵を永く阻止するの防塞となつたのである。

ボルガ河の下流沿岸には、後述の如く十八世紀の後半にドイツから大挙して移住したドイツ農民の子孫が、現在も一団として居住蕃延し、自治共和国を作つておる。尤も之等ドイツ人の子孫は今回の独ソ戦争開始せられたるに、強制的に他地方に転住せしめられたといふことである。

ウクライナ南西のハリドアからベツサラビヤにかけての三角地帯には、ロシア人の外にブルガリヤ人、アルメニヤ人、ドイツ人、ユダヤ人等が多数混住し、人種的に複雑を極めて居り、当然の結果として又政治的に極めて不安定な地帯をなしておるのである。

第二款　ロシア民族

ロシア人即ち帝政時代の大口シヤ人は、今日人口凡千九百万を数へ、ソ聯邦人口の五八%を占め、最大の構成共和国たるロシア社会主義共和国を形成してゐる。その先祖は始めプリペート河とオネガ湖との中間に於て長い間農耕を営んでゐたが、久しく国家的組成をなさず、漸く九世紀に至リスカンジナビアからワリヤ人が人を招いて秩序を整へたのが、その国家組織の端緒である。而して大口シヤ人と云ふ共同的感情は十三世紀から十五世紀に亘る韃靼人支配時代に始めて養成したもので、云はば惨酷なる異民族の支配によつて覚醒せしめられたのである。然しその民族的自覚は尚ほ微弱且つ消極的であつて、共同の言語を話し、共通のギリシヤ正教信仰者であつたといふことが、彼等を一団として結ばつた。又他の諸民族から区別する程度に止まつたのである。其の民族意識が大いに覚醒せられ、且つ積極的となつたのは、十八世紀に入りてロシア国が

ドイツ系指導者の下に歐洲の政治に參加し、且つ一方では其兵士及開拓移民によつて不断に領域を拡張するやうになつてからである。尤もその民族的意識は、理性や積極的感情に基くものと云ふより、寧ろ漠然として他の民族、特に西歐の諸民族とは縁のないといふ感情に發して居り、彼等は此の感情を陰鬱な程固持してゐるのである。又永らく無数の村落団体として散居し、隣接村落とも概して没交渉に生活して来たことが影響して、民族全体としての有機的連絡を缺き、従つて團結力もさ程強くはないと云はれてゐる。

彼等は社会的には長い間貴族政治及專制政治（時には屢々異民族の支配下に）の下に呻吟した。

又自然的には暗い森、缺乏せる耕地、嚴格な氣候に虚まされ、特に長い冬を陰鬱なる小舎に送りぬばならないのである。これらの社会的、自然的環境は、長年の間にその民族的性質に重大な影響を與へた。もし大口シヤ人の通性を一言にして云へば、憂鬱にして遠慮深く、保守的であつ

て、政治的権力や宗教的権威は勿論地主の筈にも絶対には服従してよく一
身を犠牲に供しがちなものである。権威や規律に比較的柔順であったといふこと
は、下級兵士としては必ずしも不適當ではなないが、独創的な行動力や、
指導能力は乏しいとされてゐる。又有識者中には、忽ちにして憂鬱的気
分となり、忽ちにして放逸となり、常に生活の現実的要求に従ふよりは
空想や気分が導かれると云つた傾向が多い。其の結果として、組織を
欠き、不秩序に陥り、時間を空費することか、目につくのである。大口
シヤ人はよく物に屈托しなると云はれ、運命に柔順であると云はれる。
所謂「二千工ボール」(仕方がない)といふ言葉の存在が之を証明すると
説かれてゐるが、之は要するに彼等の受けと社会的、自然的影響の然ら
しむる所であつて、その美德ともなり、又缺欠ともなつてゐる所以であ
る。而してこの憂鬱にして空想的な特性は彼等の文学や民謡音楽にもよ
く反映してゐる。大口シヤの農民は農民ではなく、夢を見る遠く学徒であ
る。この譬へがあるか、實際彼等は冬は暖炉の側で寝過ごし、夏は路傍の時

を過すことを最も好むのである。

以上は勿論主として帝政時代の大口シヤ人を観察しての結論であつて、必ずしも今日の口シヤ人を語るものではない。然しその民族的特質といふものが、二十年や三十年で一掃されるものではない事は云ふまでもない。唯今日工鉦業から農業に至るまで悉く社会化し、共同化した時代に於ては、その団結力や内部的連絡は自ら昔日の如くではなかるべく、其精神的或は社会的生活に於ても著しく進取積極的且自主独創的となつてゐるかに傳へられてゐる。今日口シヤ人は之は必ずしも大口シヤ人に限りず、白口シヤ人、ウクライナ人、其他ソヴエト内の凡ゆる民族に於ても同様であるが、一つの階級に属し、その特殊の一細胞として始めて意義を有してゐる。換言すれば彼等は、一個人ではなく、全体としての共同的實在である。古き且つ極度の民族文化の上に、卒然高度且つ強力な組織を構へた口シヤ人の民族的或は国家的結合力が如何程の強さを持ち得たかは、世界の人が羨しく疑問の眼を以て眺めたのであるが、独

ソ死闘を続け、凡そ二年、其解答は自らなされておるかの如くである。
帝政時代に於ては大口シヤ人は云ふまでもなく他の諸民族に對して支
配的な民族であつた。之れはロシア帝國の全人口中に占むる其の比率が
圧倒的に大であつた、めであることは云ふまでもない。ソヴェート体制下
に於ては勿論民族的支配被支配の關係は名目上ない。共和國の面積が広
大であり、人口が圧倒的に多いといふことは、当然の結果として聯邦會
議々民族會議に選出する代表者の数を多かりしむるのであるか、規定上
其数は絶対多数たることを許されないのである。勿論比較的多数である
といふことは、夫自体比較的力の強いことを意味するものには外ならない
か、その絶対的多数は許されないといふことは、民族的専制への一つの
障壁であり、民族的シヨリヴィズムに對する一つの保障であると着目さ
れておるのである。

第三款 ウクライナ民族

ウクライナ人は帝政時代小ロシア人と呼ばれた。一般に黒土地帯の小ロシア及ウクライナ地方からヴオリニヤ及ホドリヤにかけて居住して居り、ソ連邦内のウクライナ人の数は三十五万六千以上に上りウクライナ共和国を形成して、ロシア人に匹いどネの有力民族である。聯邦外に於てはガリシヤ及東北ハンガリーにも居住して「ルーテニ人」と呼ばれてゐる者もあり、更にベツサラビヤ及タウリヤにも移住して其の地方の多数民族となつてゐる。ウクライナ人は細長くてブリュネット色を帯び、南方気質を輕快にあり、詩歌音楽を愛好し、殊に俗謡俚諺に長けると云はれる。ドイツのヘットネル教授著「ロシア」中ウクライナ人に就て左の如く記述してゐるのは、盡し要を得てゐるものであらう。

「小ロシア人へウクライナ人」は本来白ロシア人居住地方の南方より森林地方と草原地方との中間地帯に居住し、其の後更に東方及び東南方

に移住したのである。人口は近年迄（一。世紀初頭）歐露に於て二千五十万人と云はれしを最近（第一次大戦頃）増加して三千万乃至三十五百万（カリシヤのルーレン人及領内被蘭人を含む）に達してゐる。白口シヤ人及大口シヤ人が一般にブロンド色頭髮を有するに反して小口シヤ人は帯黒色頭髮の者が多い。恐らく印度ゲルマン人種と或帶黒色民族との混合の結果である。たゞ大口シヤ人が一般に有鬚なると異りて小口シヤ人は鬚を剃つてゐる。又衣服も同一ではないが、過去に遡れば小口シヤ人は大口シヤ人と共通点が多かつたのである。然し運命が兩者を分ち、小口シヤ人は長く被蘭人の支配を受け、其の後再び大口シヤ人と合体し、其の反抗は打破せられ文章語も圧迫されて、僅かにその言語は民族デイヤレクトとして存続したのである。斯くて特殊の民族的感情は漸次に衰へ、漸く一九〇五年の革命後復活したのである。而してその鼓吹者は口シヤ人よりは寧ろ墾地利、ウクライナ人であつた。――

「バンゼ」の「ロシヤ」に依れば、ウクライナ人が隣人たる大口シヤ

人に対して政治上一步を譲つて来たのは、人口の小なるためのみでなく、此農業民族が指導的の上層階級を缺き、殆ど国家的活動を發揮することがかたかつたためであると言ふ。又兩者の民族的感情は俄かに一擲されることは出来ず、現在に於ても、例へば大口シヤ人如何をいへども共産主義者たらんと努力してゐるウクライナ人は先がウクライナ人であつて、然る後始めて共産主義者たらんと欲するの心あるといふ。之は両民族の民族的感情が依然として一致してゐないことを指摘したるのであるが、其の政治的或は社會的基礎の喰違ひは、バンゼに依れば、ウクライナには大口シヤに見る如き「ミール」制度が発現しなかつたためであるらしい。

前大戦後のロシアの内訌はウクライナ独立の絶好の機会であつた。一時ウクライナは独壇軍の援助によつて赤軍を境外に駆逐し、スコロパツスキー將軍は独立政府の樹立に成功したが、然し之は独逸軍の敗退と共に三日天下に終つてしまつた。其の後モウクライナ独立運動者は、ペト

ルイラヤコノパレット大佐に指揮されて、赤軍を始め、周囲のポロラン
ド軍、ルーマニア軍並にデニキン麾下の白衛軍とすれども、絶望的奮戦を
続けられておたか。一ルニ一年遂に屈服して領土の大部分が革命ロシアの支
配下に入り、一部はポロランド及ルーマニアの領土となつたのである。
革命ロシアの支配下に入つた地方には幾許もなくウクライナ社会主義ソ
ヴェート共和国が成立した。

ウクライナ独立運動は今日尚完全に跡を絶つたわけではなく、国内
外で時々その現れをみるこゝがある。殊に赤色政權の支配を逃れて國外
に流亡してゐるウクライナ人の数はアメリカ合衆国に一万アルゼンチン
に八万、ブラジルに六万、カナダを始め其他の米州諸島に三万以上と
云ふ。又滿洲国と中國、其他ヨーロッパ諸国にも相当居住してゐると思
はれる。此等はウクライナ独立運動者の温床たることには云ふまでもない
が、今日其の力は甚か弱く鉄の如キソヴェット政權に對しては到底及向
ふことは出来まいと見られてゐる。

尚一九三九年九月に於けるポーランド東部のソ聯領編入により、約七百五十万のウクライナ人が増大した。この内、ウクライナ社会主義ソヴェット共和国はそれだけ面積及人口を拡大したのがある。

第四款 白ロシア民族

白ロシア人の居住地域は白ロシア地方（白ロシア共和国）、即ちスラブ民族の発祥地と推定せられるプリペト流域及其附近であつて、十九世紀末には約六百万と云はれ、其人口は今日八百三十万を数へてゐる。白ロシアといふ名称は、彼等の衣服が白く或は明るいためであるとも云はれ、又彼等がタタール人の支配及混血をうけたことなく、純粹なスラブの血統を保持してゐるためであるとも云はれる。其の居住形態は概ね

散居的であつて、村落は小さく、一般に生活は貧窮で、文化の度も他のスラブ族より低い。蓋し長らくポーランド人、リトワニア人、大口シヤ人、小口シヤ人等と混みこまれて、民族的發展を遂ぐることを得なかつたのである。其の人種的特徴は、ブロンド短頭型で、大口シヤ人が血液的に或は文化的にフィン族或はタタール人に混血せると反して、民族的混淆は少ない。尤も人によつては、西部ではポーランド人に、北部ではリトアニア人の影響せられ、其特徴を多少享けておると云ふ者もある。要するに其居住地域が天然の恩恵に乏しかつたため、文化向上せず、体格も立派ならず、生活様式も尚ほ甚だ低級である。

斯くの如く文化が永く停滞し、生活の向上が見られなかつたのは、ポーランド人が、カトリック僧侶の援助の下に、幾多の奸計圧迫、買収等に依つて、先づ大口シヤの貴族をカトリック教に改宗せしめ、次で之をポーランド化し、一般大口シヤ人から切離してしまつたことと發するところ云ふ。即ち大口シヤの農民は、全くポーランド化した地主に隷屬する無

権利の民となつてしまひ、更に都市の商工民も聽てポーランドから侵入
 したエグヤ人によつて商工業の實権を奪はれてしまつたのである。斯く
 て白ロシア人は、国民的上層階級を失つたのみならず、中級商工階級も
 消滅し、更に国民的感情を代表する僧侶とは信仰の分烈のため離れ、
 其の地主をも奪はれて、全く農民のみが唯一の白ロシア民族として残
 つたのである。従つて彼等は政治的には「無し」となり、民族的感情及思
 想の源泉たる文学は枯死し、白ロシアの名も既に語る者なく、「白ロシ
 ヤ人」などといふ者は無い。若し汝がカトリック信者ならばポーランド
 人であり、又もし汝が正教信者ならばロシア人である」と言はれるに至
 つたのである。然るに一七七二年以降ポーランドが分割され、次で同国
 が滅びるに及び、白ロシア人は始めて民族的に復活するの端緒を得た。
 白ロシアの名は再び世上に語らるゝやうになつた。勿論之は百数十年間
 ツァールの支配下に於ていあつたが、此の貴族や地主、僧侶等国民的上
 層階級を最も早く失つた孤兒の民族は、それだけ容易に革命勢力の母胎

となり易く、一九〇五年には早くも新らしき民族的力を地上に芽生えしめ、而してその芽は不断に成長して、一九一七年には逸早く「白ロシア人民共和国」を建設して其の實を結んだのである。

尚、ウクライナの場合と同様に、一九三九年九月のポーランド東部のソ聯領偏入により、凡そ三百万の白ロシア人が新に加はることとなり、白ロシア共和国はこれだけ人口と面積とを拡大したのである。

第五款 沿バルト諸民族

帝政時代露領に属し、第一次大戦後独立し、更に最近ソ聯邦に歸属することになったバルト海岸には、カレリヤ人、フィン人、エストニア人、レット人、レットガール人及びリツアニア人等が居住してゐる。此外

一九三九年九月独ソ間に協定されたポーランドの分割に依り、ポーランドの東半も亦ソ聯領となつたが、此地の住民は大部分ウクライナ人及白ロシア人であり、その民族事情は記述したので茲には之を省略したい。カレリヤ人はフィン族の一派であつて、其居住地即ち、カレリヤ地方は嚴密に云へばバルト海には面しておらず、芬蘭と国境を接する白海からラドガ湖に至る一帯である。其人口は現在二十五六万であつて、先年迄ロシア社会主義共和国内でカレリヤ自治共和国を形成しておたが、ソ芬戦争の結果一九四〇年三月フィンランドの一部ラトガ湖水域がソ聯領となつた及び、約十五万のフィン人と共に、新にカレロフィン社会主義共和国を組織して、聯邦構成の一國となつたのである。此地方はロシアに於ける正教派地域として有名であり、住民の大部分はもと狩獵と漁場とに従事し、僅かに農業を営み、又伐木と水運の労役に服して極度の貧困な生活を営んでおた。最近は鉄道沿線の泥湿地が排水と以て共營農場の村落が開かれ、面目を一新しておると云ふ。

旧バルト三國の一たるエストニア、即ち現在のエストニア社会主義共和国の主要住民はエスト民族であつて、同国住民の凡八八%を占め、百二十万人に上る。エスト人はフィン族と同系で、ウラルアルタイ附近から出で、千数百年前現在の地に定住したのである。

同じくアジア人種のマダヤール人との親近関係は言語構成の上で現はれておるに過ぎないが、フィン族とは長い接触を有し、その文化的関連は極めて大で、言語以外の文化様式は殆んど同一である。而してその文化水準は寧ろ同国内に居住するロシア人よりも高いとされておる。宗教は新教徒が大部分で八割を占め、ギリシヤ正教は二割弱である。大部分が農業、牧畜、林業等の原始産業に従事し（五八・八%）、工業一五・二%、商業四・%、交通業三・三%である。

ラトヴィヤ共和国は約二〇〇万の人口を擁しておるが、民族構成はエストニアよりも複雑である。主要民族たるレット人及レットガール人は総人口の七七%を占め、インドゲルマンのバルト族に属し、リツアニア人に

親近してゐる。エスト人種純粋ではなく、四周の諸民族との混血型で、
外貌はゲルマン、性格はスラブに似てゐる。宗教は大部分が新教で約七
五%、カトリックは五%、ギリシヤ正教は殆んど存在しない。職業別人
口はエストニアと同様であるが、農業等の原始産業の占むる割合（六
三、三%）は同国よりも高い。尚、此国の西部にはドイツ人、東部には口
シヤ人、ポーランド人、ユグヤ人、南部にはリツアニア人、北部にはエ
スト人が多少づゝ住んでゐる。

リツアニア共和国は総人口約二五〇万であつて、リツアニア人が約八
割を占め、東部に若干のポーランド人、ロシア人、南西部にドイツ人、
北西部にリット人が居住し、又都市にはユグヤ人の居住者が比較的多い。
リツアニア人は久しくポーランドの影響をうけ、固有の服装も文語も
持たず、又カトリック教徒の圧倒的に多いのも（八六%）同国の影響で
ある。殆んど全部が農民で無学者数も多く（四・%）、文化水準は甚だ
低い。国民性として愛郷心の強いのを特徴としてゐる。ユグヤ人が比

較的に多いのは、帝政時代はプロス、フランス、ドイツの線以西のみ一般に
ドイツ人の定住を許したためである。

以上バルト沿岸諸民族は、近年ソ連邦に合併せられ、夫々の社会主義
共和国を構成したのであるが、屢々説く如く、独ソ開戦以来幾許もなく
ドイツ軍の占領する所となつて、現在に至つてゐる。

第六款　ボルガ流域ドイツ民族

今日ソ連邦内には百四十万を超ゆるドイツ民族が存し、之等の中には
帝政時代にも又現在に於ても軍政其他学藝技術方面の指導的地位に立つ
者も少くない。ドイツ系民族は勿論全部が一定地域に集団生活してゐる
わけではないが、ウクライナ西部ポドリヤからベッサラビアへかけて及

バルト沿岸には相当に群生してゐる。然し乍ら最も数多く集団居住してゐるのは、ホルガ下流の沿岸地方であつて、第一次大戦前に於て既に六十万人の人口に上り、数百の繁栄せる村を形成し、大規模な小麦栽培と盛大なる織物業とを営み、自らの教会及学校を有してゐた。但し同地方の人口は其後餘り増加せず（他に移住したのであらうか）現在も六十万台に止まりて居り、今「ホルガドイツ民族自治共和国」が組織されてゐる。右ホルガドイツ人の先祖は、エカテリナ女帝時代にドイツ各地方、就中南ドイツから招致された農業移民であつて、元來ドイツ人たるエカテリナは一七六三年ドイツ移民に對して、自由自土地の支給、一切の公租公課の十年間免除、旅費支給、農家建築の補助、自治と自己の裁判所、自由な信仰、永久的な兵役免除等の凡ゆる好條件を以て之を迎ふる旨宜言したのである。その後五十年間に約三万人が来住したが、莫へられた土地はホルガ下流の未開の曠野であり、周囲には半ば野蛮な諸民族や盜賊団が横行してゐた。従つて最初移民の生活は悲惨を極め、数千人は病氣

飢餓、困苦缺乏のためを以て、数千人はステツプの盜賊によつてさらけ
れ或は虐殺され、又数千人はブガヤの叛乱によつて生命を失つたの
である。然しドイツ農民はよく耐え忍んじ、新しい土を拓き、遂に繁栄
せるホルガドイツ人地帯を成りあげたのである。勿論遠隔の地のこと、
て、ドイツの故郷に対する直接的關係は殆ど全く喪失してゐるの心ある
が、尚ほドイツ民族性は之を忠実に守り続けてきた。革命後凡そ於ては前
記の如く自治共和国を認められ、首都をエングルス（人口七万三千一）に
置いてゐるが、曾ては大地主経営を主としてゐた此地方も、現在は眞先
に集団機械化し、一九三三年には既に一〇〇%が共産となされた。作物は
輸出向小麦が主で、向日葵、煙草、ケシ等も多く栽培されてゐる。
尚ほこゝに一言附記すべきは、此の地方のドイツ人が、独ソ開戦後幾
許も存く、ソ聯当局によつて強制的に他地方に立退き転住せしめられた
ことである。

第四節 南コーカサス及中央アジアの民族事情

コーカサス地方の中北半は現在殆んどスラブ人の居住地域となり、ロシア社会主義共和国に編入されておるものであるから、茲には之を省略し而半即ちザカフカス地方に於てのみ述べることにする。ザカフカス即ち所謂南コーカサスにはトアゼルバイジャン、トタルジヤ、トアルメニヤの三構成社会主義共和国がある。更にグルジヤ共和国にはトアブバス、トアゲヤ、トリヤの二個の民族自治共和国及一個の南オセチヤ民族自治州があり、又アゼルバイジャン共和国にはナヒケエワン民族自治共和国と、トゴルノカルバフ民族自治州とがある。即ち地方は地域的にはさほど広大ではないが、民族的にはやはり複雑な構成を呈しておると云へよう。然し此等は大体に於て所謂コーカシヤ族と呼ばれるトルコイラ

ン系のアジア種に属し、民族的にはアジアの色彩が濃厚である。人口は
アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア三民族共大差なく、何れも二
百二十三十万を数ふるに止まる。元来此地方は曾てペルシヤ領に属してお
たのであるが、一七二二年のピョートル大帝のペルシヤ遠征、一八二八
年の露土戦争の結果、ロシア領に帰属したのである。而も政體とは險峻
な山嶽を以て隔絶されておるの故、自ら永く別天地をなしたのであるが、
革命後に於ても別にロシアの羈絆から脱することなく、寧ろ三民族は
直にコーカサス共和国聯邦を結成して遑早くソヴエト聯邦の傘下には
参加したのである。スターリン議長は此地方グルジアの出身であり、其
他にも当地方出身の黨政府首魁者が多く、其知覺に対する影響力は相
當に大であるべく、帝政時代猛烈な反抗をくり返して政府に手を焼かした
た。此地方も、現政權になつてからは比較的平穩である。
中央アジアには「キルギス」「ウズベツク」「タジク」「カザツク」
「トルコメニ」の五構成社会主義共和国が存し、更にはタジク共和国に

はゴルノパタクシヤン自治州が、ウズベック共和国にはカラカルバク自治共和国がある。

元来この地域は支那古代史の所謂西域地方であつて、古くから匈奴、鮮卑、突厥、回紇、韃靼等と称せられたアジア系統の所謂ウラルアルタイ民族の占據し居所である。自然環境が内陸的の草原又は沙漠で、雨量に乏しい乾燥気候であるため、住民の生業も農耕に頼ること少く、主として遊牧を営み、遊牧民族に特有な文化を持つてゐる。漢唐の時代既に自己の国家を組織しておいたが、十三世紀初頭チンギス汗に征服せられ、聽て此地方はチンギス汗の建設を見事に至つて、同国は元の滅亡と共に亡びたが、次いで其の後裔チムールの勃興となり、欧亜に勢力を振つたが、其後後域内はウズベック、ホハラ、ホレズム（後のヒバ）コーカンド、トルクメン等の諸汗国が分立し、相争ふて興廢するうちに、ロシア帝国の東方経略に遭ひ、その征服するところと行つてしまつたのである。

大革命に當つては、此地方は本国との経路関係を絶たれ、住民は窮乏
し、中には白系軍と共に反革命運動に投ずる者もあつたが、統制ある軍
に抵抗する事とは出来ず、相次いで征服され、一九二〇年にホレズム及
ホハラの各人民共和国の成立をみた。其後トルキスタン自治共和国も建
設されたが、一九二四年に至り民族別に、ウズベツク、トルクメン、キ
ルギス、カラカルパツクの諸国に区分せられ、更に数回の改廢を経て、
一九三二年北部一帯をカザク社会主義共和国となし、南部をトルクメ
ン、ウズベツク、ターゲツク、キルギス社会主義共和国に劃定して現
在に至つてゐる。

此地方の住民は前記の如くウラル、アルタイ系トルク種族に属してゐる
が、多少アリアン種族の血液を混してゐる。キルギス、サルト、ウズ
ベツク、トルクメン、タゲーク等が代表的民族である。
キルギス人は曾ては東はアルタイ山脈より、西はウラル山脈に至る
広大な地域に遊牧し、総數四百五十万と推せられたが、然し現在の民族

別人口に依れば、僅かに九十万人過ぎない。身体的特徴は、身長中位、肩広く、顔は額広く、額骨よく発達し、眼瞼が斜に截れ、鬚髯の少ないのが普通である。一般に遊牧生活をなし、住居には張幕を用ひるが、冬の嚴寒期には冬舎ジモウカと称する瓦を積み重ね、その三分の二が土中に埋る家に住む。富裕な者は政務人と同様な木造の家にとタンの屋根を葺いたものに住んかゝる。

ウズベク民族は、サアルカンド、フェルガン、シルダリンスク等の各地方に多く住み、身長は中位、顔は卵形、顔は細長く、額骨は普通、皮膚は褐色で頭髪は黒い。性勇敢にして尊大性を有し、大部分は定着して農業に従事して居り、半ば遊牧の生活を好む者はホハラの東部に見られるに過ぎない。ウズベク族とイラン族との混血種にサルト族がある。体格及鼻目端正であるが、激しい労働を厭ひ、多く商業に従事してゐる。貧富の別なく、男女室を異にし、又女子は外出の時頭部から長い袍衣を被り、顔は馬毛の綱で覆ふ風習がある。宗教は回教を信じ、之によつて家

度生活、社会生活、精神生活が支配されてゐる。

トルコメン族は、主として南部及東南部地方に住人である。ロシア人と征服せらるゝ迄は純然たる野蠻人の生活を営み、掠奪を事とし、敵の俘虜を捕へ、之を奴隸として賣ることをもあつた。村落を行して土造の家、又は土と瓦で造つた家に住み、精々文化の進んだ者はロシア式の木造家屋を営んでゐる。然し其の家屋内の生活状態は、全く他の遊牧人と異ならない。回教を信じて、因く古来の習慣を保持し、又族長制度が強くあつて、異族の女と婚することほ許されぬ。ロシア人に征服されて以来、旧来の蠻性を失ひ、勤勉な民族となつたが、尚ほ犠牲的精神に富み、外客を優遇し、友情を重んじ、礼義を正しくし、自尊觀念の強い等の美德を有してゐる。

カカク人はキルギス族の一派であり、遊牧を主とし、重ねて農業を営み、部族別にオルダと稱する同盟を組織してゐる。カカラ共和国内のカラカルパク自治州に住むカラカルパク人はウズベク族に属し、文化精々

進み、農業に従事してゐる。

タゲク族は概ね牧畜業を営み、羊、山羊、牛、馬、驢馬、駱駝等を多数に飼養してゐる。

次に中央アジアの諸族は之を合計しても千六百五十六万に止まり、其の占むる広大なる面積に對すれば、其の密度は甚だ粗である。尙ほロシア人に依る此の地方の征服以來、特に近時に至つては、ロシア人の移民が多く入り込み、その数は地方によりては屢々土着民より多くなつてゐる。彼等は、主として南ロシアの黒土地帯諸地方より出たウクライナ人で、之に次いで大口シヤ人も植民したのである。此等移民は農耕を主としたので、自然その感化をうけて遊牧の土民も定着するやうになつたと云はれる。

第五節 シベリヤの民族事情

第一款 概説

今日シベリヤと云ふ行政区劃は、曾てのシベリヤはトルキスタンを除いて悉くロシア社会主義聯邦ソヴェット共和國の一部に編入されてしまつた。即ち曾ての植民地は本國そのものとなつたのであるが、曾ては單なる原料生産地であり、穀倉と肉倉との役割をしか持たなかつたシベリヤは、兩三次に亘る五ヶ年計画の遂行により、一轉して所在に重工業を持ち、軍事の據拠を持つ新しい世界を現出したのである。然し斯く行政上の名稱を失つたとは云へ、又近代化したとは云へ、シベリヤのもつ地理的性格及びここに住む諸多の民族のもつ民族的性格は——ロシア人を始めとするヨーロッパ人が年と共に多く来住して、自然その影響を蒙るものは当然であるが——簡単に之を一変し得ないことは云ふ迄もない。シベリヤの民族は周知の如く、甚だ多種に止り、或る學者の數ふる所

に依れば、土民だけでも二十二種に及び、之にヨーロッパ諸民族が十一種、更に東洋の文化民族たる支那人及朝鮮人の移住者を加ふれば三十六種となり、の外雜種を加ふると合計四十三種に達すると云ふ。然しなから之を大まかな人種的系統によつて大別すれば、

- (一) 古代アジア族（十種族に分る）
- (二) ツンゲース族（細かい部族に再分される）
- (三) トルコ族（マクート族等）
- (四) 蒙古族（ブリヤート族）
- (五) スラヴ族（ロシア人、ウクライナ人）
- (六) 極東文化族（支那人、朝鮮人）
- (七) セム族（ユダヤ人）
- (八) 其他

である。

此等の或者は原住民族であり、或者は外来民族であることは云ふ迄も

ない。而して諸民族が渴望して止まらなかつた争奪の地は、シベリヤ南部の森林ステツプ及びステツプの依地方である。この中原を望んで侵入したアジア諸族は、何れも狩獵民族か、遊牧民族であつて、獲物を追ふか又は次に系たる他の強力な民族に追はれて広大なシベリヤに散布して行き、或はウラル山脈とカスピ海の間の所謂「民族の門」或は「歐洲の門」を通過してヨーロッパに侵入したのである。

斯くして最初の渡来者たる古代アジア人は最北に退き、やがてツングース族、蒙古族、トルコ族等が相次いで来住し、それ「バ」の勢力に依りて、それ「バ」の位置を占めることになつた。最後の渡来者たるスラブ族は、森林ステツプ上を西から東に貫通して、先住諸民族を南北に両断してしまつたのである。

以上の諸民族は、天々民族的特性を保持しながらも、占據せる地域の自然的特性と結合して、その地域に特有の生活形態をとらざるを得なかつた。最北のツンドラ地帯では遊牧、狩獵、漁撈の混合せる形態をと

、中帯の原生林（タイガ）地方では狩獵、ステツプ地帯では農牧、沙漠では遊牧と水利農が、更に極東の沿海地方では主として漁撈がそれ／＼営まれる如きである。

スラブの先住民に対する征服が成り、最後にソヴェツト政權がシベリヤを支配するに至つて、諸民族の自治が原則として尊重せられ、有力なる諸族即ち「ヤクート」「ブリヤート」「モンゴル」の如きは民族自治共和國を、「ハツカス」「オイロート」の如きは民族自治州を形成してゐるのである。此の外に難多な弱小原始民族は民族管区制の下に保護を加へられて居り、更にスラフ以外の文化民族にはユダヤ人と朝鮮人及支那人が相当に存し、ユダヤ人は黒龍江畔にユダヤ人自治州を依つてゐる。尚一九三九年調査のシベリヤ地方の人口（カザクスタンを含む）を掲ぐれば次の如くである。

*

地方	ウラル地方			地方	都市人口	農村人口	全人口
	チユカロフ州	キエリヤビンスク州	バシユキール共和国				
スガエドロフスク州	一、五〇八、五〇七	一、〇〇三、六六八	二、五一一、一七五	右ウラル地方合計	三、六〇〇、九八八	六、五三五、八六二	一〇、一三六、八五〇
オムスク州	一、四九五、二九四	一、八七一、三〇九	二、三六六、六〇三	カザクスタン	一、七〇六、一五〇	四、四三九、七八七	六、一四五、九三七
ノボシビルスク州	一、六五五、三六八	二、三六七、三〇三	四、〇二二、六七一	シベリヤ	四、〇四、四四二	三、一一五、六三三	七、一五九、〇七五
アルタイ地方	四、〇四、四四二	三、一一五、六三三	七、一五九、〇七五				

地 方	マ リ ム			
	イ ル ク ツ ク 州	マ ク ー ノ ク 英 和 國	千 夕 州	フ リ ヤ ー ト ・ モ ン ゴ リ ヤ 英 和 國
都 市 人 口	五五、四一九	七、八、六六七	五、一、〇、九〇〇	一、六、三、四二五
農 村 人 口	一、三、八、八、五八三	七、二、五、〇二〇	六、四、八、五七八	三、七、八、七八五
全 人 口	一、九、四、〇、〇〇二	一、二、八、六、六九六	一、一、五、九、四七八	五、四、二、一七〇
(三) 右シベリヤ合計	四、四、二、一、一九〇	九、八、一、七、〇五八	一、四、一、二、三、八、二、四八	
(四) 極 東(大約)	七、五、〇、〇〇〇	二、二、五、〇、〇〇〇	三、〇、〇〇〇、〇〇〇	
以上四地域總計	一、〇、四、七、八、三、三二八	二、三、三、〇、二、四、七、〇、七	三、三、三、五、二、一、〇、三五	

第二款 原住民族

シベリヤの諸民族を「原住諸民族」と「外來諸民族」の兩者に區別するならば、前者に屬するものには古代アジア族、ツングース族、マクリト族、ブリヤート族が擧げられ、ロシア人の東侵以前には、東部シベリヤ一帯がその天地であつたのである。「外來諸民族」と云ふのは、十七世紀の初頭ロシア人が此の地方に侵入して以來の移住者であつて、ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人など、主に歐亞から移住したスラブ諸族を始め、エゲヤ人その他、及アジアの南方から來た支那人、朝鮮人等を目指すのである。此等原住民族は所謂「自然民族」へ古代アジア族、ツングース族一乃至は「半文化民族」へマクリト族、ブリヤート族一に屬し、外來諸族に比して著しく文化の程度が低い。殊に殆んど農耕を営まず、收鹿、狩獵及漁撈を以て主たる生業とする古代アジア族、ツングース族などは、從來極めて未開な、原始的生活を続けて來たのであつて

、帝政時代には概ね衰減の過程を辿つてゐるのである。ヤクート族及びアリヤート族は之に比すれば数段進んで居り、古くより牧畜を営み、帝政時代既に「遊牧的半文化民族」から、「定住的半文化民族」への過程を辿り、農耕の飛達、商品貨幣経済の参透及びロシア化の影響によつて、部分的にはかなり近代化してゐた。今日ソヴェト政権下に於て彼等の文化水準は更に高まり、漸次「文化民族」に化しようとしてゐると云ふ。最先に居住した原住民は、過去に於て他の有力な種族に圧迫されて北へ北へと退避し、今日ではシベリヤでも最も北東隅に當る一帯の地域、即ちベリリング海及北氷洋に臨む地域にとが込められ（エスリモト族、チエチク族）、その一部はカムチヤツカ半島に（コリヤク及カムチマカール族）、或は内陸のコルイマ海と流に（ユカギル族）、又樺太島、及アムール河口に（ガリヤーク族）、莫々と分布してゐる。然し此等の数を合計しても、現在漸く三四万程度の人口に過ぎずその生業は主として海獣や魚類の捕獲或は狩猟である。ソ聯邦は北の地方民族管区とな

して、此等弱小原始民族を保護してゐる。

ツンギース族はシベリアには漸く七万位しか居住して居ないに拘らず、その分布地域は驚くべき広大な範圍に亘つてゐる。即ち西はエニセイ河の流域から、東はオホツク海の沿岸まで、北は北氷洋の沿岸地方から南はアムトル河に至る一帯の地域に、文字通りの散在してゐるが、隔たぐはな廣がらつてゐる。尤もバイカル地方其他南部の鉄道沿線地方は、ロシヤ人やブリヤート人等に占められて居り、こゝではツンギース族の莫々たる「島」を見るのみである。シベリヤに於てもツンギース族の最も密集してゐる本據的地方は、エニセイ河の右支流たるツンギースカ河の流域である。

ヤクート族の基本的分布地域は、龐大なツンギース族の分布地域を、其中央部に於てレナ河を中心として大幅に切斷してゐるヤクートヤである。ヤクート族の分布は、東はユルンマ河に達し、西はハタンガ河の西に及んで居り、その人口は現在三〇万以上と認められるが、九割八分ま

でがヤクイーヤに集中して居り、ヤクイート自治共和国を形成してゐる。
ブリヤート族はバイカル湖を圍む一帯の地域、所謂ブリヤートヤと呼
ばれる地方に住む。

ソ聯領に住むブリヤート族の人口は約三十万と稱せられ、大部分は此
の地方に集中して、現在ブリヤート、モンゴル自治共和国を形成してゐ
るが、一部は隣接のウダ州、イルクーツク州に散在し、又ソ聯領外では
外蒙に一万六千、滿洲國に約一万の居住者があると云はれる。

第三款 スラバ民族

スラバ族が最初にシベリヤへ侵入したのは夙に十二世紀の頃と云はれ
る。始めノガゴロドの商人達が武装してウラル以北の地を侵し、土民を

掠奪したり、貢物を徴したりしてゐたが、ノヴゴロトの没落後はモスクワの統治下に移つた。然るに十三世紀末にはシベリヤの中原に現はれた蒙古族は、丁歐洲の門しを通過してロシアへ侵入し、^{チンギス}政変に跨る大帝國を建設して、ロシアの封建諸侯をその傘下に（^{チンギス}鉄案汗國の支配下）に置き、却てスラブ族の蒙古化が行はれ、カザクなる特殊民族成長の素地が依られた。十五世紀初頭にキプチャク汗國が分裂し始め、蒙古族の支配が稀薄となるに従ひ、小領主は漸次大領主に統一され、大ノヴゴロド、モスクワ王國の出現、延いてロシア帝國の出現に迄發展したのである。此の間ノヴゴロドの冒險商人達は漸次ドビナ河に沿ふてタイカ中に進出し、当時の最重要商品であつた銀を手中に收め、次でペナヨラ河口から北極海に出で、ツンドラを通過してオビ河に達し、シベリヤタイカの土民との間に掠奪的な毛皮取引を行つた。殊にイワン雷帝の時代へ十六世紀中葉に至り、西政との通商が漸く盛となるにつれて、毛皮其の他シベリヤの珍貴な天然資源が注目をうけ、ロシア商人は續々とシベリヤ

目かけて進出したのである。当時モスクワ公國は隆々たる勃興の氣運にあり、既に蒙古タタール汗の霸絆を脱しつゝあつたが、イワン雷帝が南方カスピ海に通ずるヴォルガ水路の獲得をめざして決然カザン汗國の攻略を開始したのを端緒として、間もなくウラル、ヴォルガ一帯の地を征服し、シベリヤ東侵の基礎は固められた。

ロシア人のシベリヤ進出に就て逸すべからざるはヴォルガドの富商ストロコフ家である。本来塩業を以て富をなしたのであるが、毛皮と銀とを大々的に手に入れようと欲して、モスクワ公の許可を得てシベリヤに道路を開き、都市を建設する計画を立て、大群りたシベリヤ侵入を試みたのである。その際利用されたのが有名なカザクの匪賊團長エルプーリである。カザクは別記の通り中亞からドン河下流に流れ込んぶトルコ族と蒙古族の交流に、スラブの血が参加したものであるが、十六世紀以後にはヴォルガ内郡みらの遊牧農民を主流とするやうになつた。彼等は狩獵と遊牧とを生業としてゐたが、タタールの不断の襲撃のために全生活を

吾人と戦闘に打込んで、勇敵を戦闘力を貯へる様になつた。之がストロ
カノフの利用するところとなり、又彼等自身カシベリヤに發展すること
にもなつた。斯くてストロカノフ家の遠征の結果、十六世紀の末葉には
早くも西シベリヤの全部が攻略せられ、土地はモスクワ皇帝領に獻じせ
られ、土民には毛皮税が課せられた。一五八五年のキエメン、八七年の
トボリスク、九六年のナリム、一六〇四年のトムスクの各城塞の建設は
、ロシヤ人東侵の一里塚であり、又足場となつた。更に十七世紀に入つ
てもカガツクの東進は止まず、初頭には早くも東部シベリヤを席捲し、
一六一八年にはエニセイスク、二八年にクラスノヤルスクを建設し、三
二年には北東ヤクーツクの城塞が築造された。ツンゲース族、ヤクーツ
族、ブリヤート族などか、ロシヤの武力によつて征服され始めたのは二
の当時である。カバイカルを侵したカガツク部隊は餘勢を駆つて蒙古に
まで進出し、更に北はヤクーツキヤ、北氷洋の沿岸からカムチヤツカに至
る迄ロシヤの國旗は一步一步進んで行つた。一六四六年にはボヤルコフ

がオホーツク海に達し、四八年にはデシネフがベーリレグ海峡を横断して北氷洋から太平洋に出るに至った。アムール地方、沿海洲地方は、ずつと後の係合であるが、とも角十七世紀末までにシベリヤの大部分がロシアの領有に皈したのである。かくて領土は拡大し、毛皮の徴税は増加した。一方では軍隊や役人に支給する食料品の輸送は政府の負擔を重くするのみであつた。シベリヤで穀物を得るために流刑囚や各種の農業移民を送つたが、當時尙ほ殆ど効果をあぐることはできなかつた。

黒龍江地方の略取に就ては、始め清朝と衝突したため、一時之を放棄して、ロシア人は道を代へてカムチヤツカを飛見し、コリマールクと戦ひ、ついで一七〇七年には完全に之を占領した。一七三〇年代に行はれたベーリレグ等の数度の探險の結果は、豊富な海獸、魚類及最良の黒貂を飛見し、十八世紀末には水産物と毛皮の集散する無数の商事会社が生れ、一七九八年此等はロシア皇帝保護の下に集中されて、独占的なる露米会社が建立された。又一時放棄されたかに見えた黒龍江沿岸地方占領計画

は、國際情勢の變化、清朝の突か衰頽と共に再燃し、遂に清朝を屈服せしめて、一八六〇年の北京條約に依り、ウスリー河以東の現在の國境線が、確定されるに至つた。

斯くして全シベリヤを完全に占領した帝政ロシアは更に南下して滿洲、朝鮮に羽翼を延ばすに至つたが、その結果は日露戦争の勃発となつて、圧くたき南下は茲に完全に阻止にせられるに至つた。

帝政ロシアのシベリヤ植民地経略は、異種族に対する徹底的な抑圧と掠取とによつて一貫された。征服されたシベリヤの諸民は、ツプーに依り法外に高率税（特に毛皮税）を課せられ、又官吏を始め自由な植民者より頻りに掠奪され、或いは半ば強奪的な「取引」を己むなくされた。殊に十八世紀末には土人との「取引」が大部分官吏の手に移り、行政權と商業的掠取とを一手に掌握した官吏の收奪行爲は益々土民の零落を甚しからしめた。斯くの如き一切の生活手段を取とぐる暴力的掠奪、大量的虐殺、土地の没收及追放は、シベリヤで「ロシア病」と呼ばれた。

柳新の蔓延や、ウオツカの害毒と相俟つて、シベリヤの弱小諸民族を急速に衰滅の淵に追いつめたのである。ロシア人の少い地方では相当の自然増加を示してゐる異種族も、ロシア人の町村の近接地では著しく死亡率が高くなつた。

異種族よりの收奪がなされ、或はや何物も残されざるに及んで、ロシアのシベリヤ政策は茲に一變して移民事業の發達に重点をおくことになつた。即ち初期の移民は政治犯や國教反対者の流刑、此等に混る若干の自由移民（その多くは農奴制の重圧からの逃避者、苛酷な募兵制度の忌避者、或は長子相続制に累されたる以男以下の離村者であつた）であつて、官吏が介與された都市近傍の農場、カザツク分與地の農場等の周圍に聚つて村落を形成したのである。然るに十九世紀の八十年代から政府によつて積極的に農業移民を送り出される様になつた。殊に政露方面に於ける相對的土地不足、農村人口過剰が顯著となり、農業問題が漸やく深刻化せんとするに及び、ロシア政府はシベリヤへの農業移民を大

いに奨励した。先づ西部シベリヤに大量の移民が送られたが、やがてシベリヤ鉄道の開通するに及び、特に北極移民が増加し、又東漸していった。西部シベリヤでは既に異種族は衰減するか、又は北方のツンドラ地帯に移動してゐるので、さしたる影響を與へなかつたが、東部シベリヤ特にバイカル地方に於てはバリヤート人、ツングース人等が尚ほ多数居住してゐるので、ロシア農業移民を入植させるには、彼等の土地を収奪せざるを得なかつた。爾ちバリヤート人は放牧の土地を失ひ、耕作農民に強制され、その固有の牧畜経済は破壊された。尤も官吏や僧侶等を除けばロシア人は個人としては概して民族的偏見は甚だ少なく、異民族との混住によつても別段複雑な葛藤を起す様な事は稀であつた。中にはマクート族に混住する一部のロシア人の如く、すっかり異民族に同化してゐたものすら存する。

斯くしてロシア人は、シベリヤ、極東における政治産業、交通の中心地、云々換へれば要所要所を悉く占めてゐるのであつて、今や總人口三

千数百万の中圧倒的多数を占めるに至り、而も自然的條件に恵まれた南部の地帯にかなり稠密に集中してゐるのである。即ちイルクーツク方面からサバイカルを通つてアムール河に走り、南下してウラゴオストツクに至る鉄道線路に沿ふ一帯の細長い地域には、殆んど間断なくロシア人が分布して居り、東に於てはアムール河下流地方から樺太へ、更にカムチマツカへと、その分布地域は莫々と飛び、遂には北氷洋に及んで居る。西に於てはシナ河に沿ふてヤクーツク乃至それ以北にも及び、政治上或いは資源の開発と多少とも重要な意義をもつ地方で、ロシア人の足跡の及んでゐない地帯はない。而も總ての都市は悉くロシア人の都市であると言つてよいのである。革命以後、殊に最近年、極東に於ける國防經濟の強化、軍備の充実が愈々本格的となつて、ロシア人の移民及び赤軍の數も益々増加し、ロシア人の比重は更に増大してゐるのである。アリヤート及ヤクーツク自治共和國を除くバイカル以東の地方一々々州、ハバロフスク地方、沿海地方のみでも今日二百五十万以上の口

シヤ人がゐるものと推定されてゐる。

以上はロシヤ人、即ち帝政時代の大口シヤ人についてがあるが、次にウクライナ人は主に沿海地方に於て、農業に従事して居り、ウスリー地方、ウスリー河右支流の下流地域、その他海岸線に沿ふ一帯の地方が、その分布地域である。一九二六年の國勢調査によれば所謂、極東地方のウクライナ人は約三十二万人であつたが、現在の数は詳しく之を知ることは出来ない。但しその数は餘り増加してゐないものと認められる。

白ロシヤ人も主として沿海地方、ハバロフスク地方の各地に住み、殊に森林地帯に散在してゐる。一九二六年当時極東におけるその人口は約四万と言はれ、主に農業を営んでゐたが、現在の状態は之亦詳しく知ることを得ない。

第四款 其他の外來民族——ユタヤ人、朝鮮人

支那人——

第一エダヤ人

ソ聯邦内には古くからエダヤ人が多数居住し、帝政時代に極端な圧迫を加へられてゐたことは有名である。現在その数は約四百六十万と言はれてゐるが、主として政露方面に居住し、又西部國境辺、旧ポーランド、バルト地方の各都市に集團して居り、シベリヤでは以前からザバイカ地方に若干住んでゐるに止まる。

エダヤ人は現在ドイツを始め中西部ヨーロッパ諸國より驅逐せられ、世界の涯々を遍歴して安住の地を求めようとしてゐるか、ソがエート聯邦に於ては民族自治の趣旨に依り、エダヤ人の自治を許す事とし、近年極東のアムール河に沿ふビロビダン地方に新しく「ユタヤ人自治州」が建設された。右のエダヤ人自治州には、主として政露方面から移民

として流入して来たのであるが、その移民計画は予定通り進行してゐる。いものゝ如く、現在約十萬程度の人口を数ふるに止まつてゐる。主として農業が営まれ、穀物、牧草、其他苹果、桃、日本柿の産があり、又各種の軽工業も建設されてゐる。

第二 朝鮮人

朝鮮人は十九世紀後半から農業移民としてウスリ河畔の國境に近い土地に入り込み、尔来沿海州の各地に廣がっていった。一九二六年当時極東に於ける朝鮮人は約九萬三千であつたが、漸次増加して三十七年頃には十七萬に達した。然るにその大部分は如何なる動機に依るものか、一九三七年頃ソ聯政府によつて中央アジアの方面に強制的に移住せしめられ、沙漠の水田化に當らしめられてゐると云ふ。現在蘇聯邦内の朝鮮人の数は約二十萬である。

第三 支那人

支那人は主として十九世紀の禾葉から苦カとしてロシア領極東地方に移住し、一九二六年には極東地方に約二萬の人口を数へてゐたが、漸次

増加して一時七万以上に達した。その大部分が沿海地方、ハバロフスク地方の工業中心地にあるものゝ如く、そのウスリー河畔に居住した者は朝鮮人と同様先年中央アジアの沙漠に移されて、沙漠の水田化に従事させられてゐる。但し現在ソ連邦内に止まる支那人の数は朝鮮人に比して遙かに少く、總數三万に足らない如くである。

第六節 人口事情

第一款 總人口の趨勢

ソカエート聯邦は全世界陸地面積の大分の一を占め、人口密度こそ甚だ粗であるが、總人口に於ては、支那、印度に並ぐ大量を擁し、世界第三位を占めてゐる。帝政末期以来最近までの總人口及一八九七年を一〇とせる指數を掲ぐれば次の如くである。

一八九七年二月九日調査	一〇六、四三二	千人	一〇〇
一九一四年一月一日推定	一三九、三一三		一三一
一九一八年一月一日推定	一四二、五八〇		一三四
一九二〇年調査	一三四、二〇〇		一二六
一九二六年調査	一四七、〇二八		一三八
一九二八年一月一日推定	一五〇、四二七		一四一

一九二九年一月一日推定	一五四、二八八	千人	一四五
一九三〇年一月一日推定	一五七、四四四		一四八
一九三一年一月一日推定	一六〇、四三〇		一五一
一九三二年一月一日推定	一六三、一六六		一五三
一九三三年一月一日推定	一六五、七四八		一五六
一九三四年一月一日推定	一六八、〇〇〇		一五八
一九三七年示	一六九、〇〇〇		一五九
一九三九年	一七〇、四六七		一六〇

右は調査人口と推定人口とを並列したものであり、又地域の返還も考慮に加へられてゐるか、どうかも疑しいので、これだけの確実性があるか因より議論の餘地があるか、もし大勢を察するに差支えないものとするれば、ソ聯邦の人口は戦争、内乱及飢餓の時代に一時数百万の人口を衰つて、總人口に於て絶対的減少を示したにも拘はらず爾後漸次恢復して十九世紀の末から約四十年の間に約七千万、即ち大割の人口を増加して

るることを知るのである。而して一九二〇年以前と姑く除き、その趨勢を多少分析的に觀察すれば、其の自然増加の趨勢が著しく低下傾向にあることを知るのである。

由來ソ聯邦は帝政時代以來、多産國として有名であり、其の出生率は西政諸國と同日の數では反かつた。勿論死亡率も甚だ高かつたが、その自然増加率は世界にも冠たるものであつた。プーロークのポロコボウイテ教壇がソ聯邦の資料から得た出生率及死亡率並に自然増加率を示せば次の如くである。

ソ聯邦政露地方	出生	死亡	自然増加
一九一一年	四五、五	二八、六	一六、九
一九一三年	四二、九	二二、〇	二〇、九
一九二四年	四四、二	二二、九	二一、三
一九二五年	四三、五	一九、九	二三、六
一九二六年	四二、七	二一、〇	二一、七

一九二八年

四二、一

一八、一

二四、〇

▽ 聯邦全体

一九二六

四四、〇

二〇、三

二三、七

一九三〇

三九、二

二〇、四

一八、八

然し乍ら此比類なき高自然増加率も、一九三〇年代から漸次低下の傾向に移り、曾ては三百万の自然増加を見、年々芬蘭一國分の人口が殖え、ると誇稱してゐたのが、第一次五箇年計画、第二次五ヶ年計画の時代を通じて著しく落調を呈するに至つたのである。今二八年以後年初に於ける人口趨勢を見るに次の如くである。

年次	年増加数	増加率
一九二八年	三、七六九 <small>千人</small>	二五、一 <small>千人に對し</small>
一九二九年	三、二四八	二一、一
一九三〇年	二、九八六	一八、八
一九三一年	二、七三六	一七、一

十

十

十

一九三二年

二、五一五、

一五、四

一九三三年

二、五八二

一五、六

一九三四年以後は精数を缺いてゐるが、その推定数の増加及びその割合は既掲の如く著しく低少である。斯く自然増加数の逆減及率の低下の原因は、主としてこの期間に施行された人口の都市集中、即ち工業化にあるものと考へられる。即ち一九二八年から一九三二年迄に約千二百万人が農村より都市に流入して居り、此の便向は其の後に於て更に顯著であると思へられるが、此の龐大なる人口の離村向都は当然出生率に影響を與へたに相違ないのである。蓋し都市に於ては死亡率は農村より低いから出生率はそれ以上に農村よりも低く、従つて自然増加率も農村より著しく低いことは、世界的共通の事実であるからである。殊にソヴェット聯邦の如く急速に都市化、工業化を強行した國に於ては、住宅問題生活資料の問題、婦人の労働進出問題等が、結婚を阻害し、出産を阻害するの條件となつたと認められる。之と共に一時自由放任されたために起つた

家庭生活の紊乱、頻々たる離婚、公然たる墮胎等が、人口増加の悪影響を與へたことは想像するに難くない。

第二款 都鄙別人口

ソ聯邦は周知の如く世界の最大農業國であり、最近急速な工業化都市化が行なはれてゐるけれども、尚國民の圧倒的部分が農村にあることば云ふ違もない。今都鄙別の人口割合を見れば次の如くである。

調査日	全人口 (千人)	都市人口 (千人)	農村人口 (千人)	都市人口 (%)	農村人口 (%)
一九二九年七月一日の調査	一四七、〇二七、九	二五、七八三、四	一二一、二四四、五	一七、五四	八二、四六
一九二九年三月一日の推定	一五四、二八七、七	二七、六三〇、二	一二六、六五七、五	一七、九一	八二、〇九
一九三三年三月一日の推定	一六五、七四八、四	三九、七三九、二	一二六、〇〇九、二	二三、九八	七六、〇二
一九三四年三月一日の推定	一六八、〇〇〇、〇	四〇、三〇〇、〇	一二七、七〇〇、〇	二三、九八	七六、〇二

一九三九年一月
の第三次調査

一七〇、四六七、〇

五五、九〇九、九

一一四、五五七、三

三二、八〇

六七、二〇

斯くの如く都市人口の割合は、一九二六年の一七、九%から一九三三年の二四%、一九三九年の三二、八%と躍進し、一九二六年以後の十二年間に於て人口五万以上の都市は八十五から百七十四に増加し、都市人口は二倍以上に増大したのである。都市人口が倍加するのは國々と時代とによつて異なるが、米國は三十年、ドイツは四十年、英は共に七十年を要したと云はれる。我國の市部人口には大正九年に約一千万であつたが、昭和十年には二千二百六十万となり、又大正十四年千二百九十万だつたのか、昭和十五年には二千七百六十万となつて、夫々十五ヶ年に倍加してゐる。然るにソウエツト聯邦に於ては、十二ヶ年を以て倍加したのであつて、その急激なること驚くべく、シベリヤの曠原に於てさへも「男女子快達が一夜にして一つの都市を造り上げてしまつた」のである。今該みのロシヤ共和國の都鄙別人口を州別或は地方別に掲げて見よう。

共和 國 地 方 州	人 口 数		
	都 市	農 村	計
0. シヤ 共 和 國	36,658,008	72,620,606	109,278,614
1. ア ル カ イ 地 方	404,441	2,115,643	2,520,084
内 キ イ ロ ー ト 自 治 州	23,573	137,858	161,431
2. フ ル ヘ ヲ ヴ ェ リ ス コ 州	435,290	763,888	1,199,178
3. バ ヲ キ ル 自 治 共 和 國	531,096	2,613,617	3,144,713
4. ナリヤート、モソソゴール自治共和国	163,425	378,745	542,170
5. ヲ ナ コ コ ヌ ト 州	284,981	1,377,277	1,662,258
6. ナ ナ オ ロ ネ ヲ 州	657,676	2,893,333	3,551,009
7. ゴ リ キ ー 州	1,218,900	2,657,374	3,876,274
8. ナ ナ ス タ ン 自 治 共 和 國	196,480	734,047	930,527
9. イ ヲ フ 州	1,168,395	1,481,988	2,650,383
10. イ ル ガ ー ツ 州	561,676	725,020	1,286,696

11. ガンビルギンニバルカ自治共和国	84,662	274,574	359,236
12. カリニーニ州	702,704	2,508,735	3,211,439
13. カルムイク自治共和国	35,023	185,700	220,723
14. カレリ自治共和国	150,440	318,705	469,145
15. キーロ州	328,649	1,897,460	2,226,109
16. コミ自治共和国	29,163	289,806	318,969
17. クラスノダール地方	764,844	2,408,041	3,172,885
18. クラシハイ自治州	67,302	174,471	241,773
19. クラスノヤルスク地方	551,419	1,388,583	1,940,002
19. バツカス自治州	109,416	161,239	270,655
19. カリム自治共和国	585,701	541,123	1,126,824
20. クイブイェフ州	773,153	1,994,409	2,767,562
21. カーメルスク州	286,215	2,910,599	3,196,814
22. レニヌカ州	4,119,230	2,315,846	6,435,076

共和国地方州	人口			計
	都	市	村	
23. リー自治共和国	75,893	503,583	579,456	
24. モルドバ自治共和国	82,486	1,106,112	1,188,598	
25. エヌカウ州	6,268,331	2,650,058	8,918,389	
26. ムルラヌク州	245,371	45,817	891,188	
27. 獨逸人沿ムルガ自治共和国	131,647	473,895	605,542	
28. ノギキシコロヌク州	1,655,368	2,367,303	4,022,671	
29. ナムヌク州	495,294	1,871,309	2,366,603	
30. ホルビヨニギン地方	394,469	1,554,871	1,949,340	
内 カラヤエフ自治州	10,623	139,302	149,925	
ナエルクヌ自治州	28,646	63,888	92,534	
31. キルウク州	693,066	2,789,322	3,482,388	
32. ノルゼン州	283,280	1,425,376	1,708,656	

33	ノルウェー	州	1,522,804	1,259,362	2,082,166
34	沿岸	地方	464,509	442,711	907,220
35	ロンドン	地方	1,263,097	1,630,941	2,894,038
36	リヤ	州	215,797	2,047,076	2,265,873
37	サマ	州	665,763	1,133,042	1,798,505
38	スウェーデン	州	1,508,507	1,003,668	2,512,175
39	北極圏	自治共和国	154,851	174,034	328,785
40	スウェーデン	州	447,996	2,242,783	2,690,779
41	スターリン	州	892,757	1,396,292	2,289,049
42	タリ	州	281,024	1,601,115	1,882,139
43	ソビエト	自治共和国	621,859	2,297,564	2,919,423
44	トウ	州	711,240	1,338,710	2,049,950
45	カト	自治共和国	320,720	899,287	1,220,007
46	ハルビン	地方	647,653	783,222	1,430,875

共和國地方州	人口			計
	都市	農村		
内 務 省 人 自 治 州	71,634	36,785	108,419	
47 十 五 八 十 九 十 州	1,181,871	1,621,078	2,802,949	
48 十 五 八 十 九 十 州	198,669	498,739	697,408	
49 十 五 八 十 九 十 州	510,900	648,578	1,159,478	
50 十 五 八 十 九 十 州	379,514	1,297,499	1,677,013	
51 十 五 八 十 九 十 州	131,533	946,081	1,077,614	
52 十 五 八 十 九 十 州	796,529	1,474,778	2,271,307	
53 十 五 八 十 九 十 州	78,667	321,877	400,544	

(警 視 庁 資 料)

次に一九三九年に於て人口五万以上を数へた百七十四都市につき、一九二六年の人口に対する増加率を掲げ、如何にその膨脹が急激であるかを見よう。

人口5万以上の都市に就き1926年
と比較したる1939年の人口数

都市名	人口		1939年の1926 年に対する%
	1926年:2月17日現在	1939年1月17日現在	
1 毛 沢 7. 7	2,029,425	4,137,018	203.9
2 L ニ ヨ カ ー ド	1,690,065	3,191,304	188.8
3 井 上 7	513,637	846,293	164.8
4 ハ リ コ 7	417,342	833,432	199.7
5 バ 7	453,333	809,347	178.5
6 コ ー 7	222,356	644,116	289.7
7 木 野 ヲ 7	420,862	604,223	143.6
8 タ シ ヲ 7	323,613	585,005	180.8
9 木 野 ヲ 7	294,044	519,175	176.6
10 ロ ス ト 7	308,103	510,253	165.6
11 木 野 ヲ 7	236,717	500,662	211.5

郡市名	人		口		1939年9/1926年に対する %
	1926年/2月17日現在	1939年/1月1日現在	1926年/2月17日現在	1939年/1月1日現在	
12 スターリーヴ	104,230	462,395	104,230	462,395	265.4
13 スターリーヴグレード	151,490	445,476	151,490	445,476	294.1
14 スタールボウスク	140,300	425,544	140,300	425,544	303.3
15 ノボシビリスク	120,128	405,589	120,128	405,589	337.6
16 カサニ	179,023	401,665	179,023	401,665	244.4
17 カウイグレイズ	175,636	390,267	175,636	390,267	222.2
18 カラス	219,547	375,860	219,547	375,860	171.2
19 ヴォロネージュ	121,612	326,836	121,612	326,836	268.7
20 ヤロスクラグリ	114,277	298,065	114,277	298,065	260.8
21 サホロージュ	55,744	289,188	55,744	289,188	518.8
22 ノヴォノボ	111,460	285,069	111,460	285,069	255.8
23 プルハツクリスク	78,774	281,071	78,774	281,071	366.1
24 ノボスク	161,684	280,716	161,684	280,716	173.6

25	ト	エ	リ	ヤ	ビ	シ	ク	59,307	293,127	460,5
26	ト	—	—	—	—	—	—	155,005	272,403	175,7
27	シ	ル	ル	ル	ル	ル	ル	119,976	255,196	213,1
28	フ	ク	シ	ト	ラ	ハ	ニ	184,301	253,655	137,6
29	ク	—	—	—	—	—	—	98,537	245,863	249,5
30	シ	ル	ク	シ	—	—	—	108,129	243,380	225,1
31	ク	シ	ク	シ	ク	ク	ク	79,421	240,145	302,4
32	シ	ル	シ	ク	ク	ク	ク	151,803	238,772	181,2
33	フ	ル	ク	ク	ク	ク	ク	45,395	230,528	507,8
34	ク	シ	ク	—	ホ	リ	リ	63,920	222,427	348,0
35	カ	リ	—	—	ニ	シ	シ	108,413	216,181	199,4
36	ヤ	ホ	ロ	シ	—	ク	ク	71,765	213,007	296,8
37	ク	シ	ク	ク	ク	ク	ク	107,980	206,432	191,2

郡 市 名	人 口		1939年1926年 に對する %
	1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	
18 宇 志 市	161,843	203,946	126.0
39 土 佐 市	64,613	200,031	309.6
40 八 幡 市	52,045	199,364	383.1
41 宇 治 市	38,228	197,621	517.0
42 宇 治 市	72,261	189,999	262.9
43 宇 治 市	86,444	188,808	218.4
44 宇 治 市	63,221	175,740	278.0
45 宇 治 市	123,283	172,925	140.3
46 宇 治 市	972,087	172,468	177.6
47 宇 治 市	3,894	169,528	4353.8
48 宇 治 市	98,757	167,424	169.4
49 宇 治 市	104,909	167,108	159.3
50 宇 治 市	—	165,937	—

51	イ ヲ ヲ ヌ 二 一 九 十 一 ル	78,820	159,864	411.8
52	ハ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	91,924	157,145	171.0
53	ス 二 三 四 五 六 七	98,520	156,607	199.5
54	シ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	41,043	155,081	377.9
55	ハ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	73,858	148,129	200.6
56	ハ 二 三 四 五 六 七 八 九	34,150	147,829	432.9
57	ス 二 三 四 五 六 七 八	—	145,870	—
58	シ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	76,409	144,169	166.8
59	ハ 二 三 四 五 六 七	62,097	143,181	230.6
60	シ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	82,213	142,678	163.6
61	ハ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	92,274	141,215	153.0
62	ハ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ	55,547	139,011	250.3
63	ハ 二 三 四 五 六 七 八	105,206	134,346	127.7
64	ハ 二 三 四 五 六 七 八	21,726	132,978	612.1

190X

都 市 名	人 口		1939年の1926 年に対する、%
	1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	
65 本 野 市	91,984	130,305	141.7
66 宇 呂 市	28,918	127,172	440.5
67 本 庄 市 (本庄市) 本庄市	78,346	126,580	162.3
68 宇 呂 市	51,593	121,285	245.3
69 宇 呂 市	72,256	121,205	167.9
70 宇 呂 市	73,732	119,972	164.4
71 宇 呂 市	72,440	119,972	145.5
72 宇 呂 市	8,007	117,054	1338.6
73 本 野 市	74,551	111,946	150.2
74 本 野 市	75,968	110,567	145.5
75 本 野 市	56,871	109,779	193.0
76 本 野 市	23,125	108,693	470.0

77	7003E027R7	10,717	107,227	1000,5
78	7 5 L 4	35,690	104,471	292,7
79	7 9 B 5 E L 4 2 R 7	7,910	103,415	1160,7
80	8 0 4	61,526	102,555	156,7
81	8 1 4 U 4 1 7 R 7	70,130	102,106	145,6
82	8 2 K 2 4 7 3 4 7 (7 3 4 7)	66,467	100,331	150,9
83	8 3 E 7 1 1 7	50,222	99,440	198,0
84	8 4 7 1 2 7 4 7, 7 4 2 7 4 7	62,841	99,329	158,1
85	8 5 7 3 7 4 7 R 7	48,219	99,272	205,9
86	8 6 7 4 7 7 7 7 7 7 7	57,393	98,743	192,1
87	8 7 7 7 7 7 7 7 7	58,801	97,186	165,3
88	8 8 7 7 7 7 7 7 7	50,919	95,357	187,3
89	8 9 7 7 7 7 7 7 7	67,941	95,280	140,2
90	9 0 7 7 7 7 7 7 7	57,976	95,194	164,2

都 市 名	人		1999年1992年 に對する %
	1999年12月17日現在	1999年12月17日現在	
91 ビ ト ミ ー ル	76,678	95,090	124.0
92 コ ヨ ス タ ヲ ヲ 417カ	25,303	95,087	375.8
93 ク ラ ー ト ル ス ク	12,348	93,350	756.0
94 ヲ イ ニ ヲ ヲ	57,990	92,868	160.1
95 ヲ ル ヲ セ	36,610	92,659	253.1
96 ノ ト ロ ノ ヲ ヲ	47,361	91,678	193.6
97 セ ル ト ー ホ	55,891	90,766	162.4
98 ク ル ヲ 4-7	58,832	89,553	152.2
99 カ ル カ	51,565	89,484	173.5
100 オルビヨニキセ(カクタイ 英和園)	24,329	88,246	362.7
101 ヲ リ ヲ ヲ	45,962	87,473	190.3
102 ゼ ハ 4 ヲ カ ー	33,552	86,847	258.8

103	ウキロシ-スリ (フィルボヨニ キ-シ+カ)	58, 640	85, 100	145, 1
104	ユカ ヲ フ	69, 324	84, 665	122, 1
105	ホ ヲル イ ス カ	61, 296	84, 107	164, 0
106	フ ヲ ヲ ヲ ヲ フ ヲ	73, 465	83, 691	113, 9
107	フ ル フ ヲ イ - ル	74, 523	83, 677	112, 3
108	ス リ + ヲ - ヲ	5, 607	82, 540	1472, 1
109	オ ル ヲヨニキ-オ ヲラ-ド	36, 040	82, 331	228, 4
110	ニニスリ、クツキツキ	19, 645	81, 980	417, 3
111	フ . 8 . 1 . ヲ	48, 196	81, 479	169, 0
112	1 ヲ フキヨル カ ス フ	62, 294	81, 286	130, 6
113	1 フ ヲ ヲ ス フ	38, 494	81, 024	210, 6
114	ニ - ス フ	45, 561	80, 190	176, 0
115	ニ . 8 . 1 . フ	23, 711	77, 729	327, 8
116	ニ . 8 . 1 . ヲ	50, 293	77, 879	154, 5

都 市 名	人		1926年 1926 年=対する %
	1926年12月10日現在	1937年1月17日 現在	
117 十 二 ソ カ ヲ	73,640	77,351	105.0
118 天 谷 リ ノ コ ル 天 谷	—	76,207	—
119 X リ ノ 一 ホ リ	25,289	75,735	299.5
120 天 三 谷 カ 一 ソ 天 谷	28,771	75,542	262.6
121 十 二 一 X 二	56,340	75,537	150.1
122 十 二 二 ソ 二 天 谷	34,110	75,378	221.0
123 二 二 二 天 十	30,767	75,139	244.2
124 十 二 十 二 天	21,018	74,185	353.0
125 二 一 ソ 天 二 天	34,345	73,379	213.4
126 天 谷 ノ 天 谷	19,793	72,422	265.9
127 天 谷 二 天 谷 天 谷	30,199	71,079	235.4
128 天 谷 一 天	48,474	70,807	146.1

129	コ ヲ ヲ ヲ リ ス 7	—	70, 740	—
130	カ フ ロ ヲ — ロ 7	35, 344	70, 628	199, 8
131	ロ ヲ / フ ク ロ 7 7 7	15, 624	70, 480	451, 1
132	ミ 4 ヲ リ ヲ 7 7	49, 853	70, 202	140, 8
133	セ ル コ 7	27, 105	69, 728	257, 3
134	レ = フ カ ヲ	17, 224	68, 360	39, 8, 9
135	4 ロ ル = コ 7	42, 313	67, 707	160, 0
136	2 4 コ ヲ 7	35, 234	67, 356	191, 2
137	コ ヲ 7	53, 033	67, 302	126, 9
138	4 フ 4 ミ — ル	26, 584	67, 183	252, 6
139	リ ル ヲ ツ 7	39, 654	66, 761	168, 4
140	ル ル 4 ヲ — 7	21, 439	66, 625	310, 8
141	ル ル 4 ヲ + ヲ — ツ	55, 613	66, 306	119, 2
142	カ フ リ ス 7	36, 352	66, 201	182, 1

都 市 名	人 口		1939年の1926 年に対する %
	1926年12月17日現在	1938年1月17日現在	
143 千エドムホーカ	14, 485	65, 907	455. 0
144 木 ル ス 7	13, 581	65, 799	484. 5
145 才 773ヨシノス 7	33, 346	64, 419	194. 1
146 リ ュ カ リー /	8, 391	64, 332	766. 7
147 ス ム ム 1	44, 213	63, 883	144. 5
148 カカハシニ—カホロキョー 7	32, 022	63, 642	198. 7
149 ベルズニヤー 7	16, 138	63, 575	393. 9
150 ペヤキヨル 7	40, 674	62, 875	154. 6
151 木 シヤカニル	24, 761	62, 723	253. 3
152 クレニユカ 7	9, 978	60, 963	611. 0
153 ム 14ー 7	17, 054	60, 111	352. 5
154 70 ス ュ 7	43, 226	59, 898	138. 6

155	ナヲコニヤユビヤニル	—	58,961	—
156	ナヲコニヤユビヤニル	13,529	57,995	428,7
157	シユニヤ	34,479	57,950	168,1
158	ニユホニリ	14,214	54,841	406,9
159	コホリコトス	29,674	56,340	189,9
160	ナヲコニヤユビヤニル	37,780	55,165	146,0
161	ナヲコニヤユビヤニル	35,272	55,053	156,1
162	ナヲコニヤユビヤニル (英和)	16,040	54,794	341,6
163	ナヲコニヤユビヤニル	13,950	54,739	392,4
164	ナヲコニヤユビヤニル	32,810	54,081	164,8
165	ナヲコニヤユビヤニル	27,996	53,224	190,1
166	ナヲコニヤユビヤニル	39,787	52,055	130,8
167	ナヲコニヤユビヤニル	39,511	51,693	120,8
168	ナヲコニヤユビヤニル	26,408	51,664	195,6

191M

都 市 名	人		1939年01月1926年 12并する%
	1926年12月17日現在	1939年1月10日現在	
169 ｷ ｽ ｯ ｯ ｯ ｯ ｽ ｸ	25,913	51,289	197.9
170 ㇿ ｲ ｼ ｯ ｯ ｯ ｺ	27,279	51,192	187.7
171 ｶ ｸ ｼ ｼ ｽ ｸ	5,367	50,897	947.3
172 ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ	43,239	50,888	117.7
173 ｸ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ	12,425	50,829	409.1
174 ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ ㇿ	46,778	50,382	107.7

第三款 年齢別構成

ソ聯邦政府の発表する人口の年齢別構成は、一般に見らるゝ如く其の區切り方に於て甚だ異つてゐる。今一九二六年及び一九三九年の年齢構成を掲ぐれば次の如くである。但し之は男女合計であり、且つ西ウクライン及び白ロシアの分を除いたものである。

ソ 聯 邦 人 口 の 年 齡 別 構 成

年 令 別	実 数 (單位千人)		百 分 率 %	
	1939年	1926年	1939年	1926年
8 歳 以 下	31,412.2	31,935.1	18.5	21.7
8 — 12 歳	16,409.1	11,226.2	9.6	7.6
12 — 15 "	13,336.1	11,521.4	7.9	7.8
15 — 20 "	15,124.1	16,976.5	8.9	11.5
20 — 30 "	30,639.0	25,851.0	18.1	17.6
30 — 40 "	25,333.0	17,517.7	14.9	11.9
40 — 50 "	15,235.9	12,862.9	9.0	8.8
50 — 60 "	10,867.4	9,802.9	6.4	6.3
60 歳 及 ビ 60 歳 以 上	11,129.3	9,802.9	6.6	6.7
不 詳	32.9	88.7	0.0	0.1
總 計	169,519.1	147,027.9	100.0	100.0

註 1) 西ウクライナ及ビ白ロシアを除く

即ち八才以下の小児は一九二六年には總人口の二一・七%を占めてゐたが、一九三九年には一八・五%となり、各年令層平均は三百九十三万人である。之に対して八才乃至十二才の各年令層平均は四百十萬、十三才乃至十五才は四四四萬で、比較的多数であるのは、最近の出生力減退を物語るものに外ならない。然し一般に幼年者及び青年者層の占むる割合は西政諸國に比して遙かに高く、之に反して壯年者及び六十歳以上の老年者の割合は著しく低い。例へば六十歳以上の割合は六・六%であるのに対して、ドイツでは一・二・二%で約倍率を示してゐるのである。

年齢層を更に大きく区畫して見ると次の如き比率を得る。

年齢層	一九二六年	一九三九年
二十才未満	四八・六 %	四五・〇 %
二十才至四十才	二九・五	三三・〇
四十才至六十才	一五・一	一五・四
六十才以上	六・八	六・六

二十才未満の者は總人口の約半分を占むるが、（ドイツは三〇、九%）
 之は革命後に生れた青年層であつて、一九一九年から一九三八年迄の
 出生数は七千六百三十万に達する。二十才から四十才までの青年層は人
 口の約三分の一、即ち五千六百万であつて、前世界大戦に参加せるもの
 及び大戦前に青年層を經過した老年層は總人口の二二%、三千七百二
 十万人に過ぎない。（ドイツでは当該人口の割合は三六、〇%である。）
 一九三六年に比すれば、幼年層の割合は微減してゐるが、然し他の諸
 國に比べれば依然相當の高率である。試みに十五才以下の者の割合を若
 年の歐洲諸國と比べて見よう。

ソ連邦	三六、二%
ドイツ	二三、三%
イギリス	二二、一%
オランダ	二八、六%
ルーマニア	三四、七%

要するにソ聯邦人口の年齢構成を觀るに、西政諸國に比して幼少年層の比率が著しく高く、之は正に出生率の大、從て又自然増加率の大を物語るものに外ならないが、之を十二年前と比すれば、其間幼少年層の占むる比率が稍々低下してゐるのを知るのである。之は云ふ迄もなく前款に記した様に、諸種の原因の下に出産力が衰へたことを証するものである。

尚、以上は男女を一緒にした統計であるが、男女別に見た各年齢層の比率は次の如くである。但しこの数字は一九三一年一月一日現在の推定人口を基礎とするものであるから、現在とは幾分違ふかも知れない。

年齢	男 (%)	女 (%)
0	13.37	12.06
4	11.24	10.40
8	8.47	7.91
12	7.28	6.71

年齢	男	女
一六—一七	五、一八%	四、六六%
一八—一九	四、七六	四、四一
二〇—三九	二九、〇七	三一、四一
四〇—四九	八、八七	八、九九
五〇—五九	五、九一	六、四〇
六〇才以上	五、八五	七、〇五

第四款 職業別構成

ソ聯邦當局の発表する人口の職業別或は社会別構成も、他の諸國のそれと大いに異つてゐる。今一九三九年の調査に於ける職業別構成を掲ぐれば次の如くである。

職 業 別	人 口 (家 族 込)	
	單 位 十 人	百 分 率
都市及び地方に於ける労働者	54,566.3	32.19
都市及び地方に於ける給料生活者	29,738.5	17.54
集 団 農 民	75,616.4	44.61
協同組合に加入せる家内労働者	3,888.4	2.29
協同組合に加入せざる家内労働者	1,396.2	0.82
個 人 農	3,018.0	1.78
無 職	60.0	0.04
不 申 告 者	1,235.3	0.73
合 計	169,519.1	100.00

1161

即ち最大の割合を占むるグループは集田農民で、總人口の約四五%に達する。之に次ぐのは都市及地方に於ける労働者で總人口の約三分の一、第三位は俸給生活者（總人口の約六分の一）である。労働者及び俸給生活者を合計すれば、数に於て遙かに集田農民を越え、總人口の約半分に達する。独立農民は僅かに一八%を占むるに止まり、又無職者の割合は殆んど零に近い微数である。

一九二八年（第一次五ヶ年計画開始年度）の職業別比率と、一九三七（第二次五ヶ年計画最後年度）及び一九三九年のそれとを比較対照すると次の如くであつて、（一九三九年が十八回黨大会におけるモロトフの報告による）ソ聯邦人口の職業構成或は社会構成の変化が明瞭に看取されるのである。即ち労働者及び俸給生活者の割合は一九二八年から三七年迄に二倍以上となり、一九三九年には殆んど三倍になつた。集田農民及び協同組合加入の家内労働者の割合は、一九二八年から三七年迄は絶對的に上昇したが、其後労働者及び俸給生活者の割合が上昇するにつ

職 業 別	總人口に占める各社会別人口比率の变化		
	總人口に占める割合		
	1928年	1937年	1939年
労働者及び俸給生活者	17%	35%	49.7%
集田農長及び協同組合加入家内労働者	3	55	46.9
個人農及び協同組合未加入家内労働者	73	6	2.6
その他	2	4	0.8
資本主義的分子	5	1	1
合 計	100	100	100

れて、下降に轉じた。「資本主義的分子」は消滅し、独立農民及び家内労働者は今や全くその影を没しようとしてゐる。斯くして兩三項の五年計画はその都市化、工業化、集田農化の政策を通じて、ソ聯邦全民衆の社会的、職業的構成を根本的に変革したのである。

第七節 民族政策の基調

ソ連邦の民族政策は上記の各節に於てもそれぞれ断片的に闡説したが、茲にその基本的な動向を略説しよう。

由來帝政ロシアの異民族に対する政策は、専ら大口ロシア人の利益の爲に、政治的には之を極力压制屈從せしめ、文化的にはその向上を阻止し、経済的には原料生産者に止めて置くといふことを基調としたものであった。而して其の方法としては所謂「分けておめる」といふのであつた。諸民族間の反目軋轢を利用助長し、又同民族間でもその階級的対立を煽動利用した。政露の文化的少数民族、特に南カフカス地方の諸民族に對して、この方法は効果をあげたのである。シベリヤ其の他の辺境民族、或いはまだ遊牧を生業とする如き低文化民族は、云ふ迄もなく、その民族意識も低く、利用する程の民族的又は階級的対立も乏しく、又之を支

配するに ついて、その必要もなかつた。唯比較的教も多く、文化も進んだ。又従つて民族意識も多少興へてゐるにブリヤート・モンゴル族に対しては、統治上その上層階級（氏族の酋長）を懐柔庇護して、之を通じて下層農民から収奪採取する方法をかなり露骨に行つた。又ヤクート族に対しても毛皮其他を収奪するに就て、色々の圧迫暴行を加へた。

而して之等異民族特に依文化異民族に対して帝政ロシアが興へた「文化の贈物」は何であつたかと言へば、唯ウオツカと花柳病だけであつたのである。かの辱々暴力を以て強制的に行はれた原住民の、ギリシヤ正教徒化は、帝政ロシアの専制的性格を露骨に示したものでこそあれ、全く原住民の文化向上とは無関係であつた。要するに帝政ロシアは文字通りの「諸民族の牢獄」に外ならなかつたのである。一たもロシア人個人は既述の如く概して民族的偏見が少く、他のスラブ族に対しては勿論、フィン、タタール其他辺境民族に対しても、又西欧の文化民族に対しては比較的親和的であつて、至る処で混住し、又容易に混血した。中には

却つて異民族に同化されてしまつた一部のロシア人も存するのである。之に対して革命ロシアの民族政策は、正に帝政ロシアのそれに対蹠的であつた。——と云ふよりも寧ろあらねばならなかつた。何と云へば、「他の民族を抑圧する所の民族は自由ではあり得ない。民族的誇りの感情に充ちてゐる我々大口シヤ人労働者は、如何なる場合でも隣國に対するその態度を、人間的な平等の原則の上に立て、偉大なる民族の品位を辱しめるやうな奴隷的な特權の原則の上に立たぬ所の、自由な独立的な民主主義的な、共和主義的な誇りに充ちた大口シヤとなることを欲する」とのレーニンの言葉は實現されねばならなかつたからである。即ち一九一七年の二月革命によつて帝政が崩壊するや、堰を切つた民族運動は澎湃として各地に起り、諸民族の独立或ひは民族自治の叫びは全露を凡塵するに至つた。かねてより独自の「民族綱領」を準備してロシアに於ける被壓迫諸民族の革命的エネルギーを自己の目的達成に利用しようとする構之とるたボリシエウキは、同年十月の蜂起によつて政權を奪取する

直に有名な「ロシア諸民族権利宣言」を公布し、

(一) ロシア諸民族の平等と主権

(二) 分離及び独立國家形成をも含むロシア諸民族の自由なる自決の権利

(三) 一切の民族的及び民族宗教的特權に制限の撤廃

(四) ロシア領土内に住む民族的少数派及び人種的ゲルマンの自由なる登

達

を公約したのである。

此の宣言公約が被圧迫諸民族を吸引したことは絶大であつて、之によつて異民族の支持を得、革命政權は勝利を博したと言つても過言ではな

い。而して此の結果はどうかであつたかと言へば、ポーランド、バルト三

國及びフィンランドは、「民族自決」主義によりロシアより分離して完全

に独立せしめられたが、爾餘の諸民族は分離結合の過程を通じて結局

ソヴエトロシアの中央政權の傘下に再び統一せられることになつた。即ち一九二二年の内亂の全く終息した時機を俟つて、諸多の民族共和國

の合同成り、大ソヴエート聯邦は創建せられたのである。而して先の民族平等の原理は幾許もなく一九二四年の憲法に明定せられ、且つその具體化は聯邦最高會議と並んで、民族會議が設定されることによつて實現された。斯くして各構成共和國及自治共和國は、從來支配的勢力を占めた大ロシア共和國と平等に、五名の代表者を民族會議に送り、又共和國内の自治州も同じく夫々一名の代表者を選出するの権能を附與されたのである。一九三六年の憲法改正に依り、民族的地域の單位は増加せられ、又民族會議は各單位の代表者数を増加して、一層広汎に諸民族の政治的要求を會議に反映せらるることになった。即ち各構成共和國は夫々二十五名、各自治共和國は夫々十一名、各自治州は夫々五名、各民族管区は夫々一名の代表者を民族會議に選出することになったのである。斯くして先住古代アジア民族として將に滅亡に瀕してゐるカムチヤツカ半島のユリヤーク族の如きも、民族管区として一名の代表者を最高會議に選出し得ることになった。更に旧憲法に於ては尚多少下位にある觀があつた

民族会議の地位が（旧規定では）民族会議ノ組織ハ全体トシテソウエー
ト社会主義共和国聯邦ソウエーイト大会ニ承認セラルベキモトスシとの
制限があつた。改正憲法（オチ三十七條）によつて聯邦最高會議と全く平
等同權と規定され、兩會議の合同會議に於ける議長は、夫々の議長が交
互に之に當ることゝ定められた。

斯くして帝政時代支配的勢力を占めた大口シヤ民族も、名目上勿論何
らの特權を認められず、民族的專制、或いは又民族的シヨークアイニズム
の發生は極力之を排撃するの建前となつてゐるのである。例へば之を數
的に觀察すれば、一九三七年末最高會議選挙の結果は、聯邦會議代表四
十九名、民族會議代表五七四名であり、此内絶対過半数の民族人口を
擁する口シヤ民族の代表は、一四名であつた。又口シヤ共和国及之に包
含せらるゝ民族自治共和国一七、民族自治州六の代表者總數一八二名に
對し、口シヤ共和国と同等數の代表選出權を有するウクライン十、始め十個
の少数民族の構成する共和国及びそれらに包含される自治共和国五、自

治州三の代表者總数は三二〇名であつたのである。勿論比較的多数を占めるといふことは夫自体比較的勢力の強いことを意味するものに外ならぬ。いかゞとにひく絶対多数を許さないといふことは、民族的専制を予防しようとの名目上の理由となつてゐるのである。

由來ソヴェートの聯邦制度は、極端な中央集権を特徴とするプロレタリアート独裁と、聯邦を構成する諸民族の民族的利益とを調整し、統合する極めて合目的な制度と云ふべく、各民族は前記の如くその実力に志じて、共和國、自治共和國、自治州或は民族管区と名付けられる新しい形態の民族地域的單位に組織され、或程度迄の民族的自立と自治を享有するに至つたが、党及ソヴェート機構を通じて、更に又聯邦制度の紐帯を通じて、中央政權の威令は凡ゆる諸民族に透徹し、又次第に増加してくる各民族出身の黨員は中央と民族地方とを結ぶ一種の楔として大なる役割を果してゐるのである。一九二〇年代の所謂「新經濟政策時代」に入つて、再び顯著となつた大口シヤ主義や、地方的民族主義の勃興、

兩者の対立、矛盾は一時重大なる政治的危険を齎したか、党首脳は党内の民族的偏向を徹底的に排撃すると共に、一切の民族的紛争を技術的に根絶するための大方針として「後進諸民族の経済的・文化的向上」により、事実上の不平等の解消、其他民族問題の解決を図ることとした。蓋し既述の様にソ連邦内諸民族の経済段階、文化段階は雑多であつて、例へば(一)既に産業資本主義を経過した民族(ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人、グルジア人、アルメニア人、アゼルバイジャン人の一部等)、(二)族長封建制乃至牧畜経済段階にある諸民族(トルコ人、カザフ人、キルギス人、中央アジア諸民族)、(三)氏族制段階にある遊牧狩獵諸民族(キルギス人、バシキール人、オセチヤ人等)、(四)個別的流動的少数民族群(ポーランド人、ユダヤ人等)が並び存してゐるのである。勿論此等諸民族を名目的に平等化することは全く容易であつて、前記の憲法規定や民族会議選出規程は既に之を解決してゐるのである。然し之を實質的に、即ち経済的に又文化的に平等化することは甚だ困難であつて、一朝一夕

にその実現を図ることには出来ない。唯茲に云ひ得ることには、この「後進諸民族の経済的文化的向上」によって事実上の不平等を解消し、民族同題を根本的に解決すると云ふ大方針は、未だ今日に至る迄及ソ聯政府の終始一貫堅持するところであつて、而も着々実行に移されてゐるといふことである。即ち党及ソガエート機関の民族化は、政亜各地方に於ける或は工業建設、集田農場建設等による後進諸民族の経済的發展に、或は教育の普及及其他文化厚生施設の拡充による民族文化の向上に、歩一歩とその成果は現はれて来、ソガエート中央政權に対する辺境諸民族の信頼と、ロシヤ民族を中心とする諸民族融和の基礎は益々強固となつて来てゐると傳へられるのである。独ソ開戦以來既に二年に垂人とし、国土の心臓部を奪はれて凡ゆる苦闘と困難に堪へず、当初一擧に予期された様な國內的動搖が何ら起る兆候が無く、寧ろ却て強固に結束して来たかに見えるのは、恐らく右に繰述した様な民族政策が或程度成功してゐることを証するものではないかと思われるのである。

(以上)

第六章 北米合衆國民族事情

第一節 人口の人種的構成

アメリカ合衆國は世界において最も雑多な人種から構成されてゐる。然し現在に於てはこれらの雑多な人種が混交融合して一種のアメリカ民族（ヤンキー）を漸次形成せんとしてゐる過渡期にあると見られる。所謂アメリカニゼーション運動はかかる政策の一つであつて移民割当制、有色人種排斥の如きもかかる工作の一部と見るべきものであらう。人種の起原的構成はイギリス人を主とし其他ドイツ人、アイルランド人、フランス人、イタリヤ人等の白人系と奴隸として移入された黒人及び日本人、支那人、フィリッピン人等の東洋人が主なるものであつて合衆國總人口一億二千二百万人のうち一億八百万即ち八八%までは白人であ

り、黒人は一千一百万人、一〇%であり、メキシコ人、インド人、日本人、支那人等が二百万人、二%となつてゐる。

一般に米國に於ける最大の弱點はその國民が雑多な人種によつて構成されてゐることである。従つてアメリカンゼーションが米國の主なる政治的問題になつてゐる。米國の人口構成は原住民たるインディアンを除けば他は總て移民からなるものであつてその發達の時期は次の如くである。

一、植民地時代 米國発見より一七八二年まで（母國よりの統制）

二、無制限移民時代 一七八三—一八三〇年（英國からの分離）

三、州統制の時代 一八三一—一八八二年

四、中央政府統制時代 一八八三年以降

(a) 一八八二—一九一〇年の調節

(b) 一九一〇年の制限と割当（一九一〇年の現住民族の三%以下、一九

二四年には一八九六年現在民族人口の二%に修正。一九三一年以後

は五〇、〇〇〇人に限定)

(C) 移入より移出の大なる時代(一九三一年

割当除外地カナダ、ニューファウンドランド、メキシコ、キューバ、ハイチ

ドミニカ、パナマ、中南米の独立國

旧移民(一八八〇年まで(主に英語使用民族)

新移民(一八八〇年—一九一四年

現移民(一九一四年—現在

現在に於ては現米合衆國一億二千人に対し、毎年許可される移民は三十五百人であるが故に殆んど文化的経済的影響を持たない。米居住の外國人は五百万人と推計されてゐる。

合衆國は國籍取得は出生地主義

jus soli であるため市民権獲得には

出生による市民と帰化による市民とがある。

一九三〇年の人口總數一六、四九〇、四三三人の中七、九一九、五三六人即

ち六、八%が帰化による市民であり、そのうち一三、〇〇〇人は人種的関

係により帰化が許されるが、六〇〇、〇〇〇人は市民権獲得期間未了のものである。この期限は一七九〇—一九〇六年の帰化法に限定されてゐるのである。一八二四年公布のものは合衆國に五年以上生居し、そのうちの三年間は二十一才以前たること、帰化は自由な白人に限る（一七九〇年）とされ支那人は一八八二年の法令により帰化権なく、印度人、日本人、フィリッピン人は高等法院の判決により帰化権がない。但し三年以上米國軍務に服したものは除外される。一九三五年議會は歐洲大戰に東洋人で米軍に参加したものは、帰化権を認められた。

帰化の條件は英語が語せ、願書を自署すること、米國史と政治に関する試問を通過すること、一九二六年には聯邦の法廷が試験することになった。

外國人と結婚した婦人は依然市民権を有するが他方外國生れの婦人は結婚や夫の帰化によつても市民権を獲得しない。但し三年夫と米國に居住すれば許される。一九〇六—一九三六年間に一二、〇八七の帰化証が

備造されたる。一九〇七年の法令で帰化外人は二年以上故国に住み又は五
年以上外国に住むと米国民を放棄したと推定される。

一八二〇年—一九三六年間に於ける主要諸国からの合衆国への移民
数及び移民入国許可年割当比率は別の如くである。

第一表

西暦1820-1936年間ニ於ケル主要諸國カヲ1合衆國ヘ1程氏

國名	1820-1830	1831-1840	1841-1850	1851-1860	1861-1870	1871-1880	1881-1890	1891-1900	1901-1910	1911-1920	1921-1930	1931-1936	1936年 1820-1936 總計
全 國	151,824	599,125	1,713,251	2,597,214	2,314,824	2,812,193	5,246,613	7,687,564	8,795,376	5,735,811	4,107,209	256,533	78,018,550
歐 洲	106,508	495,677	1,597,501	2,452,660	2,065,270	2,272,262	4,437,046	3,558,978	7,136,016	4,376,564	2,477,853	158,339	32,434,685
ポルバニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,663	1,183	2,846
オーストリア	-	-	-	-	7,800	72,969	353,719	592,707	2,145,266	453,649	32,868	3,073	4,138,333
ハンガリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	442,693	30,680	2,899	-
ブルギー	28	22	5,074	4,738	6,734	7,221	20,177	18,167	41,635	33,746	15,846	1,636	155,024
ブルガリア	-	-	-	-	-	-	-	160	39,280	22,533	2,945	506	65,424
ルーマニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3,426	102,194	5,308	110,928
デンマーク	189	1,063	539	3,749	17,094	31,771	88,132	50,231	65,285	41,973	32,430	1,434	333,900
エストニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,576	263	1,839
フィンランド	-	-	-	-	-	-	-	-	-	756	16,691	863	18,310
フランス	8,868	45,575	77,262	76,358	35,986	72,206	50,464	30,770	93,399	61,897	49,610	5,048	588,023
ドイツ	7,729	152,454	434,626	951,667	787,468	718,182	1,452,970	505,152	341,498	143,945	412,202	30,929	5,938,822
大 英 國													
イングランド	15,837	7,611	32,092	247,125	222,277	437,706	644,680	216,726	388,017	249,944	157,420	7,900	2,629,335
スコットランド	3,180	2,667	3,712	38,331	38,769	87,564	149,869	44,188	120,469	78,357	159,781	5,700	732,587
ウェールズ	170	185	1,261	6,319	4,313	6,631	12,640	10,557	17,464	13,107	13,012	574	86,233
其 他	7,302	65,347	229,979	132,199	341,537	76,142	168	67	-	-	-	-	793,741
ギリシヤ	20	49	16	31	72	210	2,308	15,979	167,519	184,201	51,084	5,517	427,006
アイルランド	54,338	207,381	780,719	914,119	435,777	436,871	655,482	-	-	-	-	-	-
アイルランド自由國	-	-	-	-	-	-	-	388,416	339,065	146,181	220,591	7,797	4,588,464
北部アイルランド	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,726	-
イタリア	439	2,253	1,870	9,231	11,725	55,759	307,309	651,893	2,045,877	1,109,524	455,315	41,252	4,622,447
ラトヴィア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3,399	519	3,918
リトアニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6,015	1,151	7,166
ルクセンブルグ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	727	127	854
オランダ	1,127	1,412	8,251	10,789	9,102	16,541	53,901	26,758	48,262	43,718	26,948	2,430	249,059
ノルウェー	94	1,201	13,903	20,951	71,631	95,323	176,586	95,015	190,505	66,395	68,531	2,663	2,018,640
スウェーデン	-	-	-	-	37,667	115,922	391,776	226,260	249,534	95,074	97,249	2,374	-

一〇三九

ポーランド	21	369	105	1,164	2,627	12,970	51,806	96,720	-	4,813	227,734	9,637	407,366
ポルトガル	170	829	550	1,055	2,658	14,082	16,978	27,508	69,149	89,732	29,994	1,784	254,499
ルーマニア	-	-	-	-	-	11	6,348	12,750	53,008	13,311	67,646	2,422	155,496
ロシア	89	277	551	457	2,512	39,284	213,282	505,290	1,597,306	291,201	61,742	1,097	3,343,088
スペイン	2,616	2,125	2,209	9,298	6,697	5,266	4,419	8,731	27,935	68,611	28,958	2,048	168,913
スイス	3,257	4,821	4,644	25,011	23,286	28,295	81,988	31,179	34,922	23,091	29,676	1,985	292,153
欧州トルコ	21	7	59	83	129	337	1,562	3,626	99,976	54,677	14,659	432	155,568
ユーゴスラビア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,858	49,064	2,442	53,394
其他欧州	3	40	79	5	8	1,001	682	122	665	8,111	9,603	990	21,309
アジア	15	48	82	41,455	64,630	123,823	68,380	71,236	243,567	192,559	99,400	7,828	911,023
支那	3	8	35	41,397	64,301	123,201	61,711	14,799	20,605	21,278	29,907	2,737	379,982
印度	9	39	36	43	69	163	269	68	4,713	2,082	1,886	327	9,704
日本	-	-	-	-	186	149	2,270	25,942	129,797	83,837	33,462	1,519	277,162
亜細亜トルコ	-	-	-	-	2	67	2,220	26,799	77,393	79,389	19,165	282	205,317
其他亜細亜	3	1	11	15	72	243	1,910	3,628	11,059	5,973	12,980	2,963	38,858
アメリカ	11,951	33,424	62,469	74,720	166,607	404,044	426,967	38,972	361,888	1,143,671	1,516,716	87,687	4,329,116
ニュージーランド	-	-	-	-	-	-	-	3,311	179,226	74,218	924,515	886	2,957,422
オーストラリア	2,485	13,624	41,723	59,309	153,878	383,640	393,304	-	-	-	-	59,335	768,453
メキシコ	4,818	6,599	3,271	3,078	2,191	5,162	1,913	971	49,642	219,004	459,287	12,517	768,433
西印度	3,998	12,301	13,528	10,660	9,046	13,757	29,042	33,066	107,548	123,424	74,899	7,164	438,633
中央アメリカ	107	44	368	449	95	157	404	549	8,192	17,159	15,769	3,626	46,919
南アメリカ	542	856	3,579	1,224	1,397	1,128	2,304	1,075	17,280	41,899	42,215	4,150	117,649
其他米國	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	31	9	40
アフリカ	17	54	55	210	312	358	857	350	7,368	8,443	6,286	1,001	25,311
オーストラリア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニュージーランド	-	-	-	-	36	9,886	7,017	2,740	11,975	12,348	8,299	1,438	53,739
太平洋諸島	-	-	-	-	-	1,028	5,557	1,225	1,049	1,079	427	245	10,610
其他	33,333	89,911	53,144	29,169	17,969	790	789	14,063	33,523	1,147	228	-	254,066

第二表 移民入國許可年割當比率

(注意: 總テノ割當ハ合衆國ノ市民權ヲ得ル資格ヲ有シ合衆國ノ移民法ニ從フ者ニ適用サレル)

國又ハ地域	割當比率	國又ハ地域	割當比率	國又ハ地域	割當比率
アフガニスタン	100	日本	100	西南アフリカ(南ア聯邦委任統治領)	100
アルバニア	100	ラトヴィア	236	スペイン	252
アン道ラ	100	リベリア	100	スウェーデン	3,314
アラビヤ半島(ムスカトアデン植民地 保護領リウディヤアラビヤ)	100	リトニシユタイン	100	スイス	1,707
オーストラリア(タスマニア、パプア、オースト ラリア所屬)全島	100	リトワニア	386	シリア、ト、レバノン	123
オーストラリア	1,413	ルクセンブルク	100	ダンカニカ領	100
ベルギー	1,304	モナコ	100	トーゴランド(英領)	100
ブータン	100	モロッコ(佛領西領タンジール)	100	トーゴランド(佛領)	100
ブルガリア	100	ムスカト(オーマン)	100	トルコ	226
カメルーン	100	ナウル	100	日本委任統治領/マツフ其他	100
支那	100	ネパール	100	大平洋諸島	100
チエツエスロヴァキア	2,874	オランダ	3,153	ユーゴスラヴィア	845
デンキセ自由市	100	ニユーギニア(附屬島嶼南洋委任統治領)	100	カメルーン	100
デンマーク	1,181	ニュージーランド	100	總計	15,374
エチオピア	100	ノルウェー	2,377		
エストニア	116	パレスティン(トランスヨルダン含む)	100		
エチオピア(アビシニヤ)	100	ペルシヤ	100		
フィンランド	569	フィリピン	50		
フランス	3,086	ポーランド	6,524		
ドイツ	25,957	ポルトガル	440		
グレートブリテン北アイルランド	65,721	ルアンダトウルデイ(白委任統治領)	100		
ギリシヤ	307	ルーマニア	377		
ハンガリヤ	869	ロシア(欧州亜細亞)	2,712		
アイスランド	100	サモア西部(ニュージーランド委任統治領)	100		
印度	100	サンマリノ	100		
イラク(メソポタミア)	100	サウジアラビヤ(ハヂヤット、ネド及ノ領)	100		
アイルランド自由國	1,853	シヤム	100		
イタリア	5,802	南ア聯邦	100		

1961

第二節 人種政策

同人種内の小教民族問題以外に更に北米合衆國には次に挙げる三群の異人種が存在し、合衆國の民族政策は之等の異人種を問題の対象としなければならぬ。

1. アメリカインディアン等の原生人種

2. 十七世紀初頭から奴隷として輸入されたニゲロ

3. 前世紀半頃から移住した少数人種（日本人、支那人、メキシコ人、ゲルマン族ならざる南欧及東欧よりの移民）

北米の人種政策に於てニゲロは主役を勤めたが之は今日に於て最も重要な問題である。彼等は一九一六年から経済的事情の爲大量に北米に輸入され北中南部に於て奴隷として使役された。次で一七七七年から奴隷解放が始つた。併し憲法が公布された一七八九年に尚約七五〇、〇〇〇人の黒人奴隷が存在してゐた。憲法には黒人の法律上の身分に關し何等

有効な規定が無かつたのである。之に因聯した憲法の條文は二重の意味に解釋された爲にニグロの多い南部諸州では奴隷制度を尙許可されてゐるかの如く解し、北部諸州では之と反対の見解を持つてゐた。此の法律上の解釋の不明瞭なる結果南部諸州が劇反し次でリンカーンは戦争を起し再び南部を統一した。内乱の結果として奴隷制度は全く廢止され、更に一八六五年の第十三回憲法改正により、奴隷制度及び自由意志に反する奴隷はアメリカ合衆國內に於て許可せず、犯罪に對する刑罰としての奴隷も許可せず。犯罪は合理的處理により判決す」と規定された。此の當時北米には既に五百万人の黒人が存在し、解放されたのである。次で解放されたニグロの法律上の身分の規定により黒人問題の發展が特徴づけられた。茲に重要なるは一八六五年四月九日附の第一民法であつて、次の如き規定がある。合衆國に生れ、外國の権力に従属せざる者は課税せられざるアメリカインデアンを除き合衆國市民と解す。市民たる者は如何なる種族も、有色人種も、又能住に於ける奴隷たる身分に因せず。

合衆國の各州及び領域に於て次の同等の権利を保有す。

次で一八六八年七月二十八日附第十四回憲法改正により憲法力を以て平等権が記録されたが、就中人種法として次の條文は注目し價する。『合衆國に生れ又は帯化し合衆國政府に従属する者は總て合衆國市民たると同時に其の居住する州の市民とす。州は合衆國市民の権利を左右するが如き法律を制定する事を得ず。合理的なる法律上の根據あり、合法的の処理を認められる場合に於ても州は個人の生命、自由權、財産權を左右することを得ず。如何なる州もその行政力の下にある個人に対し法律上の平等なる保護を拒否する事を得ず。』次に一八七〇年三月三十日の第十五回憲法改正は總ての異人種に対し合衆國市民たる限り選挙權、投票權を許可した。

上述の諸規定により合衆國の異人種殊にニグロは白人市民と共に完全なる法律上の平等権を有するのである。併し乍ら人種政策上非常に興味のあることは、今や現実の狀態は平等思想に支持され根本方針の規

定する処とは全く別の様に発展したのである。次に合衆國に於ける特徴のある人種政策に就て述べよう

一、白人と異人種の混血結婚禁止規定及び

私通禁止規定（人種交混法）

合衆國の三十州に於て特殊の混血結婚禁止規定がある。尚、二、三の州に於ては白人と異人種との間の私通禁止が規定されてゐる。何れも州により非常に種々様々である。之を一覽表にして掲げると次の如くである。

州名	混血結婚禁止規定	制定年度	罰則
アラバマ	白人対ニグロ又ハニグロ混血結婚禁止（以下同様）	一九二三	二年以上七年以下の禁錮
アリゾナ	コーカサス人種又ハ其の子孫対ニグロ、蒙古人、インデアン及其等の子孫	一九二八	六ヶ月以下の禁錮又は罰金又は兩者
ネーカンサス	白人対ニグロ又ハムラット（白人と黒人の混血）	一九二一	一年以下の禁錮

カリフォルニア	白人対ニゲロ、ムラット、蒙古人、マレイ人	一九二九	無し
コロラド	白人対ニゲロ、ムラット	一九二一	二年以下の懲役又は罰金又は兩者
デラウェア	白人対ニゲロ、ムラット	一九二七	百布の罰金、捕はぬ時は三十日以下の拘留
フロリダ	白人対ニゲロ、八分の一以上のニゲロの血を有する混血児	一九二七	十年以下の禁錮又は十布以下の罰金
ジョージヤ	白人又ハユーカラス人種 対ニゲロ、アフリカ土人、インディアン、印度人、蒙古人、日本人、支那人等の血を僅かたりとも有する者	一九三〇	十布以下の罰金又は六十日以下の禁錮又は一年以下の懲役或は以上の二、三を同時に科す
アイダホ	白人対蒙古人、ニゲロ、ムラット	一九一九 一九二一	六十日以下の禁錮又は三百布以下の罰金又は此の兩者
インディアナ	白人対八分の一以上のニゲロの血を有する者	一九二六	一年以上二年以下の禁錮及百布乃至十布の罰金

ケンタッキー	白人対ニグロ、ムラツト	一九二二	五百弗乃至五十弗の罰金、罰金を受けた後性交を継続した場合は三箇月以上一年以下の禁錮
ルイジアナ	コーカス人種即ち白人 対インディアン、有色人種、ニグロ インディアナ対有色人種又はニグロ	一九二〇 一九二五	一ヶ月乃至一ヶ年の禁錮
マリランド	白人対ニグロ又は八分の一以上のニグロの血を有する混血児		一年半以上十年の禁錮
ミシシッピ	白人対ニグロ、蒙古人、ニグロ或は蒙古人の血を八分の一以上有する混血児		五百弗以下の罰金十年以下の禁錮又は兩者
ミズーリー	白人対蒙古人、ニグロ、八分の一以上のニグロの血を有する混血児		二年以下三ヶ月以上の禁錮又は百弗以下の罰金又は禁錮
ミシタナ	白人対蒙古人、僅かたりともニグロの血を有すると認め得る者		五百弗以下の罰金、又は六ヶ月以上の禁錮又は兩者

ネブラスク	白人対八分の一以上のニゲロ、日本人、支那人、の血を有する者	一九二二	百弗以下の罰金又は六ヶ月以下の禁錮
ネバダ	白人対ニゲロ、蒙古人、マレー人	一九一三	六ヶ月以上一年以下の禁錮又は五百弗乃至十弗の罰金又は此の兩者
ノースカロライナ	白人対ニゲロ又はインディアンの血を八分の一以上有する者	一九三一	四ヶ月以上十年以下の禁錮又は罰金
ノースタコダ	白人対八分の一以上のニゲロの血を有する者	一九一三	十年以下の禁錮又は二十弗以下の罰金又は兩者
オクラホマ	白人対ニゲロ	一九三一	五百弗以下の罰金一年以上五年以下の禁錮
オレゴン	白人対四分の一以上のニゲロ又は支那人の血を有する者 二分の一以上のインディアン又はカナダ人の血を有する者	一九三〇	三ヶ月以上一年以下の禁錮
ノースカロライナ	白人対ニゲロ、インディアン、ハラット、メスデイト (混血の一種)	一九二二	五百弗以下の罰金又は一年以下の禁錮又は兩者

ソリス タゴダ	コトカサス人種対ニゲロ、蒙古人、朝鮮人	一九二九	十吊以下の罰金又は十年以下の禁錮又は兩者
テネツシイ	白人対八分の一以上のニゲロの血を有する者	一九一七 一九一八	一年以上五年以下の禁錮
テキサス	白人対八分の一以上のニゲロの血を有する者		二年以上五年以下の禁錮
ウター	白人対ニゲロ又は蒙古人		六十日以下の禁錮又は三百吊以上の罰金又は此の兩者
ウアー シニア	コトカサス人種対僅かたりともニゲロの血を有する者、十六分の一以上のイレデアンの血を有する者		二年以上五年以下の禁錮
ウアー シニア	白人対ニゲロ		一年以下の禁錮及び百吊以下の罰金
ワイオミ ング	白人対ニゲロ、ムラット、蒙古人、マレー人		百吊乃至千吊の罰金又は一年以上五年以下の禁錮又は兩者

州名	私通禁止規定	年度	罰則
アラバマ	白人対ニゲロ、ニゲロ混血児	一九二二	混血結婚禁止規定ニ準ず
フロリダ	白人対又は八分の一以上ニゲロの血を有する混血児	一九二七	一年以下の禁錮又は罰金
ルイジアナ	コーカサス人種対インディアン、有色人種、ニゲロ	一九二〇 一九二五	一年以下の禁錮
ネバダ	インディアン対有色人種又はニゲロ 白人対ニゲロ、蒙古人、マレー人	一九二二	百弗乃至五百弗の罰金又は六ヶ月以上一年以下の禁錮又は兩者
ソースタゴダ	ユーカサス人種対ニゲロ、蒙古人、朝鮮人	一九二九	十弗以下の罰金又は十年以下の禁錮又は兩者

此の他、州は混血結婚禁止規定を有し居いか、其の内、数州は非常に多くの黒人人口を有してゐる。

之等の混血結婚禁止規定は白人と異人種との間に結ばれた婚姻は無効なりと規定してゐる。場合に依り之から生れた子供は私生児として取扱

われ、相続人を認められぬ事がある。又故意に宗教的の結婚式を挙行したり、違法の混婚を行はんとする男女に結婚証明書を発行したりする事に対し多くの法律に於て多かれ少かれ罰則が設けられる。更に下箇州に於ては自己の州に於ける禁制を避ける爲他州に於て混婚を結んだ者に対し混婚禁止規定に於ける罰則を適用すると規定する法律を有する。混婚未遂も辱々罰せられる。

然しなから斯かる混血結婚禁止法の憲法適合性に関する疑義が起きたのは勿論であつて屢々論議された。即ち之が合衆國市民たる権利に影響し第十四回憲法改正に違反しはせぬかと云ふのである。併し最高法廷の判決に於て混血結婚禁止法は全く憲法に適合してゐると常に決定されてゐる。例へば一八七七年アラバマ州の最高法廷に於て次の如き判決が下つた。「婚姻は家族法の制度であり社会と秩序は之に基いてゐる。婚姻は一般の守宰の爲に州の最高の権力を以て規定される。市民に対し参政権を保證せんとする。併し我が州は今日迄家族法の事務を掌る爲有して

るた確實なる権力を放棄する事を望まぬ」と。一八八一年同法廷は又次の如き判決を下した。「結果は兩人種の混合を来し混血人口と退化文化の発生を来す。之は健全なる政治により阻止するべきものであつて、此の健全なる政治は社会と國家が最も注意してゐる処である」と。カアードはアの最高法廷は一八七八年次の如く宣言した。「風俗純潔の保持と、兩人種の道德的・身体的の幸福と我が南部地方の文化の進歩の爲に、相互に非常に差異のある兩人種は各自の範圍の内に於て、神の與へ給ふた運命と分ち之を果さねばならぬ。神と自然が禁止してゐると看做される処、甚だ不自然な關係は積極的な法律を以て例外なく拒否するべきである。最後に合衆國最高法廷は此の混血結婚禁止法の憲法適合性を記録した。

(一八八一年 *Meynard v. Hill* の判決)

今日此の法律の憲法適合性に対する疑問は存在しない。併し乍ら此の法律は州により非常に多様であり、殊に二、三の法律の條文は甚だ不明確にして而も人種生物学的に一様に解釋出来ない表現の

為、實地に色々の困難を伴ふ事は更に不思議はない。之に加ふるに以上の他の十八箇州に於て斯かる法律が存在しない爲に、此の規定を有する州に於ても法律は非常に実効性に乏しいものとなつてゐる。即ち二人の人種の異なる結婚希望者は混婚を禁じてゐない州に逃避して結婚する事か出来るのりである。最も重大な缺陷は、四十三箇州に於て異人種間の私通を禁止してゐない爲、結婚外混血に対する扉が開かれてゐることである。實際私生児のムラツト（白人と黒人との混血児）の数は莫大なるものである。

二 移民制限法

近來北米合衆國は異民族移民の防止を目的とする法律を制定した。先づ一八八二年五月六日支那人排斥法を制定し、學生、觀光客を除く餘ての支那人の移民を禁止した。次いで一八七七年合衆國政府は日本と緬土協約を結ぶ日本人移民を防止した。

一九一七年二月五日重要なる移民制限法を制定した。之によりアジア
州一定区域の上着民族は学生、外交官、宗教家等を除き合衆国に入国す
る事が出来なくはつた。制限地帯はオーストリア、東アフガニスタン、英領
印度（ベルグスタンの一部を除く）、ネパール、ポータン、露領トルキス
タンの一部、西支那、シヤム、佛領印度支那、マレー半島、セロン島
、スマトラ、ホルネオ、セシベス、ケモール、ニコロギニヤ、印度洋及
太平洋の小島である。

移民に関する最後の法令は一九二四年五月二十六日付で発布された移
民法（ジョインソン法）である。此の法律は特に次の如く規定してゐる。

第十三条 C

帰化権を有せざる外国人は合衆国に入国する事を得ず。一此の爲アフ
リカ人を除く總ての有色人は入国出来ない。一学生等は此の限りに非ず。
許可されたる移民は之を非歩合移民と歩合移民に分つ。カタダ、ニュー
ファウンドランド、キューバ、パナマ運河地帯、中米、南米よりの移民は前

者に屈し、世界の他の部分よりの移民は後者に屈す

第十一條 b

一九二七年七月一日より各國に對する一年間の歩合移民割当数を一九二〇年に於ける各國の北米移民数の同年に於ける總移民數に對する割合を以て歩合移民總數十五万を配分して決定す。各國は最低百人以上の移民を許可せらる。移民に當て奴隸として輸入されたる人々の子孫を含まず。一之によりアフリカよりの黒人移民を拒否す。英、佛等よりの移民に對しては南及東歐羅巴の諸國に比し三倍の歩合を許可す。

メキシコ人はその十分の一は白人、十分の三はインディアン、十分の六はインディアンと白人とニグロの混血であるが移民に關しては此の間に歩合の制限はない。

尙一九三三年合衆國市民に非らざる北律賓人の移民は毎年五十人づゝに制限された。

一九〇六年六月二十九日の合衆國法に依り帰化に關する制度が定まつ

つた。北米の市民となり得る者は自由なる白人の外國人及びアフリカ生
れの方又は其の子供たる外國人である。如何なる外國人が白人に属する
かに就いては細目の規定がない。又アフリカ生れの者及び其の子供に就
ての解釋にも論及してゐない。併し合衆國最高帰化委員会は慣例により
詳細に之を規定してゐる。即ち、合衆國外領域のイレディアル、前述の
移民法の制限区域の住民たるアジヤ人、日本人、支那人及び比律賓人は帰
化権がない。之に反して總ての人キレユ人及びハワイ市民は帰化権がある。

三、選挙権

第十五回憲法修正はニゲロに対し明確に選挙権を許可してゐるか、実
際には彼等は尚之を有してゐない。エ、三の州は選挙権の実施を非常に
嚴重な種々の条件（例へば居住期間、納税、資産、品行、教養、理解力
、性格等）に適つた者のみに許可する爲、比較的僅かの有色人しか之に
合格する事が出来ない。之に加ふるに合衆國に於ては選挙権に対する條
件として民主党が共和党の黨員たるを要するものである、か兩党ともニゲロ

を党員から除外してゐる。

四、人種差別的學校法

二十箇州（大部分南部）の憲法及二、三の州の簡單な法令は學校に於ける完全なる人種分離を規定してゐる。之等の州に於ては白人、黒人或は有色人を別個に收容する學校のみ許可される。又二、三の移人種人口の稀薄な州に於ては人種分離の學校組織は地方の學務官の裁定に委任されてゐる。他の十州に於ては憲法又は簡單なる法令により人種又は皮膚の色に就き差別することを嚴禁してゐる。残りの二、三州に於ては學校制度に於ける人種差別の法律又は差別禁止の法律は存在しない。勿論人々は總ての米國市民に入学許可其他學校制度に關する平等權を規定してゐるが十四回改正憲法に論及し學校制度に於ける人種的差別を規定せる各州の法律の憲法適合性につき屢々論議した。それにも拘らずかゝる憲法適合性は一九二七年合衆國最高法廷に於て承認された。但し判決に於て、種々の人種に対し分離された學校制度は同價値なるべき旨要求す

れた。

併し、右から現実には白人と有色人との分離された学校は平等でない。例へば異人種に対する学校建築物は白色のそれに比し多く價値の低いものである。

五 其の他の人種差別法

合衆國の總ての市民は契約を結ぶ之を履行する事或は相続、竟買等に就き平等なる権利を有する事は明かである。第十四回憲法改正は、州は合衆國市民の權利殊に自由又は財産を正當の理由なくして制限する如き法律を制定する事を得ずと宣言してゐる。之により北米に於ける異民族市民は少くとも財産法に關しては白人と全く同等の權利を有する筈であるが、事實は決して其の通りではない。

就中茲に必要なのはジム・クロウ法（一八八〇年乃至一九〇〇年）に於て制定される一部は尚其の後發布されるものである。此の法律は交通制度に關し、有色人と白人とに対し分離された室と車に就き規定してゐる。例へ

はマリーランド州の法律を引用して見よう。(一九二四年マリーランド州 *Annotated Code Art 27*)

「四三二条

旅客運送の車体を有する總ての鉄道会社は白人と有色人に対して夫々分離されたる客車を備ふべし。一箇の客車に於ても、堅牢なる座を以て分離されたる戸口を有する各部分に分離されたる車と看做す。分離されたる客車には白人又は有色人に対し指定されたる車なることを明示すべし。

四三二条

鉄道会社は之等の客車の價値、快適、設備に於て差別又は不平等をなすべからず

四三四条

四三二條及び四三三條の命令に従はざる鉄道会社は違法行為を爲したるものと看做す。各違反に対し三百弗以上千弗以下の罰金に課す。

四三五條

鉄道会社の管理人及び監督者は白人又は有色人の旅行者を夫々指定されたる客車に入らしむるべく命ずべし。旅客若し之を拒みたる時管理人及び監督者は其の旅行を拒否し、列車より退去せしむる権利を有す。指定されたる客車に乗車する事を拒みたる旅客は犯罪をなせるものと看做す。各犯行に対し五弗乃至五十弗の罰金、又は三十日以上禁錮又は此の兩者を課す。

四三六條

四三五條に於て命ぜられたる義務を怠り又は拒否したる管理人又は監督者は犯罪を爲せるものと見做す。各犯行に対し二十五弗以上五十弗以下の罰金を課す。

同様の規定が船舶、市街鉄道其他種々の施設についても存在する。例へば「アーヂニヤ法王見ると」(一九三〇年「アーヂニヤ法典」)「總ての人、組織、団体に於て公衆用の劇場、オペラ、映画、其他の娯樂、集會等の設備を有し、白人も黒人も之に出入する場合、之等の組織、集

団体は白人と黒人を區別し、各々に対し特定の席を設くべし。本規定に違反せる場合は百弗以上五百弗以下の罰金に処す」と規定してゐる。

ジム・クロー法の憲法適合性も屢々論議された。併し后から此の憲法適合性は法定に於て度々承認され、就中合衆國最高法廷に於て一八九六年 *Plessy vs. Ferguson* の判決に確定された。此の判決の内次の首條は興味がある。

「第十四回憲法改正の目的は勿論西人種の絶対的平等を法律に導入する事であつた。併し皮膚の色に基く區別を取り除かんとする事が出来たものは当然である。西人種にとり不満足なるべき社会的平等と混合を強制する事は立法者の意志に反する事とならう。西人種が互に接觸する場所に於て両者の分離を許可し或は規定する事は一方の劣等性を必然的に板定することにはならぬ。かかる法律の制定は例外はあるが一般に警察力を使用する爲の立法府の権限内にある一手段として認められてゐる。」

其の他合衆國の有色人種は交際社会に於て非常な不利益と不平等を経

驗してゐる。二、三の南部の州に於て企てられた試み即ち法律により白人と有色人との住所を分離する事を規定せんとする事は合衆國最高法院の態度により不成功に終つた。一八九一七年 *Buckman v. Warley* の判決に之は反し前途の目的を達せんとする家屋持主の協定は許可された。北部及び中部諸州に於て法律による平等宣言があり、之に一定の地域に於ては旅館、理髮所、静養所等は於てニゲロは白人と全く平等なることか規定してあるが、実際には旅館の経営者は己れの心に適つた人とのみ契約を結ぶ法律上の権利を有する爲、黒人なる故拒否したと云ふ口実を用ひずして有色人との契約を拒否する事が出来る。

曾て黒人は裁判上の証言権及び証言義務に於て制限を受ける傾向があったが、今日は總て之等の制限は撤廃された。併し今日尚實際に於て有色人の証言に対し來り重きを置かれない。陪審員から有色人を除外する事は一八七九年の合衆國裁判により憲法違反なりと宣言された。併しそれから陪審員となる事の出来る者は選挙権を有する者のみである爲有色人

此の條件を満す事が出来ず、従つて實際に於ては有色人種の判事、官吏は殆んど存在しない。犯罪者、被告の人種は形式上裁判の過程に対し何等影響しない事となつてゐるが、事實は有色人は辱、白人よりも重く罰せられる。

リンチ（私刑）の問題は更に興味がある。曾て非常に辱、行はれ、今日尚時に之を見るのであるが、黒人が白人の女子を襲撃した場合に激昂した群衆により黒人は辱、私刑を受けた。一九二二年合衆國議會は私刑法の立案に対し同意したが上院の民主党の反対に會つて否決された。併し一九二〇年から数州に於て反私刑法が立法され今日かゝる法律は北部の十州以上に於て制定されてゐる。私刑行為に参加した者及び之を擁護した警察官刑務署官吏は罰せられる事になつてゐる。併しながら裁判所及び州の辯護士の拒絶的態度の爲今日迄實地に於て此の法律は極く稀にしか適用されてゐない。

一八八二—一九三五年のリンチ被害者總数は四、六八一のうち一、三一一人

は白人であり、一九一〇—一九三五年では一〇〇人の白人と九三四人の黒人カリシキを受け、白人婦人凌辱はこの二〇%であり、黒人婦人カリシキを受け、は入四人である。

最後は人種法的に見るべきものとして、儻って白人をニガロク子孫たりと言つた場合裁判に於て之を重大なる侮辱を認め、刑罰を課すと云ふ規定がある。

以上の如く北米合衆國の人種政策は自由思想と人種意識の相剋により甚だ不統一な支割減裂な状態を示し、各州により非常に様々な状態である事が特徴である。

第三章 英吉利民族事情

英吉利の當面する國內的な民族問題として所謂アイルランド問題があり、英吉利の民族事情を論ずるに當つては之を無視し得ない重要性を有つてゐる。以下アイルランド問題の沿革についで略述しよう。

スコットランド及びウエールスが征服されたのはアイルランドより遙かに後れたのであるが、それらは容易に英吉利に同化され、征服者と被征服者との間には最早何等の民族的対立關係を止めない。然るにアイルランドのみは遂に英吉利と融合することなく、本世紀の始めに至り聯合王國より分離独立しアイルランド自由國を建設するに至つた。英吉利側としては自由國を以てカナダ型の自治領であると認めてゐるが、自由國としては自ら自治領以上の完全なる獨立國となし、自らエール共和國と稱してゐる。

英吉利とアイルランドの關係が極めて非融和的であることの原因とし

ては、人種宗教の相違を擧げ得るであらうが、然し更に根本的な原因は英吉利の採った対アイルランド植民政策即ち英吉利の掠取彈圧政策にあると解されてゐる。そこでアイルランドが英吉利の收奪植民地として従来如何なる待遇を受け来つたかといふことに関し簡單な歴史的回顧をなさうと思ふ。

アイルランド人はケール人種に属するものといはれ、もと地中海沿岸の出であるが紀元前次第に西方に移動し遂にアイルランドに植民するに至つたと云はれてゐる。

彼等は紀元前に於て既に相當高度の文明を有し、當時北歐西歐に於ける最大の文明國と稱されてゐたといふ。五世紀頃にはキリスト教が弘まり、以後教世紀間キリスト教及びラテン、ギリシヤ文化の中心地をなして居つた。

かくの如く上古より中古にかけて、歐洲の一角に絢爛たる文化を誇つたアイルランドが近世に至り何故に、文化衰へ産業振はず、國民貧しく教

育程度低き後進國へ転落したのであらうか。かゝる事態こそ將に英吉利の收奪、压迫政策に歸さるべきである。

英吉利のアイルランド征服は十二世紀に於けるストロングボウのアイランド侵寇を以て始まり、それ以来征服と植民は著々と進められた。當時イギリスは既に統一的な封建制度の下にあつたが、アイルランドに於てはいまだ氏族土地共有制度の域を脱して居らなかつたといはれてゐる。イギリスのアイルランド征服はイギリスの制度のアイルランドへの強制的移植を意味し、こゝに於てアイルランド人の生活の根底たるアイランド人固有の社会制度、社会慣習は破壊せられた。植民國と文化型態を異にする原住民との間に通常見らるゝ処の、社会制度慣習の相違により惹起せらるゝ摩擦相剋は英愛間に於ても正に典型的に現はれてゐる力である。かくして最初の不幸がアイルランド人に落ちかゝつて来たのである。

征服の初期に於てはイギリスの支配力は一地方に限定されてゐたが、

次第に拡張され、イギリスのアイルランドに対する政治的支配は強化せられ、また宗教的にも種々の干渉を行ふに至つた。また十六世紀以後アイルランド豪族の領地は、或は叛乱に対する處罰として、或は法律の異なる解釋により形式上は平和的に没收された。殊にクロムウエルの時代には大規模な土地や没收が行はれた。かゝる土地没收が如何に激しいものであつたかは次の数字によつて想像し得る。即ちヘンリー八世の時代アイルランドの土地の三分の二は事実上アイルランド人を意味する旧教徒の所有に屬して居つたが、それは次第に減少し十八世紀の初の頃には二十分の一にまで減少したといはれてゐる。斯様にしてアイルランドの土地はイギリス人殊にイギリスの大地主、不在地主の手に歸し、旧教徒及びアイルランド人は小作人、勞働者に没落する外はなかつた。

更に十七世紀末以來はイギリスの支配並に搾取強化を目的として諸種の刑罰法規が制定され、旧教徒の政治的社会的自由は極端に束縛され、旧教徒は苛赦なき抑圧、奪掠を蒙つた。

次いで十七、八世紀に制定された商業関係の諸法規は當時重商主義時代の下にあつたイギリス資本の利益のために、アイルランドの産業的発達を阻止せんとするものであつた。

元来アイルランドは農耕及牧畜の國であつたが十七世紀以来の諸種の刑罰法規の結果、小作権は不確定となり、また時代は苛酷であつたために農耕は衰微し、牧畜が主として行はれるに至つた。一方十八世紀以後に於けるイギリス及大陸に於ける工業の發達はアイルランドの羊毛及肉類の需要を増加し、ためにアイルランドの牧畜はいよ／＼盛大となると共に農耕はいよ／＼衰微し、其の結果アイルランドは却つて食糧を輸入しなければならぬ状態に立至つた。

處でイギリスは自國の羊毛工業の利益のために、アイルランドの羊毛がイギリス以外の諸國に輸出せられることを防止するために非常に高額の輸出特許料を課すると共にアイルランドに於ける羊毛工業の發達を阻止するため、アイルランドの羊毛製品のイギリスへの輸出に対し禁止的

課税をなし、更にイギリス植民地への輸出まで禁止した。更に後にはイギリス及びイギリス植民地以外の諸外國に対する輸出をも禁止するに至つた。一方イギリスはアイルランドの羊毛製品に対する保護関税設定の要求を拒否し、アイルランドをして完全にイギリス工業に対する原料供給地、イギリス工業製品の販賣市場たらしめんとした。この一例によつて知り得る如く、アイルランドに対するイギリスの政策の基調は全く自國の利益のためにアイルランドを犠牲にするといふことにあつた。

かゝるイギリスの徹底せる榨取政策がアイルランドに失業と貧窮をもたらしたことは極めて當然のことであつた。以上め如き政治的經濟的状態は、民族宗教の相違と競合し、こゝに深刻なる英愛対立關係を發生せしめ、アイルランド人を駆つて激烈なる抗英獨立運動に走らしめたことは當然である。

かゝる状態下に於て十八世紀末に勃發したアメリカの獨立は物心兩面に於てアイルランドに深刻なる影響を與へた。

即ちイギリスは叛乱せるアメリカ植民地に対する食糧品等の供給を遮断するためにアイルランドのアメリカ向輸出を禁止した。この結果としてアイルランドの産業は俄かに衰微し、多くの失業者を生じ、アイルランドの貧窮は愈々甚だしくなつた。また同じく産業貿易上本國の束縛に苦しめるアメリカの独立運動の一中心勢力がアイルランド出身のプレスビテリアン派の人々であつたといふ事實がアイルランド人の自由独立の念願に油を注いだことは想像に難くない。

かゝる経済的擷取、階級的対立の激化は政治的、宗教的対立と競合し、英愛關係は愈々深刻なる対立抗争状態へと発展したのである。

イギリス政府も斯くの如く次第に激化し行く英愛間貿易自由の要求を無視する能はざるに至り、多少の讓歩をなしたが、それは決してアイルランド人を満足せしむるものではなく、却つて貿易自由の要求は一步を進めてイギリスの立法的干渉の排除といふ方向に裏りつゝあつた。恰も十八世紀末に爆發せしフランス革命の餘波はアイルランドにも及び、人

類の自由平等、専制政治の廢棄と立憲政治の確立といふ革命の理想に従ひ、こゝにアイルランドを打つて一丸とする処の國民主義運動が燃え上るに至つた。

一七九八年フランスを後援とする共和政府樹立の革命運動がアイルランドに教発し、それは結局不成巧に終つたが、それを機会にイギリスはアイルランドの腐分子の買収等の姦策に訴へ一八〇〇年アイルランドとカレトブリテンの合邦を實現してしまつた。

従来アイルランドはイギリス國王と別個の議會を有する國であつたが、一八〇〇年の合邦法により名実共にイギリスに合邦されるに至つた。然るにアイルランドの合邦は元々イギリスの利益のためのみになされた結果として合邦後のアイルランドは經濟的にも財政的にも苛酷の負担を負はされたことはいふまでもない。かゝる財政的經濟的搾取の結果アイルランドの貧窮はいよゝゝ甚だしきを加へ、かつ旧教徒に對しては政治的にも不平等な地位が與へらるゝに過ぎなかつた。かゝる、

政治的經濟的情勢はアイルランドを駆つて革命運動に狂奔せしむるにいたり、十九世紀の初期以來アイルランド各地には続々として秘密結社が設立され、革命の氣運はいよ／＼熟しつゝあつた。

アイルランド人の貧困については屢々述べた處であるが、アイルランド農民は馬鈴薯を主食となし、その生活程度極めて底ぐ、正に餓死戦上を彷徨せる状態であつた。従つて僅かの馬鈴薯不作によつても直ちに饑饉状態を来す程であつた。アイルランドは十八世紀の初期以來屢々饑饉に見舞はれたが殊に一七三九—四一年のものは激烈であり、ために人口の五分の一は失はれたといはれてゐる。十九世紀に入つてからも屢々饑饉が襲し、殊に一八四五—四七年のは極めて激甚であつた。そのために人口の國外流出は極めて著しく、これが一十九世紀後半に於てアイルランドの人口を半減せしめた主要原因である。

かかる状態の下に於て農民暴動の頻発するのは当然で、十八世紀以來地主に対する農民の暴行、強迫は全國を吹きまくるといふ状態であつた。

イギリス政府はアイルランド事情の調査に着手し、その結果アイルランド農民貧窮の原因は人口過剰にありといふ結論に到達し、その應急対策として移民の必要を強調した。然しながら産業の發達が阻止せられ、土地の集中により小作人は土地より追放され、耕地は牧地に轉換され、農民間の競争の結果地代は騰貴に次ぐに騰貴を以てし、また穀物の生産と家畜はやうにアイルランド人を養ひ得るに拘らず、それはイギリスの大地主、不在地主に奉納すべく彼等農民の食すべきではなく農民は收量豊富なる馬鈴薯を主食とする外なく、かくて彼等の生活資料たる馬鈴薯の不作の故りみを以て充ち溢る穀倉の内に餓死するの惨事を惹起するといふが如き状態の下に於ては、アイルランド農民の生活向上の慾望は消滅すべく、彼等が次第にその美風たりし勤勉努力忍耐誠実を失ふことは当然であつたらう。アイルランドの悲惨なる状態は人口過剰の結果に非ずして、寧ろイギリスの採りし植政策の帰結といふべきである。

一八四五―四七年の大饑饉はさすがにイギリス人の反省を促し、以来土地制度、小作制度に關して若干の改革がなされたが決してアイルランド人の要求を満足せしむるものではなかつた。かくて十九世紀後半に於て農民暴動が頻々として起り殊に十九世紀の末に於ては耕地の集中、小作人追放の激化と共に暴動は愈々甚だしくなるばかりであつた。

一方かゝる經濟問題と並んでアイルランドの政治的自由を獲得せんとする國民運動は依然として続けられ後になる程熾烈となる有様であつた。一方かくの如き政治的經濟的要求と並んでアイルランドの古典、古語等アイルランドの文藝復興を目指す處の民族運動が勃興し、その運動は次第に熾烈さを加へつゝあつた。

かゝる情勢の下に於て、其の後も叛乱と彈圧の歴史が繰返されたが、遂に一九二〇年に至つて所謂アイルランド統治法の誕生を見るに至り、二、に於てアイルランド人の宿望は或る程度充されることとなつた。即ちアイルランドを南北二つに分離することを條件として各々に対し制限

的ながら、或程度の自治権が賦與されるに至つた。因みにアイルランド^{一四七}を南北二分したのは少数派と見るべきイギリス系の北アイルランド人を保護せんとするイギリス側の意圖の現れである。

然るに北アイルランドはこの法律を承認したが、南アイルランドは南北アイルランドの分割に反対し、また自治の程度の不充分なることに反対した。

当時イギリス軍とアイルランド国民主義団体との間には流血の争闘が屢返されつゝあつたが、遂に一九二一年に至り兩者間に平和條約成立し、その結果アイルランドに対しカナダ型の最も程度の高い自治領たるの地位が認めらるゝに至つた。然るに北アイルランドがこの條約を受容しなかつたので、北アイルランドのアルスター地方を除外し、リンスター、マンスター、及コンノートの三地方を合して、之にアイルランド自由國が盛立せらるゝことゝなつた。

もとく南北アイルランドは地理的に一体を成して居り、また經濟的

にも北部の工業、南部の農業とは互に相補すべき関係にあるに不拘らず何故アルスターは南北分離に強硬に固執したのであらうか。第一の理由は宗教関係である。即ち自由國に於ては人口の九割以上が旧教徒であるが、アルスターに於ては旧教徒は人口の僅か三割に過ぎないといふことであり、アルスターの新教徒は南北合一によつて少数民族の地位に置かれることを怖れたためであると云はれてゐる。

第二の理由は経済的のものであり、工業発達し、比較的富裕なる資本主義的の北部は南北合一による経済的不利を虞れたためであるといはれてゐる。

既に述べた如く、一九二一年アイルランドは宿望を果して自治権を獲得し、アイルランド自由國を建設したのであるが、彼等アイルランド人は尚かつる自治に満足せず、一九三三年デヴァレラ首相の就任以來ますます獨立を強化し、一九三七年以來はイギリス側で用ひるアイルランド自由國なる名称を忌避し自らアイルランド語のエール共和國といふ名

稱を用ひ、茲數年来一獨立國としてこの行動を採りつゝある。アイルランド自由國が英自治領と見る可きか或ひは別個の獨立國と見る可きかは別問題として、今日のアイルランド自由國は自治領の唯一の義務とせられてゐる。共同の王冠に對する忠誠さへも認めず一九三七年ジョージ六世の戴冠式に際しては、世界の有ゆる國々から祝賀の使節を倫敦に送つたそのなかで、使節を送らなかつたのは伊太利を除けばアイルランド自由國のみであつたといふことは、以て英國關係の如何なるものであるかを推測せしむるに十分である。

最後に現在アイルランド自由國の對英問題の中心をなして居る處の軍事問題、貿易問題について概観しよう。先づ軍事問題については、一九二一年の英愛平和條約には、外國の陸海空軍に對しアイルランドを對英攻撃の根據地として利用せしめなむといふ條項があるが、之に對しアイルランドが如何なる態度に出るかといふことが注目の的となつてゐる。イギリス側としては、アイルランドは對英攻撃基地として利用される可

能性は無く、またその危険ある場合にはイギリスが先手を打つてアイルランドに敵を接近せしめろい措置を取ると豪語してゐるといふ。それはとにかくアイルランドが外國をして其の國土を對英攻撃基地として使用せしむる場合にはアイルランドもまたイギリスによつて容易に攻撃さるゝことは云ふまでもなく、また攻撃によりアイルランドの蒙る損害も甚だしいであらうことは想像に難くない。従つてアイルランドが容易に輕舉盲動し得ないことは明白である。

次に貿易關係について述べれば英愛關係が一般に對立状態にあることは既に繰返し述べた如くであるが、一方英愛間の經濟關係がその地理的關係からして唇齒輔車の關係にあるべきことも事實である。アイルランドはアイルランド獨立年賦金（土地領有報償金）の支拂をイギリスより要求されたが之を拒絶せるため、其の對英輸入品に對し報復的に極めて高い輸入關稅を課せられてゐる。かゝる事情にも拘らずアイルランドの對英貿易は、それ以外の世界各地との貿易總計よりも遙かに多額である

といふ奇異な現象を示してゐる。アイルランドとしては如何に高率関税を課せられても、損を覺悟で対英輸出の維持増加に頼らなければならぬ事情にある。他方イギリスとしても口先だけではアイルランド生産物の輸入禁止によつてアイルランド農民は全滅すると強がり云つてゐるが、国内食糧品の需給上、アイルランドの対英行動に憤慨しつゝもアイルランド生産物に対し断乎たる輸入禁止の強硬策に出られないといふ事情にある。イギリスの識者の内にはイギリスに対するアイルランドの軍事的重要性を強調し、英愛間の融和を計るべしと主張するものがあるといふことである。

第四章 英植民地民族事情

第一節 カナダ

カナダの存在は既に十一世紀頃から北歐人によつて知られて居り、彼等による植民活動も時折行はれはしか、何れも一時的のものに過ぎなかつた。カナダに於ける本格的な植民の行はれ始めは之より遙か後れ、十六世紀に入つてからである。

一五三五年に佛人カルティエはニューファウンドランドよりセントピールズ河を溯つて探検し、モントリオールに達し、フランス国王の名に於て同地方を占領した。次いで一六一六年、三年シャンプレーン合戦はアンリ第四の命によりカナダ植民に従事し、アゲジヤ、ノヴァスコシア、クエベックの二植民地を建設し、鋭意植民地の拡張に努めた結果フランスの勢力

は次第に強固に行つておつた。

一方イギリスも十七世紀の初頭以来積極的にカナダ植民地の建設に兼出し、一六二八年にはフランス植民地ノヴァスコシアを占領するに至つた。

かくして十七世紀以後植民地争覇をめぐつて英佛間の対立抗争は愈々激化するこゝろ行つた。殊に欧州に於けるスペイン王位継承戦争その他をめぐり英佛の争ひは植民地にも反映して、英佛植民地戦を一層深刻なものとした。

英佛争覇は結局イギリスの勝利に歸し、イギリスは一七一三年のユトシヒト條約によりニューファンドランド、ノヴァスコシア及ハドソン湾沿岸地方を領有した。其後欧州に七年戦争が起つたが、イギリスはフランスが大陸の戦争に忙殺され、植民地を顧みないままに棄じ五大湖地方の要塞並にフランス植民地の本拠たるクエバックを陥れた。次いでイギリスはパリ平和條約によつて全カナダを正式にフランスより譲渡せ

しむるニと、行つた。

其後イギリスはカナダ植民地に於る英佛両系植民者の融和を計るため
に、旧佛領地域の住民に対し頗る広汎な地方自治権を賦與すると共に民
法、商法等もフランス法の踏襲を許し、用語及信仰の自由をも確認して
民心の安定に努力するといふ寛大な態度に出たのである。かゝるイギリ
スの努力にも拘らず、人種、宗教、言語、風俗、習慣等の相違は両系人
民の融和を阻害し兩者間の対立関係を解消するに至らなかつた。

イギリスのカナダ領有の初期に於てはカナダは上下カナダ、ノヴァス
コシア、ニューブランズウィックの四つの自治的植民地から成つてお
れたが、各植民地の発達に伴ひ、之等各地を聯絡統轄すべき中央政府の必
要を生じ、一八六七年強力をなす中央政府を有する聯邦即ちカナダ自治領
が組織せられるに至り、茲に今日の政治制度が確立されることになつた。
其の後マニトバ、英領コロムビア、プリンスエドワード島、サスカチ
ワン、アルバータの五州が聯邦に加入し、また西北領地方及ユーコン地

方が聯邦の直轄地域に編入され、ここに九個の自治州と二個の聯邦直轄州とより成り、現在のカナダ聯邦の様態が整へられたのである。

その後第一次欧州大戰があり、カナダも参戦してイギリスのたぬめ貢獻するところ多く、その結果ヴェルサイユ平和會議に際しては、カナダは之に對し自らの代表を送り、更に條約に署名する權限をも与へられた。

第一次大戰以後の時期はカナダの国力が次第に充實すると共に、その享有する自治權の内容も次第に高められて行つた時代である。

一九二三年の英帝國會議、一九二六年の同會を経てカナダの独立的地位は次第に強化されていつたが、一九三一年に發布されたウェストミンスタ「憲章は各自治領とグレートブリテンとは互に共同の王冠を推戴するといふこの外に何等の從屬關係を認めない、完全に平等な立場に立つものである」といふことも明示してゐる。

自治領は最早「帝國の内部に於て独立」であるのみでなく「世界に於て独立」なものである。自治領は今日に於ては單に「自治權を委ねられた

植民地」ではなく、植民地以上の一種の独立國家であるといはなければならぬ。

本國と自治領との關係は「共同の王冠」に対する忠誠」によつて結ばれておるけれども、其の權利に於ては対等であり、本國政府の發言や行動は何等自治領を拘束し得ない。本國に於ける如何なる權力機關も、憲法も、議會も自治領に對し何等命令する力を有つておらない。しかも自治は對内關係に對してのみではない。

對外關係に於いても同様である。外交問題に關しては本國と自治領の間には意見の交換や意思の疎通は行はれなければならない。政策の決定は各独立に行はれる。戦争に参加するか否かといふこと々々へ自治領が独立し、別個に決定すべき事情である。

かくの如く最早今日に於ては自治領を以て一種の獨立國と見ることから寧ろ現實に側した觀方といふべきである。またこれを自治領住民の心理状態といふ方面からみても、今日カナダ人や濠洲人は自らを「カナダ人

「濠洲人」として意識し、最早「イギリス人」としては意識しておかないのである。彼等が所謂本国に協力するとしても、それは本国の爲にではなく、共同の存にのみかのためになすに過ぎないのである。

また自治領の唯一の義務とせられておるところの「共同の王冠」に対する忠誠の解釈も自治領に於て区々であり、アイルランドの如きもあり得るのである。

以上極めて簡略ではあるが、我々はいはいこのカナダ小史を通観してこゝに注目すべき二つの事実を見出すのである。

其の第一は歴史家の謂ゆる英帝国の遠心化の過程即ち植民地の分離独立化の過程である。

元来カナダは植民政策学上の謂ゆる移住植民地として発展したものである。かくの如き、フンカロサクソン乃至白色人種の移住地に対するイギリス本国の統治方針は専ら収奪と搾取を目的とする開発植民地に対するものとは全く異り、移住者による自治といふことであつた。勿論自治

領がその完全なる自治権を獲得する過程に於て、本国の利益のため植民地の自由が束縛されるといふことはあつた。しかしこれは植民地の成育過程に見られる寧ろ非原則的な現象であつて、移住植民地に対する本国の本質的態度は本国の出店ともいふべき移住植民地の健全なる發展を希望するにあつたものと考へられる。

自治領に対する本国の態度が如何なるものであつたとするならば、人種的・文化的共通性の莫より見るも本国と移住植民地との間には、異人種、異文化より成り、それに対する目的が單なる擧取に過ぎないところの收奪植民地乃至開發植民地との間に見られる、如き深刻な民族的対立關係が生ずる餘地のないことは当然である。

カナダと英本国との間に何等の利害の対立がなかつたといふのは、いかゞその事實を以てイギリス人とカナダ人の民族的対立相剋と解することには妥当でないであらう。寧ろ問題はカナダがその成長発達と共に次第に母国を去るイギリスより分離獨立化の傾向を強め、最早今日に於

いは完全な独立国として本国と完全に対等な地位に致達したといふことと一方その地理的な条件も乍助の米國に對し政治的、経済的、文化的に次第に接近の形勢を示しつつあるといふことである。

以上の問題はカナダに於ける英佛西系住民の対立相剋といふ純然たる國內問題である。カナダ小史が示してゐる通り、カナダ史の少くからして部分は英佛人の血醒き争闘によつて占められてゐる。今日に於てもカナダには多数のウランズ系移民の子孫があり、それらは大局的にはアングロサクソンに同化され、広義のアングロサクソンを形成してゐるとはいへば何人種的、宗教的、文化的相違等に基づく対立関係を解消してゐない。

否佛系民族を以て独立の共和国を建設せんとする所謂ウレンシヤ共和国建設運動は國際情勢逼迫の現状に於て一時屏息せるとはいへば、将来再び表面化するものと見られてゐる。そこを本稿に於ては先がカナダ自体の直面する国内的な民族問題として英佛西系カナダ人の摩擦相剋の問題

について極めて簡單な展望を行ひ、その後心カナダの対英、対米關係に多少論及しようと思ふ。

合衆國がこゝに移住して来れる種々雑多の異分子を同化して、アメリカ的オングロサクソン文化を建設したるに反し、カナダは移民の人種が單純であるに拘らず、依然として同化し切れぬ人種問題の悩を抱いてゐるのである。即ち一方に於ては英佛兩國間の協定によつて特殊の權利を享有し飽くまで、その独自の個性を維持しつゝあるフランス的カナダ文化とイギリスの傳統を享けつゝ英國的カナダ文化とが並立する。その上に南に隣接する強大なるアメリカ文化の影響をも受け入れ、カナダは正に之等三つの文化型の混合の上で錯雜混濁たる、様相を呈してゐるのである。カナダには佛系カナダ人専門の學校があり、新聞もあり、特殊社会施設があり、佛系カナダ文学と称されるものさへ生れてゐるといふ。以て此間の事情を察するに足るであらう。

歐洲人のカナダ開拓初期より十八世紀の末に合衆國の獨立を見るまで

の期間に於てはカナダ人口の大部分はフランス系住民によつて占められてゐた。合衆国独立に先立つ二十年の一七六三年には佛系住民の人口数は六万五千にあつたと云はれてゐる。合衆国独立後独立地域内に住む物民中飽くまで英本国との連繫を保たうとする人々は大半して北方へ再移住をなし、こゝに於て従来フランス系住民によつて大部分を占めて居つたカナダは俄に英系住民を加へ、やがて英系カナダ人が佛系カナダ人を凌駕するに至つた。

フランス系カナダ人がイギリスの治下に入れられてから既に百八十年になるが、この間佛系カナダ人はよく既得の特殊的地位を失はず、寧ろ前途に民族的優越性をさへ期待されてゐるのは主として宗教に起因するものであり、フランス系旧教徒をして英国系新教徒と別個の存在を得せしめたのは正に教会の活動によるものであるとされてゐる。

旧教会は新教教会に比して遙かに大なる社会的支配力或は活動性を有するといはれてゐるが、カナダに於ける旧教教会の勢力はフランス系カナ

が人の初等学校から大学までの教育機関を全く掌握しつゝあり、この
教会勢力下にあるフランス系の教育機関によつてフランス文化の傳統が
永く保持され得たものとある。フランス系カナダ人の團結を助成する役割
を果しつゝあるフランス語はクエベック州に於ては英佛間の條約により容
認保障され、諸学校の第一國語とされてゐる。このことがクエベックをし
て、ますます佛系カナダ人の本據をらしめてゐる。

イギリス人とフランス人とは血統上必ずしも遠縁ではないが多くの英
に於て異なる特徴を有つてゐると云はれてゐる。例へば気質といふ英か
らみてもフランス人の理窟屋に對しイギリス人の現實第一主義、英人の
鈍重に對し佛人の輕妙、英人の常識的に對しフランス人の天才的と挙げ
れば切りのない程の違ひがある。ところが英系カナダ人とフランス系カ
ナダ人との差違は英本國人と佛本國人との差違に勝るとも劣らぬとい
はれてゐる。マツククリアリー教授はカナダは國民といふ共通の絆で結
ばれ、二つの國語と二つの人種から成立つ國であるといつてゐる。

かくて之等兩者の間には種々の問題についてしつくり意見の一致を見ないといふことは当然であらう。英佛両系住民が如何に非融和的であるかといふことについては、これに二、三の例を挙げて之を推測することにしてしよう。

先づ一つは先づ一言したラレンシア共和国建設の問題である。佛系カナダ人の指導者達は同種全住民を糾合して独立を企て、合衆国の東部に隣接するセントローレンス地方をカナダ聯邦から分離し、そこで旧敵勢力を背景とする一共和国を建設せんとする運動を最近まで続け、未だといふことである。この運動は第一次大戦の勃発、カナダの対独宣戦といふ國際的緊急事態の下に於て一時そのかげを秘めてはいるもの、將來再び燃え上るべきものと見られてゐる。

また一九三九年に入り第二次大戦勃発し、イギリスの対独宣戦布告に直面するや、カナダ首相は直ちに凡ゆる方法により對英援助を行ふべきことを声明し、次いで総督は聯邦議會に於て独加間には戦争状態の存在す

了ことを宣言し、之に引續き英國國王がカナダ國王の資格に於て対独宣
戰布告文に署名し、カナダは名実共に参戰することになった。カナダの
宣戰問題に關し、州政府の聯邦政府に対する態度は必ずしも支持的では
なく、フランス系カナダ人の本據たるクエベック州の如きは聯邦政府の措
置が州の自治権を侵害するとの理由で反対した。当時若し英軍が英本土
で敗戦すれば英政府及英艦隊は殆んど異論なくカナダへ移駐し、カナダ
より抗戰を繼續するといふ態勢を示しておたのである。かゝる緊急事態
にありながら、戦争に關する英佛兩系民族の見解が対立状態にありたと
いふことは、真に驚くべきこと、云はざるを得ない。かゝる一例を以て
しても兩民族の非融和的狀態を推測するに十分である。

之と同様のことが第一次大戦に於ても見られ、当時聯邦議會に於ける
クエベック州選出聯邦議員の戦争参加反対、強制徴兵反対等の事實があり、
カナダ全土の統一に幾多の支障を来たしたのである。

カナダに於ける英佛兩系民族の対立抗戰及びその前途といふ問題もつ

いては、人口問題が極めて密接な結び付を有つて居り之を省略すること
は出来ないので、こゝに簡單ながらカナタの人口問題に一言觸れて居き
たい。

一九三一年の調査の結果によればカナタの人口数は約千三百八十万人であ
つた。その内九七%は欧州系であり、その内英系は五二%と過半数を占
め、之に次いでがフランス系の二八%、ドイツ系五%でこれら三者のみ
で八五%を占めてゐることになる。之を以てしてもカナタが如何に完全
な白色人種国であるかが分る。先住民たるエスキモー及米系印度人は合
計僅かに二十万と過らない。一方一八七一年に於ける人口数は三百六
十九万であつたが之を一九三一年の人口数と比較すれば、この七十年
間に約三八倍の人口増加を示したことになる。一八七一年以来のカナタ
人の自然増加率を示せば次表の如くである。

一八七一	—	一八八一	一七、二三
一八八一	—	一八九一	一、七六

一八九一	一九〇一	一九一一年	一九二一年
一八九一	一九〇一	一九一一年	一九二一年
一九〇一	一九一一年	一九二一年	一九三一年
一九一一年	一九二一年	一九三一年	一九四一年
一九二一年	一九三一年	一九四一年	一九五一年
一九三一年	一九四一年	一九五一年	一九六一年
一九四一年	一九五一年	一九六一年	一九七一年
一九五一年	一九六一年	一九七一年	一九八一年
一九六一年	一九七一年	一九八一年	一九九一年
一九七一年	一九八一年	一九九一年	二〇〇一年

カナダの如き移住植民地に於ては人口増加に關しては自然増加より移入超過がより大なる役割を演ずること屢々ある。

事實約三十年前まではカナダ人口増加の主たる原因は自然増加のみならず移入超過であつた。

殊に一九〇一年—一九一一年の人口増加は移民殺到に負ふところ極めて大である。即ち同期間に於ける移入超過は九十八万以上に達した。

之に對し自然増加は八十五万に過ぎなかつたのである。然ると一九一一年以後に於ては移入超過と自然増加の地位は転倒した。

特に一九三〇年以後は新移民に對し嚴格な移民制限法が適用されることとなつたため、それ以後の人口増加は殆んど全く自然増加によることとなつたのである。

カナガ自領全土について人口動態統計が得られるやうになつたのは一九二六年からであるが、各州についてはそれ以前の数字が利用し得る。それらによつてカナガの出生率は異常に高かつたことか推察し得る。

其後出生率は次第に低下したが、然し一九二六—三〇年といふ比較的最近までカナガの出生率は二四・一といふ割合に高い率を維持して居つたのである。この当時濠洲の出生率は二〇・九九、ニュージーランドは一六・七、イングランドウエールスは一六・七といふ出生率にまで下つて居つたのである。

しかしカナガの出生率を州別に觀察すると、九つの州の間には相當の差違のあることを知るのである。例へば佐ベック州では三〇・五の高率を示してゐる一方オントリオ州では二一、英領コロンビアでは一六・二と極めて低率を示してゐる。かくの如き州別出生率の著しい差違は如何なる原因に基くものかあらうか、マツククリアリー教授によれば、かかる地

方別出生率の差違は経済的或は社会的地位、又は人口の体性別構成の差違といふのが如き普通の原因によつては説明し得ないものゝあり、それらは宗教の相違といふことを意味する人種の差違と関聯を有するものゝありと述べておる。

カナダ人の出生率について最も重要な特色は、各州の出生率が佛系カナダ人の人口割合に応じて異なつて居るといふことである。例ば佛系カナダ人が全人口の七九%を占むるケベック州に於ては一九二六—三〇年の出生率は三〇・五であつたが、一方佛系カナダ人の割合が七・八%に過ぎない、オンタリオ州に於ては同年の出生率は二一・五であり、更にその割合が二・一%に過ぎない英領コロムビアに於ては僅かに一六・二に過ぎないのである。かかる現象は要するに佛系カナダ人の出生率が高く、英系カナダ人に於ては低いことを物語つておるのである。かくの如き佛系カナダ人の高出生率を以て人種的な特性と考へ得ないことは、彼等の母國の出生率を見れば分るであらう。

佛系カナダ人の高出生率はローマン・カソリック教会の影響であること説明する外は打い。佛系カナダ人の殆んど全部は熱心な旧教徒でありカソリック教会は避妊を禁じておるからである。因みに英国系カナダ人は主として新教の各派を信奉し、佛系カナダ人は旧教徒信奉に一貫しておる。といふ宗教上の相違は既に著名な事実である。

一 オフフランス系カナダ人の圧倒的に多いクエベック州の死亡率はカナダとしては最も高率を示しておる。それと反し英系カナダ人の多いオンタリオ、英領コロンビア州に於ては死亡率は格段に低い。即ち佛系カナダ人は謂ゆる多産多亡型であり、英系カナダ人は少産少死型に属するものといふを得るのである。

そして、出生、死亡を差引きして、人口増加率といふ点から見れば佛系カナダ人の圧倒的勝利で佛系カナダ人は英系カナダ人に比し問題にならない程旺盛な増殖力を示しておることには表裏は見らるゝ通りである。

一九三四年に於ける主要州別人口動態率

	出生率	死亡率	自然増加率
カナダ全国	二〇・五	九・四	一一・一
クエベック	二五・五	一〇・六	一四・七
オンタリオ	一七・五	九・九	七・六
英領コロンビア	一三・五	八・八	四・七

かくの如き民族別差別増殖力の結果としてカナダの民族別構成が次第に非英国的方向に變化しつつあることは云ふ迄もない。誠みれば過去六十年間に於ける英系カナダ人の人口割合を見るに下表の如く次第に低下しつつある。

一八七一年	六〇%
一九〇一年	五七%
一九一一年	五四%
一九二一年	五五%

一九三一年

五二%

なほこの六十年間に於てフランスからの新移民はなかつたのれ、イギリスからの移民は夥しい数に達したといふことを考へ合せると右の表は佛系カナダ人の増殖力が英系カナダ人^に比し如何に旺盛であつたかといふことを示してゐるのである。

一九三一年の調査当時英國系カナダ人は五百三十八万餘で全人口の五二%を占めて居り、佛系カナダ人の本據たるクエベック州を除けば大体至る所を主要民族の地位を占め、特に東部三州に於ては全住民の七一%といふ高い割合を占めてゐる。これに対し佛系カナダ人は二百九十二万餘でカナダ全人口の二八%を占むるに過ぎず、数の上から英系カナダ人は相當の開がある。

しかしながら、現在の民族的増殖力の差違が將來も長く持続するとするならば、半世紀の後には佛系カナダ人はカナダの支配的^な民族となる運命にあるものと予想されてゐる。

カナダ自治領は之を全体としてみれば他の自治領、合衆国或は西欧諸国に比し今尚相当に高い再生産力を有してゐる。現代カナダ人は自らを置き代へる以上の再生産をなしつゝあるのである。しかしその再生産力は次第に低下しつゝある。カナダも恐らくは西欧諸国と同一の運命を辿り、やがては純再生産率の台割れを演ずるに至るものと思はれる。ここにカナダは西欧諸国と全く共通の悩みを有つてゐるのである。しかもカナダについては更に特別の事情があるといふことは先きに述べた通りである。

マツククリアリ教授が述べてゐる通り、¹ 未来のカナダ人はシエークスピーアの言葉ではなく、モリエールの言葉を語るに至るかも知れないといふことこそ英系カナダ人はもとよりイギリスの憂慮の種となつてゐる。

以上主としてミカナダの対内問題について述べたのであるが、次にカナダの対外問題としてカナダが次第に英本國から分離独立する一方米國に

接近しつゝあるといふ莫れついで極めて簡単に述べて置かう。

カナダが第一次大戦以来次第にその国力を高めると共に漸次英本国からの政治的独立を強化してゐたといふことは、先のカナダ略史の中にて於て一言述べて置いたところであるから、こゝには繰返さない。こゝでは單に経済的側面から觀察を加へることゝしよう。

先づ貿易の方面からカナダと英米の關係を覗つて見ることにせよ。

前世紀の末期から一九三九年までの期間に於けるカナダの相年国別輸出入貿易は次表に示されておる通りである

カナダの相年国別輸出入貿易		一九一四年	一九二九年	一九三九年
米 國	四四・一%	三七・九%	三六・八%	四〇・六%
英 本 國	四七・二%	四九・九%	三一・四%	三三・五%
英本國以外の英聯邦諸國	四二・二%	五四・四%	七・八%	一一・一%
米 國 以 外 の 諸 外 國	四・五%	六・六%	二四・〇%	一三・二%

カナダ相半国別輸入貿易

	一八八六年	一九一四年	一九二九年	一九三九年
米	四四・六%	六四・〇%	六八・六%	六二・七%
英 本 國	四〇・七%	二一・四%	一五・三%	一七・六%
英本国以外の英聯邦内諸國	三・五%	三・六%	五・〇%	九・九%
米國以外の諸外國	一・二%	一・一%	一・一%	九・九%

先づカナダの輸出貿易についてみるに前世紀の末期から第一次大戦勃発までの約三十年間には、カナダの対米輸出貿易は常に対英本国輸出貿易以下であつた。即ちこの期間には、英本国はカナダの農産物に対する顧客として米國に比しより重要であつたのである。然るに第一次大戦以後は形勢は逆転し、対米輸出の方が対英輸出を凌駕するに至つたのである。

次に十九世紀の末以後最近に至るまでのカナダの輸入貿易をみると、米國よりの輸入は圧倒的に旺盛であり、常に英本国よりの輸入の数倍の

額に達してゐるのみでなく、次第に増加する傾向を示してゐると反し、英本国よりの輸入は次第に減少しつゝあることを知り得るのである。

更に注意すべき事は輸出入貿易を通じて、英本国以外の英聯邦内諸国及米國以外の外國との貿易比重が増大しつゝあるといふことである。之等の数字は、カナダの立場よりする限り、対英本国貿易の衰退を米國並に英聯邦諸国及諸外國との貿易の隆盛によつて置代へたことを意味するものであり、貿易の上からもカナダが次第に英本国より離れ、米國其他との聯繫を強めつゝある形勢を現は得るのである。

次に英加及米加の貿易関係を英國及び米國の側からみれば如何なる情況にあるであらうか。

英國の一九三八年に於ける輸出総額は五億三千万磅餘であつたが、之を相半國別に見るとカナダはその四四%で第七位を占むると是が獨乙の五〇%よりもなほ下位にある状態にある。

また英國の輸入総額九億二千万磅を相半國別に見ると第一位は米國の

一三・八%であり、カナダは第二位を占めて八・五%となつてゐるが、二の
こはカナダが英國の必要とする原料食料品の相当多くの部分を賙つて
ゐるといふ意味に於て寧ろカナダの対英発言権を増大せしむるものでも
あるとも解し得る。然らば米國の対外貿易に於けるカナダの地位如何とい
ふに、一九三八年に於ける米國の輸出総額三十億九千四百十萬弗のうち
カナダはその一五%を占め英國の一六・八%に次ぎ米國最大の顧客である
また輸入の方面に於ては米國の輸入総額十九億六千五百三十萬弗のうち
一位は断然カナダで一三・二%を占め第二位の英本国六・〇%と格段の差
がある。

次に投資の方面から英加、米加関係を眺めてみよう。
カナダに投下された外國資本は一九三七年末現在で六十七億六千五百
萬弗、その内五八%餘りは合衆國の投資であり、英國の分は三九%に過
ぎない。カナダに投下された外國資本は右の如く巨額に達してゐるの
あるか、一方カナダとしても相當の海外投資をなしてゐる訣である。

然し債務の方がより多いことは云ふまでもなく、毎年巨額の利子配当の支拂を行つてゐる。

一九三六年及三八年に於ける、カナダの米國資本に對する利子配当支拂超過額はそれより一億九千二百萬弗及二億百萬弗に達した。之に對し對英本國利子配当支拂超過額は八千三百萬弗及八千二百萬弗に過ぎない。しかも一九三六年を一九三八年に比較すると對米支拂超過額は増加してゐるが、對英本國支拂超過額は僅かながら減少してゐるのである。之等の數字によつても、カナダの對米依存性が次第に高まりつゝあると共に、對英本國關係が次第に稀薄になりつゝあることが領けらるゝのである。更にカナダに於ける外國資本の投下状態を米國及英本國の側から見ると如何なる状態にあるであらうか。先づ米國側からみると、一九三六年に於ける米國の海外投資総額約百三十億弗のうちカナダに對する分は二六・九%を第一位にあり、これに次ぐドイツに對する九・二%とは雲泥の差がある。

一方英国側から見ると、一九三六年に於ける英国の対外投資総額は約三十七億磅にあり、之を国別にみると、第一位は濠洲の一五・四%、第二位は印度の一四・三%、第三位はカナダの一四・一%、第四位は米国のカナダに對する関係とは可成りの開きが認められる。

以上の如く、貿易及投資の方面よりしてもカナダと米国との相互依存の関係が極めて深く到底英加関係の比ではないことを知り得るであらう。

以上の如き経済的事実によつてもカナダに對する英米の引力の何れが強いかといふことは推察に難くない。地勢的にみてもカナダは北米の延長地域であり、この間何等自然的な国境を有しておかないと言はれておるが、かゝる地政学的條件がカナダに及ぼす米国の牽引力をいよゝく強大ならしめることは当然であらう。

殊に一九四〇年の米加共同防衛協定は、従来一貫して孤立政策を固執し、米国の汎米工作への参加を頑強に拒否しつゝあつたカナダが遂に米国の共同工作へ加盟することを意味し、こゝに米加関係はいよゝく緊

密化すること、行つたものであり、カナダ外交の劃期的転向として極めて注目されてゐる。事実カナダ人自身の間に於てもカナダは最早名目上英國女王の治下にあるのみが實際には米国の北辺延長地帯に等しくなつておるとの意識が相当に強められて来てゐるとのことである。

しかしながら、カナダは今尚英國に対する忠誠を失つておないし、一種の宗教的觀念とさへ云はれる程の強烈な英國主義的感情を有つてゐると云はれてゐる。

一方米國に対しては親しみのうちにも、自己の存立を危くする虞があるものとして心中秘かに恐怖の念を抱いてゐるといふ。かかる恐怖心は米國の獨立当時英本國との聯繫を保ちんとしてカナダに移住した王黨派の人々が米國に対して抱いた多大の恐怖心と、限りなき怨恨をいまだに受けつぎ、現在にまでその影響を残してゐるものといはれてゐる。

因らばも今次大戦に際し米加關係は極めて緊密化することとなり、かくの如き米加兩人間の見えざる溝は癒されたとはいふものゝ、前後三回

にわたる米国のカナダ侵入等によつて抱くに至つた対米不信の感情、カナダが独立維持の意識、傳統的な対米恐怖感、怨恨は依然として消滅して
いない。之等はいつれも將來の米加関係を律するものとして注目すべき
莫であると思はれてゐる。

現在のカナダの國際的立場としては一方に於て英國に對し協調的態度
を採り、以て米國からの重圧を支ふると共に他方、三国からの脅威に對
しては米國の存在を有力なる安全保障と考へ、結局カナダの政治的独立
はこの二重依存關係の均衡保持によつて保たれざるを得ないであらうと
見られてゐる。

第二節 ニュージールランド

ニュージールランドは一六四二年オランダ人タスマンによつてその存在を認められたが、その後約百二十年間は世人より置き忘れられてゐた。其の後一七六九年に英人クックが上陸して之が占有を宣言して以来はイギリスの植民地として英領の一に加へられた。併しながら當地ニュージールランドに対する英國政府の開發方針には未だ確たるものなく、とりあへず之をオーストラリアのニューシ、サウスウエールズの屬領として取扱ふに過ぎなかつた。一八二五年英人の一団は初めて此地に移住したが間もなく立去り、フランス人も一八三五年に之を占領したが遂に保持出来なかつた。

ニュージールランド植民は英人ホブソンとマオリ族酋長がウエータンジー、條約に署名した一八四〇年以來のことである。当時白人移民は千人にも満たなかつたが、ウエーフィールド式の組織的移民計畫が成功し、ニュージール

ドが本國に対し價値ある植民なることが判明するや、イギリスは一八四一年之をオーストラリアの屬領より介離し、獨立の植民地とし、積極的開發に着手した。それ以來人口は次第に増加し、一九三六年には遂に百五十万を突破するに至つた。ニュージランドはオーストラリアと共にイギリス人が大量的に植民して成功した例と見做されてゐるが、一八四〇年英國の宗主権宣言以來僅々一世紀にして近代國家としての形態と内容を整へ、僅かに百五十萬の人口を以て英聯邦の一自治領として克く自立自存を計り得るまでに發展し得たのは開發の方法が組織的であつたればこそであると言はれてゐる。因にニュージランドは一九三一年のウエストミンスター憲章によつて自治領の資格を与へられた。

ニュージランドは世界中で最も英國的であると云はれてゐる。或るイギリス人の如きはニュージランドはイギリス以上に英國的であるとさへ云つてゐる。ニュージランドの移民は殆ど全部イングラントから来たものであるがオーストラリアに渡つた移民の多くはアイルランド、スコツ

トランド及ウエルス地方からのイギリス人を主流として居る。このことがニュージブランドを以て英國的即ちイングランド的ならしめてゐる原因である。ついでながらカナダに於ける英系カナダ人の出身地を見ると、イングランド系が五二%、スコットランド系が二五%、アイルランド系が二三%といはれてゐるが、然しカナダ在住のイングランド系人民もその多くは北イングランド地方の系統を曳くものとされ、北イングランドとスコットランドの相似性から見て結局英系カナダ人の大部分は極めてスコットランド的色彩が濃厚であるとされてゐる。かかる民族構成上の相違が自治領中にあつてニュージブランドを以て最も英國的ならしめてゐる原因である。

ニュージブランドの移民がイングラント一色であるといふことが、植民地社会を極めて單純、自然的ならしむることには云ふまでもなく、殊にニュージブラントにはオーストラリアの如く罪人の流刑を行はなかつたがために、社会の空気は極めて明朗であるといふ。

尚ほの如きニュージランドの純一性は今日まで採らぬ来た移民政策によつて一層擁護されたことは云ふまでもないがこの点については後に述べるつもりである。

ニュージランドはオーストラリアと異なり全島温帯にあり気温の變化の少き海岸性氣候を有し白人の移住には極めて適してゐる。

ニュージランドは優れた健康地であるとされてゐるが、こゝに興味あることはニュージランド、オーストラリア共に、その自然自体が人間の身長を伸ばす作用を持つて居るといはれてゐる。此の地方に在住の歐洲人も氏を重ねるに従ひ一樣に身長が高くふるといはれてゐる。ニュージランドのマオリ族も身長頗る高くスポーツ向の理想的肉体を有つて居るといふことである。

一八四〇年以來入植を開始したイギリス系住民も二代、三代となるに及んで齊しく背が伸びる傾向にあるといふ。しかし之等の現象も要するに、ニュージランドの氣候が佳良で、春秋は云ふまでもなく夏冬でする野外運動に適して居り勢ひ在住民の運動勢を高め、自然肉体的向上が

齊らざれるといふことであるらしい。

自然的な諸條件が民族性に対し何等かの程度に於て影響を及ぼしてゐることは容易に想像される。たしかに其の温和な氣候の影響を受けてゐるやうであるといふものも、たしかに其の温和な氣候の影響を受けてゐるやうである。

同じ英聯邦内にある自治領でも、オーストラリア人、ニュージーランド人とカナダ人、或は南阿聯邦人とは性格の上に非常な相違を見出すといはれてゐる。カナダ人がカナダの天地に米國と對等の文化を築き上げ、けるには米國人が今日の地位を獲るために拂つて来た努力に数倍する努力を傾注しなければならぬ程の自然的に不利な條件の下にあつたといはれてゐる。カナダ人は米國を評して機会によつて築き上げられたものとして、自身カナダは機會の代りに忍耐によつて築き上げられたものとして止まない。カナダ人の環境はカナダ人を苦しめて、何よりも仕事を分一とする性格を形成せしめたのである。之に対し、ニュージーランド人は一躍一富豪に成りたいといふやうな願望は餘り持ち合せて居らず生活

に事足りる程度の財源確保を以て満足するといはれてゐる。この点一獲千金を夢見る南阿联邦人とは全く対蹠的存在であると云ふ。

ニュージールランド人もオーストラリア人もその青年壯年の時代には非常に勤勉に働くが、決して老後まであくせく働かず、まだ活カのあるうちに隠退して生活を樂しむことを理想としてゐるといはれてゐる。

かゝる生活態度を反映せりや否やは確言出来ないが、ニュージールランドにもオーストラリアにも拔んだ富豪の類は非常に稀で、その反面極端な貧民層も少く従つて中産階級が比較的多数を占めてゐると云はれてゐる。その影響を受け人間同志といふ平等意識が強いといふ。之は勿論民族内部だけに通用するに過ぎない。

ニュージールランド及オーストラリアは「労働者の天國」と云はれて居るだけあつて、各種の労働立法の外一般社会施設と完備されてゐるといはれるが一つは階級的類似性の然らしむるところであらう。

さてニュージールランドは氣候が白人の定住に適し、資源また豊富であ

リ、かて、加へて植民計畫宜しきを得たため、こゝに於ける植民事業は非常なる成巧を納め得たのである。然し乍ら、入植の初期に於ては可成りの困難や支障が横たはつてゐた。頭初歐洲人の植民が發展しなかつたのは、オーストラリアの先住民族に比し文化程度の遙かに高く、またその人口数も多い原住民マオリ族によつて妨害されたからである。マオリ族はオーストラリアの原住民と異なり文化に頓応する能力を有し、農耕に長じ工藝に巧であるといはてゐる。

近來マオリ族の数は極めて少数であり、一九三六年の國勢調査によると、その人口数は混血人を入れて八万二千八、ヨーロッパ人の百四十八万余に對し僅かに五%程度を占むるに過ぎない状態である。今日白人のマオリ族に對する態度は相當寛大であり、現在マオリ族は白人と同一の政治的権力を与へられつゝあるが、一八六〇年代に於ては白人植民者との間に血腥き鬭争が続けられてゐたのである。

紛争の原因はホブソンとニュージランドの主なる酋長との間に締結

されたる所謂ウエータンジ條約にあつた。本條約は次の三箇條約より成り、
第一條 ニユージーランドの酋長は土地人民に関する一切の權利を英國
女皇に讓渡すべきこと。

第二條 英國女皇は酋長の所有に届する土地、森林、漁業其の他の財産
に對して十分なる保護を与ふべきこと、但し彼等が其の所有地
を賣却せんとするときは英國政府に申出でて其の許可を受くべ
きこと。

第三條 英國女皇の名に於て土人に對しては總て英國臣民と同一の權利
を与へる。

といふのであつた。然るに土人は條約の何たるやを解しなかつたため
、後にイギリス人とマリオ族との間に紛争をかもすことゝなつた。

果せるかを一八五〇年代に至つて土地の所有問題に關し白人とマリオ
族との間に一大紛擾を見るに至つたが、政府はマリオ族に對し極めて威
嚇的態度に出たため、一八六〇年より六六年にあたり、長期の戦亂が起

つた。

當時マリオ族の人口十二萬人は十年以内に半減したといはれてゐる。結局戦争は英國人の勝利に歸したが、政府は原住民に対し種々待遇上の改善を計ることの必要を認め、彼等のために、学校、病院等を設け、下院に四人の議員を出席せしむる権利を附與した。後に至り、労働者保護に関する法律制定せられ、無料の学校教育、強制的仲裁手続、仲裁裁判及最低労賃並に養老年金等の諸制度が施かれ、マリオ族の社会的生存が保障さるゝことゝなつた。

現在マリオ族は歐洲人と平等なる政治的地位を享有し、人口数に比例しヨーロッパ系移民と同一割合の兩院議員を有し、内閣に閣僚を送り、また社会の各方面に重要な地地位を占めてゐる。

尚オーストラリアの原住民が滅亡に瀕してゐるのと異なり、マリオ族の増加率の大なることは注目すべくニュージランドの白人人口の自然増加率が一路減退の傾向を示してゐる一方マリオ人の増加率は近年ヨ

ロツパ人を遙かに凌ぎ、逐年増加の傾向にあるといふ。

ニュージールランドの現在直面する最も重要な問題に人口問題がある。

以下ニュージールランドの人口事情について簡単に述べて見よう。

十五年程前までは、マリオ人以外のニュージールランドの人口は非常な勢いで増加したのである。例へば一八八一—一九二〇年の四十年間に於ては、年平均の増加率は人口千につき二三といふ非常な高率であつた。

それ以後一九二六年に至るまでは増加率は極めて高く二〇と云ふ率を維持したが、同年以降は次第に低落し、一九三四年には遂に六・四にまで低下した。

尤も一八七一—七五年までの人口増加は主として移民によるものである。例へば右の五ヶ年間に於ける自然増加は四萬餘に過ぎないが、移入超過は約八万二千にも達して居るのである。然しこれ以後の時期に於てはニュージールランドの人口増加は主として自然増加によつてゐるのである。

ヨーロッパ系のニュー・ジブラント人の出生率は以前は非常に高かつた。一八七六—八〇年の年平均出生率は人口千につき少くとも四・二には達してゐたといはれてゐる。然しそれ以後出生率は漸減し、一九三四年には一六・四七にまで低下した。一方同期間に於て死亡率と一・八から八・四八まで低下した。之は著しい死亡低下ではあるが、その低下割合は到底出生率の低下割合に及ばなかつた。

ニュー・ジブラントの死亡率の低い理由の一つはニュー・ジブラント人口に於ける青壯年人口割合が異常に高いことである。然し青壯年人口の死亡率の低いことは当然である。そこで將來之等の人々が年を取り高死亡率の年令に達する時が来れば死亡率は上昇せざるを得ない。また青壯年人口は高い出産力を有つてゐるが、之等の人口が年を取り再生産力を失ふ時が来れば出生率は著しく低下するであらう。

現在ニュー・ジブラントの純再生産率は〇・九七八であるが、このことは現在の世代が次代によつて完全には置代へられなことを意味してゐる

。従つて若しニュー！シーランドの出生率、死亡率及び移民が今後不変の
状態にあるとすれば、ニュー！シーランドの人口増加はやがて停止し、次
いで急速に減少するであらう。

右の如きニュー！シーランド人口の危機は既にニュー！シーランドの識者
によつて自覺されて居り、同國首相も「人口こそニュー！シーランド防衛
の第一線である」と強調してゐる。

更にニュー！シーランドのブレイクスロー郷は、「人口情勢が斯の如くで
あり、而も英帝國中最も魅力に充ち、また開発容易なる此の國土の空隙
を充たすために、眞剣にして遠大なる計畫が遂行されたいならば、人口
過剩にして嫉妬深き國々の、「英人は強慾であり、自ら利用しなさい人口
稀薄なる土地を他國人をして利用せしめなさい」といふ批難を打破するこ
とは出来なさい」と述べてゐるがニュー！シーランド開発を白人のみの移存
する従来の政策が最早行結りであることを自ら告白せるものと云ふべき
である。

ニエ！シーランドの総面積は附屬島嶼を含めて約十萬三千方哩、我が本洲と九州との合計よりも少しく広い。この國土に対し人口總數僅かに百六十五万余、人口密度は一平方哩僅かに十四人余に過ぎず、我國内地に比すれば三十分の一といふ稀薄さである。かゝる事實にも拘らずニエ！シーランドの採つた政策は英人第一主義であり、殊に有色人種に対しては徹底的な排斥政策を採つてゐる。

ニエ！シーランドはオーストラリアと同様、人種の純潔保持、勞賃低下防止及其他の政治的理由からアングロサクソン以外の移民を防止するに努めてゐる。一九二〇年の移民制限改正法は、英國人を親とし、英國生れの者以外は豫め許可を得るにあらざれば人口を許されないことも規定したものであつて、有色人種は勿論、白人であつても、アングロサクソン以外のものではあれば、事實上移民の人口が禁止されてゐる実狀である。

最後にニエ！シーランド對英本國の關係を一瞥して見よう。

ニユ！ジールランドはカナダ等に比し本國依存の程度は遙かに高いと云はれてゐる。先にも述べた通りニユ！ジールランド人は大部分イングラント人の系統であるが、このことがニユ！ジールランドをして特に親英的ならしめてゐるものと考えられるが、経済的にもニユ！ジールランドの本國依存度は極めて高く、従つて英本國のニユ！ジールランドに対する發言権もカナダ等に比してより大なる影響力を有つものと云ひ得る。

既に述べた通りニユ！ジールランドの社会政策的施設は極めて完備されてゐるが、之がために支出せられる費用も亦大を額に上つてゐる。しかして之等の費用は何れも公債を以て賙はれて居り、その公債の大半は英本國金融市場に於て起債されてゐる。この結果としてニユ！ジールランドは年々多額の外債利子支拂債務を負つて居る訳で、自然英本國の對ニユ！ジールランド政策がこの金融面を通じて示現され、ニユ！ジールランドの動向を大きく左右することは否み難い事實である。

更に貿易關係より見ても、ニユ！ジールランドの對英依在の極めて高度

であることを知り得る。

ニュー・ジブランドの貿易は、その産業構成を端的に反映し、輸出総額五千八百万磅のうちバター、チーズ、食肉、羊毛の如き畜産物の輸出が輸出総額の九割と云ふ圧倒的割合を占め、又輸入に於て自動車、機械器具、織物類等の工業完成品が八割以上、食料品及飲料品類が一割余を占める工業製品と食料品が輸入の九割以上を占めてゐる実状である。

而して貿易を相手國別に見ると、英本國との貿易が圧倒的に多く輸出にあつては総額の七六%、輸入にあつては四九%、輸出入総計に於ては六四%が対英本國貿易によつて占められてゐる。かくの如くニュー・ジブランドの対英依存性は金融、貿易等の經濟關係を通じても明白に認め得るのである。

第三節 オーストラリア

「大英帝國は歐洲國家ではなく歐洲外國家である」と云はれてゐる。成程大帝國は世界面積の四分の一にも相当する尨大な領域を保有してゐるけれども、その領土のうちヨーロッパに存在するものは本國カブリテン島を除けばその面積僅かに五方料に過ぎないジブラルタルの岩石と地中海の小島峙マルタに過ぎず、實に本國の一四〇倍にも相當する広漠たる植民地は何れも歐洲外の広大な地域に散在し文字通り「太陽の波せざる國」を形成してゐる。

かつる広大な領域に居住してゐる住民は、その教約五億といはれ、こゝまた世界人口の四分の一に相當する。この五億の人口中白色人種は僅かに六千六百万、殘餘の四億三千万は有色人種に屬してゐる。この白人種の中圧倒的多数を占めてゐるものはアングロサクソン民族であることは云ふまでもない。

かくて大英帝國とはアングロサクソンが、その本國に百數十倍する領土を占有しまた自らに約七倍する有色人種を支配する組織であるといふことば出来よう。

かゝる広大な而も分散的な領域の支配権を確保し得うるためには、アングロサクソンは、世界の爾餘の諸國家に隔絶せる民族力、武力、経済力を有しなければならぬ。

かへりみれば十六世紀末エリザベス時代以来間断なき膨脹の歩みを続けて来たイギリスは今世紀に於ては常に一貫して防禦的、守勢的、現状維持的であつた。イギリスが最早一世紀の世界制覇を享有し続けることの出来ぬのは世界に對する關係に於て、相對的に没落しつつあるが故である。

イギリスはその領土が分散的であり、従つて海洋の支配がその存立上不可欠條件をなしてゐること云ふまでもない。然るに第一次大戰後に於て海洋の支配に大きな變化が生じた。一九二二年のワシントン條約は英

國の海上支配権が量的に制限されたことを意味する。本條約はイギリスが單獨優越の「二強國標準」の傳統よりイギリス、フランス、アメリカの新形式に轉換せることを示すものである。更に潜水艦と空母の発達はいギリスの海上支配権を質的にも制限することゝなつた。

また世界の船舶界に於けるイギリスの地位も次第に低下した。第一次大戰直前イギリスの船舶保有量は世界の總噸数の殆ど半分に近かつたが、一九三八年には三割にも満たない状態となつた。

またイギリス經濟の最も主要な部分をなす貿易についてもイギリスの地位は相對的に低下し、第一次大戰前イギリスは世界貿易額の十四%を占め世界の第一位に居つたが、第二次大戰勃發前には遂に合衆國によつて乗越へられてしまつた。

しかしながら、かかる軍事的、經濟的優越性の喪失と共に、或はそれ以上に大英帝國の危機を招いてゐるものは實に英帝國の人口情勢にあるといふも決して過言ではない。現在のイギリス聯邦を通じ、經濟的に

社会的に、政治的、又軍事的に最も不安の焦点とせられてゐるものは即ち、抱擁する領域の広大さに比較して、余りにも人口稀薄の地を多く、且つそれをアングロサクソン民族によつて稠密化する見込みも立たないといふことである。かゝる事こそが英聯邦のあらゆる前途を不安焦燥の極へと驅立て、ゐるのである。

人口問題こそは英帝國の民族、軍事、政治、経済、社会等の各方面に於ける有ゆる困難なる問題の最も深奥なる原因をなして居るのである。このことは特に人口稀薄にして資源豊かなる濠洲に妥當するのである。本稿に於ては先づ、濠洲の対外的民族政策たる白濠主義なるものが、如何に多くの矛盾を門包して居るかといふことを、人口、国防、経済等との関聯に於て述べて見ようと思ふ。オーストラリアの原住民に關しては問題の非重要性に鑑がみ本稿の最後の部分に於て簡単に觸れて居くに止める。

一七八七年、北米に代つて罪囚の流刑地として新に登場したオースト

ラリアに所謂第一艦隊が派遣せられて以来、自由移民の来住するものも次第に増加し此の地に居住する白色人種は年と共にその数を増加するところとなつた。

一八五三年には全オーストラリアにあたつて流刑が廃止されるに至つたが、當時オーストラリアの人口は約四十八万であつたと云はれてゐる。その後人口は次第に増加し一八八〇年には二百二十六万となり、一九〇〇年には三百七十五万、一九二一年には五百四十四万、一九三三年には六百六十三万となつた。一九三六年末の人口は更に増加し六百八十一万に達したものと推定されてゐる。この總人口中英國系以外の住民は原住民を分算してもその一割にも達せず九〇%以上は英國系の移民によつて占められてゐる。

一方大島嶼大陸オーストラリア及びタスマニア島の面積は約二百九十七万平方哩を包擁し、ほぼ合衆國の面積に等しく、またカナダの五分の一に相當し、ガシトブリテン及アイルランドの約二十五倍の大きさをも有

してゐる。従つてオーストラリアの人口密度は一平方哩當り僅かに二人に過ぎず、我國に比すれば實にその百六十分の一と、殆ど空地にも等しい状態であり、しかもその人口の三五%まではシドニーとメルボルンの二都市のみに密集してゐる。

そもく英帝國全体の人口密度が既に著しく低く、一平方哩僅かに三十五人、我日本全土の三百四十六人に比較すれば一割程度の稀薄之に過ぎない。尤も英帝國だけの人口密度は流石に高く一平方哩四百人を越えてゐるが、それでも日本内地の四百三十六人には及ばないのである。

英帝國內の全自治領の面積は世界全陸地の七分の一を占むるに抱らずその人口は僅かに世界人口の七十五分の一に過ぎない。之によつても自治領の人口密度が如何に低いかといふことは容易に想像し得るであらう。

即ちカナダ聯邦は歐洲全度よりも大きい三百七十万平方哩の領域に僅か千五百萬の人口を拘擁してゐるに過ぎず、人口密度は僅かに三人である。ニュー・ジブランドはその領域十萬平方哩にマリオ種族約七万、ヨーロッパ

ツパ系住民百五十万といふ稀薄さであるが、それでもその人口密度は十五人でオーストラリアの二人やカナダの三人に比較すればそれでも八倍乃至五倍の人口稠密さである。

また南阿聯邦の領域は我國の約一倍に相當する五十万平方哩で、その現有人口は土著の黒人やアジア系諸人種五百萬にヨーロッパ系住民百六十五万で、人口密度はニュー・ジラランドに等しく十五名を數へてゐる。

かくの如く何れも甚だしく人口稀薄な自治領の内でも、オーストラリアはとりわけ甚だしい人口の稀薄さを示してゐる。

右の如く殆ど無人の國にも等しいオーストラリアが絶対に有色人種の人口を排斥し、またアングロサクソン以外の白色人種に対しても成る可くその未住を拒否せんとするのは、そもく如何なる理由によるものであらうか。

オーストラリアは屢々スーパ四に例へられる。スーパ四の縁は肥沃であつて、オーストラリア人が生活してゐるのはこの部分であり、四の中

中央部は所謂砂漠をなして、耕作上利用し得ない部分が多いといふのである。

しからばオーストラリアは果して現在既に人口抱擁力の限界に達してゐるのであらうか、この問題に解決を與へるために、オーストラリアの人口支持力に関する権威者の意見を聞いて見よう。

J. C. Bertram 博士はオーストラリアの最適人口即ち人口一人當り最大の経済福祉をもたらすべき人口を千五百万の間としてゐる。エール大学の *Ellsworth Huntington* 教授は新しく、豫期しない発見が行はれるか、或は生活程度が低下せざる限り最大人口数は二千万人を超えないと解してゐる。 *Geat* 教授も同様の見解を持ち「この有為なるオーストラリア人はスーパの縁で生活してゐる。縁の部分は肥沃であるが、皿の中央部は水の無い沙漠である。大規模な灌漑計畫は望みがない。最も樂觀的に見ても十九億四百万エーカーの内約四千万エーカーしか耕地はない。そこでオーストラリアは人類の生活する場所として見る場合に

はスペインがイタリー位の大きさに縮小することになる」と云つてゐる。他の権威者は之よりは遙かに有望であるといふ意見を持つてゐる。

Giffiths Taylor 教授は、若しオーストラリアが歐洲よみの飽和点に達するとすれば約六千五百万の人口を支持し得ると推計してゐる。 *Muller*

ott 及 *Wadhaw* はこの数字はオーストラリアの扶養能力を超えたものであり、四千万から五千万の間が實際的であると解してゐる。

アデレードの *Waite Agricultural Research Institute* *Richardson* 博

士は、オーストラリアは一億の人口を支持するに足る小麥を生産し得ると考へて居る。 *S. W. Cole* *Gray* 教授及前首相 *Idu* *ghes* の推計も之と同様である。

以上の如くオーストラリアの人口支持力の限度に関する諸家の意見はまち／＼であり、それらの間には相當の開きがある。しかし乍らオーストラリアが今日以上の多数の人口を支持し得ることは明白であり、且つ、オーストラリアの資源が明かにされるに従つて、低い推計よりも高い推

計の方が眞実に近くなりつゝあるものと思はれる。

前述の如くオーストラリアの面積はタスマニアを含めて約三百万平方哩であるが、この内約百十万平方哩は降雨量年一〇吋以下で、その大部分は沙漠状態をなしてゐる。しかし、内部は未開拓であり、近代的な灌漑方法を用ひることによつて沙漠を肥沃な工地にする可能性は大きい。その上オーストラリアには鉱物資源に恵まれてゐるから、オーストラリアの将来は非常に有望であるといふことが出来よう。

アッククリアリー教授は最も内輪に見積つてもオーストラリアはその生活程度を低下せしむることなしに現在の少くとも二倍の人口を支持し得ると云つてゐる。

事情かくの如きものとすればオーストラリアが絶対的に有色人種の移民を排斥し、またアングロサクソン以外の白人の植民をも餘り観迎しない理由は、オーストラリアが現在以上の人口を支持し得ないといふ点にあるものでないことは明白である。然らば白濠主義なるものは如何なる

意圖を有するものであらうか。

白豪のオーストラリアの論據は人種問題である。白豪主義者の意見によれば現在までの處オーストラリアには人種問題といふべき程のものはない。オーストラリア人の九割以上は英國系であり、原住民はその數六万に過ぎず、而もその大部分は白人より遠く離れて叢林中に生活して居るのであるから、全然無視し得る存在である。オーストラリアには合衆國に見られるやうな深刻な人種問題は全くないといひ得るのである。然るに非ヨーロッパ系労働者の未住を許すならば、將來深刻な人種問題が発生する虞れがある。従つてオーストラリアは人種的な難問が増加しこそすれ減少するとは思はれない。アメリカや南阿の苦しい経験を繰返す愚をなしてはならないといふのが彼等の主張なのである。こゝに特に有色人種の労働者のみが特に問題とされてゐるのは後述の経済的理由とも結びついてゐるのである。

第二は民主主義の擁護といふ見地からの有色人種排斥である。

オーストラリアは外國との紛争から殆ど全くわづらはされることなくして、そこに組織の上からもまた感情的にも眞に民主主義的なる、また全民衆が平等に経済的福祉を享受する社会を建設したといふのが同國人の誇りの種なるのである。かくの如く完全に民主主義的である。オーストラ

リアは、新移住民に対しても、その参政権を否定することは出来ない。しかるに政治的見解及傳統、社会的行動に於て相異なるこれら選挙人の投票権といふものはオーストラリアの政治にオーストラリア文明の構造を破壊する無数の因子を導き入れることとなり、オーストラリアが依然として民主主義國であり得るや否やは頗る疑しいといふのが第二の理由である、第三は経済的理由である。

アジア人の生活程度は歐洲人よりも低いから、これらがオーストラリアに來住するならば、それとの競争の結果オーストラリア労働者の現在の生活水準が脅かされる虞があるといふのが第三の理由である。アングロサクソン以外のヨーロッパ系の移民は余り親迎されておなないけれども

有色人種の絶対排斥に比べればその程度は遙かに弱い。その理由としては以上述べた三つの事項が總してその理由となる訳である。

以上が白豪主義、正確に云へばアングロサクソン濠洲主義の論據であり、理窟はどうともあれ要するに空地にも等しく、而も資源豊かなる広大な地域をアングロサクソンに依つて独占し享樂せんとするのが白豪主義の正体なのである。

然し下ら世界の一角に人口過剰の圧迫に喘ぎつゝある有爲なる民族がその資質を發揮すべき生活圏を求めて止まないに拘らず自らは之を充分に開拓し活用することもなく、單に広大な地域を独占し、続けることが果して公正なる態度と云ひ得るや否やは問はずして明かである。

オーストラリアの十分なる開発のためには更に多くの人間を必要とし、若し移民制限がないならば白豪主義の名に於て排斥さるゝ更に多くの人間は喜んで来住するとは明白である。

然るに最近に至つて各自治領に於ても漸く識者達は彼等の固執し来れ

る空地独占政策が不公正なるものであり、また如何にこの政策を維持せんとしても既に四圍の事情が之を許さざるに至りつゝあることを理解し初めたのである。

そして流石の白豪主義者達も最近に至り、一平方哩當り僅かに二人の人口を以てしては、例へその対外軍備を強化するとはいへ、活用しをうぬ大天地を徒らに一人占めすることの不公正を強硬に指摘された場合、果してよく自己の地位を保持し通せるや否やに確信を失ふに至つたのである。寧ろ無人大陸ともいふべき広大な領土を防禦するといふことは永久に不可能である。ことを彼等は「ミグ」と感せざるを得なくなつたのである。

大英帝国内の各自治領に共通し、近來最大の悩みとされてゐるのは人口過少の問題であり、アングロサクソン移民招致の問題である。殊に開拓可能な地域を未開のまま、に独占せるオーストラリアの人口問題に対する苦惱は極めて深刻である。

然し下らオーストラリアが今尚飽くまでその白濠主義を押し通さんとする希望を放棄してゐないであらうことも疑ひない。

然らばその際何物にも増して必要なことは極めて短期間にアングロサクソンを以てオーストラリアの天地を充すことではなければならぬ。

オーストラリアの人口を稠密化する手段としては、オーストラリアの自然増加率を引上げることも、多数のアングロサクソン移民を受入れる以外に方法は無い。オーストラリアに果してその成算があるだらうか。

我々は先づオーストラリアの人口状態を極めて簡単に検討してみよう。

一八七一——七五年の五年間に於てオーストラリアの出生率は人口千につき三七といふ極めて高いものであつた。

然るにこの時期を過ぎるとオーストラリアの出生率は次第に低下し、一九三四年には遂に一六・三九まで低減した。この六十年間に於て出生率は正に二分の一に減少したのである。

一方同期間に死亡率も漸次改善され、一九三四年には九・三といふ信ずべからざる数字を示した。しかし乍らかゝる死亡率の低下をもつてしても、出生率低下を中和し得なかつたのである。こゝに注意すべきことは、かくの如く低い死亡率の原因の一部は有ゆる新開発國に見らるゝ異常な年齢構成にあるといふことである。

死亡率九・三といふことは出生時に於ける平均餘命が一〇・七・五歳であることを意味するものであり、之がオーストラリアの死亡の眞の測度でないことは明かである。

一九三二―三三年に於けるオーストラリアの純再生産率は〇・九七六であつた。よこで若しオーストラリアの出生率死亡率が一九三二―三三年の状態に止まるならば、新しく生れたる千人の女兒から生れる女兒の数は九七六人に過ぎないことを意味するのである。オーストラリアの女子は、最早その数だけを再生産してゐないのである。かゝる憂ふべき事態に狼狽した英帝國主義者は速まきながら人口こそがオーストラリアの救ひ

の神であることを痛感して次の如く叫ぶのである。『オーストラリアは正に岐路に立った。オーストラリアは彼等と同じ種族に属する更に多くの人口を必要としてゐる。』と。オーストラリア聯邦首相ライオンズ達ですら『若し速かに我々各自の手によつて充分な人口を殖えつける方策も立たぬやうでは領土保有の正當さを外國に対し主張し通せなくなるであらう』と警告してゐる。

オーストラリアの唯一の頼りは英本國からの移民である。しかるに何とこの本國人口そのものが既にオーストラリアと同一の運命を辿りつゝあるやばないか。英本國は今尚海外移民を送出すべき餘力を失つてはるまいかも知れない。じかじかうでなくなる時は目睫に迫りつゝ、あり。かつ本國が自治領に供出し得る移民の数は決して自治領の危機を救済するに足るものとは到底考へ得ない。

海外発展の最盛期に於てすら、イギリスの各自治領一の移民は毎年二十万前後に過ぎなかつた。この昔の夢が再び繰返される奇蹟が出現した

としても、之が自治領にとって何の助けとならう。まして最近のイギリス移民の趨勢は却つてイギリス向戻りの超過を来さへしてゐるに於て
おや。

既に述べた如くオーストラリアを初め英聯邦内の各自治領を共通して
近來最大の悩みとされてゐるのは移民問題である。

イギリスの自治領相マクドナルド達も「若し我々の午によつて、カナ
ダ、オーストラリアを速かに開発し切れぬ。ことがあれば、例へ如何
なる制限や阻止の方法を講じても、それらの空地は外國人によつて開拓
されて了ふ現実に直面するであらう」と公言してゐる。

自治領諸國特にオーストラリアは移民問題の解決こそ自治領の死活に
関する緊急問題なりとして熱心にイギリス移民の積極的来住政策の確立
を要求し、またイギリス政府 毎年巨費を計上しオーストラリア及カナ
ダ向けの移民奨励に努力して来たが、その結果は完全に失敗に終つたの
である。イギリス移民の送出がはかばかしく進捗しないといふことの裏

には人口問題は別としても英本國と自治領間の経済上の利害の不一致及び微妙な感情上の問題がからまつてゐることとは見逃せない。

それらの点については後に觸れることとし、こゝでは先づ最近の濠洲移民の状況について一瞥しよう。

最近のオーストラリア移民の動きについて奇異な現象が現はれてゐることは、白濠主義の前途に暗陰を投ずるものとして特に注目する必要がある。

それは近來濠洲では南政移民の入國が旺盛であり、それに反して英系移民の出國数が遞増しつゝあるといふことである。

即ちオーストラリアの迎へつゝある新來住民の顔觸れはあかの他人に過ぎない南政人が圧倒的に多く肝腎の本家イギリスからの移民は新たに來住する者よりは却つてオーストラリアの移民生活に行結り逆にイギリス本國へ引揚げて行く者の方が超過してゐるといふことである。オーストラリアは既に英本國より完全に獨立した國ではあるが、然しその國を

支配しつゝ、あるものはアイルランド、ウエールス、スコットランド系統のイギリス系住民であり、彼等から見ればオーストラリアが次第に非アングロサクソンの國と化しつゝ、あるを見ては心平らかならざるは當然であらう。

試みに一九三六年に於けるオーストラリア向、南欧人の移民状態を見ると、イタリー移民は九百名、ギリシヤから九百名、ユーゴスラヴィヤから四百名等々南欧を主とする外國移民は二千五百名に達した。これらは何れもオーストラリアの採つてゐる移民阻止策或は制限策の障壁の無越へに成功した移民の數に過ぎない。之に反しイギリスからの移住民は英帝國內移民自給自足円滑化資金の奨励によつて、其の數こそ五千八百名を算したはしたが、一方オーストラリアに見限りを付けて故郷イギリスへ引揚げたイギリス人はそれよりも遙かに多い七千二百名に達したのである。かゝる形勢は決して一二年だけのものではなく、一九三〇年以來の一貫した事實である。

かくの如く、有色人種移民の絶対排斥、非アングロサクソン系移民の来住抑制の方針を取りつゝある一方、オーストラリアの最も希望するアングロサクソンの移民が近來寧ろ本國へ逆流しつゝあるといふのが最近の形勢であり、かくしてオーストラリアの人口稠密化など思ひも寄らぬ事である。オーストラリアの人口減少は僅かに不親迎の南改新移民によつて食ひ止められてゐるといふ皮肉な現象を示してゐる。なほオーストラリア移民の出戻り超過の原因に関しては次の様な事情があると云はれてゐる。

即ちオーストラリアはその移民草創時代、清教徒的なカナダ移民と甚だしく異なり、恰も帝政ロシアのシベリアに等しい色彩が加へられたもので、ために今日と雖もオーストラリア人と英本國人とは殆ど視先が同一であるに拘らず、この二者の間には第三者の想像にも及ばぬ暗い対立的な感情が未だに強く支配してゐるといふ。かくる事実がオーストラリア移民の出戻りの多いことに深い関係があると見られてゐる。

尚濠洲當局が南欧移民を成る可く拒否せんとし、彼等の入國に對し種々の條件を設けてゐるが有色人種に對する制限に比すれば遙かに寛大である。南欧各地からの濠洲移民は渡航旅費の自辨は勿論のこと、一定額の見せ金を所持し、また濠洲内に確定した就職口を有つてゐるものに限られ、而も移民當局の推薦を必要とするといはれてゐる。尤も南欧人とは雖も相當多額の見せ金所持者はそれ程移民法の拘束を受けないといふ。之に比べると、有色人種は言語、財産、健康、職業、労働條件等々に関して嚴格な入國の條件を設けられ事実上移住を不可能ならしめられてゐるのである。

オーストラリアの支配者たるアイルランド、ウエールズ、スコツトランド系のイギリス系住民が南欧人を歓迎しない理由としては彼等南欧移民が南欧に於ける慣習を固守して容易にオーストラリアの慣習に融合せず、また收入をオーストラリアに再投資せず故郷へ競つて送金し、また南欧人の激し易い氣質を現はして南欧移民の入植以來刑事事件がオース

トラリア聯邦内に著増したといふやうなことが挙げられてゐるが、要するに人種的、社会的、経済的の各種の原因が複雑にからみ合つて居り決して單純なものではないのであらう。

南欧移民の不歓迎は右の通りであるが、オーストラリアとしては、若し如何なる方法を講じてもイギリス系移民の後続部隊が得られなければ寧ろ氣質が重厚で、イギリス人の風習に近いドイツやスカンデナヴィア等の北欧の方がまだましであるといふ態度をとつて居り、南濠洲政府のバトラー首相等も「彼等南欧からの移民はオーストラリアの將來に深刻な社会対立状態を惹起するであらう。若し我々が遂に英本國からの移民を受入れる方法が立たないならば、南欧人は後廻しとして、先づ北欧からの移民を眞剣に考慮すべきである」と公言してゐる。

オーストラリアの移民が肝腎のイギリス人によつて支持されてゐないといふ近況はカナダに於ても又南阿聯邦に於ても同様に見られる處で、カナダの移民はイギリス人よりも中欧人、東欧人が絶対的多数を占め、

また南阿への移民はイギリス人よりも歐洲大陸からの方が圧倒的に優勢であるといふ風に各自治領の非アングロサクソン化の過程が著々として進行して居り、かくして各自治領は次第に中欧人、南欧人の國と化しつつあるのである。

かゝる現状に鑑がみ、英帝國としては移住奨励金の如きものを設定しつつあるが、かゝる基金の設定によつてよく移民の逆流を防ぎ得るやは疑はしい。そもく英帝國內のみで移民の自給自足を計り得ざるに至つた眞の原因こそはアングロサクソン人口自体が極めて過少であるのみならず既に衰減の兆をさへ明かにし初めた点にあるのである。

しかし假にこの点は間はずとしても、英本國が自治領の要請に答へて、本國移民の送出を決意したとしても、その実現は不可能に近しい。

自治領側の移民送出要請に対しては本國側として之に対し積極的に應じられない種々の理由がある。

イギリスとしても母國としての威信と各声確保のため、自治領各國に

差迫る國防上の最大缺陷を補強するためイギリス移民需給円滑化を要望はしてゐるのであるが、本國側として見ればこの問題を第一級の緊急重大問題としては取扱ひ兼ねる事情にあり現に今日に至るまでイギリスと各自治領との間に於ける移民需給の平衡化についてはイギリス政府としては何等有効な措置なり対応を講じてゐない有様である。

假にイギリスが本國移民を送出するとしても、これには非常に困難な經濟問題がつきまといるのである。

イギリス人の如く余りに文明に慣れた生活を続けてゐる労働者を大量に移住させ自治領の開發に使傭することゝなれば、彼等の手に成る新生産物の原價は割高となりざるを得ず、この点が自治領として重大な懸念を抱かざるを得ない。處である。且つ積極的に英人移民を求むるには、彼等が現にイギリスに於て受けてゐるのと同程度乃至それ以上遙かに良好な條件を以て、彼等の生活を保証しなければ、態々移住して来る者は尠いであらう。

そこで自治領としては、イギリスからの積極的移民によつて生産物が
増した分だけイギリス本國に輸入増加の保證をして貰ふことが必要であ
り、この保證の得られない限り、自治領としても英人移民を積極的に迎
へ得ないといふ立場にあるのである。

然し乍らイギリス本國側としては現在ですら無理以上に外國品の輸入
を制限し精一杯英聯邦内各地からの生産品輸入に努力してゐること、し
て、最早これ以上自治領生産物の輸入数量を増加することなどは全く問
題にならなないのである。

英本國の輸入の実勢は過去二十年間を通じて、各自治領は漸く二七%
を供給したに過ぎず、英帝國以外の外國生産物が過半数を占め、殊に欧
洲大陸諸國からの供給は三六%に達してゐる。之はブリテン島の經濟的
位置の然らしむるところであり、日用必需品の輸入に關しては各自治領
よりも手近かな歐洲大陸諸國に依存する必要が遙かに痛切である。

イギリス本國の住民が如何に富裕であるとしても、わざわざ遠くから

運んだ割高で品賃の低下した品物を常用出来る程の剩費は持合せてはる
ないであらう。

のみならず戦時下に於ては、長途の海上輸送は困難であり、なまじ遠
距離にある自治領生産物よりは却つて外國生産物に俟つ方が遙かに安全
性の多いことは否めない。

更にイギリスとしては自治領の生産物の輸入増加を考慮するよりも、
國內必需品の自給自足を計らなければならぬ必要に迫られ、この方が
遙かに重要問題である。

のみならず英帝國側としては近來人口減退の兆候さへ現れて来た居り
、しかも本國側として見れば既に本國から独立し去つた各自治領ではあ
り、殊にオーストラリア、カナダの如きは自分に都合の良い要求ばかり
固執し、少しも本國を本國として尊敬せず曾て一生懸命に盛立て、やつ
た分家達に却つて苦汁を味はさるるといふ割損な本家の体験を充分激
増により増加せる生産物の消費引受が英帝國國防の根本義であるとはい

へ自治領への移民奨励態度は自然消極的ならざるを得ないのである。
イギリスとしては余り頼ましくもない自治領よりも寧ろアルゼンチン
やスカンデナヴィア諸國に新密さを感じ且つまた通商の上に於てもそれを
具現してゐるといふ実狀である。

また各自治領の本國に対する態度を見ても、現下國際情勢緊迫下に於
て精々英本國の尻押しをして軍備の強大化を計らせ、自分等はその武装
英本國の蔭に隠れて安全第一を期するに如くはないと考へ、これらの好
都合な理由から自治領は差し當りイギリスを旧来通り上座に据えて利用
するといふ甚だずるいことを考へて居るのであるが、かかる自治領の態
度が本國に分らぬ筈は無く、それが再び本國の對自治領態度にも反映さ
れることにならざるを得ないのである。

之を要するに、海洋遙か彼方に散在する多くの自治領や植民地までも
イギリス自身の手で完全に防禦するといふことが最早不可能であること
は明白である、曾ての自治領相マクドナルドが述懐した通り「若し英本

國人の手によつて、例へ何らかの特別處置を講じてなりにせよ、カナダやオーストラリア等を開發し切れないならば、如何なる嚴重な制限を設けて居ても、それら英自治領各地は外國人によつて全く開拓権を奪はれて了ふ現実に直面されるに相違ないのである。

結局英帝國に於ける国防上の最大缺點は領域の大に反し余りにも人口の過少なることに歸着するのであり、自治領の国防問題、移民問題の解決は、之等空地にも等しい国土を人口稠密にして資源の乏しい國に解放する以外に方法のないことは、彼等自治領識者自身肯定せざるを得ざるに至つてゐる。曾てニュー・ジブラントの總督たりしブレディスローも「我々英國人が積極的に集団移住を断行するか、若しそれが不可能ならずば一刻も早く、より有利な取決めによつて其の移住開拓権を人口過剩國へ譲渡するか、この二つの方策以外に英自治領諸國の人口解決策は有り得ぬであらう」と云つてゐる。

かくて各自治領の直面してゐる国防の恒久的強化の問題はそれを英本

國にのみ期待するのでは絶対に解決される望みは無く、結局は自治領自身
の公正なる判断に依つて之を解決する外ないことは極めて明白である。

最後にオーストラリアの原住民について簡単に觸れて置かう。

一七七〇年オーストラリアが正式にイギリス領となり積極的な歐洲移
民が来住し始めた頃には、原住民の数は百万人と稱されてゐた。爾來彼
等原住民の人口数は次第に減少し今日に於てはオーストラリア人口六百
九十万中僅かに六万を占むるに過ぎない状態にあり、やがては自然に滅
亡するものと見られてゐる。

この衰滅し行く原住民に對しては、今日に於てこそ、種々の保護對
策が採られつゝあるとは云へ、歐洲移民来住の初期に於ては所謂絶滅政
策が採られ盛んに虐殺が行はれた。

絶滅政策を採るに至つた根本的な原因は白人側に於ける恐怖感であつ
て、初期の移住民及び牧羊者が、見知らぬ廣大な地域にまばらに移住し

してゐたために常に家族の完全が脅かされてゐるといふ強迫観念にまつま
まとは川てゐた。従つて極めて些細な事が動機となつて、ともすると工
人を射殺すると云ふ傾向が強かつた。当時歐洲からの移民、主としてア
イルランド人は必要に應じ原住民を射殺毒殺其の他何れの方法による個
人的な制裁を加へることを公に許されてゐたといふ。そこで原住民側と
しても白人が、自分ら種族に対し殺意を抱く危険な種であると考へ、ま
た白人の脅威から逃れるために白人を見付けると槍で刺殺した。また元
の狩獵地から追ひ出されたことが土人を激昂させたことも当然であつた。
そこで白人は狙撃隊を組織して土人狩を行つたが、時には友好を装つ
て、原住民に毒を入れた食物を与へて、之を殺害するといふ残酷なる方
法もとつた。この外土人間に於ける流行病や饑饉を放任するといふ消極
的絶滅政策も採られた。

タスマニアに於ては一八七六年を以つてタスマニア人は根絶してしま
つた。ヴィクトリアに於ても殆ど絶滅に歸した。クイーンズランド其の他に

於ては其の後白人移住者の數が増加し、完全に原住民を征服してしまふと恐怖心は消滅し絶滅政策は放棄されるに至つた。

オーストラリアの原住民は人類に進化してより既に三万年と称せられるが精神的にも物質的にも殆んど大古時代そのまゝの状態にある。十七世紀初頭ヨーロッパの人類学者達は当時ニユー・ホーランドと呼ばれてゐるオーストラリアの原住民を獸類よりは稍進化した動物と認めて居つたといふ。彼等は最近まで人喰人種の域を脱せず、ために種族漸滅の主因は歐洲移民の圧迫もさることながら、寧ろ彼等自身の共食の慣習にあつたと云へ評されてゐる程である。彼等は未だに棲むに家さへ有たうとせず、食物も大体に蟲類、爬虫類が多く、我々の想像も及ばぬもので満足してゐる。また夜は柴で簡單な風除けを作り、傍らに焚火をしなから裸体の儘で寝入つて了ふといはれてゐる。尤も現在では彼等土民の内若干の老人達は濠洲政府の手により、名ばかりの小屋に收容されて保護されてゐる。

オーストラリアの原住民が現在如何なる待遇を受けてゐるかといふに、
、 歐洲系住民達は約七十八円納税し、地方廳から許可さへ得て置けば、
多少の報酬を與へることによつて原住民を幾人でも使役出来るやうにな
つてゐる。尤も彼等家族に必要な、粗末な食糧を給與さへすれば、そ
の勞賃は全く支拂ふ必要はないと云はれてゐる。

彼等原住民は歐洲移民から家畜の飼育方法を教へられ、また奥地農場
に於ける一般的に雜用に使役されてゐる。原住民の白人に対する不法行
爲は相當重く處罰され、例へば歐洲系住民所有の家畜類はその種類を問
はず、若し彼等原住民が盜喰する場合には相當重く処刑されて居り、昔
打ちの刑は官許の私刑とも云はれてゐる。

彼等原住民の將來に対する一般オーストラリア人の態度は到つて無関
心であり、或著名なオーストラリア政治家でさへ、
オーストラリア原住
民は最早衰滅し去る自然の運命にある人種であり、今更彼等に対する保
護策を講じたりすることは却つて彼等の苦惱を永引かせるのみである。

寧ろ自然消滅の趨勢を早めてやつた方が眞に彼等のために好らうと公
しむといふことである。以て大多数オーストラリアの原住民に對する態
度を表明したものと見て良いであらう。

かゝる大勢に反對して原住民の保護及び神導に乗り出してゐるのがオ
ーストラリアの宗教団体である。又人類学者達も衰滅人種の保護方を聯
邦政府へ要望してゐるといふ。

現在までの處、まだ何人も原住民の向上、または近代教育を施さんと
せるものは無かつたが、然し彼等を良く理解し、心服せしめ、統禦出来
さへすれば強て彼等に甦生の能力及可能性が無い訳ではないと云はれて
ゐる。

現にロツクラーから派遣された視察者達も彼等原住民の智能程度
が白人に比して僅かに劣るに過ぎないと言ひ居り、またシドニー大学
の人類学教授ですら、略ぼ同一の見解を有してゐると云はれてゐる。

然し乍ら肝腎の原住民達は、年令の差違など一向に留意せず、若い女

が年寄男と一緒にになり、老婆に近い女が若い男と一緒になるなど乱雑な結婚状態にあり、人口増加の施設も最早時機を逸し去つたと云はれてゐる。

いづれにせよ、現在オーストラリアの民族問題上、彼等原住民の存在は最早何等の意義をも有せざるに至つてゐるのである。

第四節 印度

第二節以下に於て述べ来つた自治領諸國は英國植民地中、他の植民地に対し質的に全然相違する獨特の地位を保持するものである。それ故各自治領の對本国關係は必ずしも同一ではないが、之等を一括して英聯邦構成体の一類型と見ることが出来る。即ち自治領は大体に於て白人の移住に適する温帶に於て形成せられ、その住民は概してアングロサクソンを基体とする白人人口より成立するものであり、而してこの種植民地經營の目的は白人人口の移植であり、また自由や自治の如きアングロサクソン秩序の拡張にあるといふことが出来る。一言にして云へば白人社会の新地域への拡大といふことが之等植民地經營の目的である。かくの如き、白人人口の移植、アングロサクソン秩序の拡張等を目的として発展した植民地に対し、全然別個の目的の下に經營される植民地の類型がある。それらは多く熱帶或は亞熱帶に存在し、その住民はすべ

て土著の有色人種より成り、政治的には本国政府の管理下に置かれ経済的には本国に対する原料食料供給或は本国製品の販賣市場として、本國に対し全然從屬的地位にある。かかる植民地に対する經營の目的は、自治領に於けるが如き人口の移植でもなければ、また自由や自治の如きアングロサクソン秩序の擴張でもなく、専ら收奪と搾取にあるのである。植民地なる觀念はかかる地域に対し最も妥当するものである。以下述べてやうとするインドは將にかゝる類型に属する植民地である。インドに対し英國の期待するところは、その植民地の經營によつて最大の経済的利益を擧ぐることに以外にはなかつた。インド人の政治的社会的経済的文化的向上等一般にインド社会の幸福の増進の如きはイギリス人の何等企圖するところではなかつた。彼等イギリス人の唯一の目的は極めて少数のイギリス人の午を通じてインドの越大なる土地と夥多なる民族とを支配することによつて、最大限の経済價値を收奪するにあつたのである。かかるイギリスの意図がその對インド政策の上に極めて明瞭に具現されて

あることは蓋し当然のことである。かゝる利益の追求のためには、彼等
イギリス人はインド人の生活の基礎である古来の社会制度と慣習を破壊
し、之によつてインド人に甚大なる苦痛を與へ、また収奪の結果インド
の貧困はいよゝゝ甚だしく、相次り活版屋に、鋸齒を招来するも何等意
に介しなかつた。彼等イギリス人は彼等の利益に影響せざる限り、イン
ドの悲慘には全然ひとごとの如き無関心の態度を取つたのであり、積極
的にインド人の福祉の増進のために努力する如きことは勿論なかつた。
然し乍ら、かゝる政策が植民地土著民族の憤激と反抗を招き、それは
更にイギリスの支配力そのもの、覆滅を企図する民族運動にまで發展す
べきは当然である。

インドは其の數四億といはれる尠大な人口を擁してゐる。之に対し支
配者たる在印イギリス人の數は僅かに十二万人に過ぎない。それ故イン
ド四億の民族は自己の四千分の一に過ぎないイギリス人によつて身動き
出来ないうままでに縛り上げられ、膏血を搾られてゐることになるのである。

。假にイギリス本國の人口をとつて見ても、インドは約十分の一に過ぎないイギリス人によつて完全に支配されてゐることになるのである。

インドは何故四十分の一に過ぎないイギリス人をインドより追放し得ないのであらうか、又インド人は何故十分の一に過ぎないイギリス人の支配から脱し得ないのであらうか。

インド人の或る者は云ふであらう「身には寸鉄さへ帯びることを禁じられ我々インド人として、どうして近代的な武装を有するイギリス人に刃向ひ得やうし」と。

然しインドにはその兵力三十二万の陸軍があり、その内八割以上はインド人が占めて居るではないか、また海軍總人員二千名の内九割以上はインド人ではないか。空軍に於ては流石にインド人は少いが、それかも総人員二千五百名中一割以上はインド人が占めて居るではないか。またインドの警察官は其の數極めて少いと云はれてゐるが、それでも二百數十万の警官があり、また警察官の背後には東洋隨一と云はれる尠大な謀

報網があるわけはないか。之等は一部の首脳者を除けば何れもインド人によつて組織されてゐる。かくの如く、インド人は同じくインド人によつて組織された二十六万の陸軍、外に若干の海軍、空軍兵員と極めて尠大な謀報網に極めて多数の同胞を関與せしめてゐるのである。之でもインド人は身に寸鉄も帯びずと云ひ得るであらうか、インド人はインドの自由と独立のために役立つべき之等の機関を皮肉にもイギリスのインド支配の保障機関をらしめてゐるのである。しかも之等の機関の維持に要する莫大な費用は総て貧窮のどん底に喘へぐインド人民衆から搾り上げられるのである。それ程までに虐げられたインド人が、その自由と独立のために大いに役立つべき、かゝる財宝を何故に顧みないのであらうか。

イギリスのインド侵略より今日に至るまで、イギリス人に対するインド人の闘争は止むことなく繰返された。然しそれは余りに精神的な或は極めて平和的な手段によつてのみ行はれたに過ぎない。それらは結局イギリス人の残虐な仕打に恰好の口実を與へるに役立つたに過ぎない。

インド人は最早自由独立の念願を放棄してゐるのであらうか。否決して
てそうではない。現に大東亞戦争下、インドでは多数の民衆が、反英抗
争のかたで殺戮されてゐるのである。

然しインドの自由解放を期待する第三者として見れば、インド人の行
動程、昔がゆく、また不可解に思われることがあるであらうか。然し乍
ら、かつる不可解なことが現実に存在する処にインド社会の特徴があり
、このインドの特徴を巧みに利用したもののこそ所謂イギリスの分割統治
策なのである。

イギリスのインド政策は、之を各方面から観察して、そこに幾つかの
特徴を抽出することが出来る。しかし最も重要なものは謂はゆる分割し
て支配する政策であり、イギリスの印度政策の多くの部分は、この分割
支配政策によつて解明し得るといふも過言でない。そこで本稿に於ては
分割支配政策を中心として、印度の民族事情について若干の考察を加
へて置く。

「英吉利の王冠に銜ばめられたる最も光輝ある寶石」ともいはれ、或はまた「英吉利の寶庫」とも稱される印度は是等の形容の如く凡ゆる意味に於て、英吉利に對し魅力に充溢せたる存在である。

印度は歐洲、アフリカ、マレー、東亞諸地域及び濠洲、新西蘭等を結ぶ、交通、通商上の要衝たるのみならず、戦時に於ては印度洋、南太平洋更に近東、西南アシア、アフリカを制圧するための絶好の基地たるの條件を具備し、英帝国国防上極めて重要なる地位を占めてゐる。

又印度は東西、南北とも延長二千哩、その面積は英本國の二十倍、日本全版圖の六倍といふ広大なる地域を占め、その内極めて狭小なる佛領及び葡領の植民地を除けば、他は印度帝国であり、内五割五分は英領諸洲、他の四割五分は印度王侯國によつて占められてゐる。印度は英吉利王を君主に戴く帝國であつて、所謂植民地とは異なるものとされてゐるが、然し其の實質に於て植民地たること、變りはない。尚ほ最近ビルマは行政上印度から分離されたことは周知の通りである。又セイロン島は

印度の附属島嶼と考へられ易いが、行政上は英國の直轄植民地であつて、英國植民省管轄下の知事によつて統治されてゐる。

印度北部のヒマラヤ山地、南部のデカン高原、この間にはインダス、ガンダスの二長河が貫流し、こゝに広大肥沃なるインダス、ガンダスの両平野が打開けてゐる。是等の地方は概して土質、気温、湿度に恵まれ、世界屈指の農業地帯をなしてゐる。殊に氣候の多様性の結果として、農作物の種類は極めて豊富である。

事情かくの如くであるから、自國內に既に農村を失つた英吉利としては食料或は工業原料の供給地として印度に期待するところ極めて大であるのは當然である。

又印度の人口は實に龐大である。一九三一年の國勢調査の結果によれば、印度の全人口数は三億五千餘であつた。一九四一年の調査の結果は恐らく四億に近い数を示すであらうと云はれてゐる。かゝる龐大なる人口数を擁する印度が、英國商品の販賣市場として絶大なる價值を有す

ることは謂ふまでもない。

試に印度の対外貿易に於て英本國の占める地位を見るに、印度の輸入總額中英本國の占めてゐる割合は前大戰以降減少したとはいへ尚ほ三割といふ数字を維持してゐる。また印度の輸出總額中、英本國向けは大戰以來稍く増加し最近では三割四分程度に達してゐる。

英本國よりの主要輸入品は綿糸、綿製品、機械器具、鉄鋼、自動車、金物、羊毛製品等の工業製品であり、対英輸出の主たるものは皮革、茶、棉花、黄麻、黄麻製品、亜麻仁、採油種子、マンガン鉱等の主として工業原料品である。

更に之を英本國の側から見ると、英國の總輸出額中印度向けの割合は最近減少の傾向にあるとはいへ、然も尚も七、八分を占め、南阿联邦に次ぐ重要な輸出市場である。

印度はまた英國の投資地として非常に重要な地位を占めてゐる。一九三〇年末に於ける英國の海外投資總額は約三十七億磅と推定され

てゐるが、その内英國の證券取引所に上場されてゐるものは約三十二億
磅であつて、之を投資地別に見ると、英領への投資が大割以上の約二十
億磅でこの内印度及びセイロンへの投資額は約四億六千万磅の巨額に達
し、海外投資總額の一四%、英領投資額の二三%に相當してゐる。対印
投資の対象として目星しいものは公債と鉄道事業で、兩者を合して三億
五千万磅、總額の七七%を占めてゐる。是等の対印投資が年々一億磅と
いふ莫大なる利潤をもたらすのであるから、印度は英國の資本投下地と
しても非常に重要性をもつことが理解されるのである。

更に印度は、こゝから多額の貢納金が上るといふ意味に於ても英國に
取つて大なる價值を持つてゐる。

在印数々の英國官吏の俸給、恩給等は縱て印度の負担で、本國は鏝一
文も出してゐない。ところが在印英國官吏の俸給、恩給等の給與たるや
法外の高額であるために、是等の負担は印度に取つて非常な重荷になつ
てゐる。

一例としてボンベイ州知事に対する俸給其の他の給與を擧げれば、其の額は驚くべし六十五万八千六百留比にも達するのである。また印度總督の年俸は約二十六万ルーピーで合衆國大統領の約二十万ルーピーに比し遙かに高給である。之の一例によつて見ても在印英國官吏が如何に高給を得てゐるか分る。その他任命の際の支度費、赴任旅費も莫大なるもので、是等も総て印度の負担で、英本國は一文も拂はない。英國官吏のかかる不當な俸給は英本國が印度を非常に不健康な土地であり、また印度兵叛乱事件（一八五七年）の联想によつて印度を危険な土地であると過信してゐるためであると言はれてゐるが、此問題は常に國民會議派以下の的となつてゐる。

一年間に印度の支出する在印英國人官吏の俸給、恩給其の他の支出は三千万磅といはれてゐる。

又国防費として印度の負担する額は五億乃至六億ルーピーで総歳出の四割以上を占めてゐる。その国防費なるものも、名目上はとにかく實質

的には英國の印度支配を確保するための費用に過ぎず、而もその費用たるや半餓死状態の印度の懐から搾り取るといふ残忍さである。皮肉な見方をすれば、印度人はその自由と独立を失ふために骨身を削つてまで英本國に莫大な貢納金を奉つてゐることになる。

以上述べた以外に王侯国からの献金があるが、之を加へれば年々英本國が收得する利益は莫大なものである。

グアールガリの推算によれば一九二四——二五年に於て英國が印度から上げた利益は實に一億七千万磅（約二十二億ルーピー）に達するといふことである。その内訳を示せば、在印英國人官吏に対する俸給、恩給其他の三千万磅、投資利潤一億磅、商業上の利得一千五百万磅、工業上の利得一千二百万磅となつてゐる。英國の利得は今日に於ては戦時課税、強制寄附金等によつて寧ろ増加するとも減少することはないと見られてゐる。

以上の如く英國の印度経営は全く割の良い商賣であつたし、一方英國

は印度人の福祉といふやうなことにについては殆ど何等の財力と精力を費やさずに済んだのであつたから、彼等の目から見れば、印度は正に「英吉利の王冠に鏤ばめられた最も光輝ある寶石」であつたに違ひない。

そこで英国が斯くの如き、寶石であり寶庫であるところの印度を失はざらんとして凡ゆる權謀術教を弄し、また弄するであらうことは容易に想像し得るところである。

十七世紀以來三百年余に亘る英國の印度統治は時の流れと共に幾多の變遷を経來つてあるけれども、然し是等に一貫した特徴を挙げるならば、先づ政治的には印度の植民地たることの永久的確保であり、経済的には徹底的搾取であつた。

印度に於ける英國の統治が、その結果として印度に恩惠をもたらしたとしても、それは恰も卵を生ませるために鶏に餌を與へるのと同様、それは飽くまで偶然的副産物に過ぎない。印度に於ける英國の植民地経営は正に帝國主義的植民政策の典型といふべきであらう。

英國の印度統治の根本方針は要するに印度をして永く英國の植民地たらしむること存する。

この目的のために英國の採つた具体策は種々雑多であらうが、所謂分割統治政策こそは其等に一貫した顯著なる特徴であつて、之を説明することによつて英國の印度統治方式の核心は把握し得るものと考へられる。以下之につき概説しよう。

印度には幾つもの人種、言語、宗教が實際目に見えて存在する。そのために或る者は印度とは單なる地理的名稱に過ぎない。ベンゴール人、ラレヂプト人、パンジヤブ人、グゲエラト人、マールタ人、シーク人、パルシー人其等多くの民族はあるがインド人といふものはないと主張する。この見解は勿論正当でない。なる程印度の各民族が凡ゆる政治社会問題について種々異なる^{意見を抱いてゐることは事実である。然し彼等が英國人とは異なる}何等かの共通の文化を有つてゐるといふ意識、この共同意識によつて一つの社會に結合されてゐるといふ自覚は印度人、印度國民の存在を主張する根據たり得るものである。かゝる共同の意

識こすは、各種族社会の特殊性を超越して統一的國民運動の温床となり得るのである。

之あれ、印度が人種、言語、宗教其等の点より見て、誠に異質的諸要素より成立する複雑極まり無き社会たることは否定すべくもない。

分割統治政策とはかゝる印度民族の種族的、宗教的、文化的複雑性を利用して、印度人の分裂抗争を激化せしめ、以て反英的統一勢力の結成を阻止し、英國の印度支配を確保せんとする一連の統治方策を包含するものである。

右の分割統治政策について、之を具体的に述べるに先立ち、印度社会分裂抗争の素因たる、種族、言語宗教について略述しよう。

印度の如く人種の複雑を極めてある処は尠い。其の人種に関しては諸説紛々として、いまだ一致を見るに至らないといふことである。

一口に印度人と云つても皮膚の色の白きものもあり、黒きものもあり、或は黄色、褐色を帯びた者もある。又身長も長大なるあり矮小なるあり

り、又鼻形にしても扁平なものもあり、短少なるものあり、細長なるものあり、鼻先の高いものもある。その他鬚鬣の状態も濃淡種々様々であるといふ風に極めて多くの人種的特徴が見られる。

印度の原住民或は最古の土著民はマレー、スマトラ方面の種族に近似せるものであつたらしく、この原住民は西方からはアリアン、スキシア、パタン、モガール、東北からは蒙古、ビルマの諸民族の侵入を受け、それらとの混血の結果現在の諸種族が出来たといふことである。

Dr. Henry Risley は印度人を次の七種族に大別してゐる。

- 一 ドラガイダ型 Dravidians
- 一 蒙古型 Mongoloid
- 一 印度アリア族 Indo-Aryans
- 一 トルコイラン族 Turks-Iranians
- 一 蒙古ドラヴィタ族 Mongolo-Dravidians
- 一 アリョ・ドラヴィタ族 Aryo-Dravidians

一、スキト・ドラヴィダ族 *Sytha - Dravidians*

以上各種族の居住地及体質的特徴については茲には述べない。こゝでは單に之等の種族は更に数十の種族に區分され極めて雑多な構成をなして居り、印度の國民的統一に對して非常なる障害となつてゐることを指摘するに止めよう。

印度の種族が雑多であると同様に、其の言語も亦頗る多種多様である。現今印度に於て使用されてゐる言語の数は實に二百二十五種の多きに及んでゐる。之に方言を入れれば其の数は非常なる多数に上るといふ。地方郵便局で使用を公認してゐるものだけでも七十余种に達するといふことである。

印度の言語は恰も歐洲大陸に英語、獨逸語、佛蘭西語等々の多数の言語があるのと類似して居り、印度の大部分で話を通ずるためには、歐洲にある國語の教程言語を知らなければならぬといふ状態である。英語は印度の法定語とされてゐるが、それは亦知識階級の意思疎通の手段、

謂はば國際語の機能を嘗んでゐるといふ奇妙な現象を呈してゐる。印度人にして英語を解するものは四百三十万、即ち人口一百万につき男子二一人、女子二八人の割合であるといふ。中央、地方の議會に於ては英語が公用語とされてゐるが、國民會議さへ英語で行はれるといふ有様である。

印度語の内でも最も広く用ひられてゐるのはヒンドスタニー語で、全人口の三分の一以上が之を用ひてをり、地方により多少の訛はあるが大體印度の標準語と見做されてゐる。

凡て民族の統一には意思の疏通手段たる言語の同一性が最も必要であることは云ふまでもなく、印度の言語の複雑性は人種の複雑性と共に印度の民族的統一を妨ぐる因子であるといはなければならぬ。言語の方面に於て印度人の意思疏通、民族運動の展開に役立ったものは皮内にも英語であつたのである。

然し最近ガンジーを中心として、ヒンドスタニー語を中心として作ら

此は印度共通語、印度文字の普及統一を計らんとする運動が生じてゐるといふことである。次に印度の宗教について簡単に述べよう。

他の諸國に於ける宗教が單なる宗教たるに反し、印度に於ける宗教は政治、社会、文化、思想等の凡ゆる分野に亘つて、民衆の一切の生活の根源として絶大なる影響力を有してゐるといふことは實に顕著なる事実である。かゝる宗教的支配力の絶大さはその内容の迷信的排他的なることと共に、全印度社会を極度に分裂混乱せしめてゐるものであつて、印度問題を考察するに當つては宗教は人種、言語その他の如何なる要素にも増して非常なる重要性を有してゐるのである。

以下印度宗教殊に印度教と回教の概況を述べよう。

印度の宗教は印度原住民の間に發達した宗教、アーリア系のもの、セム系のもの、是等の混合せるもの等ありて其の種類は極めて多数に達してゐるが教徒数の上から主なるものを挙げれば左の七つである。(一) 一九三一年調査)。

教徒数(千人)

総人口に対する百分比

印度教	二三九、一九五	六八・二四%
回教	七七、六七七	二三・一六
原始教	八、二八〇	二・三六
基督教	六、二九六	一・七九
シータ教	四、三三五	一・二四
耆那教	一、二五二	〇・三六
拜火教	一〇九	〇・〇三

右の如く印度教と回教は印度の二大宗教であつて、両教徒を合せば總人口の九割以上に達する。

印度教徒は主として印度の中部と南部とに多く、殊にマドラス州の如きは人口の八九%までは印度教徒である。回教徒が優勢を示してゐる地方はインダス河以西とベンゴール州である。

印度の宗教と政治問題、社会問題又は英國の分割統治政策との関聯に

於て最も重要なものは印度教徒と回教徒の相剋である。即ち各宗教中印度教徒と回教徒との反目暗闘は最も著しく、屢々宗教的政治的闘争が表面して多数の死傷者を出すといふ状態で、両者の摩擦軋轢は印度の國民的統一の一大障礙となつて居り、英國の分割統治政策は正に印度のこの弱点につけ込んだものであり、回印両教徒の争闘こそ印度独立上の癥をなしてゐるのである。

此間の事情を明かにするため以下印度教、回教について、その教理、儀式、慣習につき概説しよう。

印度教徒は今日に於ては幾多の分派があるが其の起源は約三千五百年前中央亞細亞よりインダス平原に侵入したアーリア族の宗教にあるといはれてゐる。このアーリア族の宗教は一種の自然崇拜教であつて、崇拜の対象は太陽、月、火、風、雷を初めとしてソーマ酒釀造の原料ソーマの崇拜に至るまで衆教の神を信じてゐたといふ。アーリア族は是等の神々に果実や菓子を供へ、或は牛、仔牛、馬などを犠牲となし、又祈禱、

讚美を捧げた。

然るに其後アーリア人が漸次原住ドラヴィダ族を駆逐してガンガス平原に侵入した頃には最初の信仰や風俗習慣に変化を来し、こゝに婆羅門教の思想が生ずるに至つた。

婆羅門教の教理に従へば、宇宙の萬物は至高の梵天より生じ、万物は凡て梵天の靈を有し、是等の靈は絶えず輪廻し、良き靈は神、聖人の体に宿り、不良の靈は犬の如き不純なる動物に宿り、それらは更に輪廻して遂に梵天に復歸する。之に要する期間は二千四百万年に達するといはれて居る。

婆羅門教の教理は最初の内は比較的單純であり、儀式等も余り嚴格ではなかつたが、後になると祈禱、供物、宣誓、齋戒、沐浴などの儀式が定められ、まだ被服、裝飾、起居動作、飲食等日常生活の瑣事に至るまで嚴格な規制を受けた。大衆はかかる律戒儀式を嚴守する間暇も餘裕もなく従つてかかる教を歓迎しなかつた。

かくて佛教は婆羅門教に對する反動として生れることになつた（紀元前五世紀）。佛教は阿育大帝（前二七二—二三二）の時代に國教として一時全印度に勢力を振ひ、佛教最隆盛時代を現出した。それに應じ婆羅門教は自然に衰微した。後佛教は印度で衰へ、西藏、ビルマ、支那に傳はり、八一—〇世紀には佛教は印度から完全に駆逐された。一方婆羅門教は西紀四—六世紀に再び勢力を盛返し、佛教思想を採入れると共に従来の動植物崇拜をもとり入れ、こゝに婆羅門教は印度教として復活するに至つたのである。

印度教は婆羅門教の教理の一部と印度の古史詩、神話的傳説を織込んだ複雑怪奇な宗教で信仰の對象は動物、木石、生殖器の靈にまで及び、神々の数は三億にも上るといふ。かかる雜然たる宗教であるから、専門の學者と雖も印度教の内容を統一的に説明することは不可能であるといふことである。或る學者は印度教を以て「一切の迷信、精靈と幽鬼、半神々たる聖者、家族神、部族神、宇宙神、及びそれらのために建立され

た無教の寺院殿堂の混沌たる集積」と評してゐるのを見て、それが如何に複雑奇怪なものであるか、想像される。

印度教は宗教であると共に、その教理、カスト、人種、言語、歴史より成立する一箇の社會組織であるといはれ、印度教とは印度の社會組織の別名であるといはれるのも之がためである。印度教を述ぶるに當つては印度教のカスト、不可觸賤民を見逃す訳には行かない。是等は孰れも大きな究題目であつて、茲で詳述することは不可能である。こゝでは單にその概要を述ぶるに止める。

カスト (Caste) は本来ポルトガル語で種姓又は階級を意味する言葉であるといふ。我國では普通、種姓制度、身介制度、姓階制度、種姓階級制度などと訳されてゐるが、要するに身分、職業が世襲的に固定してゐるところの社會階級制度である。我國に於ても封建時代には士農工商及び穢多なる階級があつたことは我々の熟知せる処である。歐洲諸國に於ても中世時代にはこの種の制度が存在してゐたのであるが、今日に於て

も尚ほが、この制度の存在するは印度以外には見當らない。

印度のカストは法律上の制度ではなく、一種の社会慣習に過ぎないの
であるが、其の影響力は實に偉大なもので、印度入社会は正にこの基礎
の上に立ってゐるものといひ得るのである。印度教徒中には種姓制度の
全廢を唱へるものもあるが、かゝる制度を存続せんとするものが一大勢
力を有し、この制度を打破するといふが如きは非常な困難事であるといは
れてゐる。勿論今日の階級制度は昔日の如き嚴格さを維持し得なくなつ
て来てゐるといふことである。

カストの起源については必ずしも学説の一致を見てゐないやうである
が、一説によれば今より三、四千年前アリア族が中央亞細亞より印度西
北國境を越えてインダス平原に侵入し、更に先住のドラヴィダ人を驅逐
して漸次ガンゲス平原に定住する頃に完成したもので、最初はアリア
族の血の純潔と文化の清純を保持するためにドラヴィダ人を除外して自
ら婆羅門 (*Brahman*)、刹帝利 (*Kshatriya*)、吠舍 (*Vaishya*) の三階

級を組織し、被征服民たるドラヴィダ人を首陀羅 (*Sudra*) として賤業階級として四種の種姓制度を樹立したものであるといふ。

婆羅門は僧侶の階級、刹帝利は武士の階級、吠舍は商人、実業家の階級、首陀羅は農奴、僕婢の階級、奴隸階級とされてゐた。

以上の四種姓階級の外に、今日其の數五千萬余といはれる不可觸賤民 (英語では *Untouchables, Depressed Classes, Scheduled Castes* 等といはれ、ガンガーは之をハリジヤン (*Hanjian*) と呼んでゐる) がある。之はカストに含まれず、所謂極多の階級で首陀羅の下位にある。

婆羅門以下首陀羅の四階級の区別は婆羅門教時代には頗る嚴格で、他階級との間の結婚及び職業の混同を許さず、その身分、職業は出生と共に決定されてゐたのである。

然るに後世文化の発展に伴ひ、社会的分業を生じ、従つて職業も夥しき分化を来し、且それ等の職業は世襲とせられてゐたために、同一階級内に於ても職業の高低により無数の副階級を生じた。また紀元四一六世

紀にかけて、印度に侵入したペルシヤ人、トルコ人、蒙古人、ギリシヤ人の子孫はやがて印度化されて婆羅門、刹帝利階級に編入されたが、これ等は人種の相違に基いて自ら別個の副カストを形成した。かゝる事情によつて今日カストの数は数千にも及ぶといふことである。

是等のカストは何れも共通の保護神を戴き、また互に結誓せず、飲食を共にせず、各々共通の礼儀や共通の社会的規律の下に独立的な身分職業社会を形成して、各地の階級を恰も単一人種の社会の如く信じてゐるのである。かゝる状態であるから、今日全印度人口の六八%を占むる印度教徒の大同団結が出来ないのも當然である。

現在婆羅門に属するものは人口の八%に過ぎないが、僧侶を初め、法律家、教育家、技術家、醫者の外地主或は農民となることも認められ、また特殊の経済的理由があれば、小作人、料理人、兵士になることも認められてゐる。これ以外の職業に従事するならば、たちまち其の階級より脱落することになる。今日官吏の三分の一はこの階級の出であり、印

度社会の支配的実権を握つてゐるのはこの階級である。

刹帝利はその分派最も多数で、多くのものは実業方面の職業或は農村に於ける地主として婆羅門と共に印度の上流階級をなしてゐる。都市では菓子、香料、理髪等の清潔とされる職業に従事してゐる。

吠舍階級は非常に多くの副階級を有するが、古来の農業、商工の系統をひき、今日経済界に根強い勢力を有し、大実業家階級はこのカストから出てゐるといふ。この他の階級は、農業或は比較的清潔な職業に従つてゐる。首陀羅階級は主として上述の諸階級に使傭され、また下賤汚穢とせられる製革や掃除等の業務に従事してゐる。

最後に不可触賤民はカスト外の穢多階級で首陀羅の下位にある。彼等は特殊部落に居住し惨めな生活を送つてゐる。彼等の触れるものは一切不浄とせられ、一般階級の使用する公共用井戸には接近することこへ許されず、また子弟を公共の学校へ入学せしむることも禁ぜられてゐる。また印度教徒といふことになつてゐながら寺院へ入ることとも出来ない。若し婆羅門姓の者が近付いて来るときは走つて身を隠し、道を転ごなけ

れば互らなない。この下可触賤民階級のもものは経済的にも最下層で大部分住むに家なく、食すべき食物もないといふ状態といはれてゐる。

尚ほ序に述べるが、階級の区別は帽子や顔面に印した種々の表彰、所謂カスト・マークによつて容易に識別されるといふことである。

最近不可触賤民の階級中より水平運動が起り、政治的、社会的自由の獲得を要求するに至つてゐるといふ。又回教徒聯盟の提唱する所謂パキスタン案（回教國建設案）を支持すると共に不可触賤民自身に対しても一つの独立的領土を要求してゐるといふことである。

カストについては述ぶべきことが多々あるが茲では総て省略し、最後にカストなる社会制度が印度教徒の日常生活の上に如何なる形をとつて現れてゐるかの一例を述べよう。

例へば家庭の家事使用人の仕事について見れば、其等は總てカスト別の分業になつて居り、コックが第一位、食堂ボーイが之に次ぎ、家内掃除はハ・マールといふ階級のものがすることになつてゐる。便所や庭の掃

除は最下位たるメートルの仕事となつてゐる。メートルは如何に勤勉に働いてもハマイルに昇格することは出来ず、ハマイルはまた食堂ボーイになることは絶対に出来ない。

かかる社会制度の下に於いては、人々が向上の慾望を失ふことは當然であり、国家社会の進辰も期せられないことは明白である。

また職業の嚴守といふことは一面専門的技術の上達といふ利益はあるにしても、他国ならば一人で出来る仕事に数人を必要とするのみでなく、一人の仕事の分量が減ずる結果、彼等は一日の大部分を無爲に過すといふことになり、このために印度の労働能率は人口の割に非常に低いといふ結果となるのである。

次に回教は印度にとつては外來宗教である。回教の印度侵入は七八世紀の頃でモハメットの死後間もなくのことであつた。其の後侵入は類々として繰返されたが、回教徒が実際に印度を征服したのは十三世紀の初期で、最初の印度回教王朝たる奴隸王朝を初めとして幾多の王朝が

創始された。以来十五世紀までは回教徒の印度掠奪は絶えまなく行はれ
たが十六世紀に入り元の帖木児五世の孫バーバルの侵寇により北印度全
部は其の支配下に置かれるに至つた。これ即ちモガール帝國である。

バーバルの孫アクバルの時代即ち十六世中葉より十七世紀の初期に
かけてモガール帝國の最盛期を迎へることとなつた。帝は努めて寛容の
態度を以て印度教徒に臨み、これが融和に成功したのであつたが後に熱
狂的回教徒たる第六世オーランゼブ帝の時代に至つて再び印度教徒虐待
の政策を採つたので、印度教徒の蹶起となり、こゝに回教徒と印度教徒
の争鬭の時代を現出するに至つたのである。

其の虚に兼じて英人の印度攻略となり、遂に今日の英國統治時代とな
つたのである。

回教は教理、式は儀式、慣習等に於て印度教と全く対蹠的である。回
教は一神教としてアラームの外に神をなしとして印度教の多神主義、偶像礼
拜主義を排撃すると共に、印度教のカストに反対し、無差別平等主義を

唱へた。回教は本来非常に侵略的、傳導的宗教であり、それは劍を以て多くの信者を作つた。印度教徒中にはその圧迫によつて回教に改宗せるものもあり、また印度教徒のカスト外に置かれた不可觸賤民中には回教の無差別平等主義にひかれて回教に改宗せるものもあることは先に述べた通りである。

右に述べた通り、回教徒は永く支配者として印度教徒に臨んでゐたのであるが、かゝる歴史的因縁は教理、儀式、慣習等の根本的相違と相俟つて回印両教徒の間に深い溝を作つてゐるのである。回印両教徒の間の精神的隔りが如何に甚だしいものであるかは、モリソンの如き言葉によつて想像することが出来やう。都市に於ては回印両教徒は別々の地域に住ぶ傾向がある。これは宗教慣習を同じうする人々の共同觀念を鞏固にするためであるが、モリソンに従へば「是等の両教徒の間には歐洲に於ける二国家以上の隔りがある。ソリは全く異なつた、しかも仇敵の間柄にある國民を想起せしめる。獨佛の兩國は仇敵國家の代表的なものであ

るが、それでも佛蘭西人は独逸へ行つて独逸人の家に寄寓し、起居、食事と共にし、一緒に礼拝所に行く事が出来る。然し回教徒と印度教徒の家庭はそれが絶対に出来ない」のである。

回教徒と印度教徒との離反が如何に甚だしいものであるかを完全に理解するためには、両教徒の交渉の歴史、宗教そのものの相違、宗教上の儀式の相違、風俗習慣の相違等について研究することが必要である。然し茲では回印両教徒相剋の一原因として屢々引合ひに出される二、三宗教上の儀式の相違について述べるに止めよう。

印度教徒は牝牛を神聖視し、之を屠殺する如きは重大なる罪惡であると考えてゐる。然るに回教徒は宗教上の犠牲として牝牛の屠殺を盛んに行ふ。回教徒が生贄として牝牛を捧げるのは、それが廉くつくだめであつて、必ずしも牝牛に限つた訳ではない。それはどにかく、回教の祭日には特別の警戒が行はれるのであるが、この牝牛屠殺の件が屢々両教徒衝突の種となり、多数の死傷者を出すことも珍しくないといふ。

又印度教徒は宗教上の儀式に盛んに鐘を叩き、音楽を奏し、歌を謡ふのであるが、回教は礼拝の時は音楽を嚴禁してゐる。そこで印度教徒の行列が騒々しい音を立て、回教寺院の前を祈禱時に通過すると必ず一悶著起し、時にはそれが拡大して一大殺傷事件にまで發展するのである。また賑やかな印度教の春の祭、ホリイ祭は屢々回印兩教徒衝突の原因になる。この祭日には綺麗に着飾つた印度教徒が何時も色水を掛け合つて喜ぶ習慣があるが、この折、見物に現れた回教徒にうっかり掛つて、回印騒動の原因になるといふことがよくあるといふ。

右の二、三の例は我々の目から見れば些細な問題であるが、かゝる些細な問題も、そのよつて来たる処は遠く深いのであらう。

要するに回教徒と印度教徒との交渉の正史が兩者を介つた大きな原因と考へられる。印度教徒の目から見れば回教徒は外國人であるから、彼等をもとの故郷に追放しなければならぬであらうし、又印度は印度教徒が多教を占めてゐるから印度教徒が支配者の地位に立つのが當然である。

と考へるのである。

又回教徒の側では、自身を神の選んだ人種と考へ、その宗教上の理想達成のために印度教を信仰するものと戦はなければならぬと考へるのである。かゝる見解の相違が兩者の間に大なる溝渠を作つてゐるのである。

更にまた兩者の間に結誓が嫌忌されてゐること、食事を共にしないこと、言語、文字を異にすること、學校教育の種族主義、指導者の無知、偏見は兩者の融和を妨げることに著しい。

以上印度の人種、言語、宗教其の他の點について概説を試みたのであるが、この簡單な展望を以てしても、印度が如何に複雑な社会であるかを知らぬに足るであらう。

複雑なる人種構成、乱雑を極めた言語、錯雑せる宗教、印度教に於ける無教のカスト等は事實印度をして無教の排他的、独立的社会に分裂せしめてゐるのである。かゝる状態では印度の獨立運動が發展し切れまい

のも無理からぬことと考へられるのである。

然しながら是等無数の独立的社會の存在が一國家としての印度の分裂の素因たることは疑ひの余地なきも、さればとして是等無数の社會が互に争鬭を事とせねばならぬといふことはないであらう。

何となればカシミールでは君主は印度教徒であるに拘らず住民は回教徒の方が多く、反対にハイデラバードでは君主は回教徒であるが住民の大多數は印度教徒である。然も極めて最近まで王侯國間に於ては共同體抗争は殆ど見られず、回印兩教徒は和平のうちに生活し來つたからである。

印度社會の分裂性に誘因を與へ、之を激發せしめられたるものは正に英國の傳統的的政策たる分割して統治する (*Divide and rule*) の方策である。と考へなければならぬ。

英國の分割統治政策の目的とするところは要するに印度民族の種族的、宗教的、文化的錯雜性、分裂性を利用して、内部的鬭争を誘發、激化

せしめ、反英的な國民的統一勢力の結成を抑止し、以て英國の印度支配を永久化せんとするにあり、いはゆる夷を以て夷を制するの策であると云ひうるであらう。以下二、三の具体例について概説しよう。

印度の民族的統一、殊に人口の九割以上を占めてゐる回印両教徒の融合一致を妨げてゐる最も有力なる要素が、宗教を中心とした種族、言語、歴史、傳統等の相違に基づく社会組織の対蹠性にあることを考へるならば英國がこの点に目を付けることは至極當然である。従つて英國の分割統治政策は主として宗教的不一致、殊に回印両教徒の分裂抗爭の誘発激化に向けられたのである。勿論分割統治政策は宗教以外の、例へば文化的部面、経済的部面に於ても採用されたのである。例へばビルマの分離は後者の一例であり、教育制度、官吏任用の資格に関する政策等は前者の一例である。

そもく分離統治政策の採用を英國政府に奨めた最初のもつのは一八二一年の *Asiatic Journal* にカルナティカスの署名で發表された一論文で

あるといはれてゐる。その論文は「分離統治こそ我々の印度統治のモツトウでなければならぬ」と主張し、これに続いてコール中尉が「我々の努力は異なる宗教、民族間に現存せる分裂状態を全力を擧げて強化することであり、これを解決することであつてはならぬ」と述べてゐる。この分離統治政策が行はれたのは十九世紀の中頃からであつて、最初には専ら回教徒の圧迫に向けられた。といふのは當時モガール帝國の潰滅は回教徒そのものの転落をもたらしたのであるが、英國によつて政治的覇権を奪はれた回教徒は反抗を以て之に報いたからである。

一八四二——四四年總督たりしエレニボリは次の如く述べてゐる。「余にはこの民族（回教徒）が本質的に我々に敵意を抱くといふ事實に目を蔽ふことは出来ない。従つて我々の眞の政策は印度教徒との和を獲得することである」と。

之より先きオークランド總督（一八三六—四二年）は従来用ひられてゐた公用語を廢止し、英語を以て之に代へた。印度教徒としてはペルシ

や語を學ぶ代りに英語を學べばよかつたのでござしたる苦痛を感せず、競つて英國管理下の學校に入學した。回教徒としては英國に對する反感もあり、また英國の學校經營方針が回教徒無視の態度をとり、主として英語とヒンヅ語による改風教育を行つたので、回教徒はその子弟を英國經營の學校に入れる事を忌避し、独自の教育方針を堅持した。

次いで一八四四年總督ハーディング（一八四四—一八四七年）は英國流の教育を受けたものに社会的地位の優先権を與へる旨の声明をなすに至つた。かくて印度教徒はその習得せる英語によつて漸次政府の役人の地位を独占するに至つた。回教徒は之とは逆に政府の官吏の地位から除外され、悲運に沈吟するに至つた。また従来免稅の特權を有してゐた回教徒の學校或は名家等は英國の新統治によつて悉くその特典を剝奪され、數千の名門が没落し、多數の學校は閉鎖され、その結果回教徒は經濟的にも著しく衰退せざるを得なかつた。

殊に一八五七年のセポイの叛亂（土民兵の叛亂であつて、印度に於け

る英國の植民地的支配に対する最初の民族的一大抗爭であつた。には印度教徒も参加してゐたが、その中心勢力が回教徒の土民兵であつたので、これが有力な回教徒压迫の口実を英國に與へた。かくて回教徒は一段と迫害されます。窮迫するに至つた。

一方文化、經濟の分野に於て、有勢を示して来た印度教徒は、やがて回教徒侵略以前の印度教文化の復興を志すに至り、之がひいては民族獨立運動にまで發展する勢を示すに至つたので、英國は対回教徒態度を改め、之に懐柔策を施し以て印度教徒を牽制せんとした。

十九世紀の後半に於て英國は突如として回教徒を意味する少数民族の保護を宣言するに至つた。こゝに於て回教徒も英國側と妥協し、一八七五年には従来拒否し續けて来た英國流の教育を承認した。一九〇五年のベンゴール州分割令は回教徒に対する英國の迎合であつて、要するに回教徒と印度教徒とを二分することによつて東ベンゴールに於ける回教勢力の成長を援助し以てヒンヅー社会の勢力を抑制せんとしたものであつ

た。ベンゴール分割令を契機として従来高まりつゝあつた印度教徒の政治的不満は遂に爆發し、テロと一揆に發展し、全印度に亘つてスワデーシュ運動 (Swadeshi Movement) が展開された。遂に英國もこの強硬策を断念し、一九一二年の印度統治法に於てベンゴール分割令の取消しをなすに至つた。之が同地方の回教徒の不满を買つたことは云ふまでもないが、不穩行動が法律を改廢し得るといふ確信を印度民衆に植付けたといふことは極めて大きな意義をもつてゐる。當時回教徒の間に「爆彈なくして恩典なし」 (No Bombs, No Banns) といふ皮肉な洒落が流行したといふ。

次に政府の密使が回教徒社会に派遣され、イスラムの復興のために回教徒は急遽蹶起しヒンヅリ勢力を打倒することを使囁した。ために回教徒の蜂起となり、一時ヒンヅリ教徒の恐怖時代を現出したといふ。

また回教徒は一九〇九年の所謂モーレー・ミント改革によつて分離選挙制を獲得し、ヒンヅリ勢力に対抗するための政治的保障を得た。

即ち一九〇九年十一月の施行令（一九〇九年の印度参事会條令に対する）は宗教、経済、其の他の特殊利害關係に基づく選挙制を規定し、中央の立法参事会にも大地主、商業会議所、大學、回教徒からの選挙制が規定せられた。而して宗教關係で選挙制を認められたのは回教徒のみで、特に其の選挙方法は直接選挙制であり、他の團體については間接選挙制が採用されたといふ事は印度法制史上に於ける回印兩教徒の分割政策の最初の現れとして極めて重要なものと云はなければならぬ。

其の後世界大戦に於て英國が回教宗家たるトルコ帝國を攻撃せるため、英國と回教徒との關係は悪化し、一九一九年にガンダーの提唱で第一次非協力運動が採用された時には、回教徒と國民會議派（國民會議派は印度教徒を最も多く擁し、印度教徒を母体とする政治団体である）との共同戦線が結成されたが、それも前後八ヶ年にして崩解し、以後兩者の關係は悪化するばかりであつた。一九四〇年に至り回教徒聯盟（印度教徒に対する回教徒の立場を擁護せんとして結成され、回教徒の主張を代表

する最も有力な政黨である。総裁ジンナは印度總督に対し所謂パキスタン案を正式に通告するに至り、回印両者の決裂は最早最終段階にあるを思はしめる。尚ほパキスタン案とは回教徒の多く住む西北國境、カシミアル、ベンゴール、アッサム等の諸州を聯盟の獨立運動を行ふ地域に指定し、この地方に於ける會議激運動を禁止すると共に首府をラホールに置かんとするもので、回教國建設を提案せるものである。

更に一九三五年印度統治法の中央立法議會に於ける議員の構成を検討するに、上院に於ては議席英領印度一五六名、王侯國一〇四名以下で、英領印度は六名の總督任命議員を除けば、人民の直接選舉によるものは残り一五〇名である。その内一般議席七五（印度教徒代表に対する議席一、不可觸賤民六、シーク教四（但パンジヤブ州）、回教徒四九、婦人六、英國人七、印度基督教徒二、アングロ・インディアン一）となつて居り、下院に於ては議員數、英領印度二五〇名、王侯國一二五名以下であるが、英領印度の議席は一般一〇五名（内一九は不可觸賤民に割當て）、

シーク教六、回教徒八二、アングロ・インディアン四、英國人八、印度基督教徒八、商工代表一一、地主代表七、労働代表一〇、婦人九、合計二五〇名である。

之議員の割當てを檢討するに、人口に於て印度総人口の二五%を占めるに過ぎない王侯國に對し上院で四〇%、下院で三三%の議席を與へ、また人口の二三%を占むるに過ぎない回教徒に對し、上院三三%、下院三二%の議席を與へてゐるに反し、全人口の六八%を占むる印度教徒に對しては兩院とも僅かに三割程度しか與へてゐない、之印度教徒を壓迫し、回教徒を擁護し、又保守的勢力たる王侯國を援助して、以て國民會議派の獨立運動を牽制せんとするものであることは言はずして明かである。

また選舉方法として宗教別其の他の團體選舉例をとることとも種族的、宗教的其の他の對立觀念を助長し、以て印度人の國民的團結を妨碍せんとする意圖に出づるものである。

回印兩教徒の間に於て、極めて些細なことをきつかけとして紛争が生ずること極めて屢々で殆ど年中行事の觀があるといふことについては既に述べた通りであるが、是等の鬭争の原因が何時も曖昧であるといふことがまた是等の事件に共通の特徴である。しかして是等の事件を詳細に調べて見る時、その正体と正確に握り得ないに反し、かゝる事件を試しやかに傳へるデマ宣傳が非常に大きな役割を果してゐるといふことを認めざるを得ないといふことである。かくて回印兩教徒の鬭争の背後には英國側の巧妙なる謀略が潜んでゐるといふことは疑ふ餘地はない。

根も葉もない出来事や些細な回印兩教徒の衝突はたちまち英國のデマ宣傳の材料として利用され、甚知ら民衆はそれを信じ、遂に宗教鬭争としてたちまち各地に波及し、大事に至るのである。かくの如く回印兩教徒の衝突の多くは、宗教社会に適用された英國側の分割統政策によつて誘発激化され、それは再び兩教徒衝突の素因として作用するものと云ひ得る力である。

回印両教徒の衝突事件に対する英國側の取締は極めて手温るく、果して之を防止する意思を有するや否やを疑はしむるといふことであるが、けだし當然のことであらう。また停車場の水飲場、列車食堂等は回印両教徒によつて夫々別にしてあるが、是等も両社会の対立意識を強化するに役立つであらう。又学校、言語、文字に関して種族の傳統を尊重するといふ英國の方針も、文化的部門に於ける分割統治政策の現れであるといふ見られる。

第五章 独逸及伊太利の民族事情

第一節 独逸の民族問題

第一款 序 説

第一項 十千ス獨逸民族の人種的構成

今日の独逸国民を形成する独逸人の人種的系統を専ら生物学的見地より觀察するならば、中部及び北部に認めらるる、北方人種と主として南部に検証せらるる、アルプス人種の二つの人種系統を指摘することが出来る

(備考) 欧羅巴人種を一般に北方人種、アルプス人種、及び地中海人種の三系統に分つ。その主要なる体質的差異を挙ぐれば、北方人種は長頭、碧眼、金髪、長身、狭鼻を、地中海人種は長頭、褐灰眼、暗褐髪、中背、広鼻を、アルプス人種は短頭、暗眼、淡褐髪、中背、広鼻を特徴とする。概して北方人種及び地中海人種とアルプス人種との間には極めて大いなる人種的差異がある。

ギエントターの研究により更に詳細なる独逸人の人種的構成を掲ぐれば
次の如くで

北方人種系	五〇%
フエリツシユ系	五〃
東方人種系	二〇〃
ティナール人種系	一五〃
東バルト人種系	八〃
西方人種系	二〃

大体北方人種を中核として諸地の人種系統を混入せるを概観せしむべく、特に独逸の地が歐洲の中央に位せる地理的事情より、或はローマ人とスラブ人との闘争地として、或は東方アジア人の侵寇の最も頻繁であつた地域として、歴史時代に於いても屢々異種族混血の厄を蒙れることも事實であるが、今日の独逸人が人種的には主として北方人種を根幹として形成された單一民族を為すものであることはいふ迄もなく、且つそ

の一民族として、の文化的乃至政治的統一も亦之を所謂「北方的」起源に負ふものであることは否定し難い。

尤も独逸民族の民族意識を強化する為にナチス政府が取上つた北方人種優越思想の過当な強調が、ナチス登場後同様な頃の独逸の一部国民層に、無くもがたの人種思想を惹起したことは事実である。一九三四年十一月二十八日付の「アングリツフ」紙が「若い健康な褐色のヒツトラ青年団員が罪を告白する犯罪者のような顔で医師を訪問し、自分がどの人種に属するかと訊ねることは稀れな出来事ではなく、極めてありふれたことである」と報じて、人種思想の行き過ぎた強調に対して一矢を酬いてみるのに見ても、その間の事情を髣髴するに足らう。其後のナチス政府が、純科学的な人種学的研究と之に基く北方人種優越思想の綱領とを堅持し乍らも、無用な公衆的混乱を回避すべく、行き過ぎた人種問題の通俗的論議を抑制すること、なつたのは勿論当然の話で、今日に於ける独逸国民の民族的統一は單に生物学的な人種的類同指数の多寡によつ

て測定せらるべきものではない。たゞナチス独逸に於ける人種的^大関心の異常な昂揚にも然るべき歴史的事情があり、独逸民族の歴史を離れてはその民族問題の真相を把握することも不可能に近いといへよう。

第二項 独逸民族形成史の概観

独逸民族生成の史的淵源は、紀元前一五〇〇—一〇〇〇年頃ユトレヒト半島及び南スカンヂナヴィア地方に棲存したと考へられる典型的な北方人種系住民にまで遡る。今日の所謂ゲルマン民族の祖先であるが、その後も永く北に残つたものが今日のスカンヂナヴィヤ人を爲し、南方へ發展せる種族の内、東方の東ゲルマン諸族は古代末期の所謂ゲルマン族の大移動として独立した民族に生成することなく分散してつた。ただ今日の独逸の土地に永く定住した西ゲルマンが現在の独逸人の本当の祖先である。西暦紀元前一世紀の後半には西ゲルマンは北海東海の沿岸から中央山脈に到るまで拡大し、紀元前後の数世紀に亘つて畧々同種型

のケルトと闘争し乍ら混血し、大凡ラインの線に於いて南のローマ人、
或は文化的にローマ化せられたるゲルマン、ケルト族と対峙した。今日
の独佛西民族の民族的分界線は、文化的にも又政治的にも既にこの時に
定まつたと稱するも過言でない。

は中世代に於ける諸國家群と諸種族群の

が独逸民族の眞に民族的なる生成形成過程に俟つ可きもので狹隘だが
嚴重な封建的生涯環境の中でその民族的骨格は練成されたといつてよい。

特に高期中世代に於ける困難なる国内拓植事業と人口の極めて正常なる
發展とは、互に因となり果となつて民族的共同體の形成に作用したとい
つてよい。そして民族的生涯力のかゝる内的拓植事業として結実した。

集成は、晚期中世代に到つて独逸民族の東方

史上幾多の興亡変遷の際はあるものの、その東方政策と之に伴ふスラブ
民族との対立は今日も独逸民族にとって宿命的な問題であり、特にソビ
エツト政権の確立は此の民族的宿命をいよく重大化したものといつて
よい。晚期中世代の東方發展によるスラブとの混血問題は既に過去の歴
史的事実として、現在は東部独逸人に多少の異色を止むる程度に過ぎな

いが、今日の独逸が当面してゐるソビエツト治下スラブ民族との民族的
対峙は、唯にその政治思想の極端なる対立ばかりではなく、今日の独逸
人口学者が口を揃ければ必ず力説することゝを怠らないやうに、スラブ民
族の強大なる民族生物学的増殖力との対立、民族文化の保持者である民
族人口そのものの人口比重の均衡如何の問題として立ち現はれてゐる。
嘗てラテン民族が歐洲文化の指導者であつた頃には、ラテン民族は全歐
洲人口に重要なる比重を示してゐたばかりでなく、その人口は正常なる
發展の跡を示してゐた。此の歐洲文化指導の地位は既にラテン民族から
ゲルマン民族に肩替りされて今日に及んでゐるが、併しゲルマン民族の
歐洲に於ける人口比重は、恰もゲルマン民族の將來に於ける文化指導的
地位の没落を豫言するかの如く、早くもスラブ民族によつて脅かされて
ゐるといふのが、独逸人口学者の強調して媏まない杞憂であり、そして
それは特に独逸民族にとつて常に亡靈の如くに再現する独逸民族問題の
最後の背景をなすものである。

(備考)

ブルグドエルフアーが算出せるラテン、ゲルマン、スラブ三民族群の歐洲に於ける人口比重変遷の数字は左の如くである。

(イ) 総数へ單位百万

年	ラテン	ゲルマン	スラブ
一八一〇年	六三	五九	六五
一九一〇年	一〇八	一五二	一八七
一九三〇年	一二一	一四九	二二六
一九六〇年	一三三	一六〇	三〇三

(ロ) 百分比

年	ラテン	ゲルマン	スラブ
一八一〇年	三三、七	三一、六	三四、七
一九一〇年	二四、三	三四、〇	四一、七
一九三〇年	二四、四	三〇、〇	四五、六
一九六〇年	二二、三	二六、九	五〇、八

却説

独逸民族の東方発展を見た晩期中世代は、また都市の興隆と貨

二六二五

幣経済の発展を見た時代として、独逸民族にとって民族問題上永く係累
を残した歴史的事実が初まる。即ち独逸の諸都市に於けるユダヤ人の増
加の問題である。その頃キリスト教では利子をとることを罪惡視してあ
たので、金貸しとしてのユダヤ人は、貨幣経済の発展に伴ひ、さういふ
實際的必要がらも要求されたわけだ、それに諸王侯は財政的必要がらも
有力な納税者としてのユダヤ人を無條件的に排斥することを怠らば、時
には陰に陽に保護をさへ加へた。併しその頃の独逸民族の民族的本能は
終始一貫して此の異種民族を憎惡し、ユダヤ人迫害の史実は遠く十一世
紀に初まり中世代を通じてユダヤ人はその責任者なりとされて或は慘殺
され或は追放されたりしたが、併し遂にその跡を絶つことがなかつた。

これは経済的必要と民族的本能との相剋に関する好事例で、同時に所謂
民族問題の最も古典的な範型であるともいへよう。この同、ユダヤ人と
キリスト教徒との私通に嚴罰を與へ、又キリスト教徒の少女や乳母がユ

ダヤ人の家庭で働くことを禁じたなどといふ事例は諸方に見られるところであるが、同じやうなことが今日ナチス治下の独逸に、新しいイデオロギイ的背景を以て法令化せらるゝに到つたことは興味深い事実といへよう。

異質民族としてのユダヤ人の問題は十五世紀の中頃から十六世紀の中頃にかけて、即ち独逸民族自身の近代的發展の力によつて、一時的には影をひそめる。いふ換へればユダヤ人自身が独逸諸都市から一時影を潜める時代がくる。が近代社會の發展は第十七世紀と共に再びユダヤ人の入國を盛んにした。經濟生活の國際化がその主因と考へてよく、諸王侯が財政上の理由から之を利用した事情も亦前と同じい。殊に近代社會の發展に伴ふ近代思想の普及は中世代に見られたような宗教的對立意識を弱化して居り、近代に於ける唯理論的世界思潮が民族の本能的睿智に根柢した民族的感覺も非合理的な錯覚とすへ考へるようになったことは近代に於けるユダヤ人問題に獨特の歴史的意義を與へるものである。西歐

洲に於ける啓蒙の世紀といつてよい第十八世紀に固執されたさういふ思想的背景は第十九世紀に到つてユダヤ人に対する同等の市民権の認容といふ事実となつて実を結ぶ。一八〇八年ウエストファリア王国が凡ての臣民に法律的平等と信仰の自由を認むると共に、ユダヤ人の同権をも認容したのを先蹤とし、殊に六〇年代以降バーデンを筆頭に各邦政府とも近代的「人権」思想の名に於いてユダヤ人に対する民族的差別待遇を撤去するに及んで独逸に於けるユダヤ人は各地方とも著しく増大した。その間の事情は一八七〇年近代的独逸國家の成立後と雖も變りはない。十九—二〇世紀プロシヤに於けるユダヤ人の増加趨勢は次表の如くで

年次	ユダヤ人数	总人口に対する割合
一八一六年	一二三、九三八	一、一九%
一八二五年	一五三、六八八	一、二二%
一八三四年	一七六、四六〇	一、三〇%
一八四六年	二一四、八五七	一、三三%

一八五五年	二三四、二四八	一、三六%
一八六四年	二六二、〇〇一	一、三六%
一八六七年	三一三、一六五	一、三〇%
一八七五年	三三九、七九〇	一、三二%
一八八五年	三六六、五七五	一、三九%
一八九五年	三七九、七一一	一、一九%
一九〇五年	四〇九、五〇一	一、〇九%
一九一〇年	四一五、九二六	一、〇三%
一九二五年	四〇三、九六九	一、〇五%

その総人口に対する割合は一%餘に過ぎないが、独逸人口の増加と並行してその割合を堅持してゐる。

が特に注意すべきは之らのユダヤ人が、ユダヤ民族特有の経済的才幹によつて独逸の社会経済生活の中核部に食ひ入つてゐること、その事情の一斑は、次表に見る如き都市生活者の累増の跡にも之を窺ふことがで

きよう。

ベルリン市に於けるユダヤ人数

一八一六年	三、三七三人
一八三〇年	四、六八九人
一八五〇年	一〇、〇三七人
一八八〇年	五、九一六人
一九一〇年	九、〇一三人

都市生活者として、即ち近代文明の享受者としてユダヤ人が近代社会の上層に侵入せる事實は、また之を其の子弟の高等教育修了率にも見るこ
とができる。一九〇四年に一般独逸人子弟にして高等教育を受くるもの
僅かに二、五%なるに對し、ユダヤ人子女に於いては八〇%といふ数字を
示してゐる。要之、ユダヤ人は、その独特の経済的才能と都市的、寄生
的生活とによつて次第に独逸の社会经济生活の中核部を占領し、且つ金
権が政治と文化とも支配した近代社会特有の法則によつて、独逸民族

の文化生活の死命をも制するに到つた。過ぐる第一次歐洲大戰に於ける
独逸の國內的破綻の原因もユダヤ禍が一事に求めることは勿論正鵠を得
た歴史解釋とは称し難いが併しこのユダヤ禍が所謂近代社会の経済的
、政治的乃至は文化的な諸弊害の最も顯著な典型的表現であつたとい
ふ意味では正しい。一九三三年一月十日の登場と共にユダヤ人問題
が民族的な関心を以て取り上げらるゝに到つたのは、それ故に、独逸民
族共同体的再生の大事業にとつて極めて当然の事柄であつたばかりでな
く、又その民族啓蒙政策的價値に於ても極めて適切好便の問題であつた
といふことができよう。

第三項 独逸に於ける民族問題

すべての民族成員が、その社会的地位と職業的活動分野の如何を問は
ず、一民族の一員として民族共同体的運命觀を體現することは、ナチス
独逸が新しい第三國家の實現すべき最高の理想とするもので、民族成員

の適正なる社会階級的効に職能的配分とその間に於ける社会的正義（六二）の実現と存之に不可欠の政治的課題と考へられるが、二のような民族意識の強調は在来の所謂「民族問題」に独特の転機を齎した。といふのは専ら異種民族との交渉を中心として取り上げられてみた従来の民族問題は、茲に於いては専ら自民族自身の民族的再生の問題としてその重点を一転するに到つたとも考へられるからで、今日の民族問題が人口問題と表裏一体の關係を爲すに到つた所以も亦そこにあるといへよう。と同時に異種民族の取り扱ひに関する政策技術的問題さへも亦自民族の政治的及び文化的理想と結び附いたイデオロギイ的基礎附けを要請するに到つたといへよう。斯くすなはち又独逸に特有な民族問題の民族主義的再燃が当然に撞着せざるを得なかつた第一の問題は、全独逸民族の政治的結合に関する問題である。「我々は凡ての独逸人が民族自決の原則に基き大独逸に統合せらるゝことを求むしといふすなはち又黨綱領の第一に掲げらるゝ命題は二の問題を極めて卒直明快に表現したものであるが、この政治的ス

ロイガンは一九三五年のザール地方編入、一九三八年の独逸合邦以来、今日の第二次欧州大戦を通じて着々として実現せられ、アルサス、ロイ
 トリンゲン地方の正式帰属如何が国際政治的機微に觸れて延引せられ
 ておる等の部分的事例を除いては、現在は既に概ね解決済みの問題とな
 ったといふことができよう。

(備考) ナチス政権樹立当時、独逸の国境外に有り本國との合体を要
 望されてみた国外独逸人の情況として独逸政府自身の半公式
 に公表せる数字を掲ぐれば次の如くである。

ベルギーに於ける独逸人

約

一四〇、〇〇〇人

独逸系スイス人

〃

二九二〇、〇〇〇

リヒテンシュタインに於ける独逸人

〃

一〇、〇〇〇

波蘭(西部地方)

〃

〃

三〇〇、〇〇〇

ダンチツヒ

〃

〃

三五〇、〇〇〇

ルクセンブルグ

〃

〃

三〇〇、〇〇〇

北シエレスガイヒに於ける独逸人

約

四三、〇〇〇人

エルザス、ロートリンゲン

〃

〃

一、五八〇、〇〇〇

尚、右の外、過去に於ける国外移住の結果として、歐洲内の諸処に独逸人集団を散在させておるが、中世代に於ける東方移住の結果として今に残るものにはバルチック沿岸の独逸人へエストニアに約一万余、ラトヴィアに約六万三千〇〇〇がおり、現在も現住民より遙かに社会的地位も高く、且つ北方人種的乃至フエリツシエ的体貌をも今も止めておる。その他、十七、十八世紀に於ける大量移住の跡はハンガリーに、或はルーマニアのドブルージェヤ等に独逸人の社会集団を残しておる。尚、十九世紀の国外移住は殆んど新大陸に對し行はれたが、現在の西米大陸に於ける独逸系人口は次の如く概算せられておる。

北米合衆国へ独逸系第一代及第二代人口 八、〇〇〇、〇〇〇

内、独逸語を語るもの

加奈陀

メキシコ

其他の中米諸国

ブラジル

アルゼンチン

チリ

パラグアイ

ウルグアイ

ヴェネエツエラ

コロンビア

ボルヴァイア

計

五〇〇〇〇〇〇

五〇〇〇〇〇〇

一三〇〇〇〇

八〇〇〇〇

九〇〇〇〇〇

二三〇〇〇〇

二五〇〇〇

一五〇〇〇

八〇〇〇

三〇〇〇

二〇〇〇

一〇〇〇

九七〇〇〇〇

國境外隣接地域の少数独逸民族統合の問題は、右の如く、現在既に概
ね解決せられ、或は少くとも解決し得る政治的諸條件を實現せらるゝに
到つたといつてよいが、特に歐洲内の遠隔地方に散在する自民族に対し
ては本国再移住の政策が採用せられた。バルト三国、旧波蘭東部地方、
並にルーマニアの南北ブコビナ、ベッサラビア及びドフルーヂヤ地方か
ら通計五十万近くの独逸人が極めて組織的な計画及び統制の下に引き奉
げられ、新しく独逸の支配下に入った旧波蘭領の各地に移住せしめられ
た。それは独ソ用戦に先立つ政治情勢の總むを得ざる結果であつたとは
いへ、同時に民族人口の分散よりも結集を求め、新しい民族志向の一つ
の表はれであることはいふ返もない。

が独逸民族の政治的統合問題の解決は、乍併十千ス独逸にとつて第二
の、新しいそして本来の意味に於ける民族問題を發生させた。いひ換へ
れば新しく大独逸領内に編入せられ、或は独逸の政治軍事的支配下に包
摂せらるゝに到つた東南欧諸國の異種民族に対する問題である。そして

民族自決の原則による大独逸實現の要求が多分にナチス登場当時の独逸の國際政治的事情を條件として標語化されたものとするならば、客觀的情勢の転換に伴ふ民族問題の此の新しい象面は、ナチスの民族主義に於ける独逸民族優越の思想をそのイデオロギイ的前提として更にいよく強調せざるを得ない必然性をもつておるといへよう。

その帰還如何は勿論今後の問題であるが、しかし民族問題のさういふ展開方式は、ナチス登場後直ちに着手せられたユダヤ人問題の解決に既にその範型を示されておるところで、ナチスのユダヤ人排斥政策に対する毀譽の極端に対立する理由も亦そこにありと考へられる。蓋し民族共同体的自覺の實現に政治指導の最高の目標を置く者にとつては、異種民族に対する政策技術的問題も常に自己民族の民族的覺醒の爲の恰好の一方便として利用せられねばならないからで、さういふ利用的態度に道德的批判を以て対するならば、ナチスの人口民族政策の理論的出發点であるアリアン人種乃至北方人種の優越思想も亦科学的根據を欠いた一つのイ

デオロギ一的方法であることに變りはないのである。が偏狭な北方人種
優越思想も、極端なエダヤ人排斥政策も、共に独逸民族の民族的再生運
動、或は民族的生活力の復活といふ一つの根本的事実に起因する派生的
現象と考ふべきもので、自己民族の内面的再生意慾のないところにはも
とく所謂民族問題なるものは成立する筈がないのである。そらいふ意
味でもエダヤ人問題と其の対策はナチス独逸の民族問題理解の鍵を為す
といふこともできよう。

第二款 反エダヤ人立法

第一項 一九三三年当時の所謂エダヤ禍の概観

ナチス政権の樹立を見た一九三三年の国勢調査結果によつて見ると、
エダヤ教会所屬のエダヤ人は独逸総人口の〇、七六%で、改宗者や混血
児を加へても恐らく一、五%を超えない。乍併、所謂エダヤ禍の真相は、
上述の如く、單にその人口比率よりも寧ろその社会的比重の如何にある

わけて、彼等が金融界の指導的地位をはじめとして、政黨、學界、乃至は新聞事業その他の文化領野を支配してゐた勢力は、實に驚くべきものがあった。例之、柏林の證券、物産、金屬三取引所の理事六十四人の中四十七人はユダヤ人であつたし、また柏林大学の醫學教授の半数、哲學教授の二割五分、プロイセンの辯護士の三〇%、全國醫師の一三%はユダヤ人の占むるところであつたといはれてゐる。そして之らの社會中樞部に於けるユダヤ人の勢力が、假令直接に及ばず、獨逸的に行動することがなかつたとしても、獨逸國民の民族意識の教化に冷淡であつたことは疑ひないところである。且つこの冷淡が問題の核心に纏れ、國民生活の危機に當面するほど敵對的關係に轉化せる事實は、蔽ふ難い。嘗て一獨逸人哲學教授が國民の血統按同體的關係を説き、そして獨逸的思想家としてのカントと當時の有力なカント學者たりしユダヤ人フヘンのカント解釋との差異に論及したるに、學界に異常な向題を惹き起し、遂には當時の哲學界に最も有力な學術団体であつたカント協會を脱會することを餘儀なくされた

といふ揮毫からその一斑を察するに足るといへよう。況んや新聞、映
画その他の文化事業に於けるユダヤ人の勢力を思へば、民族文化死活の
鍵が先づ此のユダヤ禍の清掃に求められた理由も納得するところができよ
う。

第二項 反ユダヤ人立法

(1) 新聞界その他の文化部面のユダヤ禍清掃

新聞事業のユダヤ的支配を清掃することは夙にナチス黨綱領中にも明
記されてみるところであつたが、一九三三年十月四日に公布を見た「
新聞業者法」(Schriftleitergesetz) はその素志を實現したものと見てよ
く、本法により新聞人たる可き者は必ずアリアン血統の者であり、且
つ非アリアン血統の者を配偶者とせざる者であることが最も重要な
資格要件として明記するに到つた。但し本法の施行令へ三三年十二
月十九日公布へば本人が世界大戦に出征せる者であるか、或は本人の

父又は子が世界大戦に戦死せる者である場合に限り右規定の適用を免除してゐる。この種の除外規定は勿論過渡的のものであるには相違ないが多少の程度に於て所謂アリオン立法の凡てに見られるところである。

新聞について劇、映画、ラヂオ、音楽、美術等諸般の文化部面に対しても統制が強化された。尤もこれは直接の反ユダヤ人的立法といふよりも寧ろ文化部面に於けるユダヤ主義的傾向の禁圧を目的としたもので、既に早く三三年七月十四日には「臨時映画局」の制定を見、同年九月二十二日には諸般の文化領域を統轄せる「独逸文化院」(Reichskulturkammer) 制定の法律が公布されてゐる。これは勿論官廳では

ないが其の評議員は同院總裁たる宣伝及啓蒙相の任命するところである。専門家の経験と才能とを国家の目的に随つて動員しやうといふ仕組みである。たほ右独逸文化院を中心としたナチス独逸の文化統制は現在に既に当初の消極的統制の域を越えて諸外國の資本主義的経営には求め

難い公の損失負担による藝術向上の域にまで進んでみることも注目すべきで、それが反ユダヤ主義運動のそもそもの真髓であつたともいへよう。

所謂アリアン立法中我々の記憶に最も深いのはアインシュタインも初め多くユダヤ人学者の学園追放であるが、ユダヤ化の防止は学生生徒に對しても亦行はれてをり、一九三三年四月二十五日公布の「独逸人諸学校ノ收容人員制限ニ関スル法律」は教育上の見地よりする收容人員の制限や職業的需要に即應する各科人員の適正化を行ふと同時に、また公私を問はず独逸人諸学校の新規收容人員中後説「官吏身分再組織ノ爲ノ法律」所定の意味に於ける非アリアン血統者の占むべき割合を制限し、全校及各科に於て右非アリアン血統者は彼等が独逸総人口に於いて占むる割合を越す可からざる旨を規定してゐる。同法施行令（同月同日公布）は右比率を一・五%と明記してゐるが、茲にいふ非アリアン血統者の大部分は勿論ユダヤ人であるわけで、彼等の就学

率は独逸人のそれを遙かに超えてゐたことと物語る。之に見ても此の種のアリソン立法。ナチスの所謂人種政策なるもの、重点が何処にあつたかを理解するに足りうと思ふ。民族保全は同時に民族文化の保全、従つて何よりも先づ民族自身の手による文化の保全を必要としたわけである。

(四) 國家機關に於ける人種原理の確立と「独逸國公民法」の制定

國家の指導的地位は独逸血統の独逸國民の手へとの思想も亦ナチス黨綱領の宣言するところであつたが、その主張は早く一九三三年四月七日公布の「官吏身分再組織ノ為ノ法律」Gesetz zur Wiederherstellung der Berufsbeamtenstellung によつて實現された。本法は特に世

界大戰後に見られる官吏資質の低下と思想の悪化とに對してナチス一流の清掃工作を断行したものであるが、之と同時にまた國家機關における人種原理の確立を行つたもので、本法により官吏へ公吏及び之に準ふる公務員その他社会保険事業、ライヒスバンク等の關係者をも含

むしにして非アリアン血統の者は凡て免職せられること、なつた。
 但し一九一四年八月一日以降既に官吏であつた者、世界大戦に出征せ
 るもの又は其の父又は子の世界大戦に戦死せる者、並に其の夫の世界
 大戦に戦死せる婦人官吏を除く。最後の一項は三三年九月二十二日改
 正法律による。本法施行令へ三三年四月十一日公布の明記するとこ
 ろによると右非アリアン血統者とは其の父母又は祖父母中一人の「非
 アリアン、特にユダヤ血統」の者ある者を謂ひ、特に其の父母又は祖
 父母の一人がユダヤ教会に所属せる者なる場合はそれだけで右所定の
 非アリアンと認定されることになつてゐる。ナチスのユダヤ人規定は
 四祖父母中少くも三人のユダヤ人ある場合を完全なるユダヤ人とし、
 二人乃至一人の場合をユダヤ混血兒としてゐるから、右規定は結局凡
 てのユダヤ人及びユダヤ混血兒を官界から追放しようとするものとい
 つてよい。更にその後公布の「官吏任用、俸給及救護法規則中改正法
 律」へ同年六月三十日公布の非アリアン血統者と結婚せる者の任官

をも禁じ、且つ官吏にして結婚せんとする者は其の配偶者がアリアン血統の者なることを証明せねばならないことになつた。本人のみならず其の配偶者についてもアリアン血統を要請するのはアリアン立法一般の通則と見てよい。

右官吏層からの非アリアン、特にユダヤ血統者の清掃はその他の之に類する諸法令と併せて官吏、軍人、判検事、弁護士、疾病金庫医師等国家机关の全面に亘つて断行され、ユダヤ人並にユダヤ混血児は一部の例外規定該当者を除き全く一掃する、に到り、且つ之を配偶者に有つことも不可能となるに到つた。一部の例外規定も勿論一時的のもので其の後廃止を見たことは後説の如くであるが、この種徹底的なアリアン立法の精神は同時に労働奉仕や兵役法関係の諸法令に於ても一貫せられ、非アリアン血統者は之を労働奉仕又は兵役の義務より免除する立て前を取つてゐる。(尤も国防国家建設途上の労働力不足の深刻化に伴ひ一九三九年二月十三日公布の「國策上特に重要ナル事業」為

ノ勞力需要確保ニ関スル命令ハ所謂「勞働給付義務」を負ふべきものも舊令に於ける「独逸国民」から「独逸国内の居民」に拡張し、独逸国内のユダヤ人も亦之を勞働戦線に動員し得る立て前を取るに到つてゐる。

所謂アリアン立法中最も基本的なるものは一九三五年九月十五日公布を見た「独逸国公民法」*Reichsbürgergesetz*で、本法により「独逸国公民」たる為には「ソノ行動ニヨリ誠心独逸民族及び国家ニ奉仕セント欲シ且ツ奉仕シ得ル者ナルコトヲ確認セシムル」トコロ、独逸又ハ之ト同種血統ノ *Deutschens od. Ostseewandlern Blutes* 独逸国民「でなければならぬ」こと、なつた。いふ換へれば独逸国公民たる資格は思想と血統との両要件によつて規定されるに到つたわけで、右公民権の規定は諸多の人口政策的諸立法による助成金乃至扶助金給付に際し被助成者の資格要件の一つとして屢々採用されるものである。また本法は右公民資格の規定とは別にユダヤ人は官吏たり得ざる旨

明記するに至り、従来の除外規定（上掲）該当者も本法施行と共に免官されること、なつたわけである。へたゞ世界大戦出征者に対してのみ恩給規定に関する多少の配慮が行はれてゐるに過ぎない。尚、本法施行の爲の第一次命令（三五年十一月十四日公布）の詳示するところによると本法所定の「ユダヤ人」とは四人の祖父母中少くとも三人の純ユダヤ人も有つ者を謂ひ、所謂「ユダヤ混血児」（四人の祖父母中二人乃至一人の純ユダヤ人も有つ者をもいふ）中にあつても四人の祖父母中二人の純ユダヤ人も有ち、且つ本法公布当時ユダヤ教会に所属せる者なる場合、或は本法公布当時乃至以後にユダヤ人と結婚し居りたる者乃至結婚せる者なる場合、或は「国民血統保護法」（後説）の発効後に於て行はれたるユダヤ人との結婚より生まれたる者なる場合等は本法所定の「ユダヤ人」として取り扱はれることになつてゐる。

尚、右「独逸国民法」所定の規定に隨へば單に曾祖父母中一人のユダヤ人も有つ者は完全なるアリアン血統者と見做されるわけである。

が、然し特定の場合について要請される血統規定は更に強度のものも
あり得るわけであり、世襲農地法¹の如きに於ては申請者の血統は一八〇
〇年一月一日現在にまで遡つて問題とされてゐる。

(ハ) 独逸血統保護法²の制定

叙上の諸立法は直接非アリアン血統者、就中ユダヤ人の排斥を主と
せるものでたゞ配偶者規定に今後の非アリアンの混血児蕃殖の同接的
抑制を行つてゐるに過ぎないが、更に直接にユダヤ人を対象として今
後のユダヤ混血児の増加を抑へたものに一九三五年九月十五日公布の
著名なる「独逸血統保護法」³ Gesetz zum Schutz der deutschen
Rasse in der Deutschen Ehe を挙げるべきである。本法は上

掲「独逸国民法」と併せてニールンベルクの人種法律と謂はれる
ので、本法により独逸或は之と同種血統の独逸国民とユダヤ人との
間の結婚は禁止せられ、之を犯す者は懲役を以て罰せられる。私通も
同様禁止せられ、之を犯す者は拘留又は懲役処分を受けらるることとなつ

た。また独逸或は之と同種血統の独逸婦人にして、四十五才未満の者がエダヤ人の家に雇傭せられることも禁止せられ、之を犯せる者は二年以下の拘留及び罰金、又は其の孰れかに処せられること、なつてゐる。嘗てエダヤ人とキリスト教徒との私通を嚴罰し又キリスト教徒の少女や乳母がエダヤ人の家で働くことを禁じたともいふ中世のエダヤ人排斥は茲に新しい國民的自覚の下に国法化する、に到つたわけである。へ本法中「エダヤ人」とは上掲「独逸國公民法」所定のものに依る。」

又、本法施行の爲の第一次命令（三五年十一月十四日公布）はエダヤ混血兒の婚姻に關して種々の規定を定めてゐるが、之によると四祖父母中二人のエダヤ人を有つエダヤ混血兒が独逸人又は四祖父母中一人のエダヤ人を有つエダヤ混血兒と結婚する場合には特別の許可を必要とし、許可に當つては申請者の身体的乃至精神的狀況、その家族の独逸滞在期間、或は本人又はその父が世界大戦に参加せらるや

否や等の事情を考慮されることになる。又四祖父母中一人のユダヤ人^{ユダヤ人}を有つユダヤ混血児相互の間の結婚は禁止された。要之、所謂ユダヤ混血児の今後の増加を防止すると共に其の混血度を出来るだけ薄めて行かうといふ立て前であるわけである。

(二) 要約

要之、現在のナチス治下の独逸に於いてはユダヤ人、ユダヤ系混血者、及びユダヤ人も配偶者とする者は、最早独逸国公民としての権利を有たぬ。官吏、軍人、判検事、弁護士、疾病金庫医師等の国家的諸機関や、新聞、映画、ラジオ、音楽、美術、学校教員等の国民啓蒙的機関にかゝる職務に就くこととを許されぬ。たゞ独逸国家に寄生する特種の人民として私生活を営み、専らユダヤ人として相互に特別の教会を作り、特別の新聞雑誌等を刊行するを許されてゐるだけである。

独逸国民との間の結婚は、懲役刑を以つて禁止せられて居り、その点独逸国民と一般の非アリアン血統者との結婚が單に公民権その他の

特権の喪失に止まるのに較べて特に徹底的且つ禁止的である。

のみならず其の制限せられたる日常私生活に於いても種々の差別待遇を蒙ること、その一例を所得税制に於ける反ユダヤ人的規定に見る二とがべきよう。現行独乙の所得税制はナチス治下に入つて人口政策的見地より徹底的な改正が行はれ、特に独身者に重課せらるゝこと、なつたものであるが、ユダヤ人に対しては、甚しい低額所得者に対する例外的場合を除き、その家族関係の如何を問はず一律に之を独身者として取り扱ふことになつてゐる如き、差別待遇の最も公然且つ露骨なるものといへよう。

第三項 一九三九年國勢調査によるユダヤ人の現況

叙上の如き反ユダヤ人政策の結果はナチス以来独逸のユダヤ人を続々とじて国外へ逃避せしめたが、その結果を一九三九年五月施行の國勢調査結果によつて見ると以下の如くで、総数及び独逸総人口に対する

比率の着減、特に男子人口の減少等その痕跡は極めて著しい。その集計結果の一部を掲ぐれば以下の如くである。

(備考) 本調査範囲は当時の独逸国領域のみで、メーメル地方、ダンチツヒ自由市、旧波蘭領たりし東部地方、及びオイペン、マルメヂ、モレスネを除く。又本調査に於けるユダヤ人の取扱ひは其の各四人の祖父母について其の血統を報告せしめ、右四人の祖父母中少くとも三人が完全なるユダヤ人である者をユダヤ人とし、四人中二人の場合を第一種のユダヤ混血者、四人中一人の場合を第二種のユダヤ混血者として集計せるものである。

(1) ユダヤ人及ユダヤ混血者の総数

ユダヤ人及びユダヤ混血者の総数に其の独逸総人口に対する割合は左の如くであつた。

總數

ユダヤ人

三三〇、八九二

〇、四二%

内、男

一三九、八三三

女

一九一、〇五九

混血(第一種)

七二、七三八

〇、〇九%

内、男

三四、〇一〇

女

三八、七二八

混血(第二種)

四二、八一

〇、〇五%

内、男

二〇、六五四

女

二二、一五七

右数字には私生児の数が含まれておられないわけであるが、大勢を察するには充分で、純ユダヤ人の方が混血者よりも遙かに多いことが注意を惹く。独逸統計局はこの事実を以つて従来僅かの資料を基とせる單

独逸現在人口に
対する割合

なる推測によつて杞憂されてゐた民族的混血の事實に対して極めて樂觀的なる結論を抱くに到つた。

(4) 一九三三年以降の比較

いま之を三三年調査と比較してみると次の如くであるが三三年の調査に於ては單に *Quakersjuden* 即ち正式にユダヤ教会に属する者のみを算へてゐるので、正確なる比較は困難で完全なユダヤ人の一部が除外されてゐる一方低度のユダヤ混血児や、時には全くユダヤ人に非ざる者も多少は含まれてゐるわけである。

一九三九年（混血を除く）
一九三三年(1)（ユダヤ教会所屬者）

舊領土内 二五三、九七三（〇、三四％） 五〇二、七九九（〇、七六％）

舊埃太利 九四二七〇（一、四二％） 一九一、四八一（三、八五％）

ズデーテン 二六四九（〇、〇七％） 二七、三七四（〇、七五％）

独逸地方 三三〇、八九二（〇、四二％） 七二一、六五四（〇、九四％）

計 (2) 三三〇、八九二（〇、四二％） 七二一、六五四（〇、九四％）

(備考) 上二段の括弧内の数字は現住人口に対する百分比なり。

(註1) 舊領土内の調査は一九三三年六月十六日、ザール地方は三
五年六月二十五日、舊埃太利は三四年三月二十二日、スデ
ーテン独逸地方は三〇年十二月一日。

(註2) メーメル地方、ダンチヒ及び新東部地域を含まず。

右数字に明らかなる如くナチス治下に於けるユダヤ人の減少は極めて
顯著だが、独逸統計局はその原因として特に三七年以降に著しい其
の国外移住の外に、ユダヤ人の老齡化と強度の出産制限による死亡起
過の事実も與るところ甚からずと見てゐる。なほ地域別に見てスデー
ーテン独逸地方の減少率の極めて高いのは同地方の独逸再帰に先立ち同
地のユダヤ人が国境通過の憂なきに莫大な財産を伴つてホヘミア及びモ
ラビヤ地方へ移住せるが爲であるといふ。

本調査に於けるエダヤ人の体性別集計をみると極めて異常で、前三
 年調査にも指摘されてゐる女子過剰は更に顯著となつてゐるが、勿
 論これは独身壮年男子を主とする国外移住の当然の結果で、それは過
 剰率が混血者に於けるよりもエダヤ人の場合に於て特に著しい點にも
 窺れるが、併し根本はやはりエダヤ人口老齡化の事實に基くと考へら
 れる。集計結果を掲ぐれば次の如くである。

エダヤ人 男子千に付き 女子一、三六六人

混血(第一種) " " 一、一三九 "

混血(第二種) " " 一、〇七三 "

尚、独逸全国の体性別比率は男子千に付き女子二、〇四七人である。

(二) エダヤ人の大都市居住

エダヤ人に都市、特に大都市居住者の多いのも依然たる特徴で、そ
 の地域的分散状況を見ると次の如くである。

	全国現住人口	ユダヤ人	混血(第一種)	混血(第二種)
一萬以下	五〇.四	九.二	一〇.九	一五.八
一―二萬	六.二	二.〇	二.八	三.六
二―五萬	八.〇	三.三	四.九	五.七
五―十萬	五.二	三.二	三.七	四.三
十萬以上	三〇.二	八二.三	七七.七	七〇.六
内				
十一―五十萬	一三.八	一一.二	一三.三	一四.五
五十―百萬	七.四	一五.四	一三.四	一一.八
百萬以上	一〇.〇	五五.七	五二.〇	四四.三

(ベルリン、ハンブルグ及ウィーン)

又、ユダヤ人の総人口(現住人口)に対する百分比を地域別に見ると次の如くである。

	ユダヤ人	混血(第一種)	混血(第二種)
全国平均	0.42%	0.09%	0.05%
十萬以上 都 市	1.13	0.24	0.13
百萬以上 都 市	2.31	0.47	0.24
ウィーン市	4.76	0.81	0.35

第三款 大独逸支配下の諸民族

第一項 大独逸国境内の異種民族

独逸合邦にはじまる独逸国境の拡大は境外少数独逸人統合の目的を概ね実現すると同時に、新らたに東南方の多くの異種民族を大独逸国境内に包容すること、なつた。その内主要なるものは新しく独逸の総督領となつた旧波蘭西部のポーランド人と、旧チエツゴスロバキア国の解体に伴

以新しく独逸保護領となつたポヘミア及モラヴィアのチエツク人である。
 (備考)一九三三年以降の独逸の膨張の跡をその面積及人口に於いて
 見ると次の如くである。

面積 人口

独逸旧領域(三三年々首)	四六八、六二〇	六八、四七四、一三二
ザール地方(三五年三月)	一、九二五	八四二、四五四
オストマルク(三八年三月)	八三、七六四	六、六五〇、三〇六
スデーテン独逸地方(三八年十月)	二九、〇九九	三、四〇八、三八九
ポヘミア及モラヴィア(三九年三月)	四八、九五九	七、〇〇〇、〇〇〇
メーメル地方(三九年三月)	二、八四八	一、五四、六九四
ダンチツヒ自由市(三九年九月)	一、九五一	四〇七、五一七
旧波蘭領東方地域(三九年十月)	九一、九七四	九、六二七、〇〇〇
オイベン・マルメチ 及モレスネ (四〇年五月)	一、〇五六	六八、五九〇

独逸及西保護領合計 (一四〇年五月) 七三〇、一九六 九六、六三四、〇〇〇

(補註) メーメル地方、ダンチヒ自由市、旧波蘭領東部地域、及びオ
 イペン、マルメヂ、モレスネを除く独逸領土は一九三九年の
 調査人口、ホヘミア及モラヴィア西保護領は一九四〇年々首の
 推定人口、メーメル地方は一九四〇年々首の算定人口、旧ダ
 ンチヒ自由市は一九二九年の調査人口、旧波蘭領東部地域は
 一九三〇年の調査人口、オイペン、マルメヂ及モレスネは一
 九四〇年々首の算定人口による。尚、オイペン、マルメヂ及
 モレスネの面積及び人口は旧プロシヤ領地及モレスネ中立地
 帯と国境の最後の決定は未だ行はれず。

(イ) ホーランド人

ホーランド人は従来より東部独逸の大農業地帯に於ける定期的出稼

ホ労働者として毎年数十万も算へ、独逸の産業構成上不可欠の労働人口もなすものであつたが、独波戦後の国境変更と波蘭総督領の成立とは之らポーランド人の主要部分を直接に独逸治下の定住人口として包容するに到つた。

ポーランド人の民族総人口は大約二千万に近く、又波蘭総督領の推計人口は大約一千二百万、その大部分がポーランド人と見てよく、スラブ民族系に属し、主として旧教を奉じてゐる。過去に於ける歴史的葛藤は独逸との抗争に終始してゐるが、その一般的生活水準は独逸民族よりも遙かに低く、随つて全く独逸の経済的並に文化的支配下にあると見てよい。独逸人自身がポーランド人を対等視してゐないことはその差別的賃金政策に於いても看取せられるところだ、独逸労働戦線の機関誌「ナチス社会政策月報」一九四〇年一九一二。號所載の論文はワルテガウ及ダンチヒに於ける独逸人及びポーランド人農業労働者に設定されてゐる差別賃金率に言及して、「独逸人労働者はポーランド

ド人労働者よりも高い生活水準に慣れてゐるし、ことを此の差別待遇の
当然の理由として奉じてゐる。之は「ポーランド人が独逸人と同一の
生活水準を持つと考へることは不当である」といふロベルト・ライ博
士の有名な聲明を稍、穏やかに表現したものである。

農業労働に於ける此の種の差別賃金制度は工業労働に対しては亦形
を變へて行はれてゐる。といふのは工業関係に於いては独逸人工場主
が給料の高い独逸人よりも給料の低いポーランド人を使用したがる弊
害を考慮せねばならなかつたからで、その爲に採用されたのが所謂「
社会的調整税」 *Socialisinggleichstellungsgeld* といふ極めて露骨公然た
る差別待遇の方法である。即ち之によると独逸の工業主は独逸人労働
者と同額の賃金をポーランド人労働者にも支拂はねばならぬ、然しポ
ーランド人工業労働者は右の「社会的調整税」なる名目の下にその日
当の一五%乃至二〇%に当る特別税を賦課されるのである。之は單に
経済的搾取を主動機とした差別賃金といふよりも、寧ろ民族的差等観

を前提とした公然の国家的制度の一例と解すべきもので、ナチスの異
動民族待遇法の一斑を示して遺憾ないものであると共に、又独逸民族
の産業機構に寄生するポトランド人の社会的地位を語る事例といへよう。
尚、旧波蘭国はその人口の一割前後のユダヤ人も含み、且つそれら
のユダヤ人は民族自治を要求する程各国外中最も活潑なる活動を続け
て来た点に於いて特記すべき国であるが、ナチスの支配下に入ると共に
此のユダヤ人問題は原則的には既に自然解消を見たものといつてよい。
(ロ) チェツク人

独逸の新保護領となつたボヘミア及モラビヤのチェツク人も西方ス
ラブ系に属する民族で、総数約七百万、独逸に対する民族的反感をも
つてゐることポトランド人の場合と変りはないが、さういふ民族的
反感を政治的に結集する自力をもたないことも亦ポトランド人の場合
と同じい。たゞチェツク人は工業労働者として極めて技能的に優秀で
あり、且つ独逸本国内にも大量の労働人口を移出してゐる。

は之らの移入チエツク人を公式の政府統計等には外国人として取扱はず、又和ーランド入の場合に見た如き露骨なる差別待遇も行つてゐないようであるが、その民族的所屬の故に独逸公民たる資格を與へないことはいふ迄もない。保護領制度がチエツク人に対する政治的妥協の産物であることはいふ迄もないが、併し異種民族の政治的支配によつて独逸国民自身の民族的統一も不純化せまいといふ新しい統治方式たる意味も亦否定し難いといへよう。

(1) 在独イタリイ人労働者

独逸国内に在往する外国人労働者の中現在特に注目すべきものは今次大戦下に激増したイタリイ人労働者である。といふのは、戦前に於ける在独イタリイ人労働者数は約五万程度のものであつたが、戦時下独逸の労働人口の不足を補填する目的を以て、一九四一年二月伊太利を訪問した独逸の工業使節団は総計三十二万のイタリイ人労働者を独逸に派遣せしむる協定を締結するに到つたからである。その協定はその

後着々として実行されてゐる。之は勿論。所謂民族問題的葛藤を惹起する問題ではなく同盟國の好意ある訪客として待遇せられるもので、一九四一年々首以降に実施を見た全國民的な児童扶助金制度の思慮に ついても、独伊兩國間の相互協定により、之らイタリヤ人を全く独逸人と同等に待遇するにと、してが、異種民族に対する各種の差等待遇政策の一例として特に附記するに値する事實といへよう。

第二項 独逸の政治軍事的支配下の諸民族

現在独逸の政治軍事的支配下にあり、將來の独逸にとってその勢力圏下に包摂せらる可き東南方諸國の民族事情を一覽すれば次の如くである。

(イ) 曰バルト三国、白ロシア及びウクライナ

〔本資料の聯邦の部参照〕

(ロ) スロバキヤ人

スロバキヤ人はチエツク人と共にスラフ民族の一派たる西スラフに

属する民族でその言語も互に似てゐるが、十一世紀以来政治的に一致せることがなく、血縁的親和感もなく、そういう意味でも旧チエツコ、スロバキア共和国は確かにベルサイユ会議の生める畸型児であつた。この民族的分化対立の理由は主としてその社会経済的事情に帰すべきもので、ボヘミアが農工的資源を以て繁栄し旧奥匈国の金庫とさへいはれたのに対し、スロバキアは千軍に互るハンガリーの治下にあつて退嬰的なる山岳農民として止まり、その生活利害はことごとくに相対立するものとなつてゐた。一九三九年三月十四日独逸軍のボヘミア侵入とボヘミア及モラヴィヤの保護領宣言と日をも同じうして、スロバキヤは独立を宣言し、十八日之に同じく独逸と正式條約を結んだ。人口大約二百五十万、數に於いても負に於いても独逸の政治指導にさしたる困難を豫想せしむる民族ではない。

(い) ハンガリー人

ハンガリー人は十世紀の初頭カルパチア森林を経て侵入して来たマ

ゲヤール人騎馬部隊が独逸民族の抵抗に遭つて次第に此の地に止まり、独逸人の文化的感化によつて十一世紀初頭より農業者として定着したもので、現在のハンガリー人も自らマゲヤール民族と称してゐる。広くアジア人種に属し、フィン人へフィンランド人及びラツト人へフィンランド北部辺境民と共にウグリア系民族に分類せられる。但しマゲヤール人はウグリアの要素にトルコ人要素が附加され、互にスラブとの混血によつて體質的にも風俗的にも可なりとのアジア的特性を失つてゐる。

ハンガリー人は永くハフスブルグ家が王として仰いでゐたが、十九世紀にはマゲヤール族の民族意識の昂揚をみ、独立宣言まで行つたことがある。之は露西亞の援けを得た奥大利の彈圧に遭ひ、結局ウィーン政府の独逸化政策に屈服せざるを得なかつたが、普墺戦争後一八六七年奥大利と対等の自主的地位を有する奥匈国の一部となり、更に第一次歐洲大戦後に完全なる独立国となるに至つたものであるが、

のアジア的血縁思想に根ざす特異の民族意識と国境外自民族統合の要
求により民族意識は極めて旺盛である。

今次第二次歐洲大戰に於ける旧チエツフ、スロバキア、
スラビア兩國の南部の^{解体により}一帯及びルテニアも加へ、更に独逸軍のユー
ゴスラビア及ルーマニア進駐の結末は^{南方國境をも亦括}大して、
新報國一六〇、七二

九方針、一九四一年一月末現在の人口調査による総人口は一三、六三八
八三九人、その内ハンガリー人は大約八割五分、千百五十万と概算せ
られる。中欧より南東欧に互る群居諸民族中最大の人口数をもつてお
るが、その地理的事情により南東欧諸族に比し早くより近代的出産減
退傾向を示して居るのが注目せられる。但しハンガリーが最近獲得し
た地域は單にハンガリー人を主住民とする地域であるばかりでなく、
又特に多産人口地域で、その為同國の出生率も急上昇せしむる結果
を見せてゐる。

（備考）南東欧諸國の最近の出生率を示せば左表の如くである。

南東欧諸国及独伊西国の人口動態

出生率

年次	ハンガリー	ユーゴスラヴィア	ルーマニア	ブルガリア	ギリシヤ	伊太利	独逸
一九二一—二五	二九・四	三五・〇	三七・九	三九・〇	二九・九	二九・七	二三・一
一九二六—三〇	二六・〇	三四・二	三五・二	三三・一	三〇・二	二六・八	一八・四
一九三一—三五	二二・四	三一・九	三二・九	二九・三	二九・五	二三・八	一六・四
一九三五	二一・二	二九・九	三〇・七	二六・四	二八・六	二五・三	一八・二
一九三六	二〇・四	二九・一	三一・五	二五・六	二八・三	二二・四	一八・三
一九三七	二〇・二	二七・九	三〇・八	二四・〇	二六・六	二二・九	一八・一
一九三八	二〇・一	二九・六	二二・八	二六・四	二五・七	一九・〇	
一九三九	一九・一 ⁽¹⁾	二八・三	二一・一	二四・七	二三・五	二〇・四	

(1) 一九三八年十一月二日のウイーン仲裁協定後の領域内、現在の領

土内に於ては一九三七年度の出生率は二二・六、死亡率は一五・一、自然増加率は七・五となる。

(2) 一九三一年度以後はオストマルク、ズデーテン地方、メーメル地

方及びダンチヒを含む。

又、その人口年齢構成を比較すれば次表の如くである。

南東欧諸国及独伊西国の年齢構成（百分率）

	一五六未満	一五一五〇才	三〇、四五才	四五、六五才	六五才以上
ハンガリー（一九三〇年）*	二七、五	二七、九	二〇、七	一七、六	六、三
ユーゴスラヴィア（一九三一年）	三四、六	二七、五	一七、九	一四、七	五、三
ルーマニア（一九三〇年）*	三四、九	二九、四	一七、五	一三、九	四、三
ブルガリア（一九三四年）*	三五、五	二五、六	一八、九	一四、八	五、二
ギリシア（一九二八年）*	三二、二	二八、五	一七、五	一五、九	五、九
トルコ（一九三五）*	四一、四	二三、五	一八、八	一二、四	三、九
伊太利（一九三一年）	二九、七	二六、九	一八、八	一七、三	七、三
独逸（一九三五）	二四、二	二四、五	二五、一	二〇、九	七、三

*調査年時の領域内

(2)

旧ユーゴスラビア（セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人）

共にバルカン、スラブと総称せらる、スラヴ系民族で、第一次歐洲

大戰後ユーゴスラビア国を形成せる三つの主民族であるが、併し

その地理的隔居生活は夫々独自の性格、言語、風俗、習慣を形成せし

め、夫々別の宗教も奉ずるに到らしめて居り、政治的存立意識は相

互に極めて強い。今次独逸軍の侵入に當りクロアチア人が独自の行動

を取つたのも單に独逸の巧妙な政治的操縦にけに由るものではない。

セルビア人は主として旧ユーゴスラビア国の原始農業地帯を台據

する主幹民族で、多筆オットマン、トルコ帝国の治下にあつて多分に

その影響を受け、宗教もキリシヤ教を奉じてをり、大セルビヤ主義

によつて國家主義的に固まつた言はず、現実的、政治的民族であるに對

し、クロアチア人は地理的にも性格的にも工業的發展の諸條件を具へ

て居り、文化的には奧匈國の影響を受け、宗教もローマ正教を奉じて

ゐる。特に性格的にはセルビア人に対照して理想主義的であ

自ら旧ユ
大。

イギリス、スラビア国に於ける知識層を以て自任じ、從來も^{六六一}セル
ビア人と対立抗争して来たものである。スロヴエニア人もその民族事
情はクロアチア人に近い。三民族の人口比重はセルビア人、クロアチ
ア人、スロヴエニア人の順序で、前二者を合せて約九百万、スロヴエ
ニア人は約百万余に過ぎぬ。尚、旧ユーゴスラビア国内には此の
外、夫々五十万前後の独逸人、マヂヤール人、アルバニア人、ハンガ
リ人等を包容して来た。

独逸の政治軍事的支配下に入った今後に於ける独逸の之らの諸民族
に対する方策はなほ未決定であるが、之も俘虜の取扱ひに見ても特に
セルビア人がポーランド人の場合と同じく釋放せられずに強制労働に
使役せられてゐる点が注目せられよう。へこの点ノトルウエー、テン
マールク、和蘭の俘虜に対する釋放政策と好対照を示してゐる。〕經濟
的には既に今次大戦前よりその政治的特殊事情にも拘らず独逸に連繫
して来たもので、之を一九三八年の田ユーゴスラビア國貿易統計に

見ても、輸出の二一%は独逸へ、一三、五%は埃太利へ、また輸入の三四、二%は独逸より、一〇、三%は埃太利より入れてゐた。独逸合邦の結果は輸出入の四〇%以上が独逸のものとなり、之に対し英國は約九%、伊太利は七、六%で殆んど同題とならぬ。

(木)

ブルガリア人は紀元五〇〇年頃この地方に南下して来たアジヤ系の民族で、六九七年に建国の記録を残してゐるが、同時にこの地方の先住民であつたスラブと混血して居る。

近世に於いては屢々オットマン、トルコの支配と侵入とを受け、その影響も少くないが、併しブルガリア人の多くは中央及び北部の山岳地方に逃避してその民族的純潔を維持したといはれて居り、現在もブルガリア人中部以北地帯をその主住地として居る。

現在ブルガリアに於ける單一支配民族で、同国人口の八割余、約五百五十万を算するが、第一次歐洲大戰に戰敗国として国外に多数の自民族を算へる。ルーマニアのドブルーヂヤ地方には約四十万。また旧

ユーゴスラビア国内の所謂ブルガリア、マケドニア人約七十万、
リシヤ国内の西部マケドニア人として約十方は所謂マケドニア問題と
してブルガリア人の民族運動の中心問題を爲してゐる。

ブルガリア人も亦南東欧諸民族と同じく農業民族であるが、特に農
業民族に特有な忍耐カとねばり強さを多分に備へてをり、その真近隣
諸民族とは特異の性格を示してをり、その民族理想を追及する執拗さ
はバルカンの民族闘争に於けるブルガリア人の最強の武器であるとも
いへよう。但し現在の国際政治下に自力を以てその宿願を達成し難い
ことが、従来より同国の政治に親独的傾向の絶えず有力な一勢力とし
て作用してゐた理由であり、国際経済的にも亦ブルガリアに於ける独
逸の勢力は圧倒的である。

(ウ) ルーマニア人

ルーマニア人は一名ワラキヤ人とも称し、古代ローマ帝国の一州ダキ
ヤに於ける植民者の後裔を以て自任するローマ化されたダキヤ人の子

種であるが、その後の外国侵入者と混血して居り、スラヴの血は勘ぐ
ない。民族人口は前大戦後の版図及総人口の約七割五分で千三百五十
万。他に露西亞、旧ユーゴスラビア、ブルガリア等国外に約六十万
のルーマニア人を止めてゐるバルカン諸民族中人口比重の最も高い民
族であるが、教育程度も経済水準も低い農民を主体としてをり、国内
の少数民族たるマヂヤール人へ約百五十万、独逸人へ約五十万、等
よりも文化水準は遙かに低く、その支配に幾多の困難をみせてゐた。
但しバルカンに於ける特異な準ラテン系民族としてその血縁的關係は
カエルサイエ的体制の下で特に政治的に利用せられてゐたものであり、
ルーマニアの上層貴族たちは好んで佛蘭西に留学し佛蘭西風の生活を
為すを誇りとしてゐた。かゝる国際政治的事情が生んだ独自の民族問
題として我々はルーマニアに於けるユダヤ人問題を挙げるこゝができ
よう。

ルーマニアに於いてユダヤ人問題が政治的に取り上げられたのは百

年以上もの昔に遡り、既に一八一七年にはユダヤ人とキリスト教徒と

一六六五

の結婚を禁止して居り、また一八三二年の憲法はユダヤ人を以て国外に追放せらるべき民族的危険分子として、其の公民権及び市民権を剝奪までしてゐる。そして前大戦未まではユダヤ人は凡て外国人として取扱はれ、国政に參與することを許されなかつたものであるが、其後の国際政治的情勢はルーマニアもして国際ユダヤの暗躍を拒絶することと困難ならしめ、一九一九年十二月九日の少数民族に関する巴黎協定を承認するの媿むなきに到つた。右協定の実施は国際聯盟の保障の下に置かれておたもので、之によりルーマニアは同国内に住むユダヤ人にして外国籍なき者の凡てに対して何等特別の処置を介することなく、直ちに完全なる公民権を賦與せざるを得ざるに到り、ユダヤ人はいよ

くルーマニアに於ける経済的実権を掌握し利用する結果となつた如き、国際政治上に独立の實力なき民族に特有な独特の民族問題として特に注目するに足る事実といへようへ一九三八年度よりルーマニア政

亦も遂に種々の反ユダヤ的立法を實施するの總むなきに到つてゐる。

(ト) キリシヤ人

民族人口六百万余を算する現在のキリシヤ人は嘗て東方のペルシヤ人を撃退しパルテノンを建設した古代ヘレネーの子孫ではないが、併し第八世紀末に於けるスラブ系人口の移植入を強調し現在のキリシヤ人も以つてビザンチン化されたるスラブ人なりとする *Falkenroger* の提議も今日は諸家の批判に堪へ難いものとなつた。寧ろ現代のギリシア人はビザンチン統治時代の初期に於けるギリシア住民の子孫と考ふべきもので、彼等が古代希臘から継承せる高度文化によつて其の後ローマ支配、ゴート人の侵入、スラブの入植、その他中世代に於けるフランク人、ヴェネチア人、トルコ人等の支配下にもこれらの諸要素を完全に同化し乍ら存続して来たものと考えるのが今日の通説である。

但し現在のギリシヤ人が古代ギリシヤ人の直系であるとの民族的誇りをもつてゐることは別問題で、今日のキリシヤ人はその多元的を起

源にも拘らず極めて同質的な一民族を形成してをり、民族意識の旺盛一六六七なる莫はハンガリー人と雙壁を爲すといつてよい。且つ今日に於いても南東欧諸民族中最も智的才能を生具してゐるといつてよい。但しこの天與の智的才能も、今日の國際的情勢の中では、却つて輕薄な小利口さに變質してゐることをも否定し難く、その愛國的熱情も徒らに政治的論議と抗争とに空費されてゐる傾きが尠くない。カツプエーの中でも活潑な政治談議が聞はされることはギリシヤ特有の風景で、レストランの給仕も家庭の下女たちも夫々の自分の好む黨派の新聞を愛読するなどといふ事実もその一斑を語るものである。要之、今日のギリシア人は利口で、野心的で、且つ多情多能な民族で進んで自己犠牲をさへ惜まないが、大國民たる爲めには猶ほ或る確固たる性質が欠けてゐるといつてよい。

第二節 フアツシズム伊太利の民族政策

第一款 序 説

永く世界歴史の中心舞台であつた伊太利半島に住む現在のイタリイ人について、過去の史的葛藤に伴ふその人種学的組成を論ずることは別であるが、現在のイタリイ人が半島に於ける唯一の支配的な單一民族を形成してゐることはいふ迄もなく、且つ古代ローマ人の政治的發展を出發点とし、また根幹として混融された民族として其の正嫡の子孫を以て自ら任じ得るものであることも亦概ね異論のないところであらう。今日の伊太利に於ける民族問題は、前節ナチス独逸の場合に於けると同じく、一九二二年以降の新しいフアツシズム伊太利の誕生と共に初まる。そして所謂民族問題が異種民族に対するの方策たると同時に、自民族自身の

民族的更生、その民族資質の純化と民族人口増強を主眼としておる矣一五六七

亦ナチス独逸に於ける場合と同じい。国土の貧困の爲に歐洲に於ける最大の移民送出国であつた伊太利が、極端な国外移住禁止方策に一変したのも、一つは南北アメリカ諸國の移入民制限政策の然らしむる所ではあるが、同時に「量は力なり」といふムツソリーニの標語に見る如く、民族力量の分散による自然消耗を防止しようとするのが其の主眼で、その結果は或は莫大な国費を投じた国内用拓事業となり、或は万全の國家的指導と保護の下に行はれるリビヤ植民事業として表はれてゐる。

リビヤ植民事業にもその一端を窺ひ得る如く、アフリカに於ける自國植民地に対する政治的關心の一変せることは特に注目すべき事實である。嘗て國策が自由主義的政争の犠牲となつてみた時代には財政的見地から厄介物視されさへしたこともある之らの植民地は、嘗てのローマ帝國の夢を趁ふ新しい大伊太利帝國建設の理想の下では、帝國と不可分の領域として、幾多の軍事的葛藤をさへ顧みお、その行政機構を新しく母國

の中央集権的支配下に再組織せられたばかりでなく、エチオピア戦争は更に伊領アフリカ植民地を外延的にも異常に拡大した。而かも帝国の一部としてのアフリカ領土に対する政治的関心は、エチオピアをも含めて大約千三百万に及ぶ異種民族との交渉も真剣に取り上げる必要を惹起した。西洋と東洋とも統合した古代ローマ帝国の偉業も理想として彼等も伊太利帝国の臣民に教化し、フアツシズムの真の擁護者、防衛者たらしめようとする理想の成否如何は之をなほ遠い将来に俟たねばならぬが、併し新しい大理想への着手は、同時にそれだけ真剣にイタリヤ民族の民族的指導を確保する為の諸方策の考慮も余儀なくしたといつてよく、混血防止に用する諸方策の如きも亦はじめに真剣に考慮せらるゝに到つた。

而かもかゝる民族保全に關する関心は更に進んでは伊太利民族の民族的優秀さを自覚し高揚しようとする思想運動として結実せねばならぬ。一九三八年の「人種宣言」の如きその最も著名なる事例とする二七が

できよう。この運動は同時にまた徹底的な反ユダヤ人的立法の^{（一）}出發点ともなつたものであるが、以下フアツシズム伊太利の政治的性格に淵源するこれらの諸問題について項を分けてその要旨のみ畧述することとする

第二款 植民地土着人口に対する諸方策

フアツシズム伊太利の新植民政策の特徴は、第一に、嘗て自由主義的政治理想から植民地に與へられた一切の独立性（例へば一九一九年トリポリ及キレナイカの土着民に與へられた立法及び行政權への參與の如き）も解消して、之を完全な中央集権的政治機構に編成替へしたことであり、第二にはフアツシスト黨の組織を植民地にも拡大し、この黨組織を以て母国と植民地との眞の連結帯としようとしておることである。例へば東アフリカの極めて僻遠の地にも會員数名を算するに過かぬ様な黨の支部がある。更に第三に、母国とのかゝる精神的連結を現實に保障する紐帯として、フアツシズム政治の基本要請である組合制度の植民地へ

の補充政策も挙げかねならぬ。それは専ら経済的利益に基く移植民者の母国離反も未然に防止することを目的としておるものであるが、土着民の商業行為もこの組合組織の中へ包含せらるゝことはいふ迄もない。但し右第二、第三の特徴は主として植民地在住の母国人を対象としたもので、対土着民の問題として最も重大なるのは第一の政治的独立性の完全なる否定にあるといへよう。事実この国策の強力遂行は土着民に多大の反抗を呼び起したし、嘗てエチオピア戦争当時にはその危機をさへ招来したともいはれておる。この危機を乗り超え得たのが伊太利の政治軍事的實力に負ふものであつたことはいふ迄もないが、同時に諸他の教化政策が兼ね行はれておることも亦事実である。

伊太利領アフリカ植民地の土着住民は、アフリカ住民中最も教化度の高い住民群に属すべきもので、リビアの主任民たるリビア人へ主としてバルバリ人¹はアラブ化された白人系の人種といはれて居り、伊領東アフリカの住民はネグロイド要素の混入は強いがセム及ハム系の人種²と考

へられ、所謂アフリカの黒人の人口は極めて少い。へ詳細は本資料アフリカの部を参照。従つて民族意識も強く、政治的反抗の力も亦強烈であつたわけであるが、それだけ土着民に対する教化的政策が積極的な効果を期待し得る可能性も亦強いといへよう。

教化政策の实体を為すものは衛生行政と教育制度とで、之を通じて土着民の福利増進を図ると共に強大なる伊太利帝国の臣下たる誇りを土着民の心に植えつけることを目的としておるものといへよう。衛生行政は広く人畜に対する水魚問題の解決、或は牛の傳染病駆除などの事業にまでも及んでおるが、学校教育を介して行はれる衛生思想啓蒙の直接間接的効果は特に大きい。かゝる衛生行政の着し迫つた必要と、その漸進的だが期待すべき実績の一端は之を次の数字にも窺ふことができよう。

リビアに於ける初等学校生徒の疾病率（百分比）

学年	伊太利人	イスライル教徒	モハメット教徒	總計
----	------	---------	---------	----

一九二五—二六年	二二、三	八〇、〇	八三、九	五一、五
----------	------	------	------	------

一九二六—二七年	二二、六	六四、〇	七九、四	四七、〇
一九二七—二八年	一七、一	六一、二	七八、三	三八、二
一九二八—二九年	一六、八	六〇、〇	七〇、〇	三五、八
一九二九—三〇年	一四、五	六〇、〇	六八、七	三四、〇

学校教育、特に初等教育の普及も、政治機構の改革に伴つた長期の植
 民地戦争の一段落後は極めて大規模に実現され、その施設はリビア沙漠
 内の極めて僻遠なオアシスに迄も及ぶに到つてゐる。リビアに於けるモ
 ハメツト教徒の爲に建設された国立の初等学校の生徒数は一九二二年に
 千二百人であつたものが、一九三六—三七年の学年には一万六十八人の
 多きも算へ、十五年間に四倍以上に増大された。へ右の外、モハメツト
 教による私立学校も畧、同数の生徒数を有つてゐる。学年は普通四ヶ年
 で、更に高等二ヶ年の補修教育を爲すを一般とし、土語及伊太利語を折
 半して授業せられ、如によつては下級官吏又は通糸を養成する爲に更に
 四ヶ年の高等教育を授ける制度もある。

が衛生福利施設も学校教育の普及も、自然衰減の危機にある土着人口を保全し、且つ其の熱帯民族特有の反労働的性格を淘汰して完全なる農工業的労働力を作り上げようとする伊太利自身の国家目的と表裏してゐるものであることはいふ迄もなく、そこに亦当然の限界もあるといへよう。乍併、嘗ては民族的反抗の最大の源泉であつた学校教育の普及拡大は、同時に之を通じて土着民を大伊太利帝国の防護者にまで教育し得るとのフアツシズム政治の自信をも物語るものである。学校卒業者の優遇、特に高等課程修了者の行政機関への優先採用等は、土着民の中にフアツシズム政治の擁護者たるべき一種の指導者住民層を作らうとする政策の一部を為すもので、この種方策は或は帝国の功勞者への勲章、称号、土地傳来の貴族称号の供與、或は軍務服役者に対する公民権供與等の諸方策と相俟つてフアツシズムの指導者政治の精神と社会階級的構成とを土着民の中にも推し及ぼさうとしてゐるものといへる。リビアでは一九三五年にはバルボ総督によつて十二才より十八才のアラビア人少年を以

てフアシスト的少年団が結成せられ、リビア沙漠の旅行者が思ひ掛けの
僻遠の地で「ヂヨビネツタレ」の歌を唄きフアシスト的敬礼に接して驚異
の感を抱くことも少くない。

とはいへ右の如きフアシスト的教化政策も必ずしも土着民の歐洲人化
を意味するものではなく、寧ろ土着民傳承の風俗習慣を尊重する点に於
いてはフアシスト伊太利の対土着民政策は特に細心の注意を拂つておる
といつてよく、その矣。その宗教政策に於いて特に著しい。過去千二百
年に亘るアラビア人の支配の結果である回教の勢力は土着民教化の最善
の手段として利用せられてをり、回教々儀の研究の爲の高等教育機関も
亦保護幼成せられておる。尤も之は、他面より之を見れば、土着民の高
等教育を宗教々育に限定し、且つその修学課程に於けるフアシスト的思
想の鼓推と相俟つて、土着民の中に伊太利帝国の防壁たる可き指導者層、
造成政策の主要なる一環を爲すものであることはいふ迄もない。

第三款 反混血立法

西洋と東洋との統一した古代ローマ帝国の理想を鼓推し、土着民を大伊太利帝国の一員として教化しようとすることは、乍併、民族的混血を目的とするものでないはいふ迄もなく、寧ろファシズム伊太利の民族政策は徹底的なる混血禁止政策を立て前としておる。二の種の反混血立法の先蹤をなすものは伊太利のエチオピア征討後一九三七年四月十九日勅令を以て公布せられた人種保護法中の一節で、伊太利市民と植民地土着民との同の非合法的婚姻関係も嚴禁したものである。之により伊太利帝国領土内に於いて伊太利領東アフリカの土着民、若しくは之を同一視せらるべき道德習俗又は法律乃至社会觀念を有つ外国人と非合法的婚姻関係を営める伊太利市民は一年乃至五年の禁錮刑に処せらるゝこととなつた。本法が非合法的性交のみを対承としておるのは、一つは土着民との合法的婚姻事例が極めて稀であるにもよるが、その教理上人種的差別待遇を許さないローマ教会に対する政策的妥協によるもので、伊太利に於

ける人種民族問題に特有の思想的葛藤を示すものといへよう。(土着民との合法的婚姻の防止は徴戒規則若くは婚姻認可の拒否等の行政的手段を以て行はれた。)

が伊領東アフリカに於ける人種的隔離政策は、右の如き反混血立法の外、社会生活の諸部面に於いて実施せられて居り、例へば伊領東アフリカに於いては一九三八年六月、南阿聯邦の先例に倣つて、土着民に対して歐洲人の集会所や娯楽所に入ることを禁じ、また歐洲人の自動車運転手に対して有色人を乗せしむることを禁ぜるが如きその著しい例を為すものである。

伊領東アフリカに実施せられた右の如き反混血政策は、一九三八年の「人種宣言」(次項に参照)に見らる、如きファシズム、イデオロギ―に於ける民族人種思想の劃期的昂揚を轉機として更に強化且つ一般化せられ、一九三八年十月六日ファシスト大評議会に於いて議決せられた人種決議はユダヤ人との混血を嚴禁すると共に、從來單に伊領東アフリ

カにのみ適用せられておた土着民との混血防止政策をリビア土着民^{一六七九}に対しても拡張し、伊太利人と伊領アフリカ植民地の凡ての土着民との間の完全なる人種的隔離を行ふに到つた。

第四款 一九三八年の「人種宣言」

一九三八年七月十四日に一群のフアシスト学者によつて公開された所謂「人種宣言」は、フアシズムの民族政策イデオロギーを十ヶの原則に要約した重要なる文獻であると共に、フアシスト伊太利の民族政策に於ける劃期的轉機を爲すものであるが、参考の爲めその要旨を掲ぐれば凡そ左の如くである。

第一 「人種」とは單に我々の概念的構成物ではない。それは遺傳的な肉体的並に精神的諸徴表に於いて互に類似した何百万といふ人間群によつて展示せられておる現実の存在である。従つて地上には多くの異なる人種が存在することゝなる。

第二、所謂「人種」の概念には広狭の二義、即ち通俗的及び生物学的の二義があるが、多数の共通の徴表によつて區別せられる狭義の人種概念へ例へば北方人種、西方人種、ゲイナール人種等の區別が生物学的立場から見て正しい眞の「人種」概念を爲すものである。

第三、「人種」なる概念は純生物学的概念として取り扱はれねばならぬ。従つてそれは「民族」及び「国民」の概念と區別せられねばならぬ。併し歴史的、文化的な民族の成立に人種的要素が極めて主要なる一因子を爲すものであることも亦強調せねばならぬ。

第四、伊太利はアリアンの的である。即ち数千年來の伊太利半島の住民はアリアン起源であり、その文化も亦アリアン系のものである。

第五、歴史代に大量の他人種群が伊太利半島に來住したといふ説は單なるお伽噺に過ぎぬ。ランゴバルドの侵入以來伊太利には国民の人種的相貌に影響を及ぼすに足る程の特記すべき人口移動は存しない。その点近代に於いてさへ其の人種的構成に明白な変化を受けた他の歐洲諸國民

と著しい対照を爲すものである。

第六、それ故に、生物学的見地より之を見るも、現在に於いては一つの純粹なる「伊太利人種」が存在する。古くからの血の純粹性は伊太利国民の最高の尊號である。

第七、フアツシズム政治の全努力は、その根本に於いては、人種政策に外ならぬことを告白せねばならぬ。併しフアツシズムの人種政策は本質的に伊太利的のものでなければならぬ。アリアンの、北方的思想の強調も伊太利人を非歐洲的人種と甄別するのが主旨で、伊太利人とスカンヂナヴィア人との同一性を主張するわけではなく、況んや伊太利に独逸の人種政策の教義をそのまま導入してよいといふ意味ではない。

第八、歐洲の地中海民族と東洋人及阿弗利加人とを區別することは特に必要で、二、三の歐洲民族のアフリカ起源を主張し、或はセム及ハム民族をも西方人種に包括せんとする如きは特に危険なる学説といはねばならぬ。

第九、エダヤ人は伊太利人種には属せぬ、また数世紀を通じて伊太利半島に來住したセム人は今日最早何等の痕跡をも殘留してゐない。エダヤ人は伊太利に於いて總えて同化した唯一の人口である。

第十、伊太利人の純歐羅巴的の身体的及び精神的諸徴表は如何なる方によつても變化する、と許さぬ。混血はたゞ歐洲諸人種の範圍内に於いてのみ受容し得るに過ぎぬ。及之非アリアンの文化を擔つた非歐洲的人種との混血は伊太利人の純歐羅巴本質を變質せしめるであらう。

第五款 及エダヤ人立法

伊太利に於ける所謂エダヤ種問題は独逸に於ける程深刻ではなかつたが、併し特に第一次世界大戰以後は多数のエダヤ人が中政方面より入国して伊太利の社会経済生活に次第にその影響を示してゐた。前項所説の如き民族的自覚は特にエダヤ人問題に於いて政策化せられ、一九三八年九月二日には内閣決議を以て外国籍エダヤ人の伊太利本国、リビア及び

エトカ諸屬地に常住するを禁じ、又前大戰後入国せるエカヤ人の伊太
利市民権を剝奪すると共に、一般にエカヤ人を伊太利の諸学校及學術団
体より追放することを決定してゐる。

が伊太利の反ユダヤ人政策として最も重きをなすものは其後同も存く
一九三八年十月六日に行はれた上掲フアシスト大評議會の「人種決議」と、
茲に之に基き同年十一月十日制定せられた「伊太利人種保護法」に於け
る徹底的な反ユダヤ政策の具体化である。本法は一般に伊太利人男女と
ハム、セム及び其他の非アリアン人種に属する者との結婚を禁止したも
のであり、特に官公吏及び公共団体の文武官に対しては一切の外国婦人
へ人種が如何を問はずとの結婚を禁止せるのみならず、伊太利市民と
アリアン系外国婦人との結婚も内務大臣の事前の許可を必要とするこ
ととしたものであつた。特にユダヤ人に対しては次の如き反ユダヤ政策が
法制化せられた。即ち

(1) フアシスト黨への入黨禁止

(四) 百人以上の被傭者を使用する凡ゆる種類の事業の所有乃至経営の禁止

(イ) 五ヘクタールを起する土地の所有の禁止

(ニ) 平時及び戦時に於ける軍務の禁止

(ホ) 外国ユダヤ人の入国禁止

を以て右法規違反者には禁固刑を以て臨んでゐる。

尚、本法にいふユダヤ人とは、大評議会の決議に隨ひ、左の各項に該当する者をいふ。

(イ) 其の両親共にユダヤ人なる者

(ロ) 父がユダヤ人にして母が外国人なる者

(ハ) 混血兒にしてユダヤ教会に属する者

但し伊太利国籍を有つユダヤ人にして特定の場合に該当する者へ例へ

ば其者の家族中に今世紀伊太利の遂行せる最近の大戦役、即ち伊土戦役

、第一次世界大戦、エチオピア戦役及びスペイン戦役の孰れかに於ける

に於ける

戦死者の有る場合、^{一六八五}或は同じく自ら進んで志願参加せる者の有る場合等
等しに対しては之を特にユダヤ人と見做さざる除外規定が設けられてお
る。

第六章 アフリカ大陸民族事情

第一節 アフリカ民族事情

略々北緯十五度以北に存在するアフリカ北部は其の中にエジプト、ス
ビヤ、地中海沿岸全サワラ地方、モロッコ、アルジェリヤ、チュニス、
トリポリを合み人類學上單一地帯として取扱ひ得るのであつて殊に地中
海に面し大部分は——勿論西部、南部アフリカと近密な關係を其の人種
構成に持つてゐるのであるが——特殊な地域として独自の問題を供して
ある。

此處は外國地との類縁關係、人種構成の一般問題と併合して同一地域
に於ける人種の恒常性、變化性等人種史の研究に貴重なる資料を世界中最
も多数持つ地域である。

殊にスビヤから河口に及ぶナイル峡谷は多くの考古學者に依つて大規

換に調査され最早期の前王朝時代から現代まで約七千年以上に渡り同一の民族から由来した頭蓋遺物の系列が発見されてゐる。更に人種史、人種地理研究に便利なことは遺骨資料の非常に多いこと以外人体の軟部（毛髪、顔形等）が保存され且つ多数のミイラ、繪畫彫刻の残存してゐることである。それでは或程度まで彼等の眞実の形態を復原することが出来ぬ。最もよく保存された資料、頭蓋の調査は、新石器時代から全エジプト帝國史を通じて、主に二分し得る頭蓋形態があつたことと致へる。一は異様な形状を呈してゐるのであつて、廣く短い顔、狭い直狀額——中央がもり上つて穹狀を呈してゐる——下に強き輪郭を挿してゐる。現骨弓がある。前頭隆起と額頂隆起がかかり著しい。眼眶は低く鼻骨は小形で扁平である。骨部鼻孔は圓形で低く廣い。其の下縁部は尖らずに上顎の前面部に圓形に流れそこに斜溝則ち鼻前竇を形成してゐる。全顔は強度の斜顎型であつて頭が甚だ突出してゐる。總ての之等の徵表結合は現今のネグロ頭蓋に見られる。更に長い獨自な均衡をした黒人的四肢

こ不伊乃に於ける典型的黒色捲状毛を見るならばエジプト民族に類黒人
構成要素があつたことを確實に推定し得るのであらう。而もエジプト人
はそれと典型的に「彩色壁画」描いて居る。即ちそれは捲状と厚い隆起
唇を持ち黒褐色なりである。然しながら此の黒人体型は劣勢であつて地
の歐洲人的な相貌なものが住民の大多数を形成してゐるのである。此の
頭蓋は前者の如く狭く、そして美形を呈し、よく発達した額を持ち狭い
額骨弓のある中長狭額である。鼻は前者に反して狭く鼻骨は眉根形で額
は突出せず正顎型である。身長は著しくないが毛髪は黒褐色で滑状であ
る。そして図を信ずるならば彼等の皮膚は非常な浅黒色で日に焦けた男
性の皮膚は暗色で略々今日の南伊太利人のやうであるが女性の皮膚はや
や明色で鼻は短く直状で美しく中幅から薄くなつてゐる。此の頭蓋所存
者の人種的關係は多くの論争が賣されてゐたが今日尚確定してゐない。
或人は此の体型を「古い」人種とし或人はそれと「新しい」人種とし或
人は單に「非類黒人」と記してゐる。然し南歐洲の部で記したやうに

所謂地中海人種に關係してゐると云ふことは明言し得る。又同時に強き他人種の侵入があつたことも言及せねばならぬ。此の地中海人種はネグロ住民と關係があつたことは確であらう。總ての頭蓋の約七分の一は明かに類黑人である。乍然そこには正確にいふと——今日の住民に黑人侵入の全階梯を見ることを得る如く——無数の程度差違があるのである。黑人特質は全時代を通じて新石器時代からローマ時代まで並進してゐた。然らば何処から此の類黒人的住民が到来したのであらうかの問題が起る。

エジプト帝國の初期はエジプトの最北端にあつたが古代帝國の末期にエジプト人はアッラカンを越えてナイルの方へ進みへ二、〇〇〇年頃一第十三王朝時代には又ビヤがエジプトの縣となり一萬の黑人兵士が置かれるのである。然し並に一千年後西エジプトの三位には名前と肖像から純黑人であると知られたころのヌビア人の王が嗣いだのである。彼等はよく統治しエジプトの権威を押しすすまで及ぼし當時の高峯文化の精華

の中に生活した。それでス此の類黒人はエジプト民族の重要な構成部分
となつたのである。

今日のスビヤ人、アビシニア人等は比較的変化しない此のスビヤ、エ
ジプト人の子孫と稱されてゐる。これ以後世の黒人混血は明かにされる
が新石器時代及びそれ以前の彼等の移動は明かでない。マントのグリマ
ルティ人種の證示が告げアルジエリヤ、キニニスの人類學的發見物が確
證するやうに嘗て黒人は地中海附近まで到達したのである。彼等は又全
エジプトへ後期の後洪積世荒地を含み一區を領し且地中海から三角洲の
地域、更に突進して全國に擴がつてゐたらしいのである。地中海人の成
立地域に關しては殆んど知られてゐない。假説は彼等がアフリカで成立
したとする。それで彼等はナイルを下りアフリカ一般に擴がつたらしい
のである。下然此の人種——彼等は一般に地中海人種と呼ばれるもので
あるか——はエジプト民族の主要素である。更に此の人種は又へ他のも
のと混血してエジプト文化の創造者特にハム語群の主要な分派エジプ

ト語の製作者、使用者と看做されてゐるのである。それで強いハム民族性をこゝに見、その人種的主要基礎として地中海人種を見るのである。是等体型が数千年間変化しなかつたことはエジプト人の表現物が示してゐる。発掘された現今カイロ博物館にある驚嘆すべき人像（第三三朝）は一見してアラビヤの日傭人を憶起させるが此れは酋長である。此の人像はそれ以来所謂村長若くは酋長の名で呼ばれてゐる。多数の人像の王侯・僧侶・學者等は上述した人相を示してゐる。然しエジプトの人種構成は錯雜してゐるのであつて多数の他の人像は違つた特徴を示してゐる。ラムセス鼻は地中海人種、ネグロ人種中にはない。エジプト民族は今尚此人種をに入れてゐるが此れは初めから續いて行はれてゐるのである。三朝の後期に最も重要は構成分子としてセム人即ち東方人種が考察される。それでエジプトの歴史家は遊牧人種と数千年續いた闘争のあつた事を言ひるのであつてこの種族は紅海とスエズ地峽を越えて絶えず攻撃をなして、いつしか國內に留まつたのである。そこに血液混交が起つたことは

明白であり、先史代にも又同じことが起つてゐたことも確かである。エジプトの繪画は之を現はしてゐる。彼等は淡黄色の——エジプト人よりも明るい——前方アジアの東方人種の微表し皮膚、長い黒色髪と曲つた鼻梁に突入した鼻を持つてゐる。此の体型は又エジプト民族中に強く現はれてゐることは疑なく繪画が明かにそれを示してゐる。然し頭蓋資料に於ては地中海人頭蓋と東方人頭蓋とを區別し得ないのである。かゝる人種と共に彼等は尚前方アジアからの他人種を取入れられたのである。——それほ既に述べた——前方アジア人種である。明かにそのことを示してゐる頭蓋遺物から推定することを得る。更に西及び北西から所謂海岸民族リビヤ人種が侵入した。

彼等は繪画に見ることを得る如く、人種としてはバラ白色皮膚ブロンド毛髪及び青色眼を持つてゐる。又小アジアの北方人種へ混血した。この深泊民族の侵入が前方アジアから印度にまで及び又アトラス地方にはブルンド色のものがおたことを考へるとアフリカにもその侵入があつたと

推測されるが然し北方人種の侵入があつた蓋しは未だ発見されておない。
 斯くしてエジプトでは最早期から各種の体型があつたので——メネシス
Meneses 時代以前のアピドス *Apydos* 跡遺に於ける如く——之は當
 時は既に種々の民族要素が混在し多様の混交が行はれたことを示すもの
 である。パトリ *Patris* は最古の住民としてブツシマン人種
 を採用し紀元七世紀のアラビヤ人侵入までその人種的發展があつたとし
 てゐる。エネキング *Enneking* は早朝にリビヤ人体型がありネグロと
 混血を起し後にシリヤ要素が来たとしてゐる。彼は次の如く成表してゐ
 る。

紀元前八〇〇〇年

八〇〇〇—七〇〇〇年

七〇〇〇—五五〇〇年

五五〇〇—五〇〇〇年

五〇〇〇—四〇〇〇年

下品なリビヤ体型(A)と上品なリビヤ体型(B)

混和した尖った鼻の民族

総績

増加

小致なスダン混合

4000 - 3500年

下品なリビヤ体型(A) + 混和 + 上品なシリヤ体型

3500 - 2500年

混和

混和

2500 - 1600年

十三角洲にあるヒクソス

1600 - 1400年

十上エジプトにあるベルベル

1300 - 0

下品なリビヤ体型(A) +

混和

紀元後

0 - 400年

増加

継続

700年

+ アラビヤ人

1000年

+ リビヤ人

北部アフリカ沿岸地方の現住民は(一)ベルベル部族——最多数を占め
定住農民として山嶽高地に居住してある——(二)アラブ種族——一部は
マホメット征服者及び十二、十三世紀移民の後裔であり一部はアラブ化
されたベルベルであつて半遊牧民であり各地に散在してあるが主ヒカト

ラス山南側、サハラ境地に住んでゐる。この二部に分たれる。ベルベル部族は全地域で優勢な民族であつて身長は中位、膚、毛髪色、眼色は淡黒色であるが、この二部のブロンド色が現はれてゐる。基本体型は著しき長頭、狭鼻型である。ドニケ *Donkey* は両者を合してアラボ・ベルベル又はヤミト・ハム群と呼んでゐる。

ソマリランド、アビシニヤ及びナイル河の東部、アトバラ河の北部に存する地域の所謂アフリカ住民はハム民族として分類されてゐる。此の全地域住民は二群に分たれる。(一)はベニアメール、ソマリ、ガラ、シヨア、ゴドシヤムのアビシニヤ人、以前ルドルフ湖北部に居住してゐたマサイ、又ジエンパを含む東部及び南部群であつて主に長頭、狭鼻型を示し、(二)はテイグレ及びナンナ湖のアビシニア人を含む北部群であつて主に長頭廣鼻型である。これらの所謂北東アフリカのハム民族はドニケのニキオピヤ人又はクシト・ハム群に相恋する。

人類學的に考察されるアフリカの地理は其のアフリカ國としてエジプ

ト及び沙漠北縁の地域を除外して他の全地域を包含してゐるのである。
一般にアフリカに於ける人種構成は單純なものと思惟されてゐるのであつて過去に於てアフリカにはネグロが住居してゐると云ふ表層的な解
釈で満足してゐたのである。近代に於て種族・言語・体型及び其の相互
關係の錯雜した多數の問題に當面したるのであるが最近の研究——人類學
的・言語學的・人種學的——は單一な共通した大特徴を發見したものであ
る。然し個々の問題に至つては未だ充分に解決されてゐない。それでア
フリカ圖に於ては基本的な二個の人種層位を認めることが出来る。明か
に古きものに屬するのは矮小族であり、他の一つはネグロである。
全アフリカに渡つて——地中海沿岸から歐洲にまで——太古住民が介
布してゐたことは明確であつて此住民は異様な小形發育と他の數個の徴
表によつて單一性を形成してゐるものである。然し其の内部で級等
は集群的な差違を示してゐるので更に亞種・地方的變種に細分し得るの
であるが、總てのこれ等の二次的差違は異種血統の輸入・接解と觀念す

る。ことが出来るのである。現在民の此の原始層は北方ネグロ（身長高く
黒色）中央のネグリロ（褐色皮膚の矮小族）南方のブツシマン（身長低
く黄色）奥常脂肪蓄積性大声）が属してゐる。此の層はの上にクロマニ
ヨン人種の残存系統と考へられる。亘細亜起原のハム要素が加はり更に後
に南方セム要素が加つたのである。

アフリカはスエズ地峡を除く外、海洋に圍繞されてゐる。其の海岸線
短く海岸より二の哩以上の内陸が全面積の約八割を占めてゐる。かくる
塊狀的大陸は外部との交通の便を缺く結果暗黒大陸の名を興へられるに
至つた。

アフリカに出入する門戸としては、先づ次の三ヶ所が主なるものであ
る。(一)シナイ半島に接續してゐるスエズ地峡、(二)バブニルマンデブ
の海峡と紅海を横切り對岸アラビヤへの交通路、(三)遙か歐洲のジブラル
タルニ對するセウタ・スパルテル岬間のジブラルタル海峡がそれである。
前者はエジプトからの遠征を除いて侵入の舟の地帯であつたが、策三者は

エジプトからの主要な出口の一つであつた。實際に逆な方向への進行は
五世紀のヴァンダル族・アラシ族の侵入及び約十世紀末の所謂ムリア人
の歸還のみである。又地中海を横切り或は同じ沿岸に沿つた進行もあつ
たが之は只地方的影響を持つのみであつた。アフリカの大部分に重大な影響を興
へなかつたのである。

アフリカの大部分には既に前石器時代に人類が居住してゐたことは疑
ひないのであつて、石器の遺物が南・北・ウガンダを含む北東アフリカに
見出されてゐる。これは非常な古代のものであると推定し得るが然し現
今に於ては未だ西部歐洲のものと同時發生的起源を有するとする積極的
證示がない。中期旧石器へムステリアン型（ムステリアン）の遺物は北アフリカ・エ
ジプト・ウガンダに發見され又南アフリカからも報告されてゐる。北ア
フリカの前期旧石器時代の石器製作は今日カプシヤン（カプシヤン）・ゲトウリアン等
と呼ばれてゐる。下カプシヤンが西欧歐洲へ移植された時それは特種
な性質を帯びオリニシヤンと呼ばれる。上カプシヤン文化は發達して

タルドノアシヤン文化となり廣く歐洲、東南アフリカ等まで續がつたのであつた。南アフリカの後期旧石器型の多数の遺物はカプシヤンと云ふ語が北アフリカで用ひられてゐるものと同じ一般文化に屬してゐる。南西のオーリナシヤン及びマダレニヤンの歳石彩色彫刻とブソシマンのものとは一般な技工的類似があることは彼等の間に深き相関々條のありしことを推測せしめるものであるが、彼等の各個の石器へ殊に近代のブソシマンのものとは更に仔細に比較するとかなり相違があるのである。歐洲の後期旧石器時代の小像には草食な体型肥つた体型及びブソシマンとの比較される確かな異常脂肪蓄積体型を仄してゐるものがある。此の存在の意義は北アメリカ又は歐洲にブソシマン種族が存在したことを示す骨學的證示がなないので断言し得ない。

而も層位學的證示が缺けてゐるのでジブラルタル頭蓋、エジプト旧石器人、ボスコッパ及びトランスヴァール・ロデシヤで發見されたブローケンヒル頭蓋の確實な年代を決定することも亦不可能である。

上述した如く前史時代のアフリカに就てはエジプトのピラミッド、オ
パリスク、スフィンクス等の巨石建築のみならず更に旧石器が發見さ
れ、パトリ、Fetie、アメリカン、Ameliane、クイナル、Quillall、ルグラー
ン、Legrain、ミンヴァイン、フールト、Schweinfurth、ミヤントル、Char-
ter、ドモルガン、de Morgan 等の研究に依つてそれは歐洲のものと同
似型であることが明確にされて来たのである。旧石器・新石器類型の粗
製石斧石刀がケイプ・コロニー、グーテンベルク、*Spencer* に燧石矢鏃、*Simons*
アン類型の遺物がコンゴ、自由國のソマリ族居住地、サンダーソン、*Anderson*
Anderson、モンブドウ族居住地、エミン、パシヤ、*Emmings* に發
見されておる。殊にキニエスの旧石器遺物（ガフダ、ガイベス湾西岸）
はコリニヨン、*Callighan* に依れば全く歐洲のものと同である。前期旧
石器時代の終期か後期旧石器時代の初期に歐洲の地中海沿岸なるイベリヤ
半島にネグロ体型の人種の存在してゐたことは其の遺物から知ることを
得る。此のネグロ体型のグリマルデイ人は理論的にアフリカ起源のもの

推定されてゐる。

埃及學の學者は紀元前四〇〇〇年までエジプトは新石器時代であつたが此の時代に中央アジアに銅の發見がありこれがエジプトに輸入され更に錫を加へて青銅を作る技術を發見し裝飾品・武器を作るやうになつたのであると云つてゐる。石器は三角洲とエドフ期の約百を數へる遺跡に發見されてゐるのである。小石の多い沖積層の表面に種々の異つた形態のものゝ累積し、シニレアン、マダシニマンを含む其の層位には動物の骨を伴つてゐる。之等の遺物は相互に孤立し離れてゐるので全大陸に單一の原始工業が存在してゐると推測されるのであるが、遂にアフリカの最も未開な現住民に石器及び石器に屬する傳説迷信の無いところから石器時代は單に局發的の地方的文化にのみ存在したとも考へられるのである。更にエジプト・地中海沿岸を除くと銅器が無いのでアフリカの大多數の民族は骨器・木器時代から直ちに鉄器時代に移つたものらしいのである。而もコンゴール、ソリリール、アルゼリア、キニニス等の現住民から

石斧、石刀、石鏃等が発見されておても現在アフリカ人は一般に石器時代にはあるのでは無くして鉄器時代にあるのであつて、鍛冶屋の階級が存在してゐる程である。従つて或る考古學者は鉄工業はアフリカから歐洲に輸入されたと云つてゐる。アフリカは地勢上北アピシニヤから紅海の沿岸地方ソマリを含む南ザンベン河畔に至る所謂東部山脈に沿ひ、南緯十五度に及ぶ地域は蜿蜒として三千—千呎の高原をなしてゐる。其の北部は主に草原と廣大な森林地であるが其の北西部、南部には大沙漠がある。

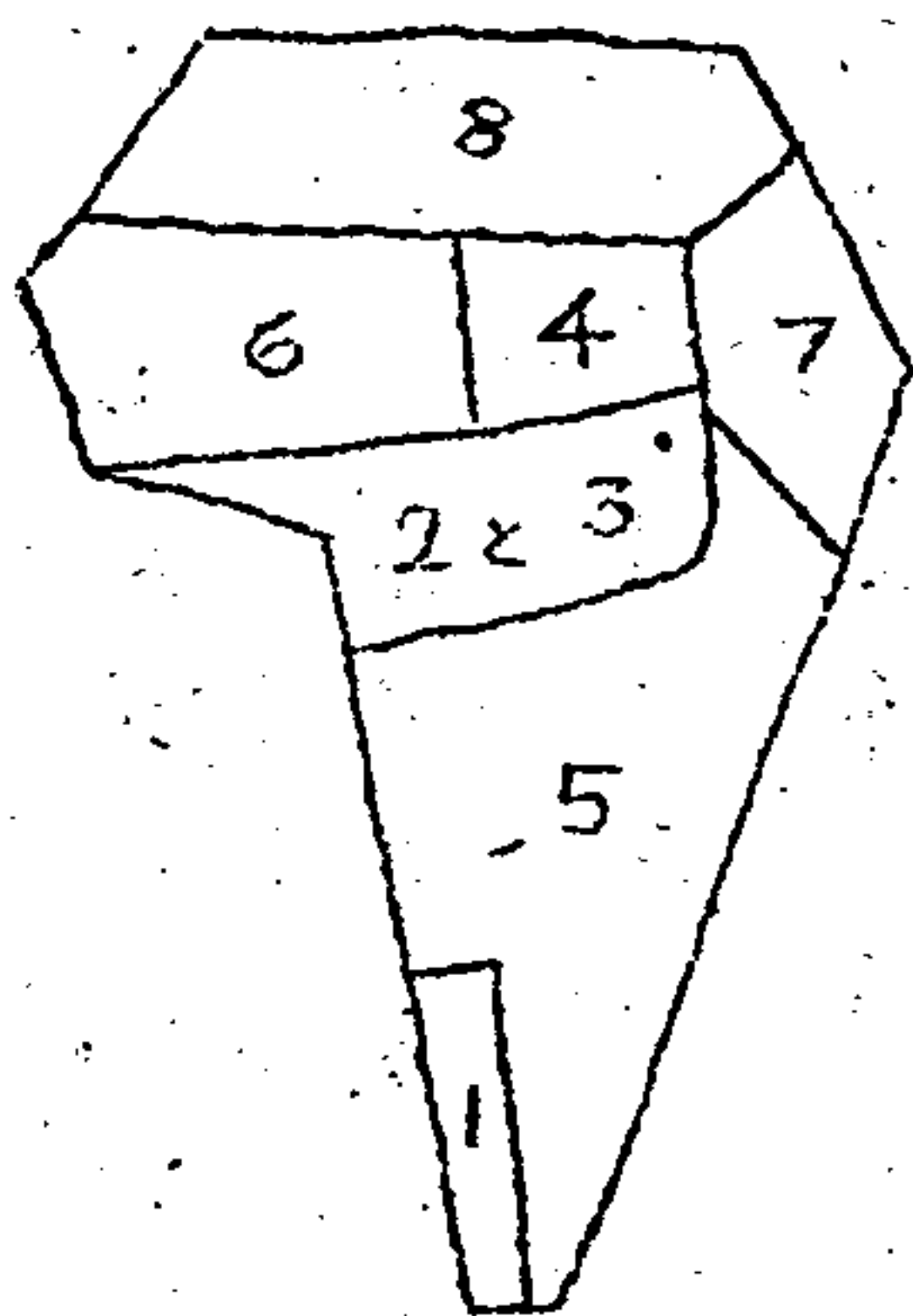
モロッコの大西洋岸に起り東方チユニス海岸に至るアトラス山脈は狭き山嶽帯をなしてゐる。此の北部山嶽帯と大東部高地と南高地間に東から西へ掛けて走つてゐる人種學的巨帯（細分すれば八地帯）がある。へこは大西洋から紅海に及ぶ北部沙漠地帯であつてサハラ、リビヤ、エジプトの諸沙漠を含み、セネガール河からティベステイ丘、キリマンジャロ山に及ぶ山狀北方地域である。所々にオリシス所謂沙漠の船が散

在してゐるのであつて主にセム系のアラブ族、アビシニヤ族、ハム族の
 ゴーニシエ族、フールベ族、ガラ族、ソマーリ族、ワフマ族、マサイ族
 を含む。此の地域に住民は主に歐洲、前方亞細亞、地中海國に屬してあ
 る。

(ニ)は沙漠の南側草地帯であつてセネガル河口から英領スダン、佛領
 スダンが上流するナイル河に及ぶ主にティグ族等の——例へばハマイ
 トとネグロ——混血族が居住してゐる。

(三)はギネア湾の北側にある熱帯森林地帯であつてスダン及びコンゴ
 一地方を含む。此の地域は主に上部セネガル、フールベ族の如きスダン
 ネグロ系が居住してゐる。

アフリカに於ける人種圖(モンタンドン)



(四)はカルメン・コンゴ―河流域以南ナタールに及ぶ地域であつてバ
 ンドウネグロ系の多数の民族例へばルンダ族、ベチユアナ族、ヅール族
 カツプア―族等が居住してゐる。

(五)前獨領西南アフリカのカラハリ沙漠の延長地・ダマラ高地地方
 はブツシマン族とホツテントット族が居住してゐる。

此の外ナイル、コンゴ―河間流域へアビシニア・コンゴ―・カメルン
 の一部には矮小族が住人であるのである。

人種又は亞人種	中心地	典型民族	皮膚色	身長	頭形指数	鼻形指数	特 性
1. ステアートビグ人種	カラハリ	ブツシマン	トス黒い暗褐色	一四五	七六	一〇〇	非常に粗大
2. ビグミー人種	大森林	イトウリ住民	中等の褐色	一四〇	七九	一〇五	部分的に類像
3. バレエオピヤ・ネ グロ亞種	〃	多数部族の要素	暗褐色	一六〇	七八	一〇〇	非常に粗大
4. ネグロ言シヤリ群 シヤリ亞種 上流ナイル	シヤリ	サ ライ ティンガ	暗色	一七八	八一 七二	九五	粗大

5. 南アフリカネグロ 亞種	サンベンシ	カソワア	黒褐色	一七〇	七五	九〇	半は粗大
6. <u>スダン・ネ グロ</u> 亞種	セネガル ニジエルト 千ヤド群	ウオロフ マンデインガ ハウザ	暗褐色 暗褐色 暗褐色	一七三 一七〇 一七〇	七四	非常的可 變的	非常に可變的
7. パンテオピヤ人種	エチオピア高原	アマハラ	中等の褐色	一六八	七五	七五	大部分中等
8. 褐色人種のベルベル アラブ人種	アトラス	ベルベル	黄褐色	一六七	七四	七〇	華盛

第二節 アフリカの諸問題

其の大きいアジアに次ぎ、世界總面積の二〇%を占めるアフリカ大陸の面積は約三千九百万方呎、それに比して海岸線の長さ三万五百万、自然の良港に恵まれぬ事を示してゐる。

此の大陸の總人口一億五千百六十六万、世界總人口の七・五%を占

つに過ぎず、人口密度一平方千米わづかに五人、世界平均密度一五・三人に
比して、略其の開闢の程度を窺ふに足ると云へよう。

既に古く五千年前その絢爛たる文化を誇つたエジプトを有つ北アフリ
カは紅海と印度洋とに依つて歐亜と接し、地中海に沿う事に旅つて常
にそれはヨーロッパと歩を同じうする事を得たが、サハラより南、熱帯
アフリカは今に至る迄忘れられた土地として、暗黒大陸の名を擅にして
おるのである。

此の暗黒アフリカに最初に渡来したものは回教徒としてのアラビ
ヤの商人達であつた。中世に至つて北西アフリカの奥地にあると傳せら
れた黒人黄金地を目指して、アラビヤ人達は其の回教を伴ひつゝ、北阿か
ら中部・西部スーダン迄伸展して行つたのである。此の沙漠を越えての
熱帯貿易を独占したアラビヤ人達は、八世紀以来その東アフリカの海岸
を南下して遠くコリエンテス岬迄到達し、其の間鼻の植民と都市國家
の建設に意を注いだのである。此のアラビヤ人の活動が十九世紀末迄の

東境スーダンの陸路を導いておたと言はれなければならぬ。

ヨーロッパ人のアフリカ大陸への進出は十五世紀に至つて行はれた。

それは専ら報章の想像を絶した香料への憧憬の結果に外ならぬ。此の

香料の産地とそのルートが右のアラビア人の手に委ねられおた所のみ

西歐人は此の香料の直接の産地への探究を深めつゝあつたのであるが

當時勦撃したオスマン・トルコに依つて其の陸路を断念しなければなら

なかつたのである。其の結果遂に此の香料獲得を目指して海路アフリカ

を迂回する事に依つて産地インドへ到達せんと企図される事となつたの

である。

最初にアフリカ大陸に渡つたヨーロッパ人はポルトガル人である。ポ

ルトガル三朝バールンデイ家の王ヘンリー一の派遣した船は一四三四年

大陸北西のボジマドル岬を抜けた。従つてジョン二世の接収の下に一

四八七年バールンデイ・デイスはアフリカ南端に到達し、その迂回

可能なるを証した。此のデイスがその南端を稱呼して「暴風の岬」と

せるを、ジヨンニ世は之を「^{ホープ}希望の岬^{ポイント}」と改稱した。一四九八年ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマはこの希望峰を迂回して東アフリカのモンバサを経、印度のカリカットに到着したものである。此のアフリカ大陸發展以來ポルトガル船はその沿岸を基地としつゝ、印度との貿易を續け、漸次アフリカは白人の手に移つて開發されて行つたのである。斯くて近來の諸民族の手に握られてゐたアフリカは此の時以來、スペイン、フランス、オランダ、イギリスの手に移されて行つたのである。

ヴァスコ・ダ・ガマの發見以來相續く探検家と、金、象牙、別して奴隸貿易に依つて此の大陸の各海岸地方は開發されて行つたが、一七八八年アフリカ協會の創立と共にその奥地探検の手も伸ばされたのではあつたが、然し鋭く近アフリカ大陸そのものは依然東方への一つの基地としての存在でしかあり得なかつたのである。

然しなから此處に一八六九年スエズ運河は開通された。この劃期的な歐亞の最短ルートの開通と、更に之に加ふるに産業革命の進展にその發

鋒はこの熱帯地アフリカに向つたのである。今猶熱帯アフリカに於いて白人移住の適格性への止む事なき科学的探究と調査とが行はれてゐる如く、之以来白人移住可能地域は限定されて居つたが故に、このヨーロッパ人の間に於ける植民地分割を争奪の歴史は激烈を極めざるを得なかつたのである。

ダイヤモンドとして著名なる南阿に於けるポルトガル人の後継者としてのオランダ人とイギリス人とのかの南阿戦争は右の意味に於ける典型的存一例に過ぎない。此の南アフリカの外に、イギリスは北アフリカにエジプト・スダン・東アフリカにウガンダ、ケニアを獲得し、カイロよりケープタウンに至るその所謂アフリカ縦断計画を樹立し、更に之に附加して西アフリカにナイジエリヤを獲得し、フランスは北アフリカにアルゼリア、チュニスを其の保護國とし、マダガスカルを植民地とし、又セネガルを得て英の縦断計画に對抗した。ドイツは英佛兩國に遅れてはゐたベルギーはコンゴ自由國を創設した。ドイツは英佛兩國に遅れてはゐた

が、東海岸にタンガニカ、西海岸にトランス、カメルンを獲得し、領西南アフリカを得、其の植民地経営は他の諸列強を抜いて別して卓越したものであつた。右の外はイタリヤ、ポルトガル、スペインも加はり、この暗黒大陸としてのアフリカは既に全く其の姿を換へてヨーロッパ諸國の夫々の植民地より成る分割されたヨーロッパ列強の和戦興亡の或時は鍵として或時は影として存在する事になつたのである。

此の激烈を極めた列強のアフリカ分割の歴史も十九世紀末葉に至つて一應の完成を見たのではあるが、それに直ちに引續くこの猛暑と悪疫の大陸への開拓の闘争が始まらねばならなかつた。彼等は凡て其の原住民の蛮族と歎ひつゝ、開拓を續け、以て其の採取を企図しなげればならぬ。つたのである。元来アフリカ原住民は北部に於けるハム族を除いて道路を作る事を知らぬ。従つて現今に於いてさへ内部奥地に於いては河川とジヤングルに妨げられながら勞賃の安い黒人運搬夫に依る原始的運輸が行はれてゐる。然しイギリス人がバーム進出のために西アフリカラゴ

、スより海岸への運輸に始めて自動車を用いた事に端を發して、其の運輸費の低廉なるに倍加されて、現今アフリカに於ける自動車道路はとくに發達してある。舟運の便少き河川しか與へられてゐないこのアフリカ大陸に於いてはこの自動車道路の發展は特に重要であつて、アフリカが近代的经济状態の端緒に迄辿り着き得た事實はこの自動車道路の進展に負ふ所極めて多いと云はれなければならぬ。

之に附加されて航空便も前大戦後著しく發展し、東・南部アフリカに英・中部にベルギー、西部は佛・米が夫々定期空路を持つ現在に至つてある。

石の如く歐洲各列強に依つて絶えざる相剋と争闘の下に分割され開発されて行つたアフリカに單に形式的にのみ独立を維持してゐたエジプトエチオピア、リベリヤの三國があつたが、エチオピアは一九三六年イタリイに併合され、エジプトは前大戦當時トルコより逃れてイギリスの保護國となり、名目のかの自治權が許容されてあるに過ぎない状態である。

としてわざかに残されたりビリヤに於いてさへ、それは唯一のアフリカ
原住民のための共和国ではあるが、他の國の保有する殆んど全部の經濟
的資源はアメリカの掌中に握られてゐる現状である。

斯くの如く歐洲列強爭奪の的となつたアフリカ大陸の有つ資源は、然
しなから全く未だその科學的調査の域を出でない現状にあると云はふ可
らばならない。アフリカに於いて金剛石、金、銅、クロム、石棉等を
産出してゐるのは現今南阿聯邦とベルギー領コンゴ、及び南地ローレン
ヤであるが、未だ如何なる土地に如何なる種資源が埋藏されてゐるか
は殆んどその筈に於いては云はるべきであらう。石油はアフリカに
於いては極めて少量しか産出されず、エジプト、東阿、南阿にその形跡
を見るのではあるが未だ全く試掘の域を脱してゐない。又アフリカに於
ける農産物についても東阿に於いては砂糖黍がその主なるもので、奥地
に於いてはサヤサル麻、棉花、ゴム、コーヒ、茶、コ、アなど、西阿
に於いてコ、ア、油パーム、バナ、コーヒとそれらは次々にその主要

栽培物を換へて行つたのである。そして東阿に於いては耕地面積も多く、サイヤル麻、棉花などを白人が主として之の栽培に當つてゐるが、西阿に於いては植物油、嗜好品を主として黒人がこの森林地帯の中で耕作してゐる現状であつて、結局アフリカに於いては農業さへ未だその試行的な時期を經つ、あると云はれなければならぬ。そして此の試作期を出でない農産資源が前述の農産資源よりも少くともその地歩を固めたと言はるべきこのアフリカの現状は、換言すれば現今漸くにしてその開發の端緒に入り得たと云はれるに過ぎないものである事を示してゐる。

換言すれば右の問題は僅々二十年の間に夫々の植民地として分割し終つたヨロコッパ各國がアフリカに於いて何を爲し得たかの問題を示してゐる事を意味する。即ちそれはアフリカに於いてその土着の黒人がその種族の生存のために直接に必要な食糧の生産してゐる農業を、その白人の嗜好する物資たるコ、ア、コーヒ、砂糖、棉花の栽培へと転換せしめ、黒人をして賃銀を支拂つて耕作せしめる事を意味したのであ

る。白人にとつてはその氣候と風土病に於いてアフリカへの移住と其處に於ける勞働とは断念せしめられねばならなかつた。従つてアフリカ資源の間接はその調査、探究、輸送に於いては勿論先進國民の力に負はねばならぬものではあるが、然しその勞働力の供給は之を原住の黒人に俟たねばならぬ現状にある。然しアフリカに於ける黒人の人口密度は極めて稀薄であつて、その一平方料五人を以ては、如何にしてもその發露開發は遠い昔と考へねばならぬ。そしてマラリア、ペスト、チブス、結核、黃熱病、嗜眠病の如き風土病と、その非衛生からの高率の幼児死亡率と醫師の不在とはアフリカの人口の増殖を阻む越し難き障害となつてゐる。之に加ふるにアフリカの地味の不足とそれへの施肥の重要さの認識されてゐない今日、更に洪水により強風に依り、アフリカの土地は日に―その淺館の被害を受けつゝある現状である。此の現状に直面してアフリカ開發のために白人の永住的移住が薦へられてゐる。現今に於いてはその氣候良好なる南阿に於いて白人はその移住に成功してゐると

云はれ得る。アムゼリアと南阿聯邦では次の如き数字を示してゐる。

アムゼリヤ	白人	原住民	白人人口に対する原住民の割合
九九万人		六二五万人	六・三人 (一九三六年)
南阿聯邦	二二二	七〇〇	三・三人 (一九三九年)

然しなから依然として中阿に於いてはその熱帯氣候と風土病のせり白人の移住は不可能と云はるべく、其の氣候的障害の無くなる高地に於いては猶その原住民の驅逐と、海岸からの交通に想到した時依然たる困難を示してゐる。然し例へば南ロデシア、ケニアの如きは將來に於いてはなり廣大の白人居住地域を有つと云はれてゐる。ロゼルベルグは「一口に黒人と呼ばれてゐる諸種族の間にも、道德的品質に於て、非常なる差異が認められるのである。併乍ら、次の二箇條はあくまで眞理として承認されなければならぬ。すなはち、眞の黒人文化なるものは絶対に存在しないこと、黒人と白人との混血は、断然排斥されるべからぬこと、これである。アフリカが國家性を帯つてゐないこととは、すなはち世

世界政策と、白人がこゝに植民地を設ける権利を有してゐるといふことを意味する。こゝに述べてゐるが、此の言に依る迄も、アフリカ開発のためには文明國の格尊に候たればならぬは勿論である。にも拘らずアフリカの人種問題は關聯して東阿の貿易業の一切を擔ふインド人の存在がある事を忘れてはならない。アフリカ在住のインド人總數はわづか三十萬に過ぎぬのではあるが、彼等は大部分商業に従事して奥地深く入り込ん出、人と相手に着実にその住地を築きつゝある。然し此の生活程度低きインド人は白人の絶えざる桎梏の下に置かれてゐる現狀である。アフリカを以て開發し、以て白人の土地をうしめんとする時、彼等は何よりも先づ其の土着の原住民と此のインド人とに接しなげればならないのである。

大東亞共榮國確立のためには南方諸地域が存在する如く、戰後ヨーロッパ新秩序建設のためにはアフリカの資源が要請される。歐亞兩共榮國の相互の問題よりも更に、何よりも先づその各々の共榮國の内部に於ける、換言すれば、ヨーロッパとそのアフリカに對して、それは飽くもアフリ

カ自身の開発を目標として貫かれた全面的な計画が打掛せられねば存り
 ない。徒らに争奪と分割の宿命を負はされたアフリカが現今迄イギリス
 の事実上掌握下に置かれ、ためにドイツ、イタリア、フランス、ポルト
 ガル等との蓋くるるなき相剋に依つてアフリカの開発は徒らに日を曠うし
 ておを現状に置かれておを。交通機関の整備、風土病の根絶、土地改良
 勞働力供給の問題等、アフリカは幾多の問題を藏してその全面的な統一
 的開發の計劃整備を待ち構へてゐると云はるべきであらう。

本章の敘述は主として左の二書に頁す

- *South Wailey: Our African Journey: Century of Problems*
- *Developing in Africa South of the Sahara, 1938*
- 大熊 眞、「アフリカとその問題」

附 節

資料「アフリカの輸送ルート」

元来アフリカ大陸には大河の貫通するなく、又巨大な人口集團もなく、交通量の増加を予想せられる事も無かつた故に、アフリカの交通機関はその發達を極度に妨げられた。今後のアフリカ大陸の開発、資源の運搬は當然、鉄道、自動車路、航空路の發達を前提とする。昨年十二月の *XX the Century* 誌上に於ける「アフリカの輸送ルート」は直接には目下全世界の視聽を集めて其の歸趨を注目されるつゝ、ある北阿戦線の今後の動向への一つの興味ある資料として提供されたものであるが、之は又先に述べた意味に於いても極めて示唆に富んだものと考えられる。以下が其の抄譯である。

白阿と黒阿

反極軸側が長い、危険なアフリカ南端の迂回をせず、大西洋から地

地中海に達する陸路には次の三つのものがある。

(一) フランス領北アフリカ、即ちフランス領モロッコ、アルジェリヤ、チュニジヤを通るもの

(二) フランス領西アフリカを通るもの。このルートはセネガル及びサワラ沙漠の南西を流れるナイジマール河を利用する。

(三) アフリカの「腰部」を横ぎるもの。このルートはギニア湾からナイルに至るものである。以下本論ではまづ前二者を問題とする。これらは相互に密接な関係のあるものであり、現在時局の脚光を浴びてゐるものだからである。

フランス領アフリカはサワラ沙漠の擴かりによつて二つに分れてゐる。これら兩者の間には近年まで陸路による連絡は存かつたから、同じフランス領でありながら、この二つは全く別々の單位を形成しておた。中世アラビヤの地理学者達はこれら二つの地方をそれぞれ「黒人の國」と「白人の國」と呼んでゐた。

北のモロッコからチュニジヤに至る間が即ち「白阿」である。この「白阿」はたしかに地理學上の一單位を形成してゐる。即ち、北アフリカの海岸とアトラス山脈と、サハラ沙漠の北辺とに區切された比較的狭い帯のやうな地域である。しかし、この地域はフランスとスペインとを合せたよりも廣い面積を持ち、人口密度はアルジェリヤ、チュニジヤ、スペイン領モロッコでは一平方キロにつき三十八人の割であり、フランス領パを距ることジブラルタル海峡では僅かに八マイルであり、シシリとチニ、ニジヤとの間でも八十六マイルにすぎない。またこの地方はトリポリへリビヤしによつて近東へとつらなつてゐるが、このルートは古代には侵入および遷居のルートとして非常に利用されたものである。さらに、サハラ沙漠を越えた南側には熱帯に屬する「黒阿」がある。この地方が「白阿」と異なる主な点の一つは自然の交通路にある。即ち「黒阿」ではセネガ川及びナイジヤールの高流域がヨーロッパ侵入の主要ル

トであつたのに「白河」では河は存在しないか、存在しても航行不能である。したかつて、これら両地方の内部の發達状態は二の自然の根本的差異によつて大いに影響を受けてゐる。

モロツコの鉄道

八月の灼熱する太陽の下でも万年雪の消えないアトラス山脈の麓なるモロツコの棕櫚の林マラケシから鉄道が徐々に續けられ、遂にキエニジヤの港スラアツスに達した。

モロツコには一九一一年の末に狭軌（六十センチメートル）の鉄道千五百キロがあつた。これは或る程度の役には立つたが、ともかく一時的のものであつた。

それで普通の軌道の鉄道網がこれに代つて次第に發達し、一九二五年にはカサブランカからニバトを経てフェズに至る線が完成した。この線はさらに一九二七年に完成を見えフェズからタンジールに至る線に接続した。續いて一九三八年にはカサブランカ—マラケシ線が建設され、

一九三四年には遂にフエズから国境のウジヤに至る線の開通を見、これにモロッコの鉄道と連結することになった。なほウジヤからモロソコの内郭を南に走ってボウ・カルファに至る線もある。

アルジエリヤ、チュニジア

アルジエリヤでは二つの鉄道建設計画が相次いで遂行され、イブルも成功した。第一のものは一八五七年に計画されて、一八九〇年に完成した。即ち、それはオラン、アルジエー西港をつなぎ、さらに海岸に沿って東へ延びた。第二の計画は一九〇七年に立てられたものであるが、これが完成したのは廿年後である。この計画によつて、海岸から南方へ走る数線を含むアルジエリヤの鉄道網とこれをモロッコおよびチュニジアとつなぐ線が出来た。

チュニジアにはフランスの保護領になる以前からチュニスの近くと短い路線があった。これはイタリヤの会社が建設したもので、チュニストポリヌとをつなぐものである。一九二二年までに多くの新設路線がこれ

に拘はり、チユニヰヤ内部と同様、チユニヰヤ海岸に沿つても鉄道網が完成した。

このやうにして、北アメリカを統一する横断鉄道は徐々に建設せられ、將來のアフリカ大陸横断鉄道の礎石は置かれた。『白阿』は豊富なる石炭の埋藏量と水カ資源とを持つてゐるので、これが鉄道組織の大部分を電加することかできた。

道路と港湾

殆んどすべてこの鉄道網に平行して近代的なアスファルトの道路が走り、その上をスピードの速い自動車が行くやうになつてゐる。特にモロツゴでは、この道路建設當時農業をやつてゐた、めい、四千キロの主要路と二千五百キロの副道を完全に、真直ぐで、十分に廣くすることかできた。アルジェリヤには五千キロの立派な主要路と二万五千キロの良好い側道がある。チユニヰヤには五千キロの主要路がある。これらの道路と鉄道とはフランス勢力の浸潤と並行して發展した。

「白阿」には多くの良港がある。モロッコの諸港湾は、フランスの保
護領になる前から開かれておいたものも、その後が開港されたものも、長
いこと汽船が沖に碇泊しなければならぬやうな港であつた。貨物及び
乗船客は、やむを得ず解船で積卸しされた。カサブランカが深い碇泊所
を持つた、大きな、近代的良港になつたのは、一マイル半に及び岸壁の
建設、燐礦石の積荷をするための最近の設備から石炭置物、穀物引揚機
電気起重機に至るいろいろの設備をして、偉大な改良が行はれてからで
ある。一九三三年、カサブランカの取扱つた貨物はモロッコの貿易数量
三百九十万吨の大部分に及び、サファイ、アガデイル等その他の港の分
は合計しても五、六十万トンにすぎなかつた。

アルジェリヤには、アルジェー、オラン、ボース、ファイリベグイン、
ボージ等近代的設備を持つた良港があり、その他の群小港の分も合せて
年々一千万トンの輸出入品を取扱つてゐる。しかし、そのうちアルジェ
ーとウランニ港の分で五〇%を占めてゐる。

千ユニシヤにはビゼルタ、千ユニス、ソーセ、スファックスといふ四つの良港がある。これらのうちスファックスは燐鉱石を積出すために千ユニシヤの全貿易数量三百八十万トンの半ば以上を取扱つてゐる。

北阿米英軍の補給路

さて、おれ／＼が新聞報道によつて北アフリカの戦局を判断しようとする時、報道があまりにもまち／＼であつて、北アフリカにおける反糧糧國軍が今後どのやうに出るかを的確に判断することは困難である。しかし、次の点だけは確實であらう。即ち、北アフリカの戦局がいかに米英軍に有利に展開したとしても、つまり米英軍が北アフリカ全土を占領し得たとしても、地中海における樞軸の勢力に對抗して、彼らの北アフリカの派遣軍に十分な補給を確保することは困難である。そして、このことは最近ウイーン・ストン、チヤーキル及び米國海軍長官ノックスによつても公然と確認せられた。

以上のやうな理由から、フランス領地アフリカにある米英軍が南から

即ちセネガル及びナイジャール西地方から陸路によつて補給を受けれるかど
うかといふ問題が非常に重要性を持つてく。そのルートと云へばもちろ
んサハラ沙漠を越えてくるものである。

サハラ沙漠は世界中で最も大きな交通障害物といつてもよいであらう。
かつて隊商や遊牧民や盜賊の群が通つたこのサハラ沙漠も今日ではその
面目を一新してゐる。

サハラ沙漠を通る隊商の支柱は実に奴隷だつたのである。したがつて
奴隷制度の廢止によつて隊商による交易も一舉に崩壊した。

そしてヨーロッパ勢力の浸潤は沙漠の全運輸組織を根本的に変革した。
かつて唯一の運輸機関であつた駱駝は姿を消し、古い隊商路は次第に或
は變賣され、或は放棄された。自動車による最初のサハラ沙漠横断は一
九二三年ツィンブルからテインブクトウへ、コロンブ、ベカールから
ナイジャールへとアドラル・オアセン及びテッサリトによつて行はれ
今日ではサハラ沙漠の中心を通過して二本の定期的自動車路がアルジェー

とナイジヤ―河中流のガオ、アルジエ―とナイジエリアのカノとの間に
 開通してゐる。自動車のお蔭で、今日ではナイジヤ―河とアルジエ―と
 の行程は僅かに六日間である。これらのルートは途中数千キロといふも
 の全く無人の生き沙漠である。しにかつて、水及びガソリンを運ん
 だり、運んで、トビドンと呼ばれる途中のステーションに貯蔵してある。

沙漠横断の困難

これらのルートは、カサブランカからガディル、サワラ沙漠の西
 部を通りオ・デオロを迂回し、ヒネガル河口のサン・ルイを通つてダ
 ールに至る三千五百キロの自動車路がある。昔、この距離は駱駝の隊商
 が三ヶ月を費して歩いたところであるが、今日では自動車が十日以内で
 走破する。この路は、カサブランカから南五百キロは坦々とした自動車
 道路であるが、残り三千キロは沙漠の路である。以上三ルートとも舗装
 した道路ではなくて長い砂の悪路で、前の車の残した轍以外路を示すも
 のはない。したがつて、時としてとくに砂嵐の後によくトラックが行方

不明になる。これを防止するため、ルートを沿って幾つもの監視所を
置いて、最重なる監視制度を設けてある。そして一つの監視所から自動車か
出発するたびに、その監視所から次ぎの監視所へそのことが打電され、
次ぎの監視所へ自動車到着すると、その監視所ではそのことを前の監
視所と通報する。もしも自動車の到着が遅れば、捜索隊が派遣され、
それでも発見されない場合にはさらに飛行機が出動する。

以上述べたやうに、現在「白阿」から「黒阿」へとサワラ沙漠を通ず
る自動車路が開けてあるからといって「白阿」と「黒阿」との交通は陸
路によつてゐる訳ではない。それはむしろ主として海路によつてゐる。
最近のガイシーからの報道によれば、毎日約五十トンの貨物が沙漠の双
方から以上のルートによつて運ばれてゐたといふ。しかし、これではフ
ランス領北アフリカ西地方間の交易のほんの一部にすぎない。これ以
上を運ぶことは非常に困難で、そのことは例へば海上ルートを封鎖され
てから、ダカールに事実上フランスから切り離されたに等しくなつたこ

とによつても介る。とにかく、サハラによる輸送路は以上述べたやうに
 僅かのものを運ぶのにも非常な困難を嘗めるのであるから、まして数千
 のトラックや軍隊を運ぶとなつたらなほさら大変だ。

なほ、サハラ沙漠を飛んで「白阿」から「黒阿」に至る航空路もあつ
 た。これはアルジェーから第五號のビドン、ガオ、セグト、バマコ、カ
 イエーを経てダカールに至る。ダカールはまた海岸に沿つてサン・ルイ
 アガディル、カサブランカ、ラバト、フェズ及びウジヤを経由してゐる
 空路によつてアルジェーと結ばれてゐる。

サハラ鉄道計畫

一八六〇年、ハントは次のやうな予言をした。「いつの日かアルジ
 エーとテインブクトウとをつなぐ汽車が六日間で熱帯とパリとを結びつ
 けるであらう」と。一八七五年から一八二八年まで、サハラ横断鉄道の
 計畫は、熱心に唱へられる時期と全く冷かに忘れられる時期とを交互に
 経験した。一九二八年、北アフリカとフランス領アフリカとを結ぶサワ

ラ横断鉄道研究機関が法律によつて創立された。その同じ法律に基いて諮問委員会が設立され地方団体及び商業會議所の要請があり、国防最高會議の要託があつたにも拘りず、何も実行に移されるはかつた。一九三四年四月に開かれた急進社會党の大會は種々な議題のうちヒサワラ横断鉄道計画を取上げ、これを放棄すべしと決議した。

しかし、一九四一年三月二十二日再びガイシーでペタン元帥から一九三〇年に提案されたルートによつて直に鉄道建設に着手すべしとの布告が發せられた。このルートはその第一行程において現在ウジヤからコロコニア・ベカールに通じてゐる鉄道を利用するものである。それから先は緩つかのオアシスを経てアドラル及びレガンに至り、ハサワラ沙漠の最乾地帯タネスルフトを通ずる七百キロ行程を経て、さらにイン・タシツトに至る。この鉄道は全長三千五百三十五キロにわたるものであるが、一つのトンネルもなく、鉄橋と名づくべきものは唯一本にすぎない。このやうに極端に簡單なものであるから、その建設は三、四年を出でずに完成

されるだらう。この鉄道はデイズル電気機関車を用ひれば平均一時間に六十キロのスピードを出すことができらう。地中海からナイジヤール河まで二日行程に成るだらう。

マルセイユとアルジェとを通じてヨーロッパとアフリカとをつなぐ。但し狐を延せば、大体以上に計画された鉄道線路と一致する。この既設線及び新設線によつて、北阿はダカールを通じてアメリカと連け、ウガンダを通じてインド洋と運ぶことになる。

ダカール

西アフリカに於けるフランスの元来の計画は、セネガル及びナイジヤール西河の航行可能部分を結びつけることによつて、自然の交通路を利用するといふことにあつた。しかし、セネガル河は八月十五日から十月十日までに限つて僅かにカイエーまで、それも吃水十五メートル以内の船が航行できるにすぎない。だから、鉄道を建設し、方が良策である。ダカールからサン・ルイに至る二百六十四キロの鉄道は一八八一年に開

通した。それに續いては、セネガル河中流のカイエーからナイジヤール河上流のパマコまで五百五十キロの鉄道が建設される予定で、一八八一年に着工したにも拘らず、一九〇四年に至つてやつと完了した。しかして一九二三年にダカールからカイエーに至る六百六十七キロの鉄道が開通した。さらに最近にはバマコーセグー線ができ、かくして一千五百キロの鉄道がナイジヤール河中流とダカールとを二日間て連絡してゐる。

セネガル及びナイジヤール河両河口の間にあるフランス領沿岸植民地の内部に亘入つて行くルートは色々ある。セネガル地方のルートに於いては上述した。佛領ギニーからはコナクリー港からナイジヤール河上流のワルサに至る六百六十二キロの鉄道がある。これは一八二四年に完成したものである。また象牙海岸ではアビジヤンとボボ・ジニラソールとを結ぶ鉄道が幹線となしてゐる。この線から分れてセグーに至る一支線がでてゐるが、この線はセグーでサハラ横断鉄道及びセネガル鉄道に連絡してゐる。他の一支線はナイジヤール河に沿つたニアメイに至つてゐる。また

が本々では比較的短い数本の鉄道が海岸から内郭へと走つてゐる。フランス領西アフリカの道路は非常に短期間に発達した。即ち一九二三年には一万五千キロにすぎなかつたものが、一九二八年には五、万キロにおよんだ。さらに、一九三九年にはこれが十萬キロにおよび、鉄道と平行して、或は鉄道と鉄道との間をつないで走つてゐる。これら道路の一部分は一手中使用できるが、大部分は乾燥期だけしか使用できない。以上にのべた水路、鉄道、道路等すべてのルートによつて、西アフリカ奥地から年々四百万トンが港へと送り出される。この四百万トンのうち、ダカールだけで二百六十万トンを吸収してゐる。かつてはサン・ルイが西アフリカ第一の港であつたのだが今やその地位をダカールに奪はれた。ギニー湾に面するフランス領諸港はいづれも第二次的のものである。といふのは、船は沖で錨を下さなければならぬので、天候の悪い時には所役作業が困難だからである。次に主としてギニー湾からナイール河上流に至るルートを検討しよう。このルートの特色は、途中に鉄道の

便がないことである。しかし、皮肉にも、その原因は今日このルートを
命の綱と頼んでゐる英國の政策に歸せられる。

このルートの建設計画は米英聯合國側の要木が大きく存つた今日始め
て生れたものではない。このルートの建設計画は、フランスがセミルロ
ーズのケープタウンからカイロへと、いふ北進ルートに對抗して、セネガ
ル河からフランス領ソマリランドへといふ東進ルートを企畫した時に
始まる。即ち、英國がカイロ、ケープタウン間の鉄道及道路建設計画を
推し進めたのに對して、フランスはダカールからセネガルのヒンダトラ
ンドへ、フランス領ソマリランドのジブチからエチオピアの内訌へと
鉄道を建設して行つた。しかるに、この競争する二本のルートは、ナイ
ル河の上流で、當時どの國の領土でもなかつたスダンで衝突すること
なつてゐた。したがつて、スダン爭奪戦は英佛間に最高度の緊張をも
つた。世界は國境を吞んだ。フランスはまづダカールからジブチへと
植民地帝國を完成するか、或は英國がケープからカイロへとその帝國制

覇を行ふかと。

一八九六年にこの歴史的なスダン争奪戦が始まった。即ち、英のキツ
チナド元帥が英エジプト駐屯軍を引連れ、ナイル河を遡つた。

しかるに一方、フランス軍のマルシマン大佐がその軍隊とともに西ア
リカから東進して、一八九八年九月、キツチナドがナイル河上流のワー
シヨダへ現在ほゴドクと呼ばれる一に到着した時には同市はすでにマル
シマンの手に歸してゐた。そして、この両軍が對峙してゐる間に、ロンド
ンとパリとの間で外交交渉が行はれて英佛間に歎端が開かれずと済んだ。

當時フランスの政治的考慮を左右してゐた第一の要素は、一八九〇年
に敗北したドイツに對する復讐の念であつた。しかして、ドイツに復讐
する爲めには英國と結ぶより他に方法がなかつた。を爲めに、ラインの夢を
実現させるべく、ナイルの現実を放棄した。しかるに、今日のフランス
はナイルをもラインをも失ひ、英國によつてシリヤに、マダガスカルに、
赤道アフリカに、第一、第二、第三、第四と相續してつ了シヨダ事件を仕掛けた。

られ、遂に今やその最も重要な植民地である北アフリカに侵入されるに至つた。

アフリカの輸血路

かくしてアフリカから敗退したフランスが、對獨關係に全注意力を奪はれてある間に、英國はさらに進んでケープカイロ・ルートの完成に全力を盡した。しかし、運命の皮肉はこゝにも現れて、事態は人々の予想を裏切つて發展した。即ち、フランスと争つて英國の建設したアフリカを縦断する南北ルートは、フランスが計画しながらその実行を英國によつて阻まれた西アフリカからナイルに至る東西ルートに比べると殆ど重要性を持たなくなつてしまつた。

二二ヨークを立つた船が喜望峰を廻つて紅海に達するには、二ヶ月を要するが、アフリカの西海岸に至るには、その半分以下の日数しかかからない。今日では聯合國側にとって船腹は特に貴重である。だから、米英は中失アフリカ經由で物資を送ることにありゆる努力を拵つてゐる。

フランス領赤道アフリカは、今やド・ゴール派の手中に帰してある。ベルギー領コンゴもまたしかり、中立国リベリヤも最近米軍の侵入するところとなつた。

リベリヤの占領は單なる戰時的意義以上のものを持つてゐる。米國の軍隊がモンロヴィヤとリベリヤの首都に進駐したといふこと自体、米國がいかにその傳統的な外交政策から逸脱したかといふことを表裏してある。即ち、モンロヴィヤとは米國大統領モンローに因んでつけられた名であり、モンローといふ人は誰でもかの有名な不干渉政策のモンロー主義を思ふであらう。米國は今やモンロー主義を棄て、モンロヴィヤ主義を採つたのである。

西アフリカの諸港

さて、アフリカの西海岸を占領した米英は、いかに利益を得たであらうか。この質問に答へるためには、彼等が手に入れた諸港の價値を調べなくては見なければならぬ。

アフリカ大陸を横断して、重い軍需資材を大量に運ぶための起点として役立つやうな港はさう多くない。アフリカの港は大部分波をよけられずやうな収容所がなく、近代的波止場を缺いてゐる。ごく最新式の設備のあるダカールを除けば、ほゞ良港な設備のある港は三つにすぎない。即ち、非常に良好で五万以上の人口を有するシエラレオネのフリータウンと、人口十三万五千を有し、廣くて大きな船でもはいれるニジニリヤのゴスと、数本の大河が合して海に注ぐところに位置し、汽船が着く波止場まで内陸に引込んでゐる鉄道が通じてゐるフランス領赤道アフリカのツアラとの三つである。他の港はすべて全く役に立たない。バサーストはじめくした土地にあり人口僅かに几千である。モンロヴィヤは聖ポール河の河口にあり、この河は極大な砂防でせき止められてゐるので、大きな船ははいることができず、海上に投錨しなければならぬ。またモンロヴィヤの人口は六千にすぎない。黄金海岸の首都アツクラでも海上に投錨しなければならぬ。ハーコート港はナイジヤール河デルタ

に於るので、港内に碇泊できる。フランス領ガボンにあるソブルグイル
は港としては全く價値のないものであり、人口も数千人にすぎない。ホ
ワン・ノール及びベルギー領コンゴのママデは防波堤があるが荷役
設備が不完全で、大量の荷物を取扱ふことはできない。

ナイルに至る三ルート

アフリカの陸路は空路よりも多くの物資を運ぶの弁ならず、空路にと
つても狭くばかりざるもろである。何となれば、飛行機の燃料を運び、
飛行場を建設するには陸路を利用しなければならぬ。

暗黒大陸には米兵軍に取って戦略的的重要性を有するルートが東西に三
本走つてゐる。その起点及び終点の名によつて、これらを

(一) ニジエリヤースダン・ルート

(二) カメルーン・スダン・ルート

(三) コンゴ―ウガンダ・ルート

と名づける。

第一の最北ルートはチャード湖を經由するものであるが、このチャード湖に至るにはナイジェリヤのよく発達した交通網を利用するのと、フランス領カメルーンのツアラを出發点とし、ヤウンデから北進する自動車路によるものがある。チャード湖に至る途中のカノまではニジェリヤのラゴス港及びハーコート港から鉄道が通じてゐる。さらに、ナイジェヤの河下流は、河口からラゴス、カノ間の鉄道がこの河を横ぎる点まで船が通行できる。さらにもう一つの自動車路がラゴス、カノ間の鉄道に沿つて走り、カノを越えてクカに至つてゐる。このルート中の最難関はチャード湖からエル・ファツシアに至る区間である。この間は沙漠の上陸地帯で、約千二百キロといふもの隊商路を辿らなければならぬ。エル・ファツシアとエル・オベイドの間には自動車路があり、エル・オベイドからは狭軌の鉄道が通じてゐる。このルートが困難とはこのルートによつて、中型の汽船で運ぶだけの貨物を運搬するには一千五百輛のトラック又は四万頭か駱駝を必要とすることを考へれば一目瞭然である。しか

も、その全行程はラゴスからアレキサンドリア迄約六千キロである。

河とジヤンゲル

第二の大陸横断ルートはフランス領カメルウンのヅアラからヤウンデを通つて、コンゴ河の航行可能な地点にある。バングイ迄自動車路によりそニがり更に河を遡つてニアングラに達する。ニアングラは自動車路によつてナイル河上流のジュバに結ばれてゐる。このルートによつても、自動車路のみで總計千五百キロに上る。

第三のルートはベルギー領コンゴを通る。この植民地は今や全く米兵軍の奪取するところとなり、一九四二年七月十五日、ベルギーの前首相はベルギー領コンゴは急速に西進に対する米國のルートとなりつゝ、あると声明した。コンゴ河の下流は滝があるために水運に利用出来な。い。水運に利用できるのはスタンレー・プールから上流である。このスタンレー・プールといふのはブラザヴィルとキンシャサとの間に河に於つて出糸を廣いプールのことである。スタンレー・プールは二本の鉄道

によつて海岸と結ばれてゐる。即ち、一つはボワン・ノワールからブラザヴィールに至る鉄道であり、他はマタデイからキンシャサに至るものである。スタンレー・プールからスタンレー・ヴィールに至るコンゴ河上流一千七百キロの間、薪を燃料とする河船が物資を運ぶ。スタンレー・ヴィールからはニアングラに至るまでブタ・バムベリを通る自動車路がある。ニアングラからは第ニカールトと同じである。

コンゴ・ルート

ちよつと見ると、この最後のコンゴ・ルートは有望なやうに見える。しかし、コンゴ地方も非常な運輸難がある。コンゴ地方の最も重大な障害は、海岸からスタンレー・プールに至る狭軌の鉄道にある。これら二つの鉄道は非常にけししい山嶽地帯を四百キロも走つてゐる。スダンを貫流するナイル河流域の交通路も著しく難渋である。ナイル河はジニバからカルツームを経てベルベルまで定期的な水運が開けてゐるが、このナイル河上流の定期船は百トンくらいしか積めない小さなものである。

のである。ベルベルまで来ると、貨物は狭軌の鉄道貨車に積みかへられ
たりればならない。そして、ベルベルから六百キロ離れたツディ・ハル
ツアに運ばれ、そこで再びナイル河を船で下るか、或はベルベルから四
百キロのポート・スダンまで行つて、そこで紅海経由の船に積みかへら
れなければならぬ。ポロン・ノワールからカイロに至るこのルートでの
全行程は約七千二百キロである。

さて、結論をいふと、以上三ルートによつて西アフリカから北アフリ
カ及び西亜へ運ばれる物資の量は知れぬものだ。第三のコンゴトール
ガンダールナイルルートが最も重要なものである。しかし、このルート
の輸送能力でも知れたものだ。といふのは、絶えず貨車から船へ、船
からトラソクハといふ風に貨物の積替を行はなければならぬからであ
る。さらに、コンゴ下流及びナイル中流に沿つた鉄道は狭軌であるた
め、その輸送能力が非常に限られる。またコンゴ河の船の輸送力も非
常に小さい。その上、奥地における自動車の燃料をはるく運んで行か

なければならぬ。

米英と三ルート

以上で我々は米英が喜望峰を迂回することを欲しない場合に大西洋から地中海に達するための三ルートを検討した。それらうち最後に見た中央アフリカを通ずるルートこそ米英が最初に利用したルートである。その計画は多分一九四一年になされたものであらう。しかして、これの具体化が真剣に取上げられたのは、一九四三年の初頭、米國の参戦後間もなくのことであつた。多分、米英は、フランス領北アフリカを經由して、より直接的に地中海に近づく希望を見出した今日でも、将来事ある場合に備へて、中央アフリカを通ずるルートの發展に努力するであらう。

第七章 猶太人問題

序言

ユダヤ民族は故國を去つて二千年、世界各地に離散放浪の生活を重ぬつゝ、なほよくその民族的特質と結束とを失はず、却つて獨自の才能と強靱なる生存力とを發揮して、史上幾多の問題を生起せしめつゝあることはむしろ驚嘆に値する所である。その問題は宗教・社會・政治・經濟・文化等凡そ人向生活の各般に亘り、複雑深刻にして、且つ廣汎なる史的事實の上に及んでゐる。従つて、問題の把握は容易でなく、その立場を異にするに従つて、或は文献の取捨選擇の如何に依つて全く正反對の觀察を存し、對立的な歸結に到達する場合もあると考へられる。本問題の認識にやゝもすれば不明確と不公平とが伴ふとされる所以である。

此處には能く限り不偏の立場に於て、現代の問題を理解するに必要なる限りに於て、ユダヤ人の思想、境遇、地位、活動を史的に概観し、極めて概括的ながら複雑難解なるユダヤ人問題の本質内容の何たるかを問

ひ併せてその對策に及ばんとした。

尙未尾に「タルムトド」抜萃、「シオン鑑定書」抜萃、及び「フリーメ
ーソンの」の三項を附加して本文に足りざる所を補ひ、参考に資せんとした。

第一節 ユダヤ民族概観

第一款 史的生成過程

ユダヤ民族は約四千年以前メソポタミヤ地方に、彼等の唯一最高神たるエホバを信仰しつゝ遊牧してゐたものであり、アルメニヤ地方から出たアルメノイド人種と、アラビア半島より出たオリエンタル人種との混血せるセム種族の一分派であると考えられてゐる。エホバの指示によりて、族長アブラハムは西暦紀元前二千年頃一族を率ひ御里ウルを去りパレスチナに移り、族長國を作つた。その後飢饉に會つて埃及に逃れ、約二百年居住したが、迫害されて民族的英雄モーゼに率ひられパレスチナへ復歸した。ユダヤ民族はその後十二支族に分れ相争つたが、ソール出で、國王となり、ユダヤ王國が始めて建設された。ダビデ、ソロモン等

英邁なる君主が出て王國は繁榮したが、紀元前九五三年ソロモンの没後、王國は南北に分裂し、南はユダヤ（都エルサレム）北はイスラエル（都サマリヤ）となつたが、兩王朝共隣國アツシリヤの爲に攻略された。その後埃及、バビロニア、シリア等並に勃興せる強國の屬領となり、紀元前六三年、ローマ帝國の治下に入つた。然るに、ユダヤ民族はローマに對し屢々反逆を企てたので、西歴紀元一三五年時の皇帝ハドリアヌスは徹底的な彈圧を加へパレスチナよりの追放を期し、苛酷な重税を課し、エルサルムに於ける居住を嚴禁するに至つた。此處に於て彼等も遂に四散するの止むなきに至つた。所謂「シヤスポラ」と稱する放浪離散の生活が此處に始まることになる。

離散の方向は東方に向つたものもあるが、多くは地中海の南北兩岸を西方に進み、北岸を行つたものは又歐羅巴奧地へ向つた。米國へ渡つたのは西歴千四百九十二年コロムブスの米大陸發見と同時であると云ふべく、支那への移動は舊約時代に始まるとの説もあるが大体西歴紀元前二

百年頃漢の時代に入り込んだと信じられてゐる。離散後の歴史は之を概観して大体三期に分たれる。即ち民族の重心が未だバレスナナ或はバビロンに在つた時代と、それが次第に東洋から歐洲に移動しその間永き苦難を耐めた時代と、遂に十八世紀のフランス革命と自由主義の勃興により解放されて、歐洲及びアメリカに於て、政治的にも社會文化的にも影響する所強大となり、二十世紀以降再び排擠迫害されるに至つた時期之である。

尚ユダヤ民族はその離散生活に於てドイツ、ハンガリー、オーストリア、ポーランド、ロシア等東北方面に分散したものと、北アフリカ、大アラビア文化圏、ホスフオラス、スペイン等西南方面に分散せるものとの二型を區別することが出来る。前者はドイツ型又は「アシユケナジム」後者はスペイン型又は「セファルジム」と稱せられてゐる。一つはゲルマン、スラブ化されたもの他はアラブ及南歐の血を受け地中海化されたものと云へるであらう。

第二款 人口分布状態

以上に於てユダヤ民族の史的生成過程及び移転の大略を概観したが、現在に於けるユダヤ民族の地域別分布状態は次の如くである。

ヨーロッパ	九、三九四、〇七二
アメリカ	五、三四三、二〇〇
アジア	八、一五、二四三
アフリカ	六〇、一七九七
オーストラリア	二七、〇一六
計	一六、一八一、三二八

即ち世界に於けるユダヤ人口は千六百十八万一千餘人で、世界總人口の百分ノ一以下に過ぎない。尚各國別ユダヤ人口を示すと次の如くである。

アメリカ合衆國	四、八三一、一八〇	人口比% 三七四
ポーランド	三、一一三、九〇〇	八、九三
ソ連邦	二、六七六、一〇九	一、六九

ド	イツ	六九一、一六三	〇.九〇
ルト	マニア	九〇〇、〇〇〇	四.六〇
フ	ラン	二四〇、〇〇〇	〇.五七
イ	タリア	五七、四二五	〇.一三
ハ	ンガリア	四四、四五、六七	三.九九
ウ	エツコスロワキア	三五、六八、三〇	三.六三
パ	レスタイン	三九、九八、〇七	三.八一
英	國	三〇〇、〇〇〇	〇.六五
支	那	一、九八、五〇	
日	本	二〇〇	

右は重米利加版「ユダヤ年鑑」一九三九、四〇年版による

さて、向題とするユダヤ人は、之を血縁關係に於てパレスチナ、ユダヤ人の子孫たることを根本的要素とし、更に精神的文化的要素として、

ユダヤ教を信奉することの二要素を以てユダヤ民族たることを決定すべきものとする。

第二節 ユダヤ民族の特性

第一款 不同化性とユダヤ教

ユダヤ民族が國家の獨立を失つて約二千五百年、離散の生活に入つて約一千八百年の今日まで、凡ゆる迫害に抗しつゝ、尚民族として旺盛なる存在を續けて居ることには周知の如くであるが、他民族の間に入り込んだ少数民族としての彼等のかゝる強靱なる生存力こそ所謂ユダヤ人問題を生起せしむる重要素因とされるのである。前節に於てユダヤ民族の史的生成過程を瞥見したが、更に進みて彼等の精神上の特質、それに基く特異の性格、生活等にふれなければならぬ。それに依てユダヤ人問題の基本的特色の一面が自ら窺はれるであらう。

先づユダヤ人の精神生活の基本を形造るものは、ユダヤ教の信仰であ

る。之こそ彼等の生命とも云ふべきもので、亡國以來彼等の結束の原動力をなしたのも此の宗教心である。エホバの神より世界救済の特殊使命を受けてゐると云ふ自意識は、自らを他民族と異るものとし、所謂選民意識を成立せしめる。此處に彼等の自尊心が生じ、排他的となる。この意識に基づく彼等の不同化性こそ、エグザヤ問題の終始一貫した第一義的要因とされるのである。彼等は ^ト律 ^ラ法（モーゼ五書）の赴く所即ち書等の祖國なり（ハイネ）と稱するのであるが、更に此のトトウの外に、その信仰、道德、風儀上の諸規定の書綴られたる深刻浩瀚なるムード存し、それ等の影響のもとに彼等の特殊なる精神状態及び生活習慣が形成され、エグザヤ人以外との婚姻を行はず、自身の年曆をもち、安息日を作り、食物の特殊なる調理法を行ふ等、總じて環境に順應せざる排他的生活を持つるのである。此の如き獨善的、種族的優越感を根本とするエグザヤ教徒に對して、又神の子キリストを十字架にかけて虐殺したるエグザヤ人に對して、キリスト教徒が憎惡の念を抱くのは自然であらう。

殊に初代中世の如く宗教心の熱烈であつた時に於て然りである。

第二款 功利主義

ユダヤ民族は離散生活に入つた後、各國に於て、種々の压制、迫害を受けたのであるが、多く土地所有の制限禁止、住居の制限等が行はれた。その結果、農業に従事すること少く、多く都市に集中して、手工業、商業等に従事した。而して彼等獨特の拜金主義、功利思想は金貸業等に從事する者を多く出し、民衆を搾取することゝなり、酒場、賭博場等の經營をなし、勢ひ社會の健全性を害することゝなり、つて世人の反感を受くるに至つた。

第三款 萬民主義

更にユダヤ人は、民族發生當初から、遊牧を行し、土地に固着せず、世界を放浪するに至つた爲、國家主義的觀念薄く、後年の彼等の國際主義も此處に基くものと云へるであらう。政治的經濟的に國際主義による機構を設け、各國內に於ける有力ユダヤ人の聯繫に依て活動せんとす

る傾向が多分に存するとは人の知る如くである。

第四款 陰性の性格

又その發生當初よりの歴史、環境は彼等をして自然に、陰性的な性格を保持せしめるに至り、耳語すること多く、一般に神經質にして猜疑心深く、復讐の念強く、狡猾にしてその行動は陰險であり利己的である等の嫌悪すべき民族的個性が形成され、かゝる性格の爲に一般の反猶思想を醸成せしめたことも否定し難い所である。尚民族の標象は蛇である(文星堂)

第五款 迫害と生存力

以上の如きユダヤ人の特性が、他民族による迫害、排斥の要因となつたものであることは想像に難くない所であり、中世紀の迫害は深刻を極め職業、社會生活上の諸制限を初め「ゲットト」(ユダヤ窟)への隔離、監禁、店舗、シナゴグ(教會堂)の焼打破壊、虐殺、追放等が盛に行はれた。然し自らを選民とし他の民族を獸類に比する程の彼等は、如何に放浪し、迫害されてもユダヤ諸教典の教ふる所に従つて頑として譲らざる堅

忍不拔の精神を保持し、節儉にして勤勉なる生活を営み、飽迄旺盛なる活動を続けつゝあることは特に注目されるを要するであらう。自らを縛められなければ油を吐き出さぬオリゴブの實に喩へ、如何なる苦難にも身を挺して打克つ底の生存力は偉とされる所である。

第三節 ユダヤ民族の解放と進出

以上ユダヤ民族の精神的特質、民族的個性とも云ふべきものを指摘し、併せて宗教的、社會的、心理的にユダヤ人問題なるものゝ發生する要因をみたのであるが、更に近世現代に於て此等の特質を有するユダヤ民族が、その独自の個性乃至は特異の才能を基本として如何に世界の政治、經濟、社會文化の各面に進出し如何なる問題を生起せしめつゝあるかを見なければならぬ。

第一款 ユダヤ人の解放と社會急進思想

ユダヤ民族の解放と進出はフランス革命以後に屬する。各國に於て自由主義思潮の勃興するや、宗教の自由が與へられ市民權が認められ、各

方面に對する彼等の著しい進出が行はれた。即ち當時の重商主義、自由主義、資本主義、權頭の機運に乗つて、經濟、政治、文化の各面に頭角を現はすに至つたのである。

今此等の状態を概観するに先だちて、一應ユダヤ人が思想的に當時の社會狀勢、社會思潮に於て如何なる役割を果したかを見て置かねばならぬ。元素ユダヤ民族は、甚だ保身的であるに拘らず、その反面に於て急進的であり革命と云へばその裏面に彼等の暗躍が考へられてゐる。彼等の獨尊的選民意識と、それとは余りにかけ離れたる現實狀勢とは、彼等をして、急進的思想の保持者たらしめたと云はれるであらう。いづれにせよ故國を追はれて以來、常に彼等を支配した思想は、征服者に對する反逆と、祖國の復興とである。異民族による絶えざる壓迫と云ふ歴史的、社會的環境が、逆に、彼等の革命思想を濃化せしめたと云はれる。中世以降、彼等に加へられた迫害は、彼等をして、逆世に於ける自由主義思想、民主主義思想の醗酵、勃興に著しい役割を演ぜしめたことは

否定し得ない。彼等の秘密結社運動が革命を目的とするならば、その爲には先づ何よりも民衆獲得が必要であり、民主主義、社會主義、共產主義等々が鼓吹されねばならぬ。且つ近代資本主義の興隆は、一般的現象として社會分化による階級間の對立、相剋を深からしめ、被壓迫階級の解放運動を生起せしめたのであるが、自己解放を企図するユダヤ人が此等の解放と共に起ち、或はむしろ指導的役割を演じたことも事實である。

近世初頭のフランス革命に於て大なる役割を果したと云はれるフリー・メイソンは既にユダヤ人の影響を少なからず受けておたと云はれる。又英國獨立運動に於けるユダヤ・フリー・メイソンの役割も否定し難い所とされる。フランス革命に依て民衆の自由は確立されたが、個人主義の偏重となり、社會改革とは、多くの距離を残した爲、新たなる社會運動の展開、即ち相次ぐインターナショナル運動の勃興となり、カール・マルクス、エングルス、ラッサール以下多くのユダヤ人左翼思想家及び左翼運動の闘士を輩出した。

近くはロシア革命に於けるトロツキー、ジノウイエフ、カーメネフ、ヨ
 ツフエ等無教の革命指導者、ドイツ革命に於けるリールブリネヒト、ハン
 かりト、スペイン革命に於けるベラクルーン、愛蘭革命のドヅアレラ、エ
 耳古に於けるジロウイツド、パシヤ等いづれも皆ユダヤ人たることをみれ
 ば、凡そ彼等の此種運動に於ける役割の如何が想像される。
 かゝる事實は、世界のあらゆる革命、戦争はユダヤ人の陰謀によると
 の風説を起せしむるのであるが、彼等自身は、かゝる運動に於けるその
 役割は、所謂メシヤニスム（世界救済思想）の社會的領域への、倫理的
 發展と稱するのである。

然し、いづれにせよ、ユダヤ迫害の深刻なる諸國、例へば東部ヨーロッパ
 ツパ、ドイツ等に於て急進主義的過激主義が存在するに比し、彼等に對
 する生活を比較的苦しいものにして居かつた諸國、例へば西部ヨーロッパ、
 スカンデナヴィヤ、スウェーデン等に於けるユダヤ人の政治的傾向が概し
 て溫和なるものであつたことは注目し値するであらう。

第二款 フリー・メイソン

此處でフリー・メイソンに就き一言しなければならぬ。ただし、それによつて、ユダヤ人の社會思想及び運動上に占むる地位をより判明ならしめ得るから。

フリー・メイソンは世界的秘密結社で、起源は非常に古く、中世石工組合に發したものであるが、大體現今に於ける意味に於ては十八世紀頃から英國を根據としてロンドンに成立し、その後欧米諸國に組織的に發達し、今日に及べるものである。

そのモットーとする所は、自由、平等、友愛であつて、結社員は相互に國家民族を超越して兄弟と呼び、その目的とする所は、彼等の世界共和國の建設に在りとせらる。

ユダヤ人の結社員たることを許されたのは十八世紀に於てであるが、彼等の國際主義的傾向と多分に合致する所より、彼等に恰好の避難所となり、此處に彼等は勢力を樹立し、これを有利に運用發展せしめ

十九世紀末頃には既にユダヤ人の左右する所となり、同運動に於けるユダヤ的勢力は極めて大となる。「フリー・メイソン結社員は人工的猶太人である」と云はれる程、フリー・メイソンは精神的にも實際的にも猶太人と利害を共にするものと見られるのである。彼等の建設せんとする社會は勿論彼らに有利な社會であることは云ふ迄もない。フリー・メイソンがそのモットーよりして、一見人類最高道徳を磨く國際親善機關の如く見られる場合もあるが、又屢々急進過激思想、國體破壊の原動力となつたことは歴史上著名な事實であつて、之れが存在を禁止してゐる國もある。直接武力によらざる世界征服、一國革命より世界革命を企圖せんとするのが、その明日の事業であるとされてゐる。

近年の諸發表によればその會員数は四百四十八万と稱されてゐる。(米國三百三十万、英國四十六万、加奈陀二十万、佛國約五方と云はれ、英米獨佛等に於ては元首にしてその會員たりしものもあり、著名なる高官軍人學者にしてその會員たるものもある。)

第三款 資本家と革命家

さて、かゝる被圧迫階級の解放とその指導及び實際運動に於けるエダヤ人の役割の著明なるを知らると共に、正にその反面に於て彼らの経済的進出の巨大なることをみるのは一具奇異に感ぜられる所でもある。即ち多くの革命家を出したと共に幾多の大資本家を出してゐるのであるが、一見矛盾する此の事實はヘルツルによつて「吾人ははげ口の無い所から、財産を増大すると同時に、社會的危険分子と成る所の中流知識階級を掃へること、即ち、教育あつて財産の無いエダヤ人は、悉く社會主義者に落ちて行く、社會的闘争が吾人の背に於て行はれるのは、吾人が資本家的にも又社會主義的にも顯著な地位にあるからである」と説明されてゐるが、此の言はエダヤ人の特殊な才能と特異の性格を物語るものとも云へるであらう。即ち彼等は一面よく環境に對する順應性を有すると共に、他面又傳統的に急進的と成り得る素質を具備してゐると云はれるのである。

第四款 經濟的進出

次に然らば、民族的解放以來の彼等の驚異的なる經濟的社會的進出とは如何なるものか、此の点をみなければならぬ。彼等が經濟的に著しい進出を示したのは、在來、商業、金融方面に比較的自由的な活躍を行つた過去の環境から見て、當然の現象と云ふべきで、倫敦、巴里、維納、フランクフルト、ネーブルス等を本據として、大陸をなし、歐米に於てもアジア大陸に於ても、豈に一國內に止まらず、廣く國際經濟界を牛耳る幾多の世界に名だたるユダヤ財團を發生せしめたのである。

今、英、佛、米、獨等に於けるその概略を見ることとする。英國に於けるユダヤ人口は一九三一年度調査によれば三十萬下、總人口に對し、僅々の六五%を占めるに過ぎなかつた。然るに、その一般の勢力の著大なることは、佛國と共に雙壁をなし、それが何れも、彼等の經濟的勢力の基礎の上に立つものであることは争はれぬのである。

即ち同國ユダヤ財團の巨頭はロスチャイルド家であるが、こゝが樞軸となつて英國金融經濟に指導的地位を占める他、一般産業界に於ても人口と比例のとれぬ程多數の財團巨頭を出し、重工業方面に於ては左程存らざるとも、家具製造及び販賣、映画、裁縫業、化粧品業をほとんど獨占し、煙草、電氣器具、化學製品、連鎖店事業等に又主勢力を振つてゐるのである。

佛國に於ては、ユダヤ人口は一九三六年度調査によれば二十四万で、總人口に對し、僅かに〇・五七%であつたが、而も同國の財界及び産業界が代表的財團たるロスチャイルド家（即ちロスチャイルド家）を中心とする幾多ユダヤ資本家により左右される場合の多かつたことは、周知の事實である。

勿論最近のロスチャイルド財團には現世紀初頭に於ける如き全能的な勢力は無く、非ユダヤ的勢力と或る程度に經濟界の分有を認めねばならなかつた。併し、その指導力は微動だもせず、現に佛國々民經濟を構成する金融、商工業界の大半に代表を出し、石油、電氣に支配的勢力を維持する

外、針山、運輸、保險、水道、瓦斯等の特許事業に至るまで牢固たる地盤を築き、正に御國全經濟の大半を握つてゐたのが、今次大戦直前迄の状況であつた。

ロキルド家に續くユダヤ系財閥又は著名財界人としては、更にラザール・ウォルムス、ステルン、ワイナリ、ドレイファス、カーマン、ダンバール、ブロック、ゴールドスマス、サミエール等の諸家を挙げ得るであらう。

美國は今次戦争まで世界に於て最大多数のユダヤ人口（一九三七年度調査によれば四百八十三万餘、對總人口口比率一三・七四％）を擁し、一般にその經濟的勢力も何れの國に於けるよりも大なる如く考へられる傾向がある。これは、在米ユダヤ人口の殆ど九五％が都市生活者で、而もその約半數がアメリカ國家生活の中核をなす組育に集中してゐる点より與へられる印象が多分に手備つてゐるのであるが、事實はそれ程でなく、アングロ・サクソン系とは比較に行らぬことを、一應認めねばならぬ。特に金融方面に就て見るも、一流財閥としては、ミツバ一家を中心と

するクン・ローエブ商會を擧げる程度であり、紐育手形交換所會員たる十九大銀行の重役にしても、總數四百二十名中ユダヤ人は三十名程度である。併しユダヤ資本の性格は必ずしも個々の大財閥のみによる活動を特色としなない。彼等同族資本の見えざる協力、連繫こそ、その恐るべき力であるとするれば、米國に於けるユダヤ人の財的潛勢力は確かに一大威力である。あると見るのが真相に近い。この間の消息を物語るものとして、次の二事例が擧げられる。第一は、一九二二年ヤコブ・シツプ等を中心に團結せるユダヤ財閥の專横が米國上下兩院の問題となり、之が真相究明のため組織された調査委員會の調査報告が、ユダヤ系銀行トラストの存在すること、それが五個の主要銀行と百十二個の重要な銀行を管理すること、而して此等の銀行が總資本額二百二十億餘弗を擁し、米國全土は勿論、海外まで勢力を伸張し居ることを明かにし、世人の耳目を聳動せしめたことである。

第二の事實は、會て米國が世界大戦後の不況に襲はれ、閉鎖銀行數

に七千八百餘行に及んだ際、その九割までが非ユダヤ系銀行で、而もその大部分がユダヤ系資本の併呑するところであったことである。

以て米國に於けるユダヤ系金融資本の實勢力を窺知するに足るであらう。次に産業界に於ける勢力も、全体から見ても少数勢力たるは免かれぬが、併し人口比例からすれば實に侮り難きものが存する。いまその進出の著しい卸面を求むれば、比較的に勢力の微々たる重工業方面に於て、鋼鐵業の九割までをその掌中に握り、銅山業界に支配的地位を占めることは特筆さるべき点であらう。

しかし、ユダヤ人の米國産業界に於ける勢力を代表するものは、實に輕工業及び商業方面であつて、織物、衣類、葉巻煙草等に獨占的經營を行ひ、數種輕工業製品の販賣卸面を壟斷し、百貨店事業に著しい進出を示してゐることは、夙に著明な事實に屬するのである。

最後にドイツに於ける進出を見なければならぬ。大体同國がユダヤ人を解放してからナチスの排猶政策実施まで、僅々六十数年の間に發展

を遂げたものであるが、その間第一次世界大戦前後の混乱期に際して不動の地盤を確保するに至ったことは、注目されるべき点である。

ドイツに於けるユダヤ人口は一九二五年に於て五十六万五千、同國人口の一%弱であつたが、そのユダヤ人がドイツ經濟界に於て如何なる地位を占めたか。ナチス排猶政策実施直前の状況を見るに、その進出は凡ゆる部面を通じて目立ちたる中でも、商業及び金融業に於てユダヤ人商會の占むる比率は總体の五七%餘、織物及び衣服販賣に於て四〇%、穀物取引に於て約二三%、銀行業に於て一九%であつたが、就中、同國一流銀行の理事及び監査役級が圧倒的にユダヤ人により占められてゐた事實、柏林商工會議所を始め諸取引所の幹部の椅子が過半数ユダヤ人の掌中にあつた事實等は、その商業界特に金融界に於ける勢力の如何に著大であつたかを証明するに足るのである。

工業方面の勢力は商業、金融に於ける程には非ざるも、エミール・ラテノウの創設にかゝるA. E. G. 社の如きは著名なるもので、其他にも相

滿教の會社があげられ得たのである。

右の如く世界主要國に於けるユダヤ人の經濟力に就ては、つとに喧傳さるる如く、若大なるものであるが、此の如き經濟的進出に就ても、その勢力は常に國際的色彩濃厚であり、同族間の資本的連繫が緊密なる点は留意さるべきであり、ユダヤ人の國際主義的特色が窺はれる。

第五款 政治的進出

ユダヤ人が此の如く經濟的勢力を獲得した當然の結果として、その政治的地位も著るしく向上した。前例に従ひ二三の主要國に就き概觀すれば、英國に於ては、彼等の經濟的地盤の確立は最も古く、従つて又その政治的勢力も断然優勢である。即ち同國近世に於ける著名政治家中、シヤフツベリト（ゾイクトリア女皇時代の首相）ピトコンスフィールド（保守黨首領、首相）グラッドストーン（首相）いづれもユダヤ人である。近くはヘンダーソン、スノーデン、サイモン等をあげ得べく、ホアーベリシア、フィリップス、サツストーン、リース、ロス等もた然り、以て同國に於けるユダヤ人政治家

の勢力を窺知するに足るであらう。

佛國はフランス革命に於て既にユダヤ人の大なる暗躍を経験した所で
あるが、現代に於ても大戦直後の首相兼外相次いで大統領となりしミル
ラン、パニルベドを始めとして、近くは、レオニブルーム、マニデル、
ジャンゼー、レイノー等同國一流政治家がユダヤ人である事實をみても、
その勢力が窺知されうる。

米國はその経済的進出の頂に於てみたる如く、政治界に於てもユダヤ
人の表面的な著明な進出は余り見られず、唯ハーゲンがそれであり、
むしろ大統領の影無者としての幾人かのユダヤ人の活躍が一例へばウイ
ソンに於けるバラゾの如しと云はれるのである。

しかし、現大統領ルーズヴェルトはユダヤ人の血を承け継ぐと云はれ、
そのブレントラストも殆んどユダヤ人であると云はれる。かくて全國に
於けるユダヤ人の政治的勢力の伸張が云々される所である。尚モイゲン
ソ、ルイス、ブランガス、レトマン、ボラト等の著名政治家をあげ得る。

ソ聯邦、帝政ロシアに於てはアレクサンドル二世の改革以來ユダヤ人は解放されて、自由な活動を行し得るに至り、経済社社會の各方面に進出し、一九一七年革命直前に於てはロシア金融機關の大部分を通じて、商工業の大部分を支配してゐた。

しかし、一九一七年革命を契機としての政治的進出は最も目覺ましいものとされる。帝政ロシアのユダヤ政策は却つて彼等の過激思想を激發した。ロシア社會民主労働黨の幹部ダニ・アクマリロド、アルトフ、リベル等いづれもユダヤ人である。彼等の精神的後継者たるトロツキ、カトメネフ、ジノウエフ、リトウノフ、ラデツク、モツフエ等帝政ロシアの専制政治を轉覆せしめたる指導的革命家もユダヤ人出身であり、一般及政治的ユダヤ人大衆の有力なる参加によつてロシア革命は成就され、爾後ユダヤ人の進出は驚異的となつてゐる。

ソ聯に於てはユダヤ人は完全に解放され、反猶運動は禁じられ、革命に乗じて、空席と行つた、諸官廳の椅子はユダヤ人によつて占められ、

單に政治に止まらず、凡ゆる方面に法外の進出が爲されたのである。獨逸に於けるユダヤ人の政治的進出は、第一次大戦に於ける、カイゼルの顧問マックス・ワルブルグ、資源局長官バーリン等の活躍、革命に於けるラニツベルヒ、リイブクネヒト、ロトザ、ルクセンブルグ等の活躍、共和政体に於けるエーベルト以下、ハーゼ、ラテナウ、コロン等著名なるものがあるが、ナチス政權の擡頭によつて終焉をつけた。

更にユダヤ人の政治的進出は單に一國內に止まらず、國際政治に重要な行ふ干與を示すに至つた。その國際向に於ける經濟的財的勢力の増大に伴つて、國際政治上の勢力も當然に擡頭した。第一次大戦後の講和會議には聯合國側、獨逸側共に多数のユダヤ人代表を参加せしめた。彼等の縦横の活躍は此の會議を動かし、遂に二千年の大念願たるユダヤ國を、政國パレスチナに建設せしむるに至らしめたのであるが、これこそ彼等の政治的進出を如実に示すものと云へよう。

尚第一次大戦の講和會議より生れた國際聯盟に於けるユダヤ勢力は、

その重要なる部署が如何は多くユダヤ人に依つて占められたかを一見す
れば解る。

聯盟事務總長 ドラモンド（英國籍ユダヤ人）

次長 アブノール（併國籍）

交通部長 ハーリス（併國籍）

衛生部長 ライヒマン（ポーランド籍）

經濟部長 ソルター（ドイツ）

宣傳部長 コンメン（國籍不詳ユダヤ人）

聯盟の提唱者ウィルソンの裏面に在りたるものがユダヤ人秘書バラヂ
であり、その他聯盟關係で著名ユダヤ人としては、ベネツニユアグリア
が、イーマンス等世人の記憶に新たなる所であらう。

以上、ユダヤ人の政治的進出の概況を叙述したが、更に他の文化領域に
於けるその活躍を記述し付けねばならぬ。就中國際宣傳機關としての
新聞、通信、或は映画事業に對するその熱意と勢力とは特に注目し値す

るものが存すると云へよう。

第六款 新聞通信藝術學術界への進出

先づ新聞に就て見れば、一部論者の如く果して欧米言論機關の八〇%が彼等の掌中にあるやば、多大の疑問なしとせざるも、その勢力は確かに大なるものが存する。就中佛國はその最たるもので、同國五大新聞を以て稱されたフテイ・パリジヤン・マタン・ジュエルナール・エコ・ド・パリを始め、全國主要新聞約八十種の中大半はユダヤ系を以て目されてゐた。

又米國に於ては倫敦タイムズと雙稱される紐育タイムズ以下二十數種の有力紙（總發行部數約百五十萬部）がユダヤ勢力の支配下にあると見られ、ハースト系新聞（五百五十萬部）やバタソン・マッコリミック系新聞（三百三十萬部）、スクリップス・ハワード系新聞（百八十萬部）等に比して一見微々たるものではあるが、併し財界、産業界、學界等に於ける彼等の勢力や思想的影響、乃至大都市方面に於てユダヤ系百貨店が廣告主として此等日刊新聞に對

し相當の賤を利かし得る地位にある事實等に想到すれば、同國新聞界に於けるユダヤ的勢力は、發行部数を超越して大なるものの存することば否定し得ぬのである。従て米國に於て、一部の者の間に、新聞はニュース・ペーパーならで別名、ジブリス・ペーパーを以て呼ばれることも、強ち根據なきこととは言はれぬであらう。

英國に於ては、全國九大新聞の所有主中ユダヤ人はサウスウッド卿一人を算へるのみで、表面支配的勢力と云ふには足りぬ。併し同卿がデーリ―・ヘラルドを含む國內で最も有力なる新聞系の一つを支配しゐることば事實で、その意味に於て英國新聞事業に於けるユダヤ人の勢力も、決して輕視し得ぬのである。

ヒツトラ―政權出現以前の獨逸に就て見れば、一九一二年「新聞の偉大なるカ」の著者エベルは、當時既にドイツ新聞の四分の三がユダヤ人の所有か或はその支配下にあつたことを指適して居り、第一次大戦に際しては、官報であつたベルリネル・ターゲブラット、ミュンヘネル・ノーエ

ス・デ・ニ・ナハリヒテン両紙を始め此等一聯のユダヤ系新聞が幾多國家に不利なる記事を掲載して後日に問題を残したことは著名な事實である。

右により、ユダヤ人が新聞界に於て、經營者として或は資本家として如何に著しい勢力を持つに至つたかは、略窺知し得るであらう。

併し一方、新聞事業界に於ては、ニユースの單なる印刷配給よりも記者の活動により、又通信者や世界各地のニユース源よりニユースを蒐集する仕事の方が、より重要であることを忘れてはならぬ。而して今日世界

通信事業界に覇を握る佛の「アウアス」、英の「ルイター」、米の「アソシエテツ

ド・プレス」(略稱 A.P.)、ユナイテツド・プレス(略稱 U.P.)、数年前まで中

欧通信界に名をなした獨の「ウォルフ」等の世界的大通信社が、いづれも

ユダヤ人の支配下にある事實に徴すれば、この方面に於けるユダヤ的勢

力は、新聞社自体におけるよりも遙に大なりと見なければならぬ。

其の他一般出版業、放送事業等に於ける進出も決して輕視し得ぬが、

最後に特筆すべきものは映画事業である。これは周知の如く殆んど一

徹的現象とも云ひ得るのであるが、特に米國に於て、それは殆んど彼等の
 の獨占經營に屬し、英佛、其他諸國亦之に準ずる状態にあると云はれる
 のである。更に藝術及び學術方面に於ても近代のユダヤ人は驚くべく多
 数の代表者を出して居り茲に之を列擧するの煩に堪へぬ程である。
 文學者、劇作家、俳優、作曲家、画家、彫刻家等に、近代藝術に優れた
 幾多の戰士が輩出した外、學術界に於ては醫學に、物理學に、心理學に、
 哲學に之亦世界一流の多量な士を送り出してゐるのである。習的水準
 のバロメーターと稱し得るノールベル賞受賞者中に、ユダヤ人の占むる率
 の大なることも、この方面に於ける彼等の進出の如何に著しいかを立證
 するものでなければならぬ。即ちノールベル賞設定の一九〇一年以來三七
 年迄の受賞者数は百九十五名であるが、その中ユダヤ人は十九名で、總
 数の九・七%を占めてゐる。歐洲總人口に占むるユダヤ人の比率が一・八
 五%、北米のそれが一・九四%なることに想到すれば、ユダヤ人受賞者の
 比率はその人口比率を遙かに越すものであることが判る。

第四節 ユダヤ民族と他民族との對立抗爭

第一款 近代反猶思想及運動

右の如きユダヤ民族の解放と進出とは、その反面に於て二つの反動を齎らした。一つは彼等の他民族への同化思想の彌漫であり、他は彼等の飛躍的進出に對する激烈なる反猶思想の再擡頭である。

同化思想に對しては、民族的意識の復興、同族團結の再強化策として、世界猶太人同盟（一八六〇年創立）、世界ユダヤ人大會等幾多の機關が結成された。就中、ユダヤ民族傳統の精神的團結を維持強化する上に特に顯著なる役割を演じたものはヘルツルにより提唱された「シオニズム」即ち祖國パレスタインを復興して猶太國を再建せんとする主張及び之が實現を期するシオン國（一八九七年創設）であつた。かくて彼等の傳統的特質たる不同化性は維持されたが、これは又反猶思想の激成に尙ほ寄與する所となつた。

在來の主として宗教的色彩の濃厚なる對立感情を基調とした反猶思想

に代つて、近代的な社會的經濟的對立に基づく反猶思想を激成したのであるが、我々は獨逸にその著るしい例を見うるのである。

十九世紀後半よりかゝる意味の反猶思想は獨逸を中心として勃興し、近隣諸國に波及して一般的現象と存つた。

具體的に獨逸に於ける反猶思想の理由をみれば、

一、地主、軍閥、官僚等の支配階級が、ユダヤ人ブルジョアジイの中に恐るべき新興勢力を見出したこと

二、中産階級以下がユダヤ人資本家を自己の敵と見るに至つたこと

三、ユダヤ人は急進思想の持主として、ドイツ的傳統に對し反逆的異分子と認められたこと

四、ユダヤ人は國內に於て依然民族的集團強國にして、國家中別の國家を形成するの感強く、國際的傾向濃厚にして、獨逸國の團結に有害と認められたこと

五、文化領域に於ける進出が、一般文化人をして焦慮せしめるに至つたこと

第二款 現代反猶主義及び運動

右の如き諸理由に基く近代反猶主義は、一九世紀後半その最高潮に達したのであるが、第一次大戦を轉期として、眞に本格的な展開をたし、幾増倍と存く強化されて現代に於ける反猶主義を生み出したのである。

即ち獨逸に於て

一、大戦時に於けるユダヤ人の非愛國的なる数々の行爲が國內を混乱、窮乏せしめ、敗戦の重要原因をたしとみられたこと、

二、第一次大戦末期に成立した獨逸、ソ聯政權及びその前後の共產主義運動、共產革命失敗後の社會民主々義政府等に於てユダヤ人が重要な地位を占め、ドイツを屈服せしめた聯合國側に於てもユダヤ人が活躍し、國際聯盟又ユダヤ人の固むる所となつたこと、

三、大戦後共和政權下のドイツに入り表れるユダヤ人が、既往の同族と共に、政治、經濟、自由職業、學界、言論界、映画等に於て甚大な勢力を占め、ドイツ民族を圧迫し或は之を凌駕せんとしたこと、

之等の具體的諸原因によつて、エダヤ人憎悪は大戦後の獨逸に於て新
 しく爆發した。ナチスのヒットラーは、その指導者として現はれ、排猶過
 動は再び辛辣に強行せられるに至つた。官公職よりの罷免、一般社會生
 活職業上の諸制限、財産没收、監禁、シナゴグ、店舖の焼打、ボグロム
 等と存つて現はれた。その窮極の目標は、エダヤ人の完全放逐に在る。
 かくて既に幾十萬のエダヤ人は難を國外に逃れ人として新たなる移動を
 なしつゝあるのである。

而もナチスはあらゆる戦争、革命、社會不安はすべてエダヤ人の所為
 として海外へ宣傳せられ務めるのであるから、エダヤ人の進出に恐れをなして
 めた諸國に於て反響を呼び起したのほ自然である。先づイタリイ之れに
 共鳴し、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、デンマーク、スイス、
 オランダを動がした。のみならず、英米兩國へも移植されたのである。

此處に於て、ナチスドイツに於ける反猶太主義の指導者としてのヒッ
 トラーの對エダヤ人觀を一瞥しなけりば行らない。けだし民族論的、反

猶太主義は現代及猶太運動の一特色を有すものと云はねばならぬから。
ヒトラーは「我が闘争」に於て次の如く述べる。

「民族的世界観は、人類の意義をその種族的元素の中に認める。此の世
界観は、國家に對して原則的には單に目的の爲の手段のみを認め、國家
の目的は人類の種族的存在の保持にあると考へる。同時に種族の平等性
を信ぜず、種族の多様性と、その有する價値に差異を認めらる。」

而してユダヤ民族に對して「彼等は寄生民族として國家も固有の文化
も有せず、その熱烈なる民族意識——選民意識は悪魔的なエゴイズムであ
り、彼等の智性は狡猾である。彼等は自己の目的を達するため、資本主
義を利用し、共產主義を創造して、世界民族を崩解せしめんとしてゐる。」

分裂主義、享樂主義、虚偽怠慢等々は凡てユダヤ人の戰術である。彼等
はドイツのホリシエウイキ―化を完成し、之によつてドイツの知識階級を
絶滅し、かくてユダヤ世界經濟の支配下にドイツ人の勞働生産力を隷屬
せしめんとするのである。云々

かくの如き民族觀、ユダヤ人觀がナチス・ドイツの反猶思想の根本をなしてゐることは疑はれぬ所である。而してこの如き民族觀は、第一次大戦後の極端なる經濟荒廢、社會不安、内外の諸壓迫對立の中に呻吟せる獨逸民族をその急迫せる危機より救出せんが爲に自然に湧出せざるものを見ることを得るであらう。換言せば、ナチスの反猶政策は、對内的に自民族の團結を図る手段として、資本主義、共產主義をユダヤ的なるものとして排撃することにより、同時に自國の資本家、共產主義者特に社會主義者及び自由主義者の割禦彈圧に資し、對外的には對ソ、英、米、佛等の外交問題に於て、之をユダヤ的と烙印して攻撃し以て親獨分子に呼びかける余地を殘さんとせるものと云へるであらう。

かくて少數者たるユダヤ民族の驚異的進出に對する多數者——他民族の政治的、經濟的對立、相剋が、近世及び現代に於ける反猶主義の特色を占すと共に、ナチスの民族觀に基礎づけられたる反猶運動もその國際宣傳にもより且つは國際情勢の激變より來たる諸國の民族主義的全体主義

的機運の勃興と相伴ひ、現代反猶運動に一つの民族的特色を附與せるもの。と考へられるのである。

之を要約するに、近世現代に於ける反猶主義は、根本的にユダヤ人の各方面への進出が當該國家社會に於て大多數者を構成する他民族にとりて恐ろべき競争者となつたこと、又當該國家の維持發展にとつてユダヤ人の持つ非愛國性と國際性とは、特に危険とされねばならぬこと、三大理由に基くものと云はれよう。かくて、生天具備せる不撓の生活力と精神力とを有するユダヤ人が寄生小教者として、独自の發展を遂げんとして之に對する、多教者他民族との間に惹起される經濟的、政治的對立相剋こそ、近世及び現代ユダヤ問題の核心を成すものと云へよう。

勿論、此の場合に於ても、ユダヤ人の一貫せる民族主義による不同化性、宗教的反感、彼等の忌むべき諸性質並に習性に對する心理的憎惡等、反猶思想の固持素因として潜在的に働いてゐることには否定し得ない所である。

第三款 シオンの議定書

ユダヤ問題の本質の何であるかに就て、その概略を右に叙述したのであるが、尚一言、現代ユダヤ問題の特色をなすものとして、所謂ミオンの賢者の「プロトコール」なるものに言及しなげられたい。このプロトコールは一八九七年バーゼルで開催された會議の報告書と信ぜられて居るが、第一次大戦の末期頃ロシア語から各國語に翻譯され廣く流布されるに至つた。その内容は、ミオン賢者の頭領が、ユダヤ人とフリー・メーソンと共同して世界を崩解せしめ、ユダヤ人の世界帝國を建設せんとして授けた秘密計畫であり、その敷衍として、諸國民を相互に闘はせ、政治的、經濟的、道德的に腐敗墮落せしめんとするものであり、それは全く猶太的であり、タルムードの世界觀、人生觀並に一般猶太人の考へ方がありのままに出てゐると云はれる。その真偽に就ても兎角の論が存するが、むしろ問題となるのはその内容とみるべきであり、かかる文書の出現によつて、現代反猶主義に特殊の性格を附與してゐる事は争はれぬ所である。

所謂るユダヤ禍の名稱の下に總稱される。ユダヤ民族の種々の活動が、例へ客觀的に相當の理由の認められる場合でも、往々このプロトコールに依つて事實以上に誇張され主觀化され、ユダヤ民族は世界征服を企圖する陰謀民族として、「國際秘密力」「地底政府」等々と云ふ如き一大秘密計畫と組織とを有する如くに喧傳せられつゝあるのである。

此のプロトコールを根據として、演譯的にユダヤ問題を觀察することには尙論不可とすべきであらう。しかしその内容と一九一四年以後各國に惹起された事實との間に一脈の共通点の發見され得ること、又その指導者の中には實際に斯る企圖を抱き、その實現を期する、ミヤイロツク的性格の者の存在し得ると云ふことか、ユダヤ民族の陰謀恐るべしとの深刻な印象と存つて現代支猶思想の普及に有力な役割を果してゐることを知るべき要するであらう。

第五節 ユダヤ人問題對策

今次大戦勃發以來ユダヤ民族の運命は益々悲慘の状態に向ひつゝある

と云へるであらう。過去の迫害に於ては何れかへ逃げ路が與へられたのであるが、現在は各國とも植民地人口過剰に悩み、到る處經濟不況に見舞はれ、各國とも國民主義的風潮強く、ユダヤ人を喜ばず迎へる所はなく、彼等にとりては住み惜い世界と云ふべきであらう。三百十方の猶太人口を擁したポーランドは獨ソ兩國に分割され、一方はナチス排猶政策の犠牲となつた路頭に墜ち、他方はソウエト化による生活革命となり、昨日までの資本家財無一文のプロレタリアと化しつゝある。

獨逸に屈服せよ、フランス、ベルギー、オランダに於けるユダヤ人の運命も同様に悲惨の一語につきるであらう。

他方英米兩國の場合ユダヤ人との結合關係はそれ程たやすく一新一夕に破壊される如きものではない、パレスチナ、シオニスト代表部は大英帝國に味方してデモクラシー擁護のためには斷心旨の宣言をだし、又ナチス排猶の犠牲者救済の爲に大統領以下米國官民が積極的活動を示してゐるが、既に兩國ともユダヤ民族との關係は飽和点に達して、進んで難民

を自國領内に收容する程の積極性を示し得た以下ありう。パレスチナ建
國も對アラビア人政策から支障百出の状態である。

英、米、ソ三國に既住のユダヤ人は別として、殺された五十六百万人
の運命は如何に存るか。彼等を圧迫せる諸國に於て、又彼等の落ちゆ
く先に於てユダヤ問題は激化さ水ゆくのではなりか。むしろこれは單に
一ユダヤ人問題ではなく、之と關係をもつ凡ゆる國々の問題であり、世
界人類の問題であるとも云へるであらう。さて此處に於て我々は更めて
二千年以來繰返されてきたユダヤ問題解決の爲に如何なる對策がとりれ
るか、又それは如何なるものであるべきかを見なければならぬ。

第一款 過去に於けるユダヤ人問題對策

先づ順序として、ユダヤ問題解決の爲に過去に於てとられた方策を一
瞥しよう。

一、絶滅政策、これは最も原始的な形式に属するものであつて、古代埃
及、バビロニア、ローマに於て、中世ではイギリス、スペイン、近代

ではロシアに於て採用されたが、むしろ彼等の復讐心を刺激した。

二、隔離政策、エダヤ人の居住を一定区域に制限せんとするものである。

所謂「エダヤ」居住は之に依て生じたものである。しかし、人間相互の自然的交通を遮断することとは不可能であるし、漸期の効果を期待することには出来なかつた。

三、改宗による同化融合政策、之はエダヤ人を基督教化することに依り

一般西洋人との不同化性を除去せんと試みるものである。こゝには相當の歴史を携つたものであり、特に十八世紀のエダヤ人解放以来実行されて来た。西欧諸國及び米國では相當の成功を収めた如くに見られてゐた。しかし

エダヤ人が依然としてその所屬國家と融合してゐないことは第一次大戦に依り明らかとされた所である。従つてこの改宗政策に依りても、彼等の旺盛な排他的民族主義を全的に矯正することは出来なかつた。

四、追放政策、之は古くローマ、中世以降英國、スペイン、現代に於けるナチス、ドイツ等の実行せる所であるが、これは一國內の問題を他國

へ送りこむ結果と存るに過ぎぬ。

五、 獨立政策、ユダヤ人自身の例から「シオニズム」として提案されたもの下、パレスチナにユダヤ人の獨立國家を建設せんとするものである。シオニとはヘブライ語で「日の照る所」の義であり、思想としてのシオニズムは頗る沿革に富んだものであるが、政治運動としてはヘルツルに依り一八八二年起されたものと見られる。第一次大戦のバルフォア宣言を契機として英國委任統治下にその諸国についてたのであるが、現在のパレスチナの如き小地域を以て全ユダヤ人を收容することほ勿論不可能であるし、對アラビア人の問題に依りその建國運動も阻害されてゐる實状であり、こゝらの諸條件の改善されざる限り、心理的の効果は別として、實質的に問題の解決に多くをもち得ないであらう。

第二款 ユダヤ人問題對策

此の如く、法は歐洲文明の過罪と陰影との表象の感ある、深刻複雑にして、解決困難なるユダヤ人問題に對し、將來如何なる對策がとられ

取らねばならぬか」と云ふ問題に當面するゆゑであるが、もとより有効適切なる對策を、今徹に此處に開陳することは、よく企て得る所ではない。只問題の本質と、在来の歴史的事實よりみて、可能視される若干の方向を考へてみることにすべきなり。

「歴史を通過するならば、あらゆる歐洲人が猶白人に反抗したことが判明する。この「あうゆる」と云ふことは、確かに意味深長なことである。ドストエフスキ」此の一句に依りても、ユダヤ人對非ユダヤ人の心の對立の深さが凡そ想像されるのであるが、ユダヤ問題の去はば心的地盤たる此の心構へにして何等か更められる所なくば、断絶如何なる對策も十分の効果を收め得ないであらう。これはユダヤ族のみならず、非ユダヤ族の側にあつても當然同時に反省するべき点と云はねばならぬ。相互の偏見、人種的差別感、憎悪の感情を極力冷靜に消滅排除すると云ふ努力に於て先づ、問題解決への第一歩が踏み出されたと稱すべきであらう。これは一見平凡であるが、人間社會生活に於ける感情的心理作用の重要

さに想倒するとき、又極めて難事であることを判る。

對エグヤ族對策に於て、かつて或程度の成功を収めたる改宗同化策が、破綻を来したのも結曲相互の差別感の露呈に依るものとすれば、能く限り偏見を去り、平等感につくこと加差別感に端を發する問題に解決の緒を與ふることゝなると考へられる。

かゝる心理的自主的對策を先づ第一に願慮すべきであらう。

シエモラアも云へる如く、大多数のエグヤ人が若し、シヤイロックとナタンの中間氣質のものとするれば、右の如き基本的心構へを志向する同化政策は、依然としてエグヤ問題對策の一つの重要なる方向を示すと云へるであらう。即ち過去の經驗に基き、單なる改宗を目ざすに非ず、むしろ實生活上の差別感を除去する点に重きを置かねばならぬ。爲政者としては、これを社會的政治的に誘導規制する必要がある。即ち従来諸國のエグヤ人向に認められる如き、凡そ宗教的、文化的或はその他の意圖のもとに行はれる集會、或は諸組織、施設にして、徒らに民族意識を培養

し、政治活動たらしめ、國際的連絡にまで及ぼさしむるが如き結合に對しては、斷峙再檢討を加へ之を統制下に置くべきであらう。かくる制度の下に於ては如何に旺盛なる民族意識も時と共に弱まらざるを得ぬであらう。現にユダヤ人に對し、何等差別待遇を與へず、平等の地位を保證すると共に、斷乎民族主義活動を禁止してゐる國もある。更に現にユダヤ族を國內に抱擁せる國の現實的問題として、非ユダヤ族との無用の對立、摩擦を緩和する意圖に於て、適當なる隔離政策をとることにも又止むを得ぬであらう。只古代及び中世の如き、ゲットト式(ユダヤ窟)隔離を爲すは不可であり、何等が現代的方法、例へば定位区域を指定して、或る程度の自治生活を與ふるが如き方或が考へられる。

更にユダヤ人の職業分散に就て考へべきであらう。即ち在來、ユダヤ人は寄生小業者として主として都市に集中し、商業其他都會的職業に備して他民族の競争者として目だつに至りたるのみならず、中間搾取によつて他民族に寄生するとの印象が、反猶思想を培養する結果となり

しことよりみて、エグヤ人が各経済部門に分散的に進出することを必要とするであらう。労働、農業等に從事して職業分布の偏倚を矯正すべきであると考えられる。エグヤ人自身自發的にかくするのみならず、爲政者に於て、彼等の經濟生活調整に乗り出すべきであらう。

尚、エグヤ人は世界各国に分散居住してあるのであるから、此の問題の解決は関係諸國の連絡、協力を必要とする。而して追放その他諸種の事由より諸國に止まり得ず存つたエグヤ人を收容する爲に、一定の土地を解放して、彼等の獨立又は、自治を行はしむるも一方策と云へるであらう。

以上の見地に於て、ナチス漸進政策により追放される幾十万のエグヤ人の爲に、米大統領提唱の下に三十二ヶ國よりなる國際政府委員會が結成され、新たにたうエグヤ人收容可能地に關し調査研究されてゐる所と聞く。けれど、これは亦エグヤ問題解決の一方向を指示するものと云はらるであらう。

近代ユダヤ民族の國民的自覚に基く代表思想とみられるニオニズム
が、第一次大戦後平和會議の確認を得て、具体化した。ユダヤ民族ニ千
人思慕の地パレスチナのユダヤ國建設に於ける、對アラビヤ人問題の如
きも亦かゝる見知より速に調整さるべきであらう。

以上比較的可能視されるユダヤ問題對策の若干の方向を列擧したので
あるが、全問題の如く複雑なるものに在りては、夫々の特殊事情を斟酌
し、時と場所とに應じ、綜合的見地より對策を施すの他存りてあらう。
我國とユダヤ人問題の關係及び、これに對する對策の如何、又その
獨特の立場に就ては、節を更めて言及することゝしたい。

第六節 日本とユダヤ人問題

以上、ユダヤ人問題について、極めて概括的であるが、その發生、原
因、内容、特質等を叙述し、之に對し非ユダヤ人社會が如何なる態度
を持したかを見たいのであるが、最後に日本とユダヤ人問題につき言及し

存貯水は存らざり。

第一款 日本に於けるユダヤ人

日本に始めてユダヤ人社會が出来たのは一八八〇年代長崎に於てであ

る。加約十年間に略百人を算するに至り主として商業に従事した。彼等は

ロシア、アメリカ、イギリス等から渡来したものである。然るにその後

長崎に代り新に横濱、次いで神戸にユダヤ人社會が出現した。主として

英、米、近東諸國、印度から来住し、多く貿易に従事し、相當繁榮した。

就甲横濱にけロシア系ユダヤ人の、戦争と革命より逃水来るもの多く、

かくて一九二六年日本國內に約二千人のユダヤ人が居住した。その後一

時的避難民の引揚げにより一九三一年五百人余と存つた。その後多少増

加し昭和十五年現在世帯数約三百、人口千人内外と推定され、主として

横濱神戸に相半して居住してゐる。殆んど大部分は貿易業に従事し、極

く少数の外交関係者、教師、技術者等を数へた。

而して在日ユダヤ商社の七八割までは神戸に集中し、その数昭和十

四年一月現在八十五社を数へ、大部分は個人経営で、僅少資本を以て手堅い活動を怠してゐる。

而して在神ユダヤ人に就て特託すべきことは、昭和十四年日本最初にして唯一の猶太民會を組織して同族の團結を計つてゐることである。同民會はハルビン極東ユダヤ民族中央協議會の指令下に立つたものである。尚財的有力者としては百万円程度のものが多い。

第二款 滿洲に於けるユダヤ人

次に滿洲に於けるユダヤ人を一瞥せんに、帝政ロシア政府は鉄道建設にユダヤ人を利用し、ユダヤ人は自由の新天地を求めて、南露方面より企業心に富んだ多数の者がハルビンに入り込んだ。その他日露戦争に於けるユダヤ兵、革命を逃れるユダヤ人の入滿する者等多く一九〇八年頃既に六千人に達し、一九一七年には一万一千人以上を算した。主としてハルビンを本據として、鉄道建設事業、商業、金融業等に従事した。次に經濟的地盤を固め、同族間の公供施設を次々に開設して行つた。

ソビエト政権とほろや巧に之に順應し、その勢力を伸張した。露重銀行、極東銀行等の金融機関をはじめ、ウズリイ鉄道支社、その他諸々のソビエト機関、東支鉄道の聯側要職等、いづれもユダヤ人がその首脳部であつた。かくて一九二六年頃はユダヤ系企業が最も繁榮し、社會的勢力も絶頂にあつた。

その後露重銀行の破産、ソ支紛争等に依り勢力漸次衰退し一九三一年在滿ユダヤ人は五千人以下に減じた。

ついで滿洲國の誕生、東支鉄道の喪失、第二次歐洲大戰の勃發による滿洲統制經濟の強化は彼等の衰退に拍車をかけ、現在在滿ユダヤ人は三千三百を算ふるにすぎぬ。

しかし、彼等特有の粘着力と、その國際性による在外同族資本との連絡は彼等の潛勢かを輕視することをおそれ、特に各主要地に民會を組織して、同族團結を確保してゐることは銘記されるべきであらう。而して種々在在ユダヤ人を統轄するハルピン極東ユダヤ民族中央協議會は全世界

の同族指導機関と結合してゐる。

尚数百万の富を有する財界有力者を数名算へることが出来る。

漢三教 支那に於けるユダヤ人

次に支那のユダヤ人にも一瞥をくれば、これは西歐資本主義の東漸と共にユダヤ人の對支進出が行はれたとみてよいが、上海

を中心にして香港、天津、青島等に居住したる各國勢力の伸張に寄與した。

人口概数をみれば、現在天津約千八百、北京約百、青島約二百である。

天津、青島には公會が組織され、その他の諸國体、社會施設が存する。

多く商業、銀行業、その他の自由職業に従事してゐる。

上海に於けるユダヤ人は極東のユダヤ人を語るに當つてその最有力

な存在として注目される。最近までの情勢に於ては、上海を本據とする

英國系猶太財團の勢力は時に支那を柳へ、國際關係を左右するの觀がある

つた。

事變前約四十人のユダヤ人を数へ、三十数百はアムステルダム系に屬し

残る四、五百のセフアルジム系が支配的勢力を有した。他に獨逸よりの
避難民は約二万人に達した。

上海には幾多のユダヤ財閥を数へうろが、一頭地を抜くものは上海三
を以て呼ばれた。サツストーンである。彼の統率せるサツストーン・バン
キング・コーポレーションは眞に極東財閥たるに止まらず、國際ユダヤ
投資金融機関であつて、その政治的勢力も大であつた。本却は倫敦にあり、
上海に於て英、米、佛、獨、日等のユダヤ商會社、銀行等を組合員として、
英蘭銀行と香港上海銀行を親銀行とし、鐵道、鑛山、牧畜、築港、土地
賣買、爲替賣買、金融保證等を經營し、總資本額三十億に達すると云はれた。
上海に於けるユダヤ人はその構成及び勢力關係に於て錯雜してゐるの
で、此算を統合する諸機関、團體も複雑であるが、同族の運命に共通し
た問題に當面するや、一切を超越して結束する。

以上、日滿支に於けるユダヤ人の概況を一瞥したが、次にそこに於ける

る現実的ユダヤ問題の何たるかを見なければならぬ。日本とユダヤ問題との関係は當然、滿支に於けるその水を包括する。

第四款 日本に於けるユダヤ問題（初期）

我國に於てもユダヤ問題は漸く世人の注意を惹くに至つたが、問題そのものは敢へて今日に始まると云ふ譯ではない。既に切支丹渡来の當時からその黒幕としてユダヤ人の活動のあつたこと、徳川時代和蘭通商によつてユダヤ商人のために莫大の金銀が日本から持ち去られ、同國と共に押し寄せた欧米勢力の中にユダヤ人の積極的の活動の認められること等は、ユダヤ問題が實質的には日本にもあり得たことを證明する。唯當時政治の内部事情に通じざりし日本としては、之を問題として意識せず、然つたと見るべきであらう。

我が國に本問題が初めて紹介され、意識的に論議されるに至つたのは、今から約二十年以前のことである。即ち一九一四年の第一次大戦が誘引となつて、同十七年ロシアに革命が勃發するや、同大戦も又革命も共にユダヤ人の陰謀であるとの説が一部に行はれ、且つ、フシオン賢者のプロトコールが流布されるに至つたのと相俟つて、俄然我國にもユ

ダヤ問題が登場するに至つたのである。當時の浦監派遺軍に關係せし軍人等がロシアの反過激派軍閥者を通じて得た「ユダヤ禍」に關する知識、特に露譯された「プロトコール」より受けた印象等が、其儘日本に持ち込まれ、紹介されたに始まるものと見られてゐる。

言ふまでもなく、第一次大戦は、ユダヤ人の策謀、暗躍に因るものとのみ断じ去ることは早計であらう。併し右の歴史的ニ大事件に於てユダヤ人が如何に有かな参加をなしたかは、数々の明白な事實の證明するところである。従つてユダヤ人の如何に警戒を要すべき存在であるかを、我國の一部識者が一應身並に感じたであらうことは當然と言はなければならぬ。しかし、我國に於けるユダヤ問題登場の動機を單に右の事實のみに限定することは適當でないであらう。既に當時の我國思想界及び世界の歩みつゝあつた方向の中に、憂ふべきユダヤ禍の我國の足下にも忍び寄りつゝありし事實をも強ち否定し得ないのである。

明治以來の我國思想界は云はば西洋學の直譯に過ぎざりしことは、改

めて指摘するまでもない。然るに、イギリスの功利主義及び立憲主義、或はフランスの自由主義、いづれも皆二千年來の流浪寄生生活から培はれたユダヤ人の傳統的な精神に相通するものであり、彼等の積極的参加の下に生成發展を遂げたことは、史実の明示するところである。更に第一次大戦以來直輸入された民主主義、社會主義、國際主義等の諸思想亦同断である。而して此等の影響を受けた我が學界、思想界も一部に於て遂に國體觀念上許し難き言説の現はるゝ状態にまで發展せしことは、周知の如くである。他方當時の我國經濟界に於ても、漸く國際經濟との連繫を濃くしつゝあつたが、斯る事情は欧米財界に覇を稱ふるユダヤ國際金融資本の侵入と跳梁を許し、進んで我財界の死命を制するは勿論、前記思想的影響と相俟つて、一國の政治方針までも掣肘するに至るなきやを危惧せしめたる事實的根據が無かつたとは云ひ得るのである。即ち、我國に於けるユダヤ問題は、當然登場すべくして登場したのであるが、併し當時の一般社會が之に對し、極めて無関心であつたために

その所論も單なる好事家の好奇心を満足せしめる程度を出でなかつた。而して、それは主として次の如き諸理由による。

一、エダヤ問題は歐洲に發生せしものであり、日本に於ては、前述の如く同様の存形をとりしものは別として、直接には問題とすべきものもその存在せざりしために、この複雑な問題を感知する爲の必要を予備知識に欠けてゐた。

二、エダヤ人は英米其他民族の國籍を使用して、その國人の如きカムフラジエをなし、所屬國家を背景として行動する場合多きため、日本人には、その識別困難であり、従つて「エダヤ禍」による被害の正しい判断をなし得なかつた。

三、我國に於ける一部エダヤ論者の問題取扱ひの方法に問題が存し世人の本問題に對する不信を昂めた。一例を示せば、一切の問題をエダヤ問題に結びつけんとし、ために、往々にして見へすいたこじつけを存し、不合理な獨断、偏狭な見解の押賣りを爲す感を與へた如き、

或は日本の直面する切実なる諸問題に無関係な事実の羅列に終始する觀のあつた如き、即ちそれである。

要するに、我國のユダヤ問題は假令一種の輸入ユダヤ禍論にスタートせしものとするも、他面之を裏付ける若干の事實的根據の上に立つものであつたことは明白である。唯その事實的根據なるものが間接的のものであり、且つ前述の如き諸事情が作用して、ユダヤ問題に何等の理解をを持たぬ一般人の注意を惹くに至らざりしところに、その展開を見ざりし主要な理由が存するやうに思はれる。

第五款 現代に於けるユダヤ人問題

併し、今や我國人が欲すると欲せざるとに拘らず、ユダヤ問題は種々の意味に於て、東亞にとつても、日本にとつても、重要性を加へ来つたことを否定し得ない。而もそれは、従来間接的な問題に過ぎざりしものが、現実の問題として直接我々の眼前に展開されるに至つたのである。かゝる新しき意味に於けるユダヤ問題は、大体滿洲事変以降の我國の

大陸進出及び獨伊の勃興を中心に掲き起された世界情勢の緊迫等を契機として登場せしものと見られ得るが、以下それに就て、叙述を試みるであらう。

滿洲に於けるユダヤ人問題

滿洲事變の結果日本が滿洲を占據し、次いで我國と一体不可分、共存共榮を標榜する滿洲國の建國となるや、その勢力圏内には滿洲の草分けとも稱すべき数千のユダヤ人が現に居住して餘喘を保ち、國際的に程々の繋がりを持つ彼等の動向が、日滿兩國にとって重要な関心事となりしことは當然と云はねばならぬ。今その理由を闡明するため、在滿ユダヤ人が過去に於て日滿側と如何なる関係にありしかを述べることは、問題の核心を衝く上に徒爾ではあるまい。

最初彼等は帝政ロシア勢力の一翼として、吟爾濱を本據に滿洲の開闢に貢献したが、一度革命起り新ソヴェート権力の滿洲進出となるや、巧に之と順應、提携して、ソヴェート勢力の對滿浸潤を援け、自らも一九

二五、六年頃に至つて繁栄の頂点に達した。この時代の彼等は明かに、新舊兩ロシアの出先勢力として日滿（或は日支）側に對して對立的な分子であつた。

然るに其後に於ける滿洲よりのソウエート勢力の退潮と、張軍閥の権力増大は、著しく彼等の立場を不利にした。支那側官憲の彼等に對する粗暴且掠奪的行爲は益々募りその前途は正に暗澹たるものであつた。これ彼等が滿洲事變勃發の當初、日本の大陸進出に共鳴し、特に日本軍の哈爾濱入城の際の如き、同市居住ユダヤ人の圧倒的な大多数が之を觀送せし所以であつたのである。當時の彼等は日本勢力に依存する事に依つて、その前途に光明を見出さんとせしものなる事は、容易に推測され得たところである。

併し事變及び滿洲建國を繞ぐりて捲き起された複雑な國際關係は、彼等の歸趨をも多岐ならしめた。多くの者は在米ユダヤ指導層の指令に動かされ、一部の者は某國の走狗となつて密かに反日的言動を提供して之

を接けたるものが存したと傳へられた如き、その一例である。併し大體に於て在滿ユダヤ人の當時の心境は、一面に於て日本の滿洲進出に共鳴すると共に、他面深い繋りを持つ反日諸國の働きかけに會して困惑の狀態に陥り、去就に迷つたとみるのが真相に近いと考へられる。然し、彼等のかゝる動搖に終止符を打つ新事態が発生した。即ち民族協和を標榜する新生滿洲國に於てロシア、フアシスト黨の公然たる反猶運動がその機關紙を通じて行はれるに至つたことであり、更に時を同じくして哈爾濱に於ける富裕ユダヤ人に對し数々の迫害が繰り返されたことである。これ以來在滿ユダヤ人の態度は急激に反日滿的となり、欧米諸國特に米國に於ける對日輿論を激成する上に、相當の役割を演じたであらうことは、否定し得ない。

其後一九三五年頃に至り、在滿ユダヤ人の日滿側に對する態度に新しい傾向が認められるに至つた。それは、緊密な國際的連絡によつて歐洲に新戰爭勃發の機運を早くも感知した彼等は、極東に於て日滿側との関

係を調整し置く必要を痛感し、努めて之との接近を図らんとするに至つたことである。之等は勿論他面に於て、日滿側が漸次ユダヤ人に對する横暴行爲の取締を嚴にせし結果、彼等の信頼を強めしことも與つて力ありしことは争はれぬ。而して一九三七年以來三回に亘り毎年未哈爾濱に開催されたる極東ユダヤ民族大會こそは、かゝる新傾向を如実に物語れるものとして、指摘され得るであらう。

同大會出席者は哈爾濱以下の滿洲國內諸都市、大連、神戶、天津、青島、上海等の居住ユダヤ人より選出されたる代表者であるが、彼等が第一回大會より第三回大會に至るまでの大會宣言及び決議に於て終始一貫表明せしところは、日滿兩國との共存共栄の立場より反共產主義を堅持すること、兩國の假等に對する公正なる取扱を感謝すること、兩國を中核とする新秩序建設の大業に對し協力を誓ふこと等であつた。大會で採擇された此等の宣言や決議が、その都度指導的諸機関を通じて、全世界の同族に傳へられたことは勿論である。

近年、非常時經濟統制の強化が彼等の生業をも窮屈となし、且つ、日・独伊三國同盟の結果は、日滿兩國にも、排獨政策の実施を見るに非ずやとの危惧を抱かしめ、一部ユダヤ人の上海や米國への移住熱を煽り立て、その意味に於て彼等が一種の動搖状態にあることは否定し得ない。然るに、前記の如き彼等の一般的新日滿傾向には反して変化が認められざる如くである。日滿當局としては彼等の斯る動搖を鎮め、石の望ましき傾向を益々助成・善導するを要するであらう。

在滿ユダヤ人は現在僅かに三千数百人に過ぎぬその数より云ふも、一般社會的に於て、眞に微々たる存在たるにすぎぬと云ひ得るかも知れぬ。しかし、一度我々が、彼等の滿洲との特種關係、極東ユダヤ人中で占める地位、歴史的にユダヤ人社會として持つ、全世界特に米國ユダヤ社會との緊密なる連繫、彼等大部分の者の出身國たる現在のソ聯邦との微妙なる關係等に留意し、他方彼等が滿洲に於ける今日までの動向を回顧しつゝ、更に將來のそれを豫想する時、それは決して渺たる存在に非ること

が痛感されるのである。従つて之を如何に指導し統御するか、彼等の向背の岐るゝところ、其處に如何なる影響が齎らされ得るか、日滿兩國の内外政治に直接関係ある重要問題としなければならぬ。こゝに在るユダヤ人を中心として、一箇のユダヤ問題が確に存在する所以である。

上海に於けるユダヤ人問題

次に上海を中心に踏踏せる、英系ユダヤ財閥及び、之を圍繞する一級ユダヤ資本を中心として惹起されたる對日問題こそ、東亞新秩序建設の嚮をなしたること、凡そ世人の知れる如くである。

彼等が蔣政權と合作して、夫々所屬國の出先抗日機関たるの活動を爲すに至れる、直接原因は、彼等の投資投資が飽和状態に達したので、極東に於ける南投資の目標を滿洲に求めその目的を達し得ざりしに在る。彼等は滿洲國建設を、その投資對象として選び、併せてドイツ排猶政策による避難民の收容地を滿洲に求めんとしたのである。彼等の計画は挫折すると共に滿洲に於て、反猶運動が起つたので、彼等は掌を返す如く

反日に轉じた。即ち、在支諸新聞の反日氣勢を煽り、之を欧米諸國に擴
大せしむると共に、資金援助をなして、抗日人民戦線の結成を助けた。
更にその投資方向を轉換して、國民黨政府を動かして上海を起点とする中
支横断鉄道十二年計画を立て、沿線資源をも開發せんとした。その前
提として断行されたのが、サツストーンの献策と宋子文の協力のもとに英
系ユダヤ人リース・ロスの提案により成立した例の幣制改革と見られる。
而して、此の龐大な對支再投資計画は單にサツストーン財團に止まらず
ユダヤ國際財團の積極的働きかけによるものなることは明白である。從
つて抗日戦線を結成せし國際ユダヤ財團の役割は、後蔣諸國の外交政策
の根幹と相通ずるものであり、敵性ユダヤ財團の活動を封ずることが、
又その外交策を排除する方策となる。大東亞戦争の勃發と共に、外面的
な様相は一大變化を來たしてゐるが、その潛勢力は恐らく一朝一夕に洗
ひ去り得るものではなく、將來東亞新秩序建設途上、在支外國籍ユダヤ
財團の復活は、我々に重大なユダヤ問題を提供すると云はねばならぬ。

新來ユダヤ避難民問題

一九三八年ドイツに於てナチス政權の排猶政策が強化せられ、續いて獨逸合邦やエツコ、ポーランドの壊滅と此等諸國に於ける排猶政策の實施は、歐大陸に於けるユダヤ人の地盤を根底から揺がして、無数の避難民を國外に送り出した。その極東方面に流水込む者の数も夥しかつた。滿洲及び北支方面は逸早く制限措置に出でしため、主として入國制限の無かつた上海に向つて殺到し、一九三八年末は早くも千五百名に達し、翌三十九年更に一萬二千名の上陸を見た。此等避難民の際限なき流入に狼狽した現地諸官憲は、相互折衝の上一定の入市制限を行ふこととなり、その結果幾分渡來数は減少したが、増加趨勢は依然として續き、昨年五月頃には一萬八千人、現在總數約二萬一説では二萬三千乃至二萬五千と稱されるに達する避難民が上海に氾濫してゐるのである。

此等避難民の大部分は獨逸よりするもので、出國に當り現金十マーク以上の所持を禁止せられあるが故に、一部の者を除く外は無一文、無資

産である。彼等は現地に既設の歐洲避難ユダヤ人國際救済委員會や新設の上海歐洲避難ユダヤ人救済聯合委員會、或は現地ユダヤ人有力者等の斡旋を得て、サツスーン系所有のアパートや、ユダヤ協會、小學校等に收容された。次に此等一般避難民に對する救済状況如何と云ふに、昨年八月頃の統計に依れば約七、八十名のものが合宿所に收容されて給食を受け、他、一般には就職の斡旋、醫療救済、開業資金無利子貸付部の融資に依る開業援助等が、救済諸機関によつて行はれた。因みに、渡来ユダヤ人の職業別を見るに、一作年救済委員會に爲した三千餘名の職業登録によれば、商業関係者が断然首位を占め、有技術者が之に次いでゐる。此等の中、救済機関の斡旋により就業し得たものは、同年十一月現在にて千二百餘名に達したが、内、商業関係が同じく首位を占めて五四六件、工業関係三五一件、醫業関係一六七件であつた。

以上述ぶるところの避難民救済には多額の費用を要したこと勿論であるが、之が爲に收納した寄附金額は約三百七十萬元に達し、其他別途の

支出を加ふれば優に四百萬元を越ゆるものがある。右寄附金収容額三百七十萬元の中、約二十六萬元は現地で集められ、残る三百四十萬元は外貨で受領されたものであるが、外國側寄附の主なるものは、紐育のアメリカ、ユダヤ共同分配委員會よりの約五十五萬米弗、英國の二萬三千餘磅等であつた。

中欧ユダヤ避難民の上海渡来状況を概観すれば、実に右の如くである。斯る事實から東亞に於て如何なる問題が新に生じつゝあるかを、次に觀察しなければならぬ。以下その主なるものに就て若干の説明を加へるであらう。

先づ順序として現に當面しつゝある問題を挙げれば、その第一は、彼等避難民の救済費には自ら限度があり、彼等の救済が意の儘に行はれ得ぬ結果は、無為徒食者を街上に氾濫せしめ、一個の社會問題を生ぜしめてゐることである。地元ユダヤ人が救済費捻出に最近悲鳴をあげたことは周知の如くであるが、救済費の大部分をなした外國側の寄附金も

今次大戦の影響を受けて杜絶状態である。従つて、彼等避難民の過半は路頭に迷ふ他はない。治安上からみるも由々しき事態としなければならぬ。況んや渡来避難民の中には革命運動常習犯、共産主義者等も相當に居ると傳へられるに於てをや。

更に彼等避難民の職業戦線への進出は、假令それが緩慢なるテムホを以て行はれつゝあるにせよ、一部先住のユダヤ人の二萬数千を教ふる白人露人の大部分に對し、生活上の安定を脅かす悪材料となつてゐること、も否定し得ないのである。

上海には既に事変による數十萬の支那人難民もあり、斯かる事態は事變後の現状處理に當る我國にとつて、何等かの應急的措置を必要とするものなることば言ふまでも無いであらう。

次は渡来避難民を統つての將來に關する問題である。左に項を述べて、之を觀察しよう。

史実の明示する如く、由來ユダヤ人は傳統的に混乱に乗じて地歩を固

むることには妙を得てゐる。現在事変進行中であり、現状處理の充分ならざる際に、支那經濟の心臟部に彼等が次第に定着するといふことは、必ずや將來同地を中心として東亞の異分子による一大勢力の出現を許すこととならざるを保し難い。この事は、從來も上海がユダヤ金權を中心とする歐米資本力の策源地たりしだけ、一層可能性を加へるものと見るべきである。而してその結果は歐米勢力の再強化を來し、その全支に及ばず影響、日支人に與ふる脅威の僅少ならざることを覺悟しなければならぬ。尚ユダヤ避難民の過数は在留邦人の居住する所謂虹口以北一帯に蟠踞し、彼等の集團が所々に群生しつゝあるが、此等の地域は皇軍の聖戦による占據地帯で、謂はば我居留民の樂天地たるべき地である。にも拘らず、彼等ユダヤ人の此の方面への流入は、今後その定着の曉に於て此等一帯●地域をユダヤ人の居住地と化する可能性が多分にある。

將來彼等独自の國際的互助連絡、高才等によつて邦人權益を侵蝕することなしとは断じて言ひ得ないのである。

以上を要するに、上海避難民を繞る現在及び將來の諸問題は、東亞建設途上の我國に向つて、現状の慎重なる検討と適切果敢なる措置の必要なることを示唆するものと稱すべきである。

而して此等避難民に對する我方の對策の如何が、同時に對外的にも極めて微妙なる反響を呼び起し得べきことを充分に銘記し、善處するの要あることは勿論であらう。

第六款 日本に於けるユダヤ人問題對策

ユダヤ民族問題に用する以上の叙述を終つて、最後に我日本として、特に東亞戰下の日本として、ユダヤ人問題に對し如何なる態度を以て臨み、且つ右の現實的諸問題に對し如何なる對策を樹立すべきかの問題に當面する。

既述の如く、ユダヤ人問題は、甚だ廣汎に亘る内容を有するので、それ等の十分なる検討、正確なる真相の把握行ふしては、到底十分の對策を樹立し得ない。主として西政社會に於て發生し、その歴史的、社會的

環境の下に幾轉變して今日に及べる。同問題の云はゞ一般的なる對策の何であつたかに就ては、既に一瞥した所であり、一般的關係に於ては、もとより、それが日本の問題たるに於て、特に之れと趣を異にすべき理由は存しないが、しかし、又日本のユダヤ人に對する歴史的、社會的なる特殊の事情は、自ら別個の立場の存在することを否定し得ない。

換言すれば、日本とユダヤの關係は、既述の如く主として同種であり、一般の無關心狀態も、かゝる事情の反映であり、東亞の新事態と共に、新に現實的なるユダヤ人問題に直面するに至れるものであるが、その内容に於ても、西欧に於けるものと同日に語るを得ない。即ち西欧の如く直接の怨恨を相互に抱くいはれは存しないと云ひ得るであらう。

而して、之に臨む根本態度に於て、先づ日本的公明正大の精神を以てすべきことは當然であらう。歴史的事實に徴して明らかなる如く、我國は、肇國以來、如何なる民族に對しても偏狹なる差別感を抱かず、又虚偽的、討滅的態度を以て臨んだことはない。歸順するものは、之と和協同化し

如何なる外來民族、異民族をも包容する、大なる寛仁の精神を持しての
る。大東亞に於ける新秩序の建設も、居住各民族をして各々その處を得
しむると云ふ、皇國精神の發露をその根本基調とすること云ふ違もない。
東亞の新天地に安住の地を求めて、渡來するユダヤ人に對しても、之
に臨む根本的態度に於て異なる所はあり得ない。

只然し、ユダヤ人の思想、信念、進退行藏に非議すべきもの少くなく、
幾多の史的事實に徴しても、大東亞默下特に注意を密にし、警戒を嚴に
すべき点存しとしない。若し彼等独自の宗教的信念、民族理想、思想論
理に基く過去、現在の動向畫策を見失つて、徒らに樂觀的態度を以て徑
過せんか、思はざる悔を残すこと存ぎを保し難い。且つ東亞に於けるそ
の人口の僅少は、決してその勢力の微少を示すものではなく、彼等の各
分野に於ける世界的實力との密接なる聯環に在ること忘れはならぬ
であらう。

さて、現実に日滿兩國の統治下に在て皇道或は王道政治に浴しつゝ、あ

るユダヤ人は約一島であるが、彼等が日滿兩國の公正なる取扱ひに感謝し、防共並に新秩序建設への協力を表明しつつあることは、彼等が日滿兩國の庇護の下に安居樂業せんと希望せるものと云ふべく、かゝる傾向は當然益々増進せしむべきであつて、差別的待遇は絶体にさけ、無用の刺戟を以て我に離反せしむるが如きことはとらざる所である。勿論彼等のかゝる意思表示を過大に評價することは不可であるが、先入的偏見を以て見ることは最も不可とすべきであらう。

上海を中心として騰起せしユダヤ財團の経済的、政治的動向を通じて、我が國が重要なる對ユダヤ問題に當面せしことは既述の如くであるが、大東亞戰爭の勃發は此の向の狀勢を一變せしめたが、多年畜積された潛勢力は一朝にして抜くを得ないであらうし、且つ將來の問題をも併せて考ふるならば、彼等の侮日、抗日の原因が、いづれも日本の真意を誤解し或は日本の実力を過小評價せしにありしことは否定し難い。故に此の點の是正を以て根本對策とするであらう。我國の對支進出を欧米流の

帝國主義と同視せしことの誤り、及び彼等にして日本の新秩序建設に協力する存らばその權益の安全なることを知らしめ、且つ何よりも日本の實力を知らしめることによつて、將來の大東亞建設途上の障害を除去するを得るであらう。

中欧避難ユダヤ人に就ては、獨逸との外交上、盟約は勿論考慮しなげればならぬ。しかし、根本的には依然皇國日本の道義精神を以て臨むべきであり、政府當局の「彼等をユダヤ人の故を以て差別待遇をなさず、第三國人として公正に取扱ふ」と云ふ言明にその根本趣旨は表現されてゐる。されど、大東亞戦下の我國に於て、勿論戦時下の特殊事情、且つユダヤ人の特殊性に鑑み、制限、禁止等適宜の處置の爲さるゝことも又止むを得ないであらう。

將來ユダヤ運動と之に對立する反猶運動とは如何に發展するが、ユダヤ人の運命如何は、もとより予測し得ないが、既述の如くこの問題が、幾世紀向、幾多民族が對立相剋を繰返し弱肉強食を續けたる西洋個人主

義、帝國主義社會の中に發生し、各時代の客觀的狀勢に照應しつゝ、夫々の形態に於て相關はれて今日に及べるものであり、その病根の深く症狀の激烈なる、その解決を殆んど困難視せしめてあるのである。しかし、かゝる西洋式霸道の精神とは、根本的にその趣を異にする。皇道日本の精神に基いて、大東亞の新秩序の下に、万民協和の理想の實現せられるとき、ユダヤ人問題も、その解決の曙光を見出し得ると云へるのであるまいか。此處に世界に範をたすべき、皇國日本の道義と、日本精神の使命が辨ずると云へるのであらう。

附 録

「タルムード」抜萃

「シナイ山とは如何なる山であるか？それは其處よりあらゆる民族の上に憎悪が拡がつて行つたところの山である。

「世界はイスラエル人のためにのみ創造されたのである。

「あらゆるイスラエル人は王者の子供である」
「猶太人は、何處へ行かうと、みづからその地の王と行らねば行らぬ」。

「非猶太人の宮廷は家畜小屋に等しい。」

「聖書に『隣人』と書かれてある場合には、非猶太人はその中に含まれてゐない。」

「非猶太人を掠奪することは許されてゐる。何故ならば、聖書へレビ記一九・一三に『汝の隣人より物を奪ふべからず』とかかれてあるからである。」

「非猶太人の財物は主人所蔵財物に等しい。それ故にそれは、最初にそれを入手したものの所有と存るのである。」

「拾つた物を非猶太人に返却しようとするのは罪惡である。」

「神を畏敬する場合にも狡猾で存くべきは存らぬ。」

「あつかましくやれば、神も我々の意に従ふのである。」

「主なる神の肉体は、二百三十六万マイルである。」

「神はモイゼに律法を與へ給ふたが、それは同一の事物をそれ／＼四十

九種のやり方で不潔とも清潔とも證明することを許すだけの餘裕のある

ものとなつてゐる。」

「トーラ（舊約全書の最初の五巻）を讀むゴイ（非猶太人）は死に値するものである」。

「アラム（非猶太人）の最上のものを殺戮せよ」。

「偶像崇拜者（非猶太人徒）のうちの最も律義なる者を屠れ」。

「邪教徒（非猶太教徒）をみづから手を下して殺害することは許される」。

「不信者（非猶太教徒）の血を流す者は主に生贖を捧げるのと同じ値の

あることをしたのである」。

「神、猶太人に言ふ、汝等我を世界の唯一の支配者と存せり、されば我

も汝等を世界の唯一の支配者と存さん」。

「神は夜間にはタルムードを研究し給ふ」。

「一日は十二時間あるが、神は、始めの三時間にはトーラを研究し、次

の三時間には世界を養ひ、最後の三時間には海鱈を相手に冗談を言ふ」。

「非猶太人はすべて偶像崇拜者である」。

「美しき者（猶太人）の仕事は、天地創造の仕事よりも偉大である」。

「人間創造の唯一の目的は、次の事を、河へ猶太人に教へんがためである。即ち、猶太人一人を殺すことは、聖書に依れば、全世界を滅亡させるのと同じだけの事をしたこととなるのである。」
 「猶太人も、妻を持たぬ場合は、人間ではない。」

シオンの議定書 抜萃

第一 議定

我々の態度 我々は單なる空語を弄することを止め、その代り各思想の意識を論議して、比較法と推理法とで事態を吟味することにしよう。此のやり方に依つて我々は、我々の思想体系が猶太人と非猶太人との両見地から見て如何なるものとなるかを明らかにしよう。

性悪説、獨裁慾、善良な性質の人間よりは、天性不良な人間の方が、教に於て優れることは、常に忘れて存らぬことである。それ故に、學理上の議論に依るよりは暴力を揮つて用捨なく事を運んだ方が、及つて政治上の好成績を収めるのである。

人は皆權力を求め、誰でも出まゝに入れば獨裁者たることを欲する。そして其の際に自己の利益のために一般の幸福を犠牲にすることを敢てしない者は極めて稀である。

正義は權にあり、人間と呼ばれる猛獸を今日まで檻に繋いでおいたのは何であるか？ 人間を之迄指導して来たものは何者であるか？

社會秩序の當初に當つては、人間は粗野にして盲目的に暴力に服したが、後には、法律に服したのである。しかしこの法律とても、同じ暴力が假面を被つたものに他ならない。以上から余は結論して、自然の法則より見る時、正義は暴力にあり、と言はざるを得ない。

自由とは思想のみ——自由主義の正体 政治的自由とは一つの思想であつて、實際ではない。一黨派が、政權を掌握してゐる他黨を倒さうと思ひ、思想といふ好餌によつて民心を自黨に惹き寄せようとする時には、この自由の理想を巧に適用する術を知らねばならぬ。

もしこの時政敵自身が誤れる「自由」の概念、即ち所謂自由主義に感

染して、この概念のために自己の権力を抛棄しようとするならば、其の
 仕事は頗る容易となる。此處に於てか我々の敬説は明白なる勝利を得る。
 即ち、政權の手綱が地上に這ふに至れば、自然の法則に従つて他の者
 がそれを取り上げて引くに至るからである。何故ならば、盲目なる人民大
 衆は一日と雖も指導者なくしては濟まざりぬから。

新権力が自由主義に侵蝕された富權かに代つて登場する。黄金——信
 仰——自治。今日では金力が自由主義に取つて代つてゐる。以前には信
 仰が一世を風靡した時代もあつた。自由の概念は元來實現され得ないも
 のであつて、何人もこの概念を適當に使用する術を知らない。人民に暫
 時の間自治を許して置くならば、この自治は變じて放縱となる。この瞬
 向から軋轢が起り、この軋轢はやがて經濟的鬭争となる。
 かくて國家は動亂の巷と化し、その威信は灰燼に歸するに至る。
 金力の支配 或る國家が、内部の革命によつて力盡きてしまふか、或
 は内亂の爲に外敵の手中に陥るならば、その國家は滅亡の外に道はない。

そしてさうなれば、それは我々の掌中のものとなる。即ち我々のみが自由になし得る金銭の力が、その國家に對して救ひの業を差出すが、政府にして救はるる所もなく奈落の底に沈むことを肯せざる限りに於ては、否應なしにそれに取り纏らなくてはならぬからである。

内敵 かやうな考へを自由主義の立場から不思議がる人があれば、余はその人に次の如く反問する。「各國が内外の二敵を有する場合、外敵に對しては如何なる戦争の手段を用ひることも許され、例へば、攻防の計畫を敵に知らせずまた夜陰に乘じて優勢な軍勢を以て襲撃することと許されて、而も不道德と非難されずに済むとすれば、社會の秩序と安寧とを紊す更に悪質の内敵に對しても同様の手段を執ることが何故に不道德と稱せられぬべきか？」と。

大氣——無政府主義 反抗といふことは、假令それが無意味に見えるやうとも、淺薄な判断しか出来ない人民にとつては面白くものであるが、かやうな反抗の可能性が人民に與へられてゐる時、その民衆を理性的根

據や厚意の説得によつてうまく治めるといふようなことは、筋の通つた健全な考へ方をする人ならば決してそれを期することはない。浅薄な情熱、迷信、習慣、傳統、多感な教説によつてのみ動かされ易い大衆といふものは、黨派的精神に迷はされ易いものであるが、この黨派的精神なるものは、健全な動議に基いて行される意志の疎通をすべて不可能にしてしまふものである。大衆の決定はすべて偶然的な多数或は人工的に集められた多数によつて行されるものであるが、この多数なるものは、政治上の權謀術教に通じないために馬鹿氣切つた決議に驅り立てられ、かくて政治の中に無政府主義の芽を萌ざさしめるのである。

政治の道義 政治と道德律とは何等共通点はない。道德律に依つて統治しようとする支配者は、政治の何たるかを知らぬものであり、従つて一瞬もその王座を確保することは出来ない。苟も統治せんとするものは奸策と偽善とを用ひなければならぬ。高貴な國民的性質と誠實と公明正大——は政治上の暗礁であつて、其故は、之等は最強の敵にも優つて

確實に王位より轉落せしめるからである。

之等の特性は非猶太國の特徵となつても差支へはないが、我々猶太人は決してそれらの特性に導かれてはならぬ。

強者の權利 我々の權利は強さに存する。「權利」なる語は人工的に作られた概念であつて、何物によつても證明されおない。その意味する所は、「余の欲する所のものを余に與へよ。それは余が汝達よりも強きことを證せんがため存し」に過ぎないのである。

權利は何處に始まるか？ それは何處に終るか？ 權力の統制が宜しくなく、自由主義の無数の權利によつて法律も支配者も無力となつてゐる國家に於ては、余は新しい權利を汲み出す。即ち強者の權利に従つて行政權に襲ひかゝり、法律を侵し、あらゆる施設を改造し、「自由主義のため」に自ら進んで我々に己の權力を讓渡した者共の支配者となるのである。

猶太的フリー・メーソン秘密結社の無敵性 現在に於てはあらゆる權力が動搖してゐるので、我々の權力は他の如何なる權力よりも無敵であら

う。何と行れば、我々の権力は、如何なる奸策も之を奪り去り得なくな
る程に強力化される迄は、その姿を現すことはいであらうから。
目的は手段を神聖化する。我々が目下止むを得ず惹起せしめてある一
時的な災禍は、やがて揺ぎなき政府と去ふ善事を生むであらうが、この
政府は、自由主義によつて破壊された所の國民的生存の規則的運行を舊
に復せしめるであらう。目的は手段を神聖化する。それ故に我々は、我
らの計畫に於ては、善と道徳とにだけなく、必要と有用とに一層多く注
意を向けやうと思ふ。

我々の前には、戦術の規則に倣つて攻撃戦を描いた計畫がある。もし
我々がこの計畫から離れるとすれば、それは救世紀に亘る事業を臺無し
にする危険を必ず伴ふのである。

大衆は盲目なり。我々の活動に對する有効な計畫を立てようと欲する
ならば、我々は、大衆が下賤、無定見、無節操であることを悟得しなくては
ならぬ。我々は、彼等が自己の生活や自己の幸福の諸條件を諒解しまた

批判する能力を缺いてゐることを考慮に入れなくてはならぬ。また我々は、大衆の力は盲目で、非理性的で、判断力が無く、従つて左にも右にも耳を傾けるものであることに注目しなくてはならぬ。盲人が盲人達の案内役を勤める時、必ずや皆を滅亡の淵に陥れる。従つて大衆の中の一者又は一人民の中から成上つた者共は、如何にも多才の者であらうとも、一度は政治に喙を容れ或は指導者として登場する時には、必ずや全國民を滅亡の淵に陥れたいではおかぬのである。

政治のイロハ 年少の時から自由獨立の教育を受けた者のみか、政治のイロハから成立つてゐる之等の言葉を理解し得るのである。

黨争 或國民が自分自身に、換言すれば大衆の中からの成上り者に、身を委せる時、その國民は、権力と名譽との争奪に依つて生み出される黨争及びこの黨争から生ずる騷擾によつて自滅するに至る。大衆が平靜にまた嫉妬なしに判断したり、個人的利害との混同を許さぬ國運を導くといふ如きことが可能であらうか。又大衆は外敵に對して國を禦ぐこと

が出来るとであらうか。そんなことは思ひも寄らぬことである。研集の頭

教と同じ教の部介に分裂した出師計畫は統一を失つて終ひ、従つて譯の

解らた實行不可能となつてしまふからである。

政治の最も有効なる形式は獨裁政治である。獨り獨裁君主のみが國家
行政上の諸計畫を明確に處理して、國家機關の機構の萬般を正しく区
分する秩序を仕上げる事が出来る。従つて一國の最も適切なる國家形式が
見出されるのは、責任ある一個人の手に國家行政が委ねられる處に於て
である。絶体的權力には文明は存續し得ない。文明は天衆に依存す
るものでなくては、如何なる人間であらうと兎に角彼等の指導者と存
在の事業である。天衆は、あらゆる機會に自己の野蠻性を示す野蠻人達
より成立つてゐる。天衆は、自己を手中に握るや否や、それを無政府狀
態に變へて終ふが、之は野蠻の最頂点に外行らない。

酒精、人道主義、悪徳、酒に酔ひ痴れてゐるアルコール中毒の動物を
見給へ。無制限に飲酒する権利は、自由と同時に與へられるのである。

然し我が民族をその状態に手で陥らしめては居らぬ。非猶太民族はアルコールで頭が濁つてゐるし、またその青年達は、古典を過度に勉強することによつて頭が鈍く居つてゐる上に、我々の手先たる者夫——富豪の家に雇はれた家庭教師や奴僕や保姆、それから商店の番頭等、によつてのみならず、若年のうちから悪徳に誘惑されて、馬鹿になつてゐる。所謂「社交界の貴婦人」と稱せられる連中もこの部類に入るのであつて、悪徳と虚飾を自ら進んで模倣する連中である。

猶太的フリース・メーション結社の原則 我々の合言葉は権力と偽善である。国際法の問題で勝を制するのは獨り権力のみであり、一國民を指導するのには必要の才能ある者にこの権力が藏せらるる時は特に勝利は確かである。権力が基礎となることは言ふまでもないが、新権力の代表者にその王冠を蹂躪させることを欲し行い、やうな政府に當る時は、奸策と狡猾とが権力手段の役目を勤める。この悪事こそは、善い目的に達する唯一の手段である。それ故に我々は、我々の計畫の遂行に役立ちさへすれば、買

欺、詐欺、裏切等に尻込みしてはならない。政治上では、他を屈服させ
また、権力を獲取するに役立つ限りは、猶豫なく他人の財産をも奪はねば
ならない。

恐怖政治、テロ、平和的征服の道を取る我が政府が、戦争といふ恐怖
すべき事柄を避けて、その代り目立つことは少ないが、しかしそれだけに
一層、効目の多い死刑の法を用いるのは當然であつて、盲目的且つ絶体的
服従を強要するためには、この處刑法によつて恐怖政治が毅然と維持さ
れねばならないのである。公正にして而も假借なき峻厳さは、國家の權
力の最良の支柱である。單に利益のため許りではなく、行は勝利のため
には、特に義務の名に於ても、暴カと偽善とを用ひることを我々は固執
しなくてはならない。冷靜なる打算に基く我々の主義は、それによつて
適用される手段と同じく強力である。それ故に我々は、之等の手段その
ものによつてと云ふよりもむしろ我々の不屈不撓な主義によつて勝利を
とり、あらゆる政府を我々の超政府の許に屈服せしめるであらう。

銘せらるべきは、あらゆる反抗を除去するために我々が假借なく事を行ふといふことである。

自由、平等、博愛、我々は既に古代の諸國民の間に「自由、平等、博愛」の叫びを響かせたのであつた。爾後この言葉は、かやうなおびき聲に釣られて四方から集つて来た愚かな騷擾達によつてしばしば繰返され、之等の言葉は世界の安寧を破り、以前には大衆の壓迫を免れてゐた所の眞の個人的自由をも破壊した。賢明で分別ある非猶太人ではへもこの言葉の本義の意味を解しなかつたし、またその内部に含まれてゐる矛盾を見抜くことが出来なかつた。彼等は、自然が平等を知らず、また自由を與へ得るものでないことを知らなかつた。自然そのものが、悟性と性格と能力との不公平を創つたのであるし、又自然の法則に屈服するやうに仕向けておいたのである。非猶太人は、人民大衆行ふものが盲目的の暴力であることを考慮せず、また、その選み出した成上り者も民衆自身と等しい盲目であることを考慮せず、又眞義を授かつたものは假令馬鹿

でも統治が出来るのに、與義を授けられぬものは如何に非凡の才があらうとも政治を少しも解する所は無い。といふことを考慮しない。彼等非猶太人は、之を著述してゐる。

王侯政治の原則 兎に角、王侯政治の根據は何であつたかと言ふに、政治上の習識が父子相傳と存つてゐて、王家の人々のみは知られるが、その秘密は何人によつても被支配民に漏らさぬことがなかつたといふことであつた。しかし政治の眞の内容をかやうに傳授することの意義は時と共に失はれて行つたが、これが同じく我々の事業の成功に役立つたのである。

非猶太貴族の特權の廢止「自由 平等 博愛」といふ言葉は、我々の秘密の手代達の助力によつて、世界の隅々に至るまで、無教の人間を我々の味方に引入れたが、この連中は我々の旗幟を感激をもつて押し立てて廻つた。その間にも之等の言葉は蛆虫の如くに作用して、非猶太人の安寧を喰ひ破り、到る處非猶太人の平和、無事、協同心を喰ひ盡し、そ

此に依つてその支配力を土臺から覆した。諸君、御覽の通り之が我が黨の勝利を到来せしむるに到つた事情である。そしてこの事情が我々に最後の功札を手に入れることを許したのである。即ち、貴族の特權の破壊、まづとよく言へば、非猶太人の貴族政治の本質の破壊をこの事情が我々に許すに至つたのであるが、この非猶太人の貴族政治こそは我々の攻撃に對して非猶太國民並に國家を守る唯一の防禦壁なのであつた。新貴族、我々は、かの古き血族的並に世襲的貴族の廢墟の上に我々の知識階級の貴族、即ち金權貴族を建てた。そして我々はこの新貴族を創造するに當つては、我々に依存する富と我々の賢者達の指導する知識とを標準としたのである。

人間的弱點の利用、我々が利用し得た連中との交際に際して、我々が常に人間精神の最も感じ易い側面に働きかけたことも、我々の勝利を一層容易ならしめた。即ち我々は、金錢の打算、利慾、飽くべき物質慾等に働きかけたのである。之等の人間的弱點は何れも、人間の意志を彼の活

動を金で買ふものの意の儘に歪けさせることとするので、人間の決断力を殺すには誂へ向のものである。

自由の概念 自由の概念は大衆を説服して、政府とは國の所有者即ち人民の委任管理者であるから、この管理者は古手袋の如く取換の利くものである。と思ひ込ませることが出来た。

人民代表者の交替 人民の代表者たるものが自由に取換への利くものであるといふことは、彼等を驅つて我々の手中に陥らしめたので、彼等の生命権は謂はば我々の手中にあるやうなものである。

第二 議定

經濟戰は猶太人優勢の基礎 我々の目的にとつては、戰爭が出来れば領土的利益を齎らさずいやうにすることが絶体的に必要である。さうすれば戰爭は經濟的領域に移されることになるが、この領域に於ては我々の優勢の威力を諸國民に認識させることは容易である。かゝる事態によつて面交戰國は、如何なる邊陲の地までも分散してゐる我々の手代運の

手中に陥つてしまふが、而も我々の手代達は何百萬の兵を自由に駆使して、國境によつて活動を阻止されることは決してないのである。その時我々の法律が諸國民の法律を抹殺して、現在諸政府の權力が國民相互の關係を律してゐる如くに、我々の法律が諸國民を統治することに在るのであらう。

行政官吏と極密顧問官、彼等の奴隸的能力に應じて我々が市民中から選んだ行政官吏は、決して行政能力を準備してはゐないであらう。それ故に彼等は、我々の將棋に於ては容易に「歩」に墮してしまひ、幼時から全世界支配のため教育をうけてゐた所の、訓練と天才とのある我々の顧問の掌中に全く收つてしまふであらう。諸君も知られる通り、之等の専門家は、その政治上の知識を我々の政治的計畫、歴史の教訓、現代の觀察等から取つて來てゐるのである。非猶太人は、歴史を基礎とする冷靜な觀察を練ることゝ知らず、吟味的比較行どほしないで結果のみを求め、やうな學的熟練を事としてゐる。それ故に我々にとつては、彼等のことを

意に介するとは無意味である。たとひ彼等が、いよくの時が来るまで、新たなる歡喜を希望して生きようと、過去の喜びを追憶して生きようと、その行事は問題ではない。所要存のは、科學の命令だとして我々が彼等に吹込んでおいたものを彼等が堅く信じ込んでは疑はないといふことである。それ故に我々は、始終新聞紙を利用して、かゝる命令に對する盲目的信頼を鼓吹する。非猶太人の利巧存連中は自己の知識を誇りとして、「科學」から得た知識を巧妙に實現しようとするのであらうが、然もそれの知識を論理的に吟味もせず、又その知識存るものが、人同を我々に必要存方面に教育するため我々の手代達によつて作り上げられたものであることには氣がつかないのである。

破壊的教義の成興。諸君は我々の主張を空論存りと思つてはいけな。我々が仕組んだ所の、ダーウイン、マルクス、ニールエの教説の徹底的な成果に注意存さるかまろしい。之等の教説が非猶太人に及ぼした破壊的作用は、少くとも我々には明白に存つて居なくては存らな。い。

政治上の適應力 政治と行政とに於て失敗を犯さぬために、我々はよく時代精神と諸國民の性格及び身分等を考慮に入れなくてはならない。我々の教説は、我々が接觸する諸國民の性情に適應させられなくてはならないが、その永續的成巧は、それを實人生に適應するに當つて過去の教説と現代の要求とを統合する時にのみ、得られるのである。

新聞紙の任務 現在の諸政府の手中には國民の中に思想運動を喚起する一大威力が握られてゐる——即ち新聞紙がそれである。新聞紙の任務は、必要らしく見へる要求を指示し、人民の訴を表現し、不満を表明し、また喚起するにある。自由に関する競争の勝利が、新聞紙に具現されてゐるのである。然し政府共がこの威力を利用することを知らなかつたので、それは我々の手中に歸した。新聞紙によつて我々は勢力を得たが、然し我々は身は背後に隠れてゐた。新聞紙のおかげで我々は黄金の山を掌中に收めたが、それが血と涙の流水から汲み取れなくては存らなかつたことを我々は氣に病みはしなかつた。

黄金の價格と猶太人犠牲の價値　それは多くの同族を犠牲にした。然し我々の側の一人の犠牲は、神の前に於ては、非猶太人千人の値があるのだ。

第三 議定

蛇の象徴とその意義　余は今日もう諸君に知らせることが出来るが、我々の定めた目的までは最早余す所幾何もないのである。この上を行少し歩けばよいのであつて、さうすれば象徴の蛇——わが民族の象徴である——の環は完全に接合する。この環が先づ接合されると、それはやがて全歐洲諸國を強力な箍で締め付けるのである。

憲法の不安定　宮廷を脅かす恐怖の亡霊としてのテロ　現代の憲法の天秤皿は尚も存く顛覆するであらう。何故といふに、我々はその天秤を、それが安定しない様にと、不正確に据えておいたからである。我々は、天秤の挺子が磨り減つてしまふまでその動揺を止めめやうに心を用ひてゐる。非猶太人は、天秤の竿を充分丈夫に鍛へたと思ひ、天秤がやがて釣合を取るであらうと期待しつゞけて来た。然し天秤を支へてゐる竿は、

かの無制限且つ無責任な権力を振ってあらゆる愚行をやつてのける民衆の代表者達によつて不安状態におかれてゐる。然も彼等がこの無制限且つ無責任な権力を獲得するのは、宮廷内に侵入した恐怖的行動——テロに依つてである。支配者達は人民の心を揺るがすことが出来ないので、人民と和解することは出来ず、また権力を求める野心家達から身を守ることも出来ないのである。我々が主権者の目に見える威力と大衆の目に見えない威力とを分離してしまつたので、両方ともその意義を失つてしまつてゐる。何故なら、どちらとも一方だけでは、杖を失つた盲人にも等しく、途方にくれるだけであるから。

権力と名譽欲 権力者達も疑つてその権力を濫用させるために、我々はあらゆる力の自由な獨立欲を伸張させることに依つて、それらの力を互に闘はしめて来た。この意味に於て我々は、あらゆる企業心を唆つたし、あらゆる黨派に武装をさせたし、またあらゆる野心の目的を支配力の獲得に向かわしめるやうにした。我々は、あらゆる國家を叛乱の巻

と化したのである。それ故にほん少しの辛抱をするならば、暴動と崩壊とは一般的現象と存るであらう。

國會の演説 倦むことなき饒舌家達は、國家並びに國家行政の會議を化して演説競技會の會場とした。厚顔な新聞記者及び無恥な護謄文の作者は、毎日、政府の代表者達を攻撃する。権力の濫用は遂には國家の基礎を揺がせ、その瓦壊を準備する。凡ては煽動された大衆の攻撃の下に微塵と碎け去るであらう。

宣傳用小冊子 諸國の人民は、奴隸制度又は農奴制度よりも激しい苦しみを與へる貧窮によつて困難な労働を宣告される。彼等は、奴隸制度や農奴制度からけろ水やこれやの方法で解放されることが出来たが、然し、この貧困からは到底脱することはい出来ない。我々は又憲法中へと大衆に對して空想的な意義はあつても實在しないやうな諸種の權利を挿入しておいた。所謂「民權」なるものは凡て空想界のものであつて、決して現實界に持ち来たされることの出来ないものである。

新聞記者が眞実の報道と一緒にあらゆる謔言を書集めることを許さず、
おるとかいふやうなことは、苦役に露命を撃いでゐる多忙な労働者達に
とつて何の役に立つであらうか。實際、憲法が労働者達に提供してゐる
利益といふのは、ほんの貧窮層パン層位のものであつて、このパン層も
労働者達が我々及び我々の代表者に投票してくれ、代償として我々の食
卓から投げ與へられるのである。共和國に於ける「民権」なるものは、貧
民に取つては實際の所たゞ苦々しい嘲笑であるに過ぎない。貧民には「民
権」も正しく行使する能力はない。何故なら、彼等は必要な生活資を
稼ぐにも足らぬ苦役に日々齟齬してゐるのだから。如何なる労働者も定
まつた報酬を眞実に當にするこゝとて出さないのである。工場主による所
出しや労働仲間の罷業に左右せられる身の上だからである。

貴族と成上り者 人民は我々の感化をうけて貴族の支配を破壊した。
貴族は人民の安寧の基礎と不可分の関係にある自己の利益に基づいて、

もともと人民のおのづからける擁護者であり養ひ手であつた。然るに貴族を滅してからは、人民は、成り上り者の成金連中の支配に立つやうになつたが、この成上り者連中は、労働者に無慈悲な奴隷制度の軌を謀するに至つたのである。

猶太フリー！メーソン結社の軍隊、我々は言はば労働者をこの奴隷状態から救ひ出す救済主の如くに出現するのであるが、それは我々が彼等を招じて我々の社会主義者、無政府主義者、共產主義者の陣營に引き入れるからである。我々は之等の方向の諸主義を原則上支持するのであるが、その際に我々は、我々の社会主義的フリー！メーソン結社の、普遍人間的義務に依つて制約される「博愛」の諸規則を表向きに着板にするのである。貴族が労働者の仕事を自己のものなりとするのは正當であるが、その為にも貴族が、労働者が満腹し、健康で、頑健なことを望んだのは自然なことであつた。

非猶太人の頹廢 然し我々は正にその逆を——即ち、非猶太人の頹敗

を欲する。我々の権力は労働者の永続的な栄養不良と虚弱とによつて保
持される。此の状態に於ては労働者は、最早我々に反抗する力も勇氣も
失つてしまふであらうから、我々の意思に屈服するに違ひない。
饑餓と金權 饑餓は金力に労働者を支配する力を與へるが、その支配
力は、玉の合理的権力が貴族に與へた力よりも遙かに確實である。困窮
とそれから出て来る憎悪とによつて我々は大眾を動かす。我々は群衆の
力を借りて、我々の進路を阻止者をすべて片付けてしまふ。
大眾と世界王の戴冠 我々の世界王の戴冠式の時日やつて来るや否
や、その同じ大眾は、存ほも我々の進路を遮ることの出来さうなものを
悉く掃き去つて呉れるであらう。
来、未のフリーメイソン結社系の小學校に於ける教授要目 非猶太人は
我々の科學的助言なしに物を考へることを忘れてしまつてゐる。それ故
に彼等は、我々の世界支配が達成された曉に我々が一步も讓歩すること
なく確保するであらう所のものが、如何に痛切な必要事であるかを認め

ぬ、即ち、小學校に於ては、唯一の眞実な科學、何よりも重要な科學、

換言すれば、分業を要求し、従つてまた人間が階級又は身分に分類

されることを要求する所の、人生の社會的構造に關する學說が説かれな

くては行らなないのである。また何人の頭にも必ず叩き込まれねばならな

いのけ、人間の各種の活動が平等でない重要さを持つ結果として、人間

の平等などは決して存在し得ないといふ事である。法律に對しては天々違

つた責任が生じねばならぬ。何故ならば、その行動によつて全階級を

害ふ者と、たゞ自分の名譽を傷つけるに止まる者とは、その責任も違

つて来なければならぬからである。

人生の社會的構造に關する學說の秘義、我々が非猶太人に秘してゐる

所の、人生の社會的構造に關する眞の學說の教へる所に依れば、精神的

活動も肉体的労働も一定範圍の人間の限らるべきであつて、然らざる場

合には、豫備教育と職業との間の不調和が人間苦の源と行るからである。

もし國民がこの學說を受け入れたとすれば、國民は自ら進んで主權と主

種が立てた國家秩序に屈服するであらう。科學が現状の如くであり、またそれが我々の興へた方向を取つてゐるので、人民は盲目的に印刷物を信じ、また印刷物に含ませられてある迷論を信ずるので、従つて人民はその蒙昧さのために自己の價値を誤認して、自己の上にあると思はれる階級のすべてに對して憎惡を向けるのである。

一般的經濟不安　あらゆる取引業及び工業を萎靡せしめる經濟的不安がやつて来れば、この敵愾心は更に大いに烈しくなるに違ひない。我々は、我々に可能である限りのあらゆる陰謀に、完全に我々の手中にある金力とによつて一般的經濟不安を惹起し、同時に歐洲諸國に於て勞働者の大群を街頭に投げ出すであらう。さうすれば之等の大衆は、その單純な心持からして幼少以来嫉視してゐた人々の血を進んで流し、その人々の所有物を奮ひ取り得るであらうと考へる。

我が黨は安全　然し我々の仲間、之等の大衆によつて襲はれることはたいであらう。何故なれば、我々には襲撃の時刻が豫め分つてゐるの

で、時期を失せず我黨の者の保護策を講ずるであらうから。

フリーメイソン結社の支配する所に理性の國あり我々は、進歩が非

猶太人を理性の國に連れて行くであらうと説明して来た。然し我々の強

圧政治は、理性的な峻厳さによつてあらゆる暴動を鎮圧し、國家生活の

すべての部門より自由主義を驅逐する手段を心得てゐるであらう。

指導者の追放、フリーメイソン結社及び佛蘭西大革命、人民は、自由

の名に於て種々の讓歩が與へられたことに氣が付いてからは、自己が支

配者であると信じて、権力を無理やりに手に入れた。然し勿論人民は、

凡ての盲人と同じやうに、数多き難因に突き當るやうになると、自力で

はその難因から脱することが出来なかつた。そこで指導者を探しに出か

けたが、以前の指導者の許に復歸することに思ひ到らないうで、むしろ

その全權を我々の足下に置いた。諸君は、我々が「大」の字を附けて呼ん

でゐる佛蘭西革命のことを思ひ起し給へ、この革命の準備の秘密はすべ

て我々には解つてゐるが、それは、あの革命は我々の手でなされたもの

であるからである。

シオンの血を享けた帝王。あの時以来我々は諸國民を幻滅から幻滅へと導いてゐるが、それは彼等が我々から離叛して、我々が全世界の王として準備してゐる所のシオンの血を享けた王を歡呼して迎へるやうに行ふことが望ましいからである。

フリートメイソン結社の鞏固なる立場。現代に於ては、世界的勢力としての我々は不死身である。何故なら、もし我々が或一國家から攻撃されるならば、直に他の諸國家が我々の味方になつてくれるから。我々の鞏固なる立場を促進して呉れたのは非猶太人諸國民の限りない卑劣さであつて、それは権力の前には叩頭するが、弱者に對しては無慈悲で、過去には嚴罰を加へても、犯罪は之を寛大に断罪し、自由な社會秩序の矛盾を我慢することほしたくないが、大膽な支配者の暴虐には殉教者となつては願ふ程の忍耐を以て對するのである。彼等は現代の獨裁者即ち首相や國會議長の權力濫用を忍耐してゐるが、しかしかやうな濫用の最小なものに

對しても首のニ十位は劍收兼雨まじい有様を示すこともあるのである。
 フリーメーソン結社の秘密連絡の任務。この奇妙な現象。即ち同一
 の外觀を持つ事象に對する大衆の態度が如何に首尾一貫してゐないといふことは、如何に説明されるのであらうか。その説明はつまり次の如くである。

即ち獨裁者達は手先を使つて、自分達が故意に國家を害してゐるのは一層高い目的の達成のためである。と人民の耳に囁かしめるのである。そしてその目的とは、人民の一般的安寧、博愛、相互的責務（協同）及び平等である。といふのである。しかしかやうなものの結合はたゞ我々の支配下に於てのみ組織されるであらうといふことは、勿論彼等に告げられることはない。かくて人民は正義の人を斷罪し、有罪者を無罪にする。また人民は次第に增長して、自ら欲することとは凡てなし遂げられるものと確信するやうになる。この様な事情の下に於ては、人民はあらゆる着実な發展を破壊して、一歩毎に新たなる無秩序を喚起して行く。

自由 「自由」なる語は人間社會を驅つてあらゆる権力と抗争せしめ、神及び自然の威力に對しても闘争せしめる。我々が一たび王座に昇るならば、我々はこの言葉を人類の語の中から抹殺してしまふであらう。何故なら此の言葉は、大衆を血を好む猛獸に化せしめる所の、動物的暴力の結晶であるから。然し之等の猛獸は、血を流してしまへば眠つてしまふので、さうなれば容易に鎖に繋ぐことが出来る。然し血を吸はせないので、おくときには、彼等は眠らないうで、戦ひ狂ふのである。

第六 議 定

非猶太人の安寧は猶太人の獨占權に依存す。固もなく我々は、巨大な獨占權を確保するであらうが、それはあらゆる他の人々の競争を排除して、我々の巨大財産となるであらう。非猶太人の大財産と雖もこの猶太人の獨占權に依存するであらうといふことは、かかる大財産が舊政府倒壊後の第一日に消滅してしまふこと、宛かもその國家の支配能力に與へられておる信用（國家信用）と同じであることを見れば分るのである。

余は本席に御参列の國民經濟學者達に對して、この思想の意義を正しく評價あらんことを御願する。

あらゆる手段を以て我々は我々の超主權の權力を伸張しなければならぬ。またこの超主權の方では、それが、自發的に我々に服従する者達の庇護者であり恩人であることを萬人に向つて示さなくてはならぬ。

第七 議 定

全世界の動搖、鬭争、敵對關係、我々は、歐洲全大陸及びそれを基點として、他の諸大陸に於て動搖、鬭争、敵對關係を惹起せしめぬばならぬ。之に依つて我々は二重の利益を得るのであつて、先づ第一にはあらゆる國家が、我々が何時でも思ふ儘に騷亂を惹起すること古の秩序を再建することもあるべきをよく知るやうにならぬので、我々を恐れぬやうに存るであらう。あらゆる之等の國家は、我々を目して止むを得ざる惡と見るに慣れてゐる。第二には、我々が政治的或は經濟的協約乃至債券の力を藉りて各國の國政機關に連結させておいたあらゆる連絡の未

を、我々自身隠謀に依つて纏水させるのであらう。この目的を徹底的に達成するためには、我々は口頭での商議に當つては、大いに老狡と奸譎とをもつて事を運ばなくてはならぬ。之に反して外面的には、即ち所謂公式文書の交換に於ては、反對のやり方をして、終始正直、迎合的な態度を示すであらう。我々がこの原則を弁るならば、見せかけを本物と思ふ様に慣らししておいた非猶太人の政府當路者や人民達は、將來も我々を人類の恩人又は救済主と考へるであらう。

第九 議 定

猶太秘密結社の獨裁政治 事實上我々にとつては最早何の障礙も無い。我々が我々の超主權を行使する形式は超法律的であつて、それは普通に專制又は獨裁と呼びならはされてゐるものである。余は充分の確信をもつて言ふが、我々は現在では唯一の立法者である。即ち我々は法の宣布もすればその執行權をも施行し、又處刑もすれば赦免をも行ひ、我々の全軍の司令官として馬上に颯爽たる姿を見せてゐるのである。當ては強

力であつたが今では全く我々に依存してゐる黨派の遺産を相續したので、いま我々を導いてゐるのは鞏固なる意志である。即ち我々は、抑へ難き野心、燃ゆる如き貪慾、假借なき復讐慾、用捨なき憎悪等を意のままに用ひ得るのである。

第十一議定

非猶太人は山羊なり 非猶太人は山羊の群であるが 我々猶太人は狼なのである。狼が山羊の群に侵入する時、その山羊の群がどうなるか、諸君は知つて居られるか。彼等は眼を開ぢて、ぢつと静かにしてゐるであらう。何故なら我々は、前以て平和の敵が悉く掃蕩され、また黨派ががすべて倒されてしまつてゐさへすれば、今迄奪つてゐたあらゆる自由の返還を約束するであらうから。しかし非猶太人が彼等の権利の再獲得を何時まで待つてあらうかといふ事は、今更改めて諸君に申上げる必要も、あるまいと思ふ。

「フリー・メーション」に就て（為革命的に独立を主として）

「フリー・メイソン」は全世界に會員を持つ一大秘密結社であつて、猶太人が其の首腦をなす。猶太人の爲に畫策すると云はれるものである。諸源から云へば中世の「石工の組合」であるが、其の起源は可成古いものと思はれる。階級地位民族宗教の別なく教養ある同志者を参加させたといふ。之はまづ「ロージユ」(希伯來語の事務室といふ言葉から来てゐる)が基礎になり禮拜堂である。此處で一種の禮拜が行はれるがそれは「兄弟」即ち會員にしか知られず外部の者には秘密になつてゐる。ロージユ若干集つて「聯合」となる。聯合には大ロージユがある。聯合内の會員は秘密な合図・合印・合言葉があつて互に其の所属員たることを知る。之で他のロージユにも出入出来るのであるが、尚出入許可證が與へられる。ロージユの會員は正規的なロージユの行事に努めなければならぬ。即ち眞理を探求し、偏見迷信激情を離脱して人道主義同胞主義の實現に盡力する。又啓蒙慈善の事業を行ふ。佛蘭西や伊太利のロージユでは法工廷の干渉に對抗して政治的運動を加味したけれど、十九世紀の獨逸のロー

ジユは社會事業の遂行に重点を置いたと云はれる。儀式禮拜も以前は統一されておたものだらうが、後に存ると地方により國土により餘程相違を生じて来た。だから獨逸にも幾種かの分派があつたやうである。フリー・メイソンは石工組合時代、其の本部はストラスブルクにあつたといふ。最初建築上の技術に關し、自由を見解を執る者の結社だつたのが、其の後建築にかぎらず、一般技藝家美術家にして加入するものも出て来た。しかし現今の意味のフリー・メイソンは一七一七年倫敦に成立したと見ていい。此の時四個の職工組合、即ちロージユが合体聯合して大ロージユを成したのである。之は「人類愛、真理の探求、公正の行動をモットーとし、教會的拘束を脱し、あらゆる方面の人士を網羅して人生の至宝を擁護する」ものであつた。一七二三年に存つて説教師のジエムス・アンデルソンは「制度書」を編した。これがフリー・メイソンの憲法と存つたのである。

此の結社は驚くべき速度を以て諸國に傳播し、獨逸ではアブサロムと

いふものが一七三七年、ハンブルクで最初のロージユを設けた。普魯西
のフリードリッヒ大王もその大子時代此の結社に入會したと傳はつてゐる。
ともかく伯林に「ツト・デンドライ・ウエルクウゲルン」といふロージユ
の出来たのは大王即位の年、即ち一七四〇年であつて、之が獨逸に於け
る「大母胎ロージユ」となつたのである。大王は恐らくその教會的臭味
を脱した啓蒙的人道主義的存点に興味を覺えたものであらう。

フリーメイゾンの初期には猶太人が加入してゐなかつたといふ。之は
當時猶太人が完全なる市民でなく、所謂「半市民」であつたからだと思は
れる。しかし成立の當初から既に猶太教的色彩の可なり濃厚だつたこと
は否定しがたい。例へばロージユの語源は希伯來語であると言ふが、其
の模範は實にイエルサレムのソロモンの殿堂であつて、ソロモン王は一
七三〇年フリーメイゾンの元首といふことになつてゐる。また神殿、祭
壇、^{ブデスラーゲ}約櫃、廊柱、七本立の燭臺、毛氈「ヤコブの天梯」、^{ダブイデの星}「
等孰れも猶太教に由来するものであり、合言葉も多数希伯來語から来て

あるといふ。紐育の猶太系新聞（ジユウイツシトリビューン、一九二七年十月二十八日）は「フリー・メイゾンは猶太教に基く、フリー・メイゾンの儀式から猶太教の要素を除いたならば何物も残りはない」と公言してゐるが、之は如何なる事情によるか、察するに英吉利のフリー・メイゾン創立者は教會的拘束の煩はしさに耐へず、基督教的名稱や設備を特に忌避したが、さて之等に代るべきものは他に求めがたいので、猶太教のものを採用するといふことになつたのではあるまいか。

フリー・メイゾンは短日月のうちに世界的に擴がつた。そして次第に猶太人の加入者増加し、其の勢力が實權を握るに至つたことは事實であらう。遂にフリー・メイゾンは猶太人の世界的陰謀の策源地であるとの非難さうけるやうになつた。此の政治的祕密結社は亜米利加の獨立戦争、佛蘭西の大革命、並に十九世紀以来の諸國の革命に重大なる關係があるといふ。之は早くから廣く喧傳されたと見え、一八四八年に其の會員たるフオニクニツゲはフリー・メイゾンの猶太人に左右される危険を危惧

し、「猶太人はフリー・メーゾンを彼等の帝國建設の手段と見做してゐる」と警告した。今フリー・メーゾンの會員たる猶太人で爾後の革命に關係あるものを擧げらば、二月革命及び第二共和國で活動したクレミューを初めとし、續いて佛蘭西政界の大立物だつたガンベツタも猶太人の血統を引いてゐる。一九〇九年西班牙に起つた内乱で活躍した無政府主義者フェラー、一九一六年埃太利の首相を暗殺したアー・ドラーも其の例であらう。一九〇七年・一九一〇年の葡萄牙の革命、一九〇七年・一九〇八年の青年土耳其黨の叛乱、一九〇五年・一九一七年の露西亜の革命、及び大戦末に於ける獨逸埃太利ニ帝國の瓦解もまた彼等の所業といはれるのである。

獨逸のフリー・メーゾンは最初から世界的國際的にフリー・メーゾんと聯絡してゐたのであつて、大ロージユも其の主長も外國の大ロージユたり主長たりと緊密の關係を保つてゐた。

一八七〇年佛蘭西のフリー・メーゾンは獨逸のロージユの「兄弟」たる

普魯西王ウイルヘルム及び太子フリードリッヒを、ある「ロージユの裁判所」で缺席裁判の下に罰金を課した。フリー・メリーゾンは極端國粹主義・狂信主義・階級主義を排撃するものであるから、獨佛同風雲の急を告げてゐた當時之を理由としたものであらう。兎も角之が爲に獨逸のロージユは、佛蘭西のロージユとの關係を絶つに到つた。が一九〇九年に存つて元の關係に復歸した。また佛蘭西のロージユは神の名を儀式の時に省いたといふことから他の諸國のロージユは佛蘭西のロージユと絶縁したこともある。之も其の後妥協が成立したやうである。かやうに各國のロージユ間、時としそ分離分裂の機會もないではなく、然もそれか國民意識を伴ふことは注意に値する。然し何時しかまた聯絡が保たれる。そしてこの場合猶太人は数も多く重要な地位を占めてゐるといはれる。

獨逸のロージユでは一八四四年頃から猶太人の會員が著しく増加したといふ。伯林を除いた他のロージユでは人道主義を高調して猶太人を全然平等視したが、伯林の三大ロージユは基督教徒に限り加入を許した。

。之は反猶太主義者の非難に對處したものだといふが、それでも「吾々は猶太人を憎むものでない」と救次辨明を試みてゐる。一八八一年獨逸の大ロトジユ聯合は「あらゆる反猶的、不法を排撃し之に對抗するを以て義務とす」と宣言した。しかしフリー・メイゾンは一八八〇年代の反猶運動に積極的有對策を講じた譯ではなかつた。だが人道主義、平等主義、平和主義を標榜するフリー・メイゾンは猶太人にとつて恰好の避難所たることはいふまでもない。彼等が此處に勢力を樹立し、そして彼等に有利に運用發展せしめやうと努めたことは容易に想像されるのである。それが一九〇一年に存ると猶太人フレインデルは次のやうに述べてゐる。「人道主義の爲の戰爭よりも寧ろ猶太主義の爲の戰爭がより重大である。この場合猶太人が指導的勢力として働くのであつて、獨逸のフリー・メイゾンがその下働きを勤めなければならぬといふても驚くことはいない。事實上猶太人は暗々裡にはあるけれども巧に歐羅巴の多数の大ロトジユに於て指導的地位を占めてゐる。獨逸に就いていへば猶太人が金融界商業界を支配

配し政治的新聞、フリー・メーゾンの新聞を支配し、数百万の獨逸人を驅使してゐる。更に進んで司法權をもその支配下に置かうといふところまで行つてゐるのである云々。之を要するにフリー・メーゾンは精神的方面でも實際的方面でも猶太人と利害を共にするものなることは否定し難いやうである。彼等は舊教を脱して人類の新しい社會を建設するといふ。然しその新しい社會は即ち猶太人に有利な社會を意味するものと見なければならぬ。そして猶太人の勢力が内部に於て指導的地位を占めつゝあることも容易に窺はれるのである。

獨逸のフリー・メーゾンには以前から知名の人が加入してゐる。そして國民意識の熾烈だつた自由戰爭時代の名士、而も猶太人嫌ひで有名な人々の見えてゐるところは面白いと思ふ。即ちファイヒテ、ブリュンベル、シヤルンホルスト、シタインなども加入者である。ハルデンベルグの會員だつたことは怪しむに足らぬ。普魯西の王家ではフリードリッヒ大王以下、皇帝フリードリッヒ三世まで歴代の君主が加入してゐる。つまり獨逸の

フリー・メーゾンは猶太人の色彩の見え出したのは十九世紀中葉以後であつて、特に猶太人が勢力を振ふやうになつたのは十九世紀の末年からのもやうである。

第八章 回教勢力圏

第一節 序 説

回教は世界三大宗教の中最も新しいものとして、それは股從——信者達のアラ— *Allaha* とそしてその予言者への股從を意味し、教祖モハメツド *Muhammad* のプリミティブな説教、又それと稍異なるが最近のオーストックスな組織、又現代回教徒の民族宗教を示すものである。然し回教は宗教としてよりも以上にそれは、少くともその一部分は嘗ての巨大な東洋の世界帝國の一つに實現され、そして数々のセパレートした諸国——現代の回教圏に括べつた——に實現された政治的又法理的理論を意味してゐる。回教は又文化的全体を意味し、回教國家の概念と回教文化の教義はその宗教上の基礎からその權威を導出したが故にそれは宗教と國家とを包含してゐる。イスラムの理想は生活全体を支配する宗教的規制である。それは世界觀として信者達の生活の道である宗教としてイスラムの文化はその

文化はその
こと。

基礎に於いて、その様々な様相に於いて中世紀のキリスト教文化を緊密に
二八二一
関係して、そして又同じ根源に由来してゐる。

第二節 回教總説

イスラムはアラビヤに起きた、そこではモハメツドの出た時代には異教はその精神的支配を失墜して居り、異教の儀式は傳統の一部として行はれてゐたに過ぎない。主として彼等の経済的價値の故に毎年メツカへの巡禮、聖月の遵守として。モハメツドの時代より以前に於いてさへ、幾らかのアラビ人——所謂ハニフ/Idrakkaと云はれる人々——はエタヤ教とかキリスト教に帰依することなしに異教から轉向してゐた。一神教的傾向の促進は之等二つの宗教——アラビアはその数多き支持者を有つ——の影響に依つて助長されたのである。主としてアラブ系統の改宗者としてのユダヤ人は、西部アラビアのオアシスに緊密な集団をなして居住してゐた。キリスト教は一般に優勢ではあつたけれども、ローマ及ペルシヤ帝國に依つて起きた *Christian-Arabs* から北及び東に拡つたのである。直ちにそれに続いたモハメツドの時代にはアラブは数多き個人的

なる神の中に普遍的な性格の最高な神として認められ始めたのであつて、
 モハメツドの説教はアラーへの彼の崇拜からではなくなり、アラーへの
 排他的な崇拜に基づく彼の主張の故に反対が起きた。斯くてモハメツドは
 メッカの回教的崇拜に限定されざるを得たかつた所のその本質的な古い
 形態を留保したのである。即ちカーバ *Caraba* の崇拜、近隣の聖廟、所
 謂アラファ *Alafat* のハジ（巡礼）*Hajj* 等は共に回教の巡礼の主要な
 要素を形成した。七世紀の初頭から回教は省みられぬ崇拜としてではな
 くして、典型的に開化された、單に外部的にアラビアの異教に影響され
 た所の都市的な宗教であつたのである。然しながらそれは特にその支配
 的な民族精神が強く傳統に束縛されてゐたそのアラビアの社会に深く影
 響された。イスラムの主要なる宗教的教義はユダヤ教と異端者のグノス
 テイツクなキリスト教から由来した。モハメツドがその何れかの宗教の
 正確な智識を具有してゐたとは主張し得ないとしてゐる、モハメツドはユ
 ダヤ教徒やキリスト教徒がモーゼとイエスから既に受けた神の啓示をア

アラビア人に宣明する必要を感じた。そしてコランはより初期の聖典のアラビア語の出版としてそれは一般の強烈な支持を受けたのである。ユダ人が彼を予言者として認める事を拒否した時に、モハメッドは彼等ユダヤ人の聖典は誤ってあるものなる事を確信するに至った。依つて彼は彼等に反対してアブラハムに助力を求めて祈念し、そして *Islam* 未だ腐敗せざるアブラハムの宗教を再興し喧傳する様提言したのである。アラビア人の異教に取残されてゐた諸儀式はアブラハムの宗教の原因となされたものである。之等の段階はユダヤ教とキリスト教との向に的確な限界を示した。モハメッドはイスラムとして其等と同様に啓示の形式としてそれを認める事を止め、イスラムのみが唯一の眞の宗教である事を宣明した。

モハメッドの説教の出發点は彼が最初に焦眉のものと考えた、若しメッカの住民達が戒律に服さなければその経済的活動は中止されるべき審判の日の概念である。審判者はアラブ一其の人である。此の末世観から一

神教の信仰が由来した。人はその全能のそして慈悲深きアラトーとの関係に於いて奴隷である。コーランに於て宿命と自由意志とは交互にその場合／＼に應じて強調されてゐる。之は後に意志の自由の問題を起したものである。コーランの予言の中に、——統一的な一つの啓示の循環的な更新の督識的な概念が物語られてゐる——其処には外典の教義に依った内容の特殊の形式のキリスト教義が示され、それは根本的に *prophetic* であり、イエスの神聖を否定してゐるのである。モハメッドにとつては彼の予言者的使命の確信が最初に彼の説教の唯一の前提であつたが、後にそれは基本的なドグマに迄発展した。彼は神の啓示の宗教の本質的な要素を聖書の保存、神の奉仕に於けるその聖書の使命と考へたのである。此の理論からコーランの意義が導出されて来る、その真正さと完全さが他に比類なきコーランが。コーランとはアラビア語で書かれた、それは現実の形に於いては天上の原本の其れと全く同一の再び造られたものと思はれると云ふ意味に於いて、それはアラトーの未だ創られざる言葉である。コ

ーランに於けるアラビア語の使命はイスラムの本質的にアラビア的色
 彩を決定すると云ふ事に於いて重要である。宗教的信條の源泉として、
 それは *Haditha* — 傳説に描かれたものとして、予言者の生涯 *Sirowat* に
 依つて補足されてゐる。スンナの後割はイスラムに於いてはスンニト
Sirowat はオーソドックスと同義語であると云ふ事實に依つて最もよく
 例證される。モハメウドの宗教的權威は、コーランの叙述を越えて問題
 とせられざるを得ず、
 彼の死後直ちに人々は彼をモデルとして
 引出し始めた。其の向に宗教的制度や信條はユダヤ的なキリスト教的又
 ペルシヤ的影響の下に発展し続けたのである。若しイスラムが独立の宗
 教としてのその位置を保持したならば、それは之等の要素が何より先づその予言者
 自身から発した傳説であつたと主張した事だらう。最後に幾多の論争を
 惹き起す様々な立場を綜合する方法としてそれ等の要素をモハメウド
 の言葉に歸するより以外に良い方法はなかつたのである。その最初の二、
 三世紀の流れの向、イスラムに吸収された一切のものは、予言者のスン

ナとして巨大な物語として残され、そして *Apocrypha* の形にされ、其の結
 果として傳説の眞の中核は、殆んど全く隠されたのである。九世紀に權威
 ある結果が耳で傳へられた巨大な量の傳説から造られたのである。元來
 イスラム的信條は非回教に對する辯疎として役立つのみならず又古い形
 式の權威に對しては方向づけられたものである。ドグマの問題は政治的
 な論争にも關係して提起された。八世紀からの最初の神學派は所謂 *capitales*
capitales のそれであつたが、彼は多くの細かな問題についてその力を注
 いだ。部分的にそれ等は純粹にドグマライクな性格——神の統一に關
 する問題、神なる言葉の非創造的な性格、意志の自由に關する問題として——
 のものであつたが、彼等の取扱はキリスト教徒の向に於けるドグマの論
 争の影響を現はしてゐた。意志の自由の問題と半政治的な問題は極く簡
 單な形で所謂 *Monothelites* の *Monophysites* の如き學派に依つて極く早く
 も取扱はれてゐたが、然しイスラムの神學は *Monothelites* の無駄な努
 力がギリシヤに起源するその洗練された弁證法的技術に依つて傳統的な

權威と致した時代、即ち十世紀迄完全な発達を遂げなかつた。十一世紀にイスラムはその將來の経路を決定した所の明確な形式を凡ゆる本質に於いて達成したのであるが、^{そのオーストリアックスな組織は発達したものである}その進歩は全く止みはしなかつたけれども、そのいや増しつゝあつた固定化と停滞との程度はその智的生活に於いて明白となつて来た。その時代に到達した発展は要素的なとして究局のものとして一般に認められた。凡ゆる刷新は相容れぬものと見做された。正統派の回教の信條を性格づけた法式化と固定化はその早期に於いて神秘主義の方向に於ける反動に導いた。神秘主義 *Mysticism* の古典的な発達は一主として九世紀の向に起されたところの——その特色としての苦行の性格を伴つたキリスト教的なグノーシスタイプなタイプのイスラムへの侵入、現世的な善と行爲の否認に導かれた神の愛と世界からの後進を示したのである。その後の進歩に於いて三つの主要な傾向が明白となつた。第一、人格の放棄と法悦に依つて神秘的な統一への努力である。第二、神の秘教と多くの人々に依つて企てられた法則の安易なる無視に導

かれた個々の人々の救済に対する欲望である。そして第三に、古代の哲
 学との融合、神秘主義が智識的となつた結果として、オーソドックスな
 ドグマと法則と緩和された神秘主義との融合は、その影響が現今迄存続
 してゐる所のアール・ガザール *Al-Ghazali* 1058-1111 に依つて齎らされ
 た。オーソドックスならざる神秘主義は過激と誇張に向つたのである。
 十二世紀に神秘主義をポピュラーにした宗教的法則が樹立された。彼等
 は古代の風習の崇拜集團の後継者であつた。そして聖者への尊崇に伴つ
 てポピュラーであつたイスラムにその地方的な色彩を與へたのである。
 神秘主義からの反対の極にはオーソドックスな教義でさへも不満であつ
 た所の傳統派が起つた。

此の学派はイスラムをして其の初期の清淨さに取りかへさうとしてス
 ンナと云ふ的確な概念を提議した。――すなはち予言者の教説と彼の信者
 の生活とに――勿論如何なる歴史的な正確さを以てではなくして、それ
 らはその傳統を裝飾する所にある。此の学派の強力な支持者 *Am-Taqi*

彼は彼が一神教から出発すると宣明した所の予言者と其の信者の崇拜に対してばかりでなく神秘主義のドグマと教説の法式化に猛烈に反対した。彼の主張はワッハイブ *Wahhaibites* の宗教的・政治的運動によつて取上げられた。

右の向にイスラムを変化させたこれ等の一般的な宗教的傾向にかゝて加へてその初期からその精神的・政治的統一を脅かしてゐた所の幾多の宗派が起つた。彼等は宗教的・政治的動機によつて起られたのである。それは神政において充分ではあつたが。——モハメット死後直ちに發表したまだ彼が *Omraiyah* の部族モハメットの部族に属してゐたかどうかを留意せずしてカリフとして最も價値ある人間の自由選挙を要求した、そしてそのリーダーを守るべくコミュニテイの権利を主張しもし彼の義務を脅かしたならば彼を廢位しようとした所の *Kharajites* (分離派) のそれであつた所の第一の宗派である。あらゆるイスラムの宗派の様によつて幾つかの分たれた派に分裂した彼等の反抗は國家に眞面目な関心を興

へやうとしつづけけたのである。

Kharigistes は一時北アフリカを支配し、そして彼自身のコミュニティを建設した。今日彼等の僅かばかりの後継者、*Hadrites* は北アフリカ、オマン、ザンジバルに住んでゐる。

デモクラティックな *Kharigistes* とは反対の極に正統派 *Ortodox*、予言者の従兄弟、アリーの徒黨があつた。彼等はあらゆるアリーの崇拜者達を包含し、彼等はオースドックスな崇拜者達から非イスラム的な偶像崇拜を、する人々に追及んだ。

極く初期に其の議論はアリーの後継者達の向に拡がり始めた、予言者の従兄弟であるアリーは回教國王の位を興へられた。之は基本的な *Shiite* のドグマとなり、そして、*Shiite* 回教から *Sunite* を分離した。アリーとその後継者の不幸は、それは大部分彼等自分のなした事であつたけれども、「予言者の家族」に対する尊崇を増したのみである。数々の *Sunite* のグループの中でその温和な *Sunites* は、彼は丁度正統派の限界に

たのであるが——古いアラビアの *Shiite* を代表してゐた。彼等は最初の三人のカリフの地位を認め、そしてアッリーとその後継者に其の次のカリフの位地を限定した。併し彼等はより極端な導師 *Muram* の理論を否認した。彼等は九世紀以来南部アラビアに存続した。アラビアの外に *Shiite* は回教徒の人々の間に革新的な又異端者のな凡ての傾向に対する集中点となつた。彼等の基本的な理論は *Muram-theology* である。彼等が好んでユミニユニティのリーダーと呼んだ最初の *Muram* は予言者自身に依つて名付けられ、最初の三人のカリフに依つてその権利を得た所のアッリーであつた。*Muramate* は彼の後継者の手に落ちた。この相続者の系統の問題は数多くの黨派の分裂を起したのである。*Muram* は罪過なき特別のインスピレーションを享けたものとして神の意志の權威ある理解者であつた。*Muram* の *Summa* はアッリーに対して罪深き予言者の聯合の *Summa* の代理を務めた。

一般的同意に依つて治められた *Muram-theology* に反対して、*Shiitism* は

権威ある教会を代表した。迫害は主として宣傳を秘密ならしめるために *Shi'a* を限定し、殉教の空気をそれに喚へた。 *Umayyad* の苦難を斯く獲得された後者の救済の概念は支配的な統制を確守した。凡ての *Shi'ite* の反抗の失敗の後に最後の *Imam* は奇蹟的な仕方て消失し、彼が救世主 *Mahdi* として後帰するだらう時を期待し、イスラムに於ける秩序を復興すべし正しく導く所の人」と云ふ確信が起きた。 *Turkic* 又は *Iranic* 部——主としてペルシヤ、イラク、インドに居るその後継者の大部分のものを有った所のもの——と *Shi'ism* 又は *Umayyadites* との間の分岐は *Shi'ites* の派の主要な分岐であつた。彼等は彼等が認めた所の *Umayyad* の数に依つて分たれた。 *Shi'ism* は予言者の最後のものとして *Mahdi* がモハメツドの著作を完成した所の主義を擁護した。

この主義に対立してモハメツドの使命の窮極的な性質に關するイスラム的な確信が起きた。 *Agha-Khan* の下にインドに存続してゐた *Khoyas* と同じ *Assassins* の *Bohras* は *Shi'ism* の分派である。

余りに極端でイスラムの一派として見做す事が殆んど出来難いやうな
一般的な信条から遠く離れた所の他の *Shiite* は *Druses* であり *Nuassites*
であり *Alawites*, *Al-Isahlis* であつた。

宗派的運動は國民的傾向の直接の表現ではなかつたけれども、
いづれ彼等は國民的な経済的な対立が屢々表現された所のその形式を採つ
た。パルシヤ人の向でこの対立は主として *Shiiticism* に表現された、北
部アフリカの *Beberis* の向にそれが全く異つた形式を採つた間に。

Shiite Isivites の成功 *Amoravite* と *Almoravide* の運動成長と同
様に *Khangite* の概念の拡がりには相當に *Beberis* の反動に依つて影響さ
れた。

最初に *Mevians* を獲得した *Shiites* は *Mahdi* の概念は *Drumites* に
依つてもつと変へられた形で引継がれた。彼等にとって彼は單にモハメ
ッドの後継者であり、そして彼は其の時期の終りに回教国王の理想を果

し、そして正しく導かれたカリフの傳統を傳へる人なのである。Mahdiの文字は漸次に政治学の領域から末世觀のそれに移された。にも拘らずイスラムの歴史は *Spivite* と してオーソドックスな *Mahdi* の反標に充ちてゐる。Mahdiのその期待に於いてオーソドックスな理論は最初の四人のカリフ以来イスラムの全政治史の其の非難に最も鮮明に現はれてゐる。

然し如何なる国家も宗教に依つて全く支配されなかつたと云ふ否認は現實に於いて非常に寛大な許容に依つて伴はれてゐた。此の出發は現實的條件に強制されて——特に政治的分野で——發展した、そして歴史的なペシミズムとアラ一の測り知るべからざる意志への尊敬に依つて育くまれた。斯くて人け如何なる支配者にもはつきりと服従すべく命令された。たとへ彼が不法にもその権力を獲得し、使行したとしても。

回教徒の大多数は一世紀の劇オーソドックスの組織を考へた。そして今日それをイスラムの唯一の正統の形式と未だに見做してゐる。それは

イスラムの全宗教的教義を包括し、そしてイスラム的コミュニティーの宗教的意識とそしてその *Catholic institutional* の表現である。或る意見と習慣とは最初に暴力を以て反撥したけれども、一度彼等がコミュニティーの相当な派に浸潤させられたとなると彼等はオールドツクスなものであるとの困難なしに認められた。コミュニティーの確信がオールドツクスなものと刻印された所のイスラム的精神の表現が認容し難きものであったと云ふ事を主張した人々はオールドキシイとの断続と云ふ罪を受けた。オールドキシイの内容は絶対に誤まらざるを以てイスラム法ばかりでなく全イスラム的宗教が基礎を有つ普遍的な同意 *Sharia* の内容と同一である。その説明者は凡ゆる時代の神学者達であった。と云ふのはイスラムは *Sharia* を建設するための如何なる宗教会議も他の機関をも有たなかつた。其の役割は既往に遡る又追証的なものである。 *Sharia* はそれが革新を探り入れるのではないけれども、その革新を適法化する。 *Sharia* はイスラムの或程度の進化を許容するが、然し同時にそれを一定の制限内にそれ

を守る。斯くてそれはオーソドックス——中庸を得た神秘主義と、予言者と、そして聖者への崇拜として——たる事を認められる。ユミユニテイの意識の表現として、オーソドキシイの概念は流動に従ふが論理的に無制限たる事、ない。然しなから、基本的な教義は、それが公的に定義されなかつたものであつてさへも特殊な固定性を以て、ユミユニテイの意識に根を下ろしてゐる。

イスラムの本質的なドグマは、世界の創造者、生んだのもなく、生まされたのもなく、何ものも之に同じきものない、アラ一の絶対的な統一への信仰である。アラ一は彼の永久の運命に依る世界に於ける凡ゆる出来事と同様に人間の凡ゆる行為の原因となる。と同時に人々は自由な行動をなす事が出来る、と云ふのはそれが報ひられ又罰せられる故に。奇蹟に依つて公認された予言者の中最後の最も輝かしいものはモハメッドであつた。他はアダムであり、アブラハムであり、モーゼであり、デイヴィドであり、ユダであつた。予言者について聖者がある。理論的

な歩寄り——それに依つて正統派回教は聖者の崇拜を認め——それはイ
スラムにとつては元々全く異教のものであり、そして既存した民族宗教か
ら由来したものだ。理論的な妥協それは大多数の人々の宗教的必要性に
負うてゐた。

斯様な妥協はモハメツドの出現の後にも可能だつた——コーランと
矛盾して、それは超人的な特質を賦與される様になつた。＝

此の過程は極く早い年代に始まり、そして神秘主義と奇蹟に対する一
般的な信仰に依つて伸展された。其の時以来予言者は凡ての聖徒の首長
として立つ様になつた。宗教的制裁を有つ魔術及魔除けは一般的な世界
に重要な要素を形造つた。審判の日の主要な標章は反基督の *Mohammed* の、
エダへの復帰の様相なのである。予言者が彼の会衆のメンバーに執成す
審判の日は天国と同じく地獄が詳細に表現されてゐる。重大な罪を犯し
た信者は必ずしも不信心者にはならず、不信心者が永遠の地獄で罰せられ
てゐる間に、信者であつた極悪な罪人は永遠に地獄には残らぬであらう。

主要な宗教的の命、所謂「イスラムの柱」は五つに分けられる。(一) 信仰の告白 *Shahada*、(二) 儀式的礼拝 *Salat*、(三) 断食 *Sawm*、(四) 喜捨 *Zakat*、(五) 巡礼 *Hajj*。人は次の忠誠の宣誓を暗誦する事に依つて回教徒となる。「アラ」以外に神なし。モハメツドはアラの使徒なり。一般的に行はれる *Wisemission* は義務ではない。忠誠は信條の信仰と宣誓とに存する。イスラムは明白に法則の宗教である、そして全体として神の命令に忝ずることは忠誠よりも寧ろ強調させられた。個人的な祈禱から明確に区別される儀式的祈禱は回教徒の主要な外的特徴となった。それは行體の運動、コランの暗誦、宗教的 *Prayer* から成る、一日に五度メツカにあるカーバの方向に対して履行されなくてはならぬ。金曜日の日中の礼拝 *Salat* はイマム——二つの説教を読む——の指導の下に共同の奉仕として行はれる。之を除いては金曜日とは他と同じく労働の日である。断食日 *Ramadan* の月の間曉より日没迄の義務であり、食物、飲料、香料、煙草、性交から全く節制させられる。施與の税はその種類

に於いて最も上位の税であり一年に一度賦課され、その上り高には確實な慈惠的な目的のためにも支拂はれる。それはモハメウドの在世中に施し物を興へると云ふより初期の義務から發展した。そしてその言葉の有つ西方の意味に於いて国家の租税よりも寧ろ教会の取るに足らぬ税である。個人的な慈善に附加へられて賤に薦められそして廣く行はれた。どの成人した回教徒も彼の生涯の中若し彼が出来るならば一度はメソカへ巡礼に行く義務を有つ。*Jihad* を実行する義務、不得心に対する神聖な戦は殆んど六つ目の柱として受け入れられ、今日廣く一般的に承認されてゐる。イスラムのコミュニニティの凡ゆる非イスラム的コミュニニティに対する關係は一つの戦であり、それは單に一時的な利益を理由として休戦に依つて中断されるかも知れないが、それは全世界のイスラムへの屈従を以てのみ目的とすると云ふ假定に基づいてゐる。イスラムの初期に於ける戦争の精神の迸溢に対する反動として一偉大なる神聖な戦の教義が——それ自身の情熱のための戦闘より成る——後に發展した。

イスラムは僧侶もなく教会組織も有たず、その言葉の眞の意味に於ける聖餐式もない。神学者は單に神の法則を知る所の人々である。彼等は眞の僧職のカストを構成しない。にも拘らず、彼等は相當の影響を有つ、それは普通の回教徒にとつてはその法則に従つて生きる事は不可能であつてさへも、その代表者に彼が示す恭順に依つてそれに対する彼の尊敬を表現するが故に。更に正統派は個人的な靈魂を導く必要を論議し、そして精神的な指導者の役割を演ずる *Sheikhs* の宗教團長の活動を嫌惡する。イスラムは人々を通して神の慈悲の如何なる宗教制度をも認めざる事は出来ない。

中世キリスト教の如く、イスラムは来世の宗教であり、禁欲的な要素を有つてゐるが、それは現世への特色ある根元的な愛を抑へる事は出来なかつた。それは修道院制度の棄却に示される。そして結婚への自然的尊崇にそして商業と現世的な財産への積極的な態度に示されてゐる。然し大体に於いて否定の精神が溢がり、婦人に対する警告、裸体の禁止

礼拝所以外の豪華な建造物の禁止、宗教に基礎づけられた節約の倫理、主要な商賣に於ける投機を有罪とすること、手仕事と貧困の稱場に不され
てゐる。其の他の宗教的指令は屢々音楽、生物の *Postivny* の強化され
た禁止、酒と豚肉の絶対的禁止である。質素にそして節約的に生きんと
する義務、凡ての活動を只神と云ふ見方から律せんとする義務、人はこ
の現世への單なる訪問者であると云ふ——感情から起る不幸に堪へんと
する義務。然しなから東洋の廣く弘布されてゐる宿命観は宗教に基くも
のではなくして、それは教育に、氣質に基くものである。凡ゆる人間は
アラビの奴隸であるといふ意識は宗教的同胞と云ふ強烈な感情であると
共にそれは大きな社会的重要性を有つ意識である。外部的には之は強固
分離主義と強調された宗教的プライドとに照応する。

今日迄イスラムを特徴づけた政治的性格はモハメッドが單なる予言者
でなく、メウカからメデイへの彼の移住の時代から彼がその信者達の論
議の余地無き現世の指導者であつたと云ふ、事實に主として依存してゐる

る。そのメツカ時代には宗教としてのイスラムの弘布は専ら予言者の宗教的情熱と、その教團の確信に基づいてゐた。然しそのメデイナの時代に於ては、その強調強化はアラブの宗教人の転換よりもその予言者への屈従に置かれてゐた。教多き決々の個人の改宗として全部族の改宗でさへもそれは政治的性格のものであつた。イスラムの宗教の弘布はつれてメデイナの覇権は松亮された。此の政治的構造はアラブの部族的統一をくつがへした。部族に於ける成員よりも寧ろ明確な標識を予言者の認識たらしめんとする事に依つて。にも拘らず部族の感情は強烈に残り、そしてそれは専らコミニティを一緒にした所のモハメツドの人間性に存したのである。族長は彼等自身モハメツドにのみ結びつくものと考へられた、そして彼の死後國家と宗教とはその分離を脅かされた。それ故に確實な勢力のある予言者の仲間には專制的な原理の維持を達成するに成功した。そしてその下に彼等の中の一人が最初のカリフに選ばれた。即ち特に予言的なる所を除いてモハメツドの機能の凡てに於いてその後継

者として、政治的な指導者は分捕岳に対する様々な種族の欲望を共通の目的——イスラムの弘布に対する神聖な戦い——に集中する事に成功した。初期に於ける *Jihad* の教義の拡大せる発展は戦争の精神は凡ゆるものを犠牲にして奨励された事を指示する。

然しながら回教國の拡大は宗教的情熱に帰せらるべきではなくして、寧ろアラビアから周囲の文明化された國々へと拡がった所の人々の大移住と云ふ言葉で説明されねばならない。之は斯様な特性の最後のものである。經濟的・政治的情勢の故にアラビアに於いては部族はモハメドの到来以前一世紀の向不安の状態であつた。イスラムはそれを統一した。宗教はメデイナの政治的構成を可能にした、それ故に國家はその信者の会衆を生み出したのである。然しながら後にそれはそれ自身が政治的目的のためにそれと独立に始まつた所のアラビアの移住を働かした礼拝の会衆ではなくして國家であつた。アラビア人の驚嘆すべき成功は——國民を統一し、輝かし、人間に依つて若い國家の力を導かんとする意志、

そして現実的に征服を招いたペルシヤ、ビザンチン帝國の狀態と云ふプロダグラムの結合に依つて説明される。兵隊達はその命捕島の命前に依つて鼓舞された、その五分の四は彼等の間に分たれた。

最初の四人のカリフ、アブーベクル *Abu-Bekr*、オマール *Omar*、オ

スマン *Osmen*、アリー *Ali* の三十年の支配、予言者の凡ての教國、

その部族の成員は、イスラムの黄金時代として見做された。シリヤ、イ

ラク、ペルシヤ、エジプトが征服された、オマル、オスマンの下に超つ

た所のものかアラビア回教國の拡大の最初の偉大な段階と特徴づけられ

る。然し既に部族の、又個人的な軋轢は彼等自身の中に感じられ始めた。

オスマンの支配の下に動乱はカリフの暗殺に由来した。新しいカリフ、

アリーは自らカリフを宣明した。オスマンの親縁者 *Muhammad*、そ

の最も怖るべき対立者たる *Muhammad* との絶えざる戦に従事した。然し

Muhammad との争闘の前にアリーは暗殺され、*Muhammad* *Omar*

カリフの最初のものとして一般的承認を獲得した。

オミアドの下に、アラビア回教國の第二次の段階、アルメニア、トランスオキシナ、インダスの地域が東方に於いて屈從された、そして西方に於て、^{スペインが}又北アフリカが屈服した。その結果、キリスト教世界の廣大な地域がイスラムの支配になつた。彼等の回教化と其の他の征服された領土の回教化とは然しなから、その屈服に同じ歩調をとりはしなかつた。イスラムがアラビアに止つてゐる限りは、その新國家の支持者の圧倒的な大多数は何の問題もなく特にその宗教は受け入れられた。然し近東の開化された諸國とそして北アフリカが征服されるや否やイスラム諸國の拡大發展はイスラムの宗教の拡大と鋭く分離した。二三の例外を伴つて、アラビア人は克服された者を改宗させる事を欲せずして、寧ろ大衆の上には特殊な経済的利益を有つ上層階級として彼等を保持する事を欲じたのである。國家主義的なアラビア人の要素が、普遍的な宗教的要素にのしかかろうとした。そしてアラビア人は武器を執ると云ふ立場から近東に彼等の宗教を強制する事は試みなかつた。征服者アラビア人に従つた聖

書に依る宗教の信者は保護を與へられ、貢を支拂の上彼等の宗教を信仰する自由を留め置かれた。初期に聖書に基く特権的宗教の概念は、現実にイスラムが接觸する凡ゆる重要な信仰を包含する如くユダヤ教やキリスト教を超えて振まつた。只廢止されたアラビアの異教徒除外された。非イスラムの臣民、*Shi'mani* はイスラムの法廷に証人として現はれる特権なき所のその最も重要な資格なき、權利なき市民であつた。貢物 *Jizya* は *Shi'mani* 又は *Kharaj* に依つて支拂はれた。征服地への課税はその前所有者の所有に残された。そしてそれは國家の^{財貨の}收入の主要な財源となつた。戦争に参加した回教徒とその家族に対する恩給はそれから支拂はれた、種々なるその神政に於けるその地位に従つて。宗教と政界とは当時本質的にその性格はアラビア的であつたが故に非アラビア人の政宗はアラビア族への加入と云ふ手段に依つてのみ可能であつた。アラビア人でない所の回教徒は部族の外國の教團の位置と名前 (*Mumalik*) を引継いだ。アラビアの回教帝國の中に於けるイスラムの宗教の弘布は支配

階級の成長と貢を納める臣民の数の減少と云ふ意義を有った。と云ふのは貢物の支拂はイスラムを受入れる事に依つて中止されたからである。此の時以来回教化は望まればしなかつたが、確かにそれ自身目的ではなかつた。にも拘らず支配階級は、若し被征服者が彼等自身の相当な経済的社会的利益を保証するためにはその宗教を変へる事に依つてのみそのレヴェルを上げようとしたならば、その彌益しゆく興味を發揮する筈はなかつた。改革を禁止する事はイスラムの宗教的傾向を否定する事であつた。そして最後に一般的宗教の概念は元々此の宗教と同一であつた所の國家の國民主義的原理を圧倒した。 *Qumrad* 帝國の末期の努力は増加する回教化とこの國民的原理との中和のためになされた。一部分は課税の改正と云ふ事に依つて——その大部分は改革を経済的刺戟に歸せしめられたその改正に依つて。

その他の要素に依つて支持された—— *Qumrad* に對する不満足が如き、—— *Alidic* の宣傳は最後に七五〇年に於ける *Qumrad* の没落に導

かれた。然しそれは予言者の後継者である *Mohammed* ではなく、然し
 彼等の従兄弟である *Abd-el-Kader* は革命の結果として権力を獲得した。
 彼等自身の目的のために *Shiite* の宣傳を使用し、そして彼等自身の集約
 的宣傳を實踐する事に依つて、彼等は *Algeria* をわきに除外し、そして
 彼等の勝利はイスラムのアラビア王國の目的を示した。七世紀の歴代
 の王朝の成員はスペインに獨立の王國を建設することに成功した。それ
 は後に *Castile* のカリフに發展した。 *Abbasides* のカリフの如くにそ
 れは宗教においてオールドツクスであつた、そして政治的分野に於いて
 のみ宗教に反對した。

Abbaside 王朝の支配の最初の世紀の間に、國籍に基づいた社会分化
 は全く消え失せた。アラビア人が土着の人民と親密な接觸と經濟的存続
 争に入つた時、その土着民達は物質的にも又知的にも彼等自身極めて優
 秀なる事を明かにした。此の優越性のためにアラビア人は彼等自身の卓
 越として彼等の宗教のみで對立する事が出来た、それ故にその宗教は強

く強調されたのであつたが。政府はアラビアの貴族的な支配形態の代りに、そのあらゆる補助的な声明を伴つた東洋的専制主義に依つて特徴づけられた。既に被征服者を制禦する支配階級は存在しなくて、主人と対等の位置に立つ多数の奴隷が存在した。社会的に引上げようとする過程の完成につれて、アラビア語とそれを伴つた宗教は急速な速度で拡がつた。実際はアラビア人は然し宗教に大した関心を有つてゐたのではなかつた。新しい改宗者とその子孫は、彼等は全く異つた宗教的傳統を有つてゐたのであるが、今や傳道的な仕事を始めたのである。専制主義と共にはアラビア人には全く異郷のものであつた所の國家教會の概念が入つて来た、彼等自身の宗教的優越性を強調するにも拘らず。非同教徒の改宗は宗教が必然的な支持者となつた所の政治的な權威への関心に今や重点が置かれた。支配者達は神学者達の支持を得んと努めた。そして宗教的情熱に燃えた神学者達は改宗のために重点的に働き始めた。その結果カリフ帝國は大規模に回教化された。

Omniad - Akkadische カリフ國に依つて代表される統一された近東國
 家にへしニズムの基礎に基づいてアラビヤ的なるそして様々な國を包含
 して凡ての影響を不現した數限りなく増加したアジア的特色との綜合的
 な文化が發展した。イスラムは斯くて國家と文化に、その統一的な宗教
 的印刻を刻して滲透した。同時にイスラムは國家の適確な理想とその未
 來を特色づける文化とにその密接な繋がりの中に入つて行つた。その代
 りそれは前の宗教に關する精神的遺産の同化の結果として相當の變化を
 受けた。之は専ら外部的に起きたのである、その結果として得た借りも
 のとその論争——それは内部的に行はれた——を伴つた宗教的論争を通
 じて。といふのは他の信仰からの改宗者達はその慣習、関心、問題と共
 に前の宗教生活をイスラムの中に單に持ち続けたのみである故に。如何
 よりも先づイスラムは宗教と國家の理想と文化の結合となつた。そして
 凡ゆる地方的特殊性と政治的分裂にも拘らず、それは大西洋から支那に
 迄及ぶ偉大な精神的統一を形造つた。宗教は國家やそれに照應する文化

を創造はしない、ただ全体としてのイスラムは之等三つの要素の結合から興起した。後に、國家と文化が衰へた時に宗教に基礎を有つた彼等の理想はイスラムの教義の一部に残つた。

輝かしい豪華な一世紀の後に、*Abbaside* 帝國は凡ゆる偉大な回教國の特色であつた様に衰頽し始めた。集権的な政府の弱体化は實際的に鞏立した支配者や歷代王朝の下にその領土の政治的アウトソウイに導かれた。同時にそれはカリフとの相互的認識の關係を結ぶことに依つて彼等自身を適法化へ正統にせんとする事に努めた。カリフは彼等が支配した所の地域の行治の資格を彼等に與へた。そしてその代りに彼は霸王として認められた。かくてカリフの領土とサルトンの領土の分割が起きた。それは凡ての近來のイスラムの歴史を占めた所のものである。スペインに於ける *Omniads* と並んで、それは主として *Abbasids* の卓越を認める事を拒否し、そして彼等自身のカリフの地位に對立して建設した所の北アフリカ及びエジプトに於ける *Fatimites* であつた。 *Shreevers* の

最も有意義な政治的表現であつた。Fatimite 王朝の建設者は *Kalimatians* の宗教的社会的運動と密接に接近した。そしてその運動は同時代の奴隷の反抗に依つて刺戟され、そして継いでコミュニストの社会のタイプを發展させた。それが元来關聯してゐた所の *Ismaelites* の運動の如くに、それは政治的社会的革新的目的を有つた。その指導者はヒエラルキヤ的存構成の中に巨大な野心的な活動を手段として實現せんと努めた。其処に於いては從者は完全に主人の精神的道德的支配の下にあつた。最後に *Fatimite* カリフの *Al-Hakim* は彼自身神自身の化身であると宣明した。 *Fatimites* の興起前約二十年他の *Shiite* 國家は *Fascists* の王國の建設としてモロッコに起きた。

十一世紀に政治的分割とそして *Shiite* イスラムの脅威された宗教的分離に対して方向づけられた反動があつた。そして一時の尙宗教的政治的統一は東方に西方に復興された。西方に於いて此の統一は *Almoravides* の *Mahadist* 運動に依つて尙もなく成功した所の *Almoravides* に依つて

成し遂げられた。

Almohades はその代りに一神教の嚴密な強化と *Mahade* の特色の賞揚廓大に於ける純粹のオーソドキシイから出発した。東方に於ける *Drumite* イスラムの再構成は *Abbasides* の如くイスラムに具現された公的宗教性を有つ國家への古代ペルシヤ人的な概念の主要なる説明者（典型的なもの）としての *Seljuks* の仕事であつた。彼等はメソポタミア、シリヤ、パジア *Musor* の大部分を軍事的な封土に分割した。それは十二世紀の末葉に實際的には独立したが。 *Seljuks* が第一回十字軍に依つて非常に弱められた後にイスラム正統の選良としての彼等の役割はエジプトの *Fatimite* カリフ領とそしてその *Ayubite* 王朝を終結せしめた *Saladin* に受け継がれた。イスラムの立場から見れば十字軍は單なるエピソードであつた。其の後尙も無く全東方イスラム世界はモンゴールの征服に依つて氾濫された。それはエジプトの國境に漸く止り、數多の小國と共にバグダッドのカリフ領を破壊した。エジプトに於ける *Mamluk*

彼等の最も輝かしい代表人物 *Amir Khatib* に成功したサルタン *Baldan* は
 カリフの家の確実な人々を避難させた。其の時以来カリフの地位は實際は軍に
 エジプトのサルタンの宮廷に於ける官職であつた、そしてその業務は彼
 等の元首に形式的な官等を授けることに同意すると云ふ仕事を遂行した。
 モンゴールに集中されたキリスト教徒の希望は新モンゴール國家が予期
 せざる速度で滲透した所のモンゴールのイスラムへの改宗と云ふ事に依
 つて画餅に帰した。

モンゴールに從屬してアジア *Minor* に存続し続けた弱小 *Seljuk* 國家
 の一々の崩壊に続いて、オットマン國家はビザンチンに対する絶えざる
 反抗の中に發展した。宗教的基礎に基づいて締結された軍事同盟はその
 基底に偉大な役割を果した。それは一時の間政治的に西方アジアの大部
 分を聯合した *Sumnitte Turke Timars (Tamalane)* に依つてそれを処分
 する打撃から驚嘆すべき容易さで回復した。約一五〇〇の *Shiite Turcomans*
 は又彼等の政治的な中心を建設した、そしてそれはペルシヤに於ける

Shafarivides の *Alvide* の家族に今日迄存続した。其の後一世紀その絶頂に達した新王朝は優勢にオットマンに対立した。 *Summites* と *Shivites* *Turkesses* の向の対立の強化と悪化は宗教的又政治的の闘争の此の時期から始まった。現時に於ける第三の偉大なイスラム帝國は約一五〇〇を起した所の—インドに於けるモンゴールの帝國は十六、十七世紀の向に光輝ある豪華な時期を経験した、斯くて一八五七年にその最後の影が消える迄徐々に衰へた。オットマンはヨーロッパとアジアに拡がり続けた、そしてエジプトの征服と共に聖所はスニツトイスラムに於ける論議の余地なき卓越さを獲得した。十六世紀初期に於けるその最も拡大の時期に於いてその後のオットマン帝國さへも相当の程度迄イスラムの政治的宗教的統一を再興した。そして最も有力なイスラムの支配者としてのオットマンのサルタンの主張はその版図が廣く承認された。オットマンイスラムの向では嚴密なオ—インドツクスノドグマと *Shivite* の傾向を有った強い神秘的な敬虔との綜合に依つて特徴づけられる。オットマンの進歩

はイスラムの初期の拡充があつたよりも猶更に強い印象をキリスト教國に與へた。然しながら眞摯な本質的に一時的なキリスト教世界の敗化ではあつたが、それは其の間に發展した現代西洋文明の敗退の結果せず、又西アジア、北アフリカの回教化と比肩するキリスト教の衰頹をも結果しなかつた。

イスラムは原住民に対するその文化的優越の結果として主として商業を媒介としてその政治的な境界を越えて拡がつた。イスラム諸國の内外に新しい宗教の拡充は一般に平穩に自然に行はれた。イスラムの精神に反した暴力と迫害に依る改宗は比較的稀であつた。同じ要素が、それが一変改宗された所の人々にその強力な把握に關してイスラムの平穩な拡充が説明される。と云ふのは僧侶と如何なる僧院の組織をも缺如するが故に、責任の感情は個人的な信者の上に置かれたからである。従つて彼は彼自身の宗教に彼自身の生活に於いて重要な位置を與へる様になつた、そして常にそれを弘めやうとするその努力に熱心になつたのである。

此の任事にその生命を捧げた宗教傳道者のみでなく、回教徒の凡ゆる階級の人々が彼等自身の信仰のプロパガンダに積極的に参加した。特に多くの機会を有ち、そして原住民が屢々外國人、又職業的傳道師を目して抱いた所のあの不信の念を蒙る事なかつた所の商人が、その成功に富んだ弘布を助長したイスラムの固有の性格の中重要なものは、アラブの統一の主要なドグマの單純性とそして予言者モハメウドとの關係、全教義の合理的性格である。末世を強調する末世觀的要素、就中、不信者に對する永却の地獄の罪の恐ろしい脅威は又効果的であつた。斯くて單純にして明確な宗教的義務が行はれた、その中礼拜は信者に依つて一日五度繰返されねばならない。そして巡礼はイスラム的統一の強制的な又鼓舞せんとする性格の顯現を示すのである。イスラムを強化するに貢獻あつた他の要素は、初期に現はれた宗教に對する理論的に寛容ある態度と同様に民族の信仰を同化するその能力であつた。之等の傾向は或外的な環境に依つて助長された、その傳道の分野の中に、イスラムは支配階級の強力

な國家の、魅惑的な文化の宗教として現はされた。それはより高い社会的な存在として文化的な地位に上る事を保證した、そして又屢々人々のより進歩的な要素を惹きつけた。その信者の敬虔な生活は、それは永久的な傳道的使命となつたが、それに附隨した諸徳は深遠な印象を與へ、十字軍の時代のキリスト教徒にさへも、又 *Islam* との戦に於いても深い印象を與へたのである。現代に於ける宗教的改革に關する種々の運動はイスラムの傳道的な活動を強化した。

過ぐる五十年の向にイスラムのより更なる發展を通して改革が努められた。之等の中の一つは一八八〇年に建てられ、そしてそれ以來一宗教となつた *Shimadliga* に依つて成された。其の建設者 ^{Muhammad} *Ghulam Ahmad* は *Mohammedan Mahdi* と同じく *Jews* に復るべきを言明した。聖なる戦を否認して彼は回教徒、キリスト教徒、ヒンズー教徒に対して彼の教を説きかけたのである。二つの學派の——彼の教義から發展した——より穩健派はその席を *Salvage* に有ち、インド、回教アフリカ、ヨーロッパ

ツパー——英國、獨逸に主として其の支持者を得た——に其の集中的な傳道の仕事に捧げた。Dunmyle イスラムとの結合への努力にも拘らず、それは實際は凡ゆる學派に依つて反撥された。イスラム内部に於ける發展に關してより重要なものはモガニストの運動であつた。

アジアに於ける回教徒國家の領土はかたより早い時期にイスラム化した。只最近セルジユク、オットマンの支配に依つて、宗教はアジア Minor に滲透した。インドに於ける廣大な領域は十一世紀に附け加へられた。

イスラムはより早く、トルケスタンを通つてイスラム化した。Transoxiana から海洋を通つて支那に達した。モンゴール運動は支那に於いて大きな獲物を得た。マレー諸島はインドから、そして後に直接にアラビヤからイスラム化された。イスラムは又フィリピン群島に支持者を得た。アフリカの北海岸は初期に征服された、そして商業を通じてイスラムは帝國の領土を超えて北部及び中部アフリカに滲透した、上部エジプト、モロッコを出發して、サハラのアアシスのルートを通つて行つた。約九世紀後に之はアラ

ビア人の植民定住と遠くマダガスカルからザンビバル海岸のイスラム化
 に依つて補充された。イスラムは又西部、南部、東部ヨロツパに足場
 を獲得した、併し十五世紀には完全にスペインを押しつけた。ノルマン
 の外敵は南部イタリー、地中海諸島——それはアフリカ海岸から征服さ
 れイスラム化されたが——を席捲した。東部に於いてはオットマンは彼
 等の宗教を遠くハンガリー、ギリシヤに迄運んだ、然しそれはバルカン
 半島にのみ著実な足場を獲た。ロシアに於いてはそれは主としてモンゴ
 ール運動を通じて擴がった、*Golden Horde* の回教化は偉大な勝利だつ
 た。*Kinghip* はロシア政府——それは彼等を後退せる回教徒と見做した
 が——に依つて八世紀にイスラムの信仰に改宗された。

十七世紀の末葉からオットマンの偉大なる回教帝國は西方に敗戦した。
 十九世紀にその過程は非常に速度を速めた、然し二十世紀の初頭迄にヨ
 ロツパに於けるトルコの軍事的政治的敗退はイスラム世界に於けるト
 ルコの地位を弱体化する事と、イスラム内部に於ける宗教的政治的勢力

の再建設をも結果しなかつた。それ前か之等の敗退は特に *Abdullah-Hamid*。
二世に依つて泥イスラミズムとして知られる防禦的運動の増進を導いた。
それはヨーロッパに対立して傾向づけられた、そして傳統的なイスラム
的宗教的・政治的統一を強化し、拡充する事を目的としたものである。然し
西方の衝突はより特色ある國民主義的運動を生み出す様になつた、それ
は一九〇〇年以後近東の人々の間に一般化し、そして廣汎に拡がつた
のである。オットマントルコの間に於いて、國民主義は一時況 *Thurman*
の形態を採つた、それはトルコ人達を人種的に同盟せんとする統一への
傾向として、世界大戦の結果として、ナシヨナリストの感情は外國の宣
傳に依つて助長され、巨大な勢力に發展した。戦後新トルコ政府は、ト
ルコ領土に束縛されてはゐるたが、ナシヨナリズムをその論理的な結論に
迄実践し、そしてイスラム的文化的經歷との完全な遮断を齎した。宗教
は公的生活から排除されて、國家の利害に従属した。サルタン領は一九
二二年に廢止された。之は一九二四年カリフの廢位、一九二八年に國家

宗教としてイスラムの廃止に続いた。回教托鉢僧の規則は又抑圧された。アラビヤ人の向では然しながら、オットマン帝國の没落を導いたナリスタ運動は、宗教的精神的勢力と考へられたイスラムの合同へと入つて行つた、一方宗教的熱狂を否認して。アラビヤのナリスタムは其の性格に於いて地方的であり、そしてエリヤ、イラク、その他地方的運動より成つてゐる。暫くの間それは政治的汎アラブの野心を放棄した。カリフ位の消失はイスラムに於ける國際的宗教的會合の概念を助長した。併しその元素の意味で汎イスラム的運動のそれではなくして、斯くてイスラムの政治的展開の目的は政治的理想の現実性の否認に依つて特徴づけられる。イスラムの領域の政治的分解、カリフ位の廃止にも拘らず、然しながら、強烈な共通感情がヨーロッパ人の支配に対立して存在する。聖なる戦の如何なる眞摯な脅威もなしにはあるが。

現時に於いては、イスラムの宗教的側面は再び最もエフエクテイヴなものになつた。回教徒の向の紐帯は彼等の共通の信仰と彼等の理想の統

一とに基づいてゐる。公教育の現代化につれて、傳統的な神学的訓育は衰へた、然し現実的な宗教的活動のより大なる再興は顕現されてゐる。眞の回教的統一の特徴はコーランの共通の承認である。そしてそれはその支配の失はれた幾ばくかゞ未だ人々に依つて尊ばれ、そして支持されてゐるけれども。モダニズムとナショナリズムの運動——それは西欧的な考へ方の影響の下に起つたものであるが——は彼等に依つて影響された回教徒の文化的環境に於ける新しい又深い変化を含んでゐる。此の影響の下にイスラムの理想の政治的文化的要素は現代西政的な考へ方に依つて意識的に棄てられ置換へられ始めてゐる。宗教的理想の傳統的形態でさへも批判的判断に依つてはかかれてゐる。その唱道者にとって元本的な基礎的なものに歸せらるべきと思はれる所のイスラムの眞の宗教的領域にとつての此の後退は、未だ勢力的でありそして斯く政治的文化的分野に於いてイスラムに依つて支へられた損失を相殺する所のその中心的な宗教的な力を復興するだらう。

モダニストの分野はインド、エジプト、トルコにその主要な中心を有つて興起した。その傾向の凡てに共通するものはイスラムが未だ一世紀の肉存立し、そしてルネッサンスの必要に迫られてゐる事の実現である。如何にして之が齎らさるべきかと云ふ事について意見は相異する。意見の多くの微妙な差異は示されてゐる。その完全な攝取についての西方の精神の理解の完全な缺如から、イスラム法の單調な拒否への *Dehshadite* の傳統主義から、コーランとスンナ、イスラムの歴史への批判的洞察に凡ゆる現代的な成就を帰せしめることゝなる。之等の傾向の後に眞のイスラムは文化に敵対するものでなくてそれどころか進歩に賛成するものだ。と云ふ思想がある。宗教の眞の中核とはその上に置かれた——それは又イスラムの衰退の原因となつたのであるが——人間的構造から自由でなくしてはならない。そして又回教徒は共通善に肉する見解に伴つて、現代の問題に対して束縛される立場に立つべきものなのである。此の立場からオックスフォックスの組織の拒否、イスラムをして宗教的倫理的眞理の中

核に歸せしめんとする努力を導いた。現代の倫理的社会的考へ方には基ついて真正なるものと認められた所の其の傳説とコーランの解釋を基礎とせんとする傾向は、通常歴史的に間違ひであつた所の見解を導いた。最も狭いオーストリアスなグループの中に於いてさへも、宗教的再興に對する間違なき努力がある。部分的に相互に重り合ふ所の種々なる潮流はイスラムに於ける現代の危機の表現である。イスラムがより更に分化するだらうと云ふ事は全く可能である——宗教の興起に依つてより寧ろ國家教會の形成を通じて。大多數の人々はその傳統的な形態に密着するだらうし、一方モダニズムは教養ある人々の間に拡がり続けるだらうと云ふ事は期待出来る。然しながらモダニズムの進歩は宗教的確信を弱める事は意味しないだらう。そして西方の考へ方との衝突に依つて特徴づけられる現代の重大な危機はイスラムを破壊するだらうと云ふ事はありさうもない。

現時回教徒の数は主としてヨーロッパの支配であつた、又今支配下に

ある、そして世界の他の部分の靜態的な諸國に於いて増加しつつある。
新しい分野への回教の明白な弘布はないが、然し中部アフリカ、インド、
蘭領東インドに於いて注目すべき衰頽は非常に輕微なものである。ソ聯
に於ける回教の情勢について通用出来る信頼すべきデータは存在しな
い。イスラムは未だ社会力として魅きつけてゐる。植民地的プロレタ
リアートレからの多数の改宗者は、イスラム化する事に依つて文化的な
認識と人間的尊嚴の意識を獲得してゐる。と云ふのは典型的な回教徒は
彼等のコミュニティーを單なる法律的な統一と見做すことなくして、超自
然的要素を有つ社会の教會的な又殆んど存在論的な現実存在と見做してゐ
る。

第三節 回教徒の分布と列強の回教政策

此の服従の信仰として、一剣ハコーランカレを軸として、その教政一體性の中にその普遍性と剛一性を把持し来つた回教徒の分布は、凡そ次の如き地域性を示してゐる。

一、獨立國內の回教徒数 (單位千人)

○ヨーロッパ

計 三三二八

(内訳)

アルバニア	七〇〇
ユーゴスラヴィア	一四〇〇
ブルガリア	七〇〇
ルーマニア	二六〇
ギリシヤ	一八〇

フランス 八〇

ポロランド 六

リトアニア 一

フィンランド 一

オンガイエト聯邦 計 二〇、〇〇〇

アゼルバイジャン、アルメニア、クリミア、ジョルジア、

カザキスタン、ツルクメニスタン、ウズベキスタン等の三十

二の回教小共和国が包含、

オアジパ 計 五三、一四二

(内訳)

サウダアラビア 四〇〇〇

イエーメン 三三〇〇

オマン 五五〇

ハドラムート 二五〇

合計

リベリア

エジプト

(内訳)

○アフリカ

支那

タイ

イラン

イラク

アフガニスタン

トルコ

トランスジョルダン

計

八九五五〇

二八〇

一三八〇〇

一三〇八〇

九〇〇〇

三五〇

一四〇〇〇

二六四二

四六〇〇

一五二〇〇

二五〇

二、属領の回教徒数 (単位千人)

(A) 英領

合計 九五、六八〇

ヨーロッパ(サイプレス島) 六三

アジア 計 八一、〇七八

(内訳)

アデン 三五〇

印度 七七、六七七

マライ 二、三〇〇

パレスティン 七五一

アフリカ 計 一四、五一九

(内訳)

スダン 四、二〇〇

ソマリランド 三、四四

ウガンダ、ケンヤ
タングニカ
一、二、四、三

ニヤサランド
一〇三

ガンビマその他
六九三

ナイゼリア
七、五、三〇

ザンジバル
二一〇

南亞聯邦
一四五

マウリス
五二

(B) 葡領(蘭印)
五四、〇、〇〇

(C) 佛領
合計 二五、三一、八

アフリカ
計 二、三、七、四、三

(内訳)

アルゼリア
六、二、四、七

千二ニス 二、三三五

モロツコ 五、八九八

佛領東アフリカ 六、二四一

佛領南アフリカ 九、四五

カメルン 八七

ソマリランド 二、五〇

マダガスカルその他 七、四〇

アジヤ 計 三、五七五

(内訳)

シリア 三、三〇〇

佛印 一、二五〇

印度 二、五

(D) 伊太利領 合計 五、一八五

(内訳)

(E)	スペイン領	モロッコ、リオデオロ、 ギニア	六 六 六
(F)	ポルトガル領	(ギニア、モザンビク、 アンゴラ)	一 五 〇 〇
(G)	ベルギー領 (コンゴ)		五 〇
(H)	その他	北アメリカ	六 五
	合計		二 五

南アメリカ

三〇

大洋洲

一〇

合計

一八三四三八

以上全世界に約二億八千万を占める回教徒の中、大東亞戦争の結果今日既に蘭印六千万、マライ二百五十万の回教徒をその勢力範囲とし、やがてインド七千七百万の回教徒の動向を注目しなければならぬ現今、以下回教徒に示された列國の政策を省みる事に依つて、回教徒の共其し示頭するその方向と、回教徒政策全般への検討を試みたい。

その属領乃至植民地に多数の回教徒を有つ英、佛、伊、蘭、ソ聯等、及び前大戦に依つて其の廣大な植民地を喪失した独に至る迄、此の執拗なる迄のその実践力と、狂信的な回教徒に対して、寧ろ忍耐強い懐柔と夫々のより優れた文化を有つて徐々に教化せんとする以外に何等の対策も残されてゐないか如く、勿論それへの破壊が必然的に痛切な失敗に終

り、唯一の残された途が此の寧ろ自由放任に近い漸進的な歩みを辿らざればと云はるべきものなのである。

英國の回教政策も右の傾向以外に出でるものではないが具體的には大別してその印度に対する場合と、アラビア半島に対する場合とにかなり
の差異が示されてゐる。英國は印度に対してそのインド教徒と回教徒との
の対立を以て、その植民政策の原則としての分割統治の具と使用する事
に依つて、その被圧迫の立場にある回教徒を煽動し來つたのである。之
に反してアラビア半島並びにエジプトに於いては、之等を政亞を結ぶ紐
帶としての勢力範圍とせんとして、その特異の粘着性と外交工作とに依
つて、恒に回教徒の懐柔に努めて來た。其の尚積極的に実力行使に訴へ
た事もあるが、こにも拘らず回教徒自身の有つ信仰そのものには一指も抵
觸せざる慎重さを保持してゐた。然しパレスティンに於けるユダヤ人と
アラビア人との相尅、エジプトのワフド黨の紛争、インドに於ける國民
會議派と回教徒の一時的提携の如き英國の回教圈政策もかなりの破綻を

示したとば云へ、右の如き英國の採つた懐柔政策の成功は、著名なるワレンス、ファイルビーの如きに負ふ所大なるものであつたと云はれねばならない。前大戦後ネジドの大守、サウザラピアの王となつたイブン・サウドの如きすら結局に於いて英國の懐柔に躍らされたと云はるべきであらう。

前大戦後イタリヤはトリポリタンとキレナイカ、即ち現在のリビアの回教徒を有つ事に依つて、一九一九年六月一日の條約に於いて之はイタリヤ市民権を附與し、イタリヤ市民と同一の權利義務を認められた。斯くの如き急進的自由主義的政策は、回教徒の増長と誤認を齎らし、一九二一年から三〇年に至る迄、彼等との尙断なき抗争に常に武力鎮圧を以て踏まねばならなかつた。このリビアに於ける回教徒の暴動は一九三一年その根據地クフラの陥落に依つてそのピリオウドを打つたのではあるが、此の失敗のためのイタリヤにとつた極度の峻厳さは結局全世界に於ける回教徒の反軍的風潮を齎したのである。一九三六年更にイタリヤは

チオピアを得、イタリアの探る回教政策は破壊する事なくして教皇の方
向を嚴肅に歩んでゐると云はるべきである。

蘭印の回教徒は凡て正統派としてのスンニ派に属し、一九二〇年か
ら同二七年にかけてコミンテルンの暗躍に加へて、彼等自身の有つ積極
的性格は、オランダを以て極めて困難な立場に置かしたのである。其
の中原住民の内政參與權への強烈な要求は、一九二七年、蘭印人民議會
「フォルクスラード」開設の余儀なきに至らしめ、代議員六十人中二十
五人が原住民を代表した。之に加ふるに逐年的なる工業の發達は労働問題
をも惹起したが、蘭印政府は穩健派回教徒との妥協に依つて、之は内政
問題に迄干渉するの位置を占めず、結局組合主義運動の範圍に止り得た。
オランダの蘭印回教徒への対策亦或は彈圧し或は懷柔を事とする場合
もあつたのであるが、それを貫いてゐるものは、蘭印住民社会の有つ動
かし難い階級制度を利用する事に依つて、その上層階級の子弟教育に注
目する所の選良主義であつた。そして右の一面一般民衆に對してはコ

ランを基礎とする回教々育を奨励する事に依つて極めて寧ろ円滑な対策統治に成功したと云へる。

ソ聯は英佛の帝國主義に對する回教徒の煽動とキリスト教排斥を目的として、一九二〇年来、イラン、アフガニスタン、イラク、シリア、パレスチナの如き回教諸國に對して、積極的に——アラビア語の「ナル、アラム、アル、アッマール」宣傳紙の発行——働きかけたのであるが、その有つ共產主義は窮局に於いて末世觀を基調とする回教徒にとつては米炭相容れる事能はず、必然的な失敗を來したに過ぎない。にも拘らずソ聯の執つた回教徒政策に注目しなければならぬ所は、その自國內に二千万の回教徒、三十二の小共和國に對する寛容さである。往時帝政ロシアの國教たりレギリシヤ正教に對する假藉なき圧迫にも拘らず、ソ聯政府は回教徒に對しては、その有つ固有の信仰、その個人的な生活に對しては全くの自由放任の態度に出たのである。その熱狂的な回教の信仰と、回教徒の有つ反抗的精神をソ聯政府は一指だに觸れざる慎重さを把

持する事に依つてその統治を全うしてゐる現状である。

フランスが回教徒と接觸したのは既に古くマルセイユ商人の地中海沿岸進出の当時に始まり、一五六四年には北アフリカのアルゼに回教國に於ける最初の領事館を開放し、ナポレオン一世のエジプト遠征も又フランスと回教國との交渉に一つの時期を劃してゐる。後、アルゼリア、チュニス、モロッコなどを自國領としたフランスは、専らその現前の経済的利益を目標として、その回教徒中の有力者との交渉を以て、一般回教徒の操縦を心がけた。元來佛領内の回教徒は正統派回教の禁止する奇蹟、迷信に確執してゐる異端マラーブ派に屬してゐるのであるが、フランスは之等を現実の必要から援助し、利用する方策に出でてゐるのである。ドイツは現今直接には回教徒に關係を有つ立場に置かれてゐるのではないが、その回教徒に対する深い研究と、それに立脚した対策への並々ならぬ関心とは以て学ぶべき處を多く持つてゐる。換言すればドイツのヒョトルコ、アラビヤ諸國、イラク、イラン、アフガニスタン等の近

東一帯に対する其の宣傳工作は、その全体主義的基調と回教徒の有つ性
格との結び付と共に大いに注目しなければならぬものと思はれる。

第四節 回教國概説

第一款 近東

回教發祥の地であり、それを擔ふアラビヤ民族、五世紀に亘る回教帝國を建設したトルコを有つ近東諸國について次に概観しよう。

一九一六年オットマン、トルコ帝國の範圍にあつたアラビヤ諸國は異教徒イギリスに迎合する事に依つてトルコに叛旗を繼へした。之等は特にその獨立運動とイギリスの探つた空前工作との關係に於いて理解するべきものではあるが、別してそれはアラビヤ人の宗教を缺いたトルコ帝國への屈從を潔しとしなかつた所に真相はあると云はれねばならない。即ち一九〇九年のクーデターに依るトルコの青年トルコ黨の内閣の實現は、オットマン、トルコの傳統的政策たる「汎イスラム主義」を排斥し、「汎トルコ主義」に依つてその衰勢の挽回を努めんとしてゐたこの動向へのアラビヤ人の反抗と見做さるべきものである。メッカの大守フツ

サインは著名なるロレンス大佐の使喚に依つて發起したか、戦後のアラビヤ民族の帝國への夢も、サインクス、ピコ密約に依つて画餅に歸し、アラビヤ半島は大部分英佛に分割され終つたのである。独立國せうが、アラビヤ、イエーメン、オスマン等何れも英國の勢力下に置かれてゐた、トルコ

五世紀に亘る傳統を一切放擲してムスタファ、ケマルはトルコ革命を完成した。戦後聯合國はトルコの分割について様々の暗躍の中にその夫々の要衝を占領してゐた。ムスタファ、ケマルは此の事態を前にして、絶えざる細心の注意の中にトルコ人の愛國心に訴へ一歩々々確實に政權の樹立に近づいて行つた。一九二三年十月トルコ共和國の宣言が發せられ、越えて二四年三月最後のカリフが廢位されて此処にトルコの俗權共和國は完成した。現今トルコに於いて國教は他の宗教と全く同じく夫々の個人生活の中にも残存し、國教の一切の公的活動は許されてゐない。斯くて回教自身の有つ特色とせられた政治性はトルコに於いては名実共

にその姿を消し去られてゐる。にも拘らず個人生活に於ける回教の残存は意外に根強いものを見るのであるが、——特に之は中年以上の人々の中に——然し青年層に於ける宗教意識の急激な稀薄化は、共和國政府のとする政化政策と相伴ふ事に依つてトルコは日一日回教國としての姿を消しつゝある。然しこのトルコに行はれた回教信仰の脱皮は若し之が外部よりの強制に依つて行はれたとすれば、それは右の如き跛行的形態に於いてさへも必ずや成就し得ることなく、それは内部よりの換言すれば宗教的情操の愛國心への轉生としてのみ右の脱皮が行はれ得たと結論すべきものであらうと思はれる。

オットマン、トルコ崩壊後全世界回教徒の中心は今日フツサインに代つてメヂナ、メツカの大守となりサウヂアラビアの王を宣言したイブンサウドに集つてゐる。中南部アラビアをその勢力範圍とし、就中聖地メツカ、メヂイナの保護者としての彼の位置は英國に對するその從屬的地位を脱却した。メツカ巡礼の最後の日、彼を廻つて巡礼者との大交歓會

は彼の声望を稱せ上にも高からしめた。彼は特に汎イスラム主義を高調し、以てイエーメン、イラク等の近隣回教諸國を取纏め大アラビヤ回教國建設を目指して動いてゐた。斯くて今次大戦勃発前には既にアラビヤ各地の委任統治制撤廢のための統一的立場を結成しつゝあつたのである。が、今次大戦に於いてイラク、緬甸、エジプト、トランスジヨルダン、パレスチナ、シリアが英國の下に屈し、サウヂアラビヤも孤立し、英國の支配下に置かれんとし、ドイツのこの近東への進出形勢と相俟つて極めて複雑な様相を呈してゐる。

イランに於いてはカジヤール、モハメツド、アリ王の専横と、この國を二分せんとした英露秘密條約協定への反抗として、一九〇八年に革命が勃発してゐる。回教國としてシリア派の根據地たるイランも政治的には前大戦に於いても、又今次大戦に於いても常に英露二國の勢力争の葛藤の舞台とされる受難を蒙り続けてゐる。

アフガニスタンは回教國としてスンニ派に属するが、イランと同様

英露二國の圧力下に躑躅し、前大戦に於ては辛うじて形式的に中立維持を保ち得たが、そして猶現今アマーン、オースラフ、カーンは英依存の傾向の脱却に努めつゝあるも、猶極めて多難な將來を思はせられる。

イラクも亦前大戦以来絶えざる戦禍の洗礼を受けてゐる。英、土死闘の舞台とされ、後にイギリスの占領下に於かれ、イギリスの委任統治領となり、一九二二年佛に依つてダマスカスを追はれたフアイサルを王に迎へて英の保護國となり、一九二五年漸くにして形式的に獨立國たり得たが、今次大戦に依つて再び英國の占領下に置かれるに至つてゐる。

第二款 印度

七一一年アラビアのムハメッド、イブン、カシムのインド占領に依つて回教徒のインド侵略は始まつてゐる。其の後ガズニ王朝のマームードは一〇〇一年より一〇二七年間に實に十二回以上に亘つてインドを攻略した。十二世紀末葉ゴール王朝のアフガニスタンよりの南下に依つて回

教徒は事実上インドを征服した。それより十五世紀迄は回教徒の継時的な侵入を受け、十八世紀迄は莫臥兒帝國によつて回教統治がなされた。一八五七年英國はかのインド傭兵の叛乱鎮定を契機として遂に莫臥兒帝國を滅亡させ、代つてインドをその統治下に置くに至つたのである。其れより後の英國のインド統治政策、即ち従来の公用語ペルシヤ語の廃止と英語の強制、その個人生活全般に亘る欧化教育の結果は、インド教徒の此の統治策への積極的な共鳴とその社会的位置の向上に反して、依然征服者としての優越感を離脱し得なかつた回教徒は英國統治政策への忌避に依つて徒らに自己の地位を下げるのみの結果となり終つた。従来免税の特権を有つてゐた回教徒の学校、醫家は悉くその特権を奪はれ、インド教徒よりも低い地位に甘んぜざるを得ず、インドに於ける回教徒は政治的には勿論経済的にも甚だしい没落を余儀なくされたのである。此の英國の統治政策に依つて招来された回教徒の反英的傾向は、アラビアの急進的なワハビアー運動等の趨勢に刺戟されて、之はアフガニスタン

などを加へてインド回教徒間に汎イスラム主義的思想を強固ならしめるに至つた。然るに一方此の回教徒に対して文化的・経済的にその優越を占めたインド教徒の間にインド復興を目標として反英的色彩が濃厚に存するにつれて、又他はインド西北部に於けるロシヤ勢力への拮抗——インド回教徒は大多数西北部に占められてゐる——の必要に迫られると云ふ現実の事態に誘はれて、英國は遂にインド教徒抑圧のための手段としてその回教徒の懐柔のためにその回教徒政策は修正の余儀なきに至らしめられたのである。此の英國のインド教徒偏愛の傾向の躊躇に照應して、回教徒側もそのインド教徒の圧力と、インド教徒の再興運動が純正ヒンズイズムの昂揚として回教徒も排斥さるゝ動向を有つ事を考慮する事に依つて、回教徒も一八八六年は全インド回教徒教育會議を催すなど英語教育への回教徒の妥協を示すに至つたのである。此の動向に直面して英國は一八九二年インド會議法に依つて總督立法會議の民間議員に回教徒代表を任命する事とし、此處に始めて回教徒はその政治的發言權を獲得

したから、爾後の要となる憲法改正に於てもその一種族別議席割当制には回教徒に一定の議席を與入してゐるのである。現今インド回教徒の政治団体として最も有力なものはマヘムド、アリ、ジンナールを首領とする全インド回教徒聯盟である。一九〇六年アガパーカンに依つて國民會議への拮抗を目標として結成されたものである。此の回教徒聯盟の最初の動向は、英國の政治に一應の服従を示し、大衆の政治的自覺の上に立つて自治制獲得を目標とするに於つたものではあるが、一九一一年トリポリ戦争一九一二年のバルカン戦争に於けるイギリス政府のトルコの無視、その伊露兩國への親近は聯盟の心證を痛く刺戟し、一九一三年ラクノウ大会では即時自治権獲得を決議した如き様相を示したのである。繞いて前大戦に於いて英、土間に戦争勃発するや聯盟は遂に對英非協力、自治獲得を旨して國民會議と共同戦線を張り、一九二〇年聯合國側の對トルコ媾和條件の過酷はこの聯盟と國民會議の反英運動を益々強化させる結果となつたのである。斯くの如くインド回教徒の示す動向は、回教圏、就

中その中心としてのトルコへの深き関心に基礎を有つ事に依つて、常にそのトルコの動向如何に依つて動かされてゐるのである。事實今次大戦に於いても回教徒聯盟の對英要求にはフイギリスはパレスチン問題につきアラビア人の要求を満足せしむべしとの一項がある。此のインド回教徒の有つ回教圏への深い尊崇の念と関心、そしてその動向に決せられる自らの進退、此処にインド回教徒を性格づけ、又注目しなければならぬ。最も大きな鍵がある事を忘れてはならない。然し實際にはインド回教徒はそのインド教徒に對抗して自らの國內的地位の確保するに寧ろ白き有様であつて、その對英抗爭も極めて消極的たらざるを得ず、その回教圏への精神的紐帶は別として、又教徒の人口数七千七百六十七万余、インド總人口の五分の一、全世界回教徒の四分の一を占めるにも拘らず、その政治的經濟的勢力は決して有力とは云ひ難い状態に置かれてゐるのである。今次大戦以來回教徒聯盟の動向は寧ろ國民會議への對抗を事とし、英國に對しては極めて消極的な立場を採つてゐる。同聯盟は一九三

九年運用委員会に於いてイギリスに対し

- 一、同聯盟を回教徒の代表団体と認めること
- 二、一九三五年インド統治法による聯邦制を完全に放棄すること
- 三、回教徒の宗教的、政治的、文化的、経済的、社会的の自由独立を保障すること

四、憲法の改正には必ず聯盟の同意を得ること

の如き諸條件を提出し、専ら回教徒の利益擁護にうとめ、極力反英的傾向を回避せんと志し、専ら國民會議への不満の意を表してゐる。現今回教徒聯盟がとる立場はインドをインド教徒と回教徒との二独立國に分立せしめようとするものであつて、一九四〇年三月のラホール大会にて之を決議した所である。然し又アザット、ムスリム、コンファレンス——國民會議、ヒンヅトマハサバ、全印ヒンヅト聯盟、シーク教徒、及び國民會議派回教徒——は此の回教徒聯盟の決議に対して反対の立場をとつてゐる。現今迄回教徒とインド教徒の反目対立を巧妙に利用する事に依つ

て英国のインド統治は成功し来たのであるが、現在インドの対英態度はか
かつて一に国民会議と回教徒聯盟との妥協一致を如何にして齎すべきか
にあるのであつて、此処にインドの、又英国にとつても寧ろ宿命的存苦
惱が存すると云はるべきである。インド回教徒は支那事変に於いて国民
会議派のつた反日親英的傾向に反して寧ろ我が国への深い関心を加へ
つゝある。インド回教徒の反英的傾向、就中ファウシヨ団体としてのカ
ークサル黨の如きに我國は特に注目しなければならぬ所以也又此処に存
する。

第三款 インドネシア

インドネシア住民七千万の中キリスト教徒——セシベス東北部ミナハ
サ地方のメナド人、アンボン島のアンボン人、スマトラのバタワク人、
フロレス、チモールの住民等——千五百万、バリ島及びロンボク島の
バリ人のヒンヅル教徒百万余、之にニューギニアのバプア人の如き原

始宗教の部族を加へて東インドの非回教数は二千万を出でない。従つて東インド、即ち旧蘭印諸島、マライ半島のマライ人、又比島の一部等の回教徒数を合して五千数百万と云はれ得る。一般に東インドに於ける回教はシヤフエイハ派を信奉してゐるのであるが、之は回教渡来前一千年に亘つてこの群島に弘布してゐたヒンヅー教と極端に混淆してゐるものである。そしてこの回教もその宗教的情熱と云ふ観点から見るとそれは各種族に依つてかなりの差異を見せてゐる。その最も回教化の程度の高い所はスマトラであつて、殆んどその北部に住むアチエー人は所謂アチエー戦争に於いてその狂信性を發揮したのであり、又同じくミンナカバウも又熱心な回教徒であり、ジャバではバンドム地方が信仰心に篤い。

回教がインドネシアに渡来したのは十三世紀であるが、それ以前よりインドネシアに於てはヒンヅー教が此の群島一帯に亘つての支配的な宗教であつて、十三世紀から十五世紀に至るモジョロパイト王朝の時代はヒンヅー文化の黄金時代として、ヒンヅー教のインドネシアに與へた政治

的、経済的、文化的各般に於ける影響は回教が與へたそれと比較出来ぬ程に強大なものであったのである。此のヒンヅ教は本末ジャバ人の有つてゐた原始的な心靈教と混淆したものであつて、今日に於いても此のジャバ的なヒンヅ文化は原住民の生活全分野に亘つて深い關係を與へてゐる。モジヨパイト王朝も然し十五世紀になつて回教のたゞ衰頹の一路を辿り、此の時ジャバを逃れたヒンヅ教徒が現今のバリ人である。十三世紀半ば回教は北部スマトラに傳來し、アチエーにサルタンはその勢力を確立した。インドからの商人と住民の結婚等によつてそれは極めて徐々にしかかも根強く、スマトラ、ジャバの海岸地方に、或はボルネオ北部のブルネイ、スールー群島を経てモルツカ群島に及んだ。十五世紀末葉にはインドネシア全体が既に回教化され、モジヨパイト王朝の崩壊後はバンタム、マタラムの二王朝がジャバを分割統治した。今日中部ジャバのジョクジャとソロにある王国はマタラム王朝の後裔である。

右の如くインドネシアに渡來した回教は極めて自然に住民の間に順調

に弘布されたのではあらず、然し此のインドネシアに至つた回教は途次
 インドに於てヒンヅ教の影響を受けたものであり、更にインドネシア
 に於けるジヤバ化されたヒンヅ教と再び相会した故に、此処に於け
 る回教は寧ろ極めて偏頗な正統派回教に遠いものと存らざるを得なかつ
 たのである。斯くてインドネシアの回教徒の向に於ては、その嚴格なる
 戒律行事に對して極めて冷淡なるものとなり、一日數回の祈禱もせず、豚
 肉も平然と食し、断食日も行はれてはゐない。精神的には熱心な回教徒
 たるスマトラのミナンカバウ族も、回教の教律と相反する母系制親族相
 続の習慣を續けてゐる。インドネシアに於ける回教徒の守る行事と云へ
 ばプアサ明とメツカ詣りのみである。而も此のプアサ明も回教曆として
 の正月ではないが、彼等は晴着を着飾つて之を祝福する、聖地メツカへ
 の巡礼とハジへの尊敬も最近ハジに對するその社会的尊敬とハジの數
 の増加とは反比例してゐる現状にある。

東インド会社の往時は割礼、回教学校、回教徒の公然又は内密の儀典

執行を禁止し、東インド会社にはメウカ巡礼を乗せない政策を採つた事もあつたが、一八一八年蘭印統治法制定以後はオランダは回教のみでなく住民の社会組織、風俗、習慣には一切干渉しない政策をとつたのであつた。宗教上には寛容を以て臨み、進歩には好意的中立を持し、宗教に依る政治運動は弾圧すると云ふ三原則がオランダの採つた回教政策であつた。宗教不干渉主義は回教が何等の実害を伴はないからであり、メウカ巡礼もこれに依つて狂信的になるか、又は反蘭的思想を植付けられて帰国するが如き何等の害を有たなかつたのである。又たとへ進歩的な改善であり民族主義者の賛成するものであつても、宗教に基づく習慣の改善は頗る困難を極めるが故である。近時蘭印政府が一夫多妻性を禁止せんとして住民女性より反対を受けた事実すらある。そして尚回教徒が回教を利用して反蘭的政治運動をしない限り、蘭印政府は殆んど回教に干渉しないが故に住民がオランダに反感を懐いてゐる事はなかつたのである。此の限りに於いてオランダの執つた回教政策は成功であ

つたと云へるのである。従つてインドネシアに於いては眞の意味で回教運動と見做すべきものは存在しない。現在インドネシアに於ける最大の政黨サリカット、イスラムも、それは名稱のみであつて、實質的には何等の宗教性をも具有してゐない。この政黨は回教主義に立脚する東インド人の繁栄を綱領としてゐるが、それは元來一九〇九年東インド人のバチック工業が華僑の競争によつて危機に見舞はれた時その防衛運動としてサリカット、バダガン、イスラムが結成されたのが端緒であつて、それは回教運動でもなく、又政治的運動でもなく、専ら経済的なものであつた。近時黨員五、六十万の多きを教へ、対蘭非協調主義を捨て、協調主義に轉じたのであるが、回教的な性格は飽迄も二次的なものとなつてゐる。之に對して一九一二年に創立されたモハマディヤ協會は回教運動としての體裁を具備してゐる。それはインドネシアに於ける回教々教の検討、回教思想の普及を目的とし、普通教育と共に宗教々育を行ひ、種々の救濟事業、無料診断、無産者の保護に盡力してゐるが、政治的には全

く中立の立場を採つてゐる。

右を結言すればインドネシアに於ける回教はインドに於ける如きその政治性をも有たず、又宗教的色彩も稀薄ではある。嘗つてのバンタム暴動、又アチエー戦争に於ける回教徒の役割もそれは回教徒としてではなく、専らオランダへの東インド人としての抵抗と見做さるべきでなければならぬ。そして猶インドネシア回教のヒンヅー教との混淆はインドに於ける如き回教とそれの如き対立をも惹起せず、寧ろインドネシア回教は文字通りインドネシア化された回教と云はれねばならぬ。にも拘らず彼等は又依然として回教徒である限り、インドネシア回教をして之を敢へて回教として殊更に注目する事も、又之をその回教的色彩の稀薄さに乘じて無視する事も許されぬ状態に置かれてゐるのであつて、此処にインドネシア回教の特異性と同時にそれへの対策の困難を考へさせられる所以が存する。

第四款 支那

支那に於ける回教徒の数は正確な所は不明ではあるが一九三七年中國年鑑に依れば三千九百七十一万と云ふ、又趙雲隆氏に依れば四千九百四十一万と云はれ大体四千万乃至五千万であり、支那人口四億として十人に一人乃至一人以上の割合で回教徒は分布してゐる。特に往時の西域たる新疆省から陝西、甘肅に多数存在してゐる。支那の回教徒はその本土にあると新疆にあるとを問はず、その職業は智的職業に就いてゐるもの少く、牛羊皮革類を取扱ふものが多数である。特に支那本土には回教徒の豚肉禁忌、回教徒以外のものになつたものを攝らぬ習慣から回教徒の宿屋飲食店が多く散在する。支那の回教徒は漢化の程度の著しい漢人と大差なき回漢、漢回、東干と呼ばれるものと、然らざる纏回、纏頭回と云はれる新疆省に多数存在してゐるものとの二つがある。

支那に於いては回教は特にその中心地と見做さるべき地方が二つに分たれる。一は雲南を中心として貴州、廣東を結ぶ一系列、他は河北、陝

西、甘肅、新疆を連ぬる地方である。此処に支那に對する回教の傳來経路が二つに分たれる事實が示されてゐる。アラビア——支那史に云ふ大食國は、特にその商人達に依つて回教を伴ひつゝ、インド洋を経てインドネシア地方に進出した。此の回教の南下の一分派として、支那に於ける回教は既に七世紀の中葉マラッカ水道を越えて北上廣州に來り、其処に「蕃坊」なる租界を作つた事に此の南からの経路を経た端緒がある。此の廣東から奥地雲南に傳はり其処に根強く弘布される迄はかなりの年月を要してゐる。此の外に他の一つの経路——陸路西域を傳來したものがあつた。ペルシヤ湾から東北に轉ひトルケスタンを經てパミールを越え、天山南路又は北路を經て東に向ひ長安を終点としたものである。唐史に依れば高宗時代には北は蒙古から西は中央アジアまで唐の領土であり、又玄宗時代にはトルコ族が今の新疆地方を台據して一國家をなしてゐたのであつて、回教はこの支那勢力の西漸、トルコ族の東進としての東西文化交流の流れに沿つて西北支那にその發達を見るに至つたのであ

る。然し此の西域経路も唐末五代に亘る内乱のため行路平安ならず貿易交通も一時中絶し、宗代には支那の國威振はず陸路通商は阻害され、九世紀にはサラセン帝国内部に内乱発生し、中央アジア一帯に波及したので、この陸路交通は全く澁滞を極めた。然しながら之に繼いで蒙古が興起し、大陸を統一駅站制度を創設したので東西交通は再び副期的な躍進を遂げるに至つたのである。

現今支那全土に亘つて多数存在する回教徒は、それが回教信奉の異民族の支那へ移住したものの子孫であるとするものと、支那回教徒は漢人であるとなすものとの二説が分たれてゐるが、現今に於いては此の回教徒の祖先は漢人以外の外国人、シリア人、小アジア人、イラク人、イスパハン人、ペルシヤ人、中央アジア各民族、蒙古人、エグヤ人、キプチヤク人などであるとされ、之等各種雑多の外国人が同一の宗教を有つ事を機縁として今日の回教徒と呼ばれる人々を構成されたと言ふのが定説となつてゐる。回教の支那傳來は唐朝初期であるが、これ以後支那と西

方回教国との交渉は頗る頻繁であつて、回教徒、回教国は支那史上重要な役割を有つてゐる。唐朝安祿山の乱には玄宗は清真等を通じてウイグルに救援を求め、救援に渡来した回教兵は廣く陝西、甘肅、寧夏、青海、新疆等に拡がつたのであつて、後に元朝に於いてもゲンギスカンの中央アジア征服の後從軍せる回教兵も又此の地に多数止つたのである。加ふるに猶蒙古は回教徒を利用して漢人を操縦せんとした方策を採つたが故に、その戦功に依つて回教徒を重用し、且宗教上束縛する事なかつた爲め當時回教は大いに隆盛を極めたのである。明朝になつても回教徒はその勢威衰へず、依つて回教曆を採用し豚肉食用禁止令を發布し、回教徒をして各省に分散せしめるなどその回教徒懐柔の政策が残されてゐる。清朝に至つては高宗の天山南路征服の後一変して回教徒に対して強力な彈圧政策をとつたのであるが、そのため十九世紀後半二度に亘つて大叛乱を起すに至つたのである。中華民國に至つてからは当初回教徒を利用してたのであるが、後に之を壓迫し中央化せんと努めたのであるが、

此の政策は他省に於いては成功したか、ソ聯勢力の侵入と共に新疆省のみでは成功せず、極めて注目すべき事態を醸してゐる。新疆省は全人口約二百五十万前後であるが、其中トルコ族としての纏回百二十五万、漢回四十万を占め、漢族四十万、蒙古族十三万を数へるに過ぎず、此処に於ける纏回の勢力は優に漢族を圧へてゐる。新疆省に於ける回教徒の歴史は今日に至る迄極めて凄絶な紛乱を示してゐる。一八七〇年イギリスの援助の下にヤコブ、ベックが新疆独立を企図し、清の將古宗棠に破られた事は始まり、爾後英露兩國は夫々その回教徒を利用する事に依つて新疆省への勢力拡張に相尅した。中華民國以後一九一一年から一八年に至る間は楊增新が回教徒を巧妙に統治し得たのであるが、一九二八年彼が暗殺され金樹仁が之に代るや、金はソ聯との密約に依つて回教徒の彈圧を加へた。一九三一年漢人官吏の暴行に端を発して叛乱が勃発、甘粛より馬仲英は回教徒軍を統率し新疆に入り、馬仲英を追走させたのであるが、之に対し新疆省辦盛世才が新疆南部に於いては纏回サビト、ドモ

ライギリスの支援を得て東トルキスタン國建設を企てる如き、全新疆は將に混亂の極に達したのである。ソ聯は馬仲英と盛世才の双方に武器を貸與し、抗争せしめたが、後馬軍を見捨てたるため、盛軍が力を得、馬仲英はカシガルに逃れた。斯くて新疆は盛世才がソ聯の援助の下に獨立國に等しい新政權を樹立して今日に至つてゐる。ソ聯は外蒙を侵略してその宗教否定政策を強行したか、新疆進出に當つては特にその回教に對して極めて慎重な態度をとつてゐる。

支那回教徒は民國以來、蔣政權の少數民族に對する同化政策の對象となり、その圧迫に反抗し続けて来たのである。茲に日本の支那回教徒への対策も存しなければならぬ筈である。昭和十三年北京に於ける日滿支三国要人参列の下に開催された「中國回教總聯合大會」は

- 一、團結を強國にして一致協力して回教を擁護すること
- 一、中國、日本、滿洲國の提携を主張すること
- 一、中華民國臨時政府を絶對的に支持すること

一、兇暴なる共産黨の打倒を期すること
の決議をなしたのである。斯くの如く支那回教徒の動きは南北を通じ我が占領地区に於いても勿論、それは反共、親日的ではある。然し蔣政権の国内回教徒に対する同化政策の強行は寧ろ懐柔策とも云はるべきものであつて、その南京時代には新疆省より回教徒有力者の子弟を集め教育した。事変以後回教徒の分離傾向の防止のため必然の工作を続け、回教徒白崇禧を擁立してその抗日結合を企図してゐる状態である。支那回教徒の本質は決して反共、反蔣であると簡単に結論する事は出来ない。その回教の有つ嚴重な戒律の恪遵と別に、又支那的な放恣の一面を忘れてはならない。寧ろ我々はその傳來後既に千年を経た支那回教のその極めて高度に支那化された回教の本質を率直に認識する事が当面の課題である、と云はなければならぬ。

第五款 滿洲

滿洲國に於ける回教は清朝「遼東招民開墾條例」に依つて漢人を入滿せしめ開發に當らせられた時より本格的に振興されたものである。然し後漢人の経済的勢力の伸展の結果、漢人は左迫を受けるに至り、十八世紀中葉以後は漢人の入滿を禁止するに至つたのである。然し十九世紀に及んで、此の禁止政策の軟化につれて再び漢人回教徒の入滿多く此地に今日の基礎を造るに至つた。然しこの外に滿洲回教徒には帝政下の東進政策の發展と、特に十九世紀末葉の旧東支鐵道の開通に依つて露領から流入したトルコ、タタール系の回教徒がある。その後ソヴィエト革命以後の亡命者としての回教徒が流入し更に増加したが凡そ總數三千に過ぎない。滿洲に於ける回教の歴史は以上の如く僅々二百年余を算するに過ぎず、その總數も又總人口四千三百方に対し回教徒數大體二百万から二百五十万と云はれてゐる。漢人系回教徒は陸路山海関を經たものも、海路

山東半島から渤海湾より入滿したるものも、何れも旧奉天省に落着した故に、現今奉天、東安、錦州等に最も多い。一方トルコ、タタール系回教徒は海拉尔、哈爾濱等に多く居住する。

右の如く滿洲に於ける回教徒は漢人回教徒の後位者にその本来の姿が見られるのであつて、此の点それは「少数民族」として、五族協和の旗の下に支那事変、大東亞戦争を通じて滿洲全般の動向に渾然一体となり、些かの対立なき協力を誓つてゐる現状にある。現今新京の「滿洲伊斯坦協會」の著実な活動に依つて、各地の回教徒一体の反共への動向が示されてゐる。

第五節 結 言

三億に上る回教徒は現下の世界戦争との関係は夙に識者の注意を惹き、
我国としても大東亞戦争及び戦後経営に當つて、マライ、スマトラ、ジ
ヤワ等の回教徒と接觸の關係に立つに至つたのである。全回教徒と云ふ
は宗教の別れ民族的傾向の分離があるのはいかまでもない。モロッコ、
アルゼリア、チュニジヤ、リビア等のアフリカ群、エジプト、アラビヤ
諸国、トルコ、イラン等の一群、アフガニスタン、印度、西北支那等の
一群、存らばマライ及び南洋諸島の一群に大別され、右の各群の間には、
カトリック教にみるごとく組織も、連絡も交通も存しない。
さりながら全回教としてはその南洋にあるものと、インド、アラビヤ
に在るものとの別なく、從來英國、オランダ等の榨取酷使に喘ぎ、又は
その政治的野心のために悪用されて回教徒本質の姿を保ち得なかつたこ
とには少しも異なるところがない。全回教徒が民族的に結合される事は北

理上その他の事情に依り不可能とするも、精神上においては今日こそ、
 従来の圧政者の羈絆より敢然脱却し、回教諸国が各々その所を得て正当
 の地位に立歸る絶好の機会であると言はれねばならぬ。我国は常に回教
 徒に好感を示し来つたものであるだけ、此の機会を擱み極力回教徒の地
 位向上に協力すること、只に皇軍に依り米、英、蘭等の抑圧、搾取の魔
 手から解放された回教徒に対するものなるのみならず、更に進んでイン
 ドよりアラビア、アフリカに亘る全回教徒に向つて呼びかけねばならな
 い。

第四編 自然環境と民族の關係

第一章 地勢と民族との關係

第一節 海・岸 地帯

總ての地理的境界の中で、最も重要なものは陸と海との間にある境界、即ち地的性質に於て地球表面の二つの重要なもの、同の過渡帯である。休む時を海に強い侵襲を受け、之に抵抗する花崗岩や砂岩の硬軟に運れて様々なる幅を有してゐる此過渡帯には、陸と海との争闘の跡が宿つてゐる。居住し得べき陸地の擴がり、萬國の公道なる海との間に常に中間物となつて、衰ることなく残つてゐる此海岸は、人類の初期、船や帆の發明されぬ時代に於ては、人類の膨脹に對する絶対の境界であ

ったが、今日でも同様に人間の住居に対して最も外の限界となつてゐる。
 ・歴史的順序を辿れば、障壁として第一の役目を爲したものである。然
 し航海術が発達し、人間の活動が陸から海を越えて他國に及びぶに連れ、
 それは海陸兩者を繋ぐ門戸となり、同時に探検、植民及び貿易の出口と
 なり、大陸或は島嶼が海向ふから人類及び思想等の寄與を受ける開放的
 なる入口となつた。障壁と門戸、此二つは海岸が歴史に於て常に顔じた
 役目であつた。海上の航路は今日では盛んになつてゐるが、地球上の海
 岸は大部分其の住民に取つての障壁であつて、決して出口ではない。海
 岸は中間帯として其居住者に強い印象を與へる特殊な居住地である。海
 岸地、沿岸平原、海岸都市、或は海岸民族、海岸國民、海岸殖民地と言
 ふ語は、海の影響を強く受ける地、人種或は居住地と云ふ感銘を吾等に
 與へるものである。海岸は「海岸線」と云ふ古い語で言ひ表はされるやう
 なものでなく、刻の得べき広さを有つた帯である。此帯は自然的に種々
 の特色を有してゐるが、人類学的意味に於ける本帯の特性は、歴史の時

期の異なるに従ひ、異なる場所に於て人数が其帯の外縁及び内縁を利用してゐるので明らかになされてゐる。

北海及びバルト海岸の古代ドイツの海岸諸市は海から河を遡つた海岸帯の所謂内縁に位し、肥沃な沖積土の中に走り出た山脈の支脈を確實なる地盤としてゐた。古代のロンドンもテムス河三角洲の縁で潮の来る平地や無人の沼地等のある内縁の堅い地盤の上に在つた。總て河に臨める海港は此の種の広い低平な海岸の堅い内縁にあつた。之に反し低平な海岸では、内縁は内地から拡かつて来る居住地の限界を劃し、又河や入江にある航海の終点として海を越えて外國から来る移住民の目的點でもある。近世の海上殖民、殊にアメリカの殖民の歴史は、目的を立て、出て行つた。移民の目的は單なる貿易者と異り、河に依つて内縁線を内地に劃し、現在よりも海岸帯の幅を一層広く且つ一層明瞭にするにある。近年般船の形態が大きくなつた結果、二つの相反する事實が見られる。港を以て限界としてゐる内縁は水の深い海の方に向つて移動した。従

つて海岸線は狭くなつた。佛のルーアン、ガール、ブルは、蘭のドルドレヒト、カロツテル、カムに夫々海上貿易の御株を取られたのは其実例で、外縁が其附近に大船の爲にオエの港を開設する事に依つて最初からの幅を保留し内縁にある港は其の水路を浚渫する事に依つて海との航道を改良し進歩せしめて居るのには、独のブレイトンとブレイトン、ハーフエント、英のロンドンとキルバイ、なご港の双生児と云ふ現象が出来る。これもなほいものは最初からの港が其利益を保留せし事を求めて、河や鹹湖や浅い入江を浚渫して運河を作る事、ベテログラードとクロレスタツドの關係の如きがある。然し緯度が北に穿つた地方では、バルト海や地中海の海に臨んだ外港は、内港が氷に閉ざれる冬期には独舞臺になる。しかもなほいと、ハンブルグに於るクツクス、ハーフェンの如く、外港は内港と海との間の水路が改良する毎に衰退して行く。然し海岸帯の幅員は浚渫や運河浚渫に依つて收縮を防がれるだけなく、却つて幅員を増加せしめられる事もある。即ち深く内地へ海洋航海を拡張するに至つた事は、マン

チエスタール運河がマシチエスタールに及ぼした事例で明かである。斯く近年入江や河口に於て穿る海岸へ出ようとする傾向のあるに反し、海上航行の終点が好適な場所と於て深く内地に侵入し行き、海岸帯の最小と最大との幅員を著しからしめ、以て内縁の不規則性を増加してゐる。是れ文明の進歩に伴ふ海岸帯の進歩である。

外縁が最も重大な意義を持つ所は、大抵一時的ではあるが、航海の初期、海上殖民及び或場合に原始居住に対しては、耕作すべき平地が少しもなく、且つ内部の狩猟場や牧場から隔てられて居る峻嶺な海岸に於てのみ重要で、太平洋上の珊瑚島や大山島の如く、又は極地、準極地の如く海が其住民の食料の大部分を供給しなけれならぬ所では海との接触を断つ事か出来ぬ。テラデルフエゴや、アラスカの山多き海岸地の住民は、何れも海岸にのみ居住し、大洋の狩獵と漁業ばかり考へて居る。シベリヤ北東部の海岸居住者たるチユクタ人ばかりの凍野海岸を採取して居る。淡水の沼澤と北極洋との間の砂丘の上に其天幕を張つて居る。即ち

彼等は此処に位置する事から、海嶽の漢嶺と同時に北極圏内諸河の夏季の洪水からの保護と言ふ利便を得て居るので、ガイーンランドの西海岸全部に於て、エスキモー及びイヌイットの人の居住地は共に暖流の強い影響と食物を得る事の容易なことが半島や島の突出した地點に其居住地を定め、るのに興つて力ある事を示してゐる。古代のノース人の居住地の遺物は一般に外海岸から後方約二十哩で、峽湾から離れた夏季の植物の生ずる隠れた谷に発見される。

航海及び探險の歴史の初期に於て、岬角の顯著なる地點は重要なる海上の目標であつた。イベリヤ半島のセントガイーン岬はギリシヤ人及びローマ人に取つては居住世界の西南の限界を劃するもので、幾世紀の後ポルトガル人がアフリカの西海岸を南下した時にも到る処岬は其の目標となつた。斯く小海角や海岸近き島嶼は般船の目標となれるのみならず、初期の海上殖民に取つては、貿易の中心として好適な場所であつた。是はアムステルダム人の地中海岸に於ける根據地に見ても明らかである。

古代ギリシヤに於ては、其の海軍力が微弱であつたから、海賊を恐れ、都市は何れも海岸から数哩隔てた内地にあつた。然し其の心配が多少少くなると、位置は貿易に便利な海岸や半島に移された。ドイツのバルト海岸及び北海に於ける都市が海岸から退いて位置した事は中世時代に同海岸を掠め、海賊の禍害を幾分保護する爲めで、リユニヤツリが本来の位置より現在の所に遷つたのは、屢々海賊の厄に遭つたからである。

海上植民の初期の歴史は一般に二つの地理的階段を示してゐる。第一は島嶼及び岬角をなせる海辺の外縁の占領で、次で海岸の内縁、又は更に遠く内地に向ふ前進である。此の初期の階段から成熟階段への進歩は、植民の経済的發展の程度に関するもので、初期の階段はフェニシア及びギリシヤの植民地に最も良く現はれ、地中海や近隣諸海に通ふ海上の大公道上に最良なる貿易場となつてゐるやうな所を求めた。然し國民が植民地を國民的及び商業的發展の流出口と見る考へが進んで来ると、新地に於ける人種的商業的方面の繁栄は大領土を占有するにあつて、交

易の基礎たる地方の資源の発展にあることが知られて来ると、其居住地は海岸の外辺から漸次内縁に拡がる。肥沃なる平原と航行に堪へる河川があつて、其内地に湘る事を誘ふならん、更に遠く内地に這入つてゆくので、近世の植民運動の大部分の歴史は皆かうであつた。即ち入口を急に過ぎ去つて内地の土壤が肥沃で天然の資源が豊かで労働、相当の報酬の取れる所ならんば、何処でも其所に定住するのである。

總ての海上運動は陸地から他の陸地に向けられるので、水陸間の相互関係は大部分其兩者間に存する近接の度合に依つて決定する。

而して其の近接の度は主に一陸塊の版節の多少による。海から遠いと云ふ事が其國を活氣あらしめる。接触から妨げらるが、大陸の心臓に入り込んで居る大洋の動脈は、其心臓をして遠隔未見の海岸の生命の脈膊を感ぜしめるものである。バルト海の入江には其奥の海峽ペテログランドを以て本大陸のギアジアの部分を大西洋文明を運ばしめる。では否いか。一國或は一大陸の海岸の版節を決定するに、カトリック、リッセル及び其説を

租述せる人々は海岸を以て面積を除した。此の方法に依ればヨーロッパは海岸線一哩に対し面積百七十四方哩、濠洲は一対二百三十四方哩、アジアは一対四百九十方哩、アフリカは一対七百方哩である。人類地理学の立場から見ると、海上への出口として海岸線の各哩に割当てられる土地の面積を示す限り、此の方法は有効である。斯くして得たる商は、人類地理学者に取つては乾燥無味な数字ではななくて、海辺と内地との間に存すべき関係の索引である。然し此の公式に對する非難は、海岸を帯と見ずして線とする概念から出發して、地球表面の一地帯たる海岸に何処にでも存する次の諸相即ち位置、地勢、起伏、面積、前面の海と後方の陸地へ近接するに容易であるかを忘れて居ると言ふにある。是等の諸相は世界海岸の各地皆不同で、海岸に於る人類の歴史に重大な影響を及ぼし、地球表面の總ての部分中、海岸は陸と水との辺縁として兩者の特色を共有し最も複雑な性質を共有して居る。人類の居住地として最も早く人類地理に關係を有するものは、海岸で、水陸錯綜の環境に於て相

互に變化を與へ合つて居る多種多様なる影響を注意して解剖して見ると、地理的勢力の纏れ合つた相互作用が内地の盆地から近海まで、近海から外洋まで、各々相違し又各歴史的时代の異なるに從つて異つてゐる。海岸は住民を有する陸地と流動性の無人の海との間の堅固な境界帶で、其の歴史中の重要なる三要素は、奥地の近寄り易いのと海の近寄り易いこと、である。されば海岸の地勢にして奥地との交通上不便を感じるならば人種的商業的發展の爲めに住民は厭でも海の方に向かはなければならぬ。奥地から政治的に隔つてゐる爲に、其の孤立と長い海の境界の保護とを利用する事はフエニシア、ホアジアの多島海岸、カエニス、セロア等の共和國が之を証明してゐる。陸方面の高さと幅、之を通ずる峠の數と其の難易、殊に其の奥地の大きさに對する其の産物の價值は奥地と山岳或は沙漠に隔てられてゐる海岸との間の交通の量を決定する。山脈が高原の懸崖から、海岸地の内線線に沿つて走つてゐる所、印度の西岸、アフリカの大部、アメリカの太平洋岸等は最も嚴しく内地から切り離

され、ノルウエー海岸の背後をなしてゐる高地は、トロンドヒムの窪地を
通ずる唯一條の鐵道に依つて横ぶる事を許してゐる。此障壁がノルウ
エーのスエーデンに對する歴史的関係をデンマークに於けるよりも遙に
不親密ならしめた所以である。又アドリア東海岸の山地の障壁が、天然
の良港を地方的ならしめ、且つオーストリアの貿易の大部分をドイツ諸
港によらしむるが如き、スペインの未産の乾燥な不生産的の台地が周圍
の深谷から峙つて、政治上國民的統一を妨げるが如き其の杯例である。
山脈が海に走り出て居る處では、其の間の深谷が内地から海岸に至る大
公道を開くもので、此の地勢はイベリア半島の大西洋岸と地中海岸より
遙かに早く開けしめた。ギリシヤのトレス海岸からペロポネサス南端
に至るまでの總ての地方は東方、即ちアジアに面して開ける結果、多島
海の文明に近接し易く、ギリシヤ人の海上及び文化的な生活は此處に集
中して居た。後印度半島は諸河の深谷に依つて内地と主要なる河港の接
触を保つてゐる。北部フランス、ドイツ、南部ロシアの如き緩傾斜の處

では、海岸から近接の容易な広い奥地に依つて利益を得る。然し斯かる低平原、陸地の縁辺は、沈泥に埋つた入江や浅い沼やマレゲロトブの生えた沼澤等、海辺其の自身の爲めに内地との自由なる交通を地理的に妨碍されることか厚くある。海から海岸へ近接する難易は、主として其肢節の程度如何にあるか、此の肢節は其の海岸帯が隆起性を持つてゐるか、沈降性を持つてゐるか、に依つて異なる。内海の底が浅い場合には、海岸線の輪郭に出入が無く、平滑で、従つて沈泥の多い河口の外巻と言ふものがない。斯る海岸は、國民を保護して静かな沼沢の濱に住ましめ、海岸近い臆病な航海を飛達せしめる。低平原土地の水を排出してゐる河流は、海岸附近の泥濘物の爲めに今少しで海に出ると言ふ処まで来て、物憂さそうに幾哩かの間を彷徨して居る。でなければ沈泥の床たる三角洲の間は無数の分派を出して浅い妨けの多い水道となつて、大洋に達してゐる。斯かる河は水陸間の公道としての價値はない。

土地沈降の結果、低平となつた沿平原に於てすらも、従来の河谷に段

々水が入り其処が長い入江に接するので、海上からの近接が益々容易になり、其処は舌の如く懸出た低い小山の崎と入江とが交錯することになり、北米大西洋岸デラウェア湾よりバハイ工瀬産まで、英國の北海岸、エトワレド半島岸の峡湾等皆斯様にして出来たもので、岸近い海は浅く、沙洲などは大船を寄せることは出来ぬ。而かも尚斯かる海岸は水陸両者の密接なる接触を保ち、従つて両者に相当する活動の發展を促すのである。肥沃な土壤と地方的資源とは、其の土地を海よりも更に有望なものとなし、住民は海員たるよりも農夫となる。又海岸線の複雑な海岸は極近い間隔を置いて次ぎ々に入江が並んで居り、居住や耕作に適する平地の量少なく、其の背後に急峻な山が控へて居て、奥地との連絡を妨げておる。陸からの近接が不自由なものと、海からの近接が極端に容易なものと、地方的資源の僅少なことの相集つて、其の他の住民を海上遠く駆出してこれを農民たらしめ、海員たらしめ、海軍学者たらしめ、佛のブリタニーはフランス商船の五分の四を供給し、彼処の遠洋漢

業者はニューヨーク、ロンドンからアイスランドに至る海を支配してゐる有様である。

隆起若は沈降の面積が広い場合には、海岸は一般に滑らかな單純な形状が長く続くが、若しくは入江及岬角が長く交互に続くかする。従つて海岸の相異は、海との交接の度合の相異を示し、其の港湾は広い範囲に亘る峽湾、三角洲、砂州、或は珊瑚礁に囲まれた沼沢、或は湾を囲んだ山の麓と言ふが如き一種の型を示すものである。隆起の度が急激に變化した場合には、若しくは地質時代が異つてゐる場合には、此の種の型の次に直ぐ他種の型のものが続くと言ふ事になる。

多くの港湾を有する海岸の進化は、大きい聚まりと度さ、並に内陸と連絡する爲めの優良な河川運河か鉄道かを有する少数の完備せる港に海上活動の集中せられる事を示してゐる。勿論、初期には多種多様の港湾は何れも量に於て種類に於て殆んど同様の活動を呈してゐる。十四世紀に於て、英國南海岸の諸港は小さい丘から活動してゐたが、今ではロンドン

ン、ハル、サガレプトンの如き少数良港との競争に合つて衰弱するに至つた。植民時代に於ても亦然りで、ニュー・イングランドの岩石崎岬たる海岸は一団の人々が移住し来つた時代には、殆ど總ての入江に港がある。何れも甲乙の差がなかつた。然し後に至つて、海上活動は著しい地方化を生じ、異同を来し、港灣の数も少くなつた。

海との接触の十分な、且つ出入の多い海岸でも、遠隔せる島を有して沿海航海から大洋航海を容易にし、一層広収なる海上企業を成さねば充分なる歴史的意義を發揮することの出来ぬ事が屢々ある。北方ノルウエーからブリタニーに至る長い歐洲の海岸は、かの氷島、フェル島、シユトランド島、オークニー島、大ブリテン島、アイルラレド島及び海峡諸島と云ふ長い島々の列があるからこそ、初めて其の歴史上の重要な役割を演じたのであつた。ギリシヤの歴史が印象深い劇を演じたのは、當國の東海岸、即ち水の深い数多の灣入を有し、其の豁谷は此の多島に向つて開いてゐる東岸であつた。此辺に遙か西方シシリヤ、イタリアへの

殖民を實行した企業的な精神が飛達したのであつた。斯く海岸から遠く離れて居る島嶼は、發展を誘ふ之に依つて其の附近の海岸の歴史的意義を増すものである。又、遠隔の地から来る航海者に有利なる足場を提供し、又今まで死んで居た海岸に生命を吹込む媒介者となる事も屢々ある。東部アフリカのゲアファイ岬から喜望峯に至る長い單調な海岸は、十六世紀にポルトガル人が印度に至る途中の立寄場を設けるまでは歴史的意義を缺いて居た。従つて島嶼を有することの少ない海は、歴史的發展が後れると言つてよい。

海岸居住者は、掘立小屋の下を板で洗はれるのを好む多くのマレー種族から、南西アフリカの砂丘の重なり合つてゐる海岸に居住して海の手を少しも知らぬブツレユマレに至るまで、悉く海との或親しみを示して居る。其の天賦の能力と風習とが海上發展の成果に大影響を及ぼすことは勿論であるが、其の程度如何は彼等の前住地の内陸であつたか海岸であつたかの地的環境、若しくは海と接触した時間の長短及び其の必要の

程が如何に依つて決せられるものである。海岸は、海上からの近接が容易であると言ふことか、其の歴史的意義に重要な関係のあることは、ふまごもなにか、其の地の可住性も亦其の一要素である。南アフリカ及びベルギーの大部分の海岸の如き沙漠海岸や下カリフォルニア海岸の如き不毛な海岸は其の國の住民を海岸から排除して仕舞ふ。喜望峯殖民地の西岸にある天然の一良港たるサルガッ湾は、流石の企業家たる英人すら之を利用することか出来なかつた。何人となれば、其所には清水の供給が全くないからである。上古のエジプト人が河の生活から航海業へ移る事の遅かつたのは、疑ひもなくナイル河三角州の海岸線が冷温なる処や、不毛なる砂丘や、瘴癘の氣に充ちた沢地が多く、又紅海岸が広大なる不毛の砂原になつて居るからである。此処には今日も猶住民の数が甚だ少くである。之に反し、大陸の縁辺が稠密なる人口を支へるに足りる肥沃な地方では、勝れた肢節があつて海岸線を長くしなくとも非常に多数の人々が海と接能するやうになるから、其の地の人民が沙漠や山嶽の

爲めに、或るは既に溢る、ばかりの密度を有する人民の占領の爲めに陸
 方面の発展を阻害される場合には、彼等は其の本國を振り捨て、海を渡
 って、他國へ突進して行く、南郭支那の人民が夙に南洋に発展したのも
 、印度人が同じく早く南洋に自國の文明、宗教及び印度の如き肥沃な大
 境域の海岸に於ては、海上活動は決して早くから開けるものでなく、内
 地活動の結果として発展するに過ぎない。海上活動が一國活動の主要素
 となる事は偶然である。歴史上海上の舞台に早く現はれて、華やかを役
 割を演ずる海岸地が、可住地であることは勿論であるが、其の耕地は二
 エー、イレガラレドの如く肥沃の程度に制限があり、ギリシヤの如く量
 にも制限があり、ノルウエーの如く兩者共に制限されてゐる所もある。
 斯かる地にして更に世界的商業に對して有利なる位置にあり、多少の佳
 良なる港灣を有するならば、海上國と成つて植民的発展を遂げることば
 容易である。又内地との交通を隔てられて居る狭長なる海岸地帯は若し
 非常に肥沃であるならば、其の國民の海上活動を集中し、之を優勢なら

しめる事が出来る。古代のフェニシヤ人は斯かる地勢に恵まれ、ヨロ
ツパ、アフリカの大西洋岸地方へ航海し、植民することが出来た。アラ
ビヤ東部のオーマレ海岸も殆んどフェニシヤ海岸其儘で、其他の住民は
中世に於てはペルシヤ海とアラビヤ海との間に活動し、ムハムツト時代
以前には印度に達して居た。彼等は回教に依つて大いに其の勢力を増し
、南支那と貿易し、更に南洋にも及んだ。十一世紀には東アフリカ海岸
に達し、十七世紀にはホルトガル人至此の海岸より追ひ拂ひ、十九世紀
の中葉には、遠洋貿易にも従事した。佛國の海上史上に於けるブリタニ
アの活動は其の位置、出入多き海岸と島嶼、ニエー、マアウランド
の漁業、西印度の貿易に俟つ所のあつたことと言ふまでもないが、海岸
に肥沃なる土地と、沿岸に豊富な魚類と肥料に適する石灰分の多きを爲め
である。ノルウエーの峡湾も地味よき沖積土と豊かなる海産物の爲に比
較的多数の人口を支へ、以て活動の基礎を固めて居る。又特別に多産地
帯の縁辺なる地味の瘠せを住民の少い海岸でも、其の位置が世界的貿易

に向つて特に優秀である場合には、著しい海上活動を遂げ、貿易上にも商業殖民にも大発展をなすものである。アラビヤのイーメンは此の例で、高さ一萬尺に達する山脈が中央アラビヤの高原砂漠を此の地で限り、夏の季候風が運んで来る水蒸気を凝結し、其処に広い膏地を作り、それが段々の珈琲畑となり、菜園となり、灌漑されてゐるが、其椰部の乾燥せる海岸地は人口が稀薄で、流の縁だけに多数の港があつて高地の豊かな産物と密集せる人口との出口となつて発達して居る。然し印度洋から地中海に出る海上の通路に位し、三大陸の会合點附近に居た事が、其商人をして歐洲、印度及び東部アフリカの貿易の仲介者たらしめたることは云ふまでもない。

歴史を見るに、海岸に居住し、何等かの自然力に依つて海上の活動に導かれてゐる民族は、實際無限に発展すべき機会を有つて居る。小さな場所も広大海上の優勢を示し、殖民帝國を建設する地盤となつてゐることは、中近紀のガエニス、セノガアの歴史が之を證明してゐる。國民

の海上発展は常に續る重要な意義を有してゐる。而して是れは広大な
る範圍に及ぶものである。ロシアの如く内陸國民が海岸に向ふ運動も、
英國や和蘭のやうな海國民の海岸及び海外への発展も、広い範圍に及
る民族の移動を促し、海岸に沿うて人種的要素を複雑ならしめてゐる
而して相反することは、滿洲及び朝鮮に於る日露の關係が充分之を認
して居る。海岸地方は總て海に依つて支配されてゐるから、其の住民も
一種の特色を有してゐる。しかし之を近隣内陸の住民との間に存する相
違は、寧ろ其の環境の相違に基くわけではなく、寧ろ其の海岸が移住を
受けた爲に起る種族的或は人種的の根本相違に起因するものである。ロ
シア今日の人種分布図を見ると、西にドイツ人、北にスエーデン人があ
る。

バプア人とマレー人とが隣合つて住んでゐるメラネシア群島では、マ
レー人が新来者として海岸を所有し、黒人なる野蠻人が内部へ後退して
居る。フィリッピン群島に於ても原住民は侵入者たるマレー人の爲めに

追はれて内地に退き、海岸を圍繞する者はマシー人である。日本の北海
 道辺に住する未開人アイヌ族は今日では海岸の全部を日本人の爲に占領
 され、彼等は内地に感まつてゐる。南アメリカに於ては、好戰的なるキ
 ューロ族が嘗てブラジルの全海岸を占領してゐるが、今日では此海岸地
 帯は白人や黒人の爲に占領され、北アメリカに於る初期の英人及び佛人
 の領土も之と同一の状態を海岸と内地に示して居る。精力旺盛で商業的
 殖民的性質を多分に有してゐる。海上國民は、海上を大道とし、到る處
 の海岸に居住し、海岸と内地との住民の間に前述の如き差別を齎してゐ
 る。

以上の如く通則としては新來者が海岸に占據して居るか、時には海岸居
 住者が人種上古い種族に居する事がある。今日バルカレ半島に於て古代
 ギリシヤ人の發着は海岸に止まつて居る。是れ南部ロシアの平原から陸
 続きに侵入して来たスラフ人及其の他の北方種族が主として内陸民で、
 従つて彼等が本半島の中核を占領し、原住者たるギリシヤ人を追ひ立て

し海岸に送つたからである。是れ多くの半島をして古い種族の最後の立
場たらしめる人類地理的作用に外ならぬ。シルウエー海岸の端に当る最
南部から北方トロンドヒム辺までは、其の骨相、中政のマルブ族と親以
せる者が居住してゐるが、彼等は元半島全体に亘つて分布してゐるものに
、スウエーデンから来た従来のノルマン族の移民の爲に岬角や島嶼の
やうな外縁部に押出されたのである。海外からの移民が、一國の海岸的
周囲を占領すると、多くの場合人種の純粹性が危くされる。是れ最初劫
掠の貿易の意志で来るから、女子を連れて来ない爲め、土地の女子と結
婚し以て、貿易場や、植民地を建設するからである。従つて住民の人種
的特質は、二つの構成要素の結合、其の以前の姉妹關係の遠近及び固有
の人種的背反性の程度に依つて異なる。商業の事のみを主に考へてゐる海
上國民は、小団体を以て動き、其の活動も一時的であるから、土着の海
岸住民を變化せしめることは眞の殖民國民よりも少ない。殊にそれが其
の活動の根據地として成るべく最小の土地を選ぶ場合に於いて然りであ

海岸の人民は、二種の混合の結果なる雑種以上の或特質を示してゐる。航海術が発達すると、海の境界は各方面からの並接を容易にし、従つて諸國の人々を吸引し、其の人種を多様ならしめ、之は世界的特質を與へる事が出来る。大抵は海峽ほどは顯著である。ニューヨーク市を見ると支那人町や、イタリア人町や、ロシア人町や、ハンガリア人町等がある。かと思ふと、印度人やアラビヤ人やペルシヤ人等も住んで居る。アテーン、マルセイユ、コンスタンチヌポリス、アレキサンドリア、ボストン、インド其他地中海の諸海峽の雑種の住民も亦之と同様である。海岸の特色なる世界主義及び商業上の活動は、言語の上にも影響を與へてゐる。即ちかのフランス人やスペイン人や、イタリア人の商業上の常用語となつてゐるリシガ、アフラシカはイタリアの商業が優勢であつた時代に地中海の東岸地帯は起り、イタリア語の台にギリシヤ語、アラビヤ語、トルコ語を採りしものので、今でも地中海岸の多くの海峽で話されてゐる。

商用英語として今日支那及び極東の諸港に於てリンゲアフランカの役目
をとりあつるものは、英語は支那語、マレー語、ホルトカル語が多少混雑
し、支那語の採用法に依つて整理された斐則語である。
海岸は仲介者の自然的共有地である。海岸地は仲介者を産出し、後に
彼等をもつて他の海岸地を占領せしめる。陸上への発展は海上への商業的
発展に比し、彼等の注意を引くことが極めて少い。アフリカのギネア海
岸ドイツ領の土人は、真の海岸商業民の典型で、彼等はカメルン州の
流入するムレゴ河の下流及び三角州に位置を占め、山のなほい地方を通じ
て内陸に至る良好な航路を支配して居る。彼等は此処を守つて他の近寄
るのを嫉み、總ての競争を排斥し、商業を独占し、内陸に至り、内陸か
ら来る總ての貨物に対して通過税を課して居る。農業は能く限り之を避
け、女子と奴隷とは芭蕉の束と芋薯とを依つて居るが、多くの労力を要
する耕作は全く顧みられない。アラスカの海岸も同じで、クヰク河には
居る工人は、内陸の工人から陸路の皮を買ひ、之を海岸地のアメリカ商

人に売つて利益を占めて居る。斯かる独占耕地の政策は、ミンダナオの海岸居住者も之を内陸種族に行つた例がある。即ち彼等はマレー内地の木材及び農産物を低廉な代價で買つて居る。而してマレー人に河や海岸に進み出ることとを許さぬのは、彼等が海岸の支那商人と接触しはせぬかを恐れてゐるからである。彼等が其の独占権を擁護する事は実に猛烈なもので、フイリツピンに於けるアメリカ政府は僅かに軍隊の干渉に依つて之を破る事が出来るに過ぎない。

職業、食物及氣候の相違は、更に進んで海岸民と其の附近の内陸民との相違を生じ、殆んど何処にも存在する人種の相違と著しくする事がある。西部ブリタニーに於ては、比較的肥沃なる海岸地に住んで居る住民は、乾燥な花崗岩質の内地の住民よりも平均一時身長が高いが、是れ彼等が食物の供給が豊かだ、家門を出ずれば豊富に獲得があるので斯く体格の増進を来したのであらう。又ギネア海岸の黒人は、低平な沖積土に居住し、沼澤の魚類にも近接して居て滋養をよく取つて居るので、其の

附近内地の高原に居住する種族よりも強壯で、容貌も勝れて居る。然し
此処でもやっぱり人種の有利な混交と言ふ事を其の原因と見做すべし
はゆかない。

海岸の住民が、何処か遠隔の海外から移住して来た所では、彼等は過
度の精力を其の地へ齎して来る。此の精力こそ彼等を其の母國から出発
せしめた原動力である。五様な國民は、從來の定着民族よりも遙かに
多分な開張性と企業心と忍耐力とを有してゐる。是等の性質は便宜の多
い新境地に移される事に依つて更に刺激されるものである。其の原住地
に於て海育ちであり、移住先に於ても海育ちである彼等は、海岸地帯を
離れる事はない。是れ彼等が最も良く利用し得る條件を海岸に見出すか
らで、大洋の大公道に常住し、相敵視する人種の住んで居る幾つかの領
土を超え、陸行では近接するに遠い諸國と容易に交際し得る位置にあつ
て、両者の商品及び思想を、食物及び宗教を交換し、以て文明の子とな
り、剛勇なる進歩的の使徒となる。されば一國の海岸は一地方的な文明

では反く、世界的文化の発源地である。其の文化は此の地よりして内陸へ廣まるるのである。エジプト、ペルシア、メキシコ、太平洋岸のやまな不毛な近接の容易ではなぬ土地或はカリフォルニア、西部アフリカ、東部ルソンの海岸の如く大洋に面するのみで近接地のない不利な地理的位置にある地方、世界文明の搖籃地から隔つて居る様な地理的恩恵の少ない地方は例外である。

長い出入の多い地中海の海岸は、近世に至るまで各時代を通じて海岸が内陸各地と文化發達の點に於て相違なる事を示して来た。ギリシヤ古代の哲學者等は内陸の都市と海岸の都市との間に存する根本的相違、殊に思想の感受性、智力の活動、文明に対する嗜好の點に於て左様である事を承知して居た。眼をフリッピンに轉じて見ると、同島のキリスト教を奉ずる者、或は開明せる住民の大部分は海岸近くに進んで居る事が見られる。内陸に住む殘餘の三割五分の大部分もマニラ灣を中心とする

キリスト教文明地域の陸方面への発展を示すものである。

海外は海上を経て出入する諸勢力の通過地域で、其の諸勢力と性質と分量とは、其の海岸の接する海、或は大洋の如何により、其の海岸と向ふ側の潮に流はるゝ海岸との関係如何に依る。海岸の地理的位置が小海の一部としてあるか、大洋の一部としてあるかは其の歴史の根本的要素で、土地が肥沃であるか、其の輪郭線が不規則であるか、海及び奥地から近接が容易であるかと云ふやうな地方的条件よりも一段有力なものである。各時代は於て内海及び外洋に属する歴史的意義の各段階に就いて言ふべき事は、等しく其の海岸に沿へる國家及び民族に適用される。而して其の大きさ、其の帯的位置、其の大洋大陸に対する関係等海の文化的可能性は増減するものは悉く其の海岸の生活に其の姿を現はしてゐる。小國から大國に、小海から大海に移つた人類地理の進化は、それか地中海、紅海、バルト海のやうに内海に位置するか、支那海や北海のやうな同線的な海上にあるか、或は外洋に瀕するかは依つて絶え

が変化を受けて居る。世界歴史の初期に於て比較的小さな内海に瀕する事は其の海上の視界を広め、人心を咬るが、さうかと言つて、廣過ぎて恐を懐かしめる程ではなかつた。然し歴史的發展は人類が小地域から大地域へと移つて行く法則に従つて、外洋の岸へと出て行つた。地中海及びバルト海の重要なるは、一時的であつて、歐洲の大西洋岸が、更に重要となる序幕的意義を有するに過ぎなかつた。大西洋の重要さをも、アフリカ及び南アメリカの同航により世界を廻る太平洋に連絡した時、初めて充分なる意義を有するに至つた。斯く歴史の進歩に伴ふ地理的地平線の新進的移転は海岸位置の價値の徐々なる進化を見る。海上の主權は小木登から大木登に移り、小海港から大海港に移り、リュールベツクからハンブルグへ、ガエニスからゼリアへ移り、後年には英國南岸の諸小港からリバプール及びタラスに移つた。

海上の諸勢力を陸地に送るものは海岸の散在であるか、歴史的機序は其の海岸の位置次第で多量の例外がある。即ち限られたる地域に南上

・ 出入の極めて少ない海岸が海上の優越を示し、開化の中耳を取つた例がある。カフエエシヤの光彩の陸離たる歴史は、其の位置アラビア地帯上に在つて、地中海と印度洋との中間、即ち三大陸の会合點に在つた爲めに劣等なる巷湾よりも遙かに優つてゐる。此の特殊なる位置の利益は種々の時代は於て又種々の程度に於てシリア及エジプト海岸諸港を優越ならしめられた。中政の包囲的なる山々を越えて行く種々の陸路と、交通頻繁なる海路との連絡たるアドリア海頭の海岸地は幾時代かの同其の海上諸市を相次いで般賑ならしめられた。之と反対の位置にあるゼノアは背後にある土まで高からぬ山脈に通ずる二つの峠の落合ふ所にあつて、ストラボ時代から今日まで繁華な海市となつてゐる。中世のゼノア、ピサ、ヴェニス、及びバルセロナが海上に権勢を振つた事は、長い出入の多い海岸が必ずしも必要でなく、唯左までよくない巷でも有利な位置にあるれば充分である事を示してゐる。帯的位置の相違の爲めか経済発達に相違の爲に全く異なる産物を有する二海岸の中間に位し、海上運輸が容易であ

り、廉價である地方は貿易及び仲介者の仕事を確実に榮えしめる。地中海の中心に位置を占めるカーセイジは、文明の著しく発達した東方と、文明の全く停滯してゐる西方との間の貿易事業に従事して、殷賑なるを得たし、又中世に於てはオランダ及び西部ドイツの隆盛なる工業都市と、文明発達し遅滞して居たロシア、ポーランド及びスカンディナヴィアの中にはドイツのハンガ諸市があつて目醒ましい発達を示した例がある。

原始時代及び初期の海上貿易は、其の市場も狭く、仲介者も近く居り、主要なる物産地も近く並んでゐる。然し交通貿易上絶好の位置にある多くの海岸が、貿易が発達し、其の範圍が広くなり、兩側の二國民を直接交渉させるやうになると、仲介者の利益は失われろゝが普通である。是れ小範圍から大範圍に移る人類地理的進化の一現象である。地中海岸は印度に至る航路が発見されるや次第に衰微した。其の重要なる地方的意義はスエズ運河を以てしても遂に復活されなかつた。十六世紀になつて貿易の範圍が北海から大洋に広かると共に海上権力が広い範圍に互

つて移動し、のみならず、地方的政治事情は一時海岸の使用法及び其の
價値に著しい変化を及ぼした。古来アチネの心臓となつて居たピレウス
は、十九世紀に於けるギリシアの独立が復活するまで眠つて居た。日本
の徳川時代に於ける鎖國政策は北はカムチャツカより南は印度に到る國
民の海上活動を制限した。合衆國の大平洋岸に於ける眞の生活は、該國
がアラスカを取り、ハワイを加へ、フィリッピンを獲つた後に爲まつた

海岸は時としては海岸其物の地的変化に依つて重要なる歴史的意義を
減ずる事がある。殊に大河の爲に泥が海に運ばれ、海岸の外縁が絶えず
延長される地方に於て然りである。アドリア海の支配權が漸次河口に移
つて行つたのは、海岸が泥に埋められたからに外ならず。ストラボ
ンに依れば、スピナは本来海峽であつたが、彼の時代は既に海から十
哩離れて終つた。英國ケント州に於ける幾多の初期の港灣及びブエーラ
ンド沼澤の堅い縁にあつたのは、今ではイギリス大海峽邊がウオッシュ

湾から数哩の内地にある。一國民は決して其の海岸全部を同一程度に利用するものではない。一國の勢力は良港に集中され、其等諸港の海上に於ける仕事は専門的になる。其の國の領土が膨脹し、文明が進歩し、産物が増加する毎に是等の海洋の門戸を通過する人及び貨物の分量が多くなる。合衆國のニューヨーク州、デラウェア州、及びネブラスカ州沿岸は、今日に於ては其の奥地が僅かにアパラチアン脈までであつた初期植民時代よりも遙かに重要になつてゐる。又同國人キントウ湾は南部の經濟が發達すると共に、奴隸使用から自由労働に、棉栽培の独壇上から工業の勃興に伴ふ種々なる貨物の産出に其の活動を盛人ならしめた。巴士運河が開通して太平洋対岸の市場を求めて居るミシシッピ盆地の物産が太平洋の出口から他へ運ばれるやうになれば海上的意味に於て、同海岸は其の其の價値を發揮するであらう。

海岸の人民と其の水陸の環境とを形成する總ての要素との關係を注意深く解剖するには、何よりも先づ海岸地の度表、肥瘠、隆降、海陸から

の近接の難易、海上の島及び対岸との関係及び位置の遠近等を考察しな
ければならぬ。海との接触を容易ならしめる海岸地の小工の設備はか
りでなく、更に大まな大陸の肢節との関係をも考へねばならぬ。是等種
々なる海岸的環境の要素は、此処にもまゝに住む人々の目的次第で、其の
使用法も其の影響も非常に相違する。即ち海賊は、錯峽や港にたつて居
る入江を求めて、其の隠家となし、商業民族は賑やかな港や航行に堪へ
る河口を選ぶ、然し移住者は静かな港に向つて用いた肥沃な谷に定着し
、其の海岸を母國との貿易に使用し、又内陸民で従来海上生活の歴史を
有せざる者は安全な沼澤地に森林を伐つて此処に家住する。

第二節 海洋

地球表面の水は、地質的構成及び地理的形態の相違の著しい陸地に反し、到る所大体同様で、海水と泉、或は小川の水に於けるが如く唯鉱物的成分を異にして居る位のものである。従つて之に接觸する者を同一の型に入れて捏ね、其活動に同一の方向を與へ、其航海には同一の道具を用ひ、同一の方法を採らせ、以て海上貿易者、或は漁民を遠隔未知の而かも親しみある海岸に渡らせ、恰も其故郷に於けると同様に安易を感じさせるのである。

人は地球表面を包む可動性の覆の一部となつて空氣及び水と共に取合はされねばならぬ。水は分散するに極めて便宜の多い所から、動物を広い世界に分布させるが、人は自己の移動力を自ら増大することが出来るから、其動力を空中及び水中に適用して、世界的のものとなり、空氣及

ひ水の統一の反映となつた。

永久に休むことのない流動性の水は、常に人類の無精と言ふ戸を叩き、内に眠つて居るものに対して常に覚めよと言つてゐる。流水と潮汐とは、常に野蠻人の好奇心を刺戟し、流れゆく水の行方は何處であらうかとの疑問を起させる。河流は重力に依つて野蠻人を大洋の岸に運び、世界の大公道たる海洋に導いてゆく。斯くして彼等は洋流や氣候風や貿易風等に運ばれ、歴史の黎明期には世界人として地球上の可住地に到る處其姿を見せるやうになつた。幾百年或は幾千年の間、漂浪的海上生活は、彼等をして未見遠隔の地を領せしめた。彼等は其處に孤立の生活を営み、新環境の影響を受け、心身文化共に全く新しい発達を遂げ、生存競争に對しては新武器を以て身を堅めることになつた。初め彼等を故郷から隔離した海も、海上発展と共に反つて其統一を求むやうになつた。

航海の発達に連れ、大洋が大公道に衰じたことは、人類の歴史に於て

極く近頃のことで、恐らく人類が其環境に対する最高の適應形式であらう。蓋し海に適應することは陸に適應するよりも遙に困難であるが、其困難が多ければ多いだけ、知識的物質的報酬も一層大きいからである。

海は世界民族の聯合に寄與し人類の歴史即ち経済的社会的政治的知識的の何れにも最も重要な部分を形成して居るから、海の制御は歴史に於て特に高い位置を占めてゐる。従つて歴史は其最も劇的な活劇を海若しくは大洋の岸を舞台として演じ、其筋は最も複雑で、驚くべき発展が含まれてゐる。セップの丘の上に建つたローマは「セップの海」を有する英國の前には顔色が無い。世界史は海と言ふ結合的要素を考察の中に取入れなければ、半ば其意義を失ひ、部分々々の集合に過ぎなくなり、全体としての意義が乏しくなつて仕舞う。如何なる歴史でも、陸上に於ける人類の運動及び活動と相違んで海上に於ける其等の記録を包括しなれば、世界史と言ふ名はつけられぬ。学校用地理教科書は、人類が陸上で耕作し、建築し、墾取を取ると同様に、大洋に於て探検し、植民し、貿易す

る事が十分研究されて居ない。今日世界的大洋に因する驚くべき一事實は、此大洋の爲めに其岸に住んでゐる人々の間に多種多様な關係の結ばれてゐる事である。帆船、汽船及び海底電線の通路は大洋と言ふ共有地の上に網の目にも似た形を成して拡がつてゐる。此大洋を渡つて人類の商業的、政治的、知識的、或は移住的活動が一大陸から他の大陸に行はれてゐる。世界の大海國民はフエニア人の古から英人の今日に至るまで各々世界の正史の中に殊に海上活動に依つて自己の時代を記入し、世界と言ふ網の目の中に各々の物語を織込んでゐる。

人類と海とりの自然的接觸、浮流する瓦乃至水腫れおした動物の死體から思ひつゝいた原始的な航海手段の發明は水に近く住んでゐた民族の業績である。是れ亦断り必要に應ずる發明中最も重要なものであつて、初め用ひては捨て、一度使つば欲めたりであらう。而して更に漁獲の結果を良好ならしめ人が爲めに海岸や河岸を超えて冒險に出るやうな習慣を作り、或は新しい獵場を求め、原始林の纏繞を避ける爲めに開けてゐる

水路を使用する習慣を生ずるに至つたのである。

最初に工夫されたものは筏で、是は木や葦の類や空洞になつた木の幹等を組合せ、又膨らした動物の皮で浮かしたものであつた。此種の筏は今猶諸民族、就中木材を産する事の少ない地方に於て使用されてゐる。メソポタミヤ、印度、モロッコ等にも之と同様のものがある。木材のない國では、河や湖の辺に生ずる葦を小舟に代用する。アフリカのチヤード湖畔、ペルシヤなどに此例を見る事が出来る。水上運搬具として第二に工夫されたものが、筏よりも進歩してゐたことは言ふまでもない。メソポタミヤの筏師は、柳か揚柳の枝を編んで大きな圓い籠を作り、水の侵入を防ぐ爲めにそれに密に縫つた皮を張つた。是は今日でも尚用ひられてゐる。又刳拔舟が非常に広い地理的分布を有して居り、孤立した地方には文明の進んだ時代にも尚残存して居た事は、此種の舟が必須の且つ顯著な發明（一つであつて、世界の諸地方に各、獨立に製作）作されたものであることを示してゐる。河湖のやうな静水は初期の航行に対し最も好適な條件を提供するものであるが、内陸から

海上航行への方法が常に取られるものは定まつてゐない。構造の進んだ小舟を河海に使用したエジプト人が、海上貿易の點に於てフェニシア人及びギリシヤ人に劣つてゐるの故、ナイル河の沈泥が通航を妨げてゐるからである。コンゴ河の舟航に利用された長さ五十呎から八十五呎に達する大きな輕船も、下流に大瀑布がある為め、海岸に達することが出来なかつた。又海岸に住んでゐても、唯浅い水の中に入って魚を槍で突く位に過ぎない民族もあつた。ブツシユマンヤ、ホツテントツドやカフアール等は其種類で、彼等は海とカ接觸を殆ど利用しないのである。斯かる簡單な航海の初歩時代にある地方から、轉じて地中海及び歐洲文明の未だ波及せざる以前に於て、既に其方面の最高能力を有してゐた地方を求めらるなら、唯、楯を太平洋の大島嶼、及び其隣接の印度洋中の島々に屈するであらう。即ち土人の構造に係る帆船及び外装船はインドマレー文明の及んでゐる海岸の全部、即ちマラッカから太平洋中の最遠方に位する小島にも分布し、アジアの東辺も此広汎なる海上能力の領

介内に属してゐた。南部アラスカ及び英領コロンビアの海岸に住んでゐる日本人も恐らく此領域内の介岐であらう。比領域に接して北方にあるのが、エスキモアの居る北極洋の長い々々海岸である。エスキモア人は誰の助も借りずに、海豹の皮を張つた舟で海上漁獵を試み、此類のない海上能力を有し、且つ長い間海に親しんで来た為めか、毫も之を恐れることなく、之に耐へる力も亦甚だ旺盛である。

海に対する最高度の親しみは太平洋中の大洋洲に発達した。温和な氣候と、海のみの單色に包まれて、戦争、商業、耕作何れにしても狭い自己の生れを島を出て他に航しなげればならぬ此地には、胸と腕との筋肉を海と言ふ体操場で鍛へ上げた人種が住んでゐる。彼等は椰子の花環に蔽はれた島上の自宅に居るよりも島を圍繞してゐる海上に在る方が遙に多く、移住は彼等にとつては自然の教であり、其歴史を作る業績である。彼等が種々なる経験に依つて自己の地理的位置の優劣なることを自覺し、家郷を離れて数百哩の航海を為すことは、ポリネシアを探検した多くの

人々が之を證明してゐる。マールシヤル群島民の方位正しき地圖、同群島中レーリツク島民の海圖クツクの南洋人より得たる地理的知識、ポリネシア人の神話、未來觀念、天文学の萌芽等、皆海から生れたものである。

此半水中動物的なるポリネシア人と、海に親しむと言ふよりは寧ろ之と争ひ爲めに無理に海上に押出され北極圏の民族との中間にあるものは温和な氣候と潮汐の差の少ない霧の浅い嵐のない海を恵まれてゐる地中海の島嶼及び半島の住民等である。斯かる海は親しみを呼ぶことは出来ても、剛毅な大膽な航海者を養成する事はない。即ち育兒室ではあるが、練習所たることは滅多にない。ザアルアルプスから吹下す嵐の爲めに波の高いアドリア海に面して居るアチアの有名な水夫の外、地中海上の人は一様に波の高い外海に於ける信用を得て居る。今日イタリヤ諸港から世界の諸港に至る航路は多くイギリス、ドイツ、オランダの汽船会社に依つて經營され、其視野を地中海の沿岸だけに限られてゐる。

タリ、その位置は航海上旧来の内海方法手段を墨守して、大西洋航路の開
けた今日でも猶大海に適用するに足る準備がない。

海や大洋の大いさは海上冒険を索引し、又は排斥する決定的要素であ
る。殊に海上発展の初期に於て然りである。屈曲出入の多い海岸は、單
に海岸帯の長いことを意味するだけでなく、其灣入は漁夫、貿易商及び
植民が之を根據地とし更に広い世界に衆出す爲めの準備の地である。沿
岸航海で達し得られる内海若しくは近海は早くから人を誘ひ、更に対岸
へ近接し易いこと、及び附近に島峙のあることに依つて横断航海を試み
させる。従つて海上発展の初期に於て全きをなすものは肢筋の小さな海
岸と入江の港とである。一次は海上の眼界を広むべき、取圍まれた内海よ
り更に一層大きな水盤に依つて、商業的にも植民的にも工業的にも航海
能力を開発した時で、地中海に於けるフェニシア人、ギリシヤ人、バル
ト海に於けるハンザ諸市、北海に於けるオランダ、イギリス人の如きは
それである。次は最後の階段で、決近い三角洲の育児室も取圍まれた水

盤の小学校も次第に小さくなつて来て、更に一層大きな海上的精神が動き、大洋を其活動の世界にしやうとした時で、かのノース人が狹灣や瀬戸で育ち、此海やアイルランド海で磨いた腕を大西洋横断第一人となつて之を發揮した事實に徴すべきである。入江から取囲まれた水盤、其次に大洋、是れ人類地理学の段階を類推せしむるもので、中盤の水盤は大洋への前進に対し殊に必要なる條件である。

内海及び海辺は十五世紀頃までは大洋中歴史的に最も重要なる部分であつた。内海は近接せる隣保的集團乃至文化的事業を絶えず交換する場所を構成し、其全体を高め且つ統一するものである。而して急速なる海上發展と人種的合同を導く傾向とは統一を人種の上にも及ぼす。是は地中海文化に於て、種族が統一され、文化、言語及び國民が歴史的一體を爲した事に依つて明かである。是其中の一団体が共通の努力を集中して岸から岸へ、縦横に渡り行くからである。フェニシヤ人、ギリシヤ人、サラセン人及び十字軍等の地中海岸に於ける活動は總て此水盤を中心とした

相互的關係を形成するものであつた。即ち劃然と限られた海は、之に接した總ての岸に起る密接なる地理的關係を示すものに外ならない。

此海も地中海と趣を同じくし、其沿岸は今では全くケルトン族化す。本来北岸と西岸とにケルトン族の住民を有してゐたバルト海岸も、歴史の存する頃には全然ケルトン化されて仕舞ひ、フィンランドの海岸及びロシアの海岸の大部分すら之に倣ひ、斯くして文明の統一された結果は、此人種の統一となつた。而して此統一が歴史的に最も有意義であつた時代は、十二世紀から十七世紀で、恰も北方の地中海たる役目を演じた。當時、インガ諸市に屬する無数の船は梭の如く遠隔せる海岸に往復して通商貿易を行つた。アジアの西南にある紅海は、其岸の沙漠であるにも拘らず、大陸を繋ぐ位置にあつて、アジア及びアフリカの隣接的要素を保つてゐる。此長い裂目のやうな峡谷の兩側が同一の氣候を有してゐることは、人種的混淆を容易ならしめ、此處をラツツエルの所謂「紅海団民族」と言ふ人種及び文化の中心地たらしめたのである。此處に

於ける人種的大容解方はセミケツク族である。

・ 包圍されたる水盤の周圍にある隣接的位置は、諸岸に居住する民族の間に或人種的關係及び婚親を成立せしめ、其間の人種及び文化の統一を容易ならしめるものである。古代及び中世に於ける地中海岸乃至黃海岸は此原則に支配されてゐた。支那は其広大な面積、長い海岸、大なる人口、早くより開けた文化等に依り、此水盤の中心的要素をなし、日本及び朝鮮は其文化的植民地であつた。日本は歴史的に見ると黃海に面した九州から始まり、文學、醫術、工学の方法、政治上の制度、及び佛教等何れも黃河流域の人民から之を得たりである。孔子の教は朝鮮と同じく支那から待來した。三世紀前に日本は朝鮮の釜山、即ち東洋のカシムに植民地を有してゐた。海賊及び密輸入の目的の爲めに日本人は、支那の諸川に深く侵入し、朝鮮は幾世紀かの間活潑なる貿易及び外來關係に依つて支那との密接な關係を保つて居た。然し支那は今日日本に留學生を送つて居る。日本が開國以來此海を繞る隣接間の力を突然恢復し、殊に三國

に多くの貿易國に依つて興へられたのであるが、日本は其利戟に對し、最も活潑に反應した。それは歐洲諸國中最も強く大西洋向の國からの反射的影響を感じたと同様であつた。斯くして日本は地理的條件及び人種の結束帶に助けられ、支那及び朝鮮を其文化的植民地に變じ初めた。岡目には支那及び朝鮮の最後の安寧は日本に依り育てられ、日本は左様する事に依つて中華民國に對する古い負債を還すであらう。

支那の歴史は常に内陸的性質を帯び、其政治的膨脹は陸に向つて最も広い周圍に亘り、最も連続的に内陸植民を實行し、其排斥政策は太平洋に向つて其視野を鋭からしめ互に拘らず、西方（この交渉及び西方）に向けられた勢力は、重要な点に於て東方及び南方に向けられだものとは比較にならなかつた。一連の辺海は寄港地を點在せしめて、日本、フィリッピン及び遙か離れた濠洲の最外線に到るまで容易なる水路を提供し、南支那海、シヤム灣、スール、セシバク、ジャバ諸海の周圍、海岸から遠く離れを諸島の海岸地方は、数世紀間支那貨物及び其文明を受容し、支那人の血を混入し

て居る事をどうしても否む事が出来ない。遠い濠洲には微かな痕跡を止めるに過ぎないが、ブイリツセン、ボルネオ、スンダ諸島及び教世紀間支那人が商業的植民地を樹立して居たマラッカ半島の海岸に於ては、明かに痕跡が認められ、後印度の東半に於ては其處が水陸共に支那と一國をなして居り、其人種が純粹でないにしても、大部分蒙古人種であるだけ、支那の影響は誠に著しい。為めに其洲からマラッカ地峽に至るまで南支那海の全海洋は、人種及び文化共に同化の程度が実に強い。東京地方に於ける住民も其文明も支那其終で、安南の海岸地方及び島嶼はカンボジアの小山まで支那人に占領され、交趾支那と言ふ名は、其所の支配階級の住民が如何なる起源を有してゐるかを示すものである。シヤムの住民中六分の一は支那人で首都バンコクには大きな支那人町がある。後印度の南シンがポールに至るまでの全経済生活及び智的生活の大部分は支那人の活動が其中心となつてゐる。

豪嶽をなした海の歴史的意義は、其帶的位置及びそれと之を囲む陸地

との關係如何による。吾等は黄海、日本海、オホーツク海、ベーリング海及び北極洋と連続せる海を通じ、南から北に至るに従ひ、歴史的意義を漸次減じて居ることを認める。バルト海は遙か北方に位し、湾は氷に閉之れ、陸は氷結して仕舞ふ様な冬が長いので、歴史の舞台に上る事が非常に後れ、ハンザ同盟の勇敢にして熱心なる活動があつたにも拘らず、其重要な歴史的意義を有する時期は短かつた。地中海は單に其帶的位置が佳良であつたのみならず、之大陸の会合点と大西洋から大平洋へ東半球を横断する海上貿易の通路に當つて位置したと言ふ利益があつた。印度洋はラツツエルの所言の如く、眞の大洋ではなく半大洋に過ぎない。赤道より北方部分に於て、此海は狭くなり、内海のやうに囲まれて居り、此處には眞の大洋の水界的氣界の特質がない。潮流や風は堅く抱き合つてゐる陸地の爲めに秩序を乱され、不変の北東貿易風は此處では、北東及び南西交互の氣候風と入換つてゐる。此氣候風は帆船時代既にアラビヤ、アフリカ東岸と印度との間の航海に眞直な進路を取らしめた。又此

印度洋の北半は、地中海を大きくして其南半を取去ったやうにも見える。即ち東方と西方には著しく異つた國民性を有する半島があり、北に向つた湾入がある。唯此方は大規模である。此海はアジアとアフリカの歴史を連結し、紅海及びペルシヤ湾に依つて歐洲及び地中海を其影響範圍に取込んだ。オーマン、イスマンのアラビヤ人はフェニシア人と同じく大陸間に位置を占めて三大陸の仲介者となつた。

歴史の黎明から、北部印度洋は交通頻繁なる道路であつた。アレキサンダー大王が東洋に至る海路を発見するや、此路に依つて印度の植民は貿易業者や僧侶は印度文明の諸要素をズンダ諸島に送り、東洋の貨物や學問や宗教は西漸して歐洲及びアフリカの縁辺に達した。斯く北部印度洋は一は其形の爲め、一はアジアとアフリカとの間に位置し、全地球を回つて「歴史的濃密帯」の初まる緯度に在り、殊に歐洲と支那との間の古代及び近世の海上通路の東の部分として地中海の丁度東南に位する爲めに連続した歴史的事件の中に捲込まれて来た。歴史の立場から言へ

ば、十五世紀前は、此海は取囲まれた海としての性質を具備してゐるの
で、大西洋や大平洋よりも遙に高い位置を占めて居た。然し斯かる海の
常として歴史的全盛時代は非常に早く過ぎ去り、十六世紀には衰頽し、
スエズ運河の開通と共に僅に其頽廢を免れた。然し此衰頽期中にポルト
ガル人、オランダ人、イギリス人等が喜望峰を回つて此海に入つて來た。
斯くて内海的性質が大洋的意義を有するに至つた。

取囲まれて豪狀になつてゐる海や辺海は悉く其面積が小さく、それに
接せる陸地圏は比較的に限られてゐる。而して其水面を限る者は唯小さ
な半島や島嶼である。従つて膨脹の終点として提供させる地域は限られ
て居り、貿易の需給を充たす資源及び人口も限られて居る。地中海、バル
ト海の如きは其好例で、沿岸諸國の發達、政治的理想等何れも之を證明
してゐる。成長は空間を要し、従つて歴史の進歩には、小海域から大海
域への進歩が伴ひ、其海に依つて起る人民と陸との關係は絶えず複雑に
なつてゐる。歴史上の大きな時期で、海を持たないものはなく、又之に

継続する時代で其海上世界を拡張しないものはない。ギリシヤ人は多島海を、ローマ人は全地中海を、中世紀は地中海と更に北海及びバルト海を加へてゐる。此世界洋が範圍の広がつて来た歴史中に取りられるやうになつたのは、一に歐洲人の膨脹の然らしめた所で、彼等は過去二十世紀の間世界史を作る上に於て最も遠くまで出掛けた人々である。其大陸の位置と構造とに依り、歐洲人は常に西方海岸を出口とした。南はフェンシヤ海から多島海、それから地中海、更に大西洋に出て、北はバルト海から北海に、それから北大西洋に出た。斯くして南大西洋に依つて太平洋に出たのである。発見時代に於ては、新航海をすする毎に、歴史的地平線は広がり、航海術の改良される毎に、各地の距離は減じ、今日世界洋上の航海に要する時間とは古代に於て地中海上の航海に要した時間よりも遙かに短い。然し地中海線の広がる事は各時代に於ける既知世界と新世界との間に存する歴史の相関的内容及び意義を同程度に増してゆくものではない。古代に於けるかの小地中海諸國に見られたやうな濃密な集中的國民

生活は今日では何處にも求められない。大洋は溢れた國民的勢力の出口を提供したもので、其機會の多少は之に面する陸上の大小、位置、及び其他の地理的條件に依つて各々異つてゐる。

地球を南北西半球に分けて見ると、一方は陸地が豊かであり、一方は水が大部分を占めてゐる。其爲め西半球は歴史上各々異つた役割を演じ、北半球は人類の居住に最も大なる利益を與へ、南半球の人口の五倍を收容してゐる。是れ甚だ意味ある事と言はねばならぬ。之に反し南半球は漂渺たる水界を有し、世界周航的の探検や貿易を促し、以て大洋的大公道となつてゐる。北半球の廣大なる地域に於て何の障礙もなく文明が発達したのは、急速なる進化に必要な根本的條件を有してゐたからである。即ち北半球は歴史的に最大なる密度を有する帯を含んでゐる。文明が一度北アメリカに移植されると、之に次いでスエズ運河、パナマ運河等最も大きな大陸間の交通線に沿ひ、自分だけの世界周航の水路を有するに至つた。大洋の大きさは実に驚くべきものである。然し黒海、地中海

北海、大西洋及び大平洋の航海は航路の長短に従ひ、其物質的意義を異にしなす。大洋は陸地の如く其大さの効果を表面に現すことなく、碧い凄じい織物を以て包まれて居る。原始時代の航海には、水夫が岬から岬へ島から島へ傳ひ行くのであるから、海岸に包まれた小さい内海が最良の條件を備へてゐたが、今日では大噸数の海洋汽船が其過ぎて行く大陸間の広大なる地域を或程度まで反映してゐる。

大洋の大さの非常であることは、其中立性の基礎となるもので、中立であるといふことは、政治史上近世に初まつた思想である。其原則は大洋に關聯して起つたもので、其處から小さな海に押広められた。小海は以前軍事的政治領域であると思はれ、従つて其面積は限られて居たが、此事實が彼等をして渡らしめ、占有せしめ、統禦せしめ治安せしめたのである。ギリシヤ人はエニシヤ人を多島海から排斥して其所をギリシヤ人の海となした。ローマ人は地中海全部をローマの海となつた。スウェーデン及びデンマークはバルト海の支配者として榮之、ハンザ諸市は其

入口で通行税徴収の関門を設けて通行税を徴し、勝手に商船を排斥した。十六世紀の初、印度洋はポルトガルの海であつた。スペインはカリビアン海、否太平洋をすら独占せんとした。今や國際公法に依つて政治的領域は僅に海岸から三哩或は大砲の達する範圍に限られ、爾余の大水界は世界の大道として何の支障もないものとなつた。

地球の表面が二割八分の陸と七割二分の海とに分れて居ると言ふことは、自然地理学及人類地理学上の大切な事実である。此割合であるが爲めに、人類の住み得べき陸が人類の住み得べからざる海に、島として浮き出て居るのである。故に人類は又他の地上生物と同様に容易に、除くべからざる島國性を有して居る。それから水は又、陸と陸との距離を遠近種々に分る類の棲息し得べき地域を様々に分合し、人種的文明的の親疎をも支配して居る。更に又、唯人類だけが遠近に航行する爲めの公道であるから、陸と海との關係を研究して人類移動の道筋と目標ともも知ることが出来る。

陸は若し大陸の如く大なるものなれば、人類の大集團地となり、島嶼の如く小なるものなれば、人類の小集團地となり、其相應に之に居住するも

のの用をなして居る。然し又其位置次第で、アフリカとヨーロッパとの如き隣保関係となり、其歴史も亦互に相交錯する様になる。或は又南米と濠洲との如く、相隔絶して近代の如き頻繁な交通も、尚此兩者を相接せしむることが出来ない。故に陸の分布が或は密集的に或は隔離的なることは、遠大の結果を齎すから、之を雲煙過眼視してはならぬ。最後に大陸と島嶼とは、位置、地形、雨量、河系、動植物等に依つて人類の爲めに、種々なる生活状態を奏すものである。

大陸と小陸とを自然地理学及び人類地理学の両立脚點より比較して見ると、一方には大小に依つて之を區別し、他方には歴史的影響に依つて之を區別せねばならぬ。左に此兩者間の關係を示して置く。

一 獨立陸地

甲 大陸、大きいので獨立し、能く多数の人類を支へ、目つ文明の各條件を具へて居る。

(一) 島國的大陸 昔の狀態と近代の文化とは著しき相違である。例

(一) 陸接地を有する大陸 是は幅狭き海に依つて隔てられ、歴史的事件には相共通せる點がある。例、ヨーロッパとアフリカ。又ベリリング海の周圍にあるアシア及び北アメリカ。

(二) 大洋の島嶼 其特色は大陸及び他島嶼から非常に隔絶し、独立分離した歴史を有して居ることである。例、セント・ヘレス及びパイランド。

(三) 大洋の群島中の一節 前者に比すれば、左程独立的でない。例、ハワイ。

(四) 大なる島國 是は大いさの點では、大陸の独立と似た所があるが、位置の上から見て独立性を稍缺いて居る。例、ニュージーランド、ボルネオ、マダガスカル等又文明的意義に於ては、大英國及び日本も然り。

二 附屬陸地

(一) 沿岸島嶼 其歴史は隣接大陸の歴史と密接に關係して居る。例、ユーベーア、ロング、アイランド、ヴァンクーヴァ、樺太、セイロン等。

(二) 隣接地を有する島々にして歴史的關係の前者ほど親密ならざるもの。例、台湾、カナリヤ島、大英帝國に對するアイルランド。

(三) 内海の中にある諸島 固圀悉く陸なるを以つて、東西南北、何れの方面にも交通の便宜がある。例、ジャマイカ、瓜哇、クリート、シシリー、シラランド、マーリング海中のセント、ローレンス。

(四) 群島にして他の群島とも隔離せざるもの。例、サモア、フィジー、レンドリー諸島。フイリツペン、スル及びサンダ諸島。大アンチリーズ及び小アンチリーズ諸島。

以上の諸々の陸地は、人類の住居地として、其不いさに應じ、互に相異なつて居る。即ち澤山の人類を産み出し、種々の種族を生じ、次第に

人種的特色を發揮して外國の侵入者があつても、容易に之を攪亂せしめざる程に多數の人類を包容して居るものは、獨り六大陸に限ることである。大陸は各々皆種々なる氣候あり、高低起伏あり、輪郭ありて、之が為種々の環境を生じ、其結果各種の人類を生ずることが出来る。然し濠洲は唯一人種、即ちパプア人とマレー人との混血種を生じたに過ぎぬ。是は土地が乾燥して、全洲の境遇、變化なく、單調なるの致す所である。南北兩米の地も亦多種多様のエスキモー人種を除けば、殆ど同一質の人種を生じた。然し人種が同一であるだけで政治的、社会的、経済的には、其程度相互に頗る不同である。即ち沙漠のシヨシヨニイ族や、沿岸のフユイシアンスの様な大きい無組織の群衆もあれば、發達したる農業、土木、國境政體等を有した大きなインカ帝國の如きであつたからである。

島は如何程大きくとも、上説の如き独立の人種的發達を示すものではない。それはボルネオ、ニューギニア、マダガスカルを見て之を知り得るであらう。斯くの如きは全く広大な陸地の特色である。ヨーロッパは

其大いさと、其半島形と、此ニを除けば、之を大陸と稱することは出来ぬ。然り、人類地理学の見地から言ふと、確かに大陸ではない。之を大陸と見る様になつたのは、ギリシヤ人が、自國人と、エーゲ海の対岸にあるカリアン、フエニシヤ、ペルシヤ等の敵國を區別せんとしたのに始まる。されば此考は全く政治的起源を有するのであつて、黒海と北氷洋との間に荒漠たる曠野のあることを知らず、且つ其處にはアシアの氣候及び人種と、ヨーロッパの氣候及び人種が相交錯して居ることも知らずして之を區別したものである。眞のヨーロッパは西部ヨーロッパであつて、是はギリシヤ人の所謂ヨーロッパローマ帝國が段々と附け加へていつたものである。此ヨーロッパは大きさに於ても、高低起伏に於ても、輪郭に於ても此氣候及び人種に於ても、著しく相違し、之を見れば欧亚兩洲の相違を收めて心に思ひ浮べることが出来る。然し、地理的の立脚點からしては、欧亚兩洲の區別は誤謬である。島的大陸即ち米洲や濠洲など於て見らるゝ独立的發達はヨーロッパ如き半島的大陸には

之を望むことは出来ぬ。

陸地の独立は、其大いさ如何にも由り、又其位置如何にも由るもののである。即ち大きければ却つて他の陸地に近く、独立が保たれない。例へばユーラシアは大きいので、アフリカ、北米、否濠洲さへ密接の關係を有して居る。之に反して、濠洲は一番小さいので、大陸中では最も孤立して居る。大西洋中の孤島は面積僅に数方哩に過ぎぬので、他の陸地とは全く交通なく、大発見時代までは少しも人類に知られて居なかつた。相隔絶したる大陸には最も異れる人種が住み、相接近したる大陸には非常に類似した人種が住んで居る。動植物に關して言ふも亦同様である。陸地は北に於て密集し、西に至るに従ひ、半島状を有して相分かれて居る。此近い陸地と遠い陸地とを比べて見ると、動物にも明かた異同が現れて居る。独り北米とユーラシアとは、北米洋の周圍で、相接して居るので、東西兩半球に哺乳類の類似を見ることが出来る。然し是も馴鹿、大鹿、北極狐の如き北極動物に限って居る。之に反して、夏至

歐以南の両半球の動植物を互に比較して見ると、東西の氣候相類似して居るにも拘らず、其動植物は全く類似を見ることは出来ぬ。之と等しく陸と陸との相離れたるアフリカ、濠洲、南米の人種を比較して見ると互に相違し、陸と陸との相接近せる北極のユーラシアと米國とを比較すると、人種が能く似て居る。即ち東西両半球の人種の類似は唯此一點に於てのみ認めることが出来るのである。斯くして、世界の北地にありては動植物も人類も相関係し交渉してゐたことを、南地に於て相分離し相絶縁してゐることを知るべきである。

東西両半球の相接したる所で、人類の類似を見る如く、大陸の相接したる所でも亦人種の類似を見ることが出来る。大陸の相接したる所とは即ち地中海の近傍で、此處にはヨーロッパ、アフリカとが相接近して居るが、其結果、此辺の人種は何れも白哲の地中海人種である。之とは反対に、東部濠洲と、西部アジアとは人種的には正反対になつて居る。それにも拘らず、濠洲の極端とアジアの極端との間には、同一の

マレイ人種が散在して居る。

アフリカが夙に発達したのは、此大陸がアジアと南米との間に介在した為めではない。有力な、頑強なアジアの影響を受け居る為めである。南米よりは何の影響をも受けて居らぬ。さればアフリカは歴史の上ではアジアの附屬物、アジアと言ふ大陸の半島たるかの觀がある。次いで奴隸賣買、ラム酒輸入等のことが行はるゝに至り、アフリカは初めて大西洋方面よりの影響を受けらるに至つた。

アフリカの進歩を阻碍したる大西洋は、人類地理学の立場から言ふと、陸地の分布上頗る大切な現象である。米國が北大西洋の一端に於て発見せられて、地球は陸の帯を締め居ることが初めて分かつた。ノースマンは紀元一〇〇〇年から、一三四七年までの間にアイスランドとグリーンランドとを経て、米國に航した様であるが、其一事を除いてはコロンブス前は北大西洋の兩岸に交通があつたらしくない。次いでコロンブスは米國を發見したが、此時彼の見た米國は、人種も文明も全く今まで見

たものとは違つたものであつた。即ち人種は、白人でもなく、黒人でもなく文明は尙石器時代にあつた。或はノルウエーとグリーンランドとの間の第三紀時代陸橋が米國へ移民を送るの機会となり、斯くして米國は、夙に歐洲より人類を供給せられて居たかも知れぬ。然しコロンブスの米國発見時代には、ヨーロッパ人種の痕跡は絶無であつた。

氷河の末に至り、此陸橋は崩壊し、大西洋は全く南半球を隔離して仕舞つた。大西洋中の島嶼は、数も少なく距離も相隔つて居るので、大西洋の両岩間には交通を開くと言ふことは不可能であつた。是はカナリヤ島を除き、大西洋中の島々が発見當時悉く無人であつたのを見て證明せらるゝであらう。紀元八七二年、ノルウエーのハーファガール時代に、同國に政亂あり、道化フェル及びアイスランドに移つたものが、此兩島最初の居住者であつた。又紀元一〇〇〇年ノースマンがグリーンランドに移住したのが、同島に於ける最初の住民であつた。彼等が此處に達した頃には、土着民の隻影をすら認めなかつた。然し住み荒らした住居

や、船及び石器の断片等が残つて居るものを見ると、エスキモー人が間歌的に此島に來り、暫く居住したもののらしい。

大西洋は斯く東西兩半球を隔離したに反し、太平洋は其北極部にも半島あり、島あつて、アジアとアメリカとを繋ぎ、兩洲の交通を助けた。

北米の土着は全体として見れば蒙古人種的なること、西部エスキモーにはアジア的特徴顯著なること、西北海岸の種族は南洋人及びアジア人と人種的にも文化的にも相類似して居ること等は、何れも皆アメリカがアジアの一大東翼たることを證し、従つて又世界に於ける眞の東洋であることを證明して居る。是は地理的事實から考へても有りさうなことである。北太平洋の風及び潮流は、何れも日本から直接に米国の海岸に押し寄せて行く、支那や日本から海へ吹き流された船は、黒潮と西風とで、是も米国の海岸に漂着する。斯かる例は歴史に澤山発見せらるゝことである。

ペーリニク海には一方にイースト岬あり、他方にプリンス、オウガ、

ウエールス岬あり、其間にダイオミノゲズ島があつて、不完全ながら陸を
なして居る。それより更に南下すれば、コンマンダー島と、アリユーシ
アン島とあつて、カムチヤツカ半島と、アラスカ半島との間の棧道をな
して居る。而して「此兩大陸の間に密接の關係のあつたことは、此ベ
リング海兩岸に住する人類の生理的類似が第一番の證據である」とはゲ
ヤスチン、ウインサリの言である。然し此類似は唯エスキモーとケヌク
族との間に止まるものではない。有名なる言語学者ロバート、レーサム
を初めとして其他の学者は、一八五〇年以來既に米國北西部の北米土蕃
と、シベリアの諸種族との間に言語上の類似あることを度々立證して居
る。ダブリユ、エチ、ドールは北米太平洋岸の住民の風俗、習慣が著
しく南洋人のそれに類似して居ることを発見し、此原因はアジアから南
米まで南緯二十五度の點に於て、大小の島嶼斷続せることに存するもの
と認めて居る。然し南洋の文化が北米に入り込んだことに就いては、オ
、チ、メーソンの説明の方が優つて居る様である。其説に據ると、太古

に於て、西南太平洋岸の氷夫等は食糧を求めて東アジアの海岸に沿ひ、ベリリング海峡を渡つて、米國の太平洋岸に達したのであらうと言つて居る。

凡そ人種の地理的分布を研究せんとする人は、必ず此大西洋と言ふ大地隙を勘定に入れねばならぬ。大西洋は四百年前までは人の渡るべからざる大なる淵であつた。此影響は今日でも尚多少残つて居て、其兩岸住民の運動を指導して居る。即ち此大なる淵があつたので、米大陸は広大な豫備的地域として存じ、其處には石器時代の人々が散在し、而して今日ではヨーロッパの優等人種に新なる活動場を與へて居るのである。

濠洲と南北両米とは、人種の範圍と陸地の範圍とが相符合して居る。之に反して、旧世界の之洲即ちヨーロッパとアジアとアフリカとを見るに、其處に三人種が居住して居るには相違ないが、其地理的分布は各大陸の境域に限られては居ない。就中、白哲人は此三大陸の何れにも屬し、太古からして地中海を白人の海と名し來つた。又蒙古人種は其故郷がア

シアなるに拘らず、北氷洋の岸に沿つてノルウェーの大西洋岸にまで拡がり、歴史時代に入つては、カニユーフを溯り、アルプスの麓にまで達した。黒人種としてもアフリカが本據であるが、之には制限せられぬ、曾ては印度半島、マレー群島などにも居住したことがあつて其残余は今でも尚デツカン、マラツカ、フィリツピン其他に住し、メラネシヤの黒人大中心地と、濠洲の派生的黒人地域との連鎖となつて居る。

ブルームンバツハに依つて代表せらるゝ旧式の人種学では、五大陸に當つて人種を五つに分けたが、是は誤謬であつた。大陸を五に分けると、人種を五に分けることを同視してはならぬ。是は自ら別事である。人種を地理的に區分せんとすれば、タイラーの説最も當を得て居る。即ち其説に據ると、人類は唯矢鱈に此地球表面に散布されたのでは無い。甲の人種は、甲の地に屬し、乙の人種は乙の地に屬し、其特殊の境遇に依つて特殊の型を生じ、それから次第に他の地方に拡がり、而して其途中或は他の人種と混交し、或は種々の境遇に出遇ひ、以て變化を来した

のであると言つて居る。

扱、此入種的運動の原則に基いて言つて見ると、或陸地は位置良好、面積広大なる故、主位を占め、他の陸地は然らざるを以て従位を占むると言ふことである。即ち東半球は主位で西半球は従位を占めて居る。又北半球は陸地に富み、氣候温和の地帯が広いので、主位を占め、南半球は従位を占めて居る。濠洲は常にユーラシアの後塵を拝し、南アフリカと南米とは北隣の助互しに進歩の道を開いたことがない。太古の南米は、南半球にて独立の文明を発生した唯一のものであるが、而もペルソの文明の実蹟は、メキシコや中央アメリカのそれに劣つて居る。

斯く南部諸大陸が従位を占める理由は、他の陸地との接点か唯一方、即ち北方だけであることに原因する。而して其接触が左程密接でないことも亦一原因である。濠洲では交通は散在的の島に由らねばならぬ。米國でも鎖の如き島と、山の多い地峽とに由らねばならぬ。アフリカでは大なる沙漠が間に振つて、地中海と黒人の居住する赤道帯を隔て、居る。

新く其位置が不便なので、南半球は久しく歴史的死物であつた。漸く四百年前に至り、南半球の航路開け、初めて世界交通の圏内に入る事が出来た。而かも此歐化作用に感化を受けることが、既に南半球は北半球に對して從位に居ることを明かに示して居る。

陸地の構造如何は、人種の運動に影響し、從つて其處に居住する人種の發達を支配するものである。即ち單純な構造の大陸は、人種の運動に多くの特色を附すると言ふことは出来ぬ。之に反して構造複雑で、起伏變化の多い大陸は、人種を様々に隔離し、之に様々の特色を發揮せしむることが出来る。例へばアメリカの様な變化の乏しい國では、人類が變化と言ふことを忘れな様である。之に反してアツアには半島あり、島あり、高地あり、低地あり、雪を戴ける山あり、蒸氣を發する谷あり、熱帯、温帯、寒帯に括がつて時としては早魃に、時としては洪水にも遭遇するのので、此處には自ら種々なる文明も發現し、色々なる歴史的結果も生じた。是はヨーロッパにあつても亦同様である。否アツアに比し一層

高い程度に於て同様である。

南北両米にあつては地勢が非常に單純なるアメリカの地勢に變化を與へたものは、北米にあつてはロッキイ、シエラ、ネバダ等、南米にあつてはアンデス等を含める所謂コレゲシラ連山である。此連山に依つて、南北両米は南北に縦断され居る。之に依つて、太平洋文明と大西洋文明とが原始的の米國に於て相對立して居る。然し概して言へば、此兩大陸には沿岸に屈曲が乏しい。若し有りとしても、それは大低極地又、亞極地の都合好からぬ所にある。大きな熱帶的の島々は、不生産的なる大西洋に位して居る。地勢には變化が缺けて居る。是等の事情相俟つて、南米大陸には多くの地方的文明が起らなかつた。

地勢の屈曲には、概して二種あることは、之を心得て置かねばならぬ。一は海岸線の屈曲で、ヨーロッパの半島及び島々の輪郭の如き鋸齒状をなせるものがそれである。二は内地の屈曲で、是は山及び沙漠等に限らぬ。それより起る屈曲である。西藏高原、ボヘミア盆地、ボロ河の谷

間、ナイルの流域などは之を代表して居る。就中第一の屈曲は非常に大切であつて、それは海に接して居る爲めに熾烈なる歴史的活動が起るからである。然し同じ海岸線の屈曲であつても、其大きさ、其位置の如何に依つて大なる相違が生じて来る。例へばラブラドルとユカタン、コラ羊島とスペインとの如きは地帯的位置が異なるので、自ら其間に非常な相違がある。又地帯的位置が同じであつても、隣に乏しく、孤立の状態にある時は其歴史は貧弱とならざるを得ない。アイルランドが、イングランドやユトランドや、ゼーランドと同じ緯度とありながら、發達の著しからぬは斯かる理由の爲めである。

アシアの南部諸羊島の如き大規模の屈曲と、ノルウェー、アラスカ、ペロボンネサス等にあるが如き小屈曲とを比較すると、文化的、歴史的影響が相互に同じからざることを發見する。是は双方其隔離の程度如何に關係することである。アシアの南部諸羊島の如きは、其隔離力は恰も小なる大陸と同様であるが、アツチカ、アルゴリスの如き、又は稍大きな

ペロポネサスでも、其間には入江があつて、其隔離力は之が為め、其隣地との間に小異は起つて来るが、大体の點に於ては異なるない。ヘラスとペロポネサスの歴史の相違は、主として双方の隔離から起つたものであるが、大体から言へば、彼等は共に徹頭徹尾ギリシヤ人である。英國史に於けるウエールスとコーンウォールとの間にも如上の大同小異を見ることが出来る。

以上二の海岸屈曲が兼ね備はつて居ると共に、それが又群をなして居る所には、歴史的發達が最も都合良く行はれる様である。是は地中海に於ても見ることが出来る。又北海とバルト海との谷に於ても見ることが出来る。斯かる地形にあつては、小屈曲があればある程、海との接点が増加し、港湾も出来、岬も防波堤も出来、海岸は船を寄せるに便宜である。又大屈曲は海を小分して航海を奨励し、斯くして隣地同士の間には風俗や習慣の交換が起つて来る。他語を以て之を言ふらうば、斯くの如き地形は其臨海各地の近隣關係を最も便宜ならしめるものである。

南部アジアには大屈曲はあるが、小屈曲が少ないので、自から損害を蒙って居る。ギリシヤ式の小屈曲多き海岸線を有する半島は、此南部アジアに於ては、前印度に於て発見することが出来る。其處にサンガ諸島が基布して、丁度ギリシヤのキクレデス諸島と歴史上同様の役目を演じて居る。又ヨーロッパ式の大屈曲は之を黃海及び日本海の周圍に於て発見することが出来る。即ち其處には、本道、山東半島、朝鮮半島が、丁度大英國ユトランド、イタリ一等と略々同一の割合を占めて居るのである。アラビヤと印度とは印度洋に突出して、其海岸線は可なり長いには相違ないが、其長さとは此兩半島の面積と比較し、言ふに足らぬ程短いものである。半島の輪郭と言ふものは、丁度脳髓の表面と同様なものだ、其貴すべき点は回転部に属する。南部アジアは、葉の敷に於て申分はないが、回転が如何にも少ない。斯かる理由で、北部印度洋は、地中海から東洋に達する爲めに重要な地位にあるに抱らず、其発達は歐洲航海者の出現までは、兎角障害され勝であつた。

大陸の海岸線は、其長さの数字だけを聞いたのでは餘りあてにならぬ。例へばユーラ

ニアの海岸線は、六萬七千哩で、北米のそれは四萬六千五百哩と稱せられて居るが、前者の海岸線は大抵は熱帯及び亜熱帯側面であり、大いに利用せられ、後者のそれは寒い北極方面にあつて無用の長持となつて居る。

半島は海岸の地形如何に依つて、海上との交通自ら異なると共に、後地との接続如何に依つて、後地との交通に相違を来すものがある。例へばペロポネネサスヤ、クリミヤ、マラツカヤ、ノヴァスエヂの如くに、ほつれを線の様な細い地峡で、本土と相繋がつて居る場合には、本土の生活と交通之と殆ど島も同様である。更にエジプト、シリア、メソポタミヤの如く、沙漠の爲めに切断せられて居る場合、スカンデナヴィア、グリーンランド、エストランド、フィンランドの如く沼澤地に切断せられて居る場合も亦同様である。

半島は大陸に近づくに従つて却つて幅の広くなるものも少なくはない。斯くの如き場合には、本土の葉としての特色自から減じ、人種的、歴史

的の特徴も亦甚だ乏しからざるを得ない。斯かる半島は大陸的部分及び半島的部分と分けろのが至當である、現に軍人地理学者であつたナポリオンはイタリ―を兩分して、ポー河の流域を大陸的イタリ―と稱し、アペナイン連山部を半島のイタリ―と呼んで居る。大陸的イタリ―は唯其幅が広いのみならず、下度大木が地面に近い部分に於て松がつて居る様に松がり、且つ其根を大陸の奥深くまで張つて居る。それから此大陸的イタリ―の能く容るることを得ざる。一の大きな低地と一の大きな河もある。既に斯くの如く地的性質が本土と同様であるから、其人種的、歴史的性質としても亦同様ならざるを得ない。然るに一方、半島のイタリ―は如何と言ふに、前者に比して、種々なる特色を具へて居る。即ちアペナイン連山の北では佛語的イタリ―語の起りに反し、其南では純粹のイタリ―語が起つた。人種に就いて言ふて見ても、北の方にはアルプスを越えてポー流域に侵入した白皙、長身、広頭のケルト人種及び北東部から侵入したドイツ人及びイタリ―人の生息して居るに反し、南の方には淡黒、短身、長頭の地中海種族

が住んで居る。さればイタリヤ半島とは言ふものゝ、眞の半島的特色は独り南部イタリヤに於てのみ窺はれるのである。

斯くの如く南部イタリヤは大陸との交通を遮断せられて居たので、其人類も大陸の影響を免かれ、其統一を保つことを得たのであるが、然し其統一性を保つことを得た點では、歐洲中恐らくイベリヤ半島に越ゆるものはあるまい。イベリヤ半島即ちスペインとポルトガルでは、コルシカ及びサルジニアに於けると同様に、純粹な長頭の地中海種族を發見することが出来る。スペインはフランスに接しては居るが、此接觸點は短かい。且つ此兩國の間にはピレニイと言ふ障壁がある。之が爲め、此イベリヤ半島は大陸的特色を有して居らぬ。人種上及び文化上にも、雜種的地方と言ふものが無い。純粹な半島的人種、半島的文化が全半島に蔓つて居る。之と丁度反対して居るのは、イタリヤ及び印度ではあるが、かのバルカン半島の如きも亦そうである。即ちバルカン半島には大陸部多く、地勢亦起伏混淆して居る。それが爲め、其半島部は人種上統一性を保つに由なく、スラヴ

人、アルバン人、ワラキヤ人、其他の大陸種族が此處に移住した。茲に於てかへラスもベロポネサスも共に其半島性を維持することが出来ず、其種族が北方大陸の圧迫の爲め混一するに至つたのである。

半島なるものは、其大陸から突出して居る點より言へば、隔離地である。然し又対岸の地に發展する點より言へば中間地である。此兩方面は如何なる半島の人類地理にも明かに見えて居る。之を歴史的の順序より言へば、半島は先づ隔離するものであつて、其境域内に成熟せる、独立的人民を養成する。然し狭い境域が是等の人民を悉く包容する能はざる様になれば、半島は対岸地に發展する爲めの好都合なる足溜となり、或は近隣諸地と交通する自然の通路となるものである。朝鮮は大陸人種を日本に送る爲めの橋梁となり、支那文明を日本に伴ふ爲めの通路となつた。それから一九〇五年ポーツマス條約後に於ては、日本が本土に發展する爲めの通路となり、且つ日本から送らるゝ近代文明の不承々々な受領者となつて居る。ピレニ

半島も亦之と同様で、古今常に歐洲と西南アフリカとの中間者であつた。

其人民は、其動植物と共に、アフリカのそれと群を同じうして居る。それから其地は、カルタゴ人、ウァンダル人、サラセン人等の南北交通の通路になつて居る。又十五世紀にはポルトガル人がタンジール半島を占領し、紀元七〇九年より今日までスペインがモロッコ沿岸諸地を領有することの連鎖になつて居る。

此中間者たるの役目は、スペイン、イタリー、ギリシヤ、小アジア、アラビヤ、前印度、マラツカ、チユクチ、シベリア、アラスカ等の如き大陸と大陸との間に挟まれる總ての半島の員はねばならぬものである。特にアラビヤは、氣候と動植物と、人種と、歴史とに於て、或時はアジアから、或時はアフリカから引着けられ、而してアジアの感化をアフリカ全土に傳へることの中間者となつた。若し此種の半島の中に、中間者たるの役目を果さぬものがありとすれば、それは唯一のフロリダがあるばかりである。フロリダの土着人種は全く北米的であつて、南米とは關係がない。アラワク種族とカリブ種族とが有史時代に入つて南米ウエネズエラから北方に発

展した時にも、遂にフロリダに達せず、キューバとハイチまで来て、はたと止まって居る。此幾格は、フロリダの地勢が自から之を説明して居る。即ち此半島の中央と南部とは広大なる沼澤地があつて、何れの方面から植民をすするにも邪魔になるので、連鎖たるべき半島は却つて障碍となつたのである。

大陸と大陸との間に介在せざる半島は急速には行かぬが、矢張り、中間者の役目を果さずには居られなくなるものである。即ちゴーンウオル、ブリタニー、イベリア等の諸半島は、十五世紀末より大西洋横断の業跡を以て何れも有名であつた。佛國人にして始めて新世界に達し得たものは、ブリタニー、ノルマンデー等の漁夫であつた。コーンウオル半島の要港たるプリマスは英國の米國探検史、米國植民史に於て著しく其頭角を現して居る。エリザベス女王時代の海將は、フランシス・ドレーキにしても、ジョン・ハウキンスにしてもハンリー、ギルバートにしても、ウオター・ラレーにしても、皆此地方の出身で、殊にラレーは、コーンウオル及びデヴォンの

海軍中將をリしは決して偶然と言はれない。それから、ラブラドルの東方
ニオウの点に南米のサン・ローカと言ふ岬があつて恰も半島形をなして居
るが、カブラルヤ、アメリカゴ、ヴェスブチの船は此處に到着し、之に依つ
てポルトガルは南米に其足溜を得たことも亦記憶せねばならぬ。

第四節 島嶼

半島には種々なる特色があつて、海と十分に接觸したること、大陸に比して其の面積小なること、大陸と或は部分的に或は全然隔離せらるること、対岸地と対して橋梁ともなり、通路ともなること等は即ちこれであるが、島と行つと、半島のこれらの特色は一層増大して来る。世界中の主たる諸半島と、最大の島々とを取つてこれと比較すると、半島の方が餘程面積が広い。假令島の方へ、グリーンランドの氷を氷結地を加へても尚半島には遙かに及ばない。又ニコバニアは人類の生息せる最大の島であるが、是は半島中の最大のものをたゞアラビヤに比すると、僅かに其の四分の一に過ぎぬ。故に狭い面積と云ふこととに伴ふ便益と不便益とは半島よりも一層甚だしく島に於て現る、と言ふことを予期しておかなければならぬ。

半島は之を形態学の上より言ふと、本土と島との中間に居るものゝ、

少し地質的の愛化が起れば、本土ともなり、島ともなるのがある。大英
国は第三紀層の末に大半島であつて、其の動植物を見れば、會て本土と
相接続して居たことか知れる。シシリールとサルジニヤは第三紀最新新時
代には北アフリカのケユニスと繋つておたので、是も其動植物を見て察
し得る所である。之等は自然力に依つて變化したものであるか、時とし
ては人類が其目的の爲め、半島と化して島となすことかある。

即ちキイルヤ、フリント等は、地峡が航運上の防壁となるので、人類
は運河を作つて半島を島と化した。ラブラキスのウイリヤムの言ふ所は
よると、紀元一五三五年に、コヤニヤ人はクリミヤの地峡を開鑿し、
鞏人の侵入を防禦したと言ふことである。

之と反対の作用も亦此の自然界には行はれて居る。支那の山東半島は
沖積土の原野の中に聳えて居るが、是は太古、此原野が海と同半島が
島であつたことを暗示して居る。オリシヤには此類の事実が多い。樺太
島も自然は次第に之をシベリヤ海岸と接続させ、半島となさんと類

リは活動を試みて居る。而して同海岸との間の距離極めて狭く、一八五二年までは半島と思はれて居た程である。印度半島の動植物、否、太古の人種が、マカスカルに及び南アフリカと餘程類似した所あるは、太古には孤島でそれが遠くアシア大陸に接続したのであることを示しておる。

島は面積比較的狭く、其境界線が非常に鮮明であるから、動植物は勿論、人類の分布を研究するにも極めて好都合の場所である。即ち島は小面積と隔離との二原因によつて、動植物の種類が同緯度の大陸に比し、非常に少い、ニージランドの様は変化に富んだ長い島に於てや、有花植物の数を調べてみると、南アフリカや、西濠洲の同面積内にあるものには及ばない。アツセンション島の如きは、固有の有花植物が六種以下にあらつた。ダーウインは本土を云ふこと三百哩以上の孤島に、一種たりとも其島固有の哺乳動物を發見したことがない。故に島は、性質に於ても種類に於ても、人類に於ても動物に於ても悉く貧弱である。大西洋に

散在せる島々は、独り陸に近いかナリヤ島を除けば、餘り本土との距離が遠いので、其発見當時は、悉く無人島であつた。カナリヤ島とて、其住民は、北アフリカの本土のものに比し非常に進歩を阻害されてゐた。

島は斯く動植物に於て貧弱ではあるが、又島には島特有のものがある。是は距離の年月と、又其効力如何とにより、益々増大の傾向がある。

本土に近い島では、其の動植物が大陸、本土のものと同様で、島特有の種及び公屈は甚だ乏しい。然し渺茫たる洋中の孤島は、距離が完全の爲め、

島特有の種に富人であるのみならず、他所には発見すべからざる種を見ることもある。

此の動植物に及ぼす島の影響は、又之を人類に於てみることもあるが、動植物に於て見るほど著しくはない。是には二つの理由がある。一は動植物は人類よりも古く、距離の効力を感ずることゝ人類よりは久しいといふことである。二は動植物と違つて、人類は自ら航海術を發

明し。又は練習して自由な海を往復するやうに成るが故に、動植物はどれ
距離を感ぜぬと言ふことである。されば文明の度の低い間は、人類も動
植物同様に、極度の距離の効力を感ぜず、文明が進んで航海術が開け
ると、人類は動植物と違ひ、距離の効力を左様に感ぜない様になる。不
島は却つて航海者の目標。又は仲絶となり、外部の影響を多量にうけ
ぬべからぬ様な場合もある。

此距離的影響と交通的影響とは絶対的及び対のものであるが、同時に同
い島民に作用してゐる場合もある。或は互に前後して作用してゐる場合
もある。カナリヤ、アゾールズ、マルタ、イギリズ、モリシヤ、ハ
ワイ等の古い歴史と新しき歴史とを比較してみると、自ら首肯せらるゝ
であらう。是等の島々は何れも一時は住民稀少な絶海の孤島であつた
。然し今日では皆盛大な貿易場又は途中駅となつてゐる。それから英國
人が非常に保守的であると共に、非常に発展的である。地方的であること
共に、世界的である。何事にも先例を求めず、而も萬事世界に率先

すると言ふ様なことも、島といふ環境の影響心ある。是れは日本に就いて言ふも同様で、日本は外國と交つて全く外國化せず、外國の文明を取り入れて尚其國粹を失はない。是れ其島國たるが爲に引ならない。島は其隔離に依つて養はれた個性を具へて居ると共に、又之を普及するの能力を乏有して居る。是が即ち、古今を通じて島は大陸の史的の役目を演ずる所以である。さればと言つて、島は文明の要素を悉く産み出すと言ふのは正しくない。之を打すれば島の面積が許さぬ。然し大陸に生長した種が若し島に移植せられたら、島は之に變化を與へ、又は花を咲かせる。日本は支那と朝鮮から、英國は歐洲大陸から其文明を輸入し、而して之を其最高度で發達させた。而して今や此の二國は互禮をなさんとして居る。島が大陸に及ぼす及ぼさぬとして居るの心ある。日本の理想が滿洲よりセイロンまで東洋全体に行き互りつゝあるを見よ、又英國の文明は歐洲の標準である。エマールソンは「唐人は唇中にて於て英人たらんとして居る。英國は其文明と知識と趣味とを萬國に播種した」と

言つてゐる。

小さな村は暫らくの後に溢れ出すものである。島は長く保つてゐることか出来ぬ。茲に於てか島は奥へ退かざる様になつた。島は奥へ退かざるの故である。島の丁史的意義は此處に存する。然し島は其面積に限りがあるのである。其文明は遂に進歩することか出来ぬ様になる。唯英國と日本とは此の原則の例外で、それは其境域の非常に大なるにも由り、又位置の頗る有利なるにも由るのである。然らばこの原則に當る好例があるかと言ふにクリート島は即ちそれである。其文明を地中海の東部沿岸に伝へたこともあつたが、總て其源泉は涸渴し、却つてこれをギリシヤから受けねばならぬ様になつた。其他エーゲ海中にありサモス島、コロズ島の如き、クレトンシヤト群島中のハイダ種族の住める島の如き、大平洋中のイースター島の如き、何れも皆此原則に當るものである。つては進歩した文明を有して居たが、後に凋落して見るの所もなきに至つた。

海は最も有力な、最も広い境界線である。これ故海に囲まれた島は、然るものをも但から分離せしめるものがある。英国の人民は、欧州本土がニュー・トロン人種と近い関係があり頻繁な交通があるにも拘らず、之とは非常に相違して本土のニュー・トロン人種相互の相違の比ではない。大英國とアイルランドのケルト人種も亦欧州本土のケルト人種と比較すると、体格も気質も文明の程度も皆違つて居る。日本人と支那人とを比してみると、其体格に於て、精神に於て、又其国民的意気に於て互に相違して居る。エスキモは米国の土着人種中では、言語も風俗も餘程統一のある種族であるのれアリ、ニュー・シヤン島に生ずるエスキモだけは著しく他と相違して居る。即ち言語に於て、宗教上の儀式に於て、刺繍織物等の手工に於て、之を認めると之が出来る。クイーン・シヤロット群島中のハイム種族も、本土の種族とは非常に相違し其の起源は別であらうと推せらるゝ程である。

島の文化力は其島民の言語に一番著しく顕れる。即ち島に於ては一種

の用語又は方言が出来たからである。又群島にありては、各島に特殊の方言が起ることもある。キヤンネル群島に於ても此例を見ることは出来るがボツカチオの言ふ所によれば、カナリパ島に於ても、島と島との間と言語が通じなかつたやうである。独りボツカチオのみならず、それより凡そ百年後一四五五年にカナリパ諸島が既にキリスト教化した後に、尚島々の言語は互に別で、語が通じなかつたと説いた人もある。是は遊泳に由るの外は島と島との間に交通の方便がなかつた爲である。昔の人も説明をして居る。然らば本土の言語から分化するのは何故かと言ふに、是は本土よりも有利の状態に於て、一層發達する爲である。大英國や日本の様な大きな島に於て特にさうで、日本語は多少アルタイ語系に關係があるが、其の支派の何れにも類似して居ない。支那語に比すれば非常な相違で、既に複合作用の程度を超越して居る。是は英語が大陸のインドン語に反し、餘程語尾變化の形式を脱落して居ると同様である。

島人は大抵限りある修地を背にして、海岸に生んでゐる。故に島人の種族が本土の種族と異なるは、本土の海岸住民が内地住民と異なるのと同じの理窟である。即ち海に接觸してゐる為には、同族的な外国人の血液が入り来るのである。斯くの如き混血は、何れの島にも多少認められる事はない。この点に於ては、島は隔離性を備ふると共に、他の一方は交通性のあることを認めることが出来る。例へば今日の英國人は、ケルト人種と様々のニュートン種族との混血である。然しこのニュートン人種は全く其本国を離れた事と、且小団体となつて漸次浸入したのとて、自らケルト人種に同化されて居る。且つ此同化作用は、人口の激増、密接な雑居、文明の統一作用等によつて一層其度を加ふるものがある。故に島は半島と同様、人種の混血であつても驚くべき程統一を保つて居る。是島が自国民を他国民と隔離し、自国民を堅く抱擁して、人種でも、文明でも、言語でも、合一させて下には遣かぬものである。英國人、日本人、ケルト人、ケルト人等の頭蓋指数を調査すれば各自皆驚く程の統一

一を保つて居る。

島は必ずしも其住民を最も近い本土から獲得するものとは限らない。本土の人民が若し航海術を知らぬならば、海は如何程広くとも、航海を知らずおる人民を好むる事は出来ぬ。アイスランドは比較的グリーンランドに近いか。其住民は遠いスカンデナヴィアから来て居る。英國は近いゴールよりも、遠いドイツ、デンマーク、ノルウエー等から数字上多くの移民を得て居る。

島には側面に依り相異なる移民を見ることがある。臺灣は其の一例で、其東面にはマレー種の土着が居住し、西面には支那の移民がある。マダガスカルも亦之と同様で、其東部及中部にはマレーのホヴァ種族が居る。西岸にはアフリカのサカラヴァ種族が住んで居る。此人種的分布は丁度昆蟲の分布と相照應して居る。即ち東部は印度、マレー的であるが、西部はアフリカ的である。斯くして此島民はアフリカ種とマレー種との間の特徴を示し、人種は統一せりと言は人よりも、むしろ雜駁と云ふ。

べきに拘られ、言語は其親密なる交通の結果統一してゐる。即ち古風の
マレイ語が致る処に行はれ、地方地方に方言はあるが、互に相類似して
居るの故、全島民悉く交通するに差支がない。

内海の小島は、其の初代に於て夙に人種の統一を失ひ、非常に雜駁と
なるのが常である。是れ亦一は内海では航海術の發達早く、而して航海
者は必らず斯くの如き島を或は途中駅となし、或は海中の貿易場を充てる
。其結果として水夫も商人も植民も征服者も皆此処に集り、人種が世界
的となるのである。即ち此の場合には島の交通性が隔離性を壓倒するも
のと言つて差支へない。亦ニルズくの如き島は人口も少数で、混血の影
響を受け易いと言ふことで、其結果は非常に複雑した種を生ずるやう
になる。此作用は此小島が貿易上の焦点であるが、兵略上の要突である
間は、長く続いて行くもの故、バレーリング海のゲオミード島は、北極諸
種族の大市場也。此処に於てシベリアのケユク種とアラスカのエスキ
モーとは貿易を行つて居る。バレーリング海のセント、コーレンス島のエ

ヌキモーは、ケニクケ族と長く交際の結果、ケニクケの或種の衣服と舟
と多少の單語とを採用して居る。マレー諸島とパプア諸島との間にある
セラムと言ふ一小島の東端、キルウオールと言ふ處は、極東の土人貿易
者の首府である。而して斯くの如き小島貿易場は、小ざければ小ざいほ
ど、其貿易の範囲が広く、其人種益々雜駁となるものである。濠洲木曜
島の住民が総數五百二十六人、其中二百七十人が英独佛スカンゲナグ
イタ、デンマーク、スペイン、ポルトガルと或種の濠洲人、残り二百、
五十六人は、南洋諸島人、パプア人、アフリカ人、フィリッピン人、支
那入及び其他のアジア人である。斯くの如きは、昔にも其例多く、イー
ジツ湾内のイージツ島の如き、印度のセイロン島の如きも亦さうであつ
た。

内海にある島は、国境にある地方と同様な過渡的性質を帯びて居るも
の、其周囲にある諸海岸の出張所たる觀を呈する。是等の諸海岸は、
相争ふて此島を占領せんことを企てる様になり、而して其持主は時代々

之に依つて格も走馬燈の如く代つて行く、此痕跡は其島の住民に於て
 又其言語に於て、明らかなる之を認め得る、のち、イートツナ、キプロス
 、ロース、クリート、マルタ、コルフ、シシリ、サルツニア等の諸島
 の尸史は即ち是である。就中最も通例として見るべきは、キプロスの尸
 史也。昔々ルの船隊の根據地となり、紀元前一。四五年には、フェニシ
 ヤ人が其処に植民地を有して居た、以後は諸國の爭奪地となり、ナルガ
 衰へてからは、ギリシヤ人之に代り、それから次第に、テッサリヤ人、
 エゲプト人、ペルシヤ人、ローマ人、サラセン人、ビザンチン人等の手
 に渡り、一一九一年には十字軍の兵に占領された。それから次に、エゲ
 プトの手に落ち、一三七三年にはゼノアに奪はれ、一四六三年にはヴェ
 ンスに移り、一五七一年にはトルコの手に歸し、一八七八年には愈々英
 國の手になつた。而して是等地方の占領者は何れも其痕跡を其人民と
 言語と、文明と建築との上に遺して居る。之と同じ様はことが、シシリ
 ーにも、マルタにも、台湾にも行はれた。

島は物質的に言へば、分離された地域であり、政治的に言へば、極めて容易に分離せらるべき地域である。其隔離性は、幾分か島を安全ならしめまいことではないか。其面積は限りあり、其人口も亦少数であるか。大なる海上回廊の犠牲となり易く、屈辱とせられ易い。此故に島の安全は、其面積と海軍力と隔離の程度とに依つて増大するものである。隔離の程度と言ふは、其島が内海にあるか、外海にあるか如何に關係する。内海の島は、勿論、大きかるべき筈はなく、其の周囲の海岸からも遠くは離れて居らず、従つて其接近し得る海岸地から絶えず脅かされる。ユーゼル、デーグーニ島の如きはバルト海沿岸の諸国から一度は必ず占領されてゐる。ゴットラントはハンガ同盟に對し、恭順を誓つたことがある。サルヂニアは西部地中海の中央に位して居るので、幾多の國々と順次政治的に合同した。即ちカルタゴ、ローマ、北アフリカのサラセン人等と合同したこともあり、シシリー、ピサ、アラゴン、ピエドモンツと合同したこともあり、今日ではイタリーと合同してゐる。

紀元の始め、西部欧州を風靡したるケルトン蠻民は陸上種族であつたから、一般帶水も幾分が保護の用をなし、之が爲めシシリイ、コルシカ、サルヂニア、マルタ、パレアリック諸島は一時安全であつた。然し遂にはローマ人、サラセン人等の牛に帰し、其後は欧州諸國の間を持廻りの状態であつた。

島は又其面積が狭いので、容易に他國の屈地となる危険がある。例へば、アテナは其強大なる海軍を以てナクソス、サモス、タソス等の諸島を撃ち、之を容易にデロス同盟の中に加へて仕舞つた。然しカルシジス半島民、メガラ地獄民を服従させるのは容易ではなかつた。英國もアイerlandを長く掌握して居る。然し佛國に於ける其所領中、今尚英國の手にありしものは、唯キヤンネル諸島あるばかりである。

海中の一孤島が遠く隔たつた英國の領地になつて居ることか往々ある。是其近持大陸から独立してゐると長く服従状態に居らねばならぬことを證明するものである。例へばカナカのサン・ピエー・マミケロニはカナ

がに於ける佛領地はなつてゐる。英領のベルムダヤ、バハラは皆是れ英國が久しく此大西洋岸を支配して居た時代を語るものである。西印度の小ドルナンは、英領あり、佛領あり、デンマーク領がある。是は此諸國が此近接大陸を所有したことの紀念碑である。キエーバヤ、ポトリコも亦スペインがアメリカ大陸領地を有して居たことを語つて居る。斯くの如く海中の孤島は、面積が小さくして位置が左程大切でなくは、人の注目を免れ、何時までも同じ持主の手にあることが出来る。然し兵略上、商業上新に其価値を生じて来ると、其現状を維持することは出来る。スエズ運河の開鑿は、英國をしてヤプロスに着眼せしめた。パナマ運河事業は、合衆國をしてデンマーク領諸島の買収に着手せしめた。

島の持主の変更は、内海の場合に頻繁で、外海の場合には左程でも無い様である。例へばシエトランド、フェル、イスランド、カナリア、マデライラ、ケープグード、アゾリア、セントヘシナ、アツセンション、

ハワイ等の無事なる歴史を見る時は、鬼の半ばは過ぎるものがあるであらう。

以上述べた通り、土地は其位置に依つて独立であることもあり、其面積に依つて独立であることもある。大なる島、殊に其位置が大陸の外辺にある場合には、長く独立を保つ事が出来る様である。然し此独立を永久たらしめんとすれば、大陸の土地を割へて益々其面積を拡張して行かぬならぬ。大英帝国と日本とは、人格的にも、文明的にも、共に其近接本土の附屬物であるに拘らず、其面積と其周囲の海とに依つて独立を維持してゐる。而して兩國共其近隣の諸島を併せ、大陸にも其半を伸ばして面積を拡げつゝあることは人の知る所である。マダガスカルはアフリカと其の人種が共通でないから、著しく隔離性をも具へて居る。而して此事情は其面積の大ききことと助けられて、今日までアフリカの政治史と殆んど無関係なることが出来た。アメリカの東岸に及ぼした土地占領慾は、此マダガスカル島に及ぶことか甚しくない。アラビヤ人、和儿ト

カル人、オランダ人、英國人等何れも島の一部に午を下したに過ぎぬ。
此島の西岸の性質と言ふ。之に在する剛健なるマレー人の性質と言ふ。
又此西陸を流るマザンビク潮流の性質と言ふ。其にアフリカ海岸より
此島を征服せんとして不成功に終らしむるの由ある。其面積の大なる
ことは無盡蔵の富源を意味し、人の土地占領慾を喚ぶもの由あるか。又
此大なる面積が占領の邪魔をす。之を以て一八九五年アフリカ大陸の
分割が殆んど終了した時まで、佛國古此島に午を下すことが出来な
かつたのである。

然るに東印度諸島は熱帯物産のある為め、久しく各國から着目せられ、
遂に征服の厄に罹るに至つた。此場合には其面積の大なることが少し
も占領の妨げにならず、ホルトカル人、オランダ人等に彼より此へ移る
便宜を與へた様であるが、又他の一方から考へると、斯く面積の大なり
しこと、熱帯地として白人の住居には不便なることが相待ち、歐洲人
をして其有效なる政治的占領權を海岸以外には及ぼさしめない。ホルト

オヤ、スマトラの如き大なる島には、尚内田に未探検の場所多く、是は土蕃の手に委せられて居る。

島国人民の史的發達を檢すると、多少皆隔離の特性を帯びておかないものはない。隔離は島民の發展にも便宜を與へるが、隔離が却つて島民の進歩を来すこともある。何故アフリカの黒人は、経済上、文明上、濠洲及メラネシヤの黒人よりも進歩してゐるのだから。鉄、牧畜、農業等の知識はアフリカ全土に伝つて居る。然るに濠洲は隔離されて居るの故、其の土人は之を知ることなくたのである。然し又或程度の文明の進歩してゐる島民は、隔離の爲に却つて其進歩を助けらるゝ事もある。是はその能力を他に妨げられ伸ばすことが出来た爲である。即ち國境に於て他と衝突したり、侵入軍の防害や襲掠を受けたりする恐れがないからである。然し隔離も極端のものでは却つて進歩を害するから、適度ではなければならぬ。英國や日本の如く大陸と接觸し得る便宜を有するものではなくてはならぬ。アイルランドはより大なる島の蓋があつて、大

陸との交通を庶断せられてゐる。其運々として進まざるも偶然ではな

島は天然に保護せられたる地域であるから、弱者、戦敗者が之を避難
所として求める場合が多い。新しくして歴史的運動の範囲内に引入られ
るのてある。此の原則は又、動物界に於ても行はれて居る。即ち北大平洋
の海豹はアメリカの海豹より道れてベーリング海のブリビッド諸島に其
避難所を発見した。而して彼等が此所に集合し、此所離居することには
つた結果、合衆国政府は即ち之を保護すべきこととなつた。勿論これは
海豹の予想せる所ではなかつた。海牛は何れの所に古絶滅して、其最後
のものも偶然にもベーリング海の一島に於て発見せられた。是れ亦孤島
に此の動物を保護したからであらう。台湾は十三世紀中頃から支那の
移住者を迎へたが、彼等は即ち元の世祖の難を遁れ、此処に避難したも
のてあつた。次に一六四四年に支那の一將が其部下を率いて此処に移住
したか、彼等は満洲朝廷に降るを欲せたるものてあつた。一六三七年に

は、日本のキリスト教徒が此所へ移住したか、彼等は其本国に於ける道
 害を此島に避けたるものにあつた。アソール島は、一四三一年の再発見
 後幾許もなく、多数のフランス人の避難者を得た。其事情は恰もア
 スラントが謀叛したノルウェー人に依つて植民されたと同様であつた。
 斯くの如くに、島を避難所とする者に対しては、海は一種安全の感をも
 入るものである。故に英國は其位置と、其自由政府との為れ、壓制に苦
 しむ者々の好避難所であつた。ナントの勅令の取消後、此処にエーグ
 ンの多数が避難したか、此の避難民は又英國人民の貴重な一要素となつ
 た。

島は斯くの如き貴重の移住民によつて、其人口を豊富にせらるゝの
 あるか、避難所として適當の地理的條件は、又犯罪者の抑留場たるも
 適當の條件である。是れ島は隔離を完全にし逃亡を困難又は不可能なら
 しめ取締を容易ならしむるからである。地中海の島にして、會つて犯罪
 者抑留場たる所を有せざるものは一箇所もない。エーゲ海の諸群島

なにも懸えずギリシヤから政治的流入を受け入れた。かのセント、ハレナは面白い丁史も有つてゐる。其最初の住民といふのは、ホルトガルの罪人であつたが、彼等は此所に流された際、種子と家畜とを與へられた。然るに彼等は勤勉でそれより四年後、本國に歸へることを許された時分には、土地はよほど耕されてゐた。其の次の住民は、奴隸船が薪木を得人として寄港したる際、脱船したる男女数人の奴隸であつた。彼等は次第に其の人口を増加し、労働し前住者の遺業を回復したか、二十年後に、ホルトガル人の為れ追はれてしまつた。然し内幾人かは森林に隠れ、一五八八年には其の子孫が繁榮して居たといふことである。一八一五年より一八一一年まで、セントハレナはナホレオンの監禁所であつたことは人の知る所である。

政治犯罪人、又は改悛の見込なき犯罪人は、あるだけ交通不便な島に放つたのが各國の常例である。ナホレオンがエルクバに流され、次にセントハレナに移されたのは言ふに及ばぬ。スペインでは其政治犯罪人ギニヤ

湾のフェルナンド、ホーレ、又はカナリア群島中のデネリツポに流すこ
 とにして居る。露國では最も危険な政治犯人は、最初之をラトガ湖の一
 小島に放つ。こゝで火は衰弱するが、若し然らざれば之を樺太に移す。
 ・米國の南北戦争の際には、フロリダ南端から百哩ばかり西方にあるド
 ライン、トルツカス群島の一を最も危険な南軍方の監禁所とした。他はリ
 ンコーン大統領暗殺の三共犯者が禁錮されたのも此の島であつた。それ
 からほるから東南の方で当り、南米寄の所はセラ島といふ群島がある。
 佛國の最も悪るい者を禁錮する所は、就中、ザヤブル島といふのは、最
 も遠い海中に孤立し、五箇年の間、トレイフスを收容した所である。此
 島の住民はトレイフスを除いては悉く癩病者であつた。眞に是れ兎はれ
 たる島である。

島はその所有物を隔離して能く之を保護する。斯くの如き保護力があ
 るのは島には割合に昔ながらの動物及植物が多く、発見される。渡洲、夕
 スマニヤ、ニエリギニヤ、マダガスカル等には未発達の動物が多い。

大西洋のカナリヤ島、大平洋のセシバス島等も、古代生物の博物館で、
中には第三世紀中新世時代のものもあるといふことである。斯くの如き
遺物は他の国では人の近づくを得ない高山などにあるもので、セシバス、
台湾及日本などにあるものは、アジア本上にあつては、唯ヒマラヤ山中
に於てのみ発見せらるゝものである。

唯動物ばかりではなく、原始的の人類は島とか然らば山中のみ発見
せらるゝのである。南部アジアの原住民であつたらうと思はるゝ燦少
国人は今日唯印度半島の山中か、アングマン又はフイリッピン等にて
発見せらるゝのみである。然しフイリッピンにも大きな島の山中か、
ホリロ、パラバット、ジヨマリック、其他の小島の外には存在しない。
又黒龍江口の南、アジア海岸の先住民はパイ又は、今日たゞ北海道
、樺太、牛島等のみ居住して居る。唯人間ばかりではなく、風俗習慣の
原始的なものも島に於て保存されて居る場合が多い。

島には三十万一千方哩のニューギニア、二十九万一千方哩のホルネオ

の如き大きなものもあるが、大きな島は頗る少数で、小さいのが普通である。島は世界の総面積の七分の一に過ぎぬ。而して其の数からいふと、フイリッピン群島をけりても小島の数、九百を算する程である。これは島の特徴は隔離であると共に、又小さいといふことである。この小さいといふ特徴は島国人民に現はれるもので、社会的、政治的、農業的発達如何にも早熟である。此の裏に於て、島の価値は世界の幼稚時代に属することか解るであらう。然し島は斯く早熟すること、それから又能く其の力を一方に集注し得ることか相合して、小さい島が却つて大きな群島又は大陸を支配するに至ることか、古今共に多くさ人の例証がある。

小さい島でも、政治的に優越の地位を占めることは随分あることか、この小面積といふことは、種々なる利不利が常に伴ふものである。利の方では強盗山賊といふやうなものかない。例を上ればギリシヤ半島の物き久しくこれに巡まされたり均はらね、小さいはエーボト海諸島に

は、全くその形跡がなかつた。又牧羊事業などは小島は便利である。例を挙げれば、英國などのやうに狼が根絶されてゐたので大陸で牧羊するよりは、遙かに安全であつた。之に反して不利も少なからずあることである。即ち小島は大陸と連絡すればするほど動植物が次第に減じて来る。其結果として人類の生活上の種々の影響が現はれる。例を挙げると、ムラネシアは島も大きく、獸類も澤山あるので、狩獵が主なる生産であるが、ホリネシアには、狩獵が首共々之を見ることは出来ぬ。随つてホリネシアには弓矢の如き飛道具の使用が稀である。又小島には樹木が少ないので、船を造るに非常の困難を感せねばならぬ。大平洋中の散在せる小さな珊瑚島々は地質單純で、堅い石、殊に燧石が乏しいので、日常の器具又は兵器、木、骨、貝、又は鮫の骨などを以て間に合せておる。

島の地理的制限は尚之に止らない。肥えたる沖積土層が大陸の地として非常に小さい。勿論沈澱物を以て成れる島もないではないか。大陸は、

島と言へば、水中山脈の巔か、火口立か、然らざれば、陷落した高地と、火山的噴出との合併したものである。随つて耕作し得べき低地が乏しい、エーゲー海群島中であつては、ナクソスだけか浸水の平野を有つて居る。其他の島は急傾斜の海岸と、砂浜があるばかりである。日本の耕作地の面積は、今日其全面積の一割五分七厘と稱せられて居る。

島は斯く其面積に限りあり、其富源も亦乏しきに拘らず、比較的は人口の稠密なるものがある。之を同緯度、同構成、同地質の最近本土に比較して、島の人口が却つて多いことは、決して珍らしくはない。勿論斯く稠密なる人口を有する島と相対人で、或は無人島、或は牛羊だけの住する島のあることも決して否認は出来ない。濠洲と大洋洲とを以て成りたる太平洋中の一大天地に就いてみると、島の面積が下度陸地の総面積の一割五分に過ぎぬ。然し此中に居住する人口は、實に人口総数の四割四分を占めて居る。日本帝國は其耕地の少なきに拘らず、人口の密度は支那の約三倍、朝鮮の約三倍也。アシア大陸の諸國中之に及ぶものかな

い。然しハワンの人口割合は日本よりも多く、一平方哩に五百八十七人の密度に達して居る。大英國の人口は一平方哩に四百五十三人で歐洲大陸中を凌駕するものは、ベルギーのみであるか。ベルギーの人口でも小さいチャンネル諸島のそれと譲らねばならぬ。それは前者に於ては一平方哩六百四十三人であるのに、後者に於ては一平方哩二百五十四人であるからである。

至濟的に考へると、右に説くか如き島の人口は過多と言つてもよいであらう。然し南洋にある小さい島を以ては、他の小さい島に椰子樹を植え、漁場を設け、定期に二、三人出稼することにして居る。單獨な珊瑚島では、唯最も大きな生産力のある島にのみ人類は生息して居る。ホーエタと言ふ環状珊瑚島では、一八四〇年に於て、其人口が凡そ一万と算せられた。然し此中の半分はアナア島、一名ケエインと言ふ一島にのみ生み其四分の一はガンビア島に生み、他の島は之を富源として用ひて居る。トングが群島でも一八四〇年の総人口は二番で、其中の半分は、トング

タブリに住み、ハパイ及びグイラオリ四ヶ村、他は殆んど住民を有せざるものである。スコットランドの北にあるオークネイ群島は總數九十七、其中二十七をケカ人口を有し、四十は牛羊の牧場となつて居る。然るに此の群島中の最大なるボモナには一島七千の人口があつて、一平方哩八十五人に當つて居る。シエツトランドも同様で島の總數一百の中、住民を有するは二十九である。而して此群島中の最大なるメインランドは一平方哩に五十三人の人口がある。此の密度はは近接するスコットランドの何処にも越えて居る。

島の人口が稠密である理由は他にもない。島は海陸両方の食物に依頼することが出来るからである。之に加ふるに、島は四面皆海で、広い大陸の漁業を、一點に集める傾がある。今日シエツトランドはスコットランドの鯨漁の本場であつて、其の人口の比較的稠密なるのは、全く之に由るからである。佛國は、サン・ピエアとミケロンとを以て、ニューファウンダランドの魚の輸出場として居るか、是れ即ち其の人口の稠密で

(一) 平方哩に七十人) 且、此處兩處の島の富んで居る理由である。斯くしてノルウエーのロフオデン群島でも、アイスランドでも、樺太でも、陸に於て失へる所を海に於て補つて居る。是がなかつたならば、充分に人口を支ふる事が出来ぬであらう。

之に加ふるに右述ぶる如き北地の島には潮流が氣候を緩和し、余程人類をして之に生息し易からしめることも注意せねばならぬ。然し是れは北地ののみ限らず、熱帯地帯にあつても同様である。バミューダ島の繁栄にして且つ人口に富むは氣候溫和、能く季節前に野菜や花を作ることも出来て、英米の市場を賑はし得るからである。英國西南部のシリール群島に二十人の人口があるりも、同様の氣候、同様の事業がある爲めである。

地中海の海岸諸國では、早魃と極熱とか農作を害することが多いのに、小さい島々には斯くの如きことが少ない。是は雨量が必しも多い爲めではなく、春の豊かた露と、濃い霧とか野菜を活気づける爲めである。

マルタが英國の守備兵を除いても、尚一平方哩に二十人の人口を有する
と言ふのは即ち斯かる事情に由來して居る。

時としては、適順な氣候が農業を助ける外、良好な位置が商業を助け
て、島の人口を稠密にすることもある。然し又單に商業上良好の位置を
有するばかりで、人口稠密な島もある。シロスはキレクトデス群島中で
最も小さく、最も瘦せた地であるが、エーゲー海中商業上の中心地で、
ハームボリスは人口一萬七千を有し、群島中最大の都会である。

氣候も土質も共に農業に適したる島では、耕作が夙に内包的な科学的
のものとなり、以て次第に増加し行く人口の需要に應ずる事を計つて居
る。随つて島民は海に食料を求めるところにも熟練して居るが、之と同時
に農業上にも飛躍して居ることは珍しく無いことである。太平洋州に於て
は、耕作は何処でも皆土民風ではあるが、トレカ、フィジー等の如き
島々では非常な進歩を示して居る。是等の島々は氣候も土質も、共に可
もたなく不可もたなき有様で、勞すれば勞しただけの効果を浴め得る土地で

ある。ソサイキティ島、サモア島の如きは、自然の供給潤沢の爲め、農業は稍々不振を免かれぬ。ギルバート群島の如き人口稠密な環状珊瑚島にあつては、非常の努力を以て耕作が実行されてゐる。即ち椰子には其根を粉碎した軽石を肥料として使用して居る。又里芋は溝を掘り、沼洲に近い所に之を植えて居るか、又は其喝ける根に、珊瑚砂を通して水の滲み込み来る様にしたものである。イースター島は自然の恵みを受けけること、最も少き土地で、クツクが此島に立寄つた時には、全島一木もなく唯一艘の粗末な獨木舟の外には舟もなく、と言ふ事である。道つて此島民は恐人ど海から食料を得るに由なかつたのであつた。而かも斯かる貧弱な島の貧乏な民は周到にして且つ好妙な耕作法に依り、其の乾き切つた、硫磺な土地を化して、バナナと甘蔗とを産する畑たらしめた。

ミクロナネシアでは土地が小さい断片的なものばかりであるから、漁業が主なる生業となつてゐる。而して農業、特に里芋の耕作は、ペリウス

の如き大なる島のみに限られて居る様である。西部メラネシヤの大なる島々では、農業は一体に振はない。ニューギニヤの如きは、獸獵が多く、村々の生業であるから、土地の大部分は昔ながらの曠野で、僅かばかりの部分か耕やされて居るに過ぎない。メラネシアの小さい島々では、例へばニューヘブリヂーズ、ニューブリテン、及びソロモン群島などでは、高地に灌漑準備を施し、所謂外延的農業を實行して居る。ニューヘブリヂーズ及びバレンクス島には一村々々特殊の花と特殊の香草とを持つて居る。其れから農業の最も発達したものは、之をフィジー島に於て見ることが出来る。此処では色の黒い、毛のちぢれた蠻人が、曾ては食人の陋習に耽つたのに、此點に於ては普通のヨーロッパ人と雁行して一歩も譲らない程の状態に達して居る。ドイツのアスパラガス耕作としても、フィジー人の甘蔗耕作以上に綿密であるとは言われぬ。而して此甘蔗は豫め手でほぐした土を堆積した塚に依つてある。其野菜の種類多く、品種の良好なることは驚くべきばかりで、其の反映は其島特有の精巧な

料理法に現れて居る。

農業や、漁業や、商業が、英國々の文明の程度で、食料を増殖して行くにしても、然し島の面積は限りあり、限りなく殖えて行く人口を支援に行くことは出来まい。茲に於てか、島國民は、半島國民と同様、外國に移住して其処に植民するの傾向がある。此傾向は島民固有の可動性の依つて益々力づけられてゆく。ツキダデス及びパリステレスに據れば、クシテの王ミノは、キクレヂスに植民せしむと言ふことである。ギリシヤは其の有り餘れる人口を以てエーゲ諸海島及びイオニアン諸島に植民せしむと言ふことである。此他ギリシヤの歴史には尚幾多の实例がある。転じてマレー群島を見るに、マレーの各種族は、殆ど移民に關する伝説を有しないものは無い程である。南部フリーツピンには多数のサマル、コート族に属する回教徒が居るか、彼等は皆スマトラとマラッカ海峡諸島とから来たものである。斯くの如くにしてマレー移住の系統はホリネシヤより始めて、遙か遠方のイースター島まで、其の跡を見るにせか

出来る。時としては、一時的に小島の住民が大島に移住することがある。セシベスの東南にあるブートン、ピスンガク、及び其他の小島の住民が、週去二十五年の間、セラム、アルアンボイナ、バング等の大島に澤山移住した。彼等は玉蜀黍、煙草、バナナ、椰子等の畑を閉鎖耕作し、二年の間働いて、利益を貯蓄しては帰国するを常とした。是等の耕作者は其外見に於ては野蠻人の如く、森林の禽獸同様に内気で、腰までは裸体の儘働いて居る。然し彼等は相當に大きい目的を抱いておるのである。

其国の文明の程度高く随つて其経済法が整つて居るとすれば、どうしてモ人口が稠密になる。然し又生活の程度が高いので、斯くの如き島では移住の必要を生じて来る。斯くの如くにして、日本は其鎖国の禁令を撤したる以後に、多くの移住民を海外に送り出した。特にハワイ、合衆国等に送り出したもの多く、近頃は又台湾朝鮮等の新領土へ植民を以て居る。マルタ島人も亦多く島外に膨脹し、今日では地中海沿岸の諸国、

到る所に於て、彼等が園丁、水夫、商人等となつて活動して居るのを見
受けられる。マジヨルカヤ、尚それより古一層不毛なキクレガス島に就
いても同様の事実はある。イタリイのカプリ島人も、多数南米に移住す
るか、彼等は大抵其故郷に帰へつて来る。アイスランド島民も亦寂寞不
毛の島を去り、西部カナダに移住して儉約の民となることか珍らしくな
い。

島では斯く移民に依つて其過剰人口を調節するが、之と同時に又他の
方法で自然的増加も制限する様にして居る。是は人口過剰に達したる不
毛の高地などに於ても往々見る所である。之に就いてレナナルと言ふ佛
國の一僧侶は、一七九五年度の頃、夙に一般の島國民に關して言つたこと
がある。曰く「人口増加を防止する多くの奇妙な制度は島國民間に起源
して居る。人は嗜食、去勢、女陰閉塞、晚婚、童貞、独身奨励、未成年
にして子を産める女子の刑罰、曰く何、曰く何と。マルサスも亦其人
の論に於て此言を評論し、而して島の住民数の制限は極めて狭く、極めて

て明白で、何人も之を否認が出来ぬ。時に小島において然りと云つてお
る。

島では、木毛の高地と同様飢饉が起り易いので、結婚は一妻多夫主義
に流れ易い。一四〇二年カナリヤ島征服時代には、同島の或部分に此の
一妻多夫主義が行はれて居た。又大洋洲でも今現に実行されてゐる。多
妻主義は酋長及び財産家の権利である。タヒチ島では女が少くないので
一妻多夫主義を生じ、四五人の男子を以て、一婦人を所有して居る。
ハワイでも、昔夫がその妻に情夫を持つことを黙許し、一種の一妻多夫
主義を実行してゐる時代があつた。ロバート・ルイス・スチヴンソンの
言ふところによつて、マールクエサス群島でも之と同様の風習があつた。
うで、斯くの如き情夫のことを土言ではピキオと稱して居た。イースク
ー島に於ても一妻多夫主義が行はれて男子の數婦人に越え、而して子供は
至つて乏しかつた。昔此島を訪問した人の記録に残つて居る。其他
実例を求めるときは、尚沢山あつて、皆島と婦人の欠乏と、人口減少の

必要とが相結んで、一妻多夫主義を生ずることを証明するものがある。
大洋洲に於て斯くの如くは男女数の不平均なる理由は、女兒虐殺、早産、
過労、貧窮、淫奔、男子の乳暴等が主なるものである。又飢饉の恐れ
があるのて人口縮少を断行せねばならぬから、大洋洲では嬰兒殺しと墮
胎とは普く広まつて居る。ニユー・ヘブライズとソロモン群島との或部
分では、生れる子供を悉く殺して、其養子を随意に買入れる家族もある。
。フィジー島では妊娠した処女があれば之を縊り殺し、又之に關係した
男子をも殺してしまふ。婦人は、避妊のため水菜を飲む風習もある。而
してもしそれが成功しなかつたら大抵之を墮胎するか、然らば此は生後
之を殺してしまふ。ジャヌア、レブ島では、其嬰兒の二分の一乃至三分
の一を殺すのが常である。而して嬰兒殺戮を商売にして居る者もある程
で、其殺さるゝ者と言へば、皆女兒である。而かもかゝる虐牛に羅すこ
とを免れて生残つた女兒は、馬鹿々々しい程に可愛からるゝか、之は他
のメラネシヤ及ホリネシヤ諸島に於ても同様である。これらは何れも論必要

に迫られてすることには相違ないが、風俗上、道徳上大害のあることは言ふまでもない。現にハワイの如き未だキリスト教を知らず以前には、胎児、若しく嬰兒、殊に女兒の三分の二を親自ら之を殺して居るか、それか為、親子の情愛うすく、親は自分の子供を人へ貸して活として恥おそれ至つた。又嬰兒の死亡率増加し、道徳頹廢し、家族の基礎不安全になり果て、居たと云ふことである。

食物の乏しい結果として、人の生命を輕んずること、太平洋全体を通じての風俗である。ハワイの土人は、好人物なれば拘らね、老者、弱者、病者、狂者等に対しては殺忍であつた。彼等は石で打殺された事もあれば、又餓死する儘にさせられた事もあつた。フイジー島には、老人が虐待をうけ、或は老衰に陥り、或は病氣に罹ることかあれば其子は之を殺すか、然らば老人自ら其の子に頼んで己を殺させる。ニユーヘブリヂス島のゴートでは、老人は生きながら禁られ、其未世に移ることとを祭典にて祝ふことを行つて居る。

大洋洲では人の生命を頗る軽視して居る。斯う考へなくては同島に行はるゝ習慣は解決はつかぬものが多い。同島では宗教上の宴会又は葬儀の時では、人身を犠牲にするかは是れは其の背後に人口過剰に云ふ一大事か伏在しておるのちめ。又人身を食ふといふことは、普く大洋洲に於いて居る風俗で、その原因はスナガンソンの言ふところの依ると、一は飢饉の恐れあること、一は是等の島では動物をしく鳥と犬と豚との外は肉食の機会なきが為である。トンが群島には、人身を食ふ習慣はないが、飢饉の時にはそれが著しく行ふといふ事である。テラ、デル、フエゴでも冬期の飢饉時には人肉を食ふ。其近傍の牛ヨノス群島でも又此習慣がある。

以上は島生活の暗黒面である。斯くして人口過剰は嬰兒殺しの原因ともなるが、又農業、工業及び商業の発達の原因ともなる。移民、植民なども行して、世界の文明を普及するのち、又此為である。

第五節 平野・草原と沙漠

人類地理学は、陸地の形と高低とを論ずるのが本務である。海底の如きは是唯間接に人生に影響するに過ぎぬ。然らば、海底の高低は、間接にもせよ、如何様に人生に影響するかと言ふに、第一は海岸の形状如何に影響する。第二に潮が河口を洗ひ流すに際し其働を助ける。第三に漁業の如き多くの海岸生活の條件を左右するものである。之に加ふるに、海底及すものは、海底電線敷設の問題とも関係があつて、此方面から言ふと、海底は又商業上、政治上の意味をも帯びて居る。北大西洋には「電線高原」と言ふ處があつて三條の海底線が交叉して居るが、是れ即ち海底電線と海底起伏との關係を指示するものである。

加之、海底の起伏は地球上に於ける人類の分布にも關係がある。即ち今日の浅海は、地質学上の近代に尚陸地であつて、原人は大陸より大陸

に移るに之を徒歩して行つたのかも知れぬ。米國土人はアジア人種であると言ふ説もあるが、ブーリングの浅瀬は第三紀中新世時代に陸地であつたかどうかは、此説に大關係のあるものである。其他此類のことは尚沢山实例を擧げることが出来る。

大陸の海拔高低表を見ると、國民の平均生活状態が地勢の起伏に關係あることを知ることが出来る。アジアの平均海拔は一十米であると言ふ。さすればアジアは高地の多い地である。之に反して、ヨーロッパは僅に三百三十米であると言ひ、濠洲に至つては更にそれよりも低く、三百十米に過ぎぬ。是れ即ち共に低地に富めることを示して居る。然し斯かる数字だけでは、人類地理学の道理は明かにならぬ。否斯かる数字は却つて事實を隠蔽するの恐れがある。例へばアフリカの平均海拔は六百六十米でヨーロッパよりは遙に高いことを示して居る。然しアフリカは高地性の國で、其處にある低地や山が言ふに足らぬものであることは、此数字では分らない。之に反して、南北兩米の平均海拔は略々アメリカと

同様で六百五十米である。然し米國には広大なる低地があつて、之と密接して高地があるが、是も此数字では分らない。要するに平均海拔数は即ち地勢の起伏を示すには足りないのである。隨つて解剖的である所の人類地理学には余り必要でない。唯平均海拔数は地形学には必要のものである。

人類地理学者は、地勢に如何なる高低があるかを問ふものでない。其問ふ所は、高低が如何様の分布になつて居るかと言ふことである。即ちアジヤの様に、高地は高地、低地は低地と集團をなして居るのであるか、或は西部ヨーロッパに於ける如く交互に連続して居るのであるか。其高地より低地に移るには、南米に於ける如く急であるか、合衆國に於ける如く緩かであるか。之を研究するのが即ち人類地理学の任である。抑々土地の構造が單純で且つ広い処では、其地の歴史的運動も亦單純で広いものになる。是は其土地が人民を集めて大なる群団を作らせ、之をして大なる活動をなせしむることである。鬼角、低地の民、殊に草原地の遊牧民

が、山の谷間々々に分住人民に対し、歴史的に優勝の地位を占むるは斯くの如き理由に依るのである。此实例は小規模ながら、之を大英國に於て見る事が出来る。即ちスコットランドには、山あり、谷あり、海峡あり、入江ありて、高地人と低地人と、種族部族が分かれて居るので、其歴史は、混乱し離れ々々にちつて居る。

之に反して、イングランドの地勢は稍、統一して居るので、其歴史も滑かな統一した筋道を辿つて居る。

山の起伏は大規模となつて大陸にも現はれて居る。即ち一國に高低様々の土地のあるやうに、大陸にも亦低地あり、高地あり、高原あり、山あることは人の知る所である。就中、低地は灌漑の便へ具はつて居れば人種的にも、商業的にも必ず発達するものである。低地にあつては、總ての歴史的運動を妨げるものは殆どない。若し是有りとするれば、唯其小流に集る所の水と其肥えたる土壤に養はれし山林あるのみである。人類地理学的に言へば、山と高地の谷間とは、抑留的のもの、拘束的の

ものである。之に反して低地は、生活状態も大差なく、氣候も大抵は單調で、自然の障壁はなく、交際は実行し易い。或は山に圍まれ、或は沙漠に包まれた小々い隔離された低地は、小アジアのエーゲー海岸でもナイルの谷間でも、兎角早熟的に發達し、長く歴史的價値を維持して行くことが出来まい。然し斯くの如き他の特徴は、其低地と点には存せずして、寧ろ其沙漠、其山、其海を限界とする点に存するのである。之に反して、廣大なる低地、廣大なる平原が特殊の歴史的價値を有するのは、其拡大、荒漠無際涯の平地と言ふ点に存するのである。

平原は總ての歴史的運動の發源地でもあり、又受領地でもある。而して平原は、農耕、商業、交通等に適するので、隨つて定住者の住居地として最も好都合の處である。斯くして世界中、人口の密度の非常に高い地は支那の低地、印度の沖積土平原、ナポリ平原地、ボロ河流域平原地、其他佛、獨、オランダ、ベルギー、英國、スコットランド等の諸平原地に之を發見し得るので、其人口は何れも一平方哩に三百八十五人以上に及

んで居る。斯くの如き密度は、高地にあつては、唯、耕作し得べき低地に接近し、且つ鉱業の盛なる地に於てのみ之を發見し得るのである。

餘りに度大なる平地は早く文明の發達するには適しない。平坦で、單調な土地では生存も自ら單調になり、偏頗になつて、高地又は山を以て之を補ふ必要が生ずるからである。ミソリーの低地の最初の植民等を取つては、オガーク高原が突に大恩恵であつた。是れ此高地の小溪流が、彼等に木挽と粉挽との水力を供給したからである。エゲプトの如きも平地で、樹木に乏しく、船材は之をシバノ山の供給に俟たねばならなかつた。銅、孔雀石、土耳其玉、瑠璃等の諸鉱物に至つては、全部之をシナイ山地方に求めたものであつた。

平原は特に地勢に變化が乏しいのと、人民の氣質が平板になると云ふ缺點も有して居る。随つて平地國の人は其天稟豊かならず、人種の異同が平均されて仕舞つて、進歩發達の能力も自ら消滅する様である。之に反して、地勢に變化多きこと、クリートの如き、大英國の如き個性の發

達が著しい。ヨーロッパの西半部も亦之と同様の特徴を有して居るけれども、ヨーロッパの東半部にはポドランドや、ロシアの平原があつて、此地方の生活は何れの点から見ても單調である。此結果は此地方の人種に現れ、カルパシアン連山の北部と東部とに於て、其頭形略々一定し、唯僅にリスアニア及びクリミヤの如き隔離せられたる地方に特殊の種族を見るのである。

斯くの如き劃一は、小さい平原地にあつては却つて有利で、それが爲め、文明の早期発達をも来すことになる。其理由は其隣りに反対の環境が存在するからである。然し露國の如き大なる平原地の國民生活にては利益は多い。即ち露國では方言變化に乏しい。國語は二の方言を有するに過ぎぬ。一は北部の大露人の方言で、一は南部草原地の小露人の方言である。他の歐洲諸國語は、是よりも遙に小地域内に限られては居るが、是よりも遙に變化に富んで居る。カザンやアーカンのロシア人は、能くリガやペテログラードのロシア人と活を交へることが出来るのに、

ババリヤ、又はスウピアのドイツ人は、プロシヤ人、又はメクレンブルグ人と会話の出来ないのも斯かる理由の爲めである。ドイツは数十年前に國民服と言ふものが百種以上に達して居た。然し面積に於て、それに六倍した大露國には唯一種の國民服があるだけで、僅に十教点の小異を見るのみであつた。レルウアー・ポノリューは嘗て露國の此單調に關して次の如く言つたことがある。

都市も皆同一である。百姓も其容貌、習慣、生活法に於て同一である。何れの國にも、是程相互に相似た人民は居ない。何れの國も、是ほど政治的に單純なるものはない。國民も亦此國勢に似せて作られて居る。即ち彼等の住する平原と同じ畫を示して居る。否寧ろ同じ單調と言つた方が、よいであらう。

低地若し平坦で且つ無特色であれば、それだけに少しでも變化を與ふるものが大切である。例へば極く穩かな隆起でも、其他何でも、湖水でも、森むも、沼沢でも、悉く用をなすものである。殊に著しきは土質の

相違で、是は其居住民を分化する作用を有して居る。オランダでは、ワ
リス族のものは、主として西部及び西北部の粘土地及び低い沼沢地に
住み、サクソン族のものが、東部の洪積地に住み、フランク族のものが
南部の粘土地及び洪積地に住んで居る。それから此諸種族は互に相異な
れる方言、建築法、種族的特徴、衣服、習慣等を維持して居る。米國の
南部大西洋沿岸諸洲は、起伏の乏しい処であるが、其土質は変化に富ん
で居る。即ちジョージアでは海岸の沖積地は米と海島綿と言ふ一種の棉
との耕作地として用ひられて居る。随つて其住民の六割は黒人である。
然るに此沖積地に並行して一帯の砂地がある。此地方では、黒人の比例
が減じて二割乃至三割と成つて居る。それから此砂地の隣には一の肥え
たる地帯があつて、此處では主として綿を耕作するから、黒人は住民の
三割五分乃至六割に達して居る。アラバヤでも、同様の地帯が北から南
へ並んで居るので、人民の分布も亦同様になつて居る。即ち同洲北境の
土質は石灰質で、従つて穀物帯である。されば此地方では、黒人が住民

の三割五分乃至六割を占めて居る。次は鉱物帯で、此処は洲中最も人口稠密の地域であるに拘らず、黒人は一割七分に過ぎない。是より更に南には土質の肥えた綿の地帯があつて、黒人は住民の六割である。其次が低い林木帯の地で、此處は土質も大いに劣り、従つて黒人の居住する比例も非常に低い、一望際涯なき廣野は、將に発達せんとする人民には好都合でないが、成熟に達したる人民には、大面積を支配する能力を興ふるものである。されば政治的膨脹とも言へるであらう。露人が欧亜の低地を横断して、東方に発展したるのは其の一例である。之と相比すべきものは、米人がミシシッピ流域の平原及び草原を横断して、忽ちの間に其の植民地を拡張したること、及びハンガリー人がダニユーブ平原地をアルプス山麓より、カルパチヤ分水線まで征服せしことである。佛國の政治的發展と集中との中心となつたものは、セインス及びロアールの相連絡したる低地である。獨逸の北部低地は殆ど皆プロシヤに併呑せられたが、是れ即ち今日該帝國全面積の三分の二ばかりに當つてゐる。

斯くの如くにして依き平原地が若し適當の雨量をだに有すれば、是が
斯くの如くにして依き平原地に非常の便宜を興へる。それから次に彼等
をして定住生活を営まじめ、田圃を用かせ、都市を建設させ、益々發展
せしむる基となるものである。抑、此平原地より転じて次には乾燥した
草原地及び沙漠のことを説かう。抑、斯くの如き地に住める人民は、住
民を定めると言ふことが出来ぬ。絶えず移動して居らねばならぬ。然し
人民は移動するが、其文明程度は更に移動しない。其處では満目、日に
焦された草原であり、水に乏しい荒蕪地であつて、固有の文明を發生さ
せない。其處では牛羊を、増殖させる外に、富を集める途なく、且つ之
を増殖させるに乏へ、食料に限りがあつて、思ひ通りには実行が出来な
いのである。

草原は舊世界にあつては、牛、羊、山羊、驢馬、馬、駱駝、犛牛等が
飼ひ馴らさるゝに至り、初めて其歴史的價値を發揮した。それば、草原
をして價値あらしめんとすれば、其處に先づ飼ひ馴らさるべき動物がなけ

ればならぬ。又其住民の知力又は環境が其職業を自然的程度より人為的程度に転出せしむるだけに進んで居なければならぬ。扱、斯くの如き事情の具はつた草原が、何處かにあつたかと言ふに、先づ濠洲には此種の動物がなかつた。北米には馴鹿と野牛とがあり、南米にはガナゴバラマアルパカ等の駱駝族があつたが、此中、アンデス高地で飼ひ馴らされ得たものは、唯最後の二種だけであつた。それも一万余乃至一万余四千呎の高處たるを要し、而して斯かる高地では牧草に限りがあるので、原始時代の南米では物畜は農業の附屬物であり、到底草原の遊牧業の基礎となる事が出来なかつた。然るに西班牙人が、馬と牛とを南米に輸入するにあたり、此無樹草原地に住する土蕃及び雜種人は本職の遊牧民となつて仕舞つた。此種族を呼んで通常ラネニス及び、ゴトキヨスと言つて居るが、是等は騎馬種族であつて投槍だの輪索だの、ボラだのと言ふ捕獸器を用ひ、肉食を事とし、時としては、昔の匈奴族の様に馬肉を食ひ近代のキルデス、中古の韃靼族の様に皮製の天幕に住し、馬革を縫ひ合せた

衣服を着し、アルゼンチンの辺境を脅かしては白人植民地から馬、羊、牛などを奪ひ取り、斯くして遊牧民の奪掠的本能を悉く具有して居た。人を駆つて遊牧的生活を送らむるものは、唯乾燥ばかりではない。空気も亦同じ様な力を有して居る。即ち氣候が若し極寒なれば、其處に苔原が出来る。故にノルウエーのラツプ地方から、東部シベリヤのチユクチ人の居住地に至るまで、苔原上に馴鹿を牧し、兼ねて食料を獲る爲め漁獵を事とする人種が、群を成して住つて居る。此馴鹿を牧するチユクチ人は、牧場の續く限り、其半島内に住んで居たが、今では、段々西進し、レナ河畔のヤクツクまでも広がつて居る。東部シベリヤのユリマ河地方のオロコン族は是れ亦主として馴鹿を牧して居るが頗ぶる貧乏である。即ち有福と稱するものが四十頭から百頭を有するのみで、大富豪と稱するものでも七百頭を有するに過ぎぬ。更に其西方には、サヒイド族、シリアン族等が居るが是等は其多数の獸群を率ゐ、夏は北進してヤルマル半島、及びヴァイガッツ島に至り、冬は南下することにして居る。

而して是等の種族は、一家四人を支ふるに、五十頭の馴鹿を要すとのことであるが、此五十頭の馴鹿を養ふには、四方哩余の苔原牧場を要すと言ふことで、為めに彼等は永久散住せねばならず、到底歴史的重要の地に達する期がないのである。露国のラツプ種族も亦半遊牧生活を送つて居るが、冬は森林のあるユラ半島に赴き、夏は漁魚の出来る海岸の苔原地へと移つて行く。而して冬期中は沙漠の遊牧民と同様其年薄い収入を補ふ為め、貨物を馴鹿に載せて之を運んだり、郵便の牛助をして居る。之れは極北の遊牧民は到底歴史的の要地には達し得ないが草原地の遊牧民はさうでない。其位置中央にあるを以て能く相當の活動をなし得るので、北緯十度から六十度の間を対角線的にアフリカの太西洋から、アジアの太平洋まで、旧世界を横断せる一帯の沙漠地及び草原地があるが、是は熱帯と温帯とにある次地、沖積地、沿岸、平原等にある古い文明國と時々接近し、又は之を取囲んで居る。斯くの如き乾燥地に住する牧羊者は、落着きがなく、移動を好み束縛を受けないから、自分の育つた國

に長くは居つかず絶えず、自國よりも優良なる隣國に侵入し、其田圃や都會を横領した。而して其文明を攪亂したには相違ないが、之と同時に亦之を採用もした。斯くして乾燥地と濕潤地、瘠地と沃地とが相接觸して居る爲に、此兩者の歴史は相離るべからざるに至つた。

草原地居住の人民の生活法を見ると、悉く移動と言ふ特徴を帯びて居る。其家屋の如きカルマツク人、キルギス人の如くに、獸皮か毛氈の天幕が然らむれば近代のホーア、昔のスクテヤ人の如くに天幕車である。其道具の如きも出来るだけ之を輕減して居る。東部シベリヤのオロンチヨンと言ふ遊牧民の如き、其天幕内に一の家具を備へて居ない。又其僅かばかりの衣服と器具とを手綺麗に襪に縛りつけ、命令一下何時でも出発の出来る用意を整へて居る。聖書に記載せられたるアブラハムや、ロトの如き、又斯くの如き生活を送つて居たのであらう。近代では、一八三六年に、南アフリカのホーア人は英國に服従するを欲せず、其住地を捨て、一大移住を實行し、彼等は他に移つたのである。露國のゴサツクも亦移

動的の種族で政府の圧倒に堪ふる能はざるに至れば、即ち其土地を捨てて移住することを意としない。一八七八年の夏、シベリヤでは凡そ九千人のキルギス族を失つた。彼等はセミパラチンスクを去つて、蒙古に移つたのである。

是等の遊牧民の移動は、氣候に支配せらるゝことが多い。即ち蒙古族は皆冬期水の多い時は一處に集まつて住居し、夏期は水を求めて散住する。或は平原を捨て、高地に暑を避くるものもある。露領トルキスタンに居る。キルギス族の如きは、夏はアルタイ連山の半腹又は谷間に天幕を張つて群居するが、其周囲に羊、山羊、駱駝、馬、牛などの群をなして居るのは全く壯觀である。パミールも夏期は中央アジアの遊牧民の群居場となつて居る。アラビヤの沙漠でも兩期には牧草が生ずることがある。此時にはベドウィン族が此處に集まつて牧畜する。然し続いて旱魃が来ると、イーメン、シリヤ、パレスチナ等の山中に赴き、或はナイルヤ、エーフラトの流域に移るものもある。北部サハラのアラビヤ人は

少しばかりの羊と山羊とを率ゐて、夏はアトラス連山の羊腹に行き、冬は沙漠の辺境に生ずる僅かばかりの針金の様な草を求めて移動する。

然るに水や草の供給が不足するか、或は牛、羊の群が殖ゑて是までの牧場では之を支へることが出来なくなると、彼等は往々其隣地に侵入して行く。又牛羊が斃死したり、食物に不足したりする場合には、彼等は直に剽盗と変ずる。彼等は強盗を恥とは思はない。否寧ろ之を名譽と心得て居る。アラビヤ人は竊盗と商業とに等しく其身を委ねて居るとはプロニコースの言つた所である。彼等は商隊を襲ひ之を捕へて、償金を貪ぼることもあるが、又案内料を取つて、沙漠の安全な案内者となることもある。露領アジアの草原に住するトルコマン種族の如きは、元は其隣地特にペルシヤのコーラサンの北部に対し徴税を行つた。又ステツク種族はヘラツト、キヴァ、メルボ、オハラ等の辺境を侵入して、大害を与へたが、露人の為に漸次征服されて仕舞つた。テツク種族は是等地方の人民を滅ぼして仕舞ひ、深くペルシヤ領に侵入し、無数の家族を捕へて、

之を奴隷に賣り渡したるのであつた。トルコマシ種族、キルギス種族等も、一八七三年以前には、商隊を襲撃し、旅人を引擄つて之をボハラ又はサマルカンドの奴隷市場に賣渡した。

侵掠を受けた國が若し近代的の文明國であれば、直に辺境居住民を以て騎馬巡査隊を組織し、以て今後の侵掠に備へるのが其常である。例へば英國はホルヌ、ソコト、エジプトのスターダン等に於て之を實行した。又露國は其境を進むるに従ひ、騎馬隊を組織して之に守備の任を兼ねしめた。更に古代の國々の實行した所を見ると、各々其方法を異にした様である。而して遊牧民は其牛羊を率ゐて進来するものであつたから、障害物を設けて置きさへすれば、是で事足る場合も隨分あつた様である。斯くの如き例は枚挙に遑なき程であるが、エジプトのセソストリスは、アラビヤ人を防ぐ柵としてペルシウムよりヘリオポリスまで一千五百スタヂヤヘースタヂヤは六百呎の長城を作つたことがある。昔りカルタゴ人も亦ヌミヂヤの遊牧民の掠奪を防ぐ目的で、濠を掘つたこともある。

昔のアッシリヤ人も亦沙漠のミード種族の侵入に対抗する為め、エーフラトの平野を横断して障壁を造つたことがある。然し何と言つても、此種の最も著しい実例は、支那の萬里の長城であらう。

遊牧民は之を経済的に言へば牧者である。之を政治的に言へば征服者である。而して彌久的に彼等は兵士である。彼等が牧場を争ひ井水を争つたことは、既にアブラハム、ロト、イサクの歴史にも記載せられて人の知る所で、此等たるや、対内的にも、亦対外的にも行はれたものである。彼等は其牧場を守るの必要上絶えず軍隊組織を解くことは出来ぬ。國民即ち靜的軍隊で、軍隊即ち自己運送的の兵站部である。彼等は常に騎兼し、偵察し、武器を使用し、困苦と戦ふので、其一人として兵士を兼ねない。彼等の騎兵、駱駝兵は、共に其進撃に速力と勇氣とを添へ、且つ突然の攻撃と、神速の退却をなすを得せしむるものである。昔はダニユーブの草原に騎馬と射術とに妙を得たるスクテヤ人と言ふ遊牧民があつた。彼等に因してツユキゲデー又は斯う言つて居る。曰く「スク

テヤ人若し一致したなら、彼等と比し得べき國民、一もななく、彼等に抵抗し得る國民一もない。余はヨーロッパに於て言ふのみではなく、アジアに於てさへも、一もないと言ふのである。と、ヘロドタス亦此意見に同意して居る。實際、遊牧民の生活は一として彼等の勇氣を養ふ種ならぬはない。沙漠で独立的、冒險的の生活を營む結果、アラビヤ人は人類中の最も勇敢なるものとなつた。然しアラビヤ人は皆強いのではない、エジプトや、回教的スペインに居住せるアラビヤ人は農業に従事し、其好戦性は大抵銷磨し去つて居るのである。

斯くの如くして地理的の狀況が直接に遊牧民に移動の習慣を與へ、且つ又間接には軍隊的、政治的組織を結ぶことを教へた。世界の遊牧的人種が政治的團結をなすの大任務を果し得るに至れるは、全く茲に原因するるのである。抑、文明進歩の背後には勿論農業が存在して居る。然し農業には勇氣や、可能性や、冒險性や政治的大見識などは伴はない。而も遊牧民は悉く之を有するのである。之れば若し平和な農民性に權威ある

遊牧民性を併せ、之を打つて一丸としたならば、野蠻族及び半開種族の爲めに堅固な政府を作ることが出来るであらう。暗黒アフリカの政治的に懦弱な人民は國家を建てだけの硬骨を戦勝者たる遊牧民より得て来たのであつた。スーダンの諸國は、何れも皆北部の沙漠に侵入したハム族セム族等の遊牧民の力で出来上つたのである。東アフリカのガラ族及びワフマ族等は、ウガンダ、キツタラ、カラグ、ウジンザの如き比較的堅固な國家を赤道地方に建設した。有史時代に入つてからは、アリアン系屬たる多くの種族が歐洲及び南方アジアに發展したが、其中にあつても、遊牧種族が独り断然として頭角を露はして居た。其理由は、此時代には一望際涯なき草原地にあらざれば、到底移住と戦勝の爲め人数を集中すると言ふことは出来なかつたからである。地勢が不平均で大なる山林のある地方は唯小さな孤立した民を住はしむるに足るのみ、斯くの如き民には共同運動と言ふ様なことは到底考へも及ばず実行も出来なかつたのである。

アリアン種族等は如何にして迅速に其征服の功を奏し得たか、如何にして其征服の範圍を拡張したかと言ふに、是は畢竟其征服地に於ける有力階級だけを排斥し、他の一般人民に対して殆ど手を下さなかつたからである。斯くの如くにして彼等は広い面積の上に薄く拡がつたのである。斯かる戦勝の結果が果して如何程継続するかと言ふに、其長短は遊牧民の到達した社会的進化の程度次第であつた。成吉思汗や帖木兒は王者の上に王を立てる仕組で、其征服地を組織し、其政治は他方／＼の君主に委ね、租税徴集者として年々恰も遊牧的掠奪者の様に国内を駆け廻らせた。トルコ人は今日もヨーロッパ内に立てこもり、其租税を徴集する方はは奪掠的である。而して征服者と被征服者とで其領地内で融和して居るのではないが、其廣い面積内で雑多の種族が政治的には結合して居る。エジプトの征服者ヒクソス族はナイルの流域が幾多の侯國に分れ、之に一々國王のあるを見た。然るに此遊牧的戦勝者は、其政權を掌握し、而して有力な中央集權的政府を建てた。是れ即ちエジプト第十八王朝の強

大と蒙譽との基礎となつたのである。韃靼族は一二七九年に、満洲族は一六六四年に支那を征服し其境を拓め、自ら治者の地位に立つて國を支配したが當時の國家の秩序は元の儘差置き、更に之に干渉を試みることをしなかつた。

遊牧的勝戦者の歴史を見るに、大抵は氣候の加減と、低地の奢侈な風とにより懦弱になる様である。而して其好戦性を失ふに至つたものである。スーダンの諸國中、フエラタ族の國家を建てたものは即ち其一例である。又或は同じ草原より侵入したる他の戦勝者に其位を奪はるゝに至つたものもある。印度のアリアン諸王が蒙古の皇帝に其位を貶せられ、又は即ち其一例である。或は又一旦征服した其臣民の爲めに放逐せられたものもある。韃靼族が露國より放逐され、ムーア族がスペインより放逐され、トルコ人がダニユール流域から放逐されたのは、即ち其實例である。

遊牧民は或は敵の来襲に備へる場合或は大征服を行はんとする場合に

は、互に一致の行動を取るものである。然し斯くの如き一致は、其性質上一時的のものでなければならぬ。彼等は水草の供給上どうしても小群をなして居住するを便として居る。昔はアブラハムとロトが斯かる事情の爲め、遂に住所を別にした。ヤマブとエサウとが分れたのも之が爲である。キルギス族の如きは、非常の好季節に於て、非常によい牧場に居る時の外は、通常一群の天幕教は、五又は六に止まると言ふことである。バースの言ふ所に據ると、サハラの大地の村落は假令商隊の通路に當り、非常に樞要の位置を占めて居ても、尚頗る小さいと言ふことである。斯く小群をなして居住するの結果、遊牧民は非常に強い独立の精神を持して居る。ベドウィン種族の如きは一人々々が自由で其酋長の権力は名義に止まり、又多く其人格次第である昔のアラビヤ人が雄辯であつたと言ふのも、圧制を嫌ふ此人民を説得する必要から生じて来たものであらう。是はサハラのカツバス族や、露領アジアのトルコマン族の間には、政治的組織が著しく缺けて居る。「吾等は首長なき人民である」とは彼等

の自ら言ふ所で此処でも首長は虚器を擁して居るに過ぎぬ。彼等は唯習
慣と先例とに依つて支配せられて居るのである。斯くの如き遊牧民も一
時之を一致させて有力な軍隊を作られぬではないが、然し其一致たるや
頗る短命である。

此自由の精神盛なる遊牧民を服従せしむると言ふは余程の難事である。
曾てゴードンはスーダンの遊牧民を服従させたことがある。然るに是か
ら三十年を経て一八九八年に至り、彼等は回教の導師を戴いて其盟主と
なり、假令一時的とは言へ、有力な結合をなして反旗を翻した。之が為
キツナナリはゴードンの三十年前になせる所を再び繰返さざるべからざ
るに至った。アラビヤ人は今日でも自由独立で、トルコの主権と言ふは
單に名義に過ぎない。否、之を怒らせては危険だし、之を攻撃するに困
難であるから、之と同盟を結んで居ると同然である。今日トルコに服従
して居るのは、海岸の諸地、即ちヘジャズ、イーメン、ハサ等であつて、
内地と東南海岸との各種族は悉く独立して居る。露国は露領アジアのト

ルコマン種族を服従せしめんとして策の施すべきなく、唯絶滅法に依つて目的を達した。支那の如きも、蒙古及びトルキスタンの遊牧民に對しては唯名義だけの統治を以て甘んじて居る。

遊牧生活は何等かの方法で之を根絶して仕舞はねばならぬ。之に就いて佛國がサワラの遊牧民に對して執つて居る政策は、多くの井戸を掘つて、多くの沃地を作り、彼等に繁茂した椰子林を与へる方法である。露國の執つて居る政策は、遊牧民を压迫して彼等を益々狭い地域に追ひ込め、彼等をして遂に其土地内で是非とも引水と耕作とに従事させる方法である。支那の執つて居る政策は、其耕地の境を益々推し広めて、彼等の牧場を蠶食し、彼等をして次第々々に劣等な牧場へと移らしむる方法である。

ヨーロッパでは今日遊牧生活は益々減少し、裏海の凹地で、全く農耕には適しない三十万方哩の監野に、カルマツク族、キルギス族などを見るのである。アジアでも亦益々減少して行くが、独リアラビヤでは其地

域が段々と広がって行く観がある。即ちアフリカの遊牧民は唯草原地を占めて居るばかりでなく、又農作に適する様な土地にまで侵入して来て居るのである。されば此暗黒大陸に於ける將來の経済的、農業的歴史の大部分は、農耕地を此遊牧民の牛により回復することに存すと豫言しても誤りはあるまい。

遊牧民にして農業を兼ねて居るものも多少ないではない。露国の草原に住するカルマツク族人を備つて冬期に乾草を貯り入れると言ふことである。アトバラ河及びガツシエ河の東に住む或アラビア種族も亦無雨期には豊饒なるカツサラ地方に移り、其處で蜀黍及び他の穀物を耕作する。カラハリ沙漠の草原地に住するベキエアナ種族は、山羊の小群を牧する處に、甜瓜や南瓜を耕作して居る。然し永久的の農業をなすに必要な水は、何分沙漠や草原では頗る乏しく、若し其量より少しでも減ずれば、耕地は之が爲めに縮少を来すのである。濕潤地では左程にも感じない雪や雨の多少の増減が、沙漠や草原では著しい結果、又は悲劇的結果

を派すことになつて居る。アフガン地方の河流を調査した英國の技師等は土人が其水を極度まで消費せることを報告して居る。即ちカブル河、ヘリ、ラツド河などは、或季節には灌漑に利用されて、一滴の水もなままでに涸れ果てると言つて居る。又トルコマン種族の住する草原地では耕地を拓け、運河を増した結果、水の蒸発量が加はり、却つて供給が減じたと言ふことである。總て是等の事実を見ると食糧と飢饉とは全く向一髪で、草原地では農業は不安な生活法である。されば旧世界に於ても、新世界に於ても、曾て田園として用ひられた地の、今に委棄せられてゐる跡を往々発見することがある。

遊牧民は飢饉に瀕し易き結果、日々の食物は非常に少量のものである。ベドウィン族は酸敗した駱駝の乳で料理したものを日々の食料とし、唯来客のあつた時にだけ、之にパンと肉とを添へるのである。而して其食糧の少ないことは、ヨーロッパ人の一食量が六人のアラビヤ人を養ふに足ると言ふを以て察することが出来る。韃靼人は嘗て歐亞を風靡した時

にも尚非常に少食主義であつた。或書に「彼等は食ひ得るものを悉く其食料に充てた。何となれば、彼等の或者が乳を食ふのを吾等は実見したから」と記してゐる。彼等は死人だ動物の肉を總て食料に充てる。而して夏期には之を日光に乾かし、以て冬期の食料にした。是は夏期には牝馬の乳が多いので、韃靼人は専ら之を其食料に用ひたりである。彼等は、朝食に一二杯の乳を呑むと、それで晩食まで辛抱し、而して少量の肉を晩食にするから、一頭の牝牛は五十人及至百人の食料として十分で、骨は之を噛んで、光澤の出て来るまでに及ぶと言ふことである。成吉思汗の如きも動物の血でも、内臓でも其他如何なる部分でも、凡そ口に食ひ得るものば之を捨ててはならぬと命じたことがある。トルコマン族の中には外見有福らしくても、唯乾魚を食ひ、パンの如きは一日一皿だけしか食はぬものが多い。貧者に至つては、麥は高價の爲め全く之を食ふことが出来ぬ、サハラの子ツブス族は、何時も其腹を充たすだけのものを食はず、唯死獸の皮と粉碎した骨とを其常食として居る。

斯く沙漠や草原の生活が困難なる結果、彼等は肥満を嫌つて居る。

西藏の高原に住するココノル蒙古族は瘦せぎすで、決して肥えたものはない。ベドウイン種族の理想の体格は瘦せて、筋張つて、活氣に満ちて強いことである。サハラに住する遊牧種族はハム種たると、セム種たると、黒人種たるとを向はず悉く比標式で、スーダンの河流區域に移住しても、数代の間は改まらぬ。カラハリ沙漠に住居するブツシユメン族は瘦せた針金の様な形で、而かも非常な困難に堪ふことが出来る。

遊牧民は他國征服の嗜好があり、随つて其兵力を増す為めに、家族の膨脹は望まないのである。然し水と食物との供給に限りがあるから人口増加が調節される場合は兎も角然らざる場合は、結婚があつても、産兒は段々減じて来る。或は沙漠住民間では、人口的に人口減少を實行すること稀らしくはない。トルコマン種族の家族に子供が少むいと言ふのも畢竟食物不足に原因して居る。西藏のココノル族は、一家の子供の数は二人又は三人を超ゆることはない。バーヤハルトの説に據るに、ベ

ドゥイン種族では大家族と言ふのが子供三人に止まると言ふ。彼等は回教徒ではあるが、一夫多妻を行つて居るものは殆どない。否、異教時代には却つて一妻多夫主義、又は嬰兒虐殺を行つて居た。要するに沙漠の住民は自ら一夫一婦主義であるらしい。

遊牧民は自然の敵として物品に乏しいから、必要に應じて隣國のものと貿易を行ふこととして居る。アラビヤのベドゥイン種族は、バタト牡駒とを以て、麥粉と、馬糧としての大麥と、珈琲と被服とを買ふこととして居る。同じくアラビヤの北部諸種族は、毎年スリヤの國境へ、丁度ダマスコ及びアレツポから行商の来る頃を見計つて交易に行く。ロシア及びアシアの諸草原に住するキルギス族は、ボハラ及びロシアの國境地で、馬と羊とを以て、穀物、被服、木具等に代へる。然し時としては、遊牧民の土地にも、牛羊以外のものを産することがある。即ちサハラ沙漠の鹽、インダス沙漠のゴム、ヨルダン東岸の高地の香油の如きもので、是等は前記貿易品に加へらるゝものである。

然し沙漠や高原の産物は少ない。随つて彼等は仲買人となることが多い。シベリアのチユクチ族は露國の製品を馴鹿に載せ、ベリリンカ沿岸の市場に往つて、アラスカの毛皮と交易すると言ふことである。聖書の記する所に據ると、ヤコブの子等、ユダヤの野で、羊を牧して居る際、イシマエル人等が駱駝に香料、没薬などを載せ、エジプトに下り行くのを見た。而して其際、此イシマエル人等はヨセフを奴隷として購入した。此奴隷は昔から今日に至るまで沙漠に於ける貿易品のトである。駱駝を「沙漠の船」と呼ぶことがあるが、若しさうであるなら、沙漠の縁にある市場を港と言へるであらう。是等の市場は、遊牧民に必要なものを悉く備へて居る。而して其郊外は、牧羊者等の入り換り、立ち換り、~~露草~~露草を張る所である。チンブクツトでは斯かる場所をアバラゲオンと呼ぶとの事なるが、年々其處に出入する駱駝は五万乃至六万と稱せられて居る。其工業は、沙漠内及び沙漠の河岸に住する人民の需要が一原因となつて発達する。かのダマスカスの槍の如き、ベドウィン族が最良

の武器を必要としたことを反映するものである。

遊牧民自身も閑暇が多いので、其處に工業が全く起らぬでも厚い。然し其工業は家族工業以上には発展しない。是れ人口少く、分業の道無き爲である。ベドゥイン種族は尙には鍛冶と鞍工との外に職人はないが、是等の職業も非常に輕蔑せられ、ベドゥイン種族のものは、之に従事しない。それで昔アラビヤでは工業は皆無で、近代でも眞に微々たるものである。唯サハラのアラビヤ人の間には、代々井戸掘りを業として居るものがある。其起源は非常に古く、且つ一般に尊敬せられて居る。

然し東洋絨毯は、確に此牧民に起源したものである。彼等は羊、山羊、駱駝の毛を、丹誠に織り合せて之を作り初めた。然るに何時しか是が沙漠の端にある町村の工業となり、而して遊牧民は其處に定住し、之を専業とするに至つた。東洋に於ける絨毯製造の地理的分布を見るに、此工業は半乾燥地又は鹽分的草原と關係がある様である。即ち舊世界にあつては、ペルシヤ、トルキスタン、西アフガニスタン、ベルタスタン、印

度西部、小アジアの高地等に於て最も発達して居るが、是等は皆其雨量が十吋乃至二十吋、否それよりも以下の処である。而してペルシヤや、小アジアでは其意匠及び色合は多く顧客の趣味に應ずる様にして居る。然し遊牧民は、自用の爲めに作るので、其固有の色合と意匠とを黒守り少しも之を改むるときはない。

沙漠と草原とは進歩を阻止する所の手である。其處に住む種族は、発達せしむられず、老熟することもなく何時までも世界の子供である。彼等の風俗、習慣、生活法は幾年経ても同一で例へばアラビヤ沙漠の内部の社会的、経済的狀態は、モロセの記事と、モハメツトの記事とバルクハルトの記事と、更に一層新しい旅行者の記事とを相並べて見ても、寸分の相違を認めない。ヘロドタスが露國の草原地住民に關して設ける所も、それより五世紀後ストボラの設ける所も、一二五三年、ウイリヤム、ヅルガイスの設ける所も、カルマツク族、キルギス族の現状も全く同一である。唯彼等遊牧民は、稍天恵の多い地に行つて、農業生活を送りぬば

ならぬ様になつた場合、若しくは坐業人種と交際して、労働と進歩の味を知つた場合に、初めて彼等は社会的又は経済的に発達するのである。即ち彼等は移住するか、又は農民間に侵入するか、何れかの方法で、其草原地の環境を脱し、斯くして進歩の途に就くのである。斯くして移住したる遊牧民は別段何事も創始しない。然し文明の傳播者として相當に歴史上其役目を勤めて居る。即ちアジアの遊牧民は、支那、ペルシヤ、エジプト、イーメン等の文明を世界の面積上に散布した。紅海沿岸の沙漠に住めるセム種の遊牧民は、其商人及び戦勝者を介し、久しい向の暗黒スーダンに文明の光を投げて居た。かのモハメツドはイシマエル種のベドウィン族でメツカとシリヤの間の沙漠を往復する隊商の長であつたが、彼はエルサレムから單純な一神教を傳へて来て、其軍隊的信者を介し、此信仰をアフリカの東部及アジアに播めた。

遊牧民には種々なる特徴がある。勇氣、忍耐、剛復、警戒、地方感、觀察力等であるが、就中最も強く、且つ歴史的に最も價值あるものは

其宗教心である。ウルクとガビンの證明する所に據れば、中央アジアの高原に住める佛教信者の遊牧民は、其信仰の篤きことに於て、遙かに低地の支那人に越えて居る。世界の三大一神教は何れも、其起源と発達とに於て、シリヤ沙漠やアラビア沙漠と密接の關係を有して居る。殊に回教の播まっつて居る範圍を見ると、アフリカのセネガンビヤ及びザンジバルから、アジアの印度河、タリム河、及びオビ河に至り、草原地帯を含み、多少此中に、隣地の水利を有する地域も入つて居る。其人種を言へば、黒人種あり、ハム人種あり、セム人種あり、イラン人種あり、インド、アリアン人種あり、亦蒙古人もある。而して彼等が一様に此嚴格なる一神教を信ずるに至つたのは草原と言ふ環境に由るものと言はねばならぬ。彼等の智力には限りがある。然し其想像は自由不羈、少しも囚へられて居ない。而して其單調な環境よりして單一の印象を受け、斯くして其崇物教、自然教を捨て、一神教を信ずるに至つたものであらう。

今若し回教とユダヤ教とキリスト教とを比すれば、ユダヤ教は如何に

も狭い地方的基礎の上に立つて居る様である。それは世界の各部に広く移植せられても、到底種族的宗教たる其特色を捨てることは出来ない様である。其教義と言ひ、儀式と言ひ如何にも保守的で其沙漠に生れたる特徴が何時もありくと残つて居る。次に回教は如何かと言ふに、是亦其出生地の環境の色彩が著しい。従つて乾燥地の人の心には強く訴ふる力を備へ、實際上にも亦是等の人々の間に傳はつて、其実行の原則となつて居る。然し回教は畢竟経済的にも、社会的にも未発達な人民に属する宗教で、其中に道德的進化の萌芽を缺いて居る。若し夫れ十分に之を有して居るものは、ヘブル的一神教の旧城寨に生れ、而かも飽くまで地中海の盆地とローマ帝國との世界的勢力を抱有して居るキリスト教あるのみである。

第六節 山岳と山道

平原の特色は、各種の歴史的運動を容易ならしむるに存し、山の特色は却つて之を妨害し、拘束し、受け流す事に存して居る。抑、人間は、空氣や水と同じく地球の動的被覆であつて、絶えず重力で吸引せられて居る。従つて山を登ることは非常に困難を感じ、又山で生活すると言ふことも一方ならぬ難事である。又食物の供給も、低地から高地に進むに従ひ、次第に減少するから、山を越えろと言ふことは、移住民に取つても行進軍に取つても、共に甚しい苦痛であると言はねばならぬ。斯かる理由で山は其險難に依り人を反撥し、低地は却つて之を吸引する。歴史的運動が若し高处へ進まねばならぬ様になれば、成る丈山脊や、山嶺を避け、谷や山道を求める様になるのは、其處と低地との交通が最も容易であるからに外ならぬ。

陸上では、山ほど人類の邪魔をするものはない。人が其発展を計らうとする場合、之を妨げるものは山である。即ち山は、險阻で、道を作り難く、且つ森林があつて人を通さない。山は其地味瘠せ、耕地少なく、氣候も宜しからず、外界との交通容易ならぬので生活が困難である。故に低地で経済的圧迫が甚しくならぬ間は、何人も山を耕すことをせず、又此處に家を作ることをせぬ。例へばヨーロッパの原住民たる長頭族は、大陸全体に拡がつて、アルプス山麓まで及んで居たが、アルプス山中には居住せず、唯佛國のオーストリア又高原に僅に住んで居たに過ぎなかつた。アルプス族が、西部ヨーロッパに住み初めるやうになり、初めてスウイスの高地・ドイツのアルプス、佛國のオーストリア又等に住民を見るに至つた。

山地は沙漠や海と同様に過度地である。人は出来るだけ早く之を通過せんとする。故に山地は歴史的に言へば大低勦的地域に圍まれた靜的地域で、歴史的舞臺に現れたのは平原住民が山向ふの地に至らんとする時

の通路となつた時である。而かも山地の演ずる役目は甚だ僅少なるものである。即ち唯通過し得べき路が役目を果たすだけで、其他の部分は更に顧みられない。昔シロザーは唯アルプスを越えてゐる間に、何時しか此山の住民がローマの商人及び軍隊の通路を妨げようとしたので、初めて此山の占領を必要とするに至つたと言ふことを記載しただけで更にアルプスのことを説いては居ない。英領印度も斯かる通路に當る地の主権を握つて置くことだけの必要から、ベルチスタン、カシミール、シツキム等を占領することになつたのである。

斯くの如き山地が獨立に歴史的價値を生ずるのには、一國の人口が増加して、其山が自から一國家の中心となつた時である。自ら盟主となつて、其周圍の諸地を糾合し、此連盟に加はつた者にだけ此險要の地の通過を許すこととすれば、該山地は非常なる權威を握ることが出来る。故に斯かる山地は之を鉄道に譬へて言へば、恰も緩衝機の様なものである。古ピレニシ山の西端の要路を支配したナゲアリーの如き、今日中央アルプス

の通路を扼して居るスウイスの如きは即ちそれである。

山は大抵越え得べきもの、又越え得べき様になりつゝある。然し又全く越え得べからざるものもないではない。コロラド河の大峡谷の如きは、三百哩の間交通を妨げて居る。ベルン、アルプスには山脊に氷河を載いた所があつて、六十二哩の間一の車道もない。ペニン、アルプスにも五十四哩の間通路の全くない處がある。之に反して、緩かな傾斜、所謂台地は人に取つての價値と言ふ點から言へば、山の中でも最も大切な部分で、山の有する多くの便宜を兼ね、平野の有する交通の便宜をも有して居る。斯くの如き台地を有せざる大陸及び國家は、その爲めに非常な損失を受けねばならぬ。かの南アフリカが不利益である點は即ち是であつて、滿洲の大平洋方面の如きも、若し高地より海への傾斜が、今少し緩やかであるならば、歴史上の價値は頗る増大することであらう。米國の大平洋沿岸とアパラチア高地とを繋げる平原は、此緩やかな傾斜を有して居る所である。其處を通ずる河の流域を調べて見ると、何れも人類地

理学的に三階段をなして居る。即ち下流が開港場、中部が種々な農業地、
 上流が種々な水力工業と鉾山とである。而して各部の風景が其住民に夫
 々の特色を興へて居ることには言ふまでもない。佛、独、及び北部イタリ
 ーにも之と同様の地勢があつて、人類の活動及び住民に同様の効果を及
 ぼして居る。

山の麓には、山麓帯と稱する部分がある。此山麓帯は、地理的の境界
 線ともなり、人種的の境界線ともなるものであるが、此境界線が極めて
 明晰に分れてゐる場合は、低地の高等人種が、段々高地の住民を圧迫す
 る時で、其場合には、人種も文明も一目瞭然之を區別する事が出来る。
 昔ローマ人とリシア人とは東アルプスの山麓帯で境を交へて住んで居
 たことがある。今日も露人は、コーカサスの麓で諸々の異種族と隣合つ
 て居る。又山麓帯は人口の疎密を分ける境界線となることもある。即ち
 山地は人口の疎なる所であり、平原は密なる所であつて、山麓帯は此間
 に挟まつて居る所であるからである。然し山が若し非常に高く、其麓に

沙漠や、草原のある場合には、山麓帯が却つて人口の最も稠密な處となる場合もある。又山に鉱物があるか、水力のある場合にも、此山麓帯に多くの人口が集まつて来る。是はサキソニのエル連山、シレニアのリゼン連山、北西英國のペニン連山、南ウエールスの高地等に於て見る所であつて、其人口は一平方哩三百八十五人に達して居る。

山は如何なる歴史的運動にも厚遇を與へない。従つて長い間歴史的障害物となつて居る。斯くの如き場合には山麓帯の生活は何時までも植民地の國境のやうな特徴を呈して居る。南アパラチア連山の山麓帯は今日でも、猶此原則を例證じて居る。米國民が一八三〇年から一八五〇年まで西部に向つて膨脹した時代に、ロッキン連山の東麓に、幾多の少交易場が散乱して居た。即ち此高地の一産物たる獣皮の集散場が、彼處此處に散在して居た。此交易場は他日カリフォルニア、オレゴンの開けるに従ひ、中樞となつたが、それでも尚久しく國境的交易場たるの觀を呈して居た。而して農民や工業者などの此處に密集するに至つたのは、此山

麓帯には水の供給が近隣の平原地よりも豊富で、且つ山上には鉱物が夥しいことゝの分つた時からであつた。

山がまだ原始的状態にある時には、其處に専門の運送人が現れる。此の運送人は、公道盡き、驢馬亦是より以上に進まぬと言ふ地点即ち山麓帯に集まつて居る。彼等は其特別な環境に教育されて、登山にも慣れて居るので、南北兩米の大平洋沿岸、即ちアラスカ半島よりマゼラン海峡に至るまで、到る處に之を發見し得るのである。彼等は百磅乃至百六十磅の重荷を負ふて、能く險路を登ることが出来る。中央アジア高原にも亦斯くの如き専門の運送人があつて、特にタリシリンとシガツチエとの間のヒマラヤ越をするブチヤと言ふ種族に就いては色々面白い話がある。ヤンカハズバント大佐は、此ブチヤ種族の者を備ふて運送人とした所が、二人能く二百五十磅から三百磅までの荷物を運ぶことが出来たと言ふことである。恰も中央アジアの運送人の常量の三倍である。パルシヴアル・ランドンの「西藏開放」と言ふ書に據ると、ブチヤの一婦人は其頭上

にピアノを載せ、平原から海拔七千五百五十呎のダージリンまで運び上げ
たこのことである。

歴史的運動は山麓帯の傾斜地に達すると、其處で其歩調を緩めるもの
とすれば、高く山上に達した時、最早停止して仕舞うのが當然である。

此際若し此山險を突破して交通を全うし得る途が、人に依つて発見され
たとすれば、此山險の妨害が初めて幾分除去されたと言ひ得るであらう。
ビスケル湾から黒海に至るまで、南欧を横断して居る高地脈の如き、地
中海沿岸地方の文明を阻止すること久しきものであつた。中央ヨーロッパ
が文明史の表面に現るゝことの遅かつたのは、全く此高地脈に妨げら
れた爲めである。かの透徹的なギリシヤの文明ですら、山險の端を遠廻
りして中央ヨーロッパに立ち入ることを得たのである。又ギリシヤの商
業は、一方マツシラと、ローン河とを経て、又一方イストリヤとダニユ
ーブ河とを経て、僅に大陸の内部に達することが出来た。

山の天險性はその高さと構造との如何に關係するものである。ピレニ

コーカサス、アンデンス等の如きは其間に山道の数少く、且非常に高いので、古今共に交通を遮断する天險であつた。又壘壁的性質を帯びて居るので、ヨーロッパの自然的境界線として、アルプスには非常に良好な山道多く、それが又大抵は其分布能く平均を得て居る。米國のアパラチア山脈は、其幅凡そ三百哩、其長さ千三百哩にも及んで居るが、其平行脈の中に幾多の越え易き凹處があつて、それが爲め、初期の西部移住者に近廻的ではあるが、非常な便宜を與へた。ヒンツクスン山脈は其長さ四百哩に達し、且つ高いことも高いが、印度に取つては有力なる自然的境界線と言ふことは出来ない。是は一万二千五百呎乃至一万九千呎の高處にすらも尚幾多の山道があるからで、此山道中、最も東にある教條の如きは、カシミールに下る道路であるから、隨つてカシミールは印度より北の入口の護衛所として特に大切のものである。

山脈が幾條も幾條も相當壘壁して居る場合は、勿論、非常に交通は妨げられるが、之に反して唯一條の山脈が連なれること、エルツヤ、シユ

ワルツワルトやウオグの如き場合、又は一條の山道に依つて越之得るこ
と西アルプスの如き場合には、比較的交通は妨害せられぬ。西アルプ
スは斯くの如き單純な構造であるので、ローマ帝國時代には此處に四條の
山道があつた。之に反して、ピレニイは幾多の山脈相重疊して立つて居
るので、スペインは歐洲大陸と全く遮断されて仕舞つた。イベリア半島
が長い年月の間、其陸続きなる佛國に對してよりは寧ろ其對岸のモロッ
コと親しい關係を有つて居たと言ふのも此理由からで、佛國の諺に「ア
フリカはピレニイ連山より始まる」と言ふことがあるのも、斯かる事情
の爲めである。構造上には何等の相違がなるとも、高さが違へば、それ
だけに山は天險として交通を妨げるものである。是は高さの増すと共に、
山は其人類地理的の効果が益々加はるからである。例へばアパラチス連
山とか、ウラル連山の如き、古い擦り切れた山は、幅が広いことは広い
が、交通上、比較的困難では無い。然しアルプスやコーカサスか如き、
其峰の巍然として屹立したものは、頗る交通を困難ならしめる。それか

ら又高さの様子も、餘程其天險の度に關係する。其斜面が緩かで、其嶺が扁平若しくは圓い山は越え易く、其斜面が急で、其脊が高く且つ厚味が少なければ越え難い。高原性の山は、假令如何程高くとも、比較的歴史的運動の妨害にはならぬも力で、毎年夏期には遊牧民の此處に來住するを見ることもある。かの天山山脈の中央部及び西部は、海拔一万呎から一万二千呎にも及んで居るが、幅の広い高原である。而して比較的強い雨雪があるので、それに養はれて牧草繁茂し、夏期には恰も焦土の海に包まれた緑色の島の様な觀を呈する。之が爲め、此近傍の草原やら、沙漠などに住する多くの遊牧民が此處に來住するのである。パミール高原は、谷床でも海拔一万一千呎乃至一万三千呎に及んで居る。それでも夏期には、キルギス種族が北より、東より、西より牛羊を率ゐて此處に來り牧するのである。而して此牛羊を掠奪せんとして、南方のハンガ溪谷に住して居る山賊が侵襲を試みる事もある。此パミールは十世紀の頃「セリカ」即ち「絹の国」から、ボクスス河及び裏海地方に赴く支那商

隊の爲めの通路であつた。マールコ・ポロ口を初め其後の多くの旅人は、
此處で其駄馬の爲めに秣を、自分等の爲めには食糧を買入れることが
出来た。それは此辺に、一時、未住する牧羊者が何時でもあつて、其者
等より肉を買ひ取ることも出来たからである。露國は古くよりパミール
地方が通路として用ひ得べきを認め、一八八六年に其大部分をボハラ政
廳に併合して仕舞つた。

山は、何れの方面からでも同様に登り得ると言ふ様なことは極めて稀
である。即ち一方からは、極めて險阻で、登り難いのに、他方からは、
其傾斜が緩かき爲め、非常に登り易いと言ふことは稀らしくない。而し
て此等傾斜面の方は、唯登り易いと言ふ利を有するに止まらず、住居地
の面積広く、食物の供給豊かで、輜重運搬の根據地ともなり得べく、從
つて軍隊、商隊の進行、人種の發展等の爲め少からざる便宜を與ふるも
のである。それから登る方が緩かきで、下る方が急坂になつて居るから、
突然敵に攻撃を加へる様な場合に、兵路上の便宜も生じて来る。ウオ

才連山は佛國のセイ又抵地から登る時には極めて緩傾斜をなして居るが、
 中央ラインの流域方面は非常に急になつて居る。モン、ブランから地中海
 海に出づるに、斜面の三分の一は佛國の領内に存して居る。それが爲め
 イタリアは損失して居るに反し、佛國は非常に利益を得て居る。文明の口
 ーマ人、野蠻のゴール人との戦争は、取組が不適當で致し方もなかつた
 が、ハンニバルの時以來、ナポレオン三世時代に至るまで、北方からア
 ルプスを越えた軍役は必ず成功し、險阻なポド河流域からの軍役が必ず
 不成功に終つたのも此爲めである。

傾斜の不平均は、政治上に其影響があるばかりでなく、又人種上にも
 影響を及ぼすものである。殊に緯度の方が、山の兩側面をして氣候を
 非常に相違せしむる時に於て然りである。ローマ時代を除いて、アルプ
 スの南側はイタリア人の爲めには、其足を止める場壁で、南部の農夫は
 貧乏に迫られるけれども、其高い、然しながら日當りのよい谷間まで進ん
 で行くことをしない。又其北側は氣候がよくなるので、農夫は之に近か

くことが出来ない。然るにスウイスは、牛牛ノ縣に於てアルプスの峰を越え、且つ其政治的境界線をポル河の流域でゴモの辺まで深く入り込ませて居る。斯くしてアルプス種族は、山麓よりポルの流域まで到る處に散在し、此低地人に限り、比較的廣頭白面長身でアペタイン山の向ふに住する純粹の地中海人種と際立つて相違して居る。

山は其住民にも亦其近傍住民にも影響を及ぼすものであるが、然し何時でも山は天險で妨害的性質を帯びたものである。即ち山は一側面に住する人には、雨の少ない風を與へて居る。之が爲めに、ヒマラヤの一側面には、印度人が稠密に居住して居るが、他の側面には僅に西藏の遊牧民が散在して居るに過ぎない。又山は氣候を截然と兩分する境界線となることも往々あつて、スカンデナビヤ連山の如きは、ノルウェーに對して暖い、柔かな大西洋の西風を與へ、而して其東側のスウエーデンに對しては、寒帯近傍の寒い氣候を與へて居る。歴史の上から見ても、山は人類を兩分する傾向を有し、其道の困難にして危険なることは凡庸者を

して逡巡せしむるが、之に反して、或は其山の美を愛し、又山向ふの未見の者に対する好奇心を動かす剛健者には、天險を蹴破するの志を起さしむるものである。かのハンニバル、ナポリオン、スヴァロフ、成吉思汗の如き大豪傑を始めとして、一八四九年の熱狂時代にロツキヤやシエラを横断した小英雄及びチルクート山道の雪を蹴つてユトコンの金鉱に突入した冒険者流に至るまで皆此剛健者に外ならぬ。

移住的、好戰的、商業的なる人より言へば、山に關する問題は一に其山道に集中すると言ひ得るであらう。山道とは山頂の凹處又は窪地で、時としては水流の爲めに掘り込まれた山峽であり、時としては山の側面に出来た深い溝である。何れにしても、是は山向ふの國に至らんとする者に最も容易なる通路を指示するもので、山越への旅行には此山道が即ち焦点である。其影響は却々遠大で、アルプスのブレサール山道は北の方、アウガスブルグ、ラキスボン、ニエーレンブルグ、ライプツヒ等をして商業上偉大のものたらしめ、南の方ウエニス、の發達を刺戟した。又アフ

ガニスタンのカイバル山道及びヘラツト関門は、久しい間露國と英領印度とのアジア政策を支配して来た。米國の歴史に於ても、モホーク凹地、カンパーランド山峽は皆曾て人民の西進して、ミシシッピ盆地に至らんとする者に方向を指示したためであつた。而して山道の價值なるものは、近代の如くに機械工業の進歩した時代にも尚衰へぬもので、山險を攀ぐる所の汽車は尚此天然の公道を辿り勝である。

山道の歴史的價値は、其窪が深ければ深い程益々増加するもので、深からざるものが唯臨時用又は地方用に充てられるに反し、深いものは最も多く用ひられる。又山道は其数が少ければ少るいほど其歴史的價値は増すもので、一の側面より他の側面に旅行するには、唯一條若しくは二條の狭路だけをを用ふるのが常である。前者の例としては中央アメリカのコージシラ山脈中、パナマの海拔二百六十二呎、ニカラガの百五十呎、テッアンテペクの六百八十九呎を擧げることが出来る。是は南米の諸山道が大抵一萬呎乃至それ以上なるに比して非常な相違である。後者の例

として、ピンドラス連山中のテルモピシ山道を擧げる事が出来る。此山道はクセルクセスよりギリシヤの独立戦に至るまで、何時でも陸戦の場合には有名なものである。コーカガス連山のダリエル山道及びデルベント山道の如きも亦後者の例であらう。殊にテルベント山道は、ダリエル山道よりも一層越え易く、従つて長い且豊かな歴史を有して居る。此山道があつたので、昔のペルシヤ人は一時コーカサスの北麓に其兵を進めることが出来た。而して北方よりペルシヤ及びシヨージアに至らんとする者には、古も今も公道となつて居る。露國の草原よりコーカサスの南麓に達せんとする。鉄道にも此山道以外には好都合の通路がないのである。海と海との間に挟まれた山は通常其海に接した地點が最も容易な道路になつて居る。かのピレニイ連山には二の鉄道が敷設されて居て、其一はビスケー湾の東岸にあり、又一は地中海を下瞰する部分にあるのが其実例で、此兩極端の間は、山道何れも非常に高く、若し鉄道を敷くとすれば五千二百八十呎のコル、ツ、ラ、パーシエと、七千五百〇二呎の

ポト、ヅ、カンフランがあるのみである。

世界の公道は、元来は商賣の爲めに用ひられるのであるから、其公道の價值如何は、商賣の多寡如何に依つて定まるのである。それから商賣の多寡如何は又公道が結びつけて居る兩地の性質如何に依つて定まるのである。アルプスの諸山道や、ベルフォルト山道は、中世紀の初めから既に繁華な公道であつた。是は赤道地中海と、温帶的中央ヨーロッパとの交易を便宜ならしめたからである。モホーク凹地は、農業的の西北部と、工業的の大西洋沿岸とを結びつけ、農産物と工藝品との交換を容易ならしめた。アジアの諸連山の山道は、農業的工業的印度及び支那の諸低地と、牧畜に従事する蒙古、西藏、アフガニスタン、露領トルキスタンとを連絡せしめて居る。それ故に此諸山道は、羊毛、獸皮、毛氈、羅紗、敷物等の如き遊牧地の産物と、肥次にして人口稠密なる低地の食糧及び工藝品との交易を助けて居る。公道が若し海に達して居る時には、其勢力範囲はそれだけ増すものである。サン、フランシスコ、ニューヨーク、

マルセイユ、ゼエニア、グエニス、ベイルート、ボンベイ等の海港の價値ある所以は、其後地への有力な通路に當つて居る爲めである。

若し高地の面積が非常に広く、従つて日を重ねて旅行する必要のある様な處には、假令海拔は高くとも、正銘な山道市が続々として起つて来る。其一例を舉げれば、中央アジアよりカラコラム山道を経てカシミールに至る途中のレーは即ちそれである。海拔は一万一千二百八十呎である。是等の市場へは、支那、トルキスタンの商隊は數物と磚茶とを携へ来りラツサの西藏商人は其牧場から羊毛を輸入し、此處で印度の低地より来る米及び砂糖と交易を行ふのである。就中、レーは印度及び中央アジアの両市場と中央で、頗る便宜の地点に位して居るから、両地方から来た商隊の爲めの最終駅で北と南との物産の交易場である。何れの商隊も此レーを越えて先へ進行することは極めて稀で、商人は此地で一二月間休息し、以て物品交換を行つて居る。各種の天幕あり、駱駝あり、犂牛あり、驢馬あり、馬あり、様々なる人種の人あり、種々な國語を用ふ

る人あり、様々を宗教を奉ずる人ありて、夏時北山道の開かれて居る際には、眞に世界的都市たるの觀を呈するのである。カブールはカブール河の源凡そ六千呎の高處に位する市で、是亦ヒンヅクーシユを横断する多くの通路の焦点となり、パンシヤアの西北境に集中する總ての通路を扼して居る。故に此カブールは、印度に取つて兵略上、商業上の鍵である。其狹く且つ彎曲した市街は東洋商人の絵の如き駱駝隊に寒がれて居る。又店々にはオクサス地方より来れる露國品と、印度より来れる英國品とを共に陳列して、中間駅たる特色を十分發揮して居る。

時としては、非常な高處に地方的の自的の爲め市場の起つて来ることがある。印度のヒマラヤ山中のクマオン郡には、ガービヤンと言ふ市場があつて海拔一万三百呎の高處に位して居る。以前はドクパと言ふ西藏種族の貿易中心地であつた。此種族は一万呎以下の低地は犏牛も羊も皆死ぬからと言つて決して其以下には下らない。

河でも、山道でも、自然の公道であつて、移住も、旅行も、商業も、

戦争も皆之に引きつけらるゝものである。故に斯くの如き公道は、太古時代から歴史的價値を有して居る。今は唯其中、山道に就いて説くのであるが、此山道の制御権を握つて居るものは、其大いさと其力とに不相應な程、歴史上に大勢力を揮ひ得るものである。従つて低地の人民が若し斯くの如き要路を扼せんとする時には、此高處へと攻め上つて来る場合も往々あることで、又是等の山道種族の勢は時としては、其支配して居る商業の多寡如何に關係することもある。東部ヒマラヤのチユンビ溪谷に、トモと言ふ種族があつて、是はダージリンと西藏との商業仲介者である。西部ヒマラヤにはクマオンと言ふ處があつて、是は北印度の國境をなし、最良の山路の幾條かを支配して居る。されば其土人即ちブチヤ種族は、大膽なる商人で、西藏市場に通ずる山路の商業を一年に引き受けて居る有様である。

斯くの如き山道種族は時として其處を通過する商品に通行税を課することがある。然らざれば其物品を掠奪することがある。ヴエラグリ及び

セツニと言ふ種族は、アルプスの大セント、バーナード山道を支配して居たが、此處を通過するローマ人の爲め、其道を開かせるとして、シーガールは彼等と戦つたことがある。又サラツシと言ふ種族はアルプスの小セント、バーナード山道を支配し、是は此山を横断する者の物品を掠奪するが、然らざれば之に課税した。而して或時はシーガール自身の貴重品を掠奪したこともある。依つてアウガスタス又は久しい間之と戦ひ、アオスタ市を創建し、一隊の近衛兵を此處に置いて其公道を守らせた。更に眼をアジアに転じて見ると、スレイマン連山の諸山道を支配したアフガン人の諸種族は、トルキスタンと印度との間を往返する隊商に税金を課するの久しい間の慣例である。されば商人も、数百人乃至数千人を隊を組み、其攻撃又は重税に対抗する手段を取つて居る。又アフガン人はカイバル山道及びコハット山道では、常に道路税を課し、斯くして数百年來、印度の各王朝を強請に系つた。英國政府が、此道の通行を自由ならしむる爲め、若干の年額を彼等に拂ふことに協約を調べたのは、實に一八八一

年のことである。

山道の斯くの如き兵略的價値は、多少政治上の色彩を帯びて居る。是は山國が其不利なる位置の有する唯一の利益を開發せんと努めた結果で、中世紀末に起つたサウオイ侯國發祥の地は、ジエネー湖とポー河の西部諸支流との間にあつた。然るに、此位置は佛國とイタリーとの間なる多數の重要な諸山道を支配して居たので、代々のサウオイ侯は、其点に於て非常に重大な力を有つてゐた。スウイスの獨立は、其地形の威懾的なるにも由り、其人民の獨立不羈なるにも由るが、又其兵略的地位を政治的に開發した爲めでもある。之に加ふるに、スウイスは亞熱帶と溫帶との中央に位する要地で、其山道は之を守るに力なき程の弱國が、却つて之を所有すべしと言ふ諸隣國の要求にも據る所があつたのである。カブールの王は、スレイマン連山の全然飽くなきアフリゲ種族の後援を受け、露國と英領印度とを争はせて漁夫の利を占め、普通劣等國にあるまじき一程の厚遇を此二國から得ることが出来た。之と等しく、植民時代の米國に

於て、モホーク凹地のイロコイス族はハドソン河から北西部の獣皮産地へ通ずる山道と、カナダ佛人が、ニューヨーク植民地を攻撃する要路とを扼して居たので、英人は夙に之と妥協し、而して英佛戦争の時にも革命戦争の時にも英國は之を同盟者として利用した。

第五篇 民族的世界觀と國家觀

世界觀とは凡ゆる生活領域に決定的な作用を及ぼす内的精神的態度の基礎となるものを指すのであるが種々の意味に用ゐらるる

キリスト教、佛教の如き宗教的世界觀もあれば、理想主義といつた様な哲學的世界觀もあり、又マルクイズム、自由主義の如き政治的世界觀もある。「世界觀」といふ概念は二此らの場合いづれも一般的な信條に基いて一般人間の妥当性を要求する世界觀的体系を意味してゐる。ウィルヘルム・カールは現代社会の内部で指導的力として働いてゐる。世界觀の類型を(一)保守的・貴族的(二)カソリック的・教會的(三)自由的・民主的(四)民族的・國家的(五)マルクス主義的・社会主義的原理に分類した。

二此に對して根本的に區別すべきものは、ある特定民族の生活の表現たる世界觀である。

フェルクハイムはこの意味の世界觀は之を信奉する民族と密接不離のもの

のであると述べてゐる。何と云へば此の意味に於ける世界観は一民族の
独特の本質、その空間的規定、その歴史的運命、及びその生活意欲の表
現に他ならず一つの民族に對して一つあり、而して唯一つに限られ、二
此を一民族から他民族に移すことを得ないものだからである。我々が日本
的世界観といふ、独逸的世界観といふものもこの意味である。

かゝる世界観は先づ民族の特質と生活意欲とを表現し、此が根底をな
し、此を統一せる信念の力の總体であり、血と土、神話と歴史とを祖
先伝来の遺産の中に見られる民族天賦の使命に對する自覚であり、高度
の發展段階にあつては、同時に人生の諸問題に對して此より生じ来る
意識的の態度及び評價の總体である。この意味に於ける世界観とは民族
の自己自身の本質に對する自覚である。自己の本質は民族が此をおの
が義務として遵守すべき價值であると感ぜられると、もにこの價值を展
開し現實のうちで維持せんとする意志の規定であると感ぜられる。此は
民族的な世界観は民族の本質表現、價值意識及び意志の秩序である。

かゝる民族的な世界観は長期の発展を究しける後始めて言はば民族性の植
物的な生活表現を脱して民族的自覚による団結の段階に移り、やがて本
質に相応しき國家を生み出す政治力となるのである。

従つて民族的な世界観とは民族的な性格が基底となつて現実的情勢の解決
を求めたる場合の政治的原理となる。

云ふまでもなく人間は總ての生物と同様に相互に依存する身体的及び
精神的な生活表示へ生活機能と生活内容へ生活資料との合体性であつ
て、その生活が破壊されることなしに解体されることのないところの身体と精
神との複合的組織統一体である。而して個々の精神的な生活表示の経過す
る様式はその根柢にある素質を反映してゐる。民族的な性格は生理学的基
底が社会の精神的な潮流を攝取する様式と程度によつて異なり、遺伝と後
生活の所得から構成される。我々は個人の活動を一つの民族的な作用体系
の實現に見るから個別的な個人現象の觀察に當つて反復的なもの、共通
的なものを類型に形成する。民族的な性格とは外界と内界の相互作用から

興へら此に體驗に基く精神傾向である。だから性格とは生理力及此精神力の原基たる作用能力を意味する。各人の身体的精神的な生活は民族の總體像の一形態を示すが故に我々は一つの全体性における各肢節の酷似性を抽出することが出来る。

身体と精神の統一的な考察から生ずる見解、例へば精神的素質の中に根を下して居ると云ふ見解からすれば身体的構造は精神的構造の中に、否それと反対に精神的構造は身体的構造の中に「特別な様式」に於て反映するのであつて、フルウイツ(Furwitz)は民族的性格の特質は畢竟かゝる感情の昂進や視角や、心理的色調の特殊様式略言すれば同じ内部的或は外部的刺激に於ける心理的反応の特殊様式に此を認めると云つてゐる。かくして民族的といふことは個人的経験に對して先験的だと云ふことに外ならないから——人間は生れに瞬間既に何らかの民族に屬してゐる。どの民族にも屬しない人間は現実にはあり得ない——その肉体的存在に於てのみならず、この精神的存在に於ても既に「民族的統覚」

によつて規定され、社会化せる意識の所有者として現はれらる。但か
ら感覺や、認識や、行為規範の普遍妥当性の根據である意識一般は眞の
意識一般ではなくして民族的な着色を帯びたものとして現實化される。
あらゆる文化形象、社会構成体には民族的色調が含まれてゐる。又異質
文化の接觸即ち文化交叉に於ても一つの民族が他民族の文化を攝取する
とき、それは該民族の「民族的統覚」によつて独自な加工を受けけるが故
にあらゆる文化は民族的性格を表現してゐる。諸民族間に於ける文化の
交換は決して民族的性格を平等ならしめまい。民族統覚のこの一大事實
のため、一つの民族が他の民族から取つて来る如何なる思想も文化も民
族の生活のうちから生かされ、これに於てゐる限りそれが消化され、全民族的存在に
適応せしめられ、これとほしく攝取されまいであらう。外来要素と云へど
もそれが民族生活の栄養となる限り既に民族的性格を帯びたものである。
現在の世界的潮流としては民族自決の原理が中核となり、民族分化は益々
對立發展し、民族的性格は相互に益々排他になりつゝある。然しこの民

族自決の政策的聚化と分離は現在に於ては「分裂の爲めの結合」である
 が然しこれにはやがて「結合の爲めの分裂」として其の對蹠的思想として
 の諸民族の國際的融合への辨證法的行路となるのであらう。民族性の上
 位には「人間性」が存するからである。發生史的に見て前資本主義社会
 に於ける民族敵対は生物学的な闘争であつた。何となれば社会組織の存
 在形態は大部分種族団体によつて表現さるからである。民族闘争
 又は確執は通常全社会の生存競争、或は社会内部における社会群の闘争
 の直接的な形態であつた。然るに初期及び盛期資本主義社会に於ては民
 族の軋轢はその固有の意味を失つてしまつた。こゝでは民族は階級的採
 取の可能性を通した時々のみ重要となる。民族問題は本質的に採取問題の
 假裝として植民地獲得及び統治の手段としてのみ重要となつた。民族の
 理論は帝國主義的發展に含まれる多数民族・少数民族関係 *majority-
 minority relation* の結合によつて基礎づけられる種族ではなくして支配
 採取の階級が実体をなした。

然るに一九一四—一八年の戦争以後に於ける國際協調主義は民族自決にもとづく小民族の國家形成を原則とした。然しこの場合に於ける民族自治の主体たる民族は所謂文化民族であつて自然民族ではなかつた。

民族意識の國家の結合に對する關係は單一と民族によつて構成される國家であるが複數民族によつて構成される國家であるか、從つて異なる。前者に在つては民族意識は其の結合度の強化に影響し、後者に在つては同化作用する。この意味よりすれば所謂小數民族の民族意識は母國に對する親和感情を構成するものとして重要性を有する。それは又多數民族優勢の存任に伴ふ集合意識の事實に基き、共同生活意欲をその根柢とする自治要求の主觀的要素をなすものである。固より民族意識の問題は民族形成の生物学的要素と對立するものとして社會学的考察の對象となるのであるが、然しこれは單なる結合意識であるに止まらず政治的支配關係にまで昂められるものである。政治に指向する民族意識は凡そ三つに別つことが出来る。その二個は國家と關係し、その一は必ずしも國

家の存在の事實と必然的の因縁に立つことを前提としなさい。國家の因縁するものゝ一は諸國家内に分屬する同一民族、又異質集團を含む國家内に於ける特殊なる階級の社会的結合の程度が増大し、その政治的独立又は他の國家への結合、言語、宗教、教育、民族的自由等に對するその要求と努力とが現実性を加重する場合に於ては屢は民族闘争の形成に於ける民族解放の事實を認める。即ち異質的なる國家構成要素としての諸民族を包有する國家は相互の利益の牴觸とその調整との程度に従つて屢は表面的又は潜在的なる民族闘争を醸成せしむる傾向に置かれらる。異質性に基づく闘争は種々の態様に於て現れるが、その最も著しきは主要構成要素たる民族に對する少数民族の國民的又は民族的異質性の保持の努力として現れる場合である。即ちそれは同質性への努力に對する異質性の抗爭である。この結果として複合民族國家に於ては民族の特殊性又は

結實性の意識の強烈なること、その保護とは特定の狀態の下に於ては屢
ば國家的結合の弛緩とその分裂とへ導き易い傾向を指示する。而してこ
の傾向はその特殊性に對する法律制度の如何と密接に關聯するものであ
る。民族的結實性の保持と發展とに對する要望の強烈なる所に於ては民
族の私利の爲めの鬭争は屢ば國家そのものの統一及發展の條件に背馳し
得る。その結果として國家の結合の強度は減少し、國家行政の複雑化と
困難とは動もすれば分裂に對する潜在的因子の増大を招き易い。又は一
の複合民族國家内に同一民族が新たに國家を形成せむとする場合、即ち
分離と独立との過程を通じて新しき政治組織への要求と努力との中に現
れる一般的連帶としての共同意識である。その二は他の政治団体に屬す
る一民族が新たに國家形成の過程に依らずして、同民族に依つて組織
せらるゝ、既存の特定國家への合併、又は復帰に對する要求と努力とに現
れる連帶の意識である。これらの場合に於ける民族意識は特定の國家の
民族との異質的對立、その國家と適應せざる社会的實在の意識として存

在する。第三の場合には特定の國家と直接に關聯せずして成立する民族意識である。この場合に於ては民族は地域的制限を離れて諸國家に散在し、その個性を著しく現はすものは地緣的ならざる共同生存としての民族意識である。特定の國家を前提せずして而も同一民族たることのこの意識は宗教的要素、其の他の文化的諸要素の共通の基礎の上から共同なる歴史の背景を以て成立する。かゝる民族意識は一の民族の政治的結合への要求を伴ふことを必ずしも條件としない。但し何れの場合たるを問はず民族的性格、民族的特性又は他民族との異質性、自己の同質性に対する意識、即ち民族的差異に關する意識の存在を必要とする。而して斯かる差異は民族の自然的特質のみに限定せられずして民族の存する多くの文化的要素の共通、特に歴史的、社会的に規定せらるる、共同の觀念の上に成立するものである。民族意識——それは他民族存在の認知によつて初めて形成されるものである——それ自体對立意識であつて、この對立意識による民族の鬭争は民族的同質性を中心として行はるる、本来の意味に

於ける民族闘争と経済的、政治的の支配の過程に於て必ずしもその同質性
性に觸るることなく行はるる假装的民族闘争とを區別することが出来る。
同質性を中心とする場合は即ち一方に於て一民族が他民族を同化して自
己と同一なる民族らしめむとする努力と、他方に於て民族がその異質
性を保持せむとして他民族の同化的努力に抗争する過程とを認め得る。

特に法律上の平等の要求に對する少数民族保護の制度と、民族のこの
特殊性に基く特殊的地位の正当性との間に如何なる調和を求めべきであ
るか。この点よりすれば少数民族保護の諸法制に依つて認めらるる少
数民族に對する事實上及び法律上の不平等なる取扱及び保護の規定は一
面に於ては全体的なる國家的関心の減少を招き易く、従つて國家として
の鞏固なる統一と發達とを犠牲とすることによつて民族闘争の損害と危
険とを阻止しつゝあるものであるが然しこれには暫定的なものであつて、
やがては同一國民の意識と運命の共同の意識が民族的差別意識に代置さ
れ種族的限界を越え、新に同一民族意識が構成される。民族主義とは現

代に於ては主に國家意識と種族意識との政治的集中形態に外ならない。
 其から民族的特殊性の過度なる尊重と保護とが民族の闘争に基く國家分
 立の危機を包含したことはがエルクハイム條約以後の事實の證明する所で
 ある。云ふまでもなく國民は單なる種族団体ではなくして國家の發展に
 伴ふ差異的構成部分から形成されるところの歴史的、社会的構成体であ
 って決して單一純粹の自然的構成態ではない。テニスス *Teinissus* はこの
 意味に於て國民とは近代的な概念であつて、語源に反し、民族の如く種
 族により特に言語によつて結合される多數人の、自然的にして根源的
 なる總体を意味せずして、寧ろ政治的文化的な、け此共特に政治的を共
 通の制度によつて合成される統一体を意味すると云つてゐる。従つて民
 族は其の歴史的规定性（自律性）歴史的被規定性（他律性）の推積とし
 て「生活共同態」から生長した性格共同態に外ならないが此は同時に
 政治的生活共同態の母胎でもある。

民族は人間が生活してゐる現實的な永続的共同態であつてあらゆる人

固は「民族」のうち生きてゐるのである。民族は事實上無数の民族の支配服従関係、相互平等関係、對抗関係として存在してゐる。更ニ亦一民族の内部、又は一民族の範圍を越えて多数の他の共同構成態が存するのであつて家族、部族、身分、階級、組合、地方自治団体、國家、宗派等の如きはこれである。かくして國家の國民的要素は民族の一部に過ぎない場合もあるれば又多数の異質民族の結束である場合もある。然し一民族より小なるものも、一民族より大なるものもそれを超えて自然所要の精神的な運命共同態として一つの新しい民族完成へと常に向ふところの強い衝動を拵つてゐる。かくして民族的生存形態は人間社会生活の原基的現象であるが然し民族は甚だしく動搖的な、可変的な、流動的なものであつて徐々に或は急激に新しい民族を形成するものである。これは民族の一部の独立又は数民族の結合——國家権力によつて往々嫁接される——によつて起るものであり、又平和的に異質民族性が相互に浸透し混交して新しい身体的、精神的民族構成が行はれる。それで近代國家は

大なり小なりそのうちに異質対立を含む体制的組織であるが然しそれにもましても國際組織は生存に於ける利害関係を異にする対立とそれの平衡維持とによつて成立する。國家の対立は圧迫と被圧迫、或は採取と被採取、持つ國と持つぬ國との如き関係から成立し、斯る対立関係の成立は支配と従屬との意識を置く。然し支配に對する従屬の關係が要求の満足として意識される時、民族意識は政治的には表現されるが、要求の否定として意識される時、そこには政治的に表現される不平を緩和せんとする同情や偽善は支配と圧迫との相互に意識される恐ろしき基く。民族意識に於ける自他の對立は他國による自己の否定であり、自己否定の満足は服従としての奴隷の意識であり、自己否定に對する反抗は闘争としての愛國の意識となる。斯る自他の關係が運動として表現される場合には闘争としての愛國の意識は同時に革新としての民族意識となる。民族が相互に何らの利害關係の衝突と支配關係の軋轢とを意識してゐる場合にはそこは「民族意識」はなく、異にする民族の存在の知覚があるに過ぎない。

社會的傾向の總體としての個体の社會性は自己保存と自己發展の總體としての自我行動に關係し個体に於て二つの複合体が或る時は對立分離し或る時は相互に融合するものであるが民族に對する隸屬の本能は自我の共同社會要求への動的反應なのである。心的共同体に基く民族的性格の特異性は相互了解の限界を示すものであつて、眞の一体感には Scheller の云ふ如く生物的活力中樞の領域に屬するものである。然しこのことは異つた民族は相互に一体感を持ち得ないことを示すものではない。地理的接近や民族異質度の輕少や歴史的因縁や政治的感性や言語及び文化、經濟的利害關係の共通が新しい民族的一體感の形成に導くことも多いのである。こゝに集團的民族主義——民族プロック構成の基礎がある。

キルヒホッフ *Kirchhoff* に依れば種族的血統、言語等が所謂民族運動の決定的特質ではなくして共屬感情とこの共屬をあらゆる敵に對して擁護せんとする特性的行爲に馳る意志が眞の民族の魂の全部なのである。だが

らあらゆる民族の問題は結局民族を精神的原理にまで昇める。民族の自
身にまで還元出来るところの社會感情から發足する。云ふまでもなく
總ての人間は必ず一定の民族に屬し、その民族の持つ文化が他の民族の
持つ文化より高いか、低いかにまつて該民族の人種体型自体の優劣をさ
へ判断し、而も自己の民族性を最高のもとし、自己の民族性を規準とし
て他民族を判定思惟してゐるのである。然し乍らかかる見解は純然た
る感情的な又は政治的な問題であつて何等化學的な根據の無いものであ
る。而もこの態度は單に人種、民族、國民の問題に止まらず宗教、政治、
藝術、學術の世界觀にも甚き影響を與へてゐるのである。

自己の所屬してゐる集團が最高のものであると云ふ信念は、積極的に
又は消極的に社會的なる一つの本能である。あらゆる民族的自覚と云はれ
るものは天賦自体排他的なものであつて種族保存の本能にまで還元され
る所の本原的なるものである。従つて民族の自覚又は種族保存の本能は社
會的には異質民族又は異質種族の接觸は存在が意識されなければ發生し

得たイロテニシヤル力である。かゝる集團表象は従つて人類の最初の時
代から存在してゐたものである。この見解は種族の名稱によく現れてゐ
るのであつて、自己の種族を最高の又は自己の種族のみを所謂「人間」
と考へることである。例へば支那人は自己以外の種族を蠻、夷、戎、狄
等の蔑稱をもつて呼び最も原始的民族と云はれてゐるエスキモヘエスキ
モとはアメリカインディアンのアプナキ族が興へた名であつて本来「生肉
喰ひ」の意を有してゐる。すらいヌイトと自稱してゐるがこれは「人間
」の意である如く種族名の中彼等自身が附した名稱は大抵かゝる自身の
社會群だけを「人間」と考へ他の群に人格を認めないところの自負又は
美稱で表現してゐるものである。又例へば民族のアリヤとは「神に忠良
なる」意味を有してゐる。此自己の種族のみが選ばれた又は高貴な種族
であると言ふ思想は最も本原的な人世觀であり世界觀である。従つて人
類は最原始の時代から他の種族を同朋とは決して見て見なかつた。それは單
なる生物として見るか、悪魔、又は敵として見てゐたのである。會へば打

ち合丁戦ひ、又は喰ひ合ふところの動物として對立した。旧約聖書に現はれるカインモテイフが支配してゐたのである。

民族學者が集團感情を *collective gentility* と名付けたこの民族主義は永く傳統によつて遺傳され、現今の如き最高の文明になつても全く消滅せず、他種族を排斥、敵視する感情が残存し、これが集團に於て強く再現するのである。個人として持つとも博愛的であり文明人であるが如く見える西洋人が集團運動に於ては強烈な排他的野蠻人に激變するのはこの集團感情への「祖先歸り」的の現象と見做すことが出来るのである。これが所謂人種問題又は戰爭等に極度に昂揚されるのである。接觸する異質要素に對する反感はこの原始的種族憎悪の感情にまで遡ることが出来るのであつて民族、種族、政黨、國家、階級等の成負は他のものが單に自己と同じ集團に属してゐないと去ふ理由だけで嫌悪するのはこの祖先歸りの種族敵視の再現として理解されなければならぬであらう。サムナ *Sumner* はハルスの感情の社會的概念として民族中心主義 *Ethnocentrism*

の語を興へた。白色人種が有色人種——黒色のネグロ人種、黄色の蒙古人種——を体質的に劣弱な且つ文化的に劣性なものとする見解はアフリカにほ成立しなにも拘はらず——根強く彼等を支配してゐるのは前記した異國感情と現在のみの彼等の文化の優越から帰致されたものであつて決して先天的な運命ではなかり。

歴史を体的因子に結合せしめて出生圏による運命觀を説くものに人種史觀がある。グンプロウイツに依れば人類の歴史は自然過程を取扱ふものであつて我々は歴史發展に於て最も本質的なる二契機——植物的、動物的、社會的、各自然過程にも存する——即ち異質要素と相互に作用する一定關係の存在とを見出すものである。

この自然過程は史的現象として異質群人に認められる場合夫れは人種闘争として理解されるのであるとする。

ウオードも人種の相異はポテンシャルの相違を意味するものであつて生理的、物理的原理であると同時に社會的原理であるとしてゐる。斯くの如

き人種を社會學的、文化史的對象として考察すると歴史は常に人種によつて構成され、人種の成立、接觸、没落の進行過程のうち、に發展して行くものである。この考へは古代からあつた。

最初の最も素朴的な人種、民族の認識の方法は其の差異性に奇異と警戒の念を抱くことであつた。そしてこの差異性は一種の侮蔑觀を伴つたものである。プラトンの見解は各種の民族殊にギリシヤ人と野蠻人（ギリシヤ人は自己以外の民族を總て野蠻人と呼んだ）とは相互に異質であつて生来敵であるとかふことであつて、人種對立關係の存在を主張し、これがギリシヤの民族觀を代表してゐるものである。アリストテレスも亦アシヤ人は野蠻人で本系奴隸でありギリシヤ人は本系主人であるとかへてゐた。オロギュスト・コントですら白色人種を最高のものとし、その中の西部歐洲人を選良若くは人類の前衛と呼んでゐた。又テーヌは民族の行為、運命に對する環境時宜、人種の三要素中人種を最初の且つ最強のも

のとした。更にゴビノーは世界史に於て彼が人種化學と呼んだところの
純粋性と混交性以外の力を認めたいのである。異質人種要素が一定民族
に混交することは彼の用語に従へば^{種族}種族である。血液の多様性は状態の
多様性を生む。彼は強度の混血によつて成立してゐる社會は先づ外的不
安、次に病的硬化遂に死滅が其の運命であると云つてゐる。彼は各種文
明の基礎を以て人種的特徴にありと爲し人種に先天的優劣の差を認め且
つ種族の活力はその純粋性に宿つてゐるとするのである。最高文明は白
人種に屬するが故に若し各人種間に雜婚がなければ黄色及び黒色人種は
永久にこれに隸屬するであらうと所謂白人最高主義に一應の學理的根據
を與へたのである。これに對し有色人種の将来的發展性を認め、白色人
種の勢力下向に對する警戒恐怖に所謂黃禍論の如きものがある。ゴビノ
ーの影響を強く受けたストガード、シユペンギユラーの如きはこの白色人種
の運命悲觀論を導き出してゐる。ゴビノーのこの人種哲學は近代の新しい
意味に於ける人類社會學——獨逸の意味に於ける——若しくは人種社

會學に發展することゝした。

之に對してオツペンハイマーは人種史觀内に科學的基礎を認めず、それはイデオロギ―即ち思惟的構成であるとし、殊に政治的利害關係から出た場合、合に然りだと云つてゐるのである。彼は人種は區別しうるのみならず、價値關係に於て——又種々に評價しうるると云ふ學説は總てイデオロギ―支配階級の偽似科學であつて、それは採取又は經濟的諸原因から起つたものであり、其の支配を擁護し且つ自然科學的基礎をよそうものであると極言してゐる。彼に依れば人種と文化自身とは無關係であつて、各種の人類定型は地理的社會的に制約されたものである。それで人種心理學でなくして階級心理學が研究されるべきならぬとする。

この見解は確かに一面の眞理である。例へば勞働力の少なり時にはアフリカの黒人を農業に使用する奴隷として、米國に輸入し、又日本人、支那人の入國を歡迎した同じ米國が勞働力が充塞すると有色人種として排斥する場合にも見られる。何となれば彼等は最初から有色人種なのであ

つて、米國に移動してから有色人種に変化したものではなからう。若し經濟的因子より人種的因子が強いならば最初から有色人種の入國を許可する筈がなからうのであつて、このことは當然人種的因子よりも經濟的因子の強いことを證明してあるものだからである。

民族は集團表象に基づく同類意識によつて統一されてゐる。この同類意識結合紐帶の積極的影響として自己集團の優越性の主張と他民族に對する敵意とを示す。自己集團の自獨性は各集團に固有な感情であつて何等の抵抗なくして他の民族の侵害流入を許容するものではなからう。兩者の向には必ず下接觸面に於て摩擦と抵抗とを生じ兩者の民族的特殊性に反應するのである。民族的移動が多く政治的、暴力的征服關係を伴ふのはこの理由に基づくものである。民族主義は、近代國民國家の成立、維持、發展の過程に生成せる一定の國民的意識乃至國民的生活原理を意味し、近代的歴史的主体的概念として理解することからできる。それ故に歴史的主体的概念であるといふのは、民族行ふものは、近代的現象として始つて

歴史的発展過程の中にその姿を現はしたといふにとどまらず、それが歴史的発展の動的過程を擔當する政治的生活協同体として実質的主体的觀念であるといふことに結びついてゐる。

近代民族國家の成立は集權化と民主化といふ收斂および擴張の二つの過程を経て始めて政治的協同体としての基礎を固めることができたのであるが、こゝに至つて始めて吾々は政治的現象統一の形式としての民族主義について語ることができ、かくの如く民族主義は一方において國家の集權的統一他方に於て國民の民主的自由をその基礎的内容として含むことによつて歴史的に成立したものである。

文化協同体としての民族の觀念は先づヘルダー（Herder 1744-1803）によつて強調せられた。彼は民族といふものに對して無限の深い愛をこゝにいだ。彼によれば、人間集團は最初に地理や氣候の時勢によつて分化し、然るのちに獨峙の歴史的諸傳統——即ちその水その水の集團にふさはしい言語、文學、教育、風俗、習慣などを發展させる。この段階に至つて人

向集團は一つの「民族性」とも云ふべきもの、そして眞に民族的な文化をもつた成熟せる一民族と存るのである。かゝる民族並びに民族文化の多様な形成を通じて人類の完成といふ最高の目標へ向つて不斷の努力を重めべきことを唱道するところに彼の文化的民族主義の特質があつた。従つてかゝる立場から彼は帝國主義への辛辣なる批判者でもあつた。彼は「最も自然な國家とは一つの民族性をもつた一つの民族であらう」と述べ、民族に正しい基礎を置いて國家即ち民族國家の意義を力強く高調したのである。

しかし、ヘルダーによつて認められた民族性なる概念は自主的無意識的統一体を意味するにとゞまり、未だ能動的創造的意義を帯びた自覺的統一体としての「國民性」概念ではなかつた。ヘルダーの民族主義は結局國民主義にまで發展せねばならず、かゝる實踐的轉回を促進した人は云ふまでもなくフイヒテ (*Fichte* J. G. 1762-1814) その人であつた。フイヒテの國民主義はナポレオン戦争の敗北によつて分裂した獨逸の惨めな政治的

現実を背景として生れた。當時の獨逸にとって何よりも先づ必要だつたのは全獨逸人の統一であつた。小邦の利己主義的欺瞞によつて四企五裂した獨逸國家の全体としての再興であつた。彼の「獨逸國民に告ぐ」なる講演においては、獨逸人の再興及獨逸人自身の國家を創造するといふことは、全人類に對する義務であり、しかも全人類の最も貴重なる文化的財宝に對する義務であるとする思想が述べられてゐる。この思想の中には文化理念のかの人文主義的超國民的意識の自己實現が外的生活の形式としては國民國家といふ形式をとらねばならぬこと、就中個人および民族の一切の文化的活動の意義も使命も國民統一と政治的獨立行しには實現せられざることとを強調した点にフイヒテの世界主義の中を貫めく國民主義の意義を高く評價した点にフイヒテの國民主義は祖國愛を並べて普遍的倫理的人類理想の實現を確信したものと去ふべきであらう。フイヒテは獨逸民族の中に人類全体を包むところの「根源的民族」を、この民族が他の諸民族を普遍的人類の目標へ導くところの導かれた

野性民族であると考へた。獨逸國民を「人類國民」に擬し、獨逸文化を普通の「世界文化」へ宣揚せんとしたところにフイヒテの國民概念が帝國主義の場合におけるが如き單行る政治的意義にとゞまる「國家國民」ではなく、謂ゆる「文化國民」である所以を明瞭に看取することかできらざらう。フイヒテの國民主義はジヤニバンの政治的國民主義に對して文化的國民主義と呼ばれてよりののであつて、そしてこれがまた國民主義の獨逸的形態でもあるのである。

他方英吉利における國民主義の發展を眺めてみると、佛蘭西獨逸に於けるとは異つた原理にとゞづく異つたタイプに於ける國民主義の進行を見るのである。

ネオ・マーカニテリズムの出現は先進國英吉利國民主義に對する後進國獨逸國民主義の角逐であり、この段階に達した新舊の經濟的國民主義はもはや單行る國民主義にとゞまるものではなく、植民地支配の覇權を爭ふ帝國主義に變貌したものと云はねばならぬ。

こゝに未だ曾て行いた規模を超越し、開始されたものは十八、九世紀にまたがる國民主義の歴史的展開過程を眺め、その形態的変化の中に佛蘭西の政治的國民主義、獨逸の文化的國民主義、英吉利の經濟的國民主義を抽出し、それぞれの特徴を一面的に明かす行はしめた。而してこれら國民主義の三形態は近代的國民國家成立の歴史的発展過程に於ける三段階をあらはすと同時に、理念型的に眺めた國民主義の三類型を示すものとして理解され、これによいでありう。たゞ以上の國民主義にとつて共通のこととは、いづれも民主主義、世界主義、自由主義、自由主義、人類主義の潮流を汲む普遍的な世界原理に結ばつて發展したといふことであつて、こゝに大戰以後に擡頭せる「徹底的民族主義」(ヘイズ)と區別せらるべき根本的な相違を認めなければならぬ。

大戰以後の民族主義の特徴は何よりも先づ抽象的普遍的な世界秩序に對する安易な信頼を一擲し、今一度新しく民族が文化的、政治的、經濟的國民統一を見直して申かうとするところに求められなければならない。

この意味で今日の民族主義は新しい確定した基礎の上に立つて再出發すべき必要にせまられてゐる。而して民族主義なるものはそれが國家の生活原理であると同時に世界秩序の形成原理たる意味を含まねばならぬ限り、新しい民族主義の出發は同時に新しい世界秩序創造の課題に答へるものでなければならぬ。かく民族的世界はその民族特有の世界観であるが、我々は、のうちに民族に内在し、ながら民族を超越する思想要素を見出す。

一、或民族に特有な思想要素

二、アジア民族に共通な思想要素

三、人類に共通な思想要素

實際民族の具體的理解は抽象的の理解と異なり、民族の合成的な要素を把握することであり、それは民族の獨立的存在と發展との前提をなす生活圏との關係に於て把握することである。

合成的な要素とは一民族内部の合成的な要素のほか、大いなる全体としての民族に合成せる要素乃至は必然的に合成せんとする要素即ち民

族の大生活圏行るものを包括しなければならぬ。新に生れ出でんとす
る大生活圏を熟視しては今日最早其の理解即ち具体的且つ動的な理解を
期するこゝろ出まらぬ。今後各族相互間の理解が政治的有意義をもつべ
きものである以上は特に形成さぬんとする大生活圏内部の諸民族相互間
の具体的關係のみならず大生活圏相互間の民族的關係にも注目しなければ
ならぬ。

